
願いの空へ

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いの空へ

【Nコード】

N1252S

【作者名】

久住祐治

【あらすじ】

何の因果かIS学園に入ることになった主人公（男）。ただ、その入学のためには女装する必要がある。しかも、おえつらえ向きに女子にしか見えない容貌だった少年は、自分の性を隠してIS学園に入学することに。さてさて、どうなることやら。

この作品には男の娘成分、のほんさん成分が多分に含まれていません。

また、原作キャラのオリ主ハーレムもありますので、そう言ったものが嫌いな方はお戻りくださいませ。

ISって作品名に入ってるじゃん。ということ、小説タイトルから「IS」を取り除きました。今後ともよろしく！
注：不定期更新です。

オリジナル設定集 ネタバレありに付き、未読の方注意（前書き）

ということので、とりあえず機体とオリジナル用語だけ出しておきます。

書けるくらい話が進んだら、キャラも追加していくつもりです。
ちなみに、まだ中盤かどうかすら怪しいです。

オリジナル設定集 ネットバレありに付き、未読の方注意

梟 《ふくろう》

東が作成した、名目上は第三世代型IS。補助用AI『イヴ』を搭載している。

コアに呼ばれた香織に共鳴し、エラーを出しながらも起動する。そのエラーのせいで絶対防御が消失、エネルギーバリアも脆弱なものになっていたが、福音に落とされてからようやく香織との共鳴率とも呼べるものが一定水準に達し、内部の構造を書き換えたことで香織専用のISとしてようやく一次移行する。

香織との絆は深く、一次移行の時にはコア内部の電子空間に香織とイヴを招きいれるほどに繋がっている。

武装一覧

《夜雀》 《よじやく》

中距離戦用射撃型武装。マシンガンタイプ、装弾数五〇発、射程距離は約五〇〇メートル、それ以上では集弾性が著しく低下する。取り回しやすくなるように小型化されていて、単発、三点射撃、フルオートの三つの機能が備わっている。

特筆すべき特徴は無いが、癖が無く扱いやすい武装である。

武装特性は不明。

《夜鷹》 《よたか》

近距離戦用刀剣型武装。二メートル程度の黒い刀身を持ち、鍔の部分に羽の模様をあしらっている。

一次移行したことで双刀となり、攻撃範囲が広がった。

武装特性は《ナイトホーク》、ステルス機になぞらえて命名された。

効果は、使用者のISと使用者自身の全てを見えなくする。ただし、日光に晒されていると若干違和感が生まれることがある。この透過処理はリーダー類にも適用されるため、完全なステルス状態となる。

《啄木鳥》 《きつつき》

超近距離戦用突杭型兵装。俗に言うパイルバンカーである。シャルロットの『グレースケール』に近い構造だが、一撃の爆發力はこちらの方が遥かに高い。しかし、その分恐ろしく当てにくくなっているトリッキーな装備。

武装特性は不明。

《夜羽》 《よばね》

防御・遊撃用翼型装甲兵装。

一次移行したことで耐物理装甲の羽が二枚で一对、耐エネルギー装甲の羽が二枚で一对、計四枚に進化した。

ただし、物理はエネルギーに、エネルギーは物理に対して耐性がなくなっているため、咄嗟の判断が勝負を分けることもある。

展開すると背中にXの字を描くように出現する。上部の二枚が物理、下部の二枚がエネルギーである。

また、下部の二枚の耐エネルギー装甲翼の先端はビットになっており、一つの羽につき五枚、系一〇枚のビットが使用できる。《ナイトホーク》のステルス能力は分離したビットにも適用される。

ワンオフ・アビリティードエイク

単一技能《とりのさえずり》

梟のワンオフ。

夜羽の装甲をすべて擦り合わせることで鳥の声のように聞こえる周波数の音を発生させ、あらゆるエネルギーをその場で消滅させる。出力を上げれば理論上は運動エネルギーや、ISを動かすのに必要なエネルギーすら消滅させられるほどになるが、現在はBTエネ

ルギーを消滅させることが限界。無理をすれば他のエネルギー類も消滅させられるが、あまり持続はしない。

イヴ

東が鼻に組み込んだ補助用AI。

公私に渡って香織をサポートし、まるで人間のように話す。

香織のことは娘や息子のように思ってもいて、度々無茶を繰り返すためにそろそろ自重してくれないんだろつかとも思っていたりいなかったり。

ちなみに人格は女性である。念のため。

真打・鉄 《しんうち・くろがね》

東が創った月のコロニー『アルカディア・？』^ワで初めて作られた第三世代型IS。

東が簪のために用意した資材、データをふんだんに使用して、簪がその努力の成果として作り上げたものである。

ちなみにそのつくっていた時の簪曰く「なんていうか……、頭の中、凄くなっていた」らしい。

超高機動型でありながら頑丈な第二世代を遙かに凌駕する装甲とエネルギーを持っている。簪がそのときの完成によって作り上げたため、ところどころに簪独特の癖のようなものが入っている。そのせいで、簪以外はまともに扱うことすら難しい。

武装一覧

《朱鉄》 《あかがね》

近距離戦用刀剣型兵装。

大きな一枚の板のような形の剣で、展開時点で恐ろしい熱量を持ち、鉄板程度ならば容易に融解するほどだが、その熱量は時間の経過と共に更に肥大化して行く。

武装特性は《紅蓮朱鉄》^{グレンシアカガネ}。

膨大な熱量を物質化させ、熱を発する巨大な刀身へと変化させていく。時間をおいて一度しか使えないものの、直撃すれば普通のISは一瞬でシールドエネルギーが尽きるほどの威力を誇る。

《蒼鉄》 《あおがね》

近・中距離戦用銃剣型武装。

銀色の刀身の峰の部分に、青い銃身を横たわらせたような形を持つ。

銃部分からはBTエネルギーの銃弾を発射することが出来るほか、チャージすることで刃にBTエネルギーを纏わせ、エネルギーと物質の同時攻撃を行える。

武装特性は不明。

武装特性

ISの武装を操縦者が完全に理解することで発現させることができるもの。

ワンオフの武装版とも呼べる。

現在は香織と簪が使用可能。

オリジナル設定集 ネットバレありに付き、未読の方注意（後書き）

以上です。

プロローグ (前書き)

ちり、ちり、ちり

プロローグ

「がっがっがっがっ……」

「ええっと……、美味しいですか？」

目の前で盛大に僕の作った料理を平らげていく女性に、恐る恐るそう聞いてみる。カチューシャにくっついていているウサギ耳が、ひよこひよここと揺れてとても可愛らしい。

しかしなぜ「がっがっ」を口で言いながら食べているんだろう。と言うかよくそれで食べられるね。

「うん、グッドだよ最良だよ！ いやあー、お腹ぺこぺこでぶっ倒れたときはどうしようかと思ったけど、君のおかげで助かった！ 君、結構面白いしね」

「は、はあ……」

妙にハイテンションだなあ。

「おっと、自己紹介がまだだった。私は篠ノ之束しののたはねって言うの。君は？」

「篠ノ之束って、あのIS開発者の！？」

アイエス

インフイニット

ストラトス

IS、正式名称をInfinité・Stratos。元々は宇

宙空間での活動を想定して研究、開発されたマルチフォーム・スーツだが、宇宙開発が遅々として進まなかったことと、一〇年前に起こったとある事件がきっかけで、ISは飛行ユニット、兵器として注目を浴びる形になった。

従来の戦闘機、戦車、あらゆる兵器が鉄屑へと変わるほど圧倒的な戦闘力。しかし、それを求めて再度戦争を起こそうとするほど国

の頭は愚かではなく、ISはスポーツとして、そして有事の際の即戦力として求められることになった。

尤も、開発者である篠ノ之博士が四六七個のISコアを作成したのを最後に一切の製造を止め、そのコア製造技術も公開していないのだから、全てのコアを日本が所有していた当初に戦争を仕掛けようとする国もなかっただけの話だけだ。

しかし、このISには重大すぎる欠陥があった。それは、女性しか起動できないこと。

もちろん、ISの性能とその事実を知った各国は、我先にと女性を優遇し、有能なIS操縦者を引き込もうとした。その結果、たった一〇年でこの世界は女尊男卑へと早変わりしてしまったのだ。

確かに、ISを使える女性が優位に立つというのはまだ分からないでもない。けれど、ISへの適性もなく、何を為したわけでもない女性が我が物顔で威張っているのを見るのは、なんと言うか、哀れだった。

「そ。その束ちゃんだよ！ らぶりい束ちゃんと覚えてくれたまえ！」

「いや、普通に束さんと呼ばせていただきます」

「む、ノリが悪いなあ……。まあいいや、ご飯ご馳走様。美味しかったよ」

「あ、いえいえ」

で、なぜこの束さんが我が家でご飯を食べているのかと言うと、まあ要するに、我が家の前で行き倒れていたのだ。

学校から帰ってきてみれば、僅かに身じろぎするだけのウサ耳が玄関前に突っ伏していると言う珍事態に、思わず僕の頭はショート寸前まで駆け抜けた。もちろんきちんと戻ってきたが。

「うーん、じゃあお礼として……、私の秘密の隠れ家パート二三五

四号に招待してあげよう！」

「隠れ家って……、ああ、そういえば東さんって政府から探し人指定されてるんですね」

「まー、私を見つけるのは無理だろうけどねー」

僕は簡単に見つけましたけどね。というか、なんとなくこの人と話すのは楽しいかもしれない。

「って、やばいバイトが！」

「ん、君、バイトしてるの？」

「色々事情がありました、まあ」

時計を見ると、六時半。がっつり遅刻だ。店長は優しいから笑って許してくれるんだろうけど、僕自身がそういうのダメなんだよなあ……。一応連絡だけいれておこう。というか今日は休ませてもらう、なんか疲れた。

「ちょっと待っててもらえますか？ バイト先からお休みもらってきます」

「了解了解。あ、お茶飲んでていいかな？」

「あはは……、ご自由にどうぞ」

なんだかもう、この人自由人だな……。

それから一時間後、僕と束さんは揃って山道を歩いていた。
……何故こうなった。あ、隠れ家とやらに行くのか。

「着いたよー。ここが私の隠れ家パート二三四号」

「随分と隠れ家が多いことには突っ込まなくていいですか？」

「別にいいよ？」

さいですか。

「ささ、中に入ってー」

言われるがまま、僕は束さんに背中を押される形でポロツポロの
山小屋の中へと押し込まれる。腰まで伸びた僕の髪を引っ張らな
いように気を使ってくれるのが、ちよつと嬉しかった。

あ、この髪はお姉ちゃんが切るのもつたいないって言って切らせ
てくれないんだよね。長いと邪魔なんだけど、もう慣れちゃったな。

「それで、ここが？」

「違う違う、もーっと下だよ。それと、束ちゃんって呼んでね！」

「え、いや」

「ねー」

「……はい」

奇妙すぎる気迫によって押し切られた僕は、渋々頷いてから束さ
ん、じゃなかった、束ちゃんの先導で暗闇を歩いていく。

ギシギシと音を立てていた床は、いつの間にか金属質な音を返す
ようになっていく。……あれ、小屋がこんなに長いわけないよね！？

「ちよ、ちよつと束ちゃん！？　ここ何処なんですか！？」

「だから言ったじゃん、隠れ家だって」

「なぜ語尾が弾んでるんですか！ この小屋の構造自体謎なんですけどー!?」

「天才に不可能はないんだよ！ ってことで、此処だよこー」

よく分からないまままたもや押し切られ、束ちゃんの後について金属質な扉を潜る。

僕が足を踏み入れた途端、真っ暗だった部屋の中に光が灯され、そこにあるモノが露になる。

「これ、って……!?!?」

「んっふっふー、これぞ、私が暇つぶしで開発中のISだよ！ 名前はまだないけど、なかなか面白いチューンなんだよねー。残念ながら公表してないせいで、だーれも候補者がいないからこの子も飛べないんだ」

束さんの声が、とても遠くに聞こえる。

気づけば、僕はふらふらとそのISへと歩み寄っていた。

両肩に取り付けられた、折り重なった無数の装甲。脚部は細く、まるで鳥の足のよう。両の手は鋭く、それでいて温かみのある滑らかな曲線を描いて形作っている。

「……飛びたいの?」

触れず、問う。

答えるわけがないと知っていて? 否。

答えてくれると、思ったから。

操縦者のいない空の座席に、思わず手を伸ばし、

じゃあ、飛ばうよ。

「……ッ!？」

キンッ、と僕の頭の中に金属質な甲高い音が鳴り響く。ただ高いだけではない。祝福の音色とも取れる、温かなそれはきっと、この子の産声だった。

ISの名称は未登録。特性などまだ見抜くことすら出来ない。ただひたすら黒いデータの塊が僕の中に流れ込んでくる。その中の一つ一つに、混ざっているのだ。この子の『飛びたい』という思いが

知りえるはずのないものが スキンバリアー 皮膜装甲展開、完了。

分かりうるはずのないものが フォーマント 初期化、完了。

次々と、僕の中に バスのロット 拡張領域、確認。

流れ込んでくる ハイパーセンサー最適化、完了。

「わああ……!」

「こ、これって……!」

気づけば、僕はそこに立っていた。

人の背丈を優に越したその場所、ISを身に纏い、僕は立っていた。

手足は動く。三六〇度、あらゆる角度を見通せる。部屋中の埃の数だって数えられるくらいだ。

でも。そう、でも、だ。

なぜ、自分がISを動かせるのだ。男の自分が、何故？

そう考えて、僕は反射的に自分の体を抱くようにして身震いする。正確にはISごとだが。

男でISを動かせる。それは、きっと世界にとって未曾有の事態だ。女尊男卑をたった十年で推し進めたこの世界は、歪みに歪んでいる。

普通の検査だけならまだいいのかもしれない。だけど、それ以上

のことをされないとは限らない。仮に誘拐でもされてみる、人体実験のいい材料じゃないか。

一瞬でそこまで考えてしまい、思わず顔を青ざめさせる。

「おうい、大丈夫？」

「っは……！？ あ、はい……」

「とりあえず降りてきて！。ちょっとばっかしお話があるからさー！」

その声に引つ張られ、笑う膝で何とか床に下りる。

そこにいた束ちゃん、それはもう楽しそうな顔で笑っていらっしゃって、

「とりあえず、IS学園いっところか！」

久しぶりに、人をぶん殴りたい衝動に駆られた。

「あれ？ ISが動いたよ？」事件から一夜明け、僕の家には織あり斑千冬さんと束ちゃんの二人が集まっていた。

織斑さんはなんとというか、バリキャリ？ 古いかな、とりあえずすごい綺麗な人だった。

さすがに一晚経てば僕も心が落ち着いていて、割とまともに応対できた。

「おっはー、香織ちゃん！」

「な、なんで僕の名前を！？　っていうかちゃん付け！？」

「このらぶりい束ちゃんの手に掛かれれば、プライベートなんてあつてないようなものなんだよ？」

「ええー……」

「おい束、少しは紹介したらどうだ？　向こうも困っているだろうが」

てへっ、とか言い出しそうな顔の束ちゃんに、呆れ顔の織斑さんが突っ込む。仲がいいのかな。

にしても、織斑さんってどこかで聞いた名前なんだけど……。

「仕方ないな……。私は織斑千冬、IS学園で教師をしている」

「あ、ああー！　お姉ちゃんが言ってた人！」

「姉がいるのか？」

「あ、はい！　一之瀬葵いちのせあおいって言うんですけど」

僕の姉である一之瀬葵は、現在IS学園に通う高校一年生。と言つても、今年で二年生だけだ。

そっか、前にちよっと零してたのってこの人のことだったんだ……。確かにカツコいいし、綺麗な人だよな。

「ああ、一之瀬か。なるほど、妹がいたのか」

「……へ？」

いや、あの？

「そっだよなー、可愛いよね！　ちーちゃんもそっ思うよね？」

「それは置いておいて、私が呼ばれた理由が全く分からないんだが。」

丁度休日だったからと言って出てきたが、まさか用もなく呼び出したわけじゃないだろう?」

今妹って言った? いや、そりゃ僕は顔がよく女っぽいって言われるけどさ……、そんなに見えるのかな?

「じゃ、まずは誤解から解いておこっか。この子、男の子だよ?」
「……何?」

「で、この子がIS起動させましたって言ったら、どうする?」
「……なんだと?」

あ、あれ、いつの間にかお二方とも真面目モードに!?! どうしよう、付いていけないよ!

織斑さんは僕を睨むような目つきで見てるし、束ちゃんにはやにやとこつちを見ている。なんだかすごく、気分が悪い。

「それは本当なのか?」

「うん。目の前で起動させたんだから間違いないよ。それで、この子の意見も聞いてこれからどうするか考えようと思って、ちーちゃんのこと呼んだんだ」

「なるほどな……。まさかお前が別の人間とまともに話すところを見るとは思わなかった。まさか他人に気を使うと言う高等技術を身に付けているなんてな?」

「ふふん、行き倒れてた私を助けてくれた恩人なんだよ? これぐらいやるって」

うふふあははしてないで、ちょっと助けられませんかでしょうか。

「あ、あのー……」

「っと、すまないな。それで、間違いなく君は男なんだな?」

「はい、間違いなく男です。男ですよ？」

「あ、ああ、わかった。さっきはすまなかった。しかし、君はどうするつもりだ？」

「どうする、と聞かれても……。」

ISが起動できる男なんて、いい実験体だ。まして今の世の中、男の地位はとて低いんだから何されたっておかしくない。それに、私には後ろ盾もないのだから。

そのことを伝えると、織斑さんは難しい顔で考え込む。

「そうか……。実はな、他にも男で起動できた者がいるんだが」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ。私の弟だ」

「それで、弟さんはどうすると?」

「強制的にIS学園行きだよ。尤も、あそこではいかなる公的権力も介入できず、国とのしがらみの一切が断ち切られるから、安全と言えば安全なんだがな」

それを聞いて、思わず考え込んでしまう。確かに、IS学園なら身を守るし都合のいいこともいろいろある。だけど、ただだよ? 三年後には研究者たちが手ぐすね引いて待ってるんだ。それを避けるためにはどうすれば……。

「行ってみるか? IS学園に」

「え?」

「私個人としては行ってもらいたいんだがな。もちろん、モルモットになれと言うわけじゃない。そこでISの扱いを学べば、立場を手に入れることだって出来るようになる。一線を退いた私が言えることじゃあないがな」

なんとというか、先生だった。

カッコいいけど怖い先生って、お姉ちゃんは言っていたけど。この人は、すごい人なんだと身を持って知らしめられた感じがした。いや、具体的に言い表せと言われると困っちゃうけど、なんとなくそう感じたから。

「でも、香織ちゃんとしては男だつてばれるのは嫌なんでしょー？」

「そりゃ嫌ですよ！ お姉ちゃんにも、迷惑かかるし……」

「なら、女装していけばいいじゃん！」

その一言が、僕の人生を根本的に変えることになるなんて、そのときは思いもしなかったんだ。

普通気づくんだけどね？ うん。

プロローグ（後書き）

うん、今日のことを思っしてほしい。

四月一日、エイプリルフルなんだ。すまない。

どうしてこんな遅くに投稿したのかっていうと、朝から考えて、カラオケに行っている間も考えていたからなんだ。このサプライズを。ただ、僕個人としては香織ちゃん（誤字にあらず）の行く末を生暖かく見守ってあげてほしいと思う。恐ろしいほどの不定期更新になると思っけど、一人でも続き見たいと言う人がいたら続けていこうと思う。

誰もいなかったら、これはこのまま放置して、現在更新中のものが一つ終わったら連載しようと思う。

何が言いたいかって言うと、ISで誰もやっていないことをやりたかっただけなんだ。

誰かISの男の娘もの書いてる人がいたら、僕のリサーチ不足だ。すまない。

第1話 今日から

「ここが、今日から通う学校かぁ……………」

目の前にあるでかい校舎を見上げて、思わず溜め息を吐きそうになる。

結局来てしまった。IS学園に。

あの後、千冬さん（プライベートではこう呼んでいいと言われたので）のコネを使って戸籍をちよつと変更して、実技試験と筆記試験を受けさせてもらった。

実技の時には学校所有のIS『打鉄』うちがねを使わせてもらって、何とか教官に勝てた。こっちの動きは凄いい拙かったけど、人並み以上には動かせるみたいでお褒めの言葉もいただいていた。

筆記は結構簡単だったかな。こう見えても勉強はきちんとしているし、お姉ちゃんの話に追いつくためにISの勉強も少ししていたから。

「うう、周り女の人だらけだよ……………」

別に苦手ってわけじゃないし、ちよつとやさつとじゃ動じないのも自負できるんだけど…………、こつも多いと威圧感があるからね。

僕、いや、私はその中を歩いていくと、昇降口で靴を履き替えて教室へ向かう。確か一組だったかな。

そうそう、千冬さんの弟さんも一組らしいから、まだマシだろうと言っていた。マシ、だといいなぁ…………。

「そう言えば、口調も変えないといけないんだよね…………。はぁ…………、ガンバだ、私」

一人称から変えていかないと、絶対どこかでぼろが出るからね。出たらまずいんだけど。

まあでも、頭切り替えていこう。

ちなみに今の服装は普通に女子の制服。栗色の伸ばした髪とこの顔のせいではつちり女性として認識されているみたいです。声だつて男とは思えないほどだし。

でも、ここで強くなればお姉ちゃんに負担を掛けることもない。がんばらなきゃ。

「えっと、席は此処かな」

場所は窓際一番後ろ。日当たり良好、しかもほとんどの人の視界から外れている。名前順じゃなくて適当なのかな。

S H R開始まではまだ少しあるから、今のうちにクラスメイトの顔を覚えられるだけ覚えて、無理か。やっぱり喋らないと無理だね。例の弟さんはまだ来てないみたい。あとうちのクラスにいるのでチェックしておくべきは、セシリア・オルコットさんかな。イギリスの代表候補生。事前に調べた限り、懐に入りさえすれば落とすのはたやすいかな。問題はそこまでどうやって入るかだけど……。

「……さん、一之瀬^{いちのせ}香織^{かおり}さん！」

「あ、は、はい?!」

うわぁ……、思いつきり裏返っちゃったよ……。変に思われてないかな？

それとなく周りを見渡してみたけど、うん、大丈夫そうだ。

「えっと、次一之瀬さんの番なんですけど、自己紹介、してもらえるかな？ 最初『あ』から始まって、『い』の一之瀬さんは三番目だから」

「あ、はい、すみませんっ。えっと、一之瀬香織です。特に無いんですけど、一年間仲良く出来たらなと思ってます。よろしく、お願いします！」

がばっ、と頭を下げる。パラパラと拍手があつて、無事次の人にバトンが回った。

頭を上げて椅子に座った私に向けられているのは、好意と観察の視線。少なくとも悪感情は入っていないようで安心した。

にしても、考えに没頭していたせいでSHR始まつたのに気づかなかつた……。開始早々躓いちやつたよ……。

ちなみに、香織と付けられたのは、両親が私を産んだときに娘の方の名前しか考えてなくて、息子の名前がなかったからこれいいのかと付けられた名前。まあ、両親からもらつたものだから大事にしているんだけど。

なんて考えていると、今度は例の弟さん、織斑いちか一夏の番だった。まあ、千冬さんに頭叩かれてたけど。

「どつなっちやうんだろうなあ、私」

小さく呟いた言葉は、結局誰にも答えられることなんてあるわけなくて。

私の前途多難な女装生活は、こうして幕を開けるのであった。

時間は過ぎて、二時間目の休み時間。教室内ではちょっとしたゴタゴタが起きていた。

なんでも、教官を倒したとか倒してないとかの話らしい。それって、あれだよな？ 入学試験の。私が受けたのはちよつと特例だったけど、それでも勝てたよ？ ちよつとしんどかったけど。

けど、セシリアさんは確か専用機持ちだよな？ ただ起動できただけの人が相手するには無茶だと思っただけだな。

まあ、そのときは丁度チャイムが鳴ったから大きなイザコザにはならなかったんだけど……、どうやらその後の方が大変だったみたいです。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

千冬さんが壇上に立って言う。少しでも情報があれば、それだけで戦闘は変わってくる。相対したときにISで手に入る情報だけではとてもじゃないが十分とはいえない。実弾兵器なら反動リコイルやら射程距離やら、その全ての情報を有効に活用できれば確実とは言えずとも何%も回避確立は上がり、武器自体を破壊することも可能になってくる。エネルギー兵器だってそれは同じことだ。

だからこそ、こう言った授業はワクワクして仕方ない。学校でも世界史の授業とかは楽しかったな。先生が面白かったのもあるけど。ちなみに、朝のSHRで千冬さんが出てきたとき、私は思わず耳を塞いでしまった。それぐらい盛大に黄色い声が上がったのだ。

……早くも『私』に慣れている自分がいるから嫌になるなあ。気をつけないと戻れなくなるかも。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

思い出したように千冬さんが言って、ちらりと悟られぬようにこちらと弟さん、一夏君を見た。タメだから一夏でいつか。

代表者、クラス代表ってことだよな？　ってことは、まずはそれがクラス内最強ってことなのかな。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を図るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

うんうん、やっぱり思った通りだ。クラス対抗戦が何度かあるのは分からないけど、それでも出てみたいな……。

きつと皆強いんだろうな。……ここに来た以上、一番を目指したい。越えたい壁はまだ無いけど、壁が出来たときにもっと強くなりたいと思えるようになりたい。

いや、この状況がある意味壁なんだろうけどね。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

おおっ、一夏が凄い推薦されてるよ？

……なんだか、セシリアさんの顔が凄いことになってるんだけど。大丈夫かな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!？」

突然立ち上がってまさかといった様子で言う一夏。そもそもこの

クラスに織斑は君と千冬さんしかいないんじゃないかな。

そんな私の心の眩きをスルーして（当たり前か）千冬さんが進行する。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待つ」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしる」

「い、いやでも」

「……私が立候補しても、良いでしょうか」

織斑姉弟（こ）の話の間をぶった切るが如く、私の声が響く。少し作っ
てはいるけど、ほぼ地声だ。それで女性の声と遜色ないのは自慢し
ていいのやら判断に困る。

ピタリと止まったクラス内。そしてその中の空気。あれ、私やつ
ちまった感じですか？

「ふむ。織斑と一之瀬、他にいないか？」

「待つてください！ わたくしも立候補致しますわ！ 一之瀬さん
ならばまだしも、男がクラス代表になるだなんて恥さらしもいい所
ですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈
辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……あれ、私完全に女として見られてるね。喜びたくないぞ。

それはともかく、セシリアさんは完全にスイッチ入ったみたいで
す。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍し
いからと言う理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこ

のような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

うわあ、凄いなセシリアさん。千冬さんって隠れブラコンみたいなもんなのに。

東ちゃんに教えてもらったけど、相当凄いらしいね。それを目の前にしてこれか。ちょっと背筋ゾクツとしたな。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

む、なんだかちよつとカチンときたな。そりゃ、私も一夏もISは初心者だけど、それなりにやっていこうと頑張っているのに。それを無碍に扱うのはいただけない。いや、一夏は知らないけどさ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ………！？」

一夏が言った途端、セシリアさんは言葉を失った様に声を詰まらせ、小刻みに震える。

そして、その直後。

「あつ、あつ、あなたねえ！ 私の祖国を侮辱しますの！？」

甚だ心外だとばかりに声を荒げ、そう喚き立てる。なんだか、心の奥のほうで冷える感じがした。

「決闘ですわ！」

盛大な音を立てて机を叩き、セシリアさんは一夏へ人差し指を向けて言い放つ。あの、私は何処にいるんでしょうかね。まあ、いいか。

正直ちよつと、私も腹立ったから。

「セシリアさん、ご高説のところ申し訳ありませんが……、少し日本人を舐めきっていらっしやるようですね」

「……なんですって？」

ちよつと挑発気味に、そして事実イラツとしている自分の気持ちを含めて言ってみたら、物の見事に引つかかってくれる。グッド。

敵意剥き出し、といった感じでこちらに視線を投げ飛ばしてくるセシリアさんを直視して、私も負けぬように視線をぶつけながら口を開いた。

「確かに、日本は島国です。外の方から見れば田舎にもほどがあるでしょう。ですが、あなたが祖国を侮辱されて怒るのと同じように、私にも日本への愛着があるのです。今の宣言、私にも有効と見てよろしいですか？」

「そ、それは……」

言い淀むセシリアさん。だけど、プライドの高い人は煽ればすぐに食いついてくる。

「専用機持ちが量産型二人を相手に梃子摺るのですね。それでは、とても代表候補生などとは名乗れませんね」

「なっ……！？ い、いいでしょう、二対一で相手をして差し上げますわ！」

かかった。女性口調で挑発するのはやったことなかったけど、成
功したみたいだ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課
後、第三アリーナで行う。織斑と一之瀬、オルコットはそれぞれ用
意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬さんが手を打ち鳴らし、それで話は終わりになった。さて、
啖呵切っちゃったけどどうしようかな。頑張るしかないよね。

皆が授業に集中し始めたのを見て、私も教科書を開いて授業に専
念することにした。

放課後。寮へと向かった私は、そこではたと気づく。

「部屋、何処？」

そう。私は部屋を聞いていないのだ。例外的に後から入試を行っ
たせいで、寮の編成が分からない。くっ、どうすればいいのか……。

「あ、一之瀬さん」

突然名を呼ばれ、思わず振り向く。そこには、きぐるみチックな

ダボダボの服を着た少女が立っていた。

えっと、うん、思い出せない。クラスで見た顔だっことは覚えてるけど。

「えっと、お名前は何でしたでしょうか？」

「相部屋の布のほとけ本音ほんねだよ、よろしくねー」

「一之瀬香織です。って、もう知っているんですけどよね。よろしくお願ひします」

うん、やっぱり個室なんてもらえませんでした。仕方ない、ばれないように生活するしかないか……。常時ブラ着用だな。偽パイもか。

しかし、なんともほんわかした人だなあ……。のほんさん？
今頭の中にポンツと浮かんだんだけど。

「部屋を忘れてしまったのですが、何号室でしたか？」

「一〇三〇室だよ。はい、合鍵。失くすと織斑先生に大目玉食らうらしいから気をつけてねえ？」

「それは大変ですね。気をつけないと」

「うんうん。じゃあ、お部屋に行こうよ」

そのまま布仏さんに連れられて、コツコツと廊下を進んでいく。

すれ違うのは女子、女子、女子。女子だけだ。中学校がとても懐かしいよ……。

廊下の途中の一〇三〇室の鍵を開けた布仏さんと一緒に、部屋の中へ。

中はホテルの一室のように綺麗で、というかこれはまんまホテルじゃないですか。いいなあ、ベッドもふかふかみたいだし。

「ねえねえかおりん。かおりんは奥と手前どっちのベッドがいい？」

「かお、りん？」

「あ、あだ名駄目だったかなあ？」

「あ、ううん、ありがとう。かおりんでいいですよ。それと、私はどちらでも大丈夫ですけど」

若干違和感を感じないでもないんだけど、目をうるうるさせる布仏さんを見たら言い出せるわけないです。

「じゃあ、私は手前のベッドにするね」

言うが早いか、ベッドにダイブする布仏さん。もしかして、戻ってきてすぐにベッドに入れるから手前にしたのかな。

「でも、凄いなかおりんは」

「何がですか？」

「クラス長決めるときの啖呵、カッコよかったよー」

「あ、ありがとうございます……」

ほめてくれるのは嬉しいんだけど、今思い出したら結構凄いこと言ってるよね。ド素人の打鉄二機である『ブルー・ティアーズ』を破らなきゃいけないってのは凄い難題だと思う。せめてどっちかが専用機だったらよかったんだけど。

……そう言えば。あの子はどうしたんだろう。明日にでも千冬さんに聞いておいてもらおうかな。

第1話 今日から (後書き)

はい、香織ちゃんの偽装学園記、始まり始まり。
皆様どうぞ、生暖かい目で見守ってやってくださいましな。

第2話 鬼神降臨！？（前書き）

ストックだけでも投下しておこう。

第2話 鬼神降臨!?

「ふわぁ……、んくつ、朝か……」

ガラス戸から差し込む朝日に起こされる形で目を覚ました僕は、寝返りを打って時計を確認する。

皆おはよう、一之瀬香織です。

時刻はまだ五時半。学生の行動時間範囲としてはかなり早い時間だろう。緊張して眠れなかつたせいもあるのかもしれない。目覚ましのスイッチを押して鳴らないようにすると、布仏さんのベッドを見る。

「んにゅ〜……すぴー……」

「気持ちよさそうに寝てるなあ……」

見ていると癒されそうな寝顔を一瞥して、それから……うん、シヤワーを浴びよう。

あがったら着替えて、よし。朝の行動プランはとりあえず決定かな。

そうと決まれば、早速制服を持って脱衣室へ。知つての通り僕は男だし、大浴場には入れない。だから、一夏のことがかうらやましかつたりする。だって、入らない言い訳を考えなくてもいいじゃないか。

一夏は世界初の男性IS操縦者だ。そしてあの初代にして今尚最強のIS操縦者、織斑千冬さんの弟でもある。立場的にも能力的にも好待遇なのは間違いないだろう。

対して僕は一般人。それも割りと貧乏人だ。これと言って特技もなく、立場もない。むしろ束ちゃんと同じで、危ないことに巻き込まれるかもしれない。同じ男性IS操縦者でも、後ろ

盾の厚さでは一夏の方が上なんだから。

それに、僕のせいでお姉ちゃんに迷惑をかけたくない。今だって迷惑をかけてるんだから。……近いうちに、会って話さなきゃなあ。

「……うん、ネガティブおしまい！」

自分に言い聞かせるように、もしくは吐き出すようにして僕はシャワー室へと入った。

熱いお湯がパシャパシャと体の上を跳ねる。憎らしいほどにすりとした自分の体の上で。美しいレベルで肌が白いし、確かに自分も気に入ってはいる。だけど、まさかこんなことになるとは思ってもよらなかった。

あの時ISを起動できたことを秘密にしてしまえばよかったと、そうは思わない。あのISは、鳴いていたから。

飛びたいと。空を飛ばせてほしいと、ずっと叫んでいたから。僕はそれに応えてあげたいんだ。

今の願いは、あの子と一緒に空を飛んで、家族を全ての災いから守れるくらい強くなること。だから、僕はここにいる。

じつと目を閉じて考えを纏めた僕は、軽く寝汗を流してシャワーを止め、体を拭いてからきっちりパッドを当ててその上からISスーツを着る。もちろんパンツは男物だけど、最悪女物を買に行かなきゃいけないかも知れないというのが辛い所だ。

まあ、これなら着替えのとき下着姿になることもないし、大丈夫だからね。……あれ、ISスーツならブラしなくてもいいんじゃないかな。でも、パッドはそんなに大きくないし、急に変わったら変か。それに、束ちゃんの所で試しに使ったときにも違和感なかったからいいや。なんだか思考が投げやりになってきてるなあ。

制服をその上にきちんと着て、準備完了。今日もがんばれ、『私』。

「あ、おはよ〜かおりん。シャワー浴びてたんだ」

脱衣室から出ると、黄色いダボダボのフード付きパジャマを着た布仏さんがベッドに腰掛けていた。寝ても覚めても微笑ましいお姿で私とつても癒されます。

「初めての場所だと緊張してしまって。寝汗を流していたんです。起こしてしまいましたか？」

「んーん、大丈夫だよ。ゴロゴロするのは好きだけど、起きるのは早いんだ〜」

それは羨ましい。夜更かしすればした分だけ起きるのが遅くなる私にもそれを少し分けてくれないだろうか。無理ですよ。

ともかく、だ。私は一週間後の決闘に望まなければならなくなつた。怒らせちゃったよね、セシリアさん。

あの時は私もあ言っちゃったけど、セシリアさんだってああ言えるほど厳しい道を歩いてきたはずだ。そのことは、決闘が終わったらちゃんと謝ろう。

「私も着替えちゃおうかなー」

言つて、もぞもぞと服を脱ぎだす布仏さん。私は女子の着替えをまじまじ見つめる趣味はないので、自分のベッドに退散する。一応私男ですから。

あー、新聞とか読みたいな。

着替えが終わった布仏さんと、図らずも一緒に時計を見上げる。まだ六時だった。

「そろそろ食堂開くかな？」

「早い人はもう食べる人もいるでしょうけど……。お腹空きました」

か？」

「うっん、もう少しご飯は後の方が良いよね」

「早く食べれば良いというものでもありませんからね。テレビでもあればいいんですけど」

生憎と、この部屋にはテレビは取り付けられていなかった。というか、全ての部屋にテレビは取り付けられていないだろう。ポータブルタイプのもを持ち込んでいる人がいないとは限らないけれど。昨日は大浴場に行かない言い訳が「疲れているからシャワーで済ませる」で済んだけど、これからどうしよう。まあ、何とか考えとかなきゃ。

「授業開始が八時二〇分だから、のんびりできるよー」

「え、ええ、まあのんびりはできるんですけどね」

なんとというか、修学旅行でホテルに泊まったときの、騒ぎづらい感覚。朝早くに起きるとがやがやしづらい、周囲に遠慮してしまうあれを思い出してしまふ。隣の部屋の連中は徹夜してカードとかボードゲームやってたけど。

ちなみに、私は普通に女子の部屋に引つ張り込まれたりしてました。いや、いじめとかじゃなくてほんとに良くしてくれるんだよ？ その方向が「香織ちゃんって可愛いよねー」だったりするんだけどね。あ、クラスメイトからの呼ばれ方は苗字か（主に男子）名前のちゃん付け（主に女子）のどちらかだった。まさか私がIS学園に入っているなんて知るわけないだろうけど、女子の皆は嫌な納得の仕方しそうだな……。

「でも、来週どうするの？ 相手は代表候補生だよ？」

「あはは……。つい言ってしまったので、今から頑張るしかありません。頑張るしか……」

頑張るしか、ないのだ。

這ってでも上に上がる。強くなるなら、このぐらいの壁はどうと
いうことはない。超えてみせる。

「放課後にアリーナと練習機の申請したらどうか？　少しでも動
かせば変わるかもしれないし」

「そうですね、试试看みます」

ありがとうございます、と付け足して軽く会釈。布仏さんは「い
えいえー」と片手を振り返してくれた。

ん、ちよつと気分転換してこようかな。

「ちよつと外を歩いてきますね。四〇分ごろには戻ります」

「はい」

鍵をポケットに入れて外に出る。廊下はひんやりとされていて、ま
だ人の気配はほとんどなかった。

テクテクと歩いてロビーに着くと、一人スーツ姿でコーヒーを飲
んでいる千冬さんがいた。意外と早起きなのかな。

「千冬さん、おはようございます」

「ああ、一之瀬か。ん、これだどごつちやになるな。今は香織でい
いか」

「あ、はい。千冬さんは何を？」

「織斑先生だ。まあ、今はいいか。朝の一番だよ、仕事前なの」

「お前も飲むか？」と言ってわざわざコーヒーを淹れてくれた千
冬さんにお礼を言って、ミルクとガムシロップを注ぐ。コーヒーは
出来合いのものだけだね。学校では厳しいけど、意外と優しい人な

んだね。

「それで、どうだ。一日通ってみて」

「周りが女性だらけって言うのは、意外ときますね。お風呂も使えませんか」

「そうか、お前はそういう弊害もあつたな……。男だとばれていれば、近々男湯の時間が作られるからそこにいれらるんだがな」

「まあ、シャワーでも事足りますし。それに、これからは全力で取り組まないと。一方的にやられるのだけは嫌ですし、セシリアさんにも失礼ですから」

言つと、千冬さんは面白そうにくつつつと笑う。

「なるほどな、そういう考え方が、お前は」

「悔いは残したくありませんから。あ、東ちゃんにちょっと聞いておいてほしいことがあるんですけど、連絡取れますか？」

「東の連絡先なら、これだ。携帯はあるか？」

聞かれて、ポケットから柄のない黒い携帯を取り出す。前にお姉ちゃんが連絡用にと持たせてくれたものだ。

携帯を千冬さんに手渡すと、千冬さんは慣れた手つきで電話番号を登録する。私より操作早いんじゃないかな。私はいまだに両手でず。

「これでよし、と。あとで時間が空いたときにでも掛けてやれ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「さて、と。それじゃあ私は部屋に戻るかな。お前も授業には遅れるなよ」

「はいー!」

ひらひらと片手を動かして自室へ去っていく千冬さんは、なんだかかつこよかったです。

「だから、怒っていないと言っている」

千冬さんと別れてちよつと外をお散歩してきた後、布仏さんと一緒に食堂に行くと、そんな声が聞こえてきた。

私がついているトレーに載っているのは、和の心を体現したような『THE・日本食』と呼べるもの。白米、味噌汁、お漬物に焼き鮭。いいよね、こつというの。

布仏さんはパンとスープだけだ。お腹空かないのかな……。

「だから篤」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……」

見てみれば、一夏と篠ノ之さんが言い争っていた。いや、アレは言い争っているって言うより篠ノ之さんが距離感を掴めてないだけなのかな。

んー、よし。

「織斑君、お隣いいですか？」

「へ？」

「うお、すごいねかおりん。速攻だ」

いえ、そういうわけじゃないんですけどね。ただ色々話さないとならんこともあるわけでした。主に来週のこととか来週のこととか来週のこととか。

「ああ、別にいいけど」

「ありがとうございます。布仏さんも」

「うん。って、二人ともよく食べるんだ……」

のほほんさん、今更ですね。ん、心の中ではのほほんさんと呼ばう。……うん、そうしよう。

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

「バランスの取れた食生活は大切ですよ？」

「いや、わかってんだけどさ。なんか力がでないっつーか」

んー、夜はそんなにカロリーを消費しないのかな。確かに、朝沢山食べると脳もきちんとか動くようになるとか聞いたことがあるけど……。私は三食きちんとかってこの体型です。

「織斑君、名前を呼び捨てにしてもいいですか？ せっかく同じクラスなのに、苗字で呼ぶのはアレですから」

「んー、それもそうだな。いいぜ別に。じゃあ、俺も名前で呼んだ方がいいのか？」

「どちらでも構いませんけど、姉がいるので名前の方が分かりやすいかもしれないですね。香織と言います」

「おう、わかった。香織だな」

「はい。よろしく願います、一夏」

よし、コンタクト成功！ ま、一々戦闘のときにさん付けで呼んでたらアレだし、先に確定させとかないと。一応タッグなんだし。なんて思っていると、突然のほほんさんが私の袖を引いてきた。

「むー、織斑君だけずるい！ かおりんかおりん、私は？」

「え、えつとー……、ひいつー!？」

な、なな、なんか凄まじく殺気の籠った視線が……!？

はっ、篠ノ之さん!? 篠ノ之さんが割り箸を指の力だけでへし折らんとしていらっしやる!? 違っよ、私はあなたの恋路を邪魔するようなことは、傍目から見ればこれしてるじゃんどうしよう関係が悪化させてしまっとう!?

「ねーねーかおりんってば」

「おい、どうしたんだ香織？」

両サイドからちよんちよんと私を突つつくのほほんさんと一夏。しかし一夏、気づいて。君の後ろに鬼神が降臨なさっておられます。

「わかりました、布仏さんはあとで何か考えますから。一夏、後で決闘の時の作戦を考えたいのでお時間をいただけますか!？」

「わかったー」

「おう、いいぞ」

はあ……。何とかなつた……。篠ノ之さん、怖いよう……。

結局、その朝食を私はろくに食べられなかった。後で篠ノ之さんともお話しておかないと死ぬるかもしれません、私。

それから時間は経って一時間目の休み時間。よし、頑張れ私。

「あ、あの、篠ノ之さん。ちょっといいですか？」

「ん、ああ。何だ？」

うわぁ、この時点で怖い。いや、ただ無愛想なだけなんだろうけど……。

「朝食のときのことなんですが……。もしかして、一夏が好きだからか」

「っ！？ な、なにを馬鹿なことをっ」

言った途端、顔を真っ赤にして反論してくる篠ノ之さん。ああ、ビンゴです。

「安心してください、そのことを本人に言っつもりはありませんし、私が彼を好きになることもありません。ですから、この一週間だけは彼と会話をしてはこちらに殺気を向けたりとかは、やめていただきたいんですけど……」

「あ、ああ、いや、それは済まなかった。私もやりたくてやったわけではなくて、だな、ついと言うか」

好きになることはないと言っていると、篠ノ之さんは目に見えて態度が軟化した。ああ、やっぱりただ嫉妬していただけなのかな。

「うん、私のことは筭でいい。君のことも呼び捨てでいいか？」

「あ、はい！ よろしくお願ひしますね」

「ああ、よろしく頼む」

結局、ぐっと握手を交わして仲直りできた。よかった、おそらく

もうあの鬼神降臨はないだろう。ない、よね？

……あれ、作戦会議は！？

第2話 鬼神降臨！？（後書き）

うーん、早くヒロイン出したいな。いや、ヒロインはのほほんさん
なんだけど。

せっかくのハーレムだし、ね？

あ、月村待つてくださっている方、もう少しお待ちを。口内炎が痛
くて執筆できません。ほんと口内炎創った奴氏ねばいいのに。

第3話 作戦会議

「一夏、今良いですか？」

「お、おう。作戦会議、だっけか？」

放課後、私は一夏の席に寄ると肩を叩く。もちろん、一週間後に向けての作戦会議だ。

篤さんは声を掛けたのが私だと知ると、睨みつける目をふっと緩めた。よかった……。

「んで、何をどう話し合えば……」

「……とりあえず、相手のISを知ることから始めましょうか。イギリスのサイトに飛んで、公表されているブルーティアーズの最低限のデータを持ってきました」

「ブルーティアーズ？」

「セシリアさんのISの名前です。また、彼女の武装の一つであるビット兵器の名でもあります」

「なるほど……」

コクコクと頷いてデータを眺める一夏。というか、代表候補生を相手取るんですから、このぐらいは知っておきましょうよ……。

「このビットはビーム兵装が四機、ミサイル兵装が二機の合計六機で構成されていて、直接ISと接続すればスラスタにもなる優れたものです」

「ビットか……。射撃特化なのか？」

「そうみたいですね。一応申し訳程度に近接専用のブレードも積まれているみたいですが、この兵装の構成から言えば使用されることはないと考えて良いでしょう。どう懐に入り込むかが鍵になります

ね

言いながら、ビットを拡大表示して映す。青い板のようなデザインのそれを眺めながら、私は思考の海に沈む。シミュレーションゲームなんかをやっているときには、いつもこういう状態になる癖みたいなものがあると、昔友達が言っていたっけ。

まず、戦闘の状況から整理してみよう。セシリアさんと私達二人の戦力差は歴然。二対一でも明らかにセシリアさんの方が強い。むしろ、一対多を想定されているブルーティアーズならばより有利に働くだらう。どう足掻いてもそれは覆せない。ならどうする？

こちらは二人。なら、二人でしか出来ないことをすればいい。相手がビットと本体の二人なら、こちらはタッグの二人だ。

「他に積まれているのは、《スターライトmk?》というレーザーライフルです。おそらく、ビットで攪乱してこの主力兵装で隙を突いてくる戦法でしょう。と言っても、他の戦法を警戒しておくのも忘れてはいけません」

「そうだな……。一番手っ取り早いのは、ビットを先に全部潰すことか？」

「そうですね。しかし、その場合はビットに注意を向け過ぎない方が良いでしょう。狙いを悟られれば簡単に回避されてしまいますから」
「でも、ほかにはどうするんだ？ 俺達二人とも初心者だろ？」

そう、問題はそこだ。相手は代表候補生、専用機への搭乗時間は軽く三〇〇時間は越えている。そして、ISは乗れば乗るほど相性が上がっていく珍兵器だ。となれば、初めて量産型を操縦する私達は圧倒的に不利。

だけど、だからこそ戦う価値があるのだ。

「後は、どれだけIS同士で連携が組めるかですが……。一週間は

連携の練習をせずにお互いISやその他の練習に当てませんか？

素人の浅知恵で連携など考えても、うまく行きっこないですし」

「まあ、そりゃそうだよな。よし、それじゃあそうするか。よろしく頼むな、香織」

「ええ、こちらこそ。よろしく願います、一夏」

軽く微笑み、一夏と握手を交わす。一通り情報のおさらいは出来たかな。

どうやら彼は、相手のことを調べると言うことをしないらしい。なら、その辺は私の仕事ですね。

情報交換を済ませると、一夏は篝さんに連れられて教室を出て行った。向こうは向こうで特訓ですか、頑張ってくださいね、篝さん。

「さて、私はっと」

バッグ片手に教室を出ると、生徒用のISの使用申請をするために窓口へ。申請自体はいつでも出来るけど、アリーナの確保とかの事情もあつて使用許可が下りるまでにはちょっと時間が掛かる。

それでも、二回くらいは動かせるはずだからそれで慣れないと。

「すみません、って山田先生？」

「あ、一之瀬さん！ どうしたんですか？」

窓口にいたのは、書類と睨めっこしていた山田先生だった。

こんなこともしてたんですね……。

「打鉄うちがねの使用申請をしたいんですけど、良いでしょうか？」

「わかりました。じゃあこっこの用紙に必要な事項を記入して提出してください。早ければ明日にでもアリーナの許可が下りると思いますから」

用紙を受け取り、ボールペンでさらさらと必要事項を記入していく。気をつけなければいけないのは、性別に関係してくる要項は偽装後の戸籍情報でいれないといけないところだけか。

数十秒で用紙を埋めると、こちらを温かな目で見ていた山田先生にそれを渡す。綺麗なアーチ状に削り整えられた爪は、きちんと磨かれて光沢を放っていた。

「はい、記入漏れはありませんね。それじゃあ許可が下りたらお知らせしますね」

「ありがとうございます。それじゃあ、私はこれで」
「気をつけて帰ってくださいね」

そう言っで見送ってくれる山田先生に小さく会釈すると、校門から出て寮へと歩いていく。と言っても、寮までは大した距離があるわけでもないからすぐについてしまっわけだけど。

いやあ、寮のロビーも相変わらずかしま姦しい。女子だけだから仕方ないと言えば仕方ないけどな。

「ただいま帰りました、ってまだ帰ってないんですね」

自室に戻っても、部屋の中には誰もいなかった。のほほんさんはまだ学校かあ。

丁度いいし、走りに出ようかな。体力作りも大切なんです。で、寮の外周を体力の限り全力疾走してきた私は、ふと寮のロビーに掛かっている時計を見る。走り始めてから丁度一時間が過ぎていた。

これ以上やれば立っていらなくなるという位まで頑張ったし、今日はそろそろ終わりにしようと思いい自室へ向かう。少しの間走ってなかったから、ちょっと疲れたな。

ちなみに、今はISスーツ。体操着代わりだけどすぐに乾くし汗も外に逃がしてくれるから運動するには最適なのだ。中学校ではこれよりもワンランク下の素材で作られた体操服を使ってたっけ。あれも着やすかった。

「あ、かおりんだー」

「布仏さん。いつお帰りに？」

部屋に戻ると、のほほんさんがベッドの上でゴロゴロと転がっていた。それも心底嬉しそうに。やあ、癒されるね。

「ついさっきだよ。そういえば、今朝言ったこと覚えてない？」

「ええっと、何のことですか？」

「織斑君だけ名前はするいから、私もあだ名とかで呼んでー」

「ええー……。本音、さん？」

「さん付けなの？」

「……のほほんさんはどうでしょうか」

「あ、それならいいよー」

いいんですか。そしてのほほんさんの気迫がなんだかおかしかった。

「これで、友達度アップだねー」

「あ、はあ……」

意味が分からないけど、とりあえず頷いておこう。

昨日と色違いの緑色（昨日は黄色）の部屋着を着たのほほんさんから、平時ものほほんさんでいいとお許しが出たのはいいいけど、なんでこだわるんだろうか。別に名前でもいいだろうけど。

「私はお姉ちゃんが三年生にいるから、布仏さんだところっちゃになつちやうんだよー」

「ああ、そう言えばそうでしたね。では、のほほんさんと」

「うんうん、ところで今まで何してたの？」

「寮の外を走り込んでいたんです。体力作りで」

「じゃあ、シャワー浴びちゃえば？ 汗びっしょりでしょー？」

「はい、そうさせてもらいます。ご飯はどうしますか？」

「もうちよつとしたら行くつもりだよー」

わかりました、と言葉を返し、パジャマと共に脱衣所へ入る。

さて、頑張らなきゃね、今週一杯。

「もしもし、束ちゃん？」

皆が寝静まった後。『僕』はこっそり寮を抜け出して外の茂みの陰に隠れて電話をかけていた。

電話の相手は、篠ノ之束。

『あ、もしもし香織ちゃん？ やーん、連絡待ってたよ！ 番号は調べてあったんだけど、ここはそっちから掛けてくるのを待った方が風情があるなー』と思って待ってたんだよー！』

「あはは……。ところで、あの子はどうなったんですか？」

相変わらず凄いマシンガントークだった。

『ふっふっふ、まだまだ調整どころが一杯だから、もうちょっとかかりそうだけど安心してね！ 必ず一緒に飛べるようになるよ！』

「ほ、本当ですか!？」

『もちろん！ 送るときはちーちゃんに連絡するから、楽しみに待っててね!』

ぶっ、と携帯が切れる。 まあ聞きたいことは聞けたから良しとしようかな。

あの子、やっと飛べるんだね……。

それから、六日後。

「……えーと、織斑先生？」

「なんだ？」

「一夏は何故専用機なんでしょうか」

一切詳細を聞かされていなかった『私』は、思わずそう言った。 てつきり、私は今まで訓練機二機で相手取るものだと思ってたんだけど……。

「数日前に用意できてな。 クラスでも言ったんだが、聞いてなかったか？」

「えっ……。すみません、聞いてませんでした……。まあでも、これで少しでも食い下がれば……」
「何とかなるさ！ 向こうも知ってるし」

うう、多分イメージトレーニングと復習してたせいだ……。まあ、とりあえず今は置いておこう。専用機となれば少なくとも戦力の向上は見込める。より細かく言えば、火力の向上は見込める。それが戦力になるかどうかは、一夏の腕次第だ。

「仕方ない……。先に出ています！」

IS『打鉄』で先に飛び出すと、独特の浮遊感と共に空へ浮かぶ。打鉄の基本装備は近接戦闘用のブレードとハンドガンのみ。つまり、火力で言えば一番下だ。ここをどうカバーするか……。

「テストス、聞こえますか？ セシリアさん」

「ええ、聞こえてますわよ」

頭の中で声が聞こえた。これがIS同士の通信みたいなものか。意外とあっさり出来たな。

「良かった。あの、一つ条件を加えさせていたくださいなのです。一夏が専用機持ちになっていたようなので、私が一夏、どちらかのシールドエネルギー残量がゼロになった時点でこちらの負けというのはどうでしょうか」

「しかし、それでは一之瀬さんが不利ではありませんの？」

高圧的な、けれど優しさの含まれた声に、思わず頬が緩む。けど、ね。

「そうならないよう、全力を尽くすだけです」

「……わかりましたわ。織斑先生、よろしいでしょうか？」

『まあ、いいだろう。全員、全力を尽くせ』

放送機材から吐き出された千冬さんのその声と共に、一夏がピットから飛び出してくる。よし、役者は揃った。

「よろしくね、打鉄」

腕を動かしながら、一人そうごちる。

飛ぶのは、これが三度目だ。前の二回は訓練で少し飛んだだけ。

ほとんど操縦練習だったけど。警戒、敵IS操縦者の左目が

射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

オープンチャネル

開放回線で話している一夏とセシリアさんを眺めながら、集中し

てブレードを呼び出し、それとなく構える。刃は手元よりも下に、後ろに流すように。

独特の緊張感が体を蝕む 否、支配する。それは決して不快な

ものではなかった。むしろ、高揚感と共に体を動かす燃料にすらなりそうなほどだ。警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確

認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわねっ！」

エネルギー弾の掻き立てる独特の音が、開放回線から流れ出たセシリアさんの声と共に耳に届き、三六〇度を見渡せる中で一夏のいる元へと飛んでいく。

『一夏、無事？』

『あ、ああ。にしても気持ち悪いぜ、こりゃ』

『それでもやらないといけません。交代スイッチ噛ませながら叩きましょう。

後衛は陽動で』

『わかった。じゃ、まずは俺から行くっ』

プライベートチャネル
個人間秘匿通信で軽く作戦案を交わしてから、互いに空を飛ぶ。
心地よい浮遊感だった。

一夏が刀身長めのブレードを呼び出し、器用に狙撃を避けながら空を進んでいく。それをサポートするように、私もブレードを収納ハンドガンを展開して狙いを定める。と言っても、正確に狙うわけではなく気を散らすための威嚇射撃だ。当たれば御の字。

「くっ、この！」

「香織、そつちだ！」

「了解、交代します！」

単語を交わし、素早くハンドガンを収納しブレードを展開する。
さあ、行こう。

グイツ、と引っ張られるような強烈な加速感と共に、私と打鉄は弾丸のようにその場から飛ぶ。応戦しようと掲げたライフルにも臆せず、一直線に。

大丈夫、当たらない。

直後、銃口を青い光が満たしていった。

第3話 作戦会議（後書き）

ということで、戦闘開始。戦闘の様様は大分カットされるでしょう。

ああちくせう、口内炎が治らない。小さくなって来てる気はするけどなあ……。

第4話 戦いの恐怖

バリアー貫通、ダメージ57。シールドエネルギー残量、8
6. 実体ダメージ、レベル中。

「わかってるんだよ、そんなことっ！」

吐き出すように呟いて、ビットから撃ち出される特殊^Bエネルギーを回避していく。二機ならまだしも、四機もいるんじゃないじゃ回避だけで手一杯だ。

模擬戦開始から約三〇分。ブルーティアーズには一撃も与えられないまま、私たちはじりじりとシールドエネルギーを削られていた。まだ辛うじて避けてはいるものの、正直厳しい。

一夏のIS「^ビ白式^キ」に装備されているのは、近接戦闘用のブレードが一本だけ。後付^{イコライザ}装備も出来ない特殊なISらしいけど、この状態では最悪の武装だ。

そしてこの「^ハ打鉄^{ドカ}」に備わっているのは、近接用のブレードと短距離射撃用の拳銃のみ。そして相手とこちらの搭乗時間差は優に二八〇時間以上。無論向こうが上である。

「一夏、無事ですか!?!」

「な、なんとかな……。そっちは?」

「大分まずいです。ですが、ある程度相手の特性は分かりました。エネルギー残量は?」

「67、実体ダメージは中破。そっちはどうだ?」

「57、大破一步手前です。仕掛けるのは、これでラストでしょう」

お互い随分とぼろぼろだ。けれど、おかげでこのビットの攻略法も分かってきた。

『あのビットは、操縦者の意思で動いています。そして、それには多大な集中力が必要になってくる。その証拠に、ビットの相手をしている間はライフルは撃ち込まれませんでした』

『ああ、それは俺も思ってた。いけそうか？』

『行くしかありませんよ。私がビットを陽動します。隙を突いて、斬ってください』

『分かったっ』

大分曲芸飛行染みた動きでビットの攻撃を回避しながら、私はビットの動きを見ていく。

常に私の周囲を囲むようにして飛び回る四機のビット。だけど、人の操るものなら必ずズレが生じる。そこを突けば……！

左手に収まっているブレードをきつく握り、じつとビットだけに集中する。一夏の方は、向こうでうまくやってもらうしかない。

周囲三六〇度、それこそ真下や真上、自分の後ろといった場所は、普段見ないだけあってやや反応が遅れてしまう。今までも、そこは優先的に狙われてきた。だけど、気づいてしまえば簡単なことだ。それとなく隠しながら撃つては来ていたけど、それでもっ！

「……ここ、だッ！」

「そんなっ!？」

ギユウツ、と急な加速と共に左向きに振り向いた私は、その勢いのままブレードで斬り払い、発射寸前だったビットの一機を破壊する。よし、続けて！

「これと、これっ！」

真逆の場所を同時に見ることは出来ない。その思考の穴を突くよ

うに上下に飛んできていたビットを、展開したハンドガンと振り払ったままのブレードの逆袈裟で同時に破壊する。後一機は。

「でえりゃあああ！！」

真後ろになった其処にいたビットを、上空から突っ込んできた一夏がすれ違い様に叩つ斬る。そのままの勢いで、一夏は呆然としているセシリアへと加速して飛んでいく。
が、次の瞬間。

「掛かりましたわ」

(まずっ　!??)

「一夏、逃げてッ！」

「おあいにく様、ブルーティアーズは六機あつてよ！」

腰部分を守るスカートのようなアーマーが動き、無骨な砲身が顕わになる。

ビットとは明らかに違うフォルムのそれは。

「んな、ミサイルッ!？」

直後、白と赤の光が視界を刺し貫き、黒煙がそこを満たしていく。円形のそこから吐き出されたミサイルは、回避する暇もなく白式を纏う一夏へと命中した。

「一夏あああああ！」

『一夏あああああ！』

香織の悲鳴が、モニターから鳴り響く。あまりに悲痛なその叫びに、真耶まやは思わず耳を塞ぎそうになってしまった。

モニターは黒煙で満たされ、その向こうを見ることは出来ない。思わず一夏の名を呟きそうになった筈はずは、すぐそこまで出掛かった名をぐっと飲み込んでモニターを見つめた。

「ふん」

モニターを見つめたまま、千冬ちふゆは鼻を鳴らす。それは、溜め息にも似た何か。

モニターを遮っていた黒煙が晴れていくにつれ、筈はずと真耶は思わず胸を撫で下ろした。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

完全に黒煙が晴れたそこには、白式が立っていた。ただし、その形状は大きく変わっていたが。

味方IS健在。今の攻撃によるダメージは無し。

「え……？」

思わず呟いた瞬間、私の視界には白銀のISが浮かんでいた。

白式が、変わっていた。先ほどまでの無骨なデザインは消え、代わりに現れたのは、御伽噺の中に出て来るような騎士の鎧めいたそれ。残念ながら兜はなかったが。

「いち、か……？」

「なんだかよくわかんないけど、おう。ようやくこいつは俺専用つてことらしいぜ」

曖昧な笑みを浮かべながら、涙の滲む声で問った私に答える。よかった、無事だった……。

人にミサイルが当たる瞬間なんて、見ていて気持ちのいいものじゃない。それも目の前で、だ。爆発の威力は、死の危険が無いことを簡単に忘れさせてくれるほど恐ろしかった。

ISは、兵器だ。そのことを、私はようやく思い出した。

どこか浮かれていたんだ。自分が男で二人目のIS操縦者だと聞いて、やはり浮かれてしまっていた。でも、考えてみればそれは、世界で二人目の『搭乗者を選ぶ殺戮兵器』のテストパイロットということだ。

こうして接してみて分かる。この子達は戦うために生み出されたことが。だけど、だけど私は……、それを否定してあげたいと思っていたんだ。

うつん、『私』じゃなくて、『僕』が。

「ま、まさか……、ファースト・シフト一次移行！？ あ、あなた、今まで初期設定だ

「けの機体で戦っていたって言うの!?!」

「どうやらそうらしいぜ。香織、やれるか?」

「……うん、大丈夫です。やりましようっ!」

刹那、風を裂いて突き進む純白の機体。私の役目は、その突撃をサポートすること。

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

聞こえてくるのは、一夏の独白。きつと、オープンチャンネル開放通信で流れていることにも気づいていないんだろう。

「俺も、俺の家族を守る」

「……は? あなた、何を言っ」

「とりあえずは、千冬ちふゆねえ姉の名前を守るさ!」

それは、独白と言うにはあまりに力強いもので。思わず私も、頬が吊り上ってしまいそうになっていた。

全く、男子と言うのは度し難い。『僕』も含めて。

「ああもう、面倒ですわ!」

突っ込んでくる私と一夏を迎撃せんと、残されたミサイルビットから大量のミサイルが吐き出される。一発でも当たれば即アウト、ハイリスクハイリターンの大きな賭け。

その賭けを、一夏は真つ向からぶった切っていく。動きで回避しきれないものは私がハンドガンで撃ち落とし、突き進む道を作り出す。

「行け……っ、行けええええええええ! 一夏ああああ!」

「おおおおっ!」

純白の騎士は、空を斬り裂いて突き進む。
その剣から解き放たれた青い光が、一際強く光り輝き　。

『試合終了。勝者　セシリア・オルコット』

ブザーと共に、その放送が鳴り響いた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合終了後、ピットに戻った私と一夏を待っていたのは千冬さんのお叱りだった。

まあ、負けてしまったのだからきちんとお叱りは受けよう。打鉄も、あまり飛ばせなくてごめんね。

「武器の特性を考えずに使うからああなる。身をもって分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

「それと、一之瀬。よく戦った」

「……へ？」

えっと、何で褒められたの？　よく分からない。というか怒られ

るんじゃないかったの？

「なんで、私は褒められてるんでしょっか？」

「訓練機で、しかもサポートもこなしながら生き残る。相手が注目していなかったとはいえ、ISをまともに動かして五回に満たないお前がそこまでできれば十分優等生だろう」

「あ、ああ、ありがとうございますっ！」

うわ、うわわわっ、千冬さんが褒めたよ！？ お姉ちゃんも「あの人を掛け値なしに褒めるところを見たことがない」って言うていたあの千冬さんが！？

「……おい、なんだその形容し難い表情は。幽霊でも見るような目だな」

「あ、す、すいませんっ。その、織斑先生はあまり人を褒めないと聞いていたので……」

「……はあ。まあいい、とりあえず今日はおしまいだ。帰って休め」

「は、はい！」

「おっ」

バシんツ！ と千冬さんが盛大な音を立てて一夏の頭を叩く。電話帳レベルの厚みがあるそれで。

千冬さん、それはさすがにひどいと思います。そう思っても口にはしない。それが我が家の処世術。

「いつてええっ！」

「返事は「はい」だろうが。お前はこれを読んでおけ。ISを所持するための規則だ。一文字も余すことなく読むんだぞ」

「げっ、なんですかこの『あなたの街の電話帳』みたいな厚さは！

「？」

「いいから読んでおけ。それがISを使う責任の重さだ」

千冬さんの言葉には、いつの間にか真面目な重みが加わっていた。その迫力に、一夏も言葉を発することなく頷く。

一夏は箒に連れられて、例の本を抱え帰っていった。山田先生は管制室に戻ってアリーナの点検をするらしい。

私が今残っているのは、千冬さんに口パクで「ここに残れ」と言われたからだ。

「さて、と。今は戻してもいいぞ。音声は流れないからな」

「あ、はい」

息を抜き、近くの出っ張りに腰掛ける。正直、身体的疲労はマックスに近い。それ以上に精神的疲労は上限突破しているが。

千冬さんは軽く微笑むと、ぼんっと僕の頭に手を載せる。じんわりと、千冬さんの温もりが伝わってくる。

「とりあえず、よくやった。さつきも言ったが、訓練機であそこまで立ち回ったのは早々いないだろう。誇っていい」

「あ、ありがとうございます……」

「……何かあったか」

「え……」

千冬さんは突然言って、僕の隣へ腰掛ける。学校では絶対に見られない柔らかい一面が、少しだけ顔を覗かせていた。

千冬さんが僕を見る目は、決して厳しいものじゃなかった。慈しみ、のようなものが混じった、優しい瞳。

「……怖かったです。一夏にミサイルがぶつかったとき、思い出

しちゃったんです。自分たちが乗っているものが兵器だったこと。皆ISが危険の無い機械みたいに見ているけど、これは人殺しの道具で、実戦だったらあれは死んでいたのかもしれないって考えると……！」

言外に促され、僕はぼつぼつと言葉を零す。

次第にそれは涙声へと変わっていき、とうとう僕は言葉を発することも出来なくなった。

「うつ……、ぐすつ……」

「そう自覚できているなら、お前は何も心配ないさ。最近の連中には、それを思い知らせることが最も難しい。天狗になっているのならばちのめせばいいし、落ち込んでいるだけなら励ましてやればいい。だが、ISが恐ろしいと感じさせることはそうできることじゃない。直接味合わせるためには技量が足りない者が多いのさ」

「で、でも……！ 僕、あの子に触れたときに感じたんです……！ 飛びたいって、飛ばせてほしいって鳴いているのを聞いたんです！ そんなの聞いちゃったら、飛ばせてあげたいと思っちゃうじゃないですか……」

「あの子、というのは東たはねのところのISか」

尋ねるといふよりは確認するように言ったその言葉に頷く。

「ISは、確かに恐ろしい兵器だ。だが、同時に頼もしい翼でもある。お前がISを恐ろしいと感じたのなら、次はその恐ろしさを頼もしさに変えてくれる相棒ISを見つけることだ」

「それ、って……」

「東から話は聞いている。一週間以内に到着するらしい」

「恐れることを恐れるなよ」と、千冬さんはそう言って去ってい

った。

残されたのは、俯いて地面を見つめる僕だけ。
小さく溜め息を零すと、力なく立ち上がって寮へと足を向けた。

「ただいま帰りました」

「あ、かおりんかおりん！　すごかったよ今日の試合！」

「ありがとうございます、のほほんさん」

部屋に帰った『私』を出迎えてくれたのは、また黄色に戻っていたのほほんさんだった。またかわいらしいものを着てますね、なんて言っただけになるが、正直今はそういう気分じゃない。というかちよつと頭が痛い。

「……大丈夫？　ちよつと顔色悪いよ」

「え、ええ……。今日は、シャワー浴びて寝ます。ご飯はいらないので……」

「そっかー。何かあったら言ってね。友達なんだから」

「はい、ありがとうございます」

ゆつくりと礼をしたあと、覚束ない足取りでベッドへと倒れこむ。
ふかふかの布団の感触が、不思議と暖かった。

第4話 戦いの恐怖（後書き）

まだストックは尽きないぜ。まだ、な。

ちなみに、原作より若干一夏がハイスペックになっています。

戦闘中にプライベートチャネル使える所とか。最初はまともに使えませんでしたからね。

第5話 決まりました

翌朝のSHR。朝食を食べる気にもなれずに昨晚の夕食と今日の朝食を抜いた私は、精一杯の虚勢で背筋を正しながら先生の話聞いていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一撃がりでない感じですねー」

嬉々として喋る山田先生は、ずっと暗く沈んでいる一夏には気づいていないらしい。もちろん、周囲の女子も大いに盛り上がっている。

「先生、質問です」

一夏が挙手。

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

その言葉と共に立ち上がったセシリアさんは、腰に手をやって機嫌良さそうに次の言葉を放つ。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方ないことですわ」

一夏が負けたんじゃない、一夏と私が負けたんだけどね。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

「いや、ちょっと待ってくれよ！ 香織はどうなるんだ!？」

「えっと、すみません。私も体調上の理由で辞退させていただきました。それに、せつかく専用機持ちがいるのに訓練機が代表になったらあれですし」

体調上の理由って言うのは本当だ。正直言って今のままじゃ一対一のプレッシャーに勝てる気がしない。もっと強くなってからじゃないと、私は足手まといにしかない。

一夏は大きく溜め息を吐くと、沈み込むように机に突っ伏す。本当にやりたくなかったんだろうな。

「そ、それですわね」

咳払いを一つして、一夏の方をスツと見直すセシリアさん。

「私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもう見る見るうちに成長を遂げ」

言葉を遮るように、大きな音と共に机が叩かれ、箒さんが立ち上がった。

あれ、修羅場？

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

「え、筭ってランクCなのか……？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

途中で口を挟んできた一夏を怒鳴りつける筭さん。周りの子が怯えていますよ、と言いたくても言えない。

と言うか、これはもう修羅場ですよね？

なんて考えていると千冬さんが、立ち上がって口論を始めている筭さんとセシリアさんの元まで歩いていき、出席簿で両者の頭を引っ叩く。うわ、凄い音したよ今。

「座れ、馬鹿ども」

冷徹そのものといった声で二人に告げる千冬さん。さすがに千冬さんには逆らえないのか、二人はおとなしく席に着いた。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

いい音を立てて出席簿で叩かれた一夏は、なんとも言えない顔で頭部を抑えていた。何か下らないことでも考えていたんだろうか。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

うわぁ、手厳しい。でも確かに、世界最強から見ればどんぐりの

背比べもいいとこだよね。

「代表候補生でも一から勉強してもらうつと前に言っただろう。下らん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

はい。

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシンッ！

片眉と共にギリギリと吊り上げられた出席簿が、小気味いい音を立てて一夏の頭を殴打する。それも二回。脳細胞が瞬く間に死んでいくなあ、うちのクラスの特定の人には。

「すみませんでした」

「わかればいい。クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

クラス全員（数名除く）からの「はい！」の大合唱で、めでたく一夏がこのクラスのクラス代表に決定されましたとさ。

うん、後で一夏に何か作ってあげようか。あんまりに不憫すぎたきた。

「篝さん」

「ん、香織か。どうしたんだ？」

「いえ、お姿をお見かけしたので、ご一緒にどうかと思って」

翌日。放課後に寮への帰り道で篝さんの後姿を見つけた私は、パタパタと駆け寄って声を掛けた。

大して驚いた様子もない篝さんは、くるっと振り向くところらの顔を確認して小さく表情を崩す。

「ああ、いいぞ」

崩した表情、敢えて言えば微笑みだろう。それを私に向けながら、篝さんは先導するように先に立って歩いていく。

む、歩幅が広い。私の歩幅は少し狭いから、少し小走りを挟む気持ぢゃないと追いつけないな。

「一夏とはどうですか？ 仲は」

「な、い、いきなり何を言い出すんだっ」

「いえ、少しは進展したのかな、と」

「……まだだ。それどころか、私の気持ちに感じてすらいない」

うわぁ。それはまた、なんというか。篝さんは典型的なツンデレだと思っのに。ちょっと過激だけど。

一夏も一夏だけど、まあ篝さんも真正面からのアプローチしてないのかな。

「で、でも、同室なんですよ？ それ相応のハプニングは」

「相部屋になったことを馬鹿なこと言い切り、下着を見れば懐か

しむ馬鹿だぞ」

「……えっと……、ご愁傷様です」

それはいくらなんでもない。本当でない。男として謝らせてほしいけど、ばれるのでやりません。

下着は、千冬さんで慣れちゃってるのかな。相部屋は自分に魅力がないと考えているだけか？ どちらにしても、このままじゃあね。

「じゃあ……、手料理を作っただげるとか？」

「……私は、料理は苦手なんだ」

「なら、コーチしてあげましょうか？」

「い、いいのか?!」

噛みつかんばかりの勢いで私の手を取る篤さん。怖いです。

「ま、まあ、暇つぶしにもなりますし」

「是非頼む。どうもセシリアの様子が妙でな、一夏に惚れた可能性があるがある」

「……まあ、戦いを超えて育まれる愛と言つのもありますし、ね」

しかし私に限ってはその枠には当てはまりませんがね。男ですから。

とりあえず、練習場所は私の部屋でいいかな。

「それじゃあ、いつから始めましょうか。お時間はありますか？」

「そうだな……、空いている時間に部屋を訪ねるから、大丈夫だったら頼む」

「わかりました。準備して待っていますね」

まあ、少なくとも化学薬品を持ち出すようなトンでもさんではな

いことを祈ろう。さすがに、酸味が足りないからって塩酸やらを入れる人じゃないよね？

とりあえずそれだけはないことを祈る。

「それにしても、セシリアとの戦いは凄かったな」

「ええ。一夏が土壇場であんなことになるとは思いませんでした」

「いや、一夏もそうなんだが、お前もな。訓練機の扱いづらさは一応人づてに聞いたことがあるから、あそこまで動かせるものかと思っただけな」

「え？ ま、まあ、一応練習しましたから」

突然私の話になって、ちょっと挙動不審になりながら言葉を返す。褒められるのには慣れていないんです。顔真っ赤になってないだろうか、心配だ。

「一夏が言っていたぞ。お前の支援がなかったら、とっくに墜ちていたと」

「そ、そうですね……。それは、なんとも」

嬉しいんだけどなあ……。まあ、私もタッグじゃなければ墜ちてる自信があるし。結局どっちもどっちなんだよね。

今のところは一夏が上かな。最適化の終わってない専用機フィッティングであそこまで持たせたんだし。

とりあえず篝さんに料理の練習をするという約束を交わし、その日は終わったんだけども。

まさか、あそこまで酷いとは誰も思わないのです。それはまた、後のお話。

「……のほほんさん、どうですか？」

「美味しいよかおりん！」

「よかった……。自宅にいた頃は姉の分も作っていたので、こう見えても腕には自信があるんですよ」

その日の夜、私は自室でのほほんさんに料理を振舞っていた。

メニューは白米、塩味強めの野菜炒め、椎茸しいたけのお吸い物。お吸い物は薄めに作ってあるから、野菜炒めの塩味を丁度柔らかくしてくれる。但し、塩分の取りすぎには注意しましょう。

それにしてもものほほんさん、とっても美味しそうに食べてくれる。私がお腹が減ったから作ったんですけど、のほほんさんが「私も食べたい」と言ったので、二人分作ったのです。

「それでも、食堂のものには負けるんですよ……。もっと美味しくできる気がするんですけど」

「いや、まあ向こうはプロだし！。むしろ勝っちゃったらあそこのご飯食べられないよ」

ああ、まあ確かに。主に申し訳なさとか、その辺で。

まあでも、大雑把に作った割には小奇麗に出来たのでよしとしますか。美味しかったし、お腹も膨れたし。

「それじゃあ、シャワー浴びてきます」

「はい」

まだご飯を食べているのほんさんに断って、着替えと共に脱衣室へ。たまには湯船に浸かりたいけど、それには家に帰らないといけない。残念ながら、家は長期休暇じゃないとゆっくり出来ない距離にあるんだよね。

まあ、自分で決めたことだから弱音は吐きたくないけど。そんなの、冗談じゃない。

服を脱ぐと、念入りに隠すようにしてブラとパッドを服の下へ。こことて制服は色彩こそ同じだけど、改造OKだしプリセットの制服のレパトリーもたくさんあるからとても助かる。トランクス履いててもズボンがあるから助かったね。

と言つても、普段はISスーツを直で着ているから関係ないんだけど。さすがに胸はふんわりとだけ盛つてある。あんまりペツタンコでもあれだし。

とりあえず、これでよしと。

シャワー室の扉を開け、中へ入る。ちなみに扉はパタパタと扇状に畳まるあれだ。む、言葉で言い表せない……。まあいいや。

キュツ、とシャワーの栓を捻ると、頭上から熱いお湯が降り注いでくる。熱いと言つても熱過ぎる訳ではなく、むしろ心地いいくらい。

「ふーっ……。本日の『私』、これにて終了。かな」

呟いて、その場に膝を抱えて座り込む。お湯はそれでもきちん当当たってくれていて、寒さを感じることはなかった。

ここに来て、一週間と少し。とりあえずここまでは順調だ。順調かどうかは疑問符が付きそうだけど、とりあえずはまあ。

「あの子、いつ来るんだろ」

呟いたのは、産まれて始めて起動させ、生まれて始めて起動させ

られたあの子のこと。

ISは、兵器だ。だけど、あの子のことをそう思いたくない。言葉で具体的に言ってみせると言われれば、迷わず無理だと返せる自信のある気持ちで、心の中を占拠していた。

僕は、あの子を飛ばしてみたい。ここに入った意味の一つは、それなのだから。

「とりあえず、待ってみるかな」

立ち上がって栓を止めると、脱衣室からバスタオルを取って全身をくまなく拭く。よし、と。

後はTシャツと短パンでよし。さすがに寝てる最中に脱がされたりしない限りはこれでバレない。エアコン止まらなければ、だけでももし真夏の熱帯夜にエアコンが止まったら、僕は死ぬね。断言できる。

「あがりましたよー」

「あ、食器片付けておいたから、私大浴場行って来るねー」

「すいません、ありがとうございます」

「いえいえー」

そう言っつて、洗面道具と着替えを持ったのほほんさんが出て行く。食器類は全て綺麗に洗われていて、棚の中に収められていた。うむ、やりおる。

「……さて、と」

それじゃあ、とくにやることもないし、寝ようかな。

ベッドに体を埋め、ふかふかの感触を堪能しながら、僕はこの日を終わることにした。

それでは、お休みなさい。

「ただいまー」

香織が眠ってからしばらくして、本音は一人ほんねで部屋に戻ってきた。すぐそこまでは友人と一緒にだったが、友人の部屋は本音の部屋よりも手前だったためだ。

普段なら返事が返ってくる筈だったが、香織が眠っているのに気づくと、音を立てないように荷物を自分の棚に納める。

「幸せそうに寝てるなあ」

寝る前にと香織の寝顔を覗き込んだ本音は、幸せそのものと言った香織の寝顔を見て思わず破顔する。

「そう言えば、かおりんの寝顔見たのって初めてかもー？」

小声で呟いて、確かにそうだと得心する。思えば、香織は本音が起きるよりも早いときは一時間以上、どれだけ遅くても五分前には起きていた。しかも、寝るのは必ず本音の後。

「うん、レア顔だあ」

そのことに気づき、本音は何故か嬉しくなってしまった。

普通の友人で寝顔まで知っているものはあまりいないだろう。それも、ここまで無防備な寝顔など、そう見せられるものではない。

香織の秘密を知ったような気がして、本音はなんとなく得した気分になった。

「それじゃあ、お休み。かおりん」

軽く香織の頭を撫ぜると、本音は自分のベッドに入る。

後には、二人分の寝息だけが残された。

第5話 決まりました(後書き)

のほんさんが可愛い件について。

第6話 『あの子』（前書き）

長いです。普段の1・7倍。

第6話 『あの子』

篤さんとの約束から数日が経った四月下旬。私は朝のSHR後に千冬さんに呼び出されていた。

「おはようございます、織斑先生」

「ああ。喜べ、束の奴から例のやつが届いたぞ」

「ほ、本当ですか!？」

思わず叫んでしまいが、幸い他の生徒たちは授業の準備や友人とお喋りに忙しいらしく、私の声が気に止まることはなかった。

「丁度いい、午後の実習で乗ってみる。訓練機で急加速急停止はできるな?」

「は、はい!」

「なら問題はないか。急下降と完全停止は?」

「一応できます。あの子で出来るかどうかはわかりませんが……」

「まあ大丈夫だろう。後はぶつつけでやってみせる。それじゃあな」

千冬さんは軽く笑って最初の自分の担当教科を持っている教室へ歩いていく。そっか、来たのかあ……!

でも、最初に最適化しないと携帯できないから、早めに行かないと。幸い、実習授業は午後からだからお昼休みに最適化すれば間に合うだろう。

で、そんなこんなでお昼休み。ご飯なんて食べていられないとばかりに、お昼を誘ってくれたクラスメイトに平謝りしつつISガレージへ。服をロッカーにしまってISスーツになってから中へ入ると、既に千冬さんが待っていた。

「来たか」

「あの、あの子は……?」

「ここだ。今開ける」

言って手元の端末を弄ると、重苦しい音と共にIS格納庫の扉が開かれる。

そこに納められていたのは、私が最初に見たときよりも幾分装備が美しく磨かれ、艶やかさすら感じさせる黒い機体だった。

「こいつが、梟だ」

「梟……」

いてもたってもいられなくなり、私は三角跳びの要領でISの脚部と腕部を駆け上ると、梟へと乗り込んだ。

直後、機械的な音と共に体がISと一体化する。視界は三六〇度開けて、様々な情報が目の前と脳内を錯綜していく。その中で、一つの声が頭の中に響き渡った。

『おはようございます、カオリ』

「へっ!? だ、誰!？」

『落ちてきてください。梟の補助AI、イヴと言います』

思わず声に出して言ってしまった私を落ち着かせるように、イヴと名乗る声言う。その声は今まで私が聞いたどんな声とも違っていた。サンプリングは誰のを使ったのか、非常に気になるところだ。

「つて、AI? ISに?」

『私にインプットされているのは、マスターであるカオリのサポートです。戦闘、日常生活どちらもです』

「そ、そうですか……。初期化と最適化はできる?」

『問題ありません。すぐに開始しますか？』

「お願い」

『了解しました』

そう答えて、イヴはすぐに作業を始める。

……速いな。三分もあれば終わってしまいそうな勢いだ。さすが束ちゃん。

「……ねえ、イヴ」

『なんでしよう？』

「あなたは、私のことを覚えている？」

『はい、はっきりと』

作業を行っている間、私はイヴに話しかけてみた。

声は外には聞こえていないのか、千冬さんが不思議そうな顔でこちらを見ているけど。

『眠っているとき、私の元にあなたの温もりが伝わってきました。』

それに気づいて、私は飛びたいと願いました』

「そっか。それじゃあ、やっぱりあれはあなただったんだ」

『はい。あなたともう一度会えて、とても、とても……』

「……イヴ？　どうかした？」

突然言葉を詰まらせたイヴを不思議に思っ、私はそう尋ねる。

『……現在の状況を的確に言い表す言葉が見つかりません』

「ん、どういうこと？」

『おそらく、私の中には感情を表す言葉わいめでしか言い表せないものがあります。しかし、私はその何かを感情を表す言葉で言い表せません。どう言った表現をすればいいのか、分かりません』

「そっか……。私は、あなたともう一度こうして会えて嬉しいよ。やっと一緒に飛べるんだ、って」

『嬉しい……。ですか。私の中にあるものも、『嬉しい』というものかもしれない』

「本当に？ だったら、嬉しいな」

機械に感情があるなんておかしな話だけど、ISには意識にも似た何かがあると言うのは公然の事実だ。だったら、人間臭いAIだつてあっていい。

もつとも、今はまだまだ機械めいているけど。

そんなことを思ったときに、フォーマット初期化と最適化の終了を知らせるアラームが鳴った。予想よりも少しばかり早いかな？

「よし、大丈夫そう？」

『はい、現状に問題はありません。現時点を持って、名称『一之瀬香織』をマスターとして認識します。今後ともよろしくお願いします、カオリ』

「よろしく、イヴ」

そう言つて、ついつい頭を下げしてしまう。下げたから、意味がないことに気づいたけど。

「織斑先生、フィッティング最適化まで終わりました！ ちょっと、飛んでみていいですか！」

「ああ、構わない！ 慣らして来い」

「だって、イヴ。行こう！」

『はい、カオリ』

答えたイヴの声には、どこか嬉しさが混じっていた気がした。

ゆっくりと一步を踏み出し、私は格納庫から体を出す。元からこ

の大きさだったような一体感が、私を包んでいる。

『シールドエネルギー残量確認。システムチェック。全システム、オールグリーン』

「よし、出ます！」

レールの上を滑るように、一気に体を前へ撃ちだす。大気と重力の壁を振り切って、空へ　！

一瞬、音が無くなった。

それを確認したときには、既に私は空の上にいる。

「……ようやく飛べたんだね、イヴ」

『……はい。夢が二つも叶いました』

どこかぼんやりとした声音で、イヴが言った。

機械が夢だなんて、きつと他の人なら笑うだろう。だけど、私は笑いたくないし、絶対笑わない。それを言ったら、男がISを動かしているのだから、本当なら有り得ないんだから。多分。

「夢、か。それってどんなの？」

『一つ目は、こうして空を飛ぶこと。二つ目は　』

あなたと、空を飛ぶことです。

いまだぼんやりとした声のままで、彼女はそう言った。

それから少し時間が経って、生徒たちが入ってくる前に私はガレージに戻った。千冬さんから開放通信オープンチャネルで声掛けられちゃったし。

戻ってきた私を迎えてくれたのは、ジャージ姿に変わっていた千冬さんだった。まあ、結構な時間飛んでいたし着替える時間ぐらいはあるよね。

「イヴ、楽しめた？」

『はい。楽しい、という感情で言い表せばいいのかは分かりませんが、きつとカオリと同じ思いです』

「そっか」

「なかなかいい機動だったぞ。ところで、出る前から独り言を言っているようだったが……」

「あ、私のってAIがあるみたいなんです。イヴ、開放通信オープンチャネルで話できる？」

『可能です』

「じゃあ今はそうしてくれる？」

「わかりました。『織斑 千冬』ですね、製作者マイスターのデータでは知っています。私はイヴ、イヴとお呼びください。そちらのことはチフコとお呼びしても？」

「……あ、ああ。なんとというか、AIとは思えないな。アイツが製作者なら何があってももう驚かないが」

流暢に話すイヴに驚いたのか、それとも呆れているのか、千冬さんは苦笑いしながらそう言う。うん、私もそう思います。束ちゃんのやることは一々滅茶苦茶だから。短い付き合いでもそれは分かる。

「この後の実習で専用機持ちにはデモンストレーションで飛んでも

らう。出来るか？」

「はい、大丈夫です。イヴのことは……」

「秘匿しておくべきだな。ただでさえお前はややこしくなってきた。当面は出来る限り情報は隠匿すべきだろう」

「わかりました。イヴ、プライベートチャネル個人間秘匿通信に戻していいよ」

「はい。それとカオリ、私との会話はプライベートチャネル個人間秘匿通信で可能です」

『……こう？』

『はい』

頭の中で、人影が頷くのが見えた気がした。あれがイヴなのかな。とりあえずISを解除すると、梟は小さな鳥のペンダントに変わる。カッコいい、かな。うん。私に似合うかどうかは分からないけど。

「よし。ちなみに、梟とお前に専属の整備チームはない。一から十までおまえ自身でやることになる」

「はい！」

「まあ、わからないことがあれば聞け。表向きは架空の会社のテストパイロットと言っことになっているから、専用機持ちということだけは広めても問題ない」

「ちなみに、その架空の会社って……」

「東がついこの前作り上げたらしい。社員と社長をあいつが兼任している。しかも、政府には疑問を抱かれないよう巧妙に情報を隠匿してあるようだ」

「うわあ、東ちゃんやりすぎじゃないですか……？ いや、確かに守ってもらえるのはありがたいけど……」。

東ちゃん、相変わらずやるのが派手ですね……。この数十分でこんなに痛感するとは思わなかった。

「凄いですね、束ちゃん……」

「今更だがな。世界が電子機器に頼っている限り、あいつの敵じゃない。ISが世界の敵になるうとな」

「……させません、私が。この子を兵器になんて」

少し沈んだ面持ちの千冬さんに、私ははっきりとそう告げる。

「……ふふ。言うな、ひよっこ。なら、私はその言葉を信じさせてもらっさ」

「あはは……。ありがとうございます」

世界中で、男では一夏と私だけが今のところISを起動させられる。尤も、私は非公認だけど。

一夏の場合はもう止められない所まで来てしまっていたらしいけど、私は表に出ないよう入念に線を張り巡らせてからここに来た。その違いはあるはずだ。

「よし、グラウンドで待っている。じきに生徒が来る」

「はい！」

そう言われ、グラウンドで待つこと一〇分あまり。

全員が揃ったそこに、さっきと同じジャージ姿の千冬さんが現れる。あ、隣には山田先生もいるよ。

「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、一之瀬。試しに飛んでみせる」

言われて、私は胸元の（若干膨らんでいるのはパッドをいれているからだ）鼻のアクセサリに触れる。

この状態からの起動は初めてだから、ちょっとばかり緊張するな。

『行こうか、イヴ』
『はい』

直後、私の体が光に包まれ、そしてすぐにそれが晴れる。その後には、黒い装甲を肩に浮かべた黒いISがあつた。

攻撃用武装は刀剣型近距離武装の《夜鷹よたか》、パイルバンカー型近距離武装の《啄木鳥きじつね》、そしてサブマシンガン型の中、遠距離武装《夜雀よじやく》。

防御用武装は両肩の黒い装甲《夜羽よば》。展開すると全身を黒い装甲版が無数の羽となつて、翼のように覆う防御装甲になる。

これはある程度自由が利いて、打撃武装にも転用できるとか。これはイヴから聞いたことだけだ。

一応ビームコーティングされてるから特殊兵器BTをある程度反射でき、直接打撃にも強いらしい。結構やりすぎだと思つのは私だけでしょうか。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
前を見ると、一夏がそう急かされていた。まだうまくイメージが定着できていないのか、なかなかISは起動しようとしなない。というかそのそぶりすら見せない。あの白いガントレットが《白式》なんでしょうか。

「集中しろ」

千冬さんに言われ、一夏は突き出した右腕に装着されているガントレットを、左手で包むように掴む。そして数秒。

一秒掛からずに、それこそあつという間に一夏の全身は《白式》に包まれていた。

「よし、飛べ」
「よっと」

千冬さんの指示に従い、後背部にある二基の推進装置スラスターを噴かせて急加速。先に空に行ったセシリアさんを追うようにして飛んでいく。頬を撫でる春先の温かな風が、とても心地良かった。

「香織さん、それは……？」

「専用機、『梟』です。ついさつき届いて少し飛ばしただけなんですけどね」

「そ、そうでしたの……。どこかの企業の所属なのですか？」

「え、ええ、まあ。一夏のような特例とは違うと思いますよ」

嘘です、がつつり特例です。それも飛び切りの。だけと言えない。言ったら私の命がマツハでヤバイ。

って、そう言えばセシリアさんの私の呼び方が変わってる？

「あの、セシリアさん、香織さんって……？」

「あ、お嫌でしたか？ お友達になれたら、と思ったんですけど……」

「いえ、いいですよ。これからもよろしくお願いしますね、セシリアさん」

「ええ、よろしくお願いしますわ」

空中で器用に姿勢を制御して、お互いにお辞儀。なんだか新鮮っていうか、むしろシユール……。

「あ、そう言えば、立候補のときに失礼なことを言っていたら申し訳ありません。謝ります」

「い、いえ、わたくしも随分失礼なことを言ってしまったし、お相手ですわ。それにしても、一夏さんはなにを……?」

朗らかに笑ったセシリアさんの視線を追って、私も下を見る。そこでは、一夏がやつとISを展開したところだった。

いや、もうちょっと早く展開できるようになるうよ。せっかくの専用機なんだし。

『手にして少ししか経っていないのですから、仕方ありません。むしろこうして早くも使いこなせているマスターの方が稀有ではないでしょうか』

『えっ、そうなの?』

『はい。といっても、男性のIS操縦者のサンプルはマスターと『織斑 一夏』の二名しかありませんので、確定したことは言えませんが』

まあ、確かにそうだよな。ただでさえISはブラックボックスが多いから、かなり疑問だ。

「あ、上がってきた」

「では香織さん、先に行きますわね」

「はい」

気の抜けた返事を気に留めることもなく、セシリアさんは上へと上がっていく。とりあえず待ってみようか。

「は、はや……」

「セシリアさんと戦ったときのあの機動を思い出してください。もっと動けるはずですよ!」

「って、んなこと言われても……!」

空を舞うように一夏の周りを遊覧飛行しながら、私はもつと高く飛んでいく。いつの間にか、セシリアと同じ高さにまで到達していた。

それにしても風が気持ちいい。このままずっと飛んでいたいけど、さすがにそうも行かないか。こりゃ、いくら自分が風を感じられないうちでも、パイロットが空に夢中になるのは良く分かるなあ。

「結構、飛ぶのって難しいのな。自分の前方に角錐を展開させるイメージって、そもそもそんなことすることなんて、普通は無いつての」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

それは多分、参考書を読んでおけば理解できる範囲の話だと思うんだけどね。私も大まかな理屈はおぼえてるけど説明はしない。と言つかめんどくさいし。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

断固として断ると言った感じでセシリアさんの申し出を断る一夏。確かに難しいけど、今のうちに覚えた方が楽だと思っただけだな。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

えらく楽しそうに笑うセシリアさん。さすがと言うべきか、笑み

には嫌味にならない上品さが滲み出ていた。あの戦いの後からずくと印象が良くなった気がするんだよなあ……。

それに、篝さんも「あの女は要注意だ」なんてぼやいてるときがあるし。ああなっているときの篝さんには不用意に近づいたらダメです。

「って、いつまで飛んでいたらいいんでしょうか。私はいつまでもいいんですけど」

「そろそろ指示が来ると思いますけど……」

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！」

指示じゃなくて怒号が飛んできました。それも篝さんの。思わず首をすくめてしまうほどの音量だった。くっ、もうちょっと開放オープンチャ通信ネルの音量下げとくべきだった。

『下げてください』

『うん、お願いイヴ』

イヴはイイ子だなあ……。なんて感想を抱きつつ、とりあえず一時停止。山田先生がわたわたしてるぞ、篝さん。

「織斑、オルコット、一之瀬、急下降と完全停止をやって見せろ。

目標は地表から十センチだ」

「了解」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言つが早いか、セシリアさんはすぐに方向転換を済ませると地上へと飛んでいく。瞬く間に小さくなっていくセシリアさんが地表で完全に停止したのを見ると、こちらも下りる準備へと入る。

「それじゃあ一夏、下で待っています」

そう言い残し、私も下へ飛ぶ。スピードはみるみる上がっていき、まるで墜ちていつている様な気分だった。

しかしまあ、そんな感覚にいつまでも浸ってはいられないわけで、地表スレスレのところまで急減速を掛けると、慣性を無理やり抑え込んで完全停止してみせる。

んおおおっ！？ 結構掛かる……！

「……よし。うまく行った」

『誤動作無し。全て規定範囲内です』

「ありがと、イヴ」

直後、私の背後で凄まじい轟音と共に土煙が巻き起こった。

え、なに？ 驚いて後ろに注目すると、そこには巨大なクレーターが出来上がっていた。え、隕石でも落ちてきたの？

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

千冬さんの声で、ようやく事態を把握する。

要するに、一夏が空から急下降して完全停止も急減速も出来ずに地面と接吻したらしい。その証拠に、煙が晴れたところからは白い機体が姿勢制御しながら空中に浮かんできていた。

それから少しの間ゴタゴタがあったけど（主に箒さんとセシリアさんの一夏争奪で）、結局千冬さんの一喝でそれも収まった。さすが鬼教か

「一之瀬」

「すみませんでしたッ！」

バシンッ！ と私の頭に叩きつけられた出席簿が凄まじい音を立てる。叩きつけられた瞬間には既に土下座していました。いや、威圧感が半端じゃない。

っていつか絶対防御が発動しなかった？

『絶対防御の発動よりも早く、生身に攻撃が到達しました』

『……それ、人間として有り得る？』

『普通ならば有り得ません』

うわあい。さすがブリュンヒルデ、そんな限界お構いなしですか。ゾンビじゃあるまいし。

「まあいい。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるよ
うになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始める」

そう言われて横を向いた一夏が、再度右腕を突き出し、左手でがっしりと握り込む。

そうして数秒経つと、右手の平にはしっかりと《雪片式型》が握りられていた。便利だけど、実戦だと命取りだよね……。私ももっと精進しないと。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

そう言われ、一夏はうぐっ、とでも言いたげな表情を見せる。ま

あ、一夏も頑張っているみたいだから、ちょっと不服なんだろう。まあ、ISも根源的には兵器なわけで、安全に扱うためには優しくしてられないんだろうな。

まあ、私は兵器にしたくないんだけど。

『カオリはよくやっています。少なくとも、私を扱う技術はマイスターよりも上でしょう』

『そ、そうなの？』

『マイスターは母ですが、カオリは主です。その違いです』

『は、はあ……』

一応褒めてくれているらしい。まだまだこの子の考えていることはわからないことが一杯だ。

そんなことを考えていたら、既に話はセシリアさんの方に移動していた。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

そう言うと、腕を片と水平になるように上げたあと、ピシッと真横へ。目も眩むような閃光が一瞬だけ放たれ、そこには《スターライトmk?》が現れていた。おお、早業。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏める為に必要な」

「直せ。いいな」

「、……はい」

千冬さんに噛み付かんとも見えたセシリアさんだったが、口を開こうとした途端に千冬さんに睨まれて止まった。うん、その判断は正しいと思う。

けれど、千冬さんの言葉は正しい。特に、殺し殺されるの意味を知っている千冬さんの言葉は、重い。その重さが、私にとっては頼もしく、ありがたかった。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」
「えっ。あ、はっ、はいっ」

なにやら慌てた様子で《スターライトmk?》を^{クローズ}収納し、言われたとおりに近接用武装を展開する。

しかし、《スターライトmk?》のときは対照的に光はただ零れるように収束せず、像すら見えてこない。ああ、やっぱり苦手なのか。

この量子変換は、操縦者自身のイメージによる。射撃特化のブルーティアーズに慣れているセシリアは近接用武装を滅多に使わないせいで、出すのに手間取っているんだろう。

そして、それは一夏にも当て嵌まる。日常で馬鹿でかい刀を手にする事なんてまずない。だから、量子変換で武器を取り出すのに手間取ってしまうんだ。

……でも、私訓練機を使ったとき、結構簡単に収納も展開もこなせたんだよなあ。その辺どうなんだろう。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。 ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

とうとう武器の名を叫び、ようやく近接用のブレードが形となる。セシリアさんは屈辱だと言わんばかりの顔だったけど、個人的に

は武器の名前を言って呼び出すのはカッコいいんだよなあ……。まあ、実戦でそんなことやったら死んじゃうけど。

『そもそも、カオリの腕ならイメージだけで量子の固着化は可能で
す』

『あ、ありがとうイヴ』

『……………？ どういたしまして』

なぜ礼を言われたのか分からないと言った様子だったけど、イヴはそう言った。

それが思いのほか可愛くて、思わず頬が緩んだのが誰にも見られていなくて良かったと思う。

「……………何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑、一之瀬との対戦で、二対一とは言え初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……………」

「ま、まあまあ織斑先生！ セシリアさんも人間ですし、まだ若いんですから、それはこれから直していけばいいじゃないですか！
ね、セシリアさん？」

あんまりにセシリアさんが縮こまってしまっていたので、思わず
そう声をあげてしまった。

意外そうにこちらを見たセシリアさんと千冬さんに見つめられ、
こっちこそ息が詰まりそうになる。いや、セシリアさんはまだしも、
千冬さんまでそのリアクションって……………。

「……まあいいだろう。一之瀬の言うことも一理ある。が、近接武器の展開ぐらい即座に出来るようにしておけ。それと、射撃武器を展開するときの癖も直しておくこと。いいな？」

「は、はい！」

「一之瀬、次はお前だ。近接用武装を展開してみる」

「はい」

とうとう私の番が回ってくる。いい練習だと思ってやらせてもらおう。

頭の中で即座にイラストを引つ張り出してくる。試運転をしているときに何度か呼び出し^{コール}しているから頭の中に図案は入っている。

思い描くのは、一振りの刀。自分の背丈と同じほどの長さ、薄く鋭く、そして堅牢にしてすべてが黒に染められたもの。鍔は片翼を模し、柄は日本刀と同じ物。

考えた直後、左手の中にはそれが納まっていた。

近距離武装、《夜鷹》。梟に搭載された武器の一つだ。

「〇・八秒、まあまあだな。次は」

千冬さんがそこまで言った所でチャイムが鳴り響く。どうやら、今日の授業はこれで終わりらしい。

「時間だな、今日はここまでだ。織斑、グラウンドは片付けておけよ」

やれやれと言った様子で言う千冬さん。あ、あのクレーターを一人でやるんですか……。

ちよっと可哀想だとは思いつけど、ごめん。私は少しでも長くイヴと会話してみたいんだ。

後で埋め合わせしようかと考えつつ、今日の授業は終わりを告げ

た。とりあえず、変な挙動しなくてよかったあ……。

第6話 『あの子』（後書き）

大事なお知らせ。これでストックが尽きました。

以降は月村の魔女>ネギま>ISの優先順位で更新していく予定です。

ですが、一応不定期更新ですのでのんびりとお待ちいただければ幸いです。

それでは。

第7話 幼馴染と言う存在

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」
「おめでと〜！」

現在時刻、夕食後の自由時間。ここからお休みまでは大分時間があるため、大体皆ここで好き勝手に行動しては怒られるものが出てくる。尤も、最近はそんなバカもいなくなってきた、ある意味つまらないと以前千冬さんが言っていたけど。

「……………」

この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の主賓である一夏は、文字通り固まっていた。

いや、時々溜め息をつくから完全に沈黙してはいないようだけど、こうなった原因の一人としては、ちょっと心苦しい気がしないでもないかな。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

相槌の人、さっきから同じ答えしか返してない気がするんですが。

「カオリ、大丈夫ですか？」

「え、なにが？」

「心拍数の増大が確認されます。若干緊張状態にあるかと」

そう言ったイヴの言葉には、AIのはずなのに奇妙な温かみがあった。

確かに、今私は結構緊張していたりする。だって、これだけ多くの同年代の女性との触れ合いは早々ないから。

教室では一応距離感が保てていたからいいけど、今日はなんだか皆が近い。女の子特有のフワツとしたい匂いが鼻腔を突いて、くらくらしそうだ。

『うん、大丈夫。多分ね。体調悪かったら戻って休むから、心配しないです。』

『そうですか。わかりました』

そう言ってまた黙り込むイヴ。

うん、でも出会って時間は経ってないけど、イヴと私の相性は悪くないと思う。機体も割りと思うように動くし、飛ぶ時だって、イヴの補助があっただけど、ちゃんと飛べる。

だけど、いつかは。私の力だけで、イヴを空に行かせてあげたい。そう願っている。

チビチビとジュースとお菓子（夜食してもあんまり太らない体質だけど、昔からお姉ちゃんに肌が荒れるからやめなさいと言われてきたから、あんまり食べない）をつまみつつ時間が流れるのを待っている。

「それじゃあ、香織ちゃんも何かコメントくれない？」

「はいっ!?!」

くっ、まさか私にまでコメントが振られるとは思わなんだ。恐るべし、なんとか先輩。

「って、どんなコメントすれば……」

「とりあえず、なんでクラス代表辞退したのかだけ教えてくれないかな？ セシリアちゃんが辞退したときには、まだチャンスはあったでしょ？」

「あ、ああ、そのときはあまり体調が良くありませんでしたし、話題性を考えると専用機持ちで且つ男性である一夏に譲った方が、何かとうまく行くかと思ひまして」

「おお、つてことはクラスのことを考えての行動だったんだね！ いい子じゃない！」

いえ、そういうつもりは全くございませんのですが。そんな私の言葉は多分届いてないだろう。

で、その後はなんか私と一夏、セシリアの三人で手を重ね合わせた状態でスリーショットを撮られた。正確にはシャッター押すまでの数瞬でかなりの生徒が乱入したけど。

「で、のほほんさん、どうして私に抱きついてるんですか？」

「かおりんが一番好きだからだよ？」

「あ、はあ……」

なんだかとも素直な言葉に、ちょっとたじつとしてしまった。いや、好きって言葉がライクの方だって分かってても、ぐらって来ますよ。のほほんさん、美人さんだもの。

「そろそろ夜も遅くなってきましたし、私はこの辺で引っ込みますね」

「えー？ もう少しいなよー」

「夜更かしは美肌の大敵ですよ。それと、主賓が随分お疲れのようですから」

九時半を回ったところで、そろそろ助け舟を出そうかとそう言葉

を掛けてみる。

一夏は目に見えてぐったりしているが、それに気づいているのは誰もいない。皆、夜のテンションで通してるから疲れ知らずなんだろっ。

だがしかし、そうやって油断しているとお肌は荒れ放題になるのです。なので私は引っ込みます。いつかあった時に「あああああああ！ か、香織のお肌があああああ！」なんてことにならないように。

あの時はマジで困った。夜更かしせず、お肌をきちんと守ると言うことで開放してもらえたけど、そうじゃなかったら一日中引っ付かれたかもしれない。まあ、弟可愛さみたいなもんなんだろうけどさ。もうアレはごめんだ。

で、私の言葉に反応した十数名は、乾いた笑いを発しながら自室へと引っ込んでいった。お肌は大切だもんげ。

「一夏、大丈夫ですか？」

「うお、おう。なんとかな」

「あまり無理はしないでくださいね、明日に響きますよ」

「おう、ありがとな」

「いえいえ。篝さん、頑張って」

「へ！？ あ、ああ！」

「セシリアさんも、ですかね？」

「え？」

最後に我が友人達へと別々にエールを送り、ついでにセシリアさんの頭をぽんぽんとあやすように撫でてみた。あ、髪の毛サラサラだ。特に行動に理由はないけど、なんだか恋する乙女って可愛いなあと思っただけで。

とりあえず、その場で自分が何をしたのかに気づき、思わず顔を真っ赤にする。

「あ、ご、ごめんなさい！ つい！」
「え？ あ、いえ、大丈夫ですわよ？」
「すいません、ほんとにすいません！ それじゃあ、今日はこの辺で！」

何度か平謝りして、そそくさと自室へ戻る私。うわあ、なに自爆してんだ。っていうかなにやってんだ。

セシリアさんはなんとも思ってたみたいだけど、女性の頭を軽々しく撫でるなんて……！

ボタン、と音高く自室のドアを閉めると、ベッドに腰掛けて一息つく。のほほんさんはまだパーティーで弾けるらしい。若いって凄いなあ。いや、私もそうなんだけどさ。

「…………お風呂入る」

着替えを持って脱衣所へ入ると、梟だけを肌身につけてシャワー室へ入る。

梟は防水加工も完璧だから、この程度では壊れるなんて事はない。というか大体のISはそうだろうけど。

宇宙空間での使用が念頭において作られているはずのISが水に浸かった程度で壊れるようじゃ、とても使えた物じゃない。

『疲れましたか、カオリ？』

「うん、少しね」

シャワーを浴びながら、『僕』はそう答える。

ふう…………、さすが女子のパワー、ちよっとやさつとじゃ終わりそくに無いなあ。

とりあえずシャワーを手早く浴びて寝巻きに着替え、梟を首にか

けて部屋に戻る。このシャワー生活も慣れたものだ。
ん、でもちよっとはお風呂に入ったりとかもしたかったり。

「まあ、贅沢は言えないよねー」

ねー。……うわ、寂しい。

のほほんさんはまだパーティーだし……、寝ようかな。

「よし、寝よう。寝よ寝よ」

……べ、別に寂しいわけじゃないんだからね！

……ぐすん。

朝。

もはや恒例となった五時半に起床し、歯磨きしてシャワーを浴びて、女装して準備完了した『私』は、のほほんさんと一緒に教室へ。
……えー、と、ですね。何ですかこの騒々しさ。なんでこんなに皆テンション高いの？

「あの、篝さん？ これ何があつたんですか？」

「ん、香織か。いや、クラス対抗戦のために、一夏に発破を掛けていたところだ」

「あんまりプレッシャーを掛けてもしょうがありませんよ。過ぎた

るは猶及ばざるが如し、です」
『やりすぎることは、足りないことと同じように良くないという』
とですな』

さらりとフォローするイヴ、グッジョブ。

こっちは防御が紙だけどあんまり狙われず、一夏はかなりガードが固い分ガンガン攻撃される。どちらにしても面倒なことこの上ない。

「そ、そう言えば香織！ 今日転入生が来るらしいぞ！？」

「露骨な方向転換ありがとう、一夏。けど、この時期に転入？ 時期遅れの入学じゃなくて？」

「ああ。しかも、中国の代表候補生らしいぜ」

それはそれは……、一夏危うし？

クラス代表なんて、ちょっと小細工すればいくらでも変えられるし、代表候補生だったら尚更だ。

もし一夏とその代表が当たれば、多分今のままなら一夏は負ける。

「まーでも、今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ！」

クラスの女子が、一夏を励ますようにそう言う。

と、その直後。

「その情報、古いよ」

クラスの入り口から聞こえてくる声に、思わず顔をそちらへ向ける。

小さな体躯、ツインテールの髪。とても昔に、出会ったこの会

った子が、そこにいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で
きないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわ
け」

「ふー、ちゃん？」

ポツリと、私の呟いた言葉で鳳鈴音と名乗った少女が目を見開く。
ギョロ、とこちらに視線を向けると、ポカンと口を開けてふるふる
と震え始めた。

「か、かお、り……？」

「ふーちゃん、ふーちゃんなの！？ ど、どうしてふーちゃんがこ
こに……？」

「ちょ、それはこっちの台詞よ！？ あんた、おと」

続く言葉は、しかし続かなかった。痛烈な打撃音によって遮られ
たから。

少女がずいっと後ろを向き、そしてそれ以上の勢いで仰け反る。

「入り口でギヤーギヤー騒ぐな。もうSHRの時間だ、教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません……」

若干イイ笑顔を浮かべながら言った千冬さんに、猛烈にビビリな
がら言う鳳鈴音、もといふーちゃん。

なんだかゴタゴタがあったけれど、ふーちゃんはあつという間に

二組に戻り、私はその日の午前中を悶々とした様子で過ごすことになった。

「……ふー、ちゃん」

ふーちゃん、凰鈴音は、私の幼馴染だ。

なんでふーちゃんかって言うと、小さいときに凰の字を風と間違えてふうちゃんって呼んだからなんだけど。

小学校のときにたまたま一緒に遊んでいて、それが縁で仲良くなった。

中二の時にふーちゃんが中国に引越してしまっただけからは、疎遠になっていただけ……。まさかふーちゃんが転校生だなんて。

……いや、待て。今目下の問題はそこじゃない。

『凰鈴音が、カオリのことを男だと知っている、ということですね』
『うん……。どうしよう……。』

『抹殺しますか？』

『その物騒な考えをしまつて。とりあえず、お昼休みに事情を説明して、黙っててもらうしかないかな……。休み時間だと短すぎるから』

まさか、こんなところから私が崩される危険性が出てくるなんて

……。

……でも、ふーちゃんに会えたのは、嬉しかったかな。

第7話 幼馴染と言う存在（後書き）

はい、鈴音登場です。

早く代表戦まで行きたい……。しかし、急いではことを仕損じるのだ。
それでは。

第8話 一段落？

「で」

「……はう」

「なんであんたがここにいるの？ 香織」

「……それは、その」

「女子の制服着て、一人称を『私』に変えて」

「えう……」

時間は流れてお昼休み。

食堂の端っこに陣取った『私』とふーちゃんは、とつても重たい雰囲気周囲に撒き散らしていた。周りの人たち、すいません。頑張って食事してね。

で、物凄く怒っているようなふーちゃん。何か赤い鬨気のようなものが立ち昇っているのは気のせいでしょうか。

「……ねえ、香織。怒ってるわけじゃないの、本当に何があったの？」

「えっと……、初めからだと随分前になるんだけど……」

「いいわよ、全部話して。ご飯食べながらでいいから」

ゆっくりと、まるで赤ん坊に聞かせるように柔らかい声で言ってきたふーちゃんに何とかそう答えると、ふーちゃんはこくりと頷いて、喋るように促してきた。

怒って、ないのかなあ……。

「中学卒業前なんだけど、家の前に篠ノ之東ちゃんが倒れてて、ご飯を作ってあげたお返しに、ISに触らせてもらったら動いちゃって……。それで、自分のみを守るくらい強くなるうと思っ

「ここ」

「ががつと端折った中に大分突っ込みたいところがあったけど、この際それはスルーするわ。とりあえず」

スツと立ってこちらへやってきたふーちゃんを見て、思わず腰が引けてしまう。

そんな私に構うことなく、ふーちゃんは私の目の前までやってくと、私の頭へと自然に手を伸ばし、くしゃっと撫で回した。

「ただいま、香織」

「あ……、うん、お帰り。ふーちゃん」

一年ぶりの再会は、意外と涙腺を緩めてくれやがるらしいことだけは、判明した。

「落ち着いた？」

「うん……。ごめんなさい、泣いちゃって」

「くっ、違和感あるわね……。もっと男らしくなっているかと思っただけど」

「ちょ、ふーちゃん！？ そっいうことは……！！」

「あ、ごめんごめん。オフレコだったわよね」

しっかりと再会したことを確認し、涙を零しながらも現状を伝えた私に、ふーちゃんは前と全く変わらない笑みを向けてくれる。

まあ、イヴのことまでは話せないんだけど……。それでも、こうして私を『僕』として扱ってくれるのは凄く嬉しいのだ。

「にしても、そこまでしてIS学園にねえ……。声が聞こえたってのも、なんだかあんたらしいわよね」

「ほ、ほんとに聞こえたの！」

「ふふっ、はいはい。あなたならほんとにそうなのかもね。それにしても、一年でまた一段と、綺麗になっ」

……へへん、私だって綺麗になりたくてなったわけじゃないよ。もう諦めてるから美容も大切にしてるけどさあ……。

「それで、アンタはいま何処に住んでるの？ まさか……、寮？」

「うん。のほほんさん、って分からないか。うちのクラスの袖ぶらぶらさせてる子と相部屋」

「……へー、ふーん。そう。決めたわ」

「え？」

「その子と、部屋変わってもらっ」

「え、ええっ!？」

うわあ、凄いこと言い出したよふーちゃんが！

「その方がアンタも安心でしょ？」

「そ、それはそうだけど……。でも、他の人に迷惑だから」

「……はあ。わかったわ、アンタがそういうならやめとく。けど、時々遊びに来なさいよ」

「う、うん。それはもちろん」

あれ、なんだか簡単に引き下がったなあ……。いや、食い下がらねたらそれはそれで厳しいんだけど。

「それじゃあ、私は一夏の方に顔出すから、この辺で。ボロ出すんじゃないわよ？」

「ふーちゃんの方こそ、私のこと言わないでね」

「はいはい。それじゃ」

「うん、バイバイ」

軽く手を振り、駆けていくふーちゃんを見送る。……なんだか、小動物チックで可愛いな、なんて思ったのは内緒だ。言ったら多分ぶん殴られるだろう。

その日の夜、私は一人ベッドに沈んでいた。

今日は、色々起こり過ぎている。幼馴染が二人揃ってIS学園に入学していることが、そもそもおかしいのだが。

一人目の幼馴染はまあわかっていたからいい。そもそも、その幼馴染に会うためにわざわざこの日本にまで戻ってきたのだから。

しかし、休日にも会えたらいいな、程度に思っていた二人目の幼馴染まで学園にいることには驚いた。

確かに昔から少女然としていたし、自分よりも数段可愛かったことも理解できる。だが、男だ。男なのだ。ということはつまり、二人目のISが使える男ということになる。

それを公表していないのは、一重に彼に後盾がないせいだ。

いかに世界を自分に合わせた天才とブリュンヒルデがバックにいても、所詮は個人。国一つが腰を上げればとても平穏な生活など送れないだろう。

「……守りたいな」

ポツリと、願望が口から零れる。

香織の周りは敵だらけだ。だからこそ、この身で何かができるかもしれない。

「にしても、なーんであんなに可愛くなってるのよ！」

相変わらずの可愛らしさに、私はさすがに頭を抱えなくなる。なぜ女子の自分より男子のあいつの方が可愛いのか、ちょっと神様とやらをぶん殴ってみたくなってしまう。

しかも、勘の鋭い年頃の少女達を悉く欺いて既に一月以上が経過しているはずだ。……まさか、実は女の子でした、なんて展開はないわよね？

そう思いをめぐらせていると、突然ドアがノックされた。食事に行っていた同室の人がもう帰ってきたのだろうか。

「えっと、ふーちゃん。いますか？」

「香織？ まって、今開けるわ」

直ぐにベッドから降りると、扉の鍵を開けて中へ招き入れる。

香織はTシャツ姿のラフな格好だったが、一応ブラジャーはつけているらしい。だって胸があるもの。……詰め物、よね？

それと、香織のほかにもう一人。あ、この人がのほほんさんね。

「えへへ、早速来てしまいました」

「お邪魔します」

「……あーもう、ほんとに負けた気がする」

にこにここと笑って頬をポリポリと搔く香織を見て、思わずそうばやく。ほんと、反則級に可愛いんだけどこの子。

「初めまして、凰鈴音よ。あなたがのほほんさん？」

「うん、布仏本音です。よろしくねえ、鈴ちゃん」
「え、ええ、よろしく」

この黄色い電気ネズミチックな服を着ている人がのほほんさん……。なんとというか、香織も心休まる人と相部屋になったのね。ところで、その耳や尻尾が言葉に合わせてひよこひよこ動いているのはなぜなのかしら。本物じゃないわよね？

「何か飲む？ ポリと爽健 茶があるけど」

「じゃあ、爽健 茶で」

「のほほんさんは？」

「私も同じでいいよあ」

「じゃ、ちよつと待ってて」

冷蔵庫から爽健 茶のボトルを取り出すと、三人分のプラスチックのコップに注いでいく。

ベッドに零さないように机の上に自分のコップを置くと、香織とのほほんさんにコップを渡した。何故か知らないけど、のほほんさんはさん付けしなきゃいけない気がするのよね。尊敬とかじゃないんだけど。

「なんだか、他の人の部屋って新鮮だあー」

「なーんか力が抜けるわね……」

「まあ、のほほんさんだから……」

その一言で片付いてしまうのは、どうなんだろうっか。

「そう言えばふーちゃん、対抗戦に出るんだよね？」

「ええ、そうよ。一夏が代表だし、やる気も出るってもんよ」

「アハハ……。あんまりやりすぎないでね？」

苦笑いしながら言わないでくれると嬉しいんだけどなあ。

ともかく、こうして私の久しぶりの幼馴染との談笑は、友人を一人増やして続いたのだった。

翌日の放課後、『私』は自己練習のためにアリーナへと足を運んでいた。

『調整完了です、カオリ』

「ん、ありがとう。管制システム、クレー射出！」

言った直後、上空へ右から左へと射出される黒色のクレーに狙いを定めて、『夜雀』の引き金を引く。本来なら弾幕を晴れるこれも今は単発射撃に変更しているから大きなハンドガンと大差ない。

設定した数は五〇個。そのうちの四二個を撃ち落した私は、軽く息を吐き出した。

やっぱり、射撃武器の精度はまだまだ甘い。四九、四八くらいまでは詰めたかったんだけど、やはり個人の技術では今はこれが限界か。

「管制システム、ターゲットを」

私の言葉に反応し、かなり遠い距離に人型のターゲットが三つ出

現する。

それをズーム機能を使わずに射撃し、撃った場所をズームして確認する。……中心から数ミリから一センチ強ずれてる。高機動戦じやまだまだ使い物にならないかな。

「精が出ますわね、香織さん」

「あ、セシリアさん。どうしてここに？」

「いえ、帰り際に丁度アリーナで訓練しているのを見かけまして。はい、スポーツドリンク」

「あ、ありがとうございます」

鼻をネックレスに戻すと、近くまで歩いてきたセシリアさんからペットボトルを受け取って一口煽る。汗をかいた体に、冷えたスポーツドリンクが染み渡るようだった。

「それにしても、中々の腕ですわね。クレー射撃の方はズームは？」

「いえ、ズームせずにです。逆に反応が遅れますから。それに、ほぼ五分の一を撃ち漏らしてますから、あまりいい成果とは……」

「それでもですわ」

「あ、そう言えば、一夏はどうしたんですか？」

「一夏さんなら、今頃篤さんにしごかれていますわ。今日は篤さんの日ですから」

「へえー」

つまり、代わる代わる一夏に稽古をつけていると。一夏も大変だなあ。頑張れ男の子。私は傍観しておく。

「あ、そうですね。香織さん、回避訓練をなさってみる気はございませんこと？」

「回避訓練、ですか？」

「ええ。私のブルー・ティアーズのエネルギー弾を、一〇分間ひたすら避け続けること。一発でも被弾すれば即やり直しと言っのはど
うでしょう？」

……つまり、全方位からの無差別攻撃を完全に回避する特訓が。
有用かどうかは別として、機動性は確実に上がるかも。

「分かりました。それじゃあ、それが終わったら、次はセシリアさ
んの接近戦用武装の展開練習ですね！」

「うっ！？ ま、まあ確かにそれも、必要と言えば必要ですわね…
…」

接近されたときに咄嗟にガードできれば、それだけでも有用です
し……、なんてボヤキながら、一瞬で青い装甲に身を包むセシリア
さん。

「それじゃあ、行きますわよ」

「はい！」

次の瞬間、私の周囲を囲む四機のビットから青い光が吐き出され
た。

第8話 一段落？（後書き）

次回辺りで対抗戦かも。

セシリアとの絡みはなんとなくです。セシリアさんちよろ可愛い。

第9話 戦う刻

クラス対抗戦。クラス内で決められたクラス代表同士が戦い、その腕を競う。

その戦いが、今始まるうとしていた。

第二アリーナにて始まるうとしているその戦いは、一年二組と一年一組の代表候補生、つまりふーちゃんと一夏の戦いである。

……どっちを応援すればいいかわからないので、とりあえず両方応援することにした。

ちなみに、私はアリーナの観客席にいる。丁度入り口付近だ。

『イヴ、どっちが勝つと思う？』

『スペックだけを見れば白式でしょう。ただ、凰鈴音シエンロンと甲龍コウリウの相性次第ではわかりません』

『そっか……』

イヴとそんなことを話しつつ、アリーナの中を見つめる。

その直後、試合開始の合図と共に甲龍が飛び出した。

刃を振るい白式の《雪片型式》を跳ね上げるが、即座に三次元躍動ツド・ターン旋回で甲龍を正面に捉えた白式を見据えて姿勢を正す。

「まだぎこちないけど、巧いね」

呟きは周囲の熱気によって掻き消される。

一拍を置いて再度攻勢に出た甲龍の攻撃は、まさに猛攻。自由自在に両の手で繰る刃が四方八方から繰り出されるのを、白式は悉く受け流す。この辺りは篤さんとの訓練の賜物なんだろうか。

幾度となく剣戟が振るわれこのままでは千日手かと思われた瞬間、甲龍の肩付近に浮遊する非固定浮遊部位アンロック・ユニットの装甲がスライドし、中心

に存在する球体が発光する。その直後、白式は何かに殴り飛ばされたように吹き飛ばされた。

「何が……?」

『衝撃砲でしょう。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ちだす武装です』

『なるほど……。つまり、見えない大砲ってことだね』

『はい。しかも、角度の制限がほぼありません。真後ろまで視野があつたとしても、人間の腕は二本、真後ろに攻撃は届きません。そう言つた点でかなり強力な武装です』

バカスカと撃ちだされる不可視の弾丸を器用にも避け続ける白式を眺めつつ、イヴの解説を聞く。

しかし、一夏もよく避けるなあ……。辛うじて空間の歪みが見えるけど、これはなんとも。

そんなことを考えていると、両者が距離を離す。それとともに二人の間に流れる空気が変わった。白式の姿勢が加速体勢へと変わったのと、甲龍がその手に携えた刃を構え直したのは同時。

一瞬の静寂の後、一気に加速した白式の刃が甲龍へと届きそうになり。そして、けたたましい轟音と共に凄まじい衝撃がアリーナ全体を襲つた。

「なにっ!?!」

『探知を掛けます』

すぐさまイヴが鼻を通してネットワークにアクセスし、何が起きているのかを調べ始める。

数秒後、イヴは直ぐにこちらへと戻ってきた。

『ネットワークへのアクセスがブロックされています。分かつた範

囲では、遮断シールドがレベル4に設定され、全ての扉がロックされているようです』

『ここから出ることは!?!?』

『正規の方法では不可能です。ハッキングも危険性が高く、余り推奨できません。それと、アリーナの中心に熱源反応を確認しました。ISのようですが、所属は不明』

所属不明のISに、遮断された扉……。状況から見て、そのISがハッキングしておかしくしたと見て間違いないか。

なんてことを考えているうちに、全身装甲フル・スキンのISらしき影と二人の攻防が始まっていた。

全身装甲なんて、いや確かに精神的にはそっちの方が楽だろうし、それなら顔も見えないだろうけど……。一体何のつもりで……。?

思っただけでも、何も行動は出来ない。私には遮断シールドを解除する術はないし、扉も開かない。ハッキングはさすがにまずい。:

…結局、人頼みか。

最悪だ。

介入してきた謎の全身装甲フル・スキンと二人の戦闘が始まってから既に一分。

私は、貧乏ゆすりしつつも三人をじっと見続けていた。

「…………イヴ」

『なんでしょう』

「このシールド、破る武装は」

『あります。《啄木鳥きつこ》を使用すれば、破壊できる可能性は十二分に』

その言葉を聞き、私は無言でISを起動させる。これ以上、職員
の到着を待ってられない。

私が行っても何も出来ないかもしれない。ただ殺されるだけかも
しれない。だけど、これ以上二人が傷つくところなんて見ていら
れなかった。

確かに、一夏はだんだんと強くなってきているし、ふーちゃんも
強い。それでも、私にだって何か出来ることはあるはずだ。

「かおりん」

「っ、のほほんさん……」

いつの間にか、のほほんさんが隣に立っていた。他の生徒達は入
り口周辺でドアが開くのを待っているのに。

「行くつもりなの？」

「……はい」

「待っていれば、先生達が收拾してくれる。それでも？」

「待っているだけで解決することは、本当に一握りです。私は、自
分に嘘をつきたくない」

「死ぬかもしれないよ？」

普段と全く違う鋭く切りつけるような言葉に、私は思わず足を竦
ませる。

顔は見えていないが、声に感情が見えない。それが、どこか空恐
ろしく感じる。

「……死ぬつもりはないよ」
「……ん」

途端に、のほほんさんの雰囲気に戻る。詰まりそうだった息が途端に喉から流れ出した。

「じゃあ、行ってらっしゃい」
「え？」

「死ぬつもりはないんだよね。だつたらいいよ」

普段と同じ雰囲気、それでもはつきりとした口調で、のほほんさんが言う。

パシッ、と可愛らしいその小さな手で鼻の装甲を軽く叩き、そつと微笑む。

「頑張つて」
「うん！」

大きく頷き、《啄木鳥》を展開。左手の下に巨大な杭打ち機バイルパンカーが形成される。杭から火薬の入っているシリンダーから、すべてが黒塗りだ。

既に周囲のざわめきは相当のものになっている。早くしないと。シールドの前で《啄木鳥》を構え、思い切り前へ突き出すと同時に一撃目を打ち出す。ガギンツッ！と言う音が鳴り響くも、シールドにはひびが入っただけだった。

「よし、いけるー！」

ガギンツッ、ガギツッ、バリンツッ！

総計四本目の杭によってシールドが破られ、そこにIS一機分程度は通れる穴が開く。

「行ってきます！」

「うん、行ってらっしゃい」

最後に一度だけのほんさんの方を見て、それから勢いよく穴の開いたシールドを通り抜ける。

直ぐに《夜雀》^{よじやく}を呼び出した^{コール}。マガジンに入る弾丸は五〇発、量子化しているマガジンは後五本。弾丸は日本の打鉄で使われているハンドガンのもと同じだから弾丸は確保できるけど、現状ではやや心もとない。

「イヴ、弾丸をホローポイントへ」

「了解」

マガジン内の弾丸がフルメタルジャケット弾からホローポイント弾へと変更される。攻撃性の高さを第一に選んで、三種類ある弾丸のうちこれを選んだ。ちなみに残りの一つは信号弾ね。束ちゃんの趣味だつて。

《夜雀》をフルオートへと変更し、即座に全身装甲へと照準を合わせて引き金を引く。

「ふーちゃん、一夏！ 無事！？」

「香織！？ あんた何してるの！？」

「説明はあと！ 怪我してない？」

「だ、大丈夫よ。一夏もね！」

「おう！」

ひたすら銃撃を行い、こちらへの行動を封じていく。ダメージは

入らなくても、それなりの足止めにはなる！

ガンガンと音高く全身装甲へと弾丸が当たっていき、だんだんと粉塵で視界が遮られ始めていく。

『香織、あいつ多分無人だ！』

『えっ！？』

『つまり、容赦しないでいいってこと！』

『イヴ、対象の生体反応は！？』

最後だけはイヴにだけ言う。返答は、No life。生体反応なし。

「香織っ！」

どちらが叫んだのか、気づくと私の真横から太いビームが私を狙っていた。

咄嗟に《夜羽》を展開し、なんとかそのビームを防ぐ。けど、これじゃあそう何度も防いでいられないか……。

『凄い、シールドをぶち破るほどのビームを！？』

『二人とも、残りのシールドエネルギーは！？』

『私は一八〇よ。一夏、あんたは？』

『八三だぜ』

『……一夏、策は？』

念のために聞いておく。

まずいな、マガジンがもう三本持っていかれた。もう半分しか残っていない……。

『鈴の《龍砲》を思いっきり撃ってもらって、それをエネルギーに

『イグニッション・ブースト
して『瞬時加速』で一気に接近して、零落白夜で落とす!』

『……それじゃだめ。外れたときのリスクが大きすぎる。それに、
万が一避けられたら落とされる』

『けど、これ以外に方法はっ!』

『ふーちゃん、攪乱用の龍砲、後何発撃てそう?』

『頑張っても一〇発が限度ね。どうするつもり?』

『……よし、私の銃弾が切れるのを合図に、ひたすらアイツの両腕
を狙って龍砲を撃って。動きが止まっているときに私が近づいて斬
りつけるから、一夏は後ろに回りこんでそこから零落白夜で斬って
!』

つまり、ふーちゃんの援護射撃と共に私と一夏で挟撃する。少な
くとも全員回避するだけのエネルギーは残せるし、そもそも様子を
見られるほどのエネルギーは残されていない。

マガジンは残り二本。

『……わかった、それでいこう。ダメでもともとだ!』

『無理しちゃダメよ! 二人とも、ヤバイと思ったたら引くこと!』

『了解!』

全員が全員の目を見て頷く。

直後、弾丸が切れる。

「一夏あっ!」

キイー……ン、という音と共に、その声が飛び込んできた
のとは同時だった。

「箒さん!?!」

『敵IS、篠ノ之箒をロック確認! 射撃体勢に入ります!』

「男なら……男なら、そのぐらいの敵に勝てなくてなんとする！」

イヴの声が聞こえる。全身装甲は、腕を篝さんの方へと向けた。先ほどまで私が乱射していた弾丸の残した粉塵のせいで、隣の二人にはその姿が見えていない。

キュイン、と全身装甲の腕にエネルギーが溜められ、撃ち出される。だめだ、エネルギーのチャージが速過ぎる！？

「っんのおっ！」

未完成な瞬間加速を発動させ、一瞬で敵ISの射線上へ。未完成だったからなのか、全身に恐ろしい激痛が走るが、そんなことは無視だ。

《夜羽》を展開、自分を覆うようにして相手の射撃を防ぐ。激痛のせいで一瞬意識が飛ぶかと思ったが、割と何とかなった。が、射撃が止まない！？

『ふ、うちゃん！ やって！』

『くっ、それを止めるってのよッ！ 一夏、行って！』

意識が朦朧とする中、必死で個人間秘匿通信プライベートチャネルでふーちゃんへと言葉を伝える。

直後、独特の発射音と共に射線が大きく揺らいだ。どうやら衝撃砲が命中したらしい。

「うおおおおっ！」

粉塵の影で、黄金ともつかない単一技能の色ワンオフ・アビリティに包まれた白式が突っ込んでいく。

金属同士がぶつかり合った音とはとても思えないほど流麗な音を

立て、全身装甲の右腕が斬り飛ばされる。私の方に両腕を向けていたからか、反撃はない。

その直後、四機の蒼いビットから放たれたビームが敵ISを貫き、全身装甲が地面へと落ちていく。これは……!?

『お待たせしましたわ。大丈夫ですか、皆さん!』

『セシリア、さん……!』

『タイミングばっちりだぜ。さすがセシリアだ』

『あ、当たり前ですわ! 私はイギリス代表候補生なんですから!』

わあ、可愛い照れ隠しだ。なんて思っていたら、視界の端に見えた。

残った左腕が、自分の右腕を斬り飛ばした一夏へと照準を合わせているのを。

「まずっ …!」

『カオリ!? 危険です! カオリッ!』

軋みに軋む体に鞭打ち、危険だと声を上げるイヴすらも無視して、再度瞬時加速を使用する。

全身が、バラバラになりそうだ。頭が痛い。

「んぎっ、ああああああああ!」

「香織、無茶しちゃ …!」

一瞬だけふーちゃんの声が聞こえた。

ガッソッ! という例えようもない恐ろしいほどの衝撃と共に、防御のために再度広げた《夜羽》をビームの衝撃が襲う。

足が、腕が、千切れそうなほどに痛む。涙が出る。止まらない。ぐらぐらと、目の前が揺らいでいく。けど。

一夏がもう一度動き、斬り崩すまで。この守備は破られてはいけない。

「香織ッ！？ テメエエエエッ！」

「その手を、除けるオ！」

その言葉と共に、刃を振り下ろす一夏とふーちゃん。
ふっ、とビームが途切れ、私は意識を闇へと沈

「……………篠ノ之さん」

既に夕暮れが近くなった廊下で、布のほとけ仏ほんね本音は声をあげた。
その目には憎悪とも取れる感情すら灯っており、身長差を感じさせないその威圧感に、篠ノ之ししのほの箒ほうじは思わずたじろいだ。

「なぜ、あの場であのようなことをしたんですか」

「布ふ仏……………？ 一体、何を」

「昼間の騒動のとき、なぜわざわざ自分の身を危険に晒したのですか。あの瞬間、あなたは何も出来なかった。なのにあんなことをしたせいで、香織は全身がズタズタに壊されたっ！」

「っ！？ そ、そんなに酷いのか……………！？」

まるで親の敵を見るような目をして叫んだ本音がつめより、ぐい

つと箒の襟首を掴み上げる。

普段と全く違う口調の本音に、箒はどこか薄ら寒い恐怖すら感じていた。

「力がないことを悪いとは言わない。ないことを悔やむことも、悲しむことも、持っている者に対して嫉妬することだって悪いだなんて言えない。だけど、それで誰かの足を引っ張るな！」

「わ、私だって何かしたくて！」

「あなたは、この学園に何をしにきているの？ 力を持つ者はそれ相応の責務を負わなければいけない、そのことを理解している？」

あなたの身勝手な行動で、一人の人間が死に掛けたことを、本当に分かっているの？」

「あ、わ、私、は………！」

「……こないで。しばらく、私の前に姿を見せないで。こんなこと言いたくないけど、あなたを見ていると際限なく敵意が沸いてくるから」

奥歯をぎしりと軋ませて言い放った本音に、箒はとうとう何も言えなくなる。今まで、このおっとりしたクラスメイトが見せたことのない一面を見たことも、それによって突きつけられた事実も、彼女にとっては重すぎた。

箒は、ただ一夏のことを叱咤激励してやりたかっただけだった。それだけの思いで動いたから、この結果を生んだということには気づいていないが。

目を伏せ、箒はそっとその場を離れる。

一人になった本音は、ふと窓の外へと視線を向け、自嘲するように笑みを零した。

「……何やってるんだらうね、私」

それから少し後、ようやく面会が出来るようになった香織の元へやってきたのは、他でもない鳳鈴音^{ファンリンイン}だった。しかし、今一番話をしたい少年は、昏々と眠り続けている。

「香織」

呟く。

だが、それに応えてくれた少年は、いまだ眠ったまま。その事実
に、鈴音は拳を握り締めて涙を流す。

力があれば。自分が、一夏と香織を纏めて守れるほど強ければ、
こんなことにはならなかった。

その後、無事全身装甲を倒した一夏だったが、ダメージが蓄積し
ていた香織は意識を失っていた。

バイタルにも影響が出るレベルでダメージを負っていたため、直
ぐに精密検査を行われた結果、香織の体は無茶な瞬時加速の連続使
用に、耐久度以上の《夜羽》の使用などによって相当なダメージを
被っていたことが判明した。

「筋肉断裂に複雑骨折……。アンタ、これわかってやったの……
？」

患者の怪我の状態を記したデータを見て、鈴音は涙声になりなが
らもそう零す。

悔やんでも、悔やんでも悔やみきれない。もっと別の方法があっ
たかもしれないのに。

『……鳳鈴音。声が聞こえますか？』
「だ、だれ！？」

突然聞こえた声に、鈴音は咄嗟に周囲を見渡す。が、当然だれも

いなかった。

眠っている香織以外には。

『私はイヴ。梟に搭載されている人工知能、AIです』

「梟つて、香織のIS!？ まさか、ほんとに!？」

『はい。梟に個人間秘匿通信プライベートチャネルで繋いでくだされば、こちらから特殊パスを繋ぎます』

「わ、わかったわ」

言外に「表沙汰には出来ないこと」を話すことを語ったイヴは、直ぐに回線を開いた鈴音へ向けて特殊回線を繋いだ。

『改めまして、凰鈴音。あなたには、私の存在を知っておいて貰いたいと思います、こうして話しています』

『どうということ?』

『現実での協力者が少ないのです。現在私の存在を知っているのは、マスターであるカオリとチフユ、そして製作者メイスターのタバネだけです。あなたには、現実でのカオリの支えになると共に、今日のように不測の事態でカオリが墜ちた場合に、カオリが周囲に男だとばれる危険性を少しでも減らす手伝いをして欲しいのです。無論、これ以上カオリを傷つけさせるわけはありませんが』

何処か悔しげな色を浮かべ、イヴはそう語る。

現実で、彼女は無力だった。どれほど言葉を並べても、それが形を成すわけではない。結局、自由に出来るのは電子の世界までだった。

だが、この少女は違う。現実リアリティに肉体を持ち、香織と共にいられる。ならば、協力関係を結んでおくべきだと考えた。

『カオリは、心が徐々に軋み始めています。自分の事を隠して生活

することが、想像以上の負担になっているのでしよう。あなたには、それを和らげてあげて欲しいのです』

『……いいわよ。私が何か出来るなら、何だつてする。あなたも、そうでしょ？』

『当たり前です。カオリは私の主ですから。尽くすのは当然です』

はつきりと、無機質な音声でそう断じたイヴに、鈴音は思わず小さな笑みを零す。

一番つらいのは鈴音ではない、眠っているこの少年なのだから。

「いつまでも、くよくよしてらんないわね。私が、香織を守ってみせる」

決意を口に、鈴音はそつと香織の頬を撫でた。

本当ならば眠り姫に口づけの一つでもしてやるうかと思っただが、自分はそのままでロマンチストではないし、やるのだったらもつといい場所の方が雰囲気があると思いやめたのだ。

ファーストキスは消毒液の味、なんてことはあまり経験したくないものだから。

第9話 戦う刻（後書き）

へへ、シリアスだって。

おかしいな、本当ならのほんさんがこんなにブラックじゃないはずだったのに。

のほんさんは、自分でもどうしてこうなったかわからない。けど、
第の原作でのあの行動はお咎めされてしかるべきだと思います。あれはまずいでしよう、いくらなんでも。

なので、ちよつと大事にしてみました。

あ、感想なんかいただけるとすっごい喜びます。なのはの方も空白期に入ったからか、めっきり感想が減ってちよつとしおしおになつております。よかつたら書いていってくださいませー！。

今回は、香織の姉が登場……？ かも！

第10話 穏やか医務室

「……んっ」

目が覚めた。

いつから眠っていたのか、記憶がない。確か、代表戦に横槍入れて無人の全身装甲と戦って、それで……。

「……そっか、それで倒れたんだ」

ようやく思い出せた。それと同時に、消毒液の臭いがツンと鼻腔を刺激する。……なんだか嫌な気分になった。

ふと、ベッドの左右に重みを感じた。そこにいたのは、ツインテールの少女と茶色の髪をショートカットにした……。

「……あれ、お姉ちゃん!？」

つとと、なんとか声を抑えながら叫ぶ。なんでお姉ちゃんがここにいるんだろうか。もしかして、もう僕のことばれてる？

でも、なんでふーちゃんとお姉ちゃんが一緒にあって寝てるんだろう。ずっと傍にいてくれたのかな……。

「痛っ……!」

ふーちゃんの頭に右手を伸ばそうとした瞬間、右腕を思い切り壊されるような痛みが走る。あまりの激痛に、私はその場で顔を顰めて背を丸めるしかできない。

『目が覚めましたか、カオリ』

『イヴ、ごめん。無茶して』

『構いません、とは言えませぬね。これからは出来る限り無茶は避けてください』

『うん、善処します』

まるで理解しているように思えませんが、とイヴに溜め息交じりに言われながら、あの後自分がどうなって、何日経っているのかを聞いてみる。

『あの戦闘の後、カオリはすぐに緊急処置室へと運び込まれました。チフユの手助けもありカオリが男性だとばれることはありませんでしたが、傷の具合はあまりよくありません。双腕部の筋肉はしばらく動かすどころか触れるだけでも激痛が走るはずです。さらに、超急加速と急停止、そして相手からのエネルギーの余波の影響で内臓器官もひどいダメージを負っていました。梟の機能をフル活用したおかげで内臓器官へのダメージはほとんど回復していますが、それでもしばらくは苦勞することを覚悟してください』

マシンガントークとはまさにこのことか、一気に怪我の状況を解説された。

それによれば、僕の体は割とスタボロになっているらしい。立つて歩く程度なら問題ないが、ISでの戦闘はしばらく無理だそうだ。

『それと、あの戦闘からはすでに三日が経っています』

『えっ、そんなに!?!』

『はい。ただ、三日間寝たきりだったおかげで体力と内臓器官のダメージはほとんど回復しています』

『……でも、なんで梟に回復機能なんて付いてるの?』

『タバネの配慮では?』ともかく、あと一週間もすれば腕の方もまともに動かせるはずです』

一週間……、その間食事はどうしようかな。まさか食べさせてもらって訳にも行かないし。

というか、どうしようかこの両サイドの二人。とりあえず起こすべきかな……。心配掛けちゃったみたいだし。

「えっと、二人とも！ 起きて！」

「……ん、んんっ……？」

「あれ、今何時……」

おほう、寝ぼけていらっしやる。いや、可愛いけど今って何曜日だったけ？ 日の昇り具合から言って普通の時間帯だと思っけど……。二人とも大丈夫なんだろうか。

「お姉ちゃん、ふーちゃん！」

「あ、れ、か、香織！？ 目が覚めたのね！？」

「香織……！ 良かった、良かったよお……！」

……えっと、ちょっとまって。痛い、痛いんですけどふーちゃん！？

あとお姉ちゃん手を持たないでめっちゃ痛いから！ 泣くよ！？ 年甲斐もなくみつともなく、どうしようもなく泣くよ！？

と言いたいのにな、悶絶して体を震わせることしか出来ない。

「……あれ、香織？ 香織！？」

「ふ、ふー、ちゃん、痛い……！」

「あつ、そっか怪我！ 葵義姉さん、怪我！」

「え？ あ、ああ！ ごめんね香織！ 痛かった？！」

痛かったです、物凄く。

「ただ、それ以上に二人が僕を心配してくれていたのが凄く嬉しくて、とりあえず今は笑っておくことにした。」

「それから数分は僕の目が覚めたことを喜ぶ二人をずっと笑っていた。」

「二人とも僕が寝ている間に仲良くなったらしくて、お姉ちゃんを「義姉さん」と呼ぶほどに仲がよく……、あれ？ おかしくない？」

「それで、腕以外にはもうほとんど治ってるのね？」

「うん、そうみたい」

「つたく、無茶するんだから……。のほほんさんに一夏にセシリア、それに千冬さんも心配してたから、お見舞いに来たらちゃんと御礼して謝んなさいよ？」

「わかってるよ。助けに行ったのに、助けられちゃったしなあ……」

「二人の言葉が耳に痛い……。」

「でも、あの無人ISは一体なんだったんだろう。何の目的があるて……。」

「……痛っ」

「ほら、難しい顔してるわよ。アンタは今は休めばいいの。それだけのことをしたんだから」

「お姉ちゃん……」

「ペシッ、と僕の頭を平手で軽く叩いたお姉ちゃんが、二カッと笑ってそう言ってくれる。」

「こういうところは、本当にいいお姉ちゃんなんだよなあ。」

「「そうそう、義姉さんの言う通りよ。まずは体を治して、後はそれから考えましょう」」

「……ねえ、ふーちゃん？ なんでお姉ちゃんのこと義姉さんって

呼んでるのかな」

「え」

ほっほっほ、濁点付きの濁った「えっ」が入りましたぞ。……キ
ヤラおかしいな、疲れてるのかな。

いや、ほんとになんでお姉ちゃんのこと義姉さんって呼んでるん
だろう。別に僕と夫婦だとか恋人だとかってわけじゃないのに。

「ふふふ、鈴ちゃんったらね、お姉ちゃんに」

「わー！ わーわー！ 義姉さん、それは言わないって！？」

「あれ、そうだったかしらー？」

「お願いします勘弁してください！」

「ふーちゃんが敬語！？」

……うん、どうやらふーちゃんの中でお姉ちゃんの脅威度は千冬
さん並になったらしい。ふーちゃんって、千冬さんの前だと敬語に
なるんだよね。

結局、なんでふーちゃんがお姉ちゃんのことを義姉さんと呼んで
いるのかは分からなかった。言おうとする度にお姉ちゃんのことを
ふーちゃんが阻止するからなんだけど。

「ところで、今日って何曜日？」

「月曜日だけど？」

「授業は？」

「公欠を貰って来てるわ。鈴ちゃんもね？」

……もらったのが、公欠。というかそれってもらえるものなの？

「織斑先生が協力してくれたのよ」

「へえー……」

具体的にどう協力してくれたのかは聞かないことにしよう。なんか怖そうだし。

「って、僕の単位は……？」

「アンタも公欠だから、後で補習だって」

「うええ……」

勉強が嫌いって訳じゃないけど、やっぱり補習と聞くと嫌になる。うんざりしていると、突然お姉ちゃんが顔をぐいっと近づけてきた。真顔で。

「……ねえ、香織。大体の事情は鈴ちゃんから聞いたわ。どうして私に秘密にしていたの？」

「えっと、心配掛けたくなかったし……。ちゃんと言おうとは思ってたんだけど、何組かとか知らないし、変に聞いて身元がばれれば大変だし……」

「……そっか。うん、じゃあこれからは存分にお姉ちゃんを頼りなさい！ いい！？」

「あ、うん……。ありがとう……」

嬉しいけど、うん。あんまりお姉ちゃんに負担かけたくないんだよね……。

……あ、ご飯どうしよう。一週間ご飯抜きはさすがに死んじゃうと思うんですが私？

「ま、落ち込むことないわよ！ 補習は合同らしいから、一緒にやりましょう」

「そっなの？」

「……私は一緒じゃないんだけど……」

「お、お姉ちゃん……」

学年違うんだからそりゃあそつだと思つよ。
けど、ふーちゃんと一緒なら少しは気が楽かな……。

「そろそろお昼だし、ご飯貰つてくるわね」

「それじゃあ私は、織斑先生に香織が目を覚ましたことの報告に行つて来るわ。大人しくしてるのよ？」

「さすがにこの状況で動こうとは思えないよ……」

「よろしい。じゃあ行つて来るわね」

そう言つて、ふーちゃんとお姉ちゃんは病室から出て行つた。

ふう……。とりあえず、休もう。色々考えたいし。

『……イヴ』

『はい』

『僕は、弱いね』

『……はい』

『強くないと。もっと、今よりもっと強く』

『……はい。一緒に、進んでいきましょう。私はあなたをサポートするために生み出されたのですから』

まったく、イヴって本当に機械らしくない。それがまたいいんだ
けど。

ぼんやりと考えていると、突然医務室のドアが開く。

ちなみに、今医務室には僕以外の患者はいない。医務室に数日に
渡つてかかりつきりになるような人はそうそう出やしないからだ。

「かおりーん、目が覚めたの？」

「のほほんさん？ ごめんなさい、心配掛けて」

すぐに僕を『私』に切り替え、入って来た少女に対応する。相変わらず袖を伸ばした制服を着ているのほほんさんは、私を見るとあからさまにほっとしたような顔で傍へ寄ってきた。

「今、お昼休み？」

「うん。途中で鈴ちゃんとはすれ違ったよお？　なんだかすごい嬉しそうな顔してた」

「そうですか」

「かおりん」

「はい？」

「ていつ」

短い言葉の応酬の後にやってきたのは、軽い衝撃。

肩から腕にまでは衝撃を伝えないようにゆっくりと、けど少しだけ痛みを感じるように鋭く繰り出されたチョップ。

なぜ突然こんなことをするのかと抗議の視線を相部屋の友人に投げかけてみれば、彼女はちょっとだけむくれるように頬を膨らませ、腰に手をやっていた。

「危なくなつた罰だよ」

「え、理不尽」

だよ、と続けようとした口を、のほほんさんの人差し指が塞ぐ。まるで映画のワンシーンのように軽やかに、それでいて普段ののんびりとした雰囲気も一緒にあって。

むくれていた顔がいつの間にか笑顔に変わっていることに気づいて、私も思わず笑みを浮かべた。

何を言うでもなく私とのほほんさんがただ笑い続けていた時、まともやドアが開かれた。今度はやや乱暴に、だが。

「香織、ご飯持ってきたわよ。お腹空いてるでしょ」

「ありがとう、ふーちゃん」

「あ、鈴ちゃんだー。さつきぶりー」

「さつきぶり、のほほんさん」

扉を開けて入って来たのは、その手に二人分の食事を携えたふーちゃんだった。

っていうか、出て行ってから一〇分経ってないんだけど。

「鳥のから揚げに白いご飯、お吸い物に沢庵。好きでしょ？」

「うん！」

「……アンタ、なんか子供みたいよ？」

「失礼な、そんなことないよ！」

「んーん、かわいいよー？」

のほほんさん、それはフォローになってないです。

まあでも、とりあえず今日が平和だからいいかなあ、なんて考えてみて。

後のことは、後になってから考えることにした。

「いただきます！」

「はい、いただきます」

第10話 穏やか医務室（後書き）

お姉ちゃん登場。イメージ映像的には「とあ禁」の「御坂美琴」が成長した姿、的な。今目に付いた御坂がイメージに似ていたのを見た目そんな感じですよ。

さて、ここから物語がどう動くのか……、私も若干不安でございますが、お付き合いくださいませ。

第11話 嵐の前

僕が起きて、そして『私』として再び復帰したのは、怪我が少し治り始めた四日目からだった。

「はい、あーん」

「あ、あーん……」

え、今何してるのかって？

……のほほんさんにご飯を食べさせていただいております。昼食を。

腕の痛みは大分引いたけど、腕が恐ろしく重いせいでまともに茶碗一つ持てやしない。そのせいでご飯も「はいあーん」が続いている。正直言うとかかなり恥ずかしい。

ふーちゃんとのほほんさんが替わりばんこで私にご飯を食べさせることになっているらしいのです。誰か助ける。他の人ならいって訳じゃないけど、かといってこれは公開処刑に等しいと思うんだ。

でも、女子通しで食べさせあいとかって普通なのかな？ 皆割りとしてスルーしてるけど。

あ、ちなみに医務室にいたときに他の皆もお見舞いに来てくれたんだけど、何故か箒さんだけ居心地悪そうにしていたのを覚えている。なんでだったんだろうか。

「美味しい？」

「う、うん」

「よかったー、お料理は久しぶりだったんだあ」

嬉しそうに微笑んで、自分も食事を続けるのほほんさん。……あ

の、その箸って私の口に入ったものじゃ……。いや、今私は女性として通ってるから、別に気にしないってのは分かるんだけどね……。

「今日の実習も見学するの？」

「まだ、まともに動かせませんから。皆が頑張る姿をのんびり見学させていただきます」

本当は私も参加したいけど、今出れば体を更に痛めるだけで終わってしまうだろうから、ここは我慢だ。

まずはイグニッション・ブースト瞬間加速を完璧に使いこなせるようにしよう。なぜあんなに過負荷が掛かったのかも調べないと。

「そう言えばのほほんさん、クラス対抗戦って結局どうなったんですか？」

「そのうち再試合だってー。あんなことがあったあとだから、慎重になってるんだと思うよお？」

「それもそうですよね。一夏も不憫だなあ……」

そんな話をしている最中に、私の携帯が鳴る。

そのディスプレイに映し出されていたのは、「束ちゃん」の四字
字だった。

「うええっ!？」

「どったのー？」

「あ、いえ、ちょっと電話するので、外行ってきますね!」

「え? あ、うんー」

慌ててのほほんさんに断りを入れると、人気が少ない廊下の隅に行って携帯を開く。

「もしもし?」

『もすもす終日ー! 皆のアイドル束ちゃんだよー!』

「いきなり電話掛けてこないでくださいよ! びっくりしたんですから!」

『あははー、ごめんごめん! ところで、この前の襲撃事件をモニターしてた時、梟が変な挙動をしてただけど』

束さんにかければISの情報封鎖も紙同然か……。
つて、変な挙動?

なんて考えているとあつという間に腕が重くなってきたため、と
りあえず窓枠に腕を預けて楽な体勢を取る。

「それってどういうことですか?」

『うーんとねえ、絶対防御が発動してないんだよ。より正確には、
生命維持機能が完全に死んでた』

「じゃあ、この大怪我もそのせい?」

『多分そうだと思うよ。ちよつと見ておいてくれないかな? 怪我
が治った頃にお呼びたてるからさ』

「わ、わかりました。イヴに言えばいいんですか?」

『そゆことだねー。あ、そうそう! 本社はちよつと面白いところに
作ってあるから、呼んだときには一旦家に戻っててね?』

「あ、はい」

思わず頭を下げつつそう返事をする、束ちゃんは満足そうな声
と共に電話を切る。

……絶対防御が発動してないって、どういうことだろう。まとも
に動けるようになったら見てみることにしよう。

「……さて、と。コーヒーでよかったか？」

「あ、は、はい！」

「そう固くなるな。楽にしろ」

時は流れて夜。

『僕』は何故だか千冬さんに呼び出されて寮監室にいた。それにしても、あんまり片付いてな

スパアン！

「……Why？」

「ふむ、妙なことを考えていただろう」

「なぜわかるんです!？」

「フィーリングだ。何か入れるか？」

「あ、ミルクとガムシロップお願いします」

わかった、と小さく頷いて、千冬さんは片方のコーヒーにミルクとガムシロップを入れる。

先の方に小さく掬う部分がついた細いスプーンが入ったマグカップを受け取ると、掻き混ぜつつ一口飲む。

「美味しい……」

「私だつてコーヒーくらい淹れられるさ。で、本題に入るが、いいか？」

「あ、はい」

「先日の無人IS襲撃事件、私達はあの無人ISをゴーレムと呼称しているが、あのゴーレムには未登録のISコアが使われていた」
「えー!？」

思わず声を漏らしてしまった。

未登録の、ということはつまり、どこかの国や企業がISコアの製造に成功したか、もしくは……。

「束ちゃんが、関わってる……?」

「というより、あれは全て本人の仕業だと自分で白状したぞ。ただ、行った本人が言うのも気まずいし、ちょっと気がかりなことがあるから私から伝えておいて欲しいと言われてな」

「……束ちゃんは、何を目的に?」

「さあな。だが、あいつを信じてやってくれないか。友人としての頼みだ」

「……はい。僕も束ちゃんの友達ですから」

千冬さん自身も歯がゆい思いなんだろう、自分の飲み物に視線を落として溜め息をついている。

かと思いきや、おもむろに立ち上がると冷蔵庫から缶ビールを取り出してプルタブを、

「つて、いいんですか!？」

「ん、ああ。気にするな。口外禁止だぞ。さっきの束の件も合わせ
てな」

「おまけのように言わないでください!？　まあ、わかりましたけど」

生徒の前でがっつりビール飲む先生ってどうなんだろう。うち

はお酒飲む人いないしなあ……。

「ん、飲むか？」

「飲みません」

「そうか」

素気無く断ると、千冬さんは言葉少なくまた一口呷る。

しばらく無言で飲んでいた千冬さんと僕だったけれども、やがて千冬さんが口を開いた。

「一之瀬、学校生活はどうだ？」

「え？」

「一夏の奴はそれなりに馴染んで、友人もキチンとできている。そう心配することはないんだが。お前の方がどうかわからなかったからな」

えっと、これは僕のことを心配してくれてるんだらうか。

「今のところは、大丈夫です。ばれてはいないみたいですし。お姉ちゃんにも打ち明けて、ふーちゃんとも再会できて」

「……どうやら、本当に大丈夫らしいな。ほぼ女子校のようなこの場所がストレスになっていないかと心配していたが、杞憂だったらしい」

「ありがとうございます、心配してくれて」

気にするな、と千冬さんは薄い笑みを浮かべ、缶の中に残っていたビールを一気に飲み干す。その様子が妙に色っぽかったのが印象的だった。

「さて、そろそろ時間も時間だ。呼びつけて悪かったな」

「いえ、ちょっと楽になりましたから。今度東ちゃんに会ったら、一言くらい言っておきます。東ちゃん自身も危なくなっちゃったことだってありますから」

「存分に言っただれ。就寝時間は守れよ」

「はい。それでは、失礼しました」

一礼し、扉を閉める。と、自分の部屋の方からがやがやと声が聞こえてきた。ふーちゃんとお姉ちゃんが部屋に来ているのだろうか。そう考えて、僕は自室へと戻る足を少しだけ速めていた。

香織が出て行ったあと、千冬は大きく溜息を吐きだすとノートパソコンを開き、一つのウィンドウを呼び出す。

「これでいいのか、東？」

『うん、ありがとねえ！　ちーちゃん大好き！』

「それで、調べ物は終わったのか？」

『……うん。終わったっていつか、終わらされたっていつか』

「……どういうことだ？」

ハイテンションから一転、世界を変えた科学者はしんみりとした口調に切り替わる。

その背後では、数多くのディスプレイの中でウィンドウが開いたり閉じたりとせわしなく動いていた。

『香織ちゃんの戸籍をもう一回調べてみたんだけどね。おかしいんだよ、肉親のデータ』

「なに？」

『戸籍では生まれて間もない頃に死んでいることになってる』

「だが、あいつは物心ついてすぐに死んだと言っていたはずじゃなかったか？」

『そう。それをとっかかりにしているいろ探ってみただけだね？

世界中に繋がったよ、データが』

「なっ……！？」

ウィンドウの向こう側で、珍しくしんみりとした顔の彼女に思わず喉に言葉を詰まらせて目線を返す。

「一之瀬の両親は普通のサラリーマンと専業主婦だったはずだ！？」

一之瀬姉の時にはそれは確認した！」

『じゃあ、それが間違ってるんだらうね。多分生きてるよ、両親両方とも』

「……はあ、しかも本人はそれを知らない、と。どうなってるんだ全く」

『もしかしたら香織ちゃんのIS適正とも何か関係があるかもしれないし、色々調べてみるねえ』

その言葉と共にウィンドウが消え、室内に静寂が訪れる。

その中で、千冬は一人天井を見上げた。

とてつもなく大きな嵐が迫りつつあることを感じながら。

第11話 嵐の前（後書き）

次回から2巻の内容に突入。

香織を取り巻く事象の系は収束を始めていく。

第12話 Bind Company

腕が完全に回復した後の日曜日、僕は一人で自宅へ戻っていた。というのも、以前東さんから言われた『メンテナンス』を受けるために、東さんの迎えを待っているわけ。

「一〇時……、そろそろかな？」

「……りちゃん！」

「ん……？」

家の前で待っていると、どこかから声が聞こえてくる。右でも左でもないし、前でも、もちろん後でもない。……まさか!?

「上!?!」

「だーいせーいかーい! ドーンっ!」

「うわぁっ!?!」

突然の轟音とともに降ってきたのは、何やらよくわからない機械に乗った東ちゃんだった。相変わらず突飛な行動しかないというかなんというか、とにかくすごい人だ。

東ちゃんは面白そうに機械から飛び降りると、ひよこひよこことちらへ近づいてくる。小動物チツクだ。

「ひっさしぶりだねー香織ちゃん! どう、その後いいことあった?」

「まあ、幼馴染にも再会できましたし、そういった意味では」

「そっかそっかー、じゃあ今度はその幼馴染ともお話しよっか!」

ひうつ!?!? な、なんかお話って言った瞬間に背筋を怖気が走っ

たのですが!?

「ん、どうしたの香織ちゃん?」

「えっ!?! あ、ううん、な、何でもないよ!?!」

「むむっ、まあいいや。とりあえず乗ってよ!」

そう言っただけで、自分の乗ってきた妙な機械を起こすとペシペシ叩く。

よくSFとかでありそうな、宙に浮くバイクのようなもの。結構大きいけど、駆動音が全くない。それどころかどんな燃料を使っているのかすらわからない。

「おやおや、これが気になるのかな?」

「これ、なんですか?」

「暇つぶしに作ったマツハバイクだよ! ま、IS使った方が速いんだけどね」

ちなみに絶対防御付きです、なんて面白そうに言った彼女の規格外さを、改めて痛感させられる。

ISコアは積んでないんだろうけど、むしろそれ抜きで絶対防御機能を使えるようにするというのはなんとも信じがたいことだ。必要な事態にはなっただけほしくないけど。

さあさあさあさあ! と東ちゃんに急かされてバイクの後ろに乗り込む。意外とシートはゆったりしていて、跨っても大して違和感なく座れた。無駄に座り心地抜群である。

「さあ! 東ちゃんお手製の本社まで、レッツゴー!」

「え? ひっ、わあああああああ!?!」

お花畑が見えました。

『制限速度？なにそれ美味しいの？』ばりに街道を突っ走ったバイクは、いつの間にか海上を走行していた。いや、え？ バイクつて陸上を走るものであって、海の上を滑走するものじゃないはずなんだけど。

そんな疑問を提示することすらできず、僕は束ちゃんの後が続いてなんとか小さな島へと降り立った。

しかし、なんだ。日本にこんなジャングルチックな島が存在していたのかと思わず目を疑うほど、鬱蒼と生い茂る木々が見える。

「えつと、ここは？」

「へへーん、私の立ち上げた『バインド・カンパニー』の本社だよ！ ちなみにジャングルは束ちゃんお手製のホログラフィックでござーい」

「……もう突っ込みきれません」

「んー、まだまだあるよ？ 島の中を巡回してる交戦可能なアニメルロボットとか、この島にあるラボとかね？」

歌うように続ける束ちゃんの後が続いて、ホログラムらしいジャングルの中を歩いていく。しかし、なんでホログラムに質感があるんでせうか。

しばらくホログラムジャングルの中を歩いて行くと、突然開けた場所に出た。森の中の広場のようになっていてその中央には、と

んでもない大きさの大樹が聳え立っている。

東ちゃんはその樹に近づくと、おもむろに手の平を大樹の表面に押し付ける。すると、ロックが解除されたことを知らせるブザー音とともにエアロックも解除され、手の平を中心として大きな扉のように表面が開く。

「うわっ……」

「ふふーん、ここがバインドカンパニー地球本社の入口だよ！ ちなみに、今のところ社員は私と香織ちゃんのみだけどね！ はい、これ社員証」

「あれ、意外と普通」

「防刃防弾耐レーザー加工などなど、あらゆる攻撃や衝撃に耐えられる加工済みだけどね！」

「じゃなかったー」

恐ろしいほど技術が無駄遣いされた、名刺サイズのメタリックカードを受け取る。重いような軽いような、奇妙な重量感。

開いた扉の中は、鋼鉄によって作られたエレベータ。東ちゃんは躊躇いもせずにそこへ乗り込むと、早く入るように僕を手招き、乗り込んだところで社員証を、普通はボタンがある場所に設置された何かの機械に翳した。

すると扉が自動的に閉まり、あのエレベータ独特の浮遊感とともに下降していく。

「さて、と。イヴ、オープンチャネル開放通信で話して大丈夫だよ」

「わかりました、マイスタータバネ」

「イヴ、どうして黙ってたの？」

「周囲を警戒していました。それと、盗聴などのデータを削除し、こちらのことを勘づかれないように」

「どうやら、今までイヴが全然喋らなかつたのは僕たちの情報を漏らさないように警戒してくれていたからだっただけらしい。そりゃ、僕も東ちゃんも機密の塊なんだし、見つかったらまずいよね。」

「東ちゃんはその辺もわかってたみたいで、どうやら僕も少しばかり浮かれていたようだ。注意しないとね。」

「それにしても、凄いなこりゃ」

「そりゃあ天才の東さんにかかればこのぐらい夜食前だよ！」

「朝じゃないんだ」

「肥りますよ」

「大丈夫だもん！ 乙女は太らないの！ うん だつてしないもん！」

「東ちゃん、それは無理があるよ。というか女の子がそんなこと言わないの、はしたない」

「……いや、僕だつて男だし今の発言はちょっとばかり恥ずかしかったけれども。そういうところはびしっとしないとね。」

「そんなアホなことをしているうちに、音のないエレベータは本社内部に着いたらしい。」

「エレベータから降りた僕を待っていたのは、白銀によって彩られたISラボ、休憩所、研究室、事務室などなど、昨今ISに手を出している会社なら大体が持っているようなものの中でも最上級に位置する設備だった。」

「電子機器関連はぜんぶ私が作ったし、他のものも東さんのパートナーが提案して作ってくれたんだ」

「パートナー？」

「そ。ハル！」

『おかえりなさい、お母様。そして香織、イヴお姉様。ようこそバインド・カンパニーへ』

突然、各所に設置されたスピーカーから音声 flowed。イヴとはまた違う合成音声ながら、同じように全く不自然さを感じない。

「ただいまー。コーヒー淹れといてねー。それと、香織ちゃんに案内お願い。イヴにはマップデータ渡しておいて」

『わかりました』

「香織ちゃん、案内が終わったらご飯にしようねー！ 私は先にラボにいつて調整してるから！」

「あ、うん！」

あはは、あははー、なんて言いつつ束ちゃんは物凄い勢いで走り去っていく。で、結局パートナーについての説明はなし？

『私は『H A L - 3 0 0 0 』。お母様、つまりマイスター束により作り出された人工知能、AIです。ハルとお呼びください。イヴお姉様よりも後に開発されましたので、妹ということになります』

「えっと、ハル。あなたと束ちゃん、私達以外にこの人員は？」

『いません。細かい制御や外部との一切は私に任されています。お母様はあまり他者との接触を好みませんので』

「そっか。ええっと、それじゃ案内してくれるかな？」

『わかりました。ではまずは』

「ご馳走様でした！」

「あー美味しかったあー！ やっぱり食は世界の生み出した最高の文化だねえ！」

「ハル、ご飯ありがとう。とっても美味しかったよ」

『ありがとうございます、香織。といっても、プログラミングされた手順どおりに作っただけです』

案内が終わった後の昼食を終え、僕たちは満足げに吐息を漏らした。

とにかくご飯が美味しかったし、それを作ったのがAIによって統制された最新調理機器達だということのもなんと胸躍らせる話だ。

僕がこんなこと言うのはアレかもしれないけども、やっぱりSFというのは憧れる。まあ、少しは自分で動かなきゃ人間ダメになるとも言っけど。

「さて、と。それじゃあ梟みたいから、香織ちゃん。ちょっとラボまで来てー」

「あ、はい」

束ちゃんの後続き、ISラボへ。世界中で使われている最新設備を更に五世代ほど飛び越えた最新機器が揃っているため、僕は全く手が出せません。どうやって使うんだろうか。

腕輪になっている梟を外して束ちゃんに手渡すと、即座に解析を始めた。

「ふむふむ、んー、なるほどにやー、そういうことか。とするとここをこう弄って、あ、でもそうするとこうだからここでこうのこうこうこうのこうのこうにやにやにやにやと！ はい出来た！」

「途中からなんだかおかしかったよ？」

「マイブームはウサ耳猫語に今決定したよ！ もうやめたけど」
「飽きつぱいのですね」

「んもう、イヴちゃん辛口だね！ ところで、なんだか梟の絶対防御がプログラム自体すっぱ抜かれてたから、とりあえずもう一回組み込んでみたけど、やっぱり消されちゃうみたいだね。とりあえず最低限の生体保護プログラムは強化しておいたから、出来るだけ生身へのダメージは避けてね？ 大きいダメージを受ければ防御が簡単に割られちゃうからね」

矢継ぎ早に繰り返される説明を頑張つて理解してみると、それはつまり、ISの売りの一つである「絶対に搭乗者を死亡させない」機能が働いていないそうだ。以前のあの大怪我もともにプログラムが動いていなかったかららしい。

「あ、それと。梟はまだ一次移行してないね？」
ファースト・シフト

「はい。まだ一次移行に足るデータが足りません」

「そっかー。でも、香織ちゃんは絶対守ること。いいね？」

「もちろん」

……えーっと、今また物凄い事実が発覚したのに僕は蚊帳の外なんです。誰か助けてください。

つまり、僕は今まで一次移行も済んでいない、最適化しただけのISで頑張つてたつてことかー。そりゃ死に掛けるね。

「あの、束ちゃん。じゃあ一次移行つていつごろだと思う？」

「わからないよ。いくら天才の束さんでも、ISコアの進化は未知数、予測は出来ないんだよん。だからこそ面白いって言うのもあるんだけどねー」

むう、束ちゃんでも分からないか……。

とにかくひたすら乗ってみるしかないのかな、これは。

「まあとにかく、これからもガンガン、イヴと一緒に鼻を使ってあげてね。じゃなきゃいつまで経っても一次移行にだって辿りつけないからさ」

「うん、頑張ってみる。ね、イヴ？」

「ええ、頑張りましょうカオリ。何をどう頑張るかまでは決まりませんが」

最後の最後でしまらないけど、とりあえず今日の会社訪問はこれにてお開きとなった。

また色々と問題を抱えてしまったけど、頑張らないと。

第12話 Bind Company(後書き)

結局第二巻までいかなかった、申し訳ない。

次回から二巻ですね。

重大な欠陥ともいえるものが発見され、またお話が面倒な方向へ。
新たに現れる彼女達との出会いで、何が変わるのか。

第13話 金銀キャンペーン

翌朝、疲れからかのほほんさんよりも少しばかり遅く目を覚ました僕は、すぐに服を着替えると頭を切り替える。

昨日もらった社員証は胸ポケットに入れてあるけど、落としてもきちんと私のもとへ戻ってくるようになってる。性別のところも女性になってるからね。

『カオリ、ハルから新規開発武装のテストプランが送られています』
『が』

『えっと、どういうこと？』

『どうやらタバネがあれやこれやと開発に走っているようです。だれかお母様を止めてください、と愚痴のメールも届きました』

がんばれハル。私は手助けできないから。というか私だと束ちゃんは止められません。

のほほんさんは既に食堂に向かっていたみたいで、とりあえず部屋の鍵を閉めると一人で廊下を歩いていく。と、長い黒髪を後ろで縛った姿が見えた。

「篝さん、おはようございます」

「ん？ か、香織……」

「あの、私の顔に何か付いてます？」

食堂に向かうつもりだったのだろう篝さんに挨拶すると、振り向いた彼女はまずいものを見たかのように固まってしまふ。

「あ、あ、い、いや、そ、そうじゃない。その、少し気分が悪くな……」

「大丈夫ですか？ 医務室行きます？」

「い、いや、大丈夫だ！ 心配ない、すぐに治る！」

「え、で、でも……」

「大丈夫だ！」

半ば無理やり、怒鳴るようにして会話を終わらせた篤さんは、とんでもないことをしたかのように少し顔を青ざめさせて一、二歩下がった。

「あ、す、すまない……」

「いえ、いいですよ。すいません、私こそ」

「いや、私が悪いのだ。……お前のことも、考えずに……」
「え？」

何故か、篤さんが立ち止まる。静かに肩を震わせているかと思つと、急にこちらへ振り向いてきた。その目には、玉のように涙が浮かんでいる。

「……ごめん、なさい……っ……！ 私の、私のせいっ、でっ……」

「ほ、篤さん！？」

「ごめっ……、なさいっ……！」

蹲るようにして涙を流し、ひたすらそう繰り返す篤さん。その姿を見て、私はとにかく彼女を泣き止ませることを優先させることにした。

彼女の肩を、包むようにしてそっと抱くと、そのまま背中をさすり続ける。

しばらくして涙が嗚咽に変わった頃、篤さんは赤く泣き腫らしたその目をこちらに向けた。

「落ち着きましたか？」

「あ、ああ……。あの、その……。以前のクラス代表戦のときのことだが……」

「え？」

「私のせいで、お前に大怪我をさせてしまった……。謝って済むことではないと分かってはいるが、謝らせて欲しい……。済まなかった……！」

まだ少し涙声のまま、彼女はそう漏らす。

私の中ではとくに片付いたと思っていたことが、彼女の中ではまだ終わっていなかった。そのことに気付いて、私はそっと彼女の頭を撫でる。

「じゃあ、これでおしまいです。ごめんなさい、気づいてあげられなくて。あなたがこんなに苦しんでいたのに……」

「え……」

「私はあなたを許します。気に病まないで」

「だ、だが、それでは……。！ それでは私の気が済まない！」

悲痛ともとれるような声で叫び、篝さんは唇を噛む。

「お願いだ……。！ 私を許さないでくれ……。！」

「いいえ、許します。篝さんは今まで苦しんだんでしょう？ 苦しむことの意味がわかっているのなら、もう苦しむ必要はないんです。だから、私はあなたを許します」

「ああっ……。あ……。！」

次の瞬間、彼女はもう一度その瞳から大粒の涙を零し泣き出した。その肩を、私はそっと抱く。せめて、少しでも苦しまないように。

翌日。

昨晚篝さんが一夏に何かしらの約束をしたらしいという噂を聞いて、篝さんも少しは吹っ切れたのかと少しばかり気が楽になった私だった。

まあ、その後すぐにこんなことが起きるとは予想していなかったわけだけでも。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「へっ？」

「え……」

「「ええええっ！？」「」」

教室中が爆発したような大声で包まれる。

いや、転校生つてだけでもこのIS学園じゃ珍しいのに、その上それが更に二名か……。ふーちゃんに続いて二人目と三人目だ。

あれか、世界初の男性IS操縦者がいるからなのだろうか。

けれども、なんで二人同時にこのクラスなのか。もうちょっとバラけてもいいはずなのに。

「失礼します」

「……………」

二人が入って来た途端、クラスが静まり返った。銀色の髪を持って背の低い眼帯を付けた少女と、長く伸びた金髪を後ろで束ねた女顔の『少年』。うん、おかしいね。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
」

眩しく輝く笑顔と共に言うシャルル君。……んー、なんか引つかる。違う気がするんだけど。

『イヴ、あれ本当に男？』

『いえ、女です。骨格が完全に女性型です。体組織があれば、本社の方にデータを送って解析できますか？』

『ん、手に入りそうだったらやるうか。正直言って、こんなタイミングの編入は危険すぎる。何か変だよ』

つい先日アリーナの壁ぶち破ってISが降ってきたばかりなのに、自国の大事なIS操縦者をそんな安全性の不安な場所に送ってくるかな、普通。

それに、一夏と同じ境遇ってちょっと無理がある。それならなんでもマスコミが嗅ぎ付けてないのか。どれだけ強固な情報封鎖でも、それだけのネタなら必ず綻びが生じるはずだ。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああ

っ！」

おほう、耳が凄いですよ？　ぐわんぐわんする。

「男子！　二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かったーっ！」

あははは、耳がぐわんぐわんしております。すごいねえ女子のばうわは。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

至極めんどくさそうな声で諫める千冬さんと、おどおどしながら声を上げる山田先生。頑張ってる。

そんなことを考えながら皆を眺めていると、ふと銀色の髪の転入生と目が合った。ちよっと笑いかけてみる。

「……フン」

鼻で笑われて目を逸らされた。少しショックです。

すると、千冬さんの方に視線を向けていた彼女に向けて、千冬さんが口を開く。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

突然姿勢を正し、流れるような動作で敬礼するラウラと呼ばれた少女。

それを見て、千冬さんは疲れたようなめんどくさそうな顔で口を開く。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」

教官と呼ぶつてことは、軍隊か何処かで千冬さんが教えていた少女だつてことかな。……軍隊で教えてられてたんなら、何でここに来たんだろうか。あの子も要注意かな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ」

おほう、山田先生泣きそうじゃないか、もうちょっと加減してあげて。

なんてのんきなことを考えていると。

「っ！ 貴様が」

突然一夏を睨みつけたかと思えば、彼女は一夏の頬を音高く叩いた。

「……………」

「っ？」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

その言葉には、嫌悪なんてちやちなものじゃない、憎悪とすら言えるどす黒い色が塗りたくられている様に感じた。

「っ、いきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏の言葉に答えることなく、その列の一番後ろへと歩いていくラウラさん。

一夏と彼女の間何かあったのだろうか……。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて無理やり事態を終結に持っていく千冬さん。まあ、ここで喧嘩するよりはマシかな。

っと、私もそんなゆっくりしてられないや。すぐに服を脱ぎ、中に着込んでいたISスーツを露出させる。

ちなみに、このISスーツは絶対防御が発動しない私のためにと、昨日東ちゃんが作ってくれた特注品。急所の部分には集中的に防御性能の高いIS装甲を繊維化したものを使っているらしい。東ちゃん、やりすぎじゃないでしょうか。

色は梟と同じ黒で、胸部にはパッドがずれない様にきちんと加工が施されていて、その、股間のモノも目立たないようにその部分が加工されている。スーツのサイズはぴったりなのが驚きです。

「それじゃあのほほんさん、先行ってるね」

「はい」

ほにゃほにゃと笑って手を振るのほほんさんに笑みを送りながら、

廊下を走らない程度に駆けていく。

とりあえず今分かることは、またとびっきりの厄介ごとが二つばかり増えたということだけだった。

第13話 金銀キャンペーン（後書き）

シャルとラウラの登場でござい。しかし香織はシャルの正体には気づいている様子。

次回はこの後すぐの授業風景から！

あ、題名はその場のノリです。

第14話 死闘 模擬戦!

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい!」

「くっつ……。何かとうとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

開始早々騒いでしまい、千冬さんにフルスロットルで叩かれたセシリアさんとふーちゃんの嘆きと怨嗟の声でした。

千冬さんの言ったとおり、今は実戦訓練の時間。金髪さんは一夏と一緒に出てきたけども、私の隣にいる子がまあ恐ろしい目で一夏を睨んでいるんです。

確か、ラウラさんだったっけ。何かあったのかな?

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 ファン 鳳! 一之瀬!」

「は、はいっ!」

おおっ、私と呼ばれた。これが幼馴染補正ですか? 違いますか、さいですか。

「むう、一夏のせいなのになんでアタシが……」

「ま、まあまあ。いい訓練だと思えば、ね?」

「そうだけど、さ」

ふーちゃんは納得しきれずにいたけど、やがて諦めたように息を吐き出した。

どんまいどんまい。

「それで、お相手はどなたが？ 私とふーちゃんですか？」
「慌てるなー之瀬。対戦相手は」

声に被さるようになり、飛行機が飛ぶときに出すあの甲高い音が聞こえてきた。

何事かと周囲を見渡せば、そこには。

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

『っ！ イヴ！』

『はい』

思わず鼻を展開、防御装甲と素手で突っ込んできた落下物を受け止めると、それに押しつぶされないように後ろへ加速、そして徐々に減衰していく。

なんとか被害を出さずにそれを不時着させてみれば、それは山田先生+ISだった。何してるんだろうか、この人は。

「だ、大丈夫ですか？ 山田先生」

「は、はいー……。すいませんー之瀬さん、助かりました」

「わあー、かおりんかっこいー」

遠くから聞こえてきたのは、ハイパーセンサーによって拾われたのほほんさんの声。ちよつと照れるね、これ。

ともあれ、山田先生と共に元の場所に戻った私を待っていたのは、軽く頷いていた千冬さんだった。

「ISには本来救助は必要ないが……、まあいいだろう。模擬戦時などに相手のISが故障し飛行が持続できなくなった場合、ああいっただ方法での救助は有用だ。落下の際の恐怖で空に上がれなくなる人間は、いつだっているからな」

「は、はい！」

おお、千冬さんに褒めてもらった。なんだか嬉しいぞ。

「さて、と。では山田先生、スタンバイを」

「はい」

「鳳、一之瀬。ツーマンセルで山田先生との実戦訓練だ」

「え、ええ！？ ちょ、それは幾らなんでも……？」

「安心しろ。そう言っているうちには刃一つ突き立てられん」

驚いたように聞いたふーちゃんのその言葉を、鼻で笑ってそう言い放った千冬さん。ああ、それマジなんですね。

ということはつまり、千冬さんが認める程度には山田先生は強い、と。うわぁ……。

『まあ、頑張ろう。ふーちゃん、油断はしないで』

『わかってるわよ。千冬さんがあそこまで言うからには、それ相応の実力があるはずだし』

『うん。それとイヴ、データ取りよろしくね』

『了解です』

緊張を四肢に漲らせ、軽く息を吐き出す。ぶるり、と武者震いがした。

「では、両者位置に着け。……始めいっ！」

空に上がった私たち三人が闘志を滾らせたことを感じ取った千冬さんの一言で、その空気は一変した。

ズドンッ！ という正確な射撃と共に一瞬前まで私がいたところを実弾が通り過ぎる。そこにいれば、穴が空いていた。

『ふーちゃん、交代なし！』スィッチ 上下攪乱挟撃で叩く！』ハイ・アンド・ロー
『オツケー！ 位置取りは龍砲でサポートするわ！』

瞬く間に音速の世界へと突入した私は、あらかじめ呼び出しおいた《夜雀》よじやくで弾幕を張り、直角に上昇していく。

「逃しませんよ」
「ッ!？」

ぞくり、と背筋が怖気立った。
冷徹と呼べるほどに冷たく研ぎ澄まされたその声を、私は訓練機に乗ったときに知っている。

この学園の入学試験のとき、私の試験を担当した先生と同じ感覚、同じ声だった。
できるかぎり冷静に振り返ると、振り向き様《夜鷹》よたかを呼び出し、横に一閃。

案の定それは避けられたけど、それでいい。

「逃さないのは、こつちも同じよ!」

独特の音と共に、ふーちゃんの肩付近に浮遊する非固定浮遊部位アンロック・ユニットから放たれた不可視の砲弾は、しかし幾発もの銃声によって掻き消された。

「なっ、撃ち落した!？」
「発生場所と自分との距離を計算すれば、着弾地点も斜線も弾き出せますよ」

この人は……、つくづく私達の想像の上を行っている。

認められる程度には強い、なんてものじゃない。化け物に近いレベルだ。

至極冷静に相手を見定め、適した距離に持ち込んで寸分狂わず銃弾を叩き込む。全く持って、私達はこの人を軽く見ていたようだ。

「ふーちゃん、作戦練り直し。これは無理だよ」

「みたいね。全く、化け物ってレベルじゃないわよ！」

辛うじて弾丸の雨をかわしつつも、やはり数発の被弾は避けられない。

けれど、それも《夜羽^{よはね}》を展開している今の状態であれば大したダメージにはならない。

「私ができるだけ被弾を防ぐ！ ふーちゃんはなんとか隙をみつけて一撃入れて！」

「了解！」

ふーちゃんに指示を飛ばすと、反撃とばかりに《夜雀》の引き金を引く。マガジンを交換する手間も惜しいため、弾が切れれば即座に放り投げて《夜鷹》へと持ち替える。

その合間合間に撃ち出される龍砲の砲弾を悉く回避しながら、次々に弾幕を張り、更にグレネード弾まで混ぜてくるその綿密さには、ほとほと呆れてしまう。主に現実逃避的な意味で。

「捉えましたよ」

「こちらですっ」

こちらへ突き進む銃弾の音に混じり、龍砲の発射音が爆ぜる。

それを既に音だけで避けた山田先生のIS、ラファール・リヴァイヴへと数多の銃弾が突き刺さった。

「他の銃撃!？」

驚きながらも冷静に銃口を銃声のする方へ向け、寸分狂わず甲龍の駆動部分を狙い撃ちにかかる。けど、それが誤りだ。

『イヴ!』

『エネルギー充填完了です』

ガチンツ、と頭の中で何かが噛み合う。その直後、音速の壁を一瞬で超え、山田先生へと肉薄する。

イグニッション・ブースト
瞬時加速!？

ハイパーセンサーに飛び込んできた誰かの声を聞き流し、左腕に取り付けられた最後の装備を打ち放つ。

《啄木鳥》、とつつきとも呼ばれるそのパイルバンカーの一打が入った直後、《夜羽》の合間を撃ちぬかれた。

全身を襲う衝撃と同時に、散々削られたISのエネルギーがとうとうゼロの表示を示す。

「くうっ……!」

「香織! このっ!」

私が墜ちたことに焦ったのか、さっきまでの距離を一気に詰めて《双天牙月》を振りかざすふーちゃん。だめだ、それは悪手すぎる!

「ふーちゃん、だめ!」

「冷静さを失うのはアウトですよ」

「え、きゃあ！」

真つ直ぐ突っ込んできたふーちゃんへ向けて、グレネードを撃ち放つ山田先生。

……終わっちゃったか。

「そこまで！ 山田先生、ご苦労だった」

地上に降り立った私達は、ISを解除すると一息吐いてお互い笑いかける。

少しだけ、指が震えていた。

「強いなあ……。二対一でもだめかあ」

「行けそうだったんだけどなーっ！ あそこで突っ込まなければ……！」

「い、いえ、強かったですよ二人とも。冷や冷やしちゃいました」

「ちなみに、山田先生は元日本代表候補生であり、とある事情がなければ私に相對できただろう逸材だ」

えー……、そりゃ勝てませんよ。というかそんなに強かったんですね、山田先生。

あの目つきとか雰囲気とか、確かに普通とは違ってたし、スイッチのオンオフでもあるのかな。

「その、とある事情ってなんですか？」

「あがり症だ」

「……え？」

「そこまで酷いわけではないが、公式戦となればガチガチに緊張してまともな成果が出ない。代表になった者との模擬戦は全勝してい

るのに、公式戦ではボロ負けしている」

ああ、そういうことが。

あれだけの威圧感と実力でどうして候補生止まりだったのか疑問だったんだけど……。

時間があれば、もう一度お相手して欲しいなあ……。あれだけ強いなら、きつともっと強くなれる。

「あはは……。けど、本当に二人とも強かったですよ。半分以上削られてしまいましたし」

「墜とした本人が言う台詞じゃないわね……」

「まあ、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意をもって接するように」

パンパン、と千冬さんが手を叩いて、全員の注意をそちらに向ける。

「専用機持ちは織斑、一之瀬、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では九人ずつ、一つだけ八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいなあ？ では分かれる」

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループにいれて！」

おおー、カオスカオス。すごいことになってるなあ。

まあそれはそうなるよね。一夏とデュノアさんのところにぞろぞろと人が集まっている。まるで甘い物に集まるアリのように……。これは良くない例えだね。女の子をありんこ呼ばわりはよくありま

せん。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

そんな千冬さんの声に、二人に群がっていた人たちはそろそろと自分のグループへ集まっっていく。

「最初からそうしろ、馬鹿どもが」

「よろしくねえ、かおりんー」

「さっきの凄かったよ！ あんなに強かったんだあー」

「え、えーっと、うーんとっ！」

のほほんさんが一緒でした。そして最後の人、必死に言葉をひねり出そうとしなくていいよ。

ともかく、これでグループ分けも終わり、ようやく実戦訓練へと入っていけることになった。

なんだかどつと疲れたよ……。

第14話 死闘 模擬戦！（後書き）

ということで山田先生超強化しました。めっさ強いです。

内容がちよっと薄いですが、次回は原作では入っていなかった、午後の整備授業になるかと。

香織も一応整備できるようになってますしね。

第15話 専用機

時間は少し流れて午後授業。

私達専用機持ちは専用機と訓練機の整備、一般生徒は訓練機の整備実習の時間である。

「とりあえず、梟の方からやっちゃおうかな」

工具箱を片手に引っさげ、髪をポニーテールに結んでからよしつと気合を入れると、既に起動済みの梟を力チャカチャと弄くりだす。内部処理のバグ確認や外部装甲の手入れ、各駆動部位の泥の掻き出しなどメンテナンスは始めればきりが無いけど、それをきちんとやっておけば、機体はちゃんとそれに応えてくれる。

ちなみに、専用機持ち以外は順番に訓練機の整備方法を実践しているから、私たちに回ってくるのは一番最後だろう。

「えーっと、確かフラグメントマップの確認をしておいてって言うてたよね」

「情報をロードすれば、こちらでハルへ送っておきます」
「ん、わかった」

イヴの言うとおりにフラグメントマップのデータをロードすると、その情報が秘匿回線を通じてハルの元へと送られていく。

細かな作業も多いけど、これは若干本職のメンテナンスに食い込んでいたりする。だって、普段のメンテナンスは私以外には行える人はいないんだし、仕方ない。

一夏はデュノアさんに基本的な部分を教えてもらいながらこなしているけど、あれは簡易メンテナンスの基礎部分だから、機密漏れつつことにはならない、はずだ。

セシリアさんとふーちゃんは慣れているのか、普段どおりと言った感じでメンテナンスを終えている。ラウラさんも同様だった。

んー、まだ時間余りそうだし、もう少しやるうかな。

装甲をはずしてシステムの補助を受け持っている基盤部分を露出させると、出力パラメータ表を表示してから細部を弄る。弄るたびに变化するパラメータを逐一チェックしつつ、最適な形へと作り変えていく。

「わっ、かおりんすごい」

「のほほんさん、訓練機の整備実習はどうしたんですか？」

「待ち時間中だよー。それより、そんなところまでメンテナンスするのぉ？」

後ろから掛けられた声に振り向かず答えると、小さく頷く。

「ちょっと事情がありました。っと、これでよし」

念のため、一部にエネルギーを通して反応をチェック後、装甲を元の位置に固定し直す。やっぱり、さつき戦ったときに少しだけパラメータが違う数値に変更されていたらしく、ラボで調整したときよりもほんの少しだけ性能が上がっていた。

「ふーっ、と。終わっちゃったけど……、まだ整備終わってないみたいですね」

「いやぁ、かおりんが速いのが原因だと思っよぉ？」

「そ、そうですかね？」

「そっだよぉ」

むう、そんなに速くやっている覚えはないんですが。

「おつとう、もうすぐ私の番だからいくねえ？」
「あ、はい」

トテトテと歩き去っていくのほんさんを見送った後、しばし思索する。困ったな、やる事がなくなってしまった。

というか、整備はいつもしているからいつもの要領ですぐ終わったし。

じっとしているのもあれなので、機密に関わらない程度に皆の整備状況を見て回ることにした。

「一夏、どんな感じですか？」

「あれ、香織。もう終わったのか？」

「普段からやってますから。それでも速いみたいですけどね」

「さすがだなー」

「一之瀬さんは企業代表なんだっけ？」

「そうですね。と言っても、まだ新参ですけど」

代表が最古参というか、生みの親であることは黙っておくべき。そうするべき。

けど、一夏も大分いいペースで整備を進めているようだから、あんまり心配ないかな。……あれ、何で私が同じ新参さんの面倒を見ようとか考えているんだろうか。

確かに、私も東ちゃんと一緒にいたときにそれなりにISのことを叩き込まれたけどさ。

「って、デユノアさんは調整しなくてもいいの？」

「僕のはもともと細部の調整は必要ないんだ。第二世代は頑丈さが売りな面が強いから」

「なるほど」

確かに、第二世代は研究時間がたっぷりあった分完成度が高い。下手な第三世代よりも強いと言われるのもそのあたりの事情が絡んでいるんだろう。

そういうこともあって、第二世代のISの耐久性には目を見張るものがある。

第三世代は精密部品の塊だって面もあるからことあることに簡易メンテナンスなんかは欠かせないんだけど、第二世代は既に各パーツなんかは各国で量産も可能な機体だ。メンテナンスだって簡単に済む。

デュノアさんの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は第二世代型IS『ラファール・リヴァイヴ』のカスタム機らしいから、そういうのもあるんだろう。

「それじゃ、他の人のところ見てきますね」

「おう」

「それじゃあね」

会釈してからその場を離れ、ふーちゃんの元へ。
って、あんまり進んでないのかな。

「ふーちゃん、どんな調子？」

「まあ、いつもの簡易メンテと変わんないわ。細かい部分はメンテナンスチームに任せてるし」

「あ、普通の専用機持ちってそういうのいるんだっけ」

「そうよ。って、アンタはいないんだっけ？」

「うん。まあ、それでも大丈夫なようにメンテは一通り覚えたり」

これがまた結構大変なんですよ。

基盤の中の埃取りとかもやらないといけないし、ほんとに細かい作業が一杯。もう嫌になるってくらい。

でも、自分の羽の毛づくろいだと考えてたら、ちよつと楽しくなつたのも事実でして。現金なものだ。

ちなみに主観だけど、『甲龍』は第三世代の中で一番メンテが楽だと思う。

『白式』は言わずもがなの特化性能だし、『ブルーティアーズ』もBT兵器とかの関係でちよつと面倒そう、ラウラさんのに至つてはトライアル段階とかつて話だから、結構面倒だろう。

それに比べれば、『甲龍』は燃費重視型。内部でもあまり変動が出ないようにしているんじゃないかな。多分。

それでも外装とかのメンテは欠かせないだろうけど。

「ふーん。やっぱり香織は凄いわねー。よっし、メンテ終わり！」

「訓練機はまだ空いてないみたい。他の人のトコ見て回る？」

「そうねー。どうせ暇だし」

パチンツ、と手を打って立ち上がったふーちゃんと共に、今度はセシリアさんのところへ。

セシリアさんは、真剣な顔でディスプレイと向き合いキーボードを打っていた。

「セシリアさん、どんな調子ですか？」

「あら、香織さん。鈴さんも。まあ、いつもと変わりませんわね」

「へー、アンタって細部メンテまでやるの？」

「ええ、ある程度は把握しておかないと嫌な性分なのですよ」

あはは、ふーちゃんとは大違いだね。

「つて痛っ!? な、なにするのふーちゃん!?!」

「今、アタシがずばらとか思わなかった？」

「えっ、何で分かったの」

「ほほう?」

「あつ」

しまった、言ってしまった。

いや、ふーちゃんって結構ずばらなところとか大雑把なところとかあるし、確かESも半分以上感覚で動かしてるって聞いたし……。私も結構感覚で動かしてるけど、だんだん理性で統率できるようになってきている。これが学習の成果という奴なのかもしれない。

「うりゃ」

「あ、やめ、ひやめへ、ふーひゃん! いひゃい、おえんあひゃい、おえんあひゃい!」

「おおー、伸びる伸びる!」

などと言う私の思案を一切無視し、ふーちゃんがおしおきだとはかりに私の頬を引き伸ばす。

当然抗議するも、思った以上に私の頬が伸びたのが楽しいのか、ふーちゃんは一向に手を離そうとしない。しかもその手つきがぜんぜん痛くないのだから困ったものだ。

なんだかんだ言っつて、私もふーちゃんも怒ったり怒られたりを本当にやっているわけじゃない。ただのポーズだ。じゃれあいとも言つかもしれない。

そんな私たちを見て、セシリアさんはクスクスと笑っていた。何か彼女の笑いを誘うようなことをしただろうか。

「なに笑ってるのよ?」

「うふふ、いえ、とっても仲がよろしいのですね」

困ったように笑いながらも問いかけたふーちゃんに、セシリアさんは上機嫌そうに笑って言う。

それにしても、見れば見るほど皆のメンテナンス方法は面白く違っている。

『白式』と『甲龍』は同じ戦闘方法、要するに接近戦主体のIS。その簡易メンテナンス方法は自分の手を使って直接弄っている。それによって自分とISの感覚を近づけ、コンマ何秒の世界でズレが生じないようにしているんだろう。

一夏の場合はそれしか知らないから、と言うこともありうるけども。

一方の『ブルーティアーズ』はディスプレイとキーボードを使用した、いわゆるプログラミング的な方法。これによってBT兵器などの発射タイミングのラグの調整を行い、正確な射撃を行えるようにしているんだろう。

ラウラさんは、例によって分からない。調べてもらうことも出来るけど、それは必要な時でいい。今はまだ、危機じゃない。

デュノアさんは、どうなんだろう。多分プログラミング方式のメンテナンスと手動メンテナンス、両方やってるんじゃないかな。

ちなみに、私のは簡易ではなく通常のメンテナンスの域だからその辺はあんまり関わらない。話しているのはIS操縦者が行う簡易メンテナンスのことだし。

なんてことを考えていたところで、千冬さんから専用機持ちにお声が掛かった。ラウラさんには話しかけれなかったな。

で、打鉄のメンテナンスは対して時間がかからなかった。だって、やれるし。わかっていなかったのは一夏だけじゃないかな。

「あれ、あなたは……」
「……こんにちは」

放課後、もう少し念入りなメンテナンスをしておこうかと格納庫に行った所で、特徴的な水色の髪を見つけた。

彼女、更識簪さらしかんざしさんは小さく会釈しながら挨拶すると、またすぐにディスプレイへ視線を戻した。

更識簪、日本代表候補生で四組のクラス代表でもある。不可解なのは、そんな位置にいる彼女に専用機が与えられていないこと。

トライアルシリーズであっても、代表候補生には専用機が与えられているはずだ。だって、貴重なデータ源なんだから。でも、本当に何故なんだろうか。

「何してるんですか？ 簪さん」

「……別に。私用」

突き放すような言葉。その途中で見えた画面には、ISのプロゲラミングが隙間なく浮かんでいた。

これって、もしかして。

ふと思い立ち、彼女の前にあるISを見る。それは、ISと言うにはところどころが欠けている代物だった。

「もしかして、これ作ってるんですか!？」

「……まあ」

「凄い……! これ、どれくらいで出来るんですか?」

「まだ、ぜんぜん。データが足らなすぎるから」

そう言った彼女の顔が、悲痛に歪む。

何かあったのかと尋ねれば、眼鏡の奥の瞳が潤み、憎憎しげに、

吐き出すように喋りだす。その内容は、驚くべき、と言うには少しばかり予想の出来た話だった。

なんでも、一夏が出てきたせいで白式の開発に人員が取られてしまい、今ではこの『打鉄式式』は見向きもされなくなってしまったんだとか。

いや、それっておかしくないかな。

「えっ？」

「だって、『白式』は束ちや、篠ノ之博士が凍結されていたものを引き取って仕上げたって言っていましたよ？ 人員なんて余ってるほどだと思ってたのに」

「……それ、どういうこと」

「いえ、だから、『打鉄式式』の開発に人員が回せないなんて、ありえないってことです。幾ら世界初の男性IS操縦者が出て、それで量産できそうな機体の開発を中止してそっちに全て回すなんて、おかしいんですよ。まして企業なら尚更です」

企業であれば、一定の業績を示さなければならぬ。だが、『白式』は量産できるわけでもなければあの単一技能を再現できるわけでもないのだから、データ収集に多くても半分分裂けばいいぐらいのはずだ。それで足りなければ政府を使えばいい。

しかし、『打鉄式式』は別だ。アレは量産機としての可能性だつてあるのだから、容易に切るのをおかしい。

「じゃあ、なんで……」

「その辺は分かりませんが……。あ、そうだ つ！」

「なに？ きゃう！？」

思いついた瞬間、彼女の肩をがっしりと掴む。後から考えると、これは相当まずいことをしていたんじゃないかな。

残念ながらそのときの私はそれに気づくこともなく、真っ直ぐ彼女の目を見据えるのにやりと笑いながら言い放っていた。

「私も一緒に作らせてもらえませんか、純日本製最強のISを」

思えば、私はこの頃からISバカとして極まってきたのかもしれなかった、と言う話である。

第15話 専用機（後書き）

はい、簪ちゃんと邂逅。

えー、なぜこれが更新されているかってーと、活動報告のほう見ていただけると分かりますが。

なのはが書けない……っ！

なので、しばらくなのはは低速更新となります。代わりにそれ以外の三作品、これとネギま、ネタ帳の更新が活発になるかと。まあ、わたしは結構な周期でこう言うのがクルので、「またか」といった感じでスルーしていただけるとありがたいです。

追伸。

感想いただけるとありがたいです。

モチベーション上がります。ガチで。

第16話 BOUSO Uが止まらない(前書き)

7 / 30 話数が間違っていたので修正しました。

第16話 BOUSOが止まらない

「バランスはこのぐらいでいいかな？」

「うん……、あ、ちよっとまって。そのまま……、よし」

簪ちゃんとの邂逅から数日が過ぎ、私たちは今日も格納庫内でISと向き合っていた。

最初は遠慮していたんだけど、しばらくしたらお互い敬語とかは一切なしになっていた。というか、千冬さんに怒られるまで熱中していたなんて久しぶりだったから、その頃には疲労であまり頭が回らなかったというか。

ともあれ、こうして私は簪ちゃんとISを作っているわけで御座います。中々進まないけどね。

「やっぱり、実際の稼働データが圧倒的に足りない……。打鉄の稼働データはもらえないし……」

「……よし。簪ちゃん、ちよっと待っていてくれる？」

「え？ うん……」

データが足りないなら持って来ればいいじゃないの精神で、ピポ、パ、っと。

『おっはーハロハロー！ 皆のアイドル東ちゃんだよー！』

「今日も元気ですね、東ちゃん。それで、あの、お願いがあるんですけど……」

『うんうん、わかってるよわかってるよーっ！ ISの稼働データが欲しいんだよね？ で、も それにはまずそっちの子と話さないかね？』

「……え、話せるんですか？」

『なんだいその「あなたコミュニケーション能力ゼロなのに何言ってるの?」みたいなニュアンスはー!? 束ちゃんは天才なんだぞ、そのぐらいできるやい!』

いや、だって事実そうじゃないですか。

興味がない人間はとことん冷遇して、拳句無視する。それがこの人の常套手段であつて。やはり少し不安だ。

「じゃあ、絶対冷たくしちゃダメですよ? ちゃんと話してくださいね?」

『オツケーオツケー、任せといてー!』

「はあ……。簪ちゃん、うちのバカ社長が簪ちゃんと話したいって」「え、私に……?」

携帯を簪ちゃんに渡して、溜め息。大丈夫、だよな?

『ハロハロー、皆のアイドル束ちゃんだよ! 君は更識簪ちゃんだね?』

「は、はい……。あの、束って……」

『そう! 私こそがISを作り上げた天才なのです! ところでところで、簪ちゃんは香織ちゃんのことをどう思ってるのかな?』

「え、どうって……。優しい、人……?」

『ほづほづ、なるほどなるほど。まあいいや、それじゃあかんちゃん』

「か、かんちゃん……?」

『簪ちゃんだからかんちゃん! 君は今日からバインドカンパニーの社員です!』

「え、ええ!? ま、まって、まってください、どういっ」

『ISの稼働データの二つや二つ、この束さんが持っていないとでも思っているのかなー? それに、話してみ分かったよ! 君は

束さんの下に来るべき、そうするべき!」

……今束ちゃんが無茶な勧誘をしていそうだ。

というか、普段は大人しめな簪ちゃんがあんなに焦るなんて珍しいなあ。

「で、でも、私は日本の代表候補生で……」

「んー、ああ! 白式一つ完成させられない無能なんて頼ってたらいつまで経っても作れないよ? 大体、白式だって束さんが作ったんだから、あそこの連中は手が空いてるはずなのに!。あんな連中なんかより私のトコにきなよ! ね!」

「ちょっと待ってください……。今香織ちゃんに代わりますから……」

お、とうとう簪ちゃんが相手するのを放棄したぞ。

簪ちゃんから電話を受け取り、耳元へ。

「それで、どうなったんですか?」

「バインドカンパニーにお誘いしたら、ちょっと待ってって言われちった。てへっ」

「てへっ、じゃないですよ。まあ、入ってくれば嬉しいですけど……、そもそもどういふ事業を念頭においてるんですか? この前言ったとき聞きませんでしたけど」

そうだそうだ、忘れていた。そもそもバインドカンパニーって何する会社なんだろうか。私も社員ではあるけど、その辺分らない。

「ん、宇宙開発だよ? 宇宙はいいよー、わからないことが沢山あるんだから! 今のところは月にコロニー作ってるから、出来たら一度見に行こうねー!」

「……はいい!? ちょ、ええっ!? え、ええつと、あれ、これ
どついう反応すればいいの!？」

『あはは、香織ちゃんってばおもしろいね。まあそれはともかくと
して、かんちゃんにはISとか宇宙で使ったときに便利な道具とか、
色んなアドバイザーも兼ねて欲しいのだよ! 日本なんてちっちゃ
い所に留まつてるのはつまらないでしょ?』

うわぁ、これはなんとも……。

でも、なんだか聞いていたらわくわくしてきてしまう。

だつて宇宙だよ? まだ前人未踏の世界に手を出そうつて言っ
んだ、わくわくして当たり前だ。

「ということなんだけど。簪ちゃん、どうかな? お給料は出ると
思うけど」

『もちろん、バシバシ出るよ! 人件費とか考えなくていいぐらい
だしね!』

うん、まあハルもいるしね。

「……私の、お姉ちゃん。知ってる?」

「簪ちゃんのお姉ちゃん? ……ごめん、出てこないや」

「更識楯無つて言う、二年生。生徒会長で、織斑先生を除けば学園
最強つて呼ばれてる」

「そんな凄い人がお姉ちゃんなんだ……」

「でも、皆私をお姉ちゃんのおまけとしか見てくれない……。私を
私としてみてくれた人は、香織ちゃんと束さんだけ……」

どんよりと曇った目を伏せ、少し涙声になりながらそう呟く。

聞けば、更識家は裏の世界で動く暗部に對抗するために作られた、
『対暗部用暗部』なのだという。そのせいで昔から彼女は姉のスペ

アとして考えられ、常に姉よりも劣る者として見られてきた。

ISがこの世に生まれてからは、それが加速した。自由国籍をもち、自分で第三世代ISを作りあげ、ロシアの国家代表にまでなった姉と常に比べられ、いつしか彼女のことを本当の意味で見えてくれる人はいなくなったのだという。

「……………そっか。辛かったんだね、簪ちゃん」

「お姉ちゃんが悪くないのは、分かってる……………。だけど、だけどこんなの……………！」

『なら、尚更うちにおいでよ！ ISを作りたいなら、東さんと香織ちゃんが手を貸しましょー！ どう？』

「……………お話、お受けします」

その返事を受けて東ちゃんが喜ぶのを聞きながら、僕はきゅっと簪ちゃんを抱きしめる。

「私は、きつとお姉ちゃんの前に胸を張って立てるようになる……………」

「応援するよ。手助けする。一緒に頑張ろう？」

それからしばらくして、私と簪ちゃんは頬を紅くしてお互いを見つめていた。

……………うん、冷静に考えれば普通に抱き合っていましたね。いや、なんとなく気恥ずかしくなっちゃって。

「……………とりあえず、今日は切り上げようか？」

「……………うん」

微妙な、雰囲気。

香織ちゃんと別れて、自室へ入る。幸い、ルームメイトはまだ戻ってきてはいないようだった。

良かったと思う。泣きはらしたこの赤い目は、あまり人には見られなくなかったから。

ベッドに身を投げると、ぼふりと音がした。ベッドの空気が吐き出される音だった。

「……………なんでだろう」

本当に何故だろう。出会って間もないあの少女と一緒にいると、酷く落ち着いた。

焦りと不安でぐらついて、自分でもどうしようもないとささくれ立っていた心が、穏やかに静まっていくのが自分で分かる。

おかしい話だとは思いつけど、今日は自分で考えているよりも気分がいいようだ。普段なら考えることも億劫だと、直ぐに机に向かつて一心不乱にペンを動かしているのに。

普通なら言うてはいけないような暗部のことに、私自身の事情。それを全部話して、それでもなんでもないように笑っていた。笑ってくれた。

「……………惚れてる？」

私が彼女に惚れている、というのも……………、あながち間違いではないかもしれない。だって、私のことを認めてくれた人だから。

そう言った意味では、東博士にも感謝しないといけない。私が高みへ上がるための階段を作ってくれる人になりそうだから。私は、私の力でお姉ちゃんを超えてみせる。そのために国にこだわっていたら、きつと超えられない。

誰かに遠慮なんてするもんか。

それに、東博士の会社は宇宙を目指すと言っていた。香織ちゃんの話では、既につきにコロニーを建設中とか。

……正直、心が躍る。

私はアニメが好きだ。勧善懲悪系のヒーロー系は特に。そして、次に好きなのが、ロボットアニメ。……よく「女なのに変だ」といわれたけど、これは見るのをやめる気はしない。だって、カッコいいから。

ロボットアニメは大体宇宙が関係してくる。だから、うん。ワクワクしている。

ISが発表されたときにもドキドキした。やっと人類が宇宙に行くんだって、幼心にワクワクしたけど、結局世間の偉い人たちは自分達の利益しか頭にないようで、私のドキドキワクワクも、いつしか消えかかっていた。

全部がうまくいっていなかったその矢先にこの話が来て、その心に火が付いたのも正直な所だ。

だって、宇宙だ。未知の領域だ。そこにあの人が、世界を変えた東博士が先陣切って入っていく、その傍に居られるのだ。こんなにワクワクする話はない。

「……楽しみだな」

クスリと、思わず笑みが零れる。

ああ、本当に。楽しみだ。

いつしか、私は東博士のもたらす様々な規格外を思い浮かべては恍惚の笑みを浮かべ、結局ルームメイトに心配され、あまつさえ若

干痛い子という認定を頂いてしまった。

うん、自重しよう。

それと、本音にも謝らなきゃ。今まで避けててごめんなさいって。

『それでそれで、あの子との関係はどうなの香織ちゃん!?!』

「別に、普通のお友達ですけど?」

簪ちゃんと別れて部屋に入るやいなや鳴り出した携帯に出ると、案の定東ちゃんだった。

「というか貴女は私のお母さんですか? そんな私の関係に首突っ込まんでも……。あ、ちなみに今のほほんさんはどこかに出かけています。」

ぼすつとベッドに腰掛け、楽な姿勢へ。

「それより、あの月面コロニーってマジですか?」

『もちろん! 本社はあつちに移転予定だから!』

「というか、どうやって月に……」

『ISがどうやって武装を出し入れしているか、知っているでしょ?』

……えっと、確かISは武装を量子変換して出し入れしてるんだよね。

……え?」

「ま、まさか……」

『そうっ！ 私篠ノ之束は、世界初っ！ 量子変換転送装置を開発したのです！ しかも生物転送可能！』

「え、ええーっ!?!」

うわ、やったよこの人。とうとうやり遂げたよ……。というか早くない？ どうして会う度に、もしくは連絡取るたびに色んな発明が増えていくのかな!?!

「……うん、そろそろ束ちゃんのぶっ飛び具合に慣れてきたと思っただけどまだまだだったよ」

『あはははは、束ちゃんの小宇宙コスモが叫ぶのさ、世界を変えろとう!』

「いや、これ以上引っ掻き回すと色々まずいので自重してください」

……それで、簪ちゃんのは真面目なんですね?」

『当たり前だよ。それに、聞いただけでこの束さんに直感させるほどの努力の才を秘めているのは久しぶりなのだぜ!』

……まあ、とりあえずどうしようもない事態にはなって来たのかな?
はは、目の前が霞むや。

『カオリ、ハルからメールです』

『え?』

『お母様の暴走が止まりません。止められません、ごめんなさい』
だそうです』

……とりあえず、当面の目標は束ちゃんの暴走にブレーキをかけることかな。

『あれあれ、おい、どつたのー？』

……大丈夫かなあ。本当に。

第16話 BOUSOが止まらない(後書き)

なんか知らんけど一日で書けた。何故だろう。

香織ちゃん頑張つて束さんを止めることを目標にしたようです。

そして軽々と宇宙進出フラグ成立。簪魔改造計画開始。さて、どうなることやら。

あ、それとできれば感想お願いします。

一度感想が途絶えると、なんともいえない気分になるものですね…。

第17話 鈴さんが告白したようです。

今日は土曜日、午後は自由時間となっている。

午前中は理論学習だったから、体を動かすのには丁度いい。

という事で、とりあえず手始めに人気のないグラウンドを三週ほど走ることにした。

グラウンドの円周は一周五キロ、三週だから十五キロだ。フル馬拉ソンの三分の一ぐらいかな。

それでも鍛えてますから、このぐらいなら少しの息切れぐらいで走りきれぬ。最近はずっと体力もついてきたし、もう少しタイムを縮められるかな。

それが終わったら今度はアリーナへ。第三アリーナでふーちゃん達が一夏の特訓してると言ってたし。ちなみに、一五キロは一時間二〇分で走りきった。もっとタイム縮まったぜ、いいい。

アリーナでは、一夏が射撃武器を手に弾を的へ撃ち込んでいた。あれ、白式って刀一本じゃなかったっけ？

『どうやら、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？のライフルを借りているようですね』

『あ、そういうことか』

ISの武装は基本的に他人への譲渡は行えないが、使用許諾する^{アンロック}ことで登録している者全員が使えるようになる。

あのライフルもデュノアさんが貸し出しているんだろう。

しかし、一夏って射撃兵装向いてないよね。自分で撃つよりひたすら模擬戦して射撃兵装の癖を掴んだ方が早くないかな。

「ふーちゃん」

「あ、香織。馬拉ソン終わったのね」

「一五キロくらいならこんなものだよ。最近は体力も増えてきたし」「じゃ、何かあったら守ってよね?」「あはは、その時によるね」

さすがにそこに居ないのに守れっつのは無理だしね。まあ、代表戦みたいな失敗はしないように頑張るけどさ。

「それで、今は一夏の特訓だっけ?」

「そ。私は感覚的なことしか教えられないけどね。簪さんの方はいいの?」

「大体目処は立ったからね。あ、そうだ。明日って空いてる?」

そっつだそっつだ、これを言っておかないと。

前に本社に出たときに「幼馴染のこともお話しないかね!」って言っつたのを思い出した。今日連絡しておこっつ。

「明日? 特にすることないけど、何? デート?」

「いやいや、そうじゃなくて。束ちゃんかふーちゃんと話したいんだっつて。まあコミュニケーション能力皆無なんだけど」

「ん、わかつたわ。つまりデートね!」

「あの、ふーちゃん? そっついう発言するとふーちゃんはそっつ言っつた人に見られるし噂されるよ?」

「別にいいわよ、香織となら」

あっつけらかんと言わんでください、かっつこいいなあもっつ。

……っつて、え? えっつと、それ僕となら付き合っつていいっつてこと? え?

「ぶっつ、あっつははははは! どうしたのよ香織っつてば、ぼかーんとしちやつつて! 本気に決まっつてるじゃない!」

「え、あ、そうだよね、本気に……、え？」

へえええええええええ！？

「へ、あれ、え？」

「ちよ、ちよつと香織？！ 顔真つ赤じゃない、体調悪いならそう言いなさいよ！」

「ふえ、あ？」

「ああほら、こんなに真つ赤になって。どうしたのよ、風邪？」

「あら、どうしたのですか？ 香織さん」

「ああ、セシリア。香織、ちよつと風邪引いてるみたいなの。付き添いで出るから、一夏に言つといて」

「わかりましたわ。香織さん、お大事に」

「え、あふ、ふひゅん……」

あ、なんかもう、頭回んなくなつて……。

「ちよ、香織！？ 香織、香織いー！」

場所は変わつて鈴の部屋。というかアタシの部屋ね。

意識を失つた上に熱まで出ている様子の香織だけど、さすがに医務室に担ぎ込むと性別ばれちゃうかもしれないから、自室で看病することにした。

でも、風邪って様子じゃないのよね。咳も鼻水もないみたいだし。

「んっ、んんー……」

「ん、どうしたの香織」

「んー……」

……寝言かしら。無意識？

ともかく服はそのままベッドに寝かせておく。服といってもISスーツだけど。服は量子変換してしまっただけであるらしい。便利ねー、ISって。

それにしても、こうやって寝てる姿はほんとに女の子よね。という普段の立ち振る舞いを意識して女の子にしてるせいで、男ってことを時々忘れるわ。

「つと、お水汲まない」と

さすがにこれだけってのはまずいし、濡れた手ぬぐいを額に当てるぐらいはしといたほうがいいわよね。

下手に手を出すより、このぐらいの方がいいだろうし。アタシだって専門じゃないもの。

シャワールームで使っているプラスチック製の桶に水を張り、そこにタオルを浸してからぎゅっと絞る。これでも力はあるほうだから、これで十分かな。

その後タオルを額に乗せられるように折り畳むと、香織のおでこへ。これでよし、と。

「……なんだか、こうしているとアタシがお姉ちゃんになったみたいよわー」

香織が、弟か。えへへ、なんかいいかも。

ほら、毎朝部屋に起こしに行つて、なんだかんだ言いながら素直に従う香織とか？

あ、もしくは寝ぼけた癖でベッドに引きずり込まれちゃつて、起きるまで動けなくてそのまま二人で……。

それとも、アタシが起こしてもらつ側？ 香織がアタシのことをお姉ちゃんつて呼んで、漫画でよくある光景を再現したり……。

えへ、えへへ……。

やだもう、アタシ変態みたいじゃない？ いや、でも本当にそれはアリじゃないの？ どうなの凰鈴音、これはあり？

『ダメダメ、ダメよ鈴！ それ以上足を踏み入れちゃいけないわ！ 男女交際は清く正しく、こんなところで道を踏み外したら、お義姉さんが泣いちゃうわよ！』

おや、頭の片隅から天使鈴ちゃんが。

よく絵画とかでありそうな天使が着ている、あの白い布のような服と、天使のワツカをつけている。

『はん、何言つてるのよ！ 世の中は弱肉強食、強い者が勝つものよ！ 欲しければ奪う、そうでしょうが！』

今度は悪魔鈴ちゃん？ やだ、こういうコスプレいいかも。可愛いじゃない。

頭からはよいんとふよふよの悪魔の角のようなものが伸びているけど、よく見ればそれはカチューシャのようだった。

『ダメだつたら！ いい？ 鈴は香織とどんな関係になりたいの？』

「そ、それは、こ、ここ、恋人とか、ふーふ、とか、えへへ……」
『だつたら！ まずはゆつくり、焦らず慎重にいくべきよ！』

『はあ！？ あんたバツカじゃないの！？ 香織はこんなに可愛い

のよ!?! 他の狼に食われる前に、鈴が食べてあげるべきでしょうが!」

「やん、うふふ、食べるだなんてそんなあ」

脳内で激しくぶつかり合う白と黒のアタシ。

あ、でも、うん。今なら……。

『しまった、そうこうしている間に何を血迷ったのか鈴が口付けを!?!』

『よし、いけ、ぶちゅつとやってしまえー! ついでに既成事実を!』

『だ、だめだったら! そ、そんなえっち、なことは許さないんだからー!』

「い、いただきます……」

『わーわー、鈴ー! ダメだったら、こらーっ!』

ふよん、と唇に柔らかな感触。

(うわ、やわらかい……)

蕩けそうなほどの幸福感が体を駆け上る。というか顔を赤らめた香織がエロいんだけど。何この生き物、食べていい? いい?

『あ、ああつ、ふ、不潔っ! 不純異性交遊はんたーいつ!』

『いよっ、よくやったわ凰鈴音! そのまま頂いちゃいなさいっ! って、ちょっとちよつと、何添い寝してるのよ!?!』

「ふあ、暖かい……」

えへへ、香織暖かい……。

おやふみい……。

「はっ!？」

がばっ! と起きようとして隣にいる誰かに阻まれた。

「って、ふーちゃん? なんで腕組んで寝てるの、というか僕は何でここにいるの……?」

『カオリが顔を真つ赤にして倒れた後、鈴が香織を背負って自分の部屋まで運びました。そして今に至ります』

凄くがつつり端折られたイヴの説明を何とか理解して、それから部屋に備え付けられている時計を見る。

七時半。食堂がしまるまで、残り三〇分である。

そして、とつても空腹感が押し寄せている僕の胃袋は、明日の朝までもちそうにありません。

「仕方ない、起こそう。ふーちゃん、起きて」

「んん、香織い……?」

「そうだよ、ほら起きて」

「やあだあー、んう」

ひしっ。

普段のふーちゃんからは考えられないような猫撫で声と共に、僕

の首元へと抱きついた。

え、ええ、なにこれ、何がどうなってるの？

「ちょ、ちよつとふーちゃん!？」 寝ぼけてる!？」

「んー？ あらひの弟なんらから、あらひの言うこほをきひなひゃい!？」

「あー、寝ぼけてるや。ふーちゃん、僕だよ。香織だよ！ 弟って何のこと!？」

「……ふえ、え？ かおり?」

あ、やつとぱつちり目が覚めたようだ。ん、なんだかぎりぎり見える耳が真っ赤？

「あ、や、こ、これは、その、違うのっ！ 既成事実とか子作りしようとかそんなことじゃなくひえ!？」

「き、既成、事実?」

「ちが、違うのーっ！ うわあああん!」

なんか凄いいこと言ってると思ったら泣き出したーっ!？」

うっっ、どうしようどうするべき!？」と、とりあえず背中をぽんぽんと叩いて、うん、あやす感じで……。

「大丈夫、大丈夫だよー……」

僕は保母さんじゃないんだけどなあ……。

というか、なんで急に泣き出したの？ うーん、ここからじゃ顔が見えないなあ。一回離れたけど、もう一回抱きしめちゃったし。それから、十数分後。

「うっっ、ごめん香織……。ふがないお姉ちゃん……」

「いや、まだ寝ぼけてる？」

「う、ごめん。それより香織、熱は？」

「熱？ いや、ないけど……」

「そう、よかったーっ！ あんた、顔真っ赤にして倒れたからどうしたのかと思っただのよ？」

「それで看病してくれてたの？ ありがとう、ふーちゃん」

「別にいいわよ、そ、それに、キ、キキ、キスも、したし」

……うん、今なんて言ったこの子？ キス？ KISS？

魚のアレじゃなくて、口付け？ 接吻？ マウストウマウス？

「は、はええ！？」

「何変な声出してるのよ？ あ、そ、それともまさか、い、嫌、だったの……？」

「ええっと、あの、嫌じゃ、ない、けど……。その、突然だったし……、大体、倒れたのもふーちゃんが僕と付き合っるのが本気とか言っただけから……」

「か、からかってなんかないっ！ あ、アタシは香織のことが、その、好き……。だから……」

顔を真っ赤にしてそう反論するふーちゃん。

えっと、好き？ 今度はキスの反対で？ え、僕のことを、ふーちゃんが？

……さて、一旦落ち着こう。K O O Lになるんだー瀬香織。

「へ、返事はまだいい、から。うん。アタシも、その、まだ落ち着いて、ちゃんと告白したわけじゃないし……」

な、なれないよ！ クールになんてなれないよ！

ああもう、なんか真っ赤になったふーちゃんは普段の快活さが嘘

みたいに女の子らしいというかしおらしいというか、物凄い気恥ずかしいんですが!?

「うー……、ああもう！　とりあえずこれで話終わり！　ご飯食べましょ！」

「え、ええーっ!？」

「いいじゃない、アタシは香織分充填したし」

「え、なに香織分って」

「カオリニウムとも言っわ。葵義姉さんは一度の充填で一ヶ月は生き延びられるって言ってたけど、アタシは二週間が限度ね……」

いや、そんなことを聞きたいのではなく。

そもそもその摩訶不思議な成分そのものについてご教授願いたいです。

「アタシは香織と普段から一緒にいるからこれで済んでるけど、葵義姉さん、家に帰ったときってすぐに抱きついてなかった？」

「……あ、言われてみれば」

「カオリニウムが切れる前に、そうやって補充してたのよ。アタシもこうやってるとありがたさが分かるわぁー」

「って、いやいやそうじゃなくてさ」

「いつけない、もう食堂閉まっちゃう!？　ええい仕方ない！　香織、自分の部屋から財布持ってきたさい！　購買行くわよ！　夜食を確保しなきゃ！」

あ、もう食堂諦めたなこの子。

でも、もう七時五〇分だし、今から食堂に行ってもご飯は食べられないかな。

「ん、わかった。じゃあロビーでね」

「オツケー、急いでね！」

ふーちゃんと別れると、歩きながら量子変換されていた制服を元に戻す。あ、このやり方便利かも。

部屋に戻っても人気はない。のほほんさんはお風呂か食事のどちらかだろう。毎晩一〇時には寝ているし。

自分の机から財布を取り出すと、ロビーへ。そこには、既にふーちゃんが待っていた。さすがもともと自室にいただけあって早い。

「ふーちゃんごめん、待った？」

「そんな時間でもないでしょうに。何食べる？」

「んー、お肉？」

「太るわよ」

「あんまり太らない体質なんだよねえ。増えても筋肉だし」

その言葉に、ふーちゃんはなにやら目を見開いている。ん、何かおかしいことを……、あれ？ これ中学時代にあったな。

あの時は確か後ろから胸を鷲掴みされたりお腹に抱きつかれたりしたわけですが。

「この、なんてうらやましい体質なのよーっ！」

「ひゃあっ!?! な、なにするのふーちゃん!?!」

「ぬあーっ! アタシなんて、幾ら食べても身長伸びないのにー!

あんたは苦労知らずでその体系維持してるわけっ!?!」

「そ、そんなこと言われても、ひゃんっ!」

ちよ、ふーちゃん、お腹はダメだって!?!

「あ、ちよ、あは、あはははは! ふ、ふーひゃ、やめっ、あははははっ!」

「このこのこのこのこのーっ！ 全国の体系維持に悩む女子学生の恨みよーッ！ ったあっ!？」

もうダメかと思われた矢先、後ろからスパァン！ と聞きなれた音が。

し、死ぬかと思った……。

「何をしている。全く、ロビーでいちゃつくな馬鹿者が」

「い、いちゃつくだなんてそんな、えへへ……」

「何を嬉しがっている……。まさかお前、マゾか？」

「ち、違いますっ!？ って、織斑先生は何でここに……?」

「一之瀬が倒れたと聞いたが……、ふむ。どうやら間違いは起こっていないようだな」

……あの、千冬さん。間違いつてーのはつまり、ナニをあれしてつてことですよな？

「まあそういうことだが、何もないようだからまあいい。一之瀬、体は大丈夫か？」

「あ、はい。ふーちゃんから告白されて、パニックって倒れただけです」

うーん、これってヘタレなのかな。それに、ふーちゃんのこと前はちゃんと真っ直ぐ見たのに、今は目が見れないし……。

なんて考えていると、千冬さんはぜはぁー、と溜め息をつく。幸せ逃げますよ？

「まあ、青春しているようで何よりだが、間違っても間違いだけは起こしてくれるなよ。で、今から購買か？」

「な、何故分かったんですか？」

「財布持って出て行くつもりとしていけば大体分かる。購買は九時までだから、そう焦らなくてもいいだろうが……、丁度いい。ちょっとお使いを頼むか」

おや珍しい、千冬さんがお使いを頼むなんて。

となりのふーちゃんもUFOを見たかのような表情をして、叩かれた。

「ひたい……」

「大丈夫？ ふーちゃん」

「ううー、撫でて撫でてー……」

「ああ、はいはい。痛かったねー」

「で、お使いだがな。スルメと枝豆のパックを買ってきてくれ。釣りはやるう」

なんて言いながら、千冬さんはどこから取り出した財布から千円札を一枚抜き取って僕に渡した。

ふーちゃんの頭を撫でながらそれを受け取ると、片手で器用に二つ折りにしてポケットへ押し込んだ。というか、こつ言つのはいいんだろうか。

「なに、気にするな。ただし、あまり遅くまで騒いでいるんじゃないぞ」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

「さて、では私は部屋に戻る。スルメと枝豆、頼んだぞ」

「はい、おやすみなさい織斑先生」

会釈よりも少しだけ深く礼をすると、千冬さんは軽く笑って部屋へと戻っていった。

うわ、かっこいいな……。僕もあんな風に爽やかに出来ればいい

けど、まあ無理だろうなあ。

「って、ふーちゃん。いつまでこうしてるの？ はやく購買に行こうっ！」

「そうだったわね。うう、もったいない……」

「もう、あれくらいなら言ってくればいつでもしてあげるのに……」

「ほんとに!?!」

うわあ、凄い食いつき方だ。そんなに頭撫でられるの好きなのかな？

……それとも、僕だから、かな。そうだったら嬉しいけど、やはり何か気恥ずかしくもある。

「ほんと。ほら、早く行こ」

「何してるのよ香織、早く早く!」

「うって言った矢先にこれか。わかってるよふーちゃん!」

気恥ずかしさを隠すように、笑みを作って先に行っているふーちゃんへそう返す。

よし、頑張れ『私』。もう一息だぞ。

……でも、本当にどうしようか。ふーちゃんとのこと。

第17話 鈴さんが告白したようです。(後書き)

盛大なネタバレとともにお送りしました、今回。

やけに更新が早いつて？ あはは、お昼過ぎから書き出して、気づいたら六ページ目に突入してたよ！

いくら場面転換が二回あったからといって、これは……。

あ、でも更新は不定期ですので、こういった感じに早くなることもあれば極端に遅くなることもあります。ご了承ください。

鈴に告白されてしまった香織は、その悩みとともに鈴、簪の両名を連れて自宅へと戻った。

そこに待っていたのは……？

次回、乞うご期待！

作者の書く鈴ちゃんも男勝りで姉後肌、だけど気づけば乙女チック。そんな彼女を目指しています。ほら、流れでキスして嫌われたときのこと考えて泣いちゃう辺りとか。そんな鈴ちゃんが可愛いと思った人は感想をどうぞ。

……あれ、のほほんさんは？

夜のパート、はさむ？

閑話 パジャマパーティーをしましょう

「ただいまー」

「あ、おかえりいかおりん。倒れたって聞いたけど、大丈夫？」

夜食（半分くらいお菓子類）を買って部屋に戻ると、既にのほほんさんが戻ってきていた。

相変わらずあの黄色いきぐるみのようなパジャマだった。袖だぼだぼですね。

「はい、ふーちゃんのところまで休ませて貰ってました。心配掛けてすみません……」

「んーん、いいんだよ。学生のうちは心配掛けるのが仕事だってお母さんが言ってたしい」

私はよくお姉ちゃんに「あんたはもっと甘えなさい！」と言われてたなあ。でもお姉ちゃんに悪いし、あんまり甘えるのって得意じゃないんだよね……。

と、のほほんさんが私の持つ袋に興味を示したようで、そちらに視線を向けていた。

「あ、これですか。休んでいたうちに食堂が閉まってしまったのでふーちゃんと一緒に夜食を買ってきたんです。その合間に今日はパジャマパーティーでもしないかって」

「え、でも織斑先生に怒られるんじゃない？」

「枝豆とスルメのお使いを頼まりましたので、少しくらいなら見逃してくれるそうですよ？」

「わあ、織斑先生太っ腹だねえ」

ちなみに、枝豆とスルメはきちんと先生に渡してきた。お釣りもちゃんと返そうとしたんだけど、それはやると言って聞かなかったので、致し方なくふーちゃんと二人で分けたのです。

さて、どうやらのほほんさんも乗り気なようなので、ちゃちゃつとパーティーの準備を。

お菓子類はある程度陳列して、飲み物はもう冷えてるけど一応冷蔵庫へIN。

「それじゃあのほほんさん、私少し汗を流してしまいますね。ふーちゃん達が来たら入れてあげてください」

「わかったよおー」

のぼーんと笑ったのほほんさんに笑みで返し、パジャマを持って脱衣室へ。もちろん偽パイとブラは寝るときも使います。じゃないとばれるからね！ちなみにこのブラ、背中部分が蒸れたり擦れて肌を痛めたりしないようになっていて、便利だ。すっごい便利。

シャワールームに入ると、お湯で汗を流した後に髪を丁寧に洗う。これは雑にやると色々ダメなんだよね。というか、やったらお姉ちゃんにはばれてお風呂に引きずり込まれたことがある。ほんと、お姉ちゃんって自分のことには無頓着だけど、私のことはやたらと構うんだから。

「つと、あんまり浴びててもあれかな」

気づくと、一〇分以上シャワーを浴びていた。

慌ててお湯を止めると、脱衣室で体を拭いてから偽パイ&ブラジャー装着。パンツは見られないし、トランクスでオツケー。どうせ朝になったらISスーツに着替えるし。

その上にパジャマを着たら完成かな。

「のほほんさん、あがりましたよー」

「あ、香織。お邪魔してるわよ」

「お邪魔してます、一之瀬さん！」

部屋へ戻ると、既にパジャマ姿のふーちゃんともう一人の方がいた。

「というか、髪下ろしたふーちゃんは新鮮だなあ。」

「えっと、それでこっちの方がルームメイトの人かな。」

「あ、いらつしゃい二人とも。えっと、ふーちゃん、こちらの方がルームメイトの方？」

「鈴のルームメイトの谷津坂楓です！ やつさか かね どうぞよろしく！」

「あ、はい、よろしくお願いしますね。一之瀬香織です」

「ほほう、お胸様もそこそこお有りのごようしでゆっ！？」

ズゴンツッ！ と恐ろしい音を立てて谷津坂さんが地面に叩き落とされる。え、っと、大丈夫？ 死んでないよね？

「楓？ アタシ言ったよね？ アタシの幼馴染にセクハラすんなって？」

「り、りりり鈴さんっ、待った、ごめん、嘘、嘘だつて！ 冗談だよ冗談！ そんな、マジに怒んなくなつて！？」

「あーら、別に怒ってるわけじゃないのよ？ ただ丁度いいサンドバックがあるなあと目を輝かせてみたりしてるだけだから」

「た、たしけて香織ちゃん！？」

「あ、のほほんさんこれ美味しいですよ」

「あ、食べたーい」

「はいどうぞ。あーん」

「あーん、んんー、おいひいねえ」

「いちやいちやしてるうー！？ ちょ、助け、ぎゃあああああ！！」

なんだか後ろで鈍い音が聞こえるけど、気にしちゃいけないよね。別に今のふーちゃんが怖すぎて目を向けられないとかじゃないし、体で向こう側を見えないようにしてのほんさんの視界からあの惨劇をカバーしようとしているわけじゃない。断じてない。

数分後、そこには人であった何かと、血糊を頬に飛び散らせて壮絶な笑みを浮かべているふーちゃんがいた。

「ふーちゃん、終わった？」

「ええ、終わったわよ。アタシの幼馴染にセクハラかまそうとした愚かなクラスメイトへの天誅はね……」

「楓さん、安らかにお眠りください……」
「し、死んでない、しい……」

あ、生きてた。

まあそんな感じでパジャマパーティースタートです。

ちなみに、楓さんの容姿は黒髪ロングの眼鏡さん。眼鏡はレンズのフレームがないタイプだそう。ちなみにふーちゃんの前の二組代表でもあったらしい。

さて、この辺で皆のパジャマ姿をお披露目していこう。

まず私から。私は水玉模様のパジャマで、汗とかでも透けない素材で作られているから、ひん剥かれない限りは男だとバレる心配はない。

のほんさんはさっきも言った通り、昔の大人気ゲーム&それを原作としたアニメのマスケットキャラクターのようなパジャマ。きぐるみって言った方が早いかもしれない。ちなみに袖はダボダボ。

ふーちゃんは暗めの水色のTシャツに黄土色の短パン。一言で言えばラフな格好だ。

で、楓さんは色鮮やかな紫色の甚平。なんで、紫……？

ちなみに全員髪は結わいてません。痛んじやうからね。

「よし、それじゃあパジャマパーティー始めましょうか！」

「私とふーちゃんは、先にご飯だね」

「そうね。楓、のほほんさん、先にお菓子つまんでいいわよ？」

「おー、ありがたやー」

「ありがたやありがたやあー」

ちなみに、のほほんさんはもう楓さんとお互いに自己紹介したらしいから割愛です。

さて、それじゃあ、と。先に飲み物出しておこうかな。

「はいどうぞ、ウーロン茶」

「ありがと、香織」

「ありがとねえ、かおりん」

「あ、ありがとう香織ちゃん」

全員に行き渡った所で食事スタート。

購買のお弁当って、意外と美味しいんだよね。ちなみに、私の今日のお弁当はハンバーグ弁当です。ふーちゃんは鮭弁とサラダ。私は夜でもがつつり食べます。

「いいなあ香織ってば」

「ん、ナニが？」

「だって、食べても太らないんでしょ？」

「まあ、運動もしてるしね」

さすがにきちんと運動して、三色栄養バランス考えて食べてるのに太ったら嫌だし。

ん、ハンバーグ美味しいなあ。今度はレシピ変えて作ってみようかな。

「あ」

「ん？」

「ほい、っと」

ふーちゃんのほっぺたにご飯粒がついていたのでとりあえず取ったけど、捨てるのはな。

食べちゃえ。えいつ。

「あ、ああ、あえ、ええっ!？」

「ん、どつたのふーちゃん？」

「あ、あんた、それ、あたしのほっぺの……!？」

「うん。……うん？」

うん、そうだよ。これふーちゃんのほっぺたについてたお米様だよ。

で、それを私が食べた、と。

……よし、とりあえず布巾で口を拭って、これでよし。

「んぐぬんんんーっ!! んーっ!!」

「ちょ、ちょっと香織!?! ちょっとー!?!」

ベッドに顔を押し付けて絶叫しておいた。

いや、何してるのさ私!?! さっきあんなことがあったばかりだ
というのにまたこんな……!?!?

「若い者は元気ですなあー」

「ほんとに、羨ましい限りで」

「こらそこ二人い! 茶化さないっ!」

あ、ふーちゃんが怒っている。
ふむ、しかしこれは私の失態でもあるし……。
そうだ、こういうときには。

「ふーちゃん」

「え？」

「ん」

「……え？」

「ん」

現在、わざとほつぺたに米粒をつけて待機中。お互い取ればそれでお相子だよな！

「……えつと、あむっ」

わたしの頬についていた米粒を手で取ると、ふーちゃんはそれを口へ入れる。

うん、これでお相子だ。おあい、こ？ いや、いやいやいや、待て待て私、まずお相子つて時点でおかしいぞ？ どうしたんだ今日の私！？ なんか調子狂いっばなしなんですけど！？

「あ、かおりんずるーい、私もやるー！ とつてー」

「なぬ、ならば私もだ！ 鈴、とつて！」

そんな私たちの様子を見て、のほほんさんと楓さんも私たちの弁当から米粒を掠め取ると、わざとらしく頬につけた。いや、いやいや。

「……どうすねば」

「とりあえず、とつてあげねば？」

うん、まあ放置って訳には行かないし、とってそのまま捨てるのはお米を作ってくださった農家の方々にあれなので、食べますけども。

「あむっ」

「ひよいっと」

「おおー、なんだか楽しいよお」

「あ、これ快感かも……」

これ、意外と恥ずかしいんですが？ というかのほんさん、もう一回やろうとしないの。私のご飯減っていくから。

とりあえずその場はそれで落ち着き、まあ私の心中が大荒れの中、食事を済ませると、本格的にパーティー開始である。

「さて、と。それで三人とも、今気になる人はいる？」

「突然何よ、藪から棒に」

「いやー、やっぱり狙いは織斑君かなーと思って。一番遠いんは私な訳だしさ？」

「別に、一夏は友達だけどそういう感じじゃないわよ。どっちかっていうと昔馴染みの男友達ね」

あ、一夏とふーちゃんも幼馴染だったんだよね、確か。

不思議な縁もあったものだ。

「じゃあ、香織ちゃんは？」

「え、私ですか？ そうですね……、まあ一夏はないとして、今気になっている人は、特にはいないですね」

「その割には、鈴のご飯粒取ったときにやけに反応してなかったー？」

「え、ええつと、あれはその、ですね！」
「はいはい、わかったわかった。ここじゃ日常茶飯事だし、別に変な目で見たりはしないよ。お幸せにねー？」

ああ、こんにやる勘違いしてるぅー！

でも好きというか気になる人としてはそうだし……、あーもう、どうすればいいのさ！

しかもふーちゃんが顔真つ赤にしてるし!? ほら、そういう反応するからそういう系の人だって思われるんだぞ!? あ、でも私とだったら勘違いされてもいいって言ってたっけ……。

「あ、顔真つ赤だー」

「で、のほほんさんはどう?」

「うーん、おりむーはカツコいいけど朴念仁だし、かおりんの方が好きー」

「その好きはどっちの好き?」

「友達の方かなー? 今は」

今は!? じゃあもしかするとそれな感じになりかねないんですか!?

「よかつたわね香織、愛されてるじゃない」

「あれ、ふーちゃん意外と余裕そうだ……」

「もうカオリニウム補給してるし、心に余裕が出来てるわ」

「だからそのカオリニウムって何!？」

「香織と接することで補給できる成分よ。私の心の安定に欠かせない」

うん、全く分らん。

というかこれってパジャマパーティーなのか? ただのガールズ

トクな気がしてならないんですけど。

「なるほど、じゃあさっき抱き付いて寝たときに補給したのだね
」！」

「見られてた!？」

「うんうん、私は理解ある若者だから！ 存分におやりなさい！」

「ちくしょう、味方がいませんっ!？」

「こら香織、ちくしょうなんて使っちゃダメでしょ？」

「諸悪の根源が何を言うか!？」

味方が、味方がいない！ もうどうすればいいの!？
いや、楽しいけど！ 楽しいけどどうするのこれ!？

で、結局これは日付が変わるまで続きましたとさ。
本当に、女子のパワーって凄い。

今日の教訓：不用意な発言、行動は身を滅ぼす。

閑話 パジャマパーティーをしましょう（後書き）

はい、数時間も経たずに更に投稿。異例の投稿ペースである。これからはこういった閑話もたまに書けたら投下していくので、その時点でヒロインポジションにある人と香織とのいちやいちゃ、または日常が見たいという場合は要望を出してくれば、書ければ書かせていただきます。

香織に「ぎゃおおおん!？」て言わせようか迷った。

男の娘繋がりだけど、作者はそっちの本編はやってません。アイマス難しす。

あ、楓さんはオリキャラです。作者は二巻までしか原作を所持していません。その上三巻は一度読んだだけです。それ以上は、読んでいないのです。

出てないよね、鈴のルームメイト？ あれ、出てたっけ？ 出てたらこっちはパラレルということで一っ。

第18話 Bind Company Second !!

夜は明けて日曜日、僕は一人で寮のロビーにいた。

「んー、まだ一〇分前だし、もうちょっとかかるかな」

朝八時五〇分からなぜこんなところにいるかというところ、今日は本社までお出かけだから。

ちなみに東ちゃんにはさっき連絡したので問題なし。

それにしても、朝のロビーって静かだなあ……。ちよっと落ち着くかも。

「香織、おはよ」

「あ、ふーちゃん。おはよう」

「更識さんは？」

「まだみたいだね」

やってきたふーちゃんと一緒にロビーの椅子に腰掛け、一息つく。

「香織、はい」

「え？ あ、ありがとう」

ふーちゃんがぐいっと差し出してきたのは、ちよっと不恰好なサンドイッチだった。

「時間がなくてそれぐらいしか作れなかったけど、朝食だしこれで我慢してね。向こうで何か食べましょ」

「ありがとう、ふーちゃん。コーヒー淹れてくるね」

「あ、私ガムシロップだけでいいわ」

「わかった」

ロビーは休憩所も兼ねていて、簡単な食事くらいならここで取れるようになってる。食堂以外で寮の中ではここと屋上が憩いの場として人気が高いのだ。

備え付けのコーヒーマーカーでコーヒを淹れると、コップに注いでお盆に乗せ、ガムシロップを二つ、ミルクを一つ持って戻る。

「はい、コーヒとガムシロ」

「さんきゅ」

コーヒーマーカー以外にコップに入れるタイプの自販機や普通の缶やペットボトルも売ってはいるけど、そっちはやはりコーヒーマーカーと比べて味が落ちる。寮監の先生はもっぱらこっちらしい。二人で軽いブレックファストを楽しんでいると、廊下の向こうからゆっくりとこちらへ歩いてくる人影が見えた。

「あ、おはよう簪ちゃん」

「おはよう……。えっと、鳳さん、初めまして。おはようございませす……」

「ん、初めましてでおはよう更識さん。私のことは鈴でいいわよ」「えっと、じゃあ私のことも、簪で、いいです……」

おずおずと言った様子で声を出す簪ちゃん。やっぱり、ふーちゃんとは初対面だから喋りづらいのかな。

「りょーかい。何か食べてきた？」

「いいえ、何も……？」

「それじゃ、はい。私の作ったサンドイッチ。形は不恰好だけど、味は保証するわ」

「あ、ありがとう……」

「それ食べたら行くのか。飲み物いる？」

「うん、大丈夫……。ありがとう……」

「いいえ、どう致しまして」

うわあ、なんかサンドイッチ両手で食べてる簪ちゃんって、小動物みたいで可愛い……。

なんというか、こう、抱きしめたくなるような、撫で回したくなるような、そんな衝動に駆られる。

もきゅもきゅとサンドイッチを頬張る簪ちゃんをふーちゃんと二人でゆつたりと眺めた後、食べ終わった簪ちゃんと共に学園を出る。

「ところでさ。篠ノ之博士とは私話してないんだけど、大丈夫？」

「大丈夫。というか大丈夫にさせるから。東ちゃんって普通にコミュニケーション能力皆無だから」

「うん……。それは話してて私も思った……。でも、なんだか楽しい人」

「それなら、まあ大丈夫そうね。変なことされてないわよね？」

「いや、それはさすがにないよ」

道中こんな感じで話しながら我が家に着き、とりあえず迎えを待っていてよと家に上がると。

「あ、お帰り香織ー」

「お帰り香織ちゃん！ 待ってたよー！」

ボタン。

「……おかしいな、ウサ耳が二人いたように見えたんだけど」

「香織、戦わなきゃ、現実と」

「……ふぁいと」

うう、二人が今は恨めしい……。

よし、気を取り直してもう一度、扉を開ける。

「あ、お帰り香織ー」

「お帰り香織ちゃん！ 待ってたよー！」

「リメイクのつもりでしょうけど慌てて座りなおしたせいで衣服乱れまくってますよ」

うん、やっぱりお姉ちゃんと束ちゃんでした。

お姉ちゃんがなんで朝一に出てきた僕より早くうちにいるのかとか、どうして束ちゃんがうちに上がりこんでるのかとか、まあ色々聞きたいことはあるけども。

「まずこのでつかい筒状の物体は何！？」

「量子変換転送装置、俗に言うワープマシンだね！」

「だと思っただよこんちくしょうっ！ 束ちゃん、少し自重して！」

ハルからこの前お母さんが止められない助けて的なメールが来たんだからね！？」

「えー、ハルがそんなこと言ってたの？ んもう、言ってくれれば構ったのにいっ」

「いや、止まれよ。で、これで本社まで行くんですか？」

「そうだよん。ちなみにあーちゃんもうちの社員の仲間入りだから！」

おおう、突っ込みどころが。

あーちゃんっていうのは、多分うちのお姉ちゃんのことだな。で、お姉ちゃんもバインドカンパニー所属、と。まあこれはいいや、束ちゃんの暴走は今に始まったことじゃない。

それで、とりあえず簪ちゃんも確定してて、じゃあ……。

「とりあえず、ふーちゃんとお話してください。自分でお話したいって言ったんですから、ちゃんと話して下さいね?」

「はい! で、君がふーちゃん?」

「鳳鈴音、鈴でいいです」

「じゃ、りんちゃんだー! 平仮名なのがポイント!」

「は、はあ……」

「それで、りんちゃんも中国の代表候補生なんだよね? まあ東さんにはそんなことどーでもいいんだけど、中国でこのままくすぶってるのと、香織ちゃんと一緒に宇宙を目指すの、どっちがいい?」

「後者よ、即決で。ただしうちの母親の身の安全と生活レベルは保証して」

「オツケーオツケー、その辺は中国に適当な技術投げてやれば勝手に食いつくだろうから、全然無問題だね! よーし、引き抜き成功だね、さっすが私い!」

めまぐるしい。

えーっと、あれ、中国代表候補生が候補生やめてうちの企業に就職したよ? ヘッドハンティングってやつかな?

でも、その場合ってりんちゃんのISは没収されちゃうんじゃない?

「その辺はねー、うちのISコア一個とこれの今までのデータ全部やるから寄越せって言っとけばいいよ。国動かしてる連中は大体目先のことしか頭にないからねー? うへへ、可愛い女の子が一気に三人増えたよ!」

「その笑い方親父臭いんで止めてください。で、本社行くんですよ」

「そうだねー。一応皆の体とか調べてこれからの専用IS製作の参考にしておきたいし。かんちゃんは、自分でIS組みたいんだった

よね？ ならうちの機材とデータ全部自由に使っていいよ！ 私は社員には優しい社長さんなのです！」
「丸投げとも言いますけどね」

凄いなあ、普通の企業だったらこんなことしないよねえ。

なんて思っていると、突然東ちゃんが手元のハンドヘルドコンピュータへ向けてカタカタと何かを打ち込んでいる。

「……………何してるの？」

「んー？ IS学園のコンピュータにこっそり忍び込んで、三人分のデータをちょこっと拝借しているのですー。また写真撮影とかだるいでしょ？ だから、ここでちゃちゃっとデータ造って本社に送って、ハルに社員証頼んでおこうと思ってさー」

「ああ、なるほど。千冬さんにはれないように、は無理ですね。今度あつた時はご愁傷様です」

「酷い！？ 少しは上司を助けようという気概はないの!？」

「あははー、残念ながら」

うん、東ちゃんはこういふ扱いでも問題ないみたい。

というか問題ないね。絶対。本人もあんまり気にしてないし。

そんなこんなで粒子変換転送装置、これめんどくさいな……。ワープ装置へと乗り込んだ私達。

「で、ほほいのほいっと。気づいたら向こうについてるし、事故で融合しちゃったりとかもないから気楽にしててねー」

「最後の最後に怖いこと言うわねこの人!？」

「でも……………、たぶん大丈夫……………」

「簪、その根拠はなに……………?」

「……………勘?」

「当てにならないっ!？」

「よし、いくだべー　あ、ポチツとな」

そんなグダグダな雰囲気と共に私たちの意識が一瞬消し飛び、そして気づいたときには……。

そこは本社でした。え、何これ早い。

「とーちゃーくっ！　ただいまーハル！」

『お帰りなさい、お母様、香織、イヴお姉様。そして更識簪様、凰鈴音様、一之瀬葵様、ようこそ、バインドカンパニーへ』

「……人工知能？」

『はい。私はHAL-30000。お気軽にハルとお呼び下さい』

「たっちゃんが言ったのってこれかー。よろしくね、ハル！」

「にひひー、凄いでしょあーちゃん！」

「凄い凄い、アニメみたい！　さっすがたっちゃんだ！」

「わっはっはっは、もつと褒めたまへー！」

……なんで束ちゃんとお姉ちゃんが意気投合しているんだ。

ああ、あれか。シスコンとブラコンで被ったのか。そういうことにしておこう。良くないけどそういうことにしておこう。なんか束ちゃんに関しては突っ込んだら負けな気がしてきた。

そんな私を尻目に、簪ちゃんは周囲の機材や雰囲気に目を輝かせて大興奮、ふーちゃんも表には出さないけど結構テンション上がってるみたい。

「束社長、貴女凄い……。ロマン、分かってる」

「おおっ！？　もしかしてかんちゃんはそういうの大好きかな！？」

「うん……。特に内部に銀形の色を使っている辺り、近未来のこだわり」

「そうなんだよ！　香織ちゃんは突っ込んでくれなくてねー。ほら見て見て、中央のこういうでっかいディスプレイってイカしてない

!？」

「……ひしっ」

「ひしっ!」

あ、簪ちゃんと束ちゃんが抱き合った。特撮とかロボット好きだ
って言ってたからね、簪ちゃん。通じ合ったんだろっねえ。

いや、というか私の周囲にはふーちゃんしか救いがないんだろっ
か。っとう!？」

「お、お姉ちゃん!? なんで突然抱きついてるの!？」

「カオリニウムが不足してるのよおー……。学校じゃ学園違っから
中々会えないし、寮でも織斑先生が目を光らせてるしいー! んは
あー、やっぱり生はいいわねえー」

「なんか親父臭いつ!? もう、お姉ちゃんってば……。補給した
ら離れてよ?」

「んー、りよーかい」

……やばい、疲れてきた。

『ふぁいと』

『うん、がんばる』

イヴも応援してくれてるから、頑張ろう。

というか誰もイヴに関しては突っ込まないんだね。

「ふああ……………」

「ふいー……………」

東社長と一緒に、食堂の机にべたりと突っ伏す。ひんやりとして気持ちいい。

やっぱり、ここに来て正解だった。こんなにいい環境で仕事が出るなんて、まるで天国だ。

なんとというか、この会社全体が秘密基地染みでとてもいい。大好き。

話しの途中でワープ装置のことや月への移設計画のことも聞いたけど、やっぱりこの人は凄い。私の冷め切っていた好奇心と夢を、あつという間に溶かしてくれた。

「あ、そう言えば社長……………」

「ん、なーに？」

「さつきハルが言っていたイヴお姉様って、誰ですか？」

「私が鼻につけた、香織ちゃんのサポートAI。香織ちゃんってほら、男の娘じゃん？ 色々フォロー必要なんだよね。おもに電子方面で」

……………ん？ 男、の子？

待て、今そう言った？ 香織ちゃん、が？

「……………香織ちゃんは男の子？」

「あれ、言っただけだったっけ。そう、香織ちゃんは男の子だよ。そしてそれを隠して学園に通ってるの。今国の連中に見つかる色々であれだからねえー」

……まあ、確かにその通りだ。今でこそ香織ちゃんは社長の後ろ盾があるとはいえ、この会社も悪く言えばダメー、影響力はあまりない。とすれば、誘拐されモルモットにされてもおかしくはないわけだ。

「このメンバーは全員知ってることだけど、きちんと秘密は守ってね？ 学校でこの事知ってるのは、このメンバーとちーちゃんだけだから。あ、ちーちゃんは千冬ちゃんのことね？」

「はい……。秘密は守る。私たちだけの秘密」

「おお、いい響きだね……」

そうしたら、あれかな。

惚れちゃっても、いいかな。

女同士だから最後の一線をためらっていたけど、今なら、いいかな？

「頑張れ少女、私は皆の恋を応援しているぞー！」

「……うん」

……頑張ろう。うん。

「そんなかんちゃんにプレゼントだよん！」

「え？」

ずっと顔を上げると、そこには満面の笑みの社長がいた。

「着いてきてー！」

ぐいっと私の手を引き、社長に連れられやってきたそこには、
— 台のISのようなものが。 —

けれど武装も何もなく、二つの球体とISの外装がそこにあるだけ。

「これは……？」

「ISだけどISじゃない、かんちゃん専用移動式ラボラトリー！これをかんちゃんに差し上げます！」

「えっと……？」

「これはね、既存のISラボのテクを全て詰め込んだ、移動式のISラボなのだよ！これ一つあればいつでもどこでもISの調整が行えます！しかも改造から新規建造まで何でもござれ！ちなみに東さんも一つ持つてるよん」

それは、とても凄い代物ではないのだろうか。

だってピットが必要なくなるし、重い工具を持ち運ぶ必要も無い。それに、本音に樂をさせてあげられる。

「……ありがとう？」

「うんうん、気にしなさるなー！名前はまだないから、かんちゃんが付けてあげてね！はい、乗って乗ってー！」

「あ、うん」

ISに乗るのと同じ感覚で、けれど装着されるのは上半身のみ、下半身へは座り込めるように椅子状になった装甲が伸びている。

背を預ける感覚で乗り込むと、なんとというか、マッサージチェアのような座り心地だった。AICも聞いているらしく、宙に浮く。

「……名前。じゃあ……」 『モータータイプ』。お前は、モータータイプ

『モータータイプ、新規名称を確認。所有者『更識簪』と特定。初期化
フィットテイング
パーソナライズ
及び最適化を行います。この作業には数十秒かかる可能性があります』

『す

その音声 flowed 直後、目の前にコンプリートの表示。
指の腹でそれを押すと、小さなビーブ音と共に全身の軽くなる感
覚。

「うん、これでこの子は正真正銘君専用だよ！ よかったね、モー
タイプ！」

「……よろしく、モータイプ」

応える代わりに、キーボードがそれぞれに光る。

モータイプは、『本音』という意味。もう一度あの子と話し、仲
直りして、一緒にまたラボに立つ。

そして願わくば、共にここで働きたい。そんな誓いと願いを込め
た名前だった。

第18話 Bind Company Second !!(後書き)

原作三巻で束さんが使っていた『吾輩は猫である』の同タイプのラボを簪がゲット。次回はのほほんさんと簪の回か、それともラウラ回か……。

そしてロマンの三文字で束さん、葵、簪の三名が意気投合。鈴空気。本人はパジャマパーティーで一回気持ちリセットして、できるだけ普通に接しようと頑張ってます。

あ、これ2時間くらいで書きました。

めっちゃ筆が載る。ほとんど詰まらずに。

第19話 鈴の音と眼帯さん、知り合う

時は巡って月曜の放課後。

アタシは第三アリーナへとやってきていた。

あ、バインド・カンパニー所属の凰鈴音です。……うん、なんか中国代表候補生って言うよりもこっちの方がカッコいい！ ほら、所属と候補生の違いよね。所属って言うてた方がカッコいいじゃない？

コホン、それはともかく。

「珍しいわね、アンタ一人とかち合うなんて」

「鈴さんこそ、香織さん達と一緒ではありませんの？」

「香織達はグラウンドで自主トレしてから来るってさ。アタシはそれまで学年別トーナメントに向けて自主トレよ」

「そうなのですか。では、ご一緒にどうですか？」

「別にいいけど、当てないでよね？」

「そうそう下手ではありませんことよ？」

こんな感じで、かち合ったセシリアと歓談。

ちなみに、甲龍はとくに何も弄られていない。まだ東さんが中国に渡す情報とコアを用意していないから、来週までには用意して交渉終わらせる、だそうだ。……ほんと滅茶苦茶だけど、身内に甘いなあ……。まあ助かるからいいけど。

「んじゃまあ」

「始めましょう」

直後、お互いのハイパーセンサーに反応。

咄嗟に退避すると、その場に超音速の砲弾が飛来した。

何事かと砲弾の来た方向を見てみれば、そこには合同実習の時に姿を見た『シユヴァルツェア・レーゲン』がたたずんでいた。

「どういうつもり、転校生？ いきなり攻撃なんて、ちょっと無粋じゃない？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……！」

ちらりと視線を横にやれば、そこにあるセシリアの顔はひどく強張っていた。

なんかやられたのかしらね、こいつに。まあいいわ、喧嘩売るなら買うのがアタシの主義だし。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときのほうがまだ強そうではあったな」

「言葉でいびるのは三流の証よ。文句があるなら」

《そつてんがけつ双天牙月》を展開、両手に構えて臨戦態勢をとる。

「腕っ節で示しなさい」

「くっ、くはははは！ いいだろう。まずは貴様からだ、凰鈴音！」

「いいわね、嫌いじゃないわよアンタ。さあて」

エネルギーは問題なし、戦闘は、出来る。

相手はガチで遣り合える相手だ。それにドイツの新型にも興味がある。手合わせするには絶好の機会。

テンションも上がってきたし、やらない手はないわよねえ！

「始めましょうかア！」

アタシの雄叫びと同時に《龍砲》を発射するも、あっさりと回避

される。全く、さすがにそう奇襲は通じないか。

なら正攻法で行くまでよ。

《龍砲》を軽く狙いをつけて乱射しつつ、相手の懐へと飛び込むべく疾走する。

向こうもズドンズドンとこちら目掛けてレールガンを撃ち出しているものの、お互い全く当たらない。まあ、あちらも制度は期待していないだろう。レールガンが向こうの主力兵装ではないのだし。

「うるアッ！」

「ふん、遅いぞ」

「まだまだア！」

ラウラの際を突いてガシガシと殴りに行くものの、やはり相手は軍人。こういったときの対処もお手の物だ。

と、突然こちらへ向けてラウラが右手を突き出す。ガクンツ、とこちらの動きが停止した。あー、やば。嵌ったか。

「こちらの停止結界のことを分かっているって突っ込んでくるとは、やはり獣か」

「チィ、やつぱしこれせこいわねー。アタシのISだと相性悪すぎってやつよね」

「ふん。墜ちろッ！」

肩から射出された二本のワイヤーブレードとレールガンの砲弾が、アタシ目掛けて一直線に降り注ぐ。

けどまあ、このぐらいでへこたれてたらダメよね。うん、ぜんぜんダメよ、アタシらしくないじゃない？

「猪突猛進大変結構、止めれるもんなら止めてみるッ！」

「な、バカなっ！？ A I Cを振りきるだっ！？」

「アタシの愛を舐めんなっ！」

超恥ずかしいこと口走ってるけどまあいいや！

この理屈は単純、AICで止めきれぬ動きのベクトルを上回るベクトルで動いただけ。まあ無理させすぎてエネルギーはすっからかんだし、装甲もボロボロだけど。やっぱり負荷掛かりまくってるわね……。もうこの手はつかえそうにないか。

「ふざけた事をつ！　だが、もう一度は出来まい！　大人しく墜ちる！」

「危ない、鈴さん！」

再度こちらへ向かってくるラウラへ向けて、こちらも真っ直ぐ突っ込んでいく。

喧嘩を買ったんなら、全力で叩きのめすのが礼儀ってもんでしょ？　それで負けるならアタシが弱いってだけ。もっと強くなればいだけの話よ。

「セシリア、手エ出さないでよ！？　これはアタシの、喧嘩なんだからあああ！」

こちらを翻弄しようと撃ちだされたワイヤーブレードを、二対の《双天牙月》で叩き落とし、レールガンの弾をひたすら避けながら《龍砲》を撃ち込んでいく。

既に戦闘は高速に達し、更にスピードを上げていた。

やっぱり、楽しつ。癖になりそうね……！

そんなことを思った直後、ワイヤーブレードが今度は六対に増え、更に両手の装甲からプラズマ刃が展開される。うわ、まだ増えるのね。いいじゃない、燃えてきたわよ。

「停止結界を使うまでもない、今の貴様などこれで十分！」

「あつはははは、いいじゃない、燃えてきたわ！ やっぱ、超楽しい！ ねえラウラ、そう思わない！？」

「くっ、窮地に追い込まれて笑うなど、異常者が貴様は！？」

「そうかもね！？ でもしょうがないじゃない、楽しいんだからさあ！」

やばい、これほんとにやばい。楽しくてしょうがない。

なんというか、香織とただらしているのも楽しいけど、これは別の楽しさだ。血が滾るといふかなんというか、こういうガチの戦いつてあんまりなかったし、色んな手を使ってくる相手とあんまりやったことなかったからね。それに、なんか殺気みたいなのが伝わってくるのが楽しいっていうか、もうとにかく楽しいのよ！

うーん、アタシも若干おかしいのかも。けど、香織を守るために強くなれるって考えたら、もっと楽しくなった。ほら、相手は本物の軍人だし、こんな機会なんてそうそうないじゃない？

「り、鈴さん……？」

「邪魔したら怒るわよ、セシリア！ エネルギー切れまで戦いたいんだから、さあッ！」

ワイヤーブレードのうちの二本を《双天牙月》で斬り落とすと、ついでに装甲を一部叩き割る。これで武器は減った、まだいける。けど、さすがにシールドエネルギーが二〇〇を切るとやや不安だ。そろそろファイナレにするか。

「そつちもシールドエネルギーもあんまりないでしょ、そろそろ終わりにしない？」

「終わるのは、貴様だけだッ！」

「やっぱそう来るかッ！」

再度打ち合い、音高く金属音を響かせる。
びりびりと手に走る振動も無視して更に振ると、その曲線状に位置していたワイヤーを断ち切る。

螺旋状に繰り出していく刃を悉く相殺しながら、ラウラもこちらの衝撃砲を吹き飛ばした。さすが。

「ふふふ、あはははは！ やっぱり最高、喧嘩なんて最近なかったから尚更よ！」

「……ああ、この高揚感、なんとなく貴様の言う『最高』に通じるものがあるのか？ まあ、いい。少なくとも貴様を打ち倒すのは私だ！」

「それはこつちの、セリフよッ！」

「おおおおおおおおおっ！！！」

「はあああああああっ！！！」

強者との戦いは身を高め、自分の力量を更に上げてくれる。それはすなわち、香織を守るのに必要なだけの力を得るのに役立つくれる。

ラウラはまさしく強者であり、戦うには事足りる、満ち満ちた敵意を持っていた。だからこそ、アタシもその喧嘩を買ったのだ。

まあ、ここまでテンションが上がってしまったのは予想外だったけども。

「……私の勝ちだ、凰鈴音」

「ええ、アタシの負けね。ラウラ・ボーデヴィット」

「……お前は、ただ乗っているだけの下らない人間ではない。先の無礼は謝ろう」

「別にいいわよ、ラウラ。アタシのことは鈴でいいわ」

活動限界に達して量子変換されたISが待機状態に戻ると、アタシとラウラはそんなことを口にした。

がくがくと膝が震えて立っていられず、思わずその場にへたり込む。

「これが、思いが伝わるということか？」

「さあね。でも、アタシは誰かを守るために甲龍と一緒にいる。アタシはなんのためにそれと一緒にいるの？」

「……教官の名誉を守り、汚点を注ぐ。それだけだ」

「織斑先生のことね。汚点ってどういうこと？」

「……織斑一夏。アイツさえいなければ、教官はモンド・グロツソ二連覇を達成できていた！ 私は、教官の汚点となったアイツを排除するために、ここに来た」

ふーん……。なるほどね。

しかし一夏の奴、面白いように厄介ごとを引き込んでくるのね。さすがというかなんというか。

「まあ、そういうことをするなら、まずは守る人の立場に立つてみることもね。やってから後悔した方が重いつてもあるから」

「その格好で言っても説得力がないな？ ……ほら」

「……ありがと。アタシってやっぱり根はいい奴なのね」

「か、からかうなっ!？」

なにこの子、楽しい。というか可愛い？

香織とはまた違った可愛さというか、並べて愛でたいわ。

ともかく、差し伸べられた手を取ると、ぐっと引き上げられた。さすが、鍛えてるだけあるわね。

「体は大丈夫か？」

「問題ないわ。このぐらい。なに、心配してくれてるの？」

「そ、そういうわけではない！」

「り、鈴さん、無事ですの？」

「別になんともないわよ。ちよつと力抜けてるけどね」

「……」

「なんだ、何か文句でもあるのか、イギリス代表候補生？」

おお、なんだか綺麗に変わったわねえ。でも、もうちよつと愛想良くてもいいんじゃないかしら。

それにしても香織達遅いわねえ。何してるのかしら。

「ふーちゃーん！」

「香織、遅いわよー！」

「ごめーん！ ちよつと手間取ったー！」

「はいはい、今そつち行くわ！ ほらラウラ、行きましょ。セシリアも」

「あ、おい！」

「ちよ、ちよつと鈴さん！？」

ピットから手を振ってきた香織達に応え、アタシは二人の手を引いて走り出す。一度走り出してしまえば足の力はすんなりと入り、二人をぐいっと引つ張って走る。

うん、ラウラって意外といい奴みたいだ。

「鈴、なぜそいつと一緒にいる!?!」
「は?。」

ラウラさんとセシリアさんを連れだしたふーちゃんがこっちに着くと、
箒さんがいの一歩にそう叫ぶ。

いや、突然なんですか?

「なぜラウラ・ボーデヴィツヒと一緒にいるのかと聞いている!?!」
「はあ? 友達のいない転校生に手を差し伸べるのが悪いことだと
でも?。」

「いや、それはフォローになってないからね。あ、ラウラさん。私
は一之瀬香織、よろしくね。」

「……鈴、こいつがお前の守りたい人か?。」

「え、なんでわかったの?。」

「……なんというか、線のようなものが見えた、気がした。赤い奴
だ。」

んっ!?! それは、つまり、赤い糸で結ばれてるんだね(きゃぴ
きゃぴ)みたいなことですか!?!?

いやいや、それはない。というかラウラさんって確か軍人さんだ
ったよね。……あれ、意外と軍人さんってロマンチストな人多い気
がする。

というかふーちゃん、真っ赤になってくねくねしないでっ!?!?

「おほん、それはともかく。箒、それに何か文句でもあるの?。」

「大有りだ! そいつは一夏を襲ったんだぞ!?!」

「それで目の敵にしてるってこと? それと、アタシとラウラが仲
良くしてるのと、どういふ関係があるのよ?。」

「そ、それは……。」

あー、ふーちゃん怒ってるね。ラウラさんのこと悪く言われたからかな。

「うん、箒さん。今のは箒さんが悪いですよ？ 価値観や見方なんて人それぞれなんですから、自分の見方を人に押し付けるのは良くありません」

「し、しかしだな……！」

「そうだよー之瀬さん、あの子は一夏を！」

「それを言うなら、箒さんは一夏のことを何度も殴ってますよね？ 時には竹刀や木刀で襲い掛かったときもありませんでした？」

ちなみに、この情報は女子ネットワークからの情報です。

噂好きの女子は何でもかんでもネタにして楽しんでしまうものなのです。女って怖いね。いや、この年代の子だけかもしれないけどさ。

しかし箒さんや、幾らなんでも木刀はまずいですよ。人殺せるからね、木刀って。

「うつつ……」

「前科で言うなら箒さんのほうがよっぽど酷いですよ？ 幾ら照れ隠しや恥ずかしさからだとはいえ、一歩間違えれば一夏が死んでいたこともあったでしょうに。今後は慎んでくださいね」

「……わ、わかった。すまん」

「謝るのは私じゃなくてラウラさんです」

「……ラウラ、ボーデヴィット。その……、すまない」

綺麗に頭を下げながら謝罪した箒さんに、ラウラさんは呆気に取られるようにしてぼかんと口を開いていた。

虫、入りますよ？

「……ふ、ふん」

「ラウラさん、その態度はいけません。わかった、位は言ってあげ
るべきですよ」

「何故私が」

「それが礼儀だからです。相手が誰であろうと、礼を失すればそれ
は自分の品位を下げることになります。わかりましたか？」

「……謝罪は、受け取った。これでいいか？ 一之瀬香織」

目を逸らしながらも、そうぼつりと零すように言ったラウラさん。
まあ、全く会話がなかったことに比べればマシかな。これから改
善していけばいいか。

「はい、これで今回のことについては恨みつこなし、言いつこなし
ですよ。ラウラさんも、もう少し人と関わってみたらどうですか？」

「……関わらずとも任務に支障はない」

「じゃ、関わっても問題ないわけね。じゃあとりあえずアタシと関
わってるんだし、香織とも関わってみるということだ」

「なっ、待て鈴！ 何を突然！？」

「少しは自分のクラスの人も交流持ちなさい。香織、クラス内では
よろしくね？」

慌てたラウラさんを尻目に、ふーちゃんが軽く笑ってそう告げた。
ラウラさん、あんまり人を近寄らせないし……、確かにこっちか
ら歩み寄った方がすぐに打ち解けられるかもしれない。

それに、もう一週間は経ってるのにぜんぜん友達いないのは寂し
いもんね。

「わかった、ふーちゃん。よろしくね、ラウラさん」

「……よろしく頼む、一之瀬香織」

「はい、握手」

おずおずと差し出してきたラウラさんの手をそつと握り、握手。
最初はどんな怖い子かとも思ったけど、思ったより優しくそうな子
でよかった。

それにしても、やっぱり軍人さんの手ってごつごつしてるなあ。
どっちかって言うと大人っぽい手って感じかな。

「よし、じゃあ訓練しようか！」
「おー！」

皆仲良くが、一番だよ。

第19話 鈴の音と眼帯さん、知り合う（後書き）

鈴が好戦的なのは、強い相手と戦うことで自分が強くなれることと
テンションが上がっちゃまったこと、フラストレーション溜まってた
ことの三つの理由からです。

普段は普通に戦ってます。

他の作者皆がシャルロットとラウラ両方を抱き込む中、冷静にラウ
ラのみを囲んでみる。シャルロットは、可愛いけど絡めづらい。

というか、箒とラウラ比較したら、圧倒的に箒の方が危険だよね。
真剣まで持つてるし、躊躇いなく抜くし。木刀や竹刀だって殴り続
ければ人殺せちゃうからね。

ラウラは許さないとか言っておきながらISでの戦闘にこだわって、
あくまで物理的に殺ろうとはしなかっただけマシ？

第20話 学年別トーナメント(前書き)

みよ、一時間クオリティ！。

第20話 学年別トーナメント

翌日のSHR。

私たちに配られたのは、学年別トーナメントをタッグマッチで行うという旨が記されたプリントだった。

「さて、プリントを読んでもらえば分かるとおり、今年の学年別トーナメントは二人一組のタッグ戦で行うことになった。各自パートナーを見つけ、タッグを組んでおくこと。ちなみに、当日までにパートナーを見つけれなかった場合はランダムでの組み合わせとなるので覚えておくこと。朝の連絡事項は以上だ」

千冬さんの言葉でSHRが締めくくられ、一時静まり返っていた教室は、まあ予想通りに爆発した。

「織斑君！」

「デュノア君！」

ん、あれ？ おかしいな、二人に殺到しているのが明らかにクラス的女子より多いぞ？

というかドア開いてるし。中入って来てるし。具体的には他クラス全員が押し掛けてるし。

「……………私と組んで！……………」

「まあ、こうなるよね」

「ふん、種馬に群がる雌ガキどもが……、下らん」

「こらラウラさん、そういうことを言ったらいけませんよ」

「いや、しかしたな」

「ラウラさん？」

「……す、すまん」

あれ、どうしてちょっと涙目になっているんだろうか。かるく凄
んだだけなのに。

まあそれはともかく、人多すぎる。どういうことなの……。

「大変だねえー、あの二人は」

「まあ、世界でたった二人の男性IS操縦者ですからね」

「ところで香織、アタシと組まない？」

「何でナチュラルに絡んでるの、ふーちゃん」

「……香織、私と組もう？」

「あれーうちのクラスが更に多国籍になったよー」

いつの間にか私の膝の上に座っていたふーちゃんと、隣に立って
いた簪ちゃん。

特にふーちゃんはとてもナチュラルに、違和感なく私の膝の上に
座っていたんだけど。何故でしょうか。

なんて思いながら騒動を眺めていたら、一夏はデュノアさんと組
むことにしたようだ。まあ混乱を避けるためってことで順当だよな。
あの子女の子だけど。

ふっ、変装するなら私ぐらい完璧にやるがいい！ 行動の端々に
女の子っぽさが出ているのだよ。もうちょっとか弱い系の男子を目
指したほうが良かったな。

……あー、自分で何言っただろうって思った。私は何をしている
んだろうねえ。

「とうかさ、香織は誰と組むわけ？」

「うーん……、どうしようかな。ランダムでいいか」

「えー？ もうちょっと欲張んなさいよ！」

「いや、なにさそれ。別に私は誰と組んだって問題ないけど……」

「ぶーぶー。アタシと組みたいとかないわけ？」

頬を膨らませて不満たらたらといった顔で文句を言ってくるふーちゃんだけど、あんまり専用機持ちがかたまとまずいんじゃないかなあ？

だってほら、これは各々の腕試しでもあるわけだし、専用機持ちのほうが圧倒的に有利だって点は変わらない。だったら、出来るだけそれをバラけさせて、戦闘時間や回数を効率的にしたほうがいいんじゃないかな。

「ん、そりゃそうだろうけどさ……」

「まあ、そういうわけだから。私はランダムにするよ。ふーちゃん達は？」

「……香織がそうするなら、アタシもそうする！」

「私も……」

「私はー、元々専用機持ちじゃないからねえー。ランダムでいいよおー」

ふむ、皆ランダムか。とすると、気をつけないといけないのは一夏よりもデュノアさんだ。あの武装の多さに器用さは厄介になる。

……まあ、頑張ろうか。

「ところで、ラウラさんはどうするんですか？」

「私は、組まない。お前達と同じだ」

「そうですかー。もし一緒になったときは、頑張りましょうね」

「期待はしない、邪魔だけはしてくれるなよ」

むう、少しは打ち解けられたと思ったけど、やっぱりまだだね。

まあでも、軍人さんと私達一般生徒の感覚の違いは如何ともし難いだろうし、仕方ないか。

時は流れて六月下旬。

私たちはアリーナの更衣室にて出番を待っていた。

『イヴ、調整は?』

『問題ありません。ただし、無茶はしないように』

『はい』

イヴは相変わらず心配性だ。まあ、そうさせてしまったのも私なわけだけだ。

アリーナは学年ごとに使用されているから、試合を同時進行で行うことは出来ない。つまり、トーナメント表が発表された時点で自分の戦いがいつ始まるのかが分かるわけだ。

まあ、こっちとしてはやる気充填に十分な効力を齎してくれるわけだけだ。

「……織斑一夏。必ずこの手で……!」

「ラウラさん、あまり感情で動かない方がいいよ。まあ、私がいえたことじゃないけど。感情のぶつかり合いになると、一夏は強い。出来る限り自分の土俵に持ち込んで叩いた方がいい」

「わかっている。ここで頭をカツカさせるほど、私は幼くない」

うははー、その体系で言われてもなあ。

あ、ちょっとこっち睨んだ。すいません、へんなこと考えました。ちなみに、トーナメント表は普通なら一日前までには出ていますしいんだけど、タッグに変えてからうまくいっていません。たみたいで、私たちも昨日くじ引きさせられました。というか、一日でトーナメント表組んだんだよね？ お疲れ様です……。

けどこのタッグって、どう考えてもクラス代表戦の時の無人IS襲撃事件に絡んでるよね……。

東ちゃん、こんなところで弊害出さなくたっていいのに。

まあでも、実際何がくるか分かったものじゃないし、2on1で対処できれば御の字って所なのかな。

「香織、準備できてる？」

「もちろん。そっちは？」

「いつでもオーケーよ。のほほんさんと簪は今着替えてるって」

隣に座ったふーちゃんとそんな風に言葉を交わしていると、トーナメント表の対戦相手が決定した音が鳴った。

ちなみに私は一回戦、ラウラとのタッグ。

「……おおう、まじスか」

「これまた、面白い組み合わせになったわね」

一回戦の相手が表示される欄に表示されていたのは、一夏とデュノアさんの名前。

つまり、ラウラさんは因縁の相手といきなりぶつかることになったわけだ。

「ちょっと行ってくる」

「はいはい」

ふーちゃんに断りをいれ、ラウラさんの元へ。
ラウラさんはトーナメント表を食い入るように見つめながら握り拳を作っていた。

「ラウラさん、行ける？」

「愚問だ。こちらの邪魔になるなよ」

「おっけ。私はデュノアさんを抑えるよ」

「……ああ、頼む」

ラウラさんの事情はふーちゃんから聞いた。

まあ、多分ラウラさんは決定的な矛盾も分かっている、それでもそれしか方法がないから、やり方を知らないから、こうしてここに来ているんだろうけど。

だから、私はその手助けをする。ラウラさんが満面の笑みで日の元を満喫できるように。

「という事で、行ってきます」

「おう、行ってらっしゃい」

「頑張つてねえー」

「頑張つて……」

三人の声援と共に、私とラウラさんはアリーナへと向かう。

ISを起動させ外に出た私達を待っていたのは、大衆の熱気とその向こうにある闘気だった。

「織斑一夏。貴様に勝ち、教官の汚名を雪ぐ！」

「勝手なこと言いやがって。いいぜ、相手になってやる！」

「というわけだから、デュノアさん。貴女は私が抑えさせてもらいます」

「やれるものならどうぞ」

両者がにらみ合い、そして。

「叩きのめすっ」

「上等！」

開始と同時に発動した瞬間加速が、イグニッション・ブースト『白式』を纏った一夏を一気に加速させる。

それを止めようとラウラさんがAICを発動させ、一夏の動きを止める。

更に追撃のためにシュヴァルツェア・レーゲンの砲塔を一夏へと向け、弾丸を装填。その時点でデュノアさんが動いていた。

「逃すか」

《夜雀》でデュノアさんへ牽制射撃、更に距離を縮める。

一応弾をばら撒きはしたものの、やはりこの程度は回避された。

ラウラさんは弾丸を撃ちだすことなくその場から退避し、そこへデュノアさんの銃弾が突き刺さる。

「ごめん、取り逃がした」

「次に行くぞ」

ラウラさんの声にはぶれがない。それは、戦いを知っているからだろうか。

私も負けてはいられない。

『イヴ、弾道予測。表示して』

『はい』

デユノアさんの使っている武装の大半は射撃兵装。といっても、弾道さえ予測できれば避けられない量じゃない。

相手はこの乱戦でビットを使えるほど器用ではないはずだし、まずあのISにビットデータはなかったはず。ちなみに本社でデータチェックしておきました。

バレルロールのように横回転で弾丸を避けつつ、銃弾をばら撒いていく。

一夏の方はラウラさんが抑えているだろうから、まずはこっちを落とすべし。

「ふんっ！」

「くっ、僕狙いかなっ！」

「もちろん！ ハアッ！」

《夜鷹》で斬り付けるも、生憎相手の展開したブレードによって受け止められてしまった。空中ならではの回転という動きでデユノアさんを押し切ると、更に追撃するべく加速する。

「この距離なら！」

「ショットガン　ッ！」

こちらに構えられた銃口を見て、咄嗟に全身を《夜羽》で覆う。

あんなものを生身に食らえば一瞬でミンチだ。冗談ではない。

過剰な反応に疑問を抱いたらしいデユノアさんだったが、変わらずガンガンと銃弾が吐き出される。まずい、幾ら防御性能に優れているとはいえこのままではジリ貧だ。

なにより、私が落ちればラウラさんが二対一で相手をする事になってしまふ。それはまずい。

「つ、突っ込んでっ!？」

咄嗟に行った行動は相手の意表をつけたのか、デュノアさんが間の抜けた声を出していた。

私が行ったのは、単純に《夜羽》を展開したまま突っ込むということだけだ。まあ、これでなんとなつたのはなんとも物悲しいけども。

なんとかショットガンの射程から抜けると、そのまま《夜羽》でデュノアさんを殴りつけ、ショットガンを叩き落とす。更に一撃を加えて粉碎した。

「まず一個」

武装は破壊できないわけじゃない。叩き潰せばそれで終わりだ。さて、次に行こう。

至近距離で《夜鷹》を振るうのと同様、動き回る相手へ向けて《夜雀》を撃ち放つ。

《夜鷹》の攻撃が軽くなってしまふものの、牽制には十分だ。ようはラウラが一夏とけりをつけるまでの時間稼ぎが出来ればそれでいい。そしてあわよくば勝てば十分。

「どンドン行きますよ、デュノアさん」

「くっ……」

取っておきは、まだまだ出さない。

決戦兵器は一番美味しいときに出すものだ。

第20話 学年別トーナメント（後書き）

ということ、大会開始。

次回辺りで終了？

第21話 真実はいずこ

「くうっ！」

『カオリ、無理しないでください。一撃でも良いのをもらえばアウトなんですよ?』

『わかってるけど、そうも言ってもらえないんだよね、これが!』

デュノアさんのマシンガンを器用に《夜羽》で叩き落とし、更に追撃してへし折る。これで破壊した装備は五つ目だ。確か、アサルトカノンと最初に壊したショットガン、重機関銃にグレネードランチャーだったかな。それが今まで壊した武装。

そこまでやってもまだぼんぼん重火器が出てくるのはいかなものか。

『ラウラさん、そっちはどうですか?』

『もう少しで終わる! 耐えろ!』

『了解』

向こうも頑張っているらしい。といっても、あちらに意識を向けるのは到底無理な話な訳だけど。

何とか相手の武装を破壊しながら戦ってはいるものの、やはり恐怖心は強い。向こうはこちらも絶対防衛が効いていると思って戦っているから、尚のことだ。まあ、かといって明かせないんだけどね。明かせば色々面倒だし、鼻に乗るなどか言われそうだし。

「さすがに強いですね」

「そっちこそ。これだけ武装を破壊されたのは初めてだよ」

「では、そろそろケリをつけましょう。あまり長引いてお客様を屈させてもいけません」

「シヨールのつもり？」

「この学年は大体そうでしょうか？ という事で、行きますよ？」

《夜羽》を前面に展開した瞬間加速で急接近し、《夜羽》を前へと開く形で打撃を加える。

衝撃に耐え切れず、展開したばかりの両手のハンドガンが上方へと弾き飛ばされた。

「しまっ……！！」

「ここ、だっ！」

すかさず、上段から大きく振りかぶった《夜鷹》を振り下ろし、ハンドガンを叩ききると共にデュノアさんへ叩きつける。装甲を叩き割り尚も止まらず、絶対防御を発生させた。

『あれ、強くない！？』

『タバネから送られてきた強化プログラムを適応してあります。相手の絶対防御との接触時、より多くダメージを発生させるようになっています』

『え、初耳なんだけど』

『適応はついさっき完了しましたので』

それなら仕方ない。

というかそれぐらいなら別に怒りもしないし、独断で動いてくれなくても構わないけど。

『一応、報告だけはしてね』

『以後注意します』

『うん。じゃ、行くよー！』

『はい』

今の攻撃でどれくらい削れたか分からないけど、途中でちまちま弾ばら撒いて削ってたし、それなりに持っていったかな。なら、間髪いれずに叩き込む！

「ハアアアー!!」

「くううっ……!!」

ガギンガギンガギン！ と連続して装甲を叩き割り、幾度か絶対防御を発生させてシールドエネルギーを削っていく。

その猛攻の中で、デュノアさんは何とか攻撃範囲から身を退け、こちらへ銃口を向けてきた。けど、それを待ってたんだ。

「その一点、打ち貫くツ！」

銃を構え終わる前に急加速、懐に潜りこめば銃は発射できない。ならば、ここはこちらの間合いになる。

《啄木鳥》を確実に当てるため、腕を密着させ、穿つ。

火薬の炸裂音と、杭の発射される爆音が辺りに響き渡り、デュノアさんは大きく吹き飛んだ。

「かはっ……!!」

「まだ墜ちないか！」

「悪いね……、こっちに行かせてもらおうよ!!」

まずった、今ので墜とすつもりだったのに。読み違えたか。

距離をとったデュノアさんは、一直線にラウラさんの真後ろへと向かっていった。

一夏との接戦で気を回しているラウラさんは、それに気づいても

対処が遅れが出る。まずい、墜とされる!?

「ラウラさんッ!！」

「貰ったよ。全弾もつてけえええええええええ!！」

「この、アンテイクがッ!」

「テメエの相手は俺だっ!」

直後、展開^{オープン}できる限りの武装を全て撃ち放ち、弾丸の嵐がラウラさんを襲った。

けど、あちらは墜とす。確実に。私のサポートミスだ。

デュノアさんに照準を合わせ、ファイア。一瞬気を緩めていたデュノアさんのISに弾丸が注ぎ込まれ、一瞬で残り少なかったであろうシールドエネルギーをゼロにした。

ともかく、ここであとは一夏を墜とせば終わりだ。そう考えた瞬間、イヴの音声が響く。

『カオリ、警戒! シュヴァルツエア・レーゲンからエネルギー反応! 通常のものではありません!』

『ッ!? どういうこと!』

『おそらく、別のシステムが組み込まれているのでしよう。それによってISが浸食を受けています。このままでは、操縦者の生命に危険が』

言葉を遮るように、ラウラの方から感じていた感覚が途絶えた。

今まで当たり前前のように感じていた、ISコアの鼓動。なくなって初めて気が付いた。そんなものがあったことに。

でも、だめだ。これはだめだ。あれは、コアを殺してしまう。あのままでは、コアは死んでしまう。

本来のものではない情報に、外界との断絶。あんなことをすれば、コアは侵食に耐え切れない。

「だめだ、だめだよ！ ラウラ、目を覚まして！ 起きてよラウラ！」
『操縦者の意識はあのシステムに取り込まれています。ダメージを与えてシステムを解除しなければ』

気づけば、呼び捨てにして呼びかけていた。

あの姿が誰かは知らない。だけど、あれは違う。たとえラウラがあれを望んだとしても、触れた時点で気づいただろう。あんなもの、欲しかった強さじゃないと。千冬さんの強さとは程遠いと。

だめだ。止めなければ。あの力を振るえば、ラウラはきっと戻れなくなる。今なら、まだ間に合う。

『また無茶をするつもりですか』

『……ごめん』

『カオリはいつもそうです。皆が心配しているのに』

『……ごめん』

『言っても無駄、なんですね』

『……ごめん』

『わかりました。では最高のサポートを期待しててください』

どこか嬉しそうなイヴの声。

まるで、私が迷惑を掛けるのを楽しんでいるかのようだ。

『カオリはもう少し、他人に甘えた方がいいですよ』

『AIにまで言われると、なんだかへこむなあ……』

『では、準備はいいですね』

『うん。必ず助けよう』

一夏とデュノアさんが騒いでいるけど、正直そっちまで気が回ら

ない。今はこつちで手一杯だ。

武装が全て問題ないことを確認すると、静かにラウラの方へ目を向ける。そこには、一切挙動を見せずこちらを眺める一体の巨大なISの姿があった。

『どうやればいい？』

『あのISを覆っている黒い物体を切り裂いて、中から操縦者を回収してください。IS自体は剥がれていますから、それでシステムは停止します』

『オーケー』

近づいて斬れば、それでいい。なんてシンプルな答えだ。滅茶苦茶難しいけど。

まあでも、頑張ってみるか。クラスに馴染めない、可愛らしい友人のために。

「ラウラ、今助けるよ」

宣言し、《夜鷹》を両手に構える。後は《夜羽》の防御性能頼りだ、頼んだよ。

ちなみに、ついさっき非常事態宣言が発令されている。わたし達もとつと撤収しなくちゃいけない、訳だけど。

まあ、友達のピンチには、友達が立ち上がるもんだよね。

「すうー……、よしっ」

ドンッ！ と地を蹴り、肉薄。そのままジャンプして一回転して一太刀目の横薙ぎを避ける。

『上から来ますー！』

『オーライ!』

着地と同時に身を捻り、真横に斬撃を落とす。その回転に合わせて刃を振るい、一太刀目を横一文字に刻み込む。

ラウラ、早く出ておいで。暗い場所にばかり籠っていたら、大きくなれないぞ。

「はやく、帰っておいで。ラウラ」

構えなおし、更に斬撃が降り注ぐ前に上段から一太刀を浴びせ、十文字に傷を入れた。さて、と。

《夜鷹》を収納する^{クロス}ると、両手をその十文字の傷に突っ込んで開く。若干抵抗はあったけど、ともかく開いた。

と、丁度空いた私の胸のところ目掛け、ラウラの小さな体が降ってくる。支えるものを失って倒れこんできたような形になったラウラをそっと受け止めると、それと共に降ってきた眼帯をキャッチした。

「っ!?! カオリ、離れてください! エネルギ―が急速に上昇しています!」

『なぬうっ!?!』

「くっ、こ、のおおおお!?!」

ラウラを抱えている状態ではあまり高速は出せない。

出せる限界で離脱した直後、ISの周りを覆っていた黒い何かは派手に爆発し、影も残さず吹き飛んだ。

……最悪だ、自爆前提のシステムなんて。

でも、弱弱しくはあれどISコアの鼓動が戻ってきた。それを聞いて、何とか二人とも助けられたかと、ようやく安堵する。

「香織、無事か!？」

「あ、一夏。大丈夫、この通り。ごめんね、出番奪っちゃって」

近づいてきた一夏にそう微笑み、そして絶句した。

腹部に、強烈な熱。

「かお、り?」

後ろを向くと、黒いあの塊が、小さな子供の形になって私の腹部を貫いていた。これは、腹部に大穴開いたかな。

警戒、し損ねたな。

「かおりイイイイ!!」

崩壊していく黒い子供状の塊を見ながら、一夏の絶叫をBGMに私は意識を失うのだった。

ごめんラウラ、おとしちゃうかも。

私は、結局勝てなかった。

眩きが波となって、私の心に広がる。

戦ってみて、なんとなく教官の言ったことが理解できたような気はする。だが、それでは強さとはなんだ。

私は、兵器として生み出された。戦うための道具だ。その唯一の存在理由を否定されたら、私はどうすればいい。

『生きてみなよ』

私は、生きています。

『うーんと、そういうんじゃない。何かに一直線って言うのもいいけど、やっぱり人間って、やりたいことが色々目移りしちゃうんだよ。あれもやりたい、これもやりたい。あれが欲しい、これも欲しい、って。でも、それを経験して、だんだん自分の進みたい一本が見えてくるんじゃないかな』

それが、生きるということか？

『私は、そう考えてる』

では、強さとはなんだ？

『……わかんない。そんなもの、きっと誰にも分からないよ』

では、織斑一夏の、教官の言っていたことは嘘なのか？

『うづん、あれも本当のこと。でも、ラウラにとっては本当じゃない』

どういふことだ？

『つまり、強さの意味はその人それぞれにしかないものなんだよ。千冬さんや一夏の言っていたことは、あの人たちだけの強さ。ラウ

ラの強さは、きつとまだ見つかってないだけで、必ずどこかにあるんだよ』

強さは、力ではないのか。

『力が強さだって言う人も、確かにいる。それを否定はしないけど、ラウラの強さって違うんじゃないかな。誰かの強さを借りてるだけなんだよ』

では、どうすれば見つかる？ 私の強さは見つかるのか？

『探すしかないんじゃないかな。私だって、自分の強さがどこにあるのか、どんなものなのかは分からない。だけど、いつか見つかると思ってる。人生って、意外と何とかなるものだしね』

……私は、兵器だ。

『ラウラは人だよ。可愛い女の子。意地っ張りでちょっと傲慢で、恥ずかしがりでちょっと常識外れで、そしてISがとっても強い、僕らの友達』

私は、人として生きていいのか？

『もちろん。だって、ああして人として、誰かを憎むってことが出来たんだから。だったら今度は、誰かを好きになったりすることも出来ると思うよ』

そうか。

呟きに返ってくる香織の言葉は、それを最後に聞こえなくなった。

私は、人として生きられるんだろうか。
……生きて、みるか。私として。
そう考えていたとき、突然頭の中に映像が流れ込んでくる。

どこかの研究施設。

香織を幼くしたような幼児が、大きなポッドの中に入っている。

これは、人を作っているのか？

「香織、あなたは香織。私が貴方にあげられる、数少ないものだから、どうか受け取って。私が消してしまった命の灯火に、名づけられるはずだった名前を」

香織。

それは、なぜそれに付けられている？

あいつは人だ。試験管ベビーですらないこんなものが、アイツだというのか？

「あなたは、いずれ世界に君臨する兵器を、きつともとの道へ正してくれる……。貴方は、私達の希望なのだから」

音声が消えた。優しい、女性の声だった。

香織と呼ばれていた幼児の入れられていたポッドの、ネームプレートが見える。

そこに記されていたのは、menの三文字。

これが事実ならば、香織は。

「……………うっ、こじは……………」

「目が覚めたか」

その声は、私を救ってくれた恩師の声だった。痛む体を無視して、周囲を見渡す。どうやら医務室に運び込まれていたらしい。

「私は……、一体……」

「全身に無理な負荷が掛かったことで筋肉疲労と打撲がある。暫くは動けんだろう、無理をするな」

「何が、起きたのですか……？」

聞かなければ。何が起きたのか。そして、教官に、彼のことを。

「これは、重要案件である上に機密事項だ。いいな」

「はい」

「VTシステムは知っているな」

「はい……」

VTシステム、正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだが、あれはIS条約によってありとあらゆる研究、開発、使用のすべてが禁止されているはずだ。

教官の話では、それが私のIS、シユヴァルツェア・レーゲンに搭載されていたらしい。……私の愛機に、勝手なことをしてくれる。

「現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

「……私が、望んだからなんですな」

強く。貴女になることを。

望みはした。だが、あの子の私は、本当にどうかしていたのだ。勝ちたいあまり、全てを捨てようとした。きっとあのまま戦っていたら、私は私でなくなっていただろう。

……助けてくれた、彼がいなければ。

「教官」

「なんだ」

「私を助けたのは、一之瀬香織で間違いありませんか」

「ああ。現在は腹部に大きく風穴を開けられ、集中治療室で生命維持中だ。予断を許さない状況だが、驚異的なスピードで回復しているらしい」

「ど、どういうことですか!? 風穴!？」

なぜだ、私の記憶でもそんなものはなかった。レールガンでも使わない限り、風穴など……。

「VTシステムの残骸がなぜか再起動した。お前の姿をとって腹部をずぶり、だ」

「そんな……。香織は助かるのですよね!？」

「助かる、だろうな。むしろあれは……」

確か、さつき教官は驚異的なスピードで回復しているといっていた。

あのとき起こった現象、おそらくはクロッシング・アクセス相互意識干渉の一種だろう。

であれば、あれは香織の過去である可能性がある。いや、十中八九そうだろう。だが、一体あれは……。

「……教官。香織の過去を知っていますか」

「過去? いや、両親は物心つく前に死亡、後は姉と二人で、だっ

たはずだが」

「……あのとき、助けられたときに、私は香織の過去を見たかもしれません。幼児の頃の香織が培養ポッドのようなものに入れられているところと、優しそうな女性に抱かれて、名づけられているところを見ました」

「それは……、本当か？」

「はい。香織の性別は、男なのですか？」

「……どうやら本当らしいな。これは色々聞く必要がありそうだ」

香織、アイツは誰にでも優しくかった。ほんの数週間傍から見ただけでもそれが分かる。

そんな香織が、人造人間？ そんな、バカな。

そもそも人造人間など、ありえるのか？ 試験管ベビーですらようやく使われているレベルだというのに、あれほどの完成度を誇るバイオノイドなど……。

いや、ちがう。そうじゃない。あれは、人間だ。私も人間だ。それ以外に何かがある？

あれほど優しく、私が傍にいても何の気後れもせずに接してくれた彼が、人間でないなど、私が認めるものか。

香織は人間だ。誰がなんと言おうと。

……そうだろう、香織。

『よかったね、マスター』

……なにか、聞こえた気がした。

凄く遠くから、何かが。

第21話 真実はいずこ（後書き）

さて、きな臭くなってまいりました。

そしてまた怪我をした香織ちゃん。一体どうなるのか。
次回はまた病室だよ！ ……病室率高くないですか？

第22話 休息

腹部を襲う強烈な鈍痛で、目が覚めた。

僕はどれくらいそうしていたんだろう。頭が酷く痛んだ。

「……香織？ おきたのね、目が覚めたのね！？」

「ふー、ちゃん……？ 僕は、一体……」

見慣れた景色、そこは医務室の中だった。

白を基調にした落ち着いた雰囲気の中、ふーちゃんの赤い目は特に目立っていた。

「よかった、よかったよお……！ このまま起きないんじゃないかって、怖かったあ……っ！」

「ふ、ふーちゃ、ちよっと、落ち着いて！ ということ、何が起きたの？」

大声を出すと腹部が酷く痛んだが、僕は先に彼女を落ち着かせることにした。

手を握ってわんわんと泣き出した彼女は、僕の声になんとか泣き止むと何が起きたのかを説明してくれた。

「香織がぶっ倒れてから、学校のコンピュータ全てにハルがハッキングを仕掛けたの。学校のコンピュータを乗っ取ったハルは、香織のお腹に開いた穴を縫合していったわ。確か、治癒促進剤だったかしら、そんな名前の上スプレーで傷を塞いで、細胞の増殖を促進させるって注射を打ったの。でも、今香織のお腹は空洞。自分でも分かるでしょ？」

「この鈍痛は、そういうことか……」

「でも、ハルは香織が目覚めてから一日もすれば傷は完全に修復されるはずだって言ってたわ。何でも、治癒能力が通常の人間の数百倍から数千倍、胃袋や他の臓器なんかを丸々持っていていかれてるのに、寝ていれればすぐに元通りになるって……」

……確かに、僕は傷が早く治るような体質だ。だけど、なくなった臓器が復活するなんて、聞いたことがない。

でもとりあえず、まずはふーちゃんを安心させないと。

「ごめんね、ふーちゃん。心配掛けて」

「いい、いいのよ……！ アタシこそごめん……、守るって、言ったのにつ……！」

「……うん、大丈夫だから。僕は大丈夫だから」

『大丈夫だから、ではありません！ カオリ、貴方はもう少し自分の体を大切にしてください！』

「ご、ごめんイヴ……」

ふーちゃんに謝って、そしてイヴに謝って、それからそっと、包帯の巻かれたお腹を撫でてみる。……鈍痛の代わりに激痛が走って、思わず顔を顰めた。

「か、香織！？ 傷に触ったらダメよ！ ほら、凄い汗……」

「ごめんごめん……。でも、本当にべこって感じだったなあ、お腹に穴が空くとああなるのか……」

「感心してないで、ほら。汗拭いたげる」

傍にあったタオルで、ふーちゃんが僕の顔から吹き出た汗を残らず拭い去る。

それにしても、今はいつなんだろうか。あれからどれくらい経ったのか……。

「あれから、一週間よ。一週間眠ってたの。アタシ、もう死んじやったかと思って……」

「一週間も……？ ごめんね、心配させちゃって」

「ううん、いいの。けど、お腹は大丈夫？」

『……簡易検査を行いました。臓器は半分以上再生、明日の朝までには完全に回復します』

「ほんとにつ！？」

「……ねえ、ふーちゃん。今の言葉はまるで僕が妊娠してるみたいじゃない？」

そういうと、ふーちゃんはこちらをぼかんとみて、それからゆっくりと頬を高潮させて、え、なんでくねくねしだすの？

「ね、ねえ香織、その……、旦那様って、言ってみてくれない？」

「……あの、それ中学の時に」

「いいから！ あのセリフ、ねっ！」

あー、僕はまあ、こういう成りだから、中学校の時にちょっと演劇をやったことがあるのですよ。

で、そのときの僕の役目が、非業の死を遂げる貴婦人、要するに女役です。この成りにこの声だからなあ……。

「……一回だけだよ？」

「うんっ！」

「……コホンッ。『旦那様、今この子がお腹を蹴りましたよ。旦那様と私の、愛の結晶です』」

ふーちゃん、鼻から血が出てるよー。なんかこれやったときの女子と男子の反応一纏めにしたような状態になってるよー？

「『はっはっは、ようやく授かった子宝だ。お前もこの子も、頑張るんだぞ』」

それは続きのセリフじゃありませんか？　ねえ、それもしかして僕がまた続けると？

ほら期待して目をキラキラさせてる。怪我人に何させてるの貴女は。

「……『わかってますよ、旦那様。ふふっ、ほら、この子も喜んでます』」

「……ねえ香織」

「なに」

「抱かせて」

「ダメです」

というか突然何を口走ってるんだこの子は。滅茶苦茶危ないというか身を乗り出すな涎垂れてる目の焦点があってない！？

「ふーちゃん、ストップ」

「むう、いけず」

「いや、僕怪我人だから。だめですよー」

「……よかった、香織、いつもの香織よね」

「いつもの僕じゃなかったら誰だと思ったのさ。そうだ、ラウラさんは無事？」

「ええ、ぴんぴんしてるわ。アンタのこと心配してたわよ」

そっか、無事だったかあ……。よかった……。

でもふーちゃん？　いい笑顔を浮かべるのは構わないけど、せめてその口元についた涎を拭ってからにしてくれないかな。ちょっと

ぬらぬらてらてら光ってて、ちょっぴりえっちいですよ。

「それにしても、お腹減ったなあ」

「胃袋はまだ元に戻ってないんでしょ？ ご飯は明日まで無しよ」

「ええー……」

「消化できないんだから、変なところに落ちてもしようないでしょ。我慢なさい」

「はい……」

うう、やっぱりこの空腹感は堪えるなあ……。

でも、誰にも被害がなくてよかった。

「そうだ、東さんから連絡あったわよ。『今回学校側が得た香織ちゃん関連のデータ全部抹消したからねー』だって」

「そっか。助かったあー……」

「ハルがハッキングしてなかったら、男バレした上に穴開いたまんまで生活する羽目になってたものね」

ほんと、お腹に穴が開くなんてもうしたくない体験だなあ……。

でも、骨はもう再生して、筋肉も元通り。後は臓器の再生を待つだけなんだとか。僕の体って意外とチートボディなんだねえ。

いや、自分で言うのもなんだけど。

「というか、今何時？」

『午後一時半です』

「あれ、ふーちゃん？」

「抜け出してきたわ」

全く、この子は。僕のことを心配してくれるのは嬉しいけど、授業には出ないとダメじゃないか。

他の人たちはちゃんと受けてるだろうに……。

「受けてないわよ、っていうか無理に決まってるじゃない。簪は格納庫、葵義姉さんは部屋にそれぞれ閉じこもってるし、ラウラも上の空みたいだし。一夏たちもあんまり授業に身が入らないみたいよ」
「……、ごめんね」

「あんたが謝る必要なんて無いわよ」

皆、僕のことを心配してくれてるんだ……。

本当に申し訳ない気持ちで一杯だ。僕一人のために、皆が辛い思いをしてるなんて。

「まあ、もうしばらくすれば皆来るわ。……それで、一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「梟、絶対防御がないわよね」

「……うん」

「なんで？ 束さんに言わなかったの？」

「ううん、組み込んだけど消されちゃうんだって。ほかにもシールドバリアーが随分弱体化してるみたい」

「それって、つまり体に喰らえば大怪我するじゃない!？」

まあ、そうなんだけど。

でも、僕はこの子の鳴き声に応えたわけで。

「僕としては、この子で宇宙に行きたいんだよね。ほら、最低限全環境での生命維持はあるみたいだし」

「……わかった、アンタはアタシが必ず守る。絶対守るから」

「……うん」

泣き腫らした真っ赤な目で、ふーちゃんはそう宣言するようにつ
つた。

守りたいのは、僕も同じなんだけどな。

「香織ッ！ 目が覚めたというのは本当か！」

「香織、起きたのね！」

「目、覚めた……？」

どたどたどたつ、と医務室に雪崩れ込んでくる三名。

「医務室はお静かに。それと、ただいま」

「よかった、よかった……っ！ すまない、私のせいで……っ！」

「いいよ、油断した僕が悪いんだし」

「傷の具合は！？ 大丈夫なの！？」

「明日の朝までは動けないけど、他は大丈夫だから」

「死んじゃったかと、思った……」

「あはは、ごめんね。この通り、もう大丈夫」

ラウラさん、お姉ちゃん、簪ちゃんが口々に僕の身を心配してく
れた。

本当に、ありがたい限りです。でも医務室の中ではお静かにね？

「それにしても一週間かー、体ガチガチだ」

「復帰したらリハビリね。トレーニング兼ねて」

「じゃあ皆でやりましょうか！ ねえ、簪ちゃん、ラウラちゃん」

「うん……」

「は、はい……」

あれ、ラウラさんやたらとお姉ちゃんにキリッとした返事をするね？

「その、なんだ。お前は私の嫁にする！」

「……はい？」

「嫁じゃなくて婿じゃない？」

「日本には、気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする。義姉上からも許可は頂いているからな」

「とりあえずその間違った知識を植えつけたバカをぶん殴らせなさい。それとお姉ちゃん間違ってるって分かっているんだから直してあげて！？ というか何勝手に許可出してるの！？ ふーちゃんはどうなったあ！？」

「面白そうだったし、ほら。一夫多妻制って、素敵だと思わない？」
「僕の回りは敵だらけだあー！？」

ちくしょう、満面の笑みで何が「素敵だと思わない？」だあー！
思わないよ、ぜんぜん思わないからね！？ 全面敵色の風景が恐ろしいよ！

というかふーちゃん、頼むから反論して！？

「安心しろ。鈴と私は友人だ。そしてお前ならば私と鈴の二人に等しく愛情を注いでくれると分かっているからな」

「香織だからねー。大丈夫よね」

「もつだめだこの人たち！？ か、簪ちゃん！ お願い、助けてへ

ルプ！」

「……とりあえず、宇宙に行くまではダメ。その後は、私も参加する」

「ふへっ!？」

あ、変な声でた。というかなに、自分も参加？ 何が？

「よかったわねー、許婚が三人出来たわよー？」

「よくないからね!？ とりあえず日本では重婚禁止だから!」

「宇宙に国境なんてないわ! 無問題よ!」

「ちくしょうこの人おかしいよ!？」

……懐かしいな、この空気。

突込み通しで僕が疲れるだけだけど、皆笑ってて。今まであんまりなかった、空気だ。

「と、とりあえず落ち着いて香織。大丈夫、とりあえず今までおりでいいから。あとラウラも香りが男だってこと分かってるし秘匿もしてくれるらしいから大丈夫。オーケー?」

「……オーケー。はあ……、とにかく、ここ医務室、騒がない。

オーケー?」

「はい」

「う、うむ。すまない」

「うん……」

よし、全員落ち着いたかな。というかね、人多い。医務室ってそんなに人が入れるスペースないんだよ。

ほんと、医務室の先生申し訳ないです。毎度お騒がせして。

「馬鹿どもが揃いも揃って何をやっている」

「織斑先生……!?!」

「きよ、きょうかいたあつ!?!」

「織斑先生と呼べと、何度言ったらわかる、ばか者め。一之瀬弟、大丈夫なようだな」

「あ、はい。ご心配をおかけして申し訳ありません」

「それを監督するのが教師の役目だ。まあ、補習は追加されたがな。鳳鈴音、一之瀬姉、更識簪、後で補習だ。一週間分」

皆、まともに授業出てなかったのか……。

でも、これも僕の責任だよね……。僕が危険な目にあわなければ、何とかなかったかもしれないだし。

「それと」

「いつつ!?!」

「これは今自分のせいだなどと考えたお前への罰だ。こいつらは自分で選択しそういう行動を取ったのであって、お前のせいではない。お前ももう少し、自分に甘くなれ」

「え、で、でも……」

「今回の事件の顛末は復帰してから伝える。今は体を休めろ、いいな」

……これも千冬さんの優しさ、なのかな。

「……はい」

「よろしい。では馬鹿ども、回れ右して寮へ戻れ」

「で、でもっ」

「言い訳は聞かん、ラウラ以外の三人は説教だ。正座四時間耐久だ」

「お、織斑先生、お助けを……」

「だめだ」

「……ごめんなさい」

「謝るなら授業に出ることだな。ああ、一之瀬弟。明日の授業は全て免除だ、戻る許可が下りたら、部屋でゆっくりしておけ」

その言葉を最後に、千冬さんは全員を引き連れて医務室を出て行った。

疲れた、けどよかった。生きてて。

助けられたんだね。

『カオリの助けたかったものは、全て助けられましたよ』
『そっか』

なら、まあ、いいかな。

そんなことを、思う僕なのです。

あー、お腹減ったなあ……。

第22話 休息（後書き）

大切なことが何も明らかにならないまま、医務室パート終了。

…… 本当に医務室パート、できそうだな。このままだと。

ラウラの嫁宣言は医務室で行われました。その心理はまた後ほど。

第23話 動き出した歯車（前書き）

後半微工口注意です！

第23話 動き出した歯車

「……それで、何が聞きたいんですか」

香織が目を覚ます数日前、私は織斑先生に呼び出されていた。

生徒指導室の扉にしっかりと鍵を掛けると、開いている場所や隙間がないか確認したあとで、目の前の椅子に腰を下ろす。

「……一之瀬弟のことだ。あれは血の繋がった弟か？」

「当たり前です。それが何か」

「……ラウラが助け出されたとき、奇妙な光景を見たそうだ。一之瀬弟から流れ込んでくる映像をな。研究室のような部屋の中、培養ポッドの中に入っている香織によく似た子供、男性の研究者とそれに付き添うような形の女性。それに抱き上げられ、香織と名づけられたその子供……」

「……映画でも見たんじゃないですか？ きっと、それとごっちゃになってるだけです」

嘘を吐く。だが、これは知られるわけには行かない。

私は一之瀬葵、香織の姉だ。どんなことをしても、私はあの子を守る義務がある。

その私を見て、織斑先生はすつと目を細めた。

「……嘘が下手だな、お前は。事実だろう」

「……それで、どうするつもりですか？」

「どうする、とは？」

「もしあの子に手を出すようなら殺す。生まれてきたことを後悔するような苦しみを味あわせてやる」

拳を握り、知られぬ程度に腰を浮かせる。

私だつて無為に日々を過ごしていたわけじゃない。日々鍛錬を続けてきた、一人の人間に負けるほど、私は弱くない。

全ては、あの子を守るために。

「なにもしないさ。ただ確認を取っておきたかっただけだ、何故男がISを使えるのか、もしくはそう作られたのか」

「……織斑千冬、あまり妙なことを口走れば殺す」

「冗談だ、殺気を収める。お前は何を抱えている？」

「知れば逃げられない。だから聞くな」

「私はあいつの担任だ。生徒を守るのが、教師の役目だ」

「それが世界中の全てを敵に回すことだとしても？」

「無論だ。まあ、一夏とどちらを優先するかは決まっているが」

……その目は本気だった。

面倒な人間に捕まった、この手合いは満足するまで開放しないだろう。社長とは随分違うタイプだが、それゆえに成り立っていると言うことが。

ともかく、このタイプは情報を小出しにしてくれただけで楽だ。とつとと終わらせるか。

「……わかった、話す。私たちの両親は死んでいない、今も世界のどこかで兵器を研究し、自分の目的のために命を消しているだろう。母もその犠牲になった」

「一之瀬弟は人間か？」

「あの子はバイオノイド、いわゆる人造人間だ。母が良心の呵責に耐え切れず、こっそりと育てていた唯一の成功策。今にして思えば、これもアイツの計画のうちなのかもしれない」

香織は、バイオノイド。忌むべき父親の研究によって生み出され

た人工生命体だが、その体は人間と変わらない。

変わっているとすれば、尋常でない自己再生能力と情報処理能力だ。どちらも生み出されるときに調整された。

小さい頃から、父はどこか変わっていた。

初めの頃はちよつと変わった機械を作っていた程度だったのに、日が経つにつれてそれは動物、そして人間のものへと変わっていった。

それからは、悪夢のような日々だった。私は出来るだけ家に帰ろうとせず、母は人道を解さぬ父の研究を止めようと必死だったが、それも無駄だった。

母は最後の砦とばかりに、そのときの完成作だった人工生命体を自分の息子として育てていた。その様子を、私は遠目から見ていただけだった。

母が人工生命体を、香織を育てていると知った父は、殊更激昂した。既にデータを取り終え、廃棄処分したと思っていた香織が生きていた、しかも他ならぬ母の手によって育てられていたと知った父は、母を連れて家を出た。

放っておけば私たちのような子供は勝手に死ぬと思っていたのか、それとも単純に興味がなかったのか。わからないけれど、父はそうして消えた。母も、生きていくかどうかすら分らない。

それから私達は、必死になって生きた。あどけない笑顔を見せて「おねえちゃん、おねえちゃん」と呼んでくれるあの子が、愛おしくてたまらなかった。

その笑顔を守るために、私は必死に知恵と力をつけた。幸いうちには母の残したヘソクリと、祖父母の残した遺産が残っていたため、バイトが出来る歳まではそれで食い繋いでいた。本当に、よくあそこまでやれたものだと感じる。

香織には、両親は物心つく前に死んだと言いついて聞かせていた。……そうしなければ、あの子は壊れてしまう。

もしくは、許してしまう。優しすぎるから。

香織がISに乗れるのも、おそらく奴が何かしたんだろう。香織が生み出されたのは今から一〇年前、丁度ISが世に知られた頃だったから。

「……そうか。それで、お前はどつする？」

「決まってる。どんな手を使ってもあの子を守る、それ以外になにがある？」

「ふっ、愚問だったな。すまん。このことは絶対に口外しないと誓おう、一之瀬葵」

「……それでは、二者面談はこれで終わりですか？」

「ああ、ご苦労だった。帰ってもいいぞ」

結局、織斑千冬にはほとんどの部分を秘匿した。

私は守らなければならない。それが、私の義務だ。

目を覚ました翌日の夕方、私はすっかり治った体と共に自室へ戻ってきていた。

ちなみに、補習は夏休みに纏めてやるらしい。僕の場合は一週間以上補習か……。ガンバる。

「ただいま帰りましたー」

ドアを開けて中に入ると、のほほんさんは私のベッドにすがりつ

くよつにして眠っていた。

寢言で「やだ、いけないで」と呟いている彼女を見て、すぐに彼女の手を握る。こうすると、悪夢は意外に収まってくれるものだから。

しばらくすると、のほほんさんはスヤスヤと穏やかな寢息を立て始めた。……心配させちゃったかな。泣いた跡、あるし。

とりあえず起きるまでそうしていようと彼女の傍に座り込んだ直後、もぞもぞとのほほんさんが身じろぎした。

「んあ……」

「起こしてしまいましたか」

「かお、りん？」

「はい、香織です。ご心配をおかけしました」

「ほんとに、どこも痛くない？ 大丈夫？」

「はい。泣いていらしたのですか？」

寝起きで目を腫らせているのほほんさんの頭をゆっくりと撫でながら、そう問いかける。

「……いなくなっちゃう夢見たんだ。かおりん、いなくならないよね？」

「いなくなりません、大丈夫ですから」

なんだか、最近ずっと泣いている人を見ている気がするよ。まあ原因私なわけなんだけど。

とにかく、そう言いながら軽く抱きしめると、ようやくのほほんさんは落ち着いてくれた。……私は男なんですけどねえ。

「えっと、じゃあ。ただいま、のほほんさん」

「うん、おかえりなさい。かおりん」

ペコリ、と頭を下げ、彼女が言った。その様子が妙に小動物染みていて、思わず笑みが零れてしまう。

「あ、そうだ。休んでいた分のノート、貸していただけませんか？」
「いいよあ。はい、どうぞ」

「助かります。あとで何かの形でお返ししますね」
「わははー、楽しみにしてるねえ」

ノートを受け取ると、とりあえず机に向かおう、としてそのまま引き倒される。どさっ、とノートが手から零れ落ち、床に散らばった。

のほほんさんは仰向けになった私の上に乗ると、押し倒したような形でこちらを見る。

「の、のほほんさん？」

「じっとしてて」

「あ、あの」

時が止まった。そんな気がした。

唇に伝わる柔らかな感触と、間近に迫った瞳、淡い桃色の髪。ふわりと香る、女性特有の甘い香りが、脳の奥をぴりぴりと痺れさせる。

何秒間そうしていただろう、私は気づくと目を見開いたまま、荒く息を立てていた。

「の、のほほんさん、なにを……？」

「あーんむっ」

「んんうっ！？ んーん、んーんーっ！」

何がなんだか分からないまま、更に唇を奪われる。
荒い息が私の顔にかかり、なんだか奇妙な気分させられてしま
う。

「んー……、ぷはっ。はい、ご馳走様」

「な、ななな、なにをしてるんですか!?!」

「ん、キスだよ?」

「キスだよ? って、そんなあっけらかんと言われても……」

「恥ずかしかつたでしょ」

「そりゃ、まあ……」

いきなりベッドに押し倒されて、あまつさえ唇を奪われたんだか
ら、そりゃあ恥ずかしいと言うか、頬が火照ると言うか。

って、私は一応男なんですけど!?! 女性に押し倒されて唇奪わ
れて息荒げてってどうなの!?!

なんか体が妙にけだるくて、頭あんまり回らないし……。

「心配させた罰だから。今日は一緒に寝よ?」

「へえっ!?!」

「ダメ?」

ぬう、ダメ、じゃないけど……。

「というか、キスは私を恥ずかしがらせるためだけにしたの!?!」

「最初はそうだったけど、はあはあ言って涙目でこっち見てるかお
りんみてたら、つい」

「ついじゃないですよー!?!」

……まあでも、心配させちゃったし。

少しくらいなら、いいかな。

「こんばんわ、スコール」

「あら、こんばんわキティ。どうしたの？」

「ふふ、あなたの素敵な体が忘れられなくて……、疼いて仕方ないのよ。慰めてくださらない？」

「あらあら、年頃の乙女がそんなこと言っているのかしら？ それに、私にはオータムがいるのだけど」

暗がりの中、裸体を隠そうともせず寝転がる女性の豊かな金色の髪を撫で付け、少女、キティが笑った。

いるはずのない、二人目の男性IS操縦者、それと瓜二つの顔をもつてして、美しいという言葉すら生温い色気を漂わせて、キティが笑った。

「私はね、スコール。貴女のように誰かから愛されている人を横から奪い取るのが大好きなの。私に夢中にすれば、いつか私はお兄様ですらも手に入れられる。そんな気がするわ」

「つまり、私は貴女に奪い去られるお姫様なのかしら？」

「違うわ。あなたを、私に蹂躪され、傅き、私から与えられるものはいかなるものであるかと感涙してその身に授かる奴隷にするの。そそるでしょう？」

「あら、私はそんなに安い女ではないわよ？」

スコールと呼ばれた女性は、少女を引き倒すようにしてベッドの中心まで転がると、まるで王女のような白いドレス姿の少女の首筋に、犬歯を突き立てる。

それほど尖ってははいないものの、その行為だけで少女は息を荒げ、スコールを情欲に潤んだ瞳で見つめていた。

「はあ、はあ……。ねえ、スコール？ 私を壊してくれないかしら？」

「貴女を？ でも、私を手に入れるんじゃないの？」

「ふふっ、たまには翻弄されるか弱い雌を演じたいの。ねえ、スコール。来て……。」

「あなたにそんなことを言われたら、我慢できないわね。いいわ、滅茶苦茶にしてあげる……。」

そういうと、スコールは先ほどまでのように壊れ物を扱うような仕草をやめ、荒々しくキティの美しい栗色の毛を掴みあげた。

本来ならば痛みしか感じないような行為でも、今の彼女、役に入り込んだキティには快樂の元にすらなり得るものだった。

「ほら、痛い？」

「ああ、ええ、痛いわ……。凄く痛い……。でも、いいわ、もっと乱暴にして……。」

「もちろん。こんなもので終わらせるほど、私は優しくないわ」

言った直後、キティに覆いかぶさるようにしてスコールが動く。

それからしばらくの間、誰もいない暗がりには媚声が響き渡っていた。

第23話 動き出した歯車（後書き）

はい、やっと本筋はいりました。

のほほんさん、一回書き直したんですよね。なんか違う気がしたので。

うちののほほんさんは意外とアグレッシブ。

つつか、スコールとかは半オリキャラ化しそうです。勘弁してください。

さて、キティとは一体誰なのか。もう半分以上ネタバレしてるけどね！

次回は、ショッピング？

第24話 香織ちゃん！海ですよ、海！（前書き）

更新再開！。ちょっと駆け足ですよー。

第24話 香織ちゃん！海ですよ、海！

「んー、ひっさしぶりねー、ここにくるのも！」

「最近忙しかったからねえ」

「ここがシヨツピングモールか……」

「うー、お姉ちゃんも行きたかったよおー……」

「お姉ちゃんは去年行ったでしょう……」

レゾナンス。そこは市の地下街と複合された、駅前の巨大シヨツピングモールである。

とりあえずここに来れば大体のものは揃うし、意外とコアな部類のものまで取り揃えているお店もあるので評判もいい。あとは、うん。友達が言っていたけど、ナンパスポットとしても有名だ。男女共に。

こんにちは、香織です。今日は私服でシヨツピングモールまでやってきました。ちなみに、ふーちゃんはIS学園の制服。

もしかしたら中学の友達に会うかもしれないし、事前にそう言ったときの設定は考えておいた。ラウラともきちんと打ち合わせはしたし。

あ、ちなみにラウラって呼び捨てにしているのは、本人からそうしてほしいと言われたから。……僕の正体、ドイツに伝わってるとかはないよね？

まあそれはとにかく、今日何をしに来たかということですね、ラウラの水着を買いに来たのです。

ついでに色々物色しましょうと言うことで、ね。お姉ちゃんのコ―ディネート欲に火が付いちゃったらしいから。

「それにしても、いつ来ても広いわねー」

「まあ、シヨツピングモールだからね。仕方ないね」

「……なあ、香織。お前、その服は」

「どろ！？」 可愛いでしょ、可愛いわよねラウラちゃん！」

「は、はあ……」

「……まあ、こういうことです」

「なるほど……。だが、それもアリだな」

うはは、ラウラが敵になった!?

いや、そうじゃなくて。ラウラが私の服について疑問を抱くことをやめたようです。まあいいけど。慣れたし、可愛いのが好きだし。

いいけど。お姉ちゃんが結構買ってくるから、この私服はお姉ちゃんコーディネートです。

さて、では早速。

「お姉ちゃん、ラウラをよろしく」

「ふふふ、まっかせなさい！ さあラウラちゃん、行きましょうか！」

「え、あの、義姉上？ その、か、香織い！」

「行ってきまーすっ！」

「はい、行ってらっしゃーい」

ラウラをつれて爆走するお姉ちゃん。……まあ、これで暫くは帰ってこないだろうなあ。

「さて、それじゃあアタシ達はどうしましょうかね？」

「適当に見て回るにしても、どこから行こうか？」

「……あれ、香織に鈴!？」

悩んでいた僕たちに突然声が掛かる。おや、この声は？

「ああ、栄介、夢子ちゃん！」

「ひつさしぶりだなーっ！ 元気にしてたか？」

「やあん、香織ったらまた可愛くなってるじゃない！ 写メ撮っていいー？」

「あ、うん、どうぞぞ？」

携帯で即座にあらゆる角度から僕を撮り出したのは、中学の友達、かみみち ゆめこ上道夢子。で、その向こうで呆れた顔で笑っているのが陣内栄介。じんないえいすけ

ふーちゃんの昔のクラスメイトでもあり、懐かしい顔だ。

ちなみに、夢子ちゃんは赤と黄色のシャツに臍だしファッション。髪はサイドテールにしている。それはいいけど、風邪引くよ？

…そう言えば、あの格好今結構人気のアイドルを真似してるんだとか。一度街中ではったり会って、黙ってる代わりに握手とサインしてもらったんだって。それからゾッコらしい。まあ、夢中になれることがあるのはいいことだよな。

しかもなんだっけか、確か名前が一緒の文字なんだっけ。まあ、テンション上がったちゃってるのも分からんでもないけども。

で、栄介はといえば、やや茶色のツンツン頭に無地の黒いTシャツ、チエーンのついた普通のジーンズ。

袖から伸びるのはそれなりに鍛えられた筋肉がついた腕である。

原因は姉。

うちのお姉ちゃんは、まあ昔ちよつとぶいぶい言わせてた時期がありました。その頃の舎弟でもあるんだな、これが。

その縁もあつて栄介とも仲良くなった。幼馴染、とはまた違うけど、まあ大切な友人である。

栄介は結構不良っぽく見えるんだけど、実は恐ろしいほどのお人よしでもある。幼稚園からの付き合いである夢子ちゃんが引っ張っていないと、人助けで休日が潰れるレベルの。

小学と中学での遅刻の原因が全て人助けって言う学生も、そうそういないんじゃないだろうか。

「つてか鈴、お前戻ってるなら連絡くれよ!」

「そうよ鈴! 水臭いわね!」

「ごめんごめん、今IS学園にいるから、ちょっとごたごたしてたからさ」

「つてことはお前、IS持つてるのか!？」

「そつ、中国の代表候補生よ。つつつてもまあ、そのうち企業所属に変わるけど」

「……まじか。で、香織はどこ的高校行ったんだっけ? 結局言わずに行つちまったよな?」

おおつ、よく喋りますな。

「あー、えつとね、結構遠いところなんだ。うちから通ってるんだけどね」

「そうなのかー」

「で、香織に連絡入れた私が、一緒にこうして買い物にきてるってわけ。二人は何か買いにきたの?」

「夢子が水着見たいって言うからさ。俺も暇だし、こうして来てるわけよ」

「あんた、放つといたら人助けで一日終わるでしょうが!」

それもまた凄い理由でございますね。

「というか、二人つて付き合つて」

「つつつ付き合つてなんかないわよ! こいつはただのお、おお、幼馴染なんだからねっ!」

「そうだけ、俺がこいつとはないつて」

……ああ、うん。大体分かったからいいか。

それにしても、なんか凄い昔の知り合いつて感じがする。学園で

色々ありすぎたからなあ……。

「よし、とりあえず写メは一通り撮ったし……、行きましようか！」

「あいよ。それじゃあな香織、鈴」

「うん、それじゃあね二人とも」

「またそのうちにでも、ね。ばいばい」

ヒラヒラと手を振って、栄介は夢子ちゃんに連れられていった。頑張ってね、夢子ちゃん。

さて、と。どうしようか。

「……しまった、あの二人にくつついていけば栄介を弄り倒して暇を潰せた!？」

「それはやめてあげよう」

「で、学校では暇だからこつちでIS作りに没頭することにしたと」「うん……。東社長、迷惑?」「んーんー、ゼーんぜん! ぶつちゃけ作るもの全部作ったし、次は何しようかと迷ってたんだよねえー」

香織達がい物に出かけている頃、私は一人で本社へと赴いていた。今日は一人でこちらへ向かうと話したところ、香織から自宅の鍵

を預けられ、香織の自宅からワープ装置でこちらに飛んだ。……もうこれが普通になっている辺り、感覚おかしくなってるね。

「そう言えば、東社長」

「ん、なに？」

「月のコロニーは、どうなったの……？」

「もう出来てるよー」

「そっか、そんなすぐには……、え？」

もう、出来てる？

月だよ？ 宇宙だよ？ コロニーだよ？

「見たい？」

「み、見たい！ お願い、見せて、お願いします東社長！」

「ぬっふっふー、オーケーオーケー！ じゃあワープ装置に乗ってねん！ ハル、管制よろしくっ！」

『はい、お母様。良い宇宙そらの旅を』

東社長に連れられ、ワープ装置に乗り込む。

あれ、そう言えば宇宙服とかはいらなのかな……。そんなことを思っている間に突然視界が光に包まれ。

「ふう。到着！」

「……あれ、もう？」

目を開くと、そこにはまるで今までの光景が嘘のような、夢の景色。

空は漆黒の宇宙が広がり、見渡すコロニー内部は様々な建造物がそびえ立っている。

まさに宇宙コロニーそのものといった景色が、私の目の前に広が

っていた。

「ワープには距離なんて大して関係ないんだよん！ ほらほら、やってきたよ私たちの専用コロニー！ その名も……！」

東社長はとたたつ、と銀色の床で足踏みするかのようには歩を進めると、くるりとこちらを振り向く。

「アルカディア・エ！^{ワシ}」

「アルカディア・？……」

一歩進むと、その一歩はとてつもなく軽かった。月の重力はここでも同じなんだろうか。

そっか、きたんだ。

来たんだ……！ 宇宙に！

「東社長！ ここでIS作ってもいい！？」

「おう！ ばんばんやりんしゃい！」

「ありがとう！ 起きて、『モータイプ』！」

了承を得るとすぐにモータイプを展開、以前東社長から受け取ったあらゆるデータを次々に読み込んでいく。その中にはお姉ちゃん
のISのものもあつたみたいだけど、それは自動で弾くようにした。
私は、私だけのISを作る。今のテンションなら、この環境なら、
なんだってできる気がした。

次々に表示されるデータを、表示されるのとはほぼ同時に捌き続けていく。脳内にあるデータバンクから必要なデータだけを抜き取る
と、構築用のデータベースに書き込み、ISの建造に必要な材料、
作りたい武装、最高スペックなどを次々に記述。……よし。

「データ完成、後は建造だけ」

「材料なら倉庫にあるよん。マップデータ転送しとくねー」

「ありがとうございます、束社長！ 行ってきます！」

「飛び切りいい子に仕上げて上げてくれたまえよ！」

頷き、駆け出す。目的の倉庫はすぐに見つかった。

すぐにモータータイプの全システムを稼働させると、倉庫の中で必要な材料をピックアップして量子変換していく。

作業が終わると、次はIS本体の製作。

ISコアから繋がる重要箇所を重点的に、コンセプトは最高速の力。

名は、打鉄式式ではない。あれでは不満だ、まだ先にいけるはず。この宇宙で生まれる、一番新しいISなんだ。それを、私が作るんだ。

もつともつと、もつと凄いものを。

今ならば分かる。束社長が空に、宇宙に行きたいと、その手段としてISを考えたのかを。

最初はきつと、手段として作ったんだ。だけど、いつの間にかIS^{の子}たちが自分で『宇宙^{そら}に行きたい』と声を上げて、それに束社長^はが応えたんだ。

なら、私はそれを叶えたい。

空を飛びたいというこの子の希望を、私が叶えてあげたい。

「……待ってて。今、できるからね」

初めて宇宙で生まれる、IS。

「海！ 見えたあつ！」

ずだーっと時間が流れて、臨海学校当日。

私達はバスに乗り込んでいました。海へ向かうバスの中でございます。

「香織、どうした？」

「んー、ふーちゃんも簪ちゃんも自分のクラスのバスだなあ、と思つて。あ、他の皆といるのが嫌なわけじゃないけど」

ところで、性別バレしたシャルロットさんはどうしてあんなに上機嫌なんでせうか。誰か教えて。

ともかく、大して動きもなく旅館へ到着。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」「」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

元気がありすぎるのも問題なのですよ、女将さん。

で、ここでは私はのほほんさん、ラウラの二人、後うちのクラスの人一人と相部屋でございます。ラウラにも協力してもらって、何とかばれるの防がなければ。

ちなみに、個室にしてもらわなかった理由は単純、したら間違はなく何かあるとされてばれるから。めんどくさいね、こういつ時つて。

お風呂は皆が大浴場に行っているときに自室のお風呂で済ませます。……温泉、入りたかったなあ。

で、何のかんのがあって社員全員集合。

「それで、香織は泳がないんでしょう？」

「とうより泳げるわけないからね。お姉ちゃんがこれ着て写真だけは撮って来いってくれた服はあるけど……」

「葵義姉さんの見立てなら間違いはないわね、楽しみにしてるわ」

「……あの、一つお話が」

「なによ簪、かしこまって」

「……この前、宇宙、行ってきた」

……えっと、今の流れで切り出すことかな。あと周りに人はいませんよ、もちろんね。

「で、IS、完成した……」

「本当に！？ おめでとう簪ちゃん！」

「う、あ、ありがとう……」

もしかして、それってつまり簪ちゃんがそのレベルまで達してることだよな……。

私、超えられたなあ……。

「それで、名前は？」

「それは秘密……。明日の調整時間に見せる」

「楽しみにしてるわよ？ なんにしても、これで葵義姉さん以外全員が専用機持ちって訳かー」

なんだかまあ、凄いことになってきたなあ。

専用機が三機、設備が全て最新鋭の企業とか、どんなチートです

か。

でも、うん。臨海学校終わったら「ロニー」に連れて行ってもらう。今から楽しみだ。

「それじゃ、海行きますか！」

「おーっ！」

「お、おー………」

第24話 香織ちゃん！ 海ですよ、海！（後書き）

ということで、アイマス成分がちょっと混ぜられました。

そして舞台は宇宙まで！ さて、次回は……、自由時間ですよ！

第25話 最初の日(前書き)

ISの方が更新しやすかったなので、先に更新。
以後もIS中心で更新予定です。

第25話 最初の日

さて、海である。浜辺である。

暑いのである！

もう、どうして日本の夏はこんなに暑いのかな。外国には行ったことないけど。パラソルとか持ってきておいて正解だね……。とりあえずパラソルを差して、其処にレジャーシートを敷いて、と。ちなみに、このレジャーシートは夏の浜辺用らしく、地面から伝わる熱をカットして、下の涼しさを保ってくれるらしい。この前レゾナンス行ったときに買ってきました。便利なものがあるねえ。

「これでよし、と」

「わっ、一之瀬さん綺麗……」

「白ワンピースに麦藁帽子って、そうそう似合う人いないのに……！ 着こなしてる！」

あははー、これお姉ちゃんが着なさいとチョイスしたものですけどね。ちなみにノースリーブである。

紺色のスパッツ履いてるから、捲られても問題なし。さすが私。で、帽子は典型的な麦藁帽子である。似合ってるのかな。

「香織！」

「ふーちゃん、もう来たんだ」

「あんまり待たせたらダメでしょ？ って、綺麗なカッコしてるわね……。撮影でもするの？」

「綺麗、かな？」

「其処になんて疑問を持つちゃうかなこの子は……。綺麗よ、大丈夫」

「そっか、よかった」

……いや、いいのか？ だんだん最近思考回路おかしくなり始めてない？

ともかく、まあそれはともかくだ。

ふーちゃんの水着はこう、なんていうのかな。上下が分かれてるタイプのセパレートで、上は装飾で紐が付けられてる。下は紐で結ぶタイプだね。黒と橙が多く配色されてるみたい。

活発なふーちゃんのイメージに良く似合ってる、うん。

「それで、他の三人は？」

「簪とのほほんさんがラウラを引っ張ってきてるわ。あんたに見せるのが恥ずかしいって言ってる聞かないのよ」

「あ、あんまり無理にさせたらダメだよ？」

「大丈夫、あれは恥ずかしいだけで嫌がってはいないから」

それもまずいと思うんだけどなあ。

そんなことを話しながら、私はとりあえずふーちゃんとパラソルの下へ座り込む。おお、ほんとに冷たかった。

「香織」

「何？」

「辛くない？」

「え？」

「今までずっとシャワーだし、この三日間も大浴場には入れないんでしょ？」

突然、真剣な声音が耳を打つ。

思いやりの想いで満ちたその言葉は、自然と私の中に染み渡る。

「大丈夫。お姉ちゃんはこれより辛いことしてきたんだと思うし、

「ごたごたしてる一夏よりはましだよ」

「……目に見える脅威から身を守るために、公に力を手に入れられる地位と、いつ誰が敵になるか分からない上に、味方がとんでもなく少ない地位じゃ、違いすぎるわよ。一夏だって大変だろうけど、
な」

比べられない。ふーちゃんはそう言っつて、そつと私の手を握った。

「守るから。アタシが香織を」

「……うん。じゃあ、私がふーちゃんを守るよ」

ふーちゃんを。そして、私の大切な人たちを守る。

私のせいで降り注ぐ火の粉ぐらい、自分の手で払えなければ。あの姉の弟なんだから。

しばらくそうしていた私達の耳に、突然声が飛び込んできた。

「かおりーん！」

「お待たせ、香織……」

「……あの、そのミイラは一体」

「ラウラ、恥ずかしいって」

えええー……。

やってきたのほほんさん、簪ちゃんに両サイドから挟まれた、バスタオルを巻いた人らしき物体はもぞもぞと動きながら何とか後ずさりしようと……、怖いです。

「や、やはり無理だ……！」

「かんちゃーん！」

「うん……。えいっ」

そういうと、のほほんさんと簪ちゃんは二人で一斉にラウラの身を包むバスタオルを剥がす。

すると、其処には両サイドの髪をアップテールにして、少しレースのついたセパレートタイプの黒い水着を着たラウラが姿を現す。これは、ふーちゃんよりも大胆ですよ？

「どうー？ 可愛いでしょー」

「うん、すっごく似合ってる。可愛いよ、ラウラ」

「へうっ！？ か、かか、かわいい、のか？」

「うん！ そう思うよね、ふーちゃん」

「ええ、よく似合ってるわよ」

一言ごとに赤くなっていくラウラを眺めながら、私はそつと笑いかける。

のほほんさんは、なんかパジャマと似たような服ですね？

「防水加工済みい」

え、そうなの。

で、簪ちゃんは、水色を基調にした涼しげな色彩の、これまたセパレートタイプの水着だった。皆普通に似合ってるなあ。そしてそれに羞恥心を覚えていない私も私だ。

「新しく……買った……」

「よく似合ってるよ、可愛い」

「あ、ありがと……」

よし、じゃあまず早速、一枚目撮ろうか。

皆を撮りやすい所まで移動させると、タイマーをセットしてブロツクの上に置く。

急いで皆のところに戻って並ぶと、思い思いにそれぞれがポーズや表情を作って、パシャツという音と共にフラッシュ。あ、ちなみにデジカメです。

「よし、うまく撮れてる。じゃあ次は、皆一人ひとり撮ってみていいかな？」

「いいわよー。皆もいい？」

「うむ」

「うん」

「いいよー」

おお、ありがたい。

と言うことでふーちゃんから撮影開始。ま、全員撮っても五分経ってないけどね！

「これでよし、と。皆ありがと」

「いいっていいって。じゃあ、私達は泳いでくるわね」

「うん。あ、ちゃんと準備体操していいってね」

「分かってるわよ。ほら皆、行きましょ！」

ふーちゃんが先導し、皆は私に遠慮しながらも海へと走っていく。……楽しんでね、皆。

さて、私はじゃんじゃん撮るとしようかな。その前にお茶飲もつと。

午後七時半、現時刻である。

昼食を挟んだ自由時間を満喫した私達は、夕食をいただくために大広間三つをぶん抜いて繋げた大宴会場で正座していた。

ちなみに、全員浴衣。この宿の決まりで、食事をするときには浴衣を着ていないといけないらしい。このときにもちゃんとブラとスパッツは履いています。死角はないよ！

「ん、おいしっ」

「なるほど、魚を生でと言うのはこういうことか」

「どうだと思っただの……」

「いや、サバイバルで食べたああいうものだとばかり」

それは明らかに間違えているよ！

それにしても、高校生に出すような食事じゃないね。本わさに力ワハギってどうなのよ。最近めっちゃ高いのに。

「それにしても、一夏の周りは相変わらずだねえ」

「一夏ですから」

「おりむーだからねえ」

あ、ちなみに私の両サイドはラウラとのほほんさんです。ラウラ、意外と箸使えるんだね。

しばらくのんびりと食事していると、一夏のほうがなんだか騒がし、あ、千冬さんが。

「お前達は静かに食事することができんのか」

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力が有り余っているようだな。よかろう。それでは

今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五〇キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！ とんでもないです！ 大人しく食事をします！」

砂浜五〇キロかあ……。普通の道ならいけるけど、砂浜だと砂に足をとられるからなあ……。かなり時間掛かりそう。というか、あの砂浜つてどのくらい長いんだろ？

「あーかおりん、走ってみたって顔してるー」

「えっ！？ ち、違いますよ！？ 砂浜がどんな感触なのかなーとか、普段のタイムだけ走ったらどれだけ遅くなるのかなーとか、思ってますよ！？」

「香織、トレーニングマニアか？」

「あはは、……若干」

最近トレーニングメニューが増えていたりするのもそのせいです。体力大分ついたしなあ。

で、食事が終わった後は皆大浴場に行ったので、すぐに部屋のお風呂に入る。

でもこれでも、普段よりよっぽど広いし、しかも浴槽に浸かれるという、ね！ これだけで満足。

「うはあ……、癒される……」

『浴槽とシャワーでは違うのですか？』

『うん、ぜんぜん違うよ。こう、浸ってる感じが、じわーっと体をほぐしてくみたいな』

『じわーっ、ですか』

んー、イヴには分かりづらかなあ……。

っと、あんまり長風呂してばれてもまずいし、もう少ししたら上

がろう。

それにしても、随分遠くまで来たなあ……。最初の頃はこんなになんていうか、大事って言うのかな。そういう風になるなんて考えでも見なかった。

でも、悪くない。

ぼんやりとした頭でそんなことを考えながら、お風呂から上がるいつものように服装を整える。ブラジャーつけて、その上に浴衣着て、と。

「これでよしっ」

さて、それじゃあ用事を済ませよう。

今日撮った写真の中で、千冬さんに渡しておく写真だけを別のメディアに保存して、そのチップを抜いてから部屋を後にする。

多分今の時間ならまだ千冬さんは部屋にいるだろうし、早めに渡そう。

部屋から出て、小走りに廊下を進んでいくと、向かいから洗面道具を桶に入れた一夏がやってくるのが見えた。

「お風呂ですか？」

「ん、ああ。香織はどこいくんだ？」

「ちよっと千冬さんに渡すものがあって。部屋にいますか？」

「ああ、多分いると思うぜ」

「わかりました。それじゃあ、楽しんできてください」

おう、と返事を返した一夏は楽しそうに温泉へと歩いていった。あれは本当に楽しみにしてる顔だなあ。温泉、入ってみたいなあ……。

よし、夏休みに旅行に行こう。それでたっぷり温泉に使って、海で遊んで。お姉ちゃん達と一緒に。

考えながら廊下を進み、千冬さんのいる教員室の襖、その横の壁をトントンとノックする。

「織斑先生、一之瀬です。お時間よろしいですか？」

「ん、ああ。開いているぞ」

しゃつと襖を開けて中へ。まあ、鍵のかかる襖なんてないからね。普通に考えれば。

部屋の奥では、浴衣姿の千冬さんが片膝を立てて座っていた。なんか、膝の上に腕乗せて、ビール掴んでたりしたら様になりそうな格好です。

「で、どうした。何か用事か？」

「昼間に撮った写真のデータをお渡ししようと思って。何か、保存できるものはありますか？」

「ああ、ならこれに入れてくれ。すまん」

「いえ、海に入れない分楽しませてもらいましたから。入れるの、ここでいいんですか？」

「ああ。しかし難儀なものだな、お前も」

「好きでやっていることですから。それに、少しずつ前に進んでます」

ようやく宇宙へいける道が出来たんだから。

千冬さんもその意味に気づいたらしく、にやつと笑みを浮かべると、私の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫でてくる。

「ひゃっ!?!」

「……無理だけはするなよ。お前を慕っている奴らはたくさんいる」
「……はっ」

いつもと違う、千冬さんの温かな言葉に、思わず笑みを浮かべながら手元で作業を進める。

ビーチバレーをやっている写真や、一夏と千冬さんのツーショット、クラス全員が納まった写真。どれも、二度と取れない一品物だ。全ての画像を保存し終わると、メモリーを抜いて端末を千冬さんへと返す。

「はい、どうぞ」

「ん、すまん」

「せっかくですし、マッサージでも如何ですか？」

「出来るのか？」

「お姉ちゃんにやってみましたし、心得くらいは。どうぞ、横になっ
てください」

「なら、甘えさせてもらおう」

そう言って、千冬さんはごろんとうつ伏せに寝転がる。

よし、久しぶりに張り切ろうかな。

以後は音声のみでお楽しみください。

「固いですね……。お疲れ様です」

「ふ、いつもお前達に手を焼かされているからな……。んっ」

「ふふ、こちらはどうぞですか？」

「あ、ああ、いいぞ……。んうっ、っはあ……。！」

「んっ、しよっ」

「ふ、つくう……。！ い、いたっ！」

「大丈夫です、今ほぐしてますから」

「も、もうちょっと、加減を……」

「すぐよくなりますから、大丈夫ですよ。ほら、気持ちよくなって
きたでしょ？」

「ふああ……！ あ、ああ……」
「……」
「……」

……おや、千冬さんが黙ってしまった。
どうしたんだろ、痛かったかな。

「そこで盗み聞きしている連中、入って来い」
「ひゃっ!?!」
「きゃあああああ!?!」
「うわっ」

どさどさと襖を倒して雪崩れ込んだ数名。えっと、箒さんに
ふーちゃん、セシリアさん、簪ちゃん、と。……何をしてるのかな。
この子達は。

「えっと、皆、何を？」
「……盗み、聞き？」

「た、たまたま通りがかつたら織斑先生の色っぽい声が聞こえてつ
い興味をそそられたとか、もしかして香織と織斑先生が……よつと
いけないことしてるんじゃないかかと思ってたわけじゃないんだか
らね!?!」

「見事な自爆ありがとう、ふーちゃん。ただマッサージしてただけ
だよ？」

「一之瀬、そろそろいいぞ。ああ篠ノ之、デュノアとボーデヴィッ
ヒも呼んで来い」

「はい」
「は、はいいい!」

箒さん、そんなに千冬さんが苦手ですか……。なぜか脱兎の如く

駆け出していったんですが。

しかし、お話でもあるのかな？

「あ、あの、織斑先生。一夏さんは……」

「あいつなら風呂だ。しばらく待っていれば来るだろうから、その間に話を済ませるか」

「話、ですか」

「と言っても、関わってくるのは篠ノ之、オルコット、デュノアの三人だけだな。他の連中の分もあるし、丁度いい」

そんなことを言っている間に、篝さんがシャルロットさんとラウラをつれて戻ってきた。一夏は不在である。

「おお、香織もいたのか」

「こんにちは、ラウラ。シャルロットさんも」

「うん、こんにちは。というか、こんばんは？」

ああ、確かにこんばんはですね。ええ。もう夜だし。

「それで、話というのは？」

「まあその前に、全員座れ。飲み物でも奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

「わ、私ですか?! えっと、その……」

そして固まる。ラウラは若干緊張しているみたいだけど、こっちのメンバーは立場上千冬さんとよく話すこともあるから、そんなに緊張することもない。

けど、篝さん達はやっぱり異常に緊張しているのか、ガッチガチのまま声を出せそうにない。

「通夜にでも来てるのかお前らは……。そら、欲しい奴があれば取り替えてもらえ」

そう言って、千冬さんはわたし達全員に別々のジュースを手渡ししていく。

「ありがとうございます……」

「ありがとうございます。いただきます」

簪ちゃんがこくりと頭を下げ、私もそれに倣って会釈程度に頭を下げると、手渡されたウーロン茶を開けて一口。

それが皮切りになったのか、他の皆も口々に礼を言うとお口呷って息をついた。

「飲んだな？」

「飲みました、けど」

「なな、何か入っていますの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言って、千冬さんは新しく冷蔵庫から一本の缶ビールを取り出すと、ゴクゴクと喉を鳴らして飲み込んでいく。

……。あの、汗が首筋に見えて、ちよつとえっちいというか。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……。それは我慢するか」

上機嫌に言う千冬さんをぼかんと見ているのは、篝さん達の一夏グループ（仮）とラウラの四人。まあ、普段の千冬さん見てたらありえないと思うよね。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ、酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は、仕事中なんじゃ……？」

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

その言葉に、一夏グループがさっと手元を見る。そのジュースが口止め料なんですね。

うーん、やっぱり少しおつまみが欲しいなあ……。でも材料ないから何も作れない……。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか。お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

と、千冬さんが一夏グループへ向けて言葉を投げた。

ああ、つまりそういう意味でのお話ですか。頑張れ女の子。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

と言うのは筭さん。

頬を染めて恥ずかしそうに言っているのがなんとも。一夏もよくこれで落ちないな。あ、普段は手を上げてばかりだから……。恥ずかしさゆえに。不憫な。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

セシリアさん、そんなこと言っても本心隠せてませんよ。

「僕 あの、私は……やさしいところ、です……」

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

そういうのはシャルロットさん。多分一夏が一番マシと言っつか、
まともに接している人じゃないだろうか。

他の人は、照れ隠しに手を出してしまったりするからなあ……。
逆に言えば、一夏はあまり女性としてみていないと言っことにも
なるんだけど。ほら、好きだけど恋愛対称にならないって言う、あ
れ。

「ふむ……、まあなんにしてもだ。あいつは役に立つぞ。家事も料
理も中々だし、マツサージだってうまい。付き合える女は得だな。
どうだ、欲しいか？」

「……く、くれるんですか!?!?!」

「やるかバカ」

残念そうに頂垂れる三名。うん、まあ頑張れ。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨
けよ、ガキども」

「で、なぜ私達はここに留められてるんでしょうか？」

「ん、ああ。鈴音、簪。お前達は先日付けでバインドカンパニーの
正式所属となった。明日いきなり伝えられるより言いかと思ってな、
今伝えることにした」

……おう、いきなりですね。

ふーちゃんと簪ちゃんはポカーンとした顔で私と千冬さんの顔を
チラリチラリと。なにさ。

「で、それに伴ってお前達二人の国籍が不明になった。国籍不明の企業所属になつてゐるから、これから面倒だぞ？」

「……大丈夫です！」

「……はい」

あの、ですね。お話が急すぎてよく分からないと言つか千冬さんなんで知ってるんですか？

「私はあのバカの友人だ、そのぐらゐは聞きだせる。そつちの四人も、このことは他言無用、もし漏らせば社会的に死ぬと思え」

「あ、あの、話が飲み込めないのですが……」

「それは明日わかる。今はとりあえず「言ったら死ぬ」とだけおぼえておけばいい」

ビールのついでだ、と千冬さんは軽く笑いながら言つてのけた。けど、その、いいのかな？ これで。

だからこの混乱の中で聞き逃していた。千冬さんが「明日分かる」と言つたその意味を。

第25話 最初の日（後書き）

はい、ということと正式に鈴と簪の国籍と所属がバインドカンパニ
ーに移りました。

次回からは怒涛の展開、お楽しみに！

第26話 荒れだす空（前書き）

この辺は一気に書けそうなので、更新ペースは速めです。

第26話 荒れだす空

合宿二日目。

今日は丸一日、ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われることになる。まあ、私達バインド・カンパニー所属は関係ないんだけど。

「ようやく全員集まったか。　おい、遅刻者」

「は、はいっ」

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアは　」

以後割愛。ちなみに喋っているのは千冬さんとラウラである。

世にも珍しくラウラが寝坊して朝の集合に遅刻してしまったのです。ほんと、珍しいこともあるもんだ。

で、ラウラがコア・ネットワークについてを説明し終えたところで、千冬さんの号令がかかる。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

全員が一斉に返事をして、バラバラに散っていく。

ちなみにここはドーム状になっている上に四方を切り立った崖に囲まれている。どう考えても自然の物でない辺り、結構無茶したんだらうと想像がつく。

ここに来るには一度水面下に潜り、水中のトンネルに入らなければ行けない。無論外に出るときも同様である。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

がしゃんがしゃんと打鉄用の装備の一部を運んでいた筈さんが、千冬さんに呼ばれてそっちへと歩を進める。

「お前には今日から専用」

「ちーちゃああああああん!!」

砂煙を上げながら走ってくる人影。私の知りうる限りこのような漫画チックなばかげたことができるのは、あの人しかいるまい。

「……束」

「束ちゃん、何してるんだこんなトコで……」

まさかこんな堂々と乱入してくるとは……。さすがの私も予想外です。あれ、ふーちゃんと簪ちゃんが驚いてないぞ？

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ ぐふうっ!？」

「はい、織斑先生に迷惑掛けちゃいけませんよー」

「ぐるぢい、ぐるぢいよ香織ちゃん……?!」

「反省しました?」

「じだじだ、じだがらああああ」

「ならよし」

後ろから束ちゃんの襟首をがしつと掴んで止めていたのだけど、反省したようだから手を離す。

全く、あのスピードで突っ込んできたら危ないでしょうに。

「よくやった、一之瀬」

「いえいえ、即座にアイアンクローの構えに入った先生ほどでは」
「慣れているからな」
「……心中お察しします」

今だからまだしも、昔からこれをやられていたらそりゃあ慣れもする。と言うか、この人の人間離れた身体能力は束ちゃんにつき合わされたからじゃないのだろうか。疑ってしまうよ。
で、その束ちゃんはというと。

「やあー！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！ 篝ちゃんひどい！」

うーん、束ちゃんってば、寂しいのを無理やり隠してるね。不器用さんだ。

そして篝さん、それは痛いです。間違いなく痛いです。

「え、えつと、この合宿では関係者以外」

「ん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生が沈められました、救援を。

などとぶざけていたら場がさらに混乱するので、この辺で収めよう。

「東ちゃん、自己紹介」

「えー？ めんどくさー」

「たばねちゃん」

「はいっ！ 篠ノ之束だよ、よろしくね！」

「……やるな、一之瀬」

え、何がですか。ちょっと凄んでみただけなんです。

それにしても、ちゃんと挨拶したようで良かった良かった。人間関係って大事ですよ。

「まあいい、そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

「こいつはひどいなあ。らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

おお、さすが旧知の親友。あしらいと罵倒に躊躇いがありませんね。勉強になります。

「え、えつと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさつきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。東さんは激しくじえらしい。このおっぱい魔神め、たぶらかしたなー！」

「はいやめなさい。簪ちゃん、ふーちゃん」

「うん……」

「はいはい」

二人にも協力を要請して、山田先生へ向かっていこうとする束ちゃんを確保。私と簪ちゃん、ふーちゃんが襟首をが

しつと。

「ぬお？　こらー、三人とも放せーい！」

「だめです、放したら山田先生襲うでしょ」

「いいじゃんいいじゃん！　セクハラは青春の花だぞー！」

「そんな花なら枯れてしまえ」

「か、香織ちゃんの突込みがきついっ！？」

「とにかく、襲っちゃダメです。いいですね？」

「はい。ぶーぶー、つまんないよー」

「というか、他に用事があったんじゃないんですか」

「おお、そっだそっだ！　ありがとね香織ちゃん！」

一通りコントを終わらせると、大人しくなった束ちゃんを解放する。まったく、エネルギー満ち溢れてるなあ。

「あ、あの、それで、頼んでおいたものは……？」

「うっふっふっ、それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ

「！」

ズビシャッ！　と言つ具合に直情を指差す束さん。

「……ラストシューティング」

「懐かしいですね」

まさかここでガンムとは。どっちかって言うとガイナックス風味じゃないですか？

「……トップをねえ？」

「ああ、ありますね」

まあそんなことはどうでもいいか。

しばらくすると、ゴオオオオオオオなんて音と共に上空から何か
が……、ゴオオオオオオオ？

「月からの直送便でございまーす！」

「やめええええい！？ イヴ！」

『はい！』

即座にISを展開、周囲全体を守るように《夜羽》を広げる。

若干漏れはするけど、全員を守る分にはこれで十分！

直後、轟音と共に大量の砂が巻き上げられ、その何かが地面に突
き刺さった。

「……生きてる？」

「おー、結構な迫力だなー！」

「東ちゃん！ 今の禁止！」

「えー？ かつこよかったでしょ？」

「それで人が死んだら意味がないからね！？ とにかく、緩和装置
でもつけない限り禁止！ いいね！」

全く……。

とにかく、怪我人はいないみたいだしまあいいか。今は。

しかし、まさか月のコロニーから落としてきたの？ 東ちゃんのことだから感知されるへまはしてないとしても、また随分と……。

なんてことを考えていたら、墜ちて来た金属塊の前面がぱたりと
開いた。

「じゃじゃーん！ これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』あかしほぎ！ 全स्प
ックが現行ISを上回る東さんお手製ISだよ！」

その言葉と共に、中に格納されていた真紅の装甲が動作アームによつて外に出される。

「さあ！ 篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！ かんちゃん、データ送るから一緒によろしくー！」

「ん……」

「……それでは、頼みます」

「堅いよー。実の姉妹なんだし、こつもつとキャッチーな呼び方で」

「はやく、始めましょう」

むう、なんだか篝さん、頑だなあ……。

そりゃあ束ちゃんのあの態度にも問題はあるだろうけど、察してあげられないかな。……無理か、多感な時期だもんね。いや、私もだけど。

とにかく、簪ちゃんと束ちゃんが並んで移動式ラボを起動させると、束ちゃんがリモコンのボタンを押した。すると、紅椿の装甲が割れて操縦者を受け入れる体勢に。しかも膝を落として乗り込みやすい姿勢に変わった。

「篝ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ」

束ちゃん、ぴぽばなんて速度じゃないです。簪ちゃんも視線をあちらこちらに移しながら五枚の投影型ディスプレイにデータを映し出しながらキーボードを叩き続けている。速い。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！ お姉ちゃんが」

「それは、どうも」

もくもくと作業を続ける簪ちゃんと対照的に、束ちゃんはべらべらとお喋りしながら作業を続けている。それでも簪ちゃんの作業速度が追いつけない辺り、さすが天才か。

「んー、ふ、ふ、ふふー 篝ちゃん、また剣の腕前が上がったねえ。筋肉のつき方を見れば分かるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「……」

「えへへ、無視されちった。 はい、フィッティング終了ー。超早いね、さすが私」

「こつちも終わった……」

「うん、お疲れ様かんちゃん！ モーターにも慣れてきたねー」

そういうと、束ちゃんは自分の移動式ISラボの末端でモーターを撫でる。まるで自分の手足のように動かしているのを見つつ、再度紅椿を眺めてみる。

コアは作りたて、生まれたたて。弱弱しくも力強い、矛盾しているものの正常な鼓動を感じられる。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？ 身内ってだけで「だよねえ。なんかずるいよねえ」

むっ、コネは最大限活用するためのものですよ？

大体、姉が妹に贈り物をするのどこがおかしいんだい？

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？ 有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

にやりと笑みを浮かべ、声がしたほうを向かずに東ちゃんはそう
言っただけ。まあ、それ言ったら世の男性は「どうして俺たちに
はISが使えないんだ」と声を荒げるだろうし。そういう次元のお
話なんだよ。

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、い
つくん、白式見せて。東さんは興味津津なのだよ」

「え、あ。はい」

東ちゃんに言われ、一夏が白式を呼び出す。

その白式の背部へとコードを突き刺すと、ディスプレイを呼び出
してふむふむと唸る。

「ん〜……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ
？ 見たことないパターン。いつくんが男の子だからかな？」

「東さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がISを使えるん
ですか？」

「ん？ んー……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナ
ノ単位まで分解すれば分かる気がするんだけど、していい？」

「いい訳ないでしょ……」

「にははは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わかんないなら
わかんないでいいけどねー。そもそもISって自己進化するように
作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

……独自の、フラグメントマップ。確か、フラグメントマップは
人間で言う遺伝子のようなもの。

とすれば、その配列を参考にすれば……？

「東ちゃん！」

「ん、なんだい香織ちゃん？」

「白式のフラグメントマップをサンプリングしてISを作れば、男性でも起動できるISを作れませんか?」

「……ふむ、フラグメントマップ自体を設計図にしちゃうってこと? とすると、成長の仕方まで白式に似ちゃうかもね……。でも面白いアイデアだねん、やってみる価値はありそうだよ? まあ、いつやるかはわからないけどー」

「じゃあ、そのうちに」

「おーけーおーけー! 任せんしゃい!」

うん、これがうまくいけば、まあそんなにうまくいくわけではないけど、一歩前進できそうだ。でも、なあ。

それが出来たとして、そしたら今度は戦争になりそう。それは嫌だ。暫くは、安定目指すしかないんじゃないかな。

で、そのままうんにゃかうんにゃか喋っていると、突然東ちゃんが思い出したように耳を立てた。文字通り。

「そうだよそうそう思い出した! りんちゃん、かんちゃん! 二人は既にうちの企業所属になってるので、国籍も違いますー!」

「……あー、そうか、昨日の話ってそれかー」

「それで、どこになってるの?」

「月面コロニー『アルカディア・?』だよん。だから二人は、アルカディア・?代表ってことになるかな? まあ、それ言ったらうちのは皆そうなんだけどねー」

ふむ、と言うことは私もそうなるわけか。あれ、お姉ちゃんも?

「うん、あーちゃんもそうだぜい! うはははは、東さんの科学力は宇宙ーイイイイ!」

「シユトロハイム少佐やめてください」

しっかしまあ、一度も行ったことない場所の代表つても変な感じだなあ……。

まあ、これが終わったら行くんだけどね？

「えっと……。これからよろしく、東社長……」

「よろしく、東社長」

「うむ、よろしくねん！」

はい、ということでもとりあえずこれにて一件落着かな？

で、篤さんが紅椿を軽く飛ばした後、突然山田先生が駆け寄ってきた。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

「どうした？」

「こ、こっ、これをつ！」

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ぜ、全員揃ってます」

そこから先は、なぜか手話で会話をする千冬さんと山田先生。あの慌て方からして、相当やばいことらしい。

「東ちゃん」

「はいはい。今仕掛けてるからチョイ待ちー……、出たよん、データ送るねー」

東ちゃんの高速ハッキングによって手に入ったデータが、社員のISへと送られる。

其処に乗っていたのは、ハワイ沖で試験稼働をしていたアメリカとイスラエル共同開発の軍用第三代ISが暴走したと言う事実だった。しかも、今だ事態は沈静化されておらず、あちらの監視空域を離脱しているらしい。

「……最悪の展開ね」

「東ちゃん、向こうのほかの軍用ISが動いてるって情報は？」

「ないね。というか、出す気もないらしいよ？」

……最悪だ。本当に最悪だ。

このまま放置していれば、間違いなく一般への被害が出る。

「全員、注目！ 現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？ なんで？ 特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

にわかに騒然とし始める女子。それを、千冬さんの怒号が鎮めた。

「とつとと戻れ！ 以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！ いいな！」

「はっ、はいっ！」「はっ」「はっ」

その言葉に、全員がすぐさまISを片付け始めた。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、デュノア、ボ―デヴィツヒ、嵐、更識、一之瀬！ それと、篠ノ之も来い」「はい！」

篝さんは妙に張り切ったような声でそう返事をする。

十中八九あの軍用ISについてのことだろう。そして、それで千冬さんがあそこまで焦ると言うことは……。

どうやら、本当に命を賭けなければいけないことが起きているらしい。くそつたれ。

第26話 荒れだす空（後書き）

とうとう始まった福音事件。香織たちはどういう判断を下すのか。
次回、乞うご期待！

第27話 止められぬ道（前書き）

連続投稿！。

このまま戦闘まで書こうかな……。

第27話 止められぬ道

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥、宴会用の大座敷『風花の間』では、私達専用機持ち全員と教師陣が集められていた。

照明を落とし、全員が見える位置に大型の空中投影ディスプレイが表示されている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルが制御下を離れて暴走監視空域より離脱したとの連絡があつた」

その言葉に、一夏が周囲をさりげなく見渡す。もともと、緊張によつてそれはぎこちないものになっていたが。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かつた。時間にして五〇分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなつた」

「……先生、発言の許可を願います」

「許可する、一之瀬」

「まずその上層部の判断ですが……、それは強制権がありますか？」

「ない。参加は任意だ」

「では次に、アメリカとイスラエルの他の軍用ISについて、福音を追跡しているISはいますか？ また、この上層部の判断はアメリカとイスラエルに要請されてのものですか？」

「現状、福音の速度に追いつけるISが存在しないため、追跡は衛星でのみ行われている。上層部からは要請があつたとは聞いていないな」

……まずい展開だ。

話からすると、福音は私たちが止められるレベルじゃない。うまく行けば何とかなるだろうけど、被害は大きくなるだろう。

しかもこの状況からして、上層部はどこからかその情報入手し、独断で動いていることになる。となれば、私たちが死んでも状況は隠蔽されるだろう。

そしてなによりも、許せない。暴走するということは、福音は何らかの干渉を受けたか、許しがたい行為をされたかのどちらかだ。そうでなければ暴走なんて有り得ない。……兵器だと、思っているのだろう。酷い話だ。

「つまり、我々がこの作戦に参加し、万が一誰かが死亡しても、公表されることはないということですね」

「なっ!?!」

「か、香織さん!?!」

「……そういうことになる」

「……わかりました、私からの発言は、今は以上です」

一礼して、着席。心中穏やかではなかった。

これは要するに、上層部が利権を得たいがために先走った結果だろう。普通ならばまだ実戦経験のない、しかもスポーツ用のISで暴走した軍用ISを止めるなどとは言わないはずだ。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

ほら、その通りになった。

「それでは作戦会議をはじめ。意見がある者は挙手するように」

「はい」

セシリアさんが手を上げた。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

勝手な話だね。止めると言っておいて。

大人つて、これだから嫌だ。千冬さんだって、内心穏やかなはずがない。

そう考えている間にも、皆が相談をはじめていた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。丁度本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

その山田先生の言葉に、全員が一斉に一夏の方を向く。
だからさ、なんで皆自分のことも考えずに戦おうとするのかな。
それっておかしいじゃん。

なら、私が代わりにそれをやろう。

「ところで！」

「なんだ、一之瀬」

「この件、報酬はどうなるんでしょうか？」
「報酬？」

何を言っているのか、といった感じで千冬さんがこちらを見る。
そう、報酬だ。まさか上層部も、何の出費もなしにこれを片付けられるなんて、甘いことを考えているわけではあるまい。そんなもの、私が許すものか。

「はい。ただでさえ専用機持ち、つまり国家代表候補や企業代表は貴重な人材です。しかも私たちは皆一五歳の子供だ、報酬の一つや二つ、なければ逆に不誠実でしょう」

「……そう言った話は聞いていないが」

「簪ちゃん、ディスプレイ出して」
「ん」

私の意図を悟った簪ちゃんが、投影ディスプレイとキーボードのセットを出すと、私のほうへ移した。

軽く頭を下げてから、ディスプレイを指し示した。

「まず、参加者全員への報酬、合計二億。この程度は出せるですよ」
「よう」

がしゃん、とお金が鳴る音と共にディスプレイに表示された各々

の名前の脇に、金額が表示される。

「加えてアメリカ、イスラエル両国への、福音がもたらす災厄による風評被害を未然に防げることを鑑みた上で、各国から筆取り取れる分を加えれば、と」

そうしてはじき出された金額は、各員五億程度。ただし、七人揃えば三〇億を軽く越える上に、最前線に立たされるであろう一夏には更に報酬が上乘せされている。

「この程度、さらりと払ってもらわなければ動く気にはなれませんね」

「一之瀬、お前……」

「香織さん、本気で言ってますの!？」

「何がですか？」

意外にも、突っかかってくるのはセシリアさんだった。一夏か篤さん辺りが突っかかってくるかと思ったのに。

「お金が払えなければ戦わない、そういうつもりですよ!？」

「私だって止めてあげたいです。でも、現実問題私達は命を失う危険性のある相手と戦わなければいけない、しかもこれは半強制だ。」

私は上層部の小間使いになるつもりはないんです」

そう、これを無償で受けとしまえば、上層部は味を占めて次々に厄介ごとを抱え込む可能性だってある。いわば、この程度をさらりと払うくらいの度胸がないなら、自分達で頭を捻れと言つこと。

「それに、私たち自身の問題でもあるんですよ。もしセシリアさんがこの戦いで大破して、万が一死んでしまったとします。その場合

イギリスはアメリカとイスラエルに猛抗議、最悪戦争になる可能性だってある。生き残って事件が解決した後には彼らが抗議を受けないために、お金を出して口を噤んでいてもらう。これは交渉として当たり前のことです」

「しかし！ 戦わなければたくさんの方が犠牲になるかもしれないですよ!？」

「私は他人を守るために皆を失いたくないんです!」

ドンツ、と机を叩いて叫ぶ。

この世の中で最も分かりやすい誠意の形の一つが、金だ。それを支払うと言うことは、一定の誠意を見せると言うことでもある。

上層部に「お金を払いますから何とかして、我々の対面を保ってください」と言わせなければ、私達はただの小間使いだ。

「……私は、賛成。そもそも、私はもう日本の代表候補じゃない……。学園のために戦ってやる必要性も無い」

「まあ、冷静に考えればそうなんだけどね。私は金が支払われるなら動くわ。まあ、そうじゃなくても胸糞悪いから動いちゃうかもしれないけど」

簪ちゃんとふーちゃんが続いて言う。

けれど、まだセシリアさんは納得していないらしい。そこに加えて、篝さんが立ち上がった。

「香織、何を恐れている？ 死ぬことはないだろう、絶対防衛があるのだから。そして、私たちの手には止められるだけの力がある、やらない意味がどこにある？」

「シヨック死ということも有り得ます！ これは実戦、何が起きるか分からないんです！ もしISが何かの拍子に動かなくなってしまうば、それはイコール死に結ばれるんですよ!？」

その感覚を、私は知っている。何度も何度も気を失い、死の淵に触れそうになってきた。我ながら、よく生きているものだと感じしてしまうが。

梟は絶対防御がないばかりか、シールドバリアすらかなり脆い。銃弾一発で砕け散るレベルだ。

まあ、知っているのはふーちゃんと束ちゃんだけなんだけども。あとイヴとハル。

「織斑先生、最低一人頭五億。この報酬と十分な情報管制、今回の件で起こり得るすべてについての我々のサポート。このすべてを取り付けられますか？」

「……わかった。確かに、学生だからといってお前達の人権がなくなるわけではない。それに、お前の半強制という言葉も頷けるからな」

どれだけこのIS学園がしっかりしているといっても、所詮は人の動かすものだ。私情など幾らでも入ってくる。ここで参加しないものが出れば、その人は気まづいまま三年を過ごさなければならなくなるかもしれない。人の命を救えるのに救わなかったクズだとか、そう言った汚名がついて回る。あまり女尊男卑な教師はいないといつても、やはり傾向はある。女の面汚しだとか言い出すものもいるだろう。

それを避けるためには、やはり参加するしかない。考えれば考えるほど泥沼に嵌る嫌な仕様だ。

「では、私は参加します」

「……なら、私もいい」

「決まりね。一夏、話は決まったわ。あんたは参加するの？」

「……俺は……、行くよ。金がどうとかってのじゃなしに、助けら

れるものを助けないでいるのは性に合わないんだ」

「オーケー、ならアンタの零落白夜で落としなさい。一撃ですべて持っていける攻撃はそれしかないわ」

「ですわね。ですが、問題は」

「どうやって一夏を其処まで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

話が纏まり、皆が意欲的に話を進めていく。

さて、それじゃあこっちも支度をしよう。死なない支度を、ね。

『イヴ、最高速ってどれくらい出せる？』

『《夜羽》展開状態でしたら時速三〇〇〇キロ程度かと』

『その状態での戦闘は難しいか……。分かった、ありがとう』

『いえ、無茶をサポートするのが私ですから』

うーん、イヴの中での私の評価ってどうなってるんだろうね？

……自殺志願者、とか？ いや、ないない。あつて溜まるかって。

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、私のブルー・ティアーズが。丁度イギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……。それならば適任」

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよー！」

突然、天井から声が降ってくる。
その底抜けに明るい声は、東ちゃんだった。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ!? は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とっつ!」

空中で一回転、その後着地。この上下が狭い部屋の中でよくそんなことが……。

もうこの人についてはあんまり何かを気にしたら負けなんだと思うようにしよう。うん。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング!」

「……出て行け」

「聞いて聞いて! ここは断・然! 紅椿の出番なんだよっ!」
「なに?」

「紅椿のスペックデータ見てみて! パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ!」

そう言って表示されたのは、紅椿の速度データ。其処には、福音の最高速度を優に越した数値が表記されていた。

でも、なあ。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいほいっ。ホラ! これでスピードはバツチリ!」

その言葉の後、不思議そうに首を捻っていた一夏へと説明をするべくこちらへ向く。

と、その直後。

『聞こえるかな、香織ちゃん』

『束ちゃん!?!』

フライベイト・チャネル

『今個人間秘匿通信でそつちと話してる。簡潔に状況だけ説明するね。私は、紅椿が活躍できる舞台を用意しようとして、福音のコアにお願いしたの。ちょっと暴走してもらえないかって言って、向こうはすぐ了承してくれた。けど、その後が問題だったの』

『後……?』

『うん。あの子が飛び去ったすぐ後に、福音は強制的にウイルスに よってデータを書き換えられた。しかもすべてのISを敵だと思い 込ませられてしまって、最後の最後で何とかそのデータが流出しな いうようにコア・ネットワークとの通信を切断したの』

『つまり、これは束ちゃんの予想外のことってこと?』

『うん。だから、お願い。あの子を、苦しんでるあの子を助けてあげて。篝ちゃんは、もしかすると浮かれちゃっているかもしれないから。そんなにやわな子じゃないって、信じてるけど』

……全く、この人は馬鹿だ。大バカだよ、天才なのに。

けど、この事態になっているのは束ちゃんのせいじゃない。遅かれ早かれやられていただろうから。

ウイルスやこの悪質な暴走の原因は、他にあるってことが分かっただけでも十分だ。……助けよう。

『分かった、やってみる』

『……ありがと。ごめんね、ダメな社長さんで』

『今後は気をつけるように』

最後はわざと明るくそう注意してから、意識を切り替える。

どうやら束ちゃんはこうして話している間に口頭でISの説明を

終えていたらしく、どうやら篝さんが紅椿で一夏と白式を運び、一撃で叩ききることにしたらしい。

「織斑先生」

「なんだ、一之瀬」

「私の鼻なら、単身ですが最高三〇〇〇キロは出せます。サポートとして付けていただけませんか」

「……わかった。万が一の時にはサポートしつつ戦闘空域を離脱、すぐに戻って来い」

「了解」

言っで一礼。あとは、二人が巧くやってくれれば私の出番は無くて済む。

だけど、嫌な予感が私の頭の中でひしめいていた。

「香織！」

「ふーちゃん、簪ちゃん……。それに、ラウラも」

「どういづつもり……?」

「アンタのISがやばいってことはわかってるでしょ!? もし喰らったら……!」

「そもそも、これは実戦だ。第四世代二機が矢面に立つと言っただから、何も香織が行かなくても!」

「でも、あの子を助けたいんだよ。それに、あの二人だけじゃ、なんだか怪我しそудし」

そういって、ふーちゃんと簪ちゃんは揃って溜め息を吐いた。

「……まあ、アンタはそういう奴だったわよね。なら、怪我しないで帰ってきなさい」

「約束……」

「香織、冷静さを失うな。いいな、実戦の空気は今までとは比べ物にならない重圧だ。それに負けるな」

「……ん、わかった。ラウラ、アドバイスありがとう」

三人をぎゅっと抱きしめてから、出発地点へ向かう。

さて、生きるために戦おうか。私は、ISを兵器のままでもいいさせない。そのために、梟と共に、イヴと共にいるんだから。

第27話 止められぬ道（後書き）

次回、福音戦。

二人のサポート役として同行することになった香織が其処で見たまのとは？

乞うご期待です！

第28話 銀と黒 白と紅(前書き)

連投。ようやくここまできたぜ……。

第28話 銀と黒 白と紅

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「飛ぶよ、梟」

それぞれの声と共にISが展開され、白、紅、黒と色とりどりの装甲が展開される。

時刻は午前一時半、空は広く晴れ渡っていたが、どこかそれが不気味に感じた。

「じゃあ、箒。よろしく頼む。香織も、よろしくな」

「ええ、お互い頑張りましょう」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

不機嫌そうに聞こえるその声にも、どこか喜色が滲み出ている。

これは、気をつけていたほうがいいかもしれない。

「それにしても、たまたま私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。ちなみに香織もいるぞ。それにな箒、先生達も言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実践では何が起きるか分からない。十分に注意をして」

「無論、分かっているさ。ふふ、どうした？ 怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「箒さん、浮かれすぎです。もう少し真面目に」

「大丈夫だ、私は真面目だぞ？ 香織こそ、あまり緊張しすぎるなよ？」

……これは、だめだ。まずい。こつも浮かれていたら、咄嗟の時に状況判断にミスが生じる。といふかなんというか、久しぶりだな、イラツときたのは。

「一夏、箒さんに注意しててください。大ポ力をやらかす危険性があります」

「ああ、わかつてる」

「織斑、篠ノ之、一之瀬。聞こえるか？」

ISの開放通信を通じて、千冬さんの声が聞こえてくる。
オープンチャネル

「今回の作戦の要は一撃必殺だ。ワンアブローチ・ワンダウン短時間での決着を心がける。また一之瀬は、相手からの攻撃を出来る限り防御し、動きを止められるようフォローしろ」

「了解」

「了解です、可能な限りフォローに回ります」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

「わかりました。出来る範囲で支援をします」

そう答えた箒さんだったが、やはり不安は拭えない。冷静さを装っていても、その返事は喜色交じりの嫌なものだった。

心中にもやを抱えているとき、突然個人秘匿通信で千冬さんから声が掛かった。
プライベートチャネル

『 織斑、一之瀬』

「は、はい」

「はい、なんででしょうか」

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かを仕損じるやも知れん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

「了解です」

『頼むぞ』

プライベート・チャネル

オープンチャネル

個人間秘匿通信から開放通信へと切り替わり、同時に私たちの意識も切り替わる。

いよいよだった。

『では、はじめ！』

直後、篝さんの後を追うように加速、徐々に高速の紅椿との距離を縮めていく。

さすが束ちゃんお手製、加速性能が尋常じゃない。だけど、こっちだって伊達に鳥の名を名乗っているわけじゃない。

『 《夜羽》 展開』

『 《夜羽》、展開します。展開終了後に加速開始』

前方に円錐状になるように《夜羽》を展開、大気を裂くように加速して行く。

抵抗はあるものの、予想よりもずっとスムーズに進んでいる。

「 暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。

一夏、香織、一気に行くぞ！」

「お、おう!」
「はい!」

篤さんが一気に紅椿を加速させ、私も鼻でそれに追従する。
くっ、さすがに速いか……、抵抗がきつくなってきた。しかし、あの展開装甲付きのISについていけるって、結構凄いことなんじや?

「見えたぞ、二人とも!」

声に意識が引き戻され、超遠距離からの視覚情報がハイパーセンサーを通して自分の脳内に投影される。

福音は、まさにその名の通り銀色に染め上げられていた。しかも、あれの頭部からは巨大な一対の翼のような武装が生えている。たしか、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システム、だったか。

「加速するぞ! 目標に接触するのは一〇秒後だ。一夏、集中しろ!」
「ああ!」

更に加速が始まり、こちらも対衝撃を備えながら更に加速する。

「くっ、うう……!」
「カオリ、大丈夫ですか?」
「なん、とか……っ!」

正直かなり辛いけど、音を上げている暇はない。

視界を何とか確保すると、一夏が雄叫びを上げながら零落白夜で福音へと切りかかるところだった。

普通ならば一撃で沈むはずのその攻撃を、なんと福音は速度を維持したまま体を一回転させ、数ミリの精度で刃を避けた。

数センチならまだ分らないでもないに、数ミリと言う尋常ではない精密さを見せ付けた福音は、加速を保ったまま一夏の攻撃を更に避け続ける。

「大丈夫ですか、一夏!？」

「こいつ、速い……ッ!」

そう叫んだ直後、一夏は最後とばかりに大降りの一撃を繰り出そうとした。

だが、それは悪手。大きく隙を作ってしまう一手。

頭部から生えている翼の装甲の一部が開き、中から砲口が覗き込む。あのままではまずい。

「一夏、下がって!」

「香織っ!？」

すかさず加速して一夏の目の前に躍り出ると、降り注ぐ弾丸を夜羽と装甲で防ぐ。爆風だけで、シールドが破られた。だが、損傷は装甲だけに留まり、夜羽は今だ健在である。まだ、動ける。

「香織、無事か!？」

「ええ、大丈夫です! 反撃を!」

「わかった!」

痛みはあるけど、動けないほどじゃない。体が吹き飛んだわけでもないし、まだ大丈夫。

一夏と篝さんが一気に加速して、両側から追撃を始める。

「一夏、私が動きを止める！」

「わかった！」

「サポートします！」

箒さんの攻撃の合間に、隙を突いたように《夜雀》を撃ち放つ。

これ以上の射撃兵装がないのが、今は惜しい。

しかも、私の弾丸は気にすることでもないのか、福音はそれを無視して箒さんだけに集中している。

やがて、徐々に箒さんの猛攻に耐えられなくなってきたのか、防御を交え始める福音。それを見て、一夏が身構えた。

「はあああっ！」

「La……………」

歌っているかのようなその声の直後、ウィングスラスターの砲門がすべて開かれ、三六機の砲口が全方位へと火を吹く。

「やるなっ……………！ だが、押し切る！」

その雨の中を箒さんが紙一重で弾丸を避けながら、接近して行く。ぎりぎりのところまだ近づいたところで、見逃すことのできない致命的な隙が、福音に作られる。

しかし、一夏は真逆の方向、海へと一直線に降りていった。

「一夏！？？」

「うおおおっ！！！」

ギリギリのところで一発の光弾を掻き消す。その先には、一隻の船があった。

「何をしている！？　せつかくのチャンスに　」

「船がいるんだ！　海上は先生達が封鎖したはずなのに　　ああくそっ、密漁船か！」

「このタイミングとは……、最悪です」

けれど、だからといって見殺しには出来なかったのだろう。まずい展開が目白押しだった。

一夏の零落白夜はエネルギー切れでたった今使えなくなった。その上、これから私たちはこの船が沈められないよう確保しつつ、三人とも逃げ延びなければならぬ。

この状態では福音の討伐は絶望的だった。

「馬鹿者！　犯罪者などをかばって……。そんなやつらは　」

「箒！」

「ッ　！？」

「箒、そんな、　そんな寂しいことは言っな。言っなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない、全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

そう言って、問い詰められた箒さんは動揺した顔を隠そうと手の平で顔を覆った。

そのときに落ちた刀が、光の粒子となって消え去っていく。

具現維持限界（ミルミル・ト・ダウン）が訪れていた。

ISだって、エネルギーがなければ防御機能は絶対防御だけしか働かない。そして、その絶対防御用のエネルギーが切れるまで攻撃されれば、後はお陀仏だ。

それに気づいて福音へと注意を向けると、既に福音は一斉射撃モードへと入っていた。ロックは、箒さんへと固められている。すべての砲門が箒さんのほうへと向けられていた。

「まずいッ！」

全速力で加速し、全身にかかるGのせいで体が悲鳴を上げるのを無視して篝さんの前へ。

そのまま《夜羽》を展開すると、福音から撃ち出された光の弾丸のうち、篝さんにあたる部分だけを纏めて防御する。

「ぐ、くうっ……！！！」

『《夜羽》損傷率、九五%を超過！ カオリ、危険です！』

『大丈夫、だから ！』

言った直後、《夜羽》が崩壊した。

その残骸ごと光の波が押し寄せ、私の体目掛け殺到してくる。

肉を抉られ、骨を砕かれ、体が焼かれる痛みによって意識を失い、そしてまた痛みで意識が引き戻される。その繰り返しが続くうち、自然と頬が吊りあがっていた。

「は、ひ、ひ」

『カオリ！？』

「い、いた、い、ひ、ひひ、はははは」

『カオリ、しっかりしてください！ カオ 、ザーッ』

痛みに耐え切れず、喉が勝手に笑いを漏らす。

目の前が真っ暗になり、

そして、私は海の藻屑と消えた。

「一之瀬さんの生体反応、ロスト……」
「……織斑と篠ノ之に帰還命令を。作戦を立て直す」
「織斑、先生……」
「……早く」

大広間で指揮に当たっていた教員達と専用機持ちの間に、暗い空気が流れる。

山田先生のもその言葉をようやく理解したらしい鈴は、突然涙を溢れさせると千冬へと掴みかかった。

「嘘、嘘よねっ!？ そんな、冗談やめてよ！ ねえっ!？」

「凰……」

「そんなこと、そんなのって……!」

「落ち着け、凰」

千冬は鈴の肩を掴むと、自分の前まで引き剥がす。
それでも鈴は頭を振って声を荒げる。

「ねえ、嘘でしょ?! 香織が、香織が……!」

「落ち着け! まだ死んだと決まったわけではない!」

千冬も、本当にそう思っているわけではない。だが、そう言わなければ鈴は壊れてしまう。そう見えるほどに今の鈴は危うかった。

涙で頬を濡らし、顔が酷いことになっているのも気にせず、その場に崩れ落ちる鈴。

「嘘、だあ……」
「……大丈夫」

鈴の泣き声意外に音が聞こえず、静まり返った大広間の中心から、
そんな声が上がった。
声の主は、更識簪。

「香織は、大丈夫」

根拠も何もない、そんな言葉が、なぜかとてつもなく心強く聞こえた。

第28話 銀と黒 白と紅（後書き）

次回、香織を失った彼女達の選択は？

乞うご期待！

第29話 戦いへ向けて

「……よし、セット完了」

「簪……？」

香織の生死不明の一報からしばらくして、私は自分のISを整備していた。

というよりかは、対決戦用の装備へと換装していた、と言った方がいいだろう。今の私は、少しばかり怒っているから。

そんなときに、後ろから声が掛けられた。振り返るまでもない、涙声で尋ねてきたのは鈴だった。

「どうしたの……」

「アンタこそ、なにやってるの……？ ISの、整備なんか」

「私は、戦いに行く。勝って、香織を助ける」

あの後、織斑先生は専用機持ち全員に旅館での待機を命じていた。士気の低下もあるだろうけど、やはり生死不明者を出してしまったという状況自体が、ゴーサインに待ったを掛けているんだろう。でも、関係ない。

「……鈴は、どうする？」

「え……？」

「このままめそめそ引きこもるか、飛んでいって香織を助けるか。どっちがいい……？」

「……」

鈴に、私の言葉はいらなだろうと思いつつ、声をかける。

きつと、もう鈴の中で答えは出てる。私が見てきた中でも、鈴は

これで立ち止まれる人じゃないから。

そして、予想通りに、彼女は立ち上がった。

「……いやよ。私も行く。シグナルがなくても、生きていることなんて結構あるものね」

「ん」

「でも、どうやって見つけるの？」

「それならば私がついておいた。ドイツの軍事衛星でな。ここから三〇キロ離れた沖合上空に福音を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見できた」

「さすが……。鈴、支度して来て」

「分かったわ。あの天使様に泥塗ってやる」

闘気と怒気を漲らせて頷いた鈴は、そのままどこかへと消えた。おそらく、調整へ向かったんだろう。

ちなみに、織斑一夏と篠ノ之箒は部屋にいるらしい。まあどうでもいいか。篠ノ之箒には、少しばかり言いたいこともあるけど、それはこれが終わってからでいい。あれと香織の優先度は著しく違う。

「東社長、全員分のブースターキット、作れた？」

「もちろんだよ。インストールは一分で終わるように作ってあるけど、使い捨てだから気をつけるようにね」

「ん」

こくりと頷き、人数分のデータチップを受け取る。この中には束ちゃんによって作成されたブースターキットの座標が登録されているから、これを使えば遠隔操作でブースターキットをインストールできる。便利なものだ。

そのうちの一つをラウラに渡すと、モーティブとISを元に戻

す。

「よし、行こうか。鉄」くろがね

小さく囁いて、ISを撫でる。

さあ、勝ちにいこう。私たちのヒーローを助けに。

一方その頃、簪と別れた鈴は黙々と出発の準備を進めていた。

「鈴、何をしている？」

「戦支度よ、見て分からない？」

さも当然のように答えた鈴に、簪は不思議そうに首をかしげる。

「出撃命令が出たのか？」

「独断よ、決まってるじゃない。それに、このまま黙ってるなんて冗談じゃないわ」

さっきまで落ち込んでいたことには触れず、鈴はそう言うてから準備を再開する。

その様子を見て、簪は何かを決意したように鈴を見て、口を開いた。

「……私も行く。一夏を呼んでくる」

「篤……」

「このままやらねばなしなど、冗談ではない。それに、香織に庇われて倒せませんでした、では、あいつに会わせる顔がない。浮かれていた私が、バカだったのに」

「……なら、すぐに呼んできて。そう時間はないわよ」

「わかった!」

あいつに言いたいことは幾らだつてある。だけど、今そんなことをしている暇はない。

もくもくと調整を続けていると、いつの間にか傍に東社長が来ていた。

「りんちゃん」

「……東社長。どうしたの?」

「りんちゃんに渡すものがあつて。はい、これ」

そう言つて手渡されたのは、一枚のチップ。

「これは……?」

「甲龍用の攻撃特化パッケージ、東さんのお手製だよ。……香織ちゃんも福音を、助けてあげて」

その言葉と共に東さんが語つたのは、福音が苦しんでいるということだった。

香織は、それを助けるために自分から志願したのだという。……まったく、どこまで優しくなれば気が済むのかしらね、あの子は。

「安心して、東社長。必ず助けるわ。香織も、福音も、まとめて」「……うん」

どこか泣き腫らしたような目と共に、彼女が頷く。
まあ、頼まれたら嫌とは言えないわよね。

「行くわよ、甲龍」

ここは、どこだろうか。

気がつくと、僕は見知らぬ場所に倒れていた。

周囲は真っ暗、足元すらもはっきりとした存在感を感じられない
其処で、僕は目覚めた。

「誰かいませんか？」

無音。

けれど、不思議と寂しさや怖さはなかった。なんだか、懐かしさ
のある場所。

いつまでも立ち止まっているわけにも行かない、とにかく先へ進
んでみることにした。もっとも、どこが『先』なのかは全く持って
不明なわけだけど。

一步を踏み出すと、其処には確かに地面がある。見えないけれど、
確かに踏みしめることが出来た。

ゆっくりと一歩ずつ進んでいくと、周囲の暗闇は徐々に一点だけ
を照らし出すように明るくなってくる。

「あれ……、端末？」

其処に落ちていたのは、携帯端末だった。

暗い闇のなか、ぽつんと其処で光を放っている。

なくなってしまった光がそこにあることに、僕は無性に嬉しくな
って、思わず走り出していた。

「これ、もしかして僕の端末……？」

「カオリ！？ 無事だったんですね！？」

「い、イヴ！」

突然端末から聞こえた声は、イヴだった。

自分以外の声が聞こえたことにほっとして、思わず胸を撫で下ろ
す。

そこで、自分がIS学園の制服を着ていることに気づく。何故だ
ろう。

「イヴ、どうしてこれに？」

「わかりません。再起動が終わったときには、ここに……」

「そっか……。とにかく進んでみよう」

「はい」

イヴの入った端末を片手に、僕は再度歩き出した。

周囲の闇は道を形作るように濃淡を浮き上がらせ、周囲の濃い闇
が取り囲む中を、唯一淡く薄くなった闇の道が真っ直ぐ貫いていた。

一歩、また一歩と歩いていくにつれて、徐々に体に痛みが戻って
くる。

肩、胸、あばら、太もも、脛^{すね}、ほかにも色々な場所がずきずきと
痛む。まるで、何かで抉られたように。

けれど耐え切れない痛みというわけでもなく、何とか僕は歩を進めて行く。

「カオリ、大丈夫ですか？」

「なんとかね……」

実際は歩くたびに激痛が走り、気を抜けばその場に座り込んでしまいそうなほどだったが、それを口にすれば今度こそ歩けなくなると思い、空気を張ってそう答える。

痛みに耐えながら進むことしばらくして、ふと気づけば周囲がやや明るくなっていった。

明るくなっていったというよりも、濃い闇が淡くなって来ていると言った方がいいだろう。

そして、その闇の中にいて一際暗い光を放つ少女が、そこにいた。

「あの、貴女は……？」

「……ようやく来たか、主」

僕の声に反応したのか、少女が言う。刹那、周囲の闇すべてが何かに掻き消されるようにして消滅し、周囲は白一色で埋められる。

髪は黒く肩くらいまでの短い長さで、黒い浴衣を身に纏った少女は、ゆったりとこちらを振り向いた。

「随分とまた、無茶をしたな。こんなにボロボロになって……」

「えっと……？」

「ふふっ、この姿ではまだ幼子ゆえ、仕方ないか」

僕の頬に手をやり、そつと撫でながら慈しむように少女。その手つきが妙に優しく、僕は思わず目を細めて身を預けてしまいたいそうになる。

「ようやく次の段階へ進む刻が来たのだ。何度も何度も死の恐怖と戦い、死に抗ってきた。その主の魂が、私と共鳴している」

「な、何を言っているのか、よく……」

「分ならずとも良い、いずれ解る。さあ、今しばし体を休めよ。目を閉じ、私にその身を預けて」

ぎゅっと僕の体を抱きしめ、髪を撫でる少女。

まるで母親のようなその仕草に、僕はそっと目を瞑った。

「小さな体……、この身に、一体どれほどのものを背負って……」

「……いやじゃ、ありませんから」

「そうか……」

抱きしめられていると、まるでぬるま湯に使っているような心地良さが全身に行き渡ってくる。

それと共に、ゆっくりと全員を襲っていた痛みが癒えていく。

「今は眠るが良い……」

「ん……」

母親に抱かれているような暖かさを感じながら、僕はそのまま意識を落とした。

シルバリオ・ゴスベル
「銀の福音？」

「ええ、そのデータのデータを探って来て欲しいの。ついでに貴女のお兄様とやらにも、ちょっとかいを出して来ても構わないわ」

「素敵なお話ね……。いいわ、受けてあげる」

ホテルの最上階の部屋、そのベッドの上で、素肌を晒しているキティが言った。

その言葉を聞いて、同じように素肌を晒しベッドに腰掛けているスコールは小さく笑う。

キティはスコールを後ろから抱きしめるように首に手を回すと、手首をスコールの前まで持ってきた。

「ほら、見て。貴女に付けられた傷跡しゅうし、まだ残ってるわ」

「あれ程気持ちよさそうに悲鳴を上げていたじゃない？」

「ええ、嬉しいの。ありがとうスコール、帰ってきたら、今度は私が貴女に傷跡しゅうしを付けてあげるわ……。そうしたら、貴女も私のもの……」

ぎゅっ、といつの間にかスコールの前に回りこんでいたキティは、不意に彼女の首を絞める。

両手を使い、力いっぱい。けれど、スコールは動じることなくキティを抱え上げるとベッドへと押し倒した。

そして、お返したとばかりに彼女もキティの首を絞める。ぎぢぎぢと、一切の情け容赦なく。

「あ、が」

「ああ、貴女とこうしているの、とても楽しいわ……。！ 互いの首を絞めあって、快樂を楽しんで、もうぐちよぐちよになってしまっているの……。！」

「は、はは、良かった、わ、スコールう……」

キティが笑い、スコールが笑う。

「ねえ、ねえ！ もっと、もっと強く締めて……！ 死に際を味わせて……！」

「いいわよ、もっと強く……！ ふふ、絞めるのも、絞められるのもいいなんて、欲張りな子ね……！」

スコールは自分の息が苦しくなりだしているのも気にせず、更に強く彼女の首を絞める。

ゆっくり、ゆっくり、キティの意識に闇がかりだす。それに伴って、彼女の笑みが深くなっていく。

「ああ、ああ……！ は、ひ、ひひっ、はははははは」

それからしばらく、彼女達はそうして互いを愛し続けた。

キティ
子猫はその魔物染みた魅力によって、捕らえた獲物を逃さない。

第29話 戦いへ向けて（後書き）

キティさん順調にぶっ壊れ中。

この子、別の意味で書いてて楽しい。その、アレ的な意味で。

異常の中の快楽を求めるというのが、どうにもツボです。歪んでるねえ。

いや、リアルで危ない人ではないので。書いとかないと勘違いされそうだからね！

次回、決戦。

彼女達の、そして香織の行く先は？

乞うご期待！

第30話 再誕する翼

海上上空二〇〇メートルのところ、胎児のように眠っているかのごとく自らを抱いていた福音は、微かな違和感と共にそちらへと首を動かす。

その直後、爆音と共に広がった粉煙が福音の頭部へ弾丸が命中したことをラウラに告げる。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！ さあ踊れ、その羽を蜂の巣にされたくなければなっ！」

吼え、福音が反撃のために起き上がるよりも早く次弾を装填、発射する。

大気に風穴を開け突き進む弾丸が、福音目掛け駆けてゆく。ラウラの今の姿は砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備しているため、両肩に八〇口径レールカノン《ブリッツ》が、そして左右と正面に四枚の物理シールドがとりつけられていた。

そのラウラへ向けて福音が向かう。

進行を阻害する形で砲撃を行ってはいるものの、やはり相手は最新型の軍用IS。半数以上の弾丸は翼から放たれるエネルギー弾によって撃ち落されてしまう。

目前にまで捉えたラウラへと福音が手を伸ばし

「セシリアー!!」

しかし、その手は弾かれる。

突如としてその身を露わにしたブルー・ティアーズの強襲により、福音は更にダメージを負いながら一時的に後退する。

そのセシリアの姿もまた、ラウラと同じようにパッケージを装備

していた。

四機のエネルギービットと二機のミサイルビットは揃ってスカパート状に腰部に接続され、スラストの役割を果たしている。

その分の失った火力を補うのは、セシリアの手にしている大型Bレーザーライフル《スターダスト・シューター》である。全長二メートル越えというとにかく火力を突き詰めた仕様ではあったが、この状況ではその火力が頼もしい。

それが、強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を身につけたブルー・ティアーズの姿であった。

「私たちの友人を助けるために、貴女には墜ちていただきますわ！」

高機動状態から反転、正確に福音に照準すると引き金を引き、次々に光弾を浴びせていく。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

それにいらだったのか、福音はようやくセシリアを認識すると機械的にそう言い放つ。

しかし、福音の前に立つのは二人だけではない。

「遅いよ」

セシリアよりも更に上に行く高機動を駆使して次々と二人の射撃を避けていく福音を、真後ろから声の主が襲う。

それは、ステルスモード解除の際にセシリアから離れ、距離をとり隙を窺っていたシャルロットだった。

後方からのショットガン二丁の射撃の嵐を浴び、福音は一瞬だけ姿勢を崩した。しかし、それも一瞬。

すぐさま三機目に対し《銀の鐘》^{シルバベル}を使用した反撃を繰り返す。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの二重の盾によって、福音の猛攻を防いで行く。

息つく暇のない防御の、針の穴のような小さな隙間を狙い、シャルロットは自身の技能である『高速切替ラビット・スイッチ』によってアサルトカノンを呼び出し、撃ち抜いてゆく。

「香織とはそんなに親しい仲じゃないけど、それでも友達なんだよ。悪いけど、墜ちてもらおうよ！」

それに加え高速機動射撃のセシリア、遠距離砲撃のラウラ。三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始めて行く。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放つと、福音は次の瞬間に全スラストアを用いての強行突破を計った。

しかし、そんなものを彼女が許すわけがない。

「させるかあつー!!」

「逃さない……っ！」

海面が膨れ上がり、二つの影がそれを切り裂き躍り出る。

飛び出してきたのは鈍い銀色の輝きを持った、打鉄に似た機体、しんとうち『真打・鉄』と、くわがね『甲龍』であった。

「あんたも苦しいのよね。今ぶっ飛ばして、引きずり出してやるか

らまつてなさい！」
「斬り裂き、進むっ！」

それぞれの目に希望の光を灯した二人は、一瞬で肉薄すると同時に左右から斬撃を繰り出す。

鈴の《双天牙月》は赤い炎を帯び、接触するエネルギー弾を飲み込み更に大きくなる。

束によって作成された火力特化パッケージ『きえんはんじょう気焰万丈』に収められていたのは、《双天牙月》に装着する特殊武装《えんげつ焰月》、追加の衝撃砲に衝撃砲に読み込ませる威力強化プログラム。

それを手にした今の甲龍は、あらゆる壁を粉碎する。

「ずおらア！」

甲高い金属音と共に二人の攻撃を防いだ福音は、離脱を諦めたのか上空へと飛ぶ。

しかし、それを許すほど、もう一人の同行者は甘くなかった。

「逃さないと、言った……ッ！」

福音の認識速度すらも上回るスピードで福音の進路を妨害した簪は、その手に持った一振りの大剣を振りかざす。

どす黒いほどの朱に染まった、長方形の板のようなそれは、しかし剣であった。

「はあああああっ！」

膨大な熱量を伴って振り下ろされる刃を紙一重で避けた福音の装甲が、まるで何かに殴られたかのように大きく凹む。

近距離用刀剣武装《あかがね朱鉄》が、その武器の名である。

真打・鉄に収められた武装の一つであり、その主だった武装。その最大の特徴は、刃自身が周囲から熱を取り込み、増幅し、周囲に拡散させ、更にそれを取り込み増幅させるという、半永久機関のプロセスを踏んでいるところである。

この部分は束も一枚噛んでおり、この最大の難点であった永久機関を完成させたのも束であった。

「おらア！」

一瞬動きが止まった福音へ向けて、紅蓮に染まった見えざる弾丸が豪雨のように降り注ぐ。

それは重力に逆らい上空の福音へと吸い込まれて行き、次々に爆裂する。

「やりましたの!?!」

「まだ! つつーかセシリアそれ以後禁止っ!」

「ご丁寧にフラグを立てたセシリアへ鈴は刺すようにその口を出すと、龍砲の照準を再度合わせる。

『《銀の鐘》シルバー・ベル 最大稼動 開始』

「やらせんツ!」

「止めてやるツ!」

両腕と翼を大きく広げた福音のはるか上空から、その声とともに降り注ぐは、世界でたった二機の大四世代型IS。

『紅椿』と『白式』だった。

紅椿は《空裂》からわれを、白式は《雪片式型》ゆきひらにがたをそれぞれ展開し、一斉に羽目掛け刃を振り下ろす。

「うおおおおつ！」
「せやああああ！」

完全な不意打ち。

いかなるシステムであっても、行動と行動、拍子と拍子の間を突かれた攻撃には対処できない。

二人の刃は真っ直ぐにその羽を断ち斬り、海へと叩き落して見せた。

それきり、福音は動く素振りも見せず海中へと沈んでいく。

「……終わったな」
「ああ」

静寂は一瞬。

それを切り裂くようにして、甲高い悲鳴のようなものが辺り一帯に響き渡る。

そして、それとともに広がる強烈な光。

「なんだっ!？」

誰が言ったかも分からないその言葉の響きが消える前に、光は球状へと変化し、そしてその中に青い雷を纏った『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が、ここに留まっていたときと同じように自らを抱き蹲っているのを見た。

「これは……!？」
「!?!? まずい! これは 『セカンド・シフト第二形態移行』だ!」

ラウラの声が響き渡る前に、その音が届いたかのように福音がそちらへ顔を向ける。

そこにあっただのは、感情が消え表情の見えないバイザー。それを

見た瞬間、簪と鈴、そしてラウラが弾けるように叫んだ。

「逃げる　！」

『キアアアアアア……！！』

低い、しかし甲高い、相反した雄叫びを産声として、福音は『第二形態移行』を終えてしまった。

そして福音は、その眼で獲物を見定めると、知覚の範囲外の速度を持ってしてラウラへと接近、その足を掴んだ。

「しまっ！？」

予想外に速い速度を見せ付けられ、ラウラは即座に全ての砲塔をそちらへ向けると砲撃を始める。

しかし、それは切断された頭部から這い出すようにして生えた『エネルギーの翼』によって全て無効化されてしまっ。

「ラウラを放せえっ！」

「よせ！　逃げる、こいつは　！」

近接ブレードで接近し、きりつけようとしたシャルロットの言葉を遮り、ラウラが言うも、その言葉は更に福音によって遮られた。

次の瞬間、ラウラを包み込むエネルギーの翼。

荘厳な美しさと輝きを放つその翼に包まれ、その中でラウラはエネルギー弾の嵐に晒され、一瞬で装甲は打ち剥がされ、エネルギーが底をつき、海へと落とされた。

「ラウラ！　よくもっ……！！」

激昂したシャルロットがショットガンコルを呼び出し、福音の顔面目

掛け至近距離で撃ち放つ。

ドンッ！ という音と共に弾丸が射出され、しかしその音はショットガンの発射音ではなかった。

「きゃっ!?!」

福音の全身の装甲が卵の殻のようにひび割れ、そのひびの間から小型のエネルギー翼が生み出される。

それが一斉に羽ばたくことによって生み出されたエネルギー弾がシャルロットをショットガンごと吹き飛ばした。

「な、何ですの!?! この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な
「!」

「しまった、エネルギーが……!?!」

セシリアの言葉に続くように、一夏の声が響く。

それは、対抗できる刃の一つが失われたことの報告に他ならなかった。

そして、福音はまるでそれを喜ぶかのように叫ぶと、セシリアの眼前へ『イグニッション・ブースト瞬間加速』を用いて急接近、両翼の一斉射撃によって一瞬でエネルギーが消し飛ばされ、眼前の海へと叩き落される。

「セシリアッ!」

「ここまでやって、まだ足りないのか！ 貴様はああああ!」
「バカッ、箒!?!」

セシリアが落とされたことに激昂し、箒が急加速で接近、連続した斬撃で福音を攻め立てていく。

怒ってはいても、箒の技にキレが消えることはなく、むしろそれは増していた。

「うおおおっ!!」

互い違いに回避と攻撃を繰り返しながら、紅椿は徐々に出力を上げていく。それにより、福音との差は徐々に紅椿の方に向き始めた。今度こそ、という意思を持って放とうとした一撃。しかし、それはエネルギー切れを知らせるブザー音によって阻まれる。

「なっ! また、エネルギー切れだと!? ぐあっ!」

にやり、と。悪意ある笑みが彼女を捕らえた。

その直後、彼女の首までもを福音の右腕が捕らえてしまう。

「箒イイイ!!」

響いたのは、一夏の悲鳴だった。

「…………主、主。そろそろ起きよ」
「ん…………、んんう…………」

眠っていた意識が揺り起こされ、僕の前に眠る前まで見ていた彼女の顔が映る。

後頭部に柔らかい感触があった。

「ふむ、目が覚めたか？」

「は、はい……。あの、僕は……」

「ふふ、よく眠っていた。傷も癒えただろうか？」

「え、あ、そう言えば……」

嬉しそうに笑う彼女の言葉で、体の痛みがなくなっていることに気づいた。

と、突然彼女の顔が真剣になる。

「さて、このまま主を膝枕しているのもいいが、それよりもやるべきことがあるな」

「え？ あ、ご、ごめんなさいっ!？」

「構わぬよ。私が好きでやった事ゆえな。それよりも主、立つがよい。次の段階へ進む準備は、整った」

そういうと、彼女は僕が起き上がるのを待ってから立ち上がる。

そして、両手をこちらへと突き出してきた。

「手を重ねよ」

「こ、こう、っ!」

重ねた瞬間、たくさんの映像が流れ込んできた。

ふーちゃんの涙、戦っている皆、色んなものが流れ込んできて、

最後に僕の中に入って来たのは、彼女の存在。

気がつくといつの間にか僕は目を瞑っていて、それを開いたとき、目の前の少女は少女ではなく、黒髪を長く伸ばした美しい女性へと変わっていた。

「貴女は、梟、だったんですね……」

「さよう。主が応えてくれた時、私は嬉しかった……。主と共に空を飛ぶのが、楽しくて仕方なかった」

「でも、完全ではなかった」

「主を乗せている限り、私の身を守る力は失われていた。しかし、主の痛みによってその守る力は新たに作り出された。もう、主を苦しめる心配はない」

ありがとう。

涙を流しながら、梟はそう告げた。

僕はイレギュラーだ。しかしそのイレギュラーと共に無理やりにも飛ばうとした結果、エラーが出た。そのエラーが絶対防御の消失、シールドバリアの弱体化に反映されてしまったんだ。

だけど、それももう終わり。

『ファースト・シフト 第一形態移行』が終われば、それも消える。より強く生まれ変わる。

ばさつと、彼女の背中から黒い二対の羽が生えた。

「共に、飛んでくれるか？ 主よ」

「……もちろん。行こう、梟。イヴも一緒に」

「うむ。ゆくぞ、二人とも」

「私が随分と置いてけぼりでしたね。埋め合わせはしてもらいますから」

イヴの怒った口調の中身が喜色に飛んでいることがなぜかわかって、思わず笑みを漏らす。

次の瞬間には、彼女とイヴと僕は一つに溶け合い、そして黒い光を放ちその世界は消え去った。

悲鳴が響く。

しかし、そのさきが続くべき声は、筭の悲鳴は、エネルギー弾の射出音はなかった。

その代わりに聞こえたのは、鋭く何かを切り裂く音。

「　　かお、り？」

「うん。ごめんなさい、筭さん。遅れました」

まるで待ち合わせか何かに遅れたように、軽く言い放つ。

「香織、香織なの！？　無事なのね！？」

「よかった……！」

「香織、生きてたんだ……！」

「すまねえ香織……！　あの時、おれがちゃんとしていれば……！」

口々に言うみんなの言葉を、彼は目を閉じて聞く。

そして、そっと口を開いた。

「とりあえず、詳しいことは後で話すよ。まずは、ただいま、皆。そして」

心底嬉しそうに笑い、二対の漆黒の翼を生やし、その手に巨大な剣を持ち、彼は降り立つ。

「そろそろお開きだよ、福音。君の悪夢は、梟の羽の音が持ち去る

う

完全となった梟を纏った香織が、そこにいた。

第30話 再誕する翼（後書き）

やっと、やっとここまで来た……！

次回、進化した梟と香織、イヴの三人が福音と激突！

乞うご期待！

第31話 黒の攻防

「行くよ、梟、イヴ」

『はい、カオリ』

香織は四枚となった《夜羽》^{よばね}を背中に展開し、一對となった《夜鷹》^{よたか}を両手に備える。

双眸は決して彼女から離さず、常にその動きを見続ける。

直後、急加速で眼前へと接近、そのまま夜鷹を振るい福音のエネルギー翼を破壊していく。

一撃一撃がまるで必殺の意思を込めているかのように鋭く、そして鮮やかに翼を刈り取っていった。

「は、速い……!!」

「まって、梟つてあんなに速く動けたの!？」

梟が褒められているような気がして、箒と鈴の声に思わず笑みを零す。

そのとき、なす術もなく攻撃を受けていた福音が動いた。

頭部の巨大なエネルギー翼を動かしたかと思うと、一瞬で香織を飲み込む。

「まずい、あれはっ!」

刹那、発射音が響くと同時

鳥の囀りが辺りを包んだ。

「これは、なんだ?」

「鳥の声……」

「……綺麗」

「すげえ……」

場違いな感想かもしれないが、彼ら彼女らは思わずそう呟いていた。

様々な種類の鳥の囀りが聞こえてきたかと思うと、エネルギー翼が徐々に消えていく。

まるで、囀りによって打ち消されるかのように。

「その攻撃は通用しないよ。その程度のエネルギーなら打ち消せる」
ワンオフ・アヒルデュー バードエイク
『単一技能、《とりのさえずり》の発現を確認。成功です』
「うん、ありがとうイヴ」

梟の単一技能、《とりのさえずり》。

その能力は、鳥の囀りに聞こえる特殊な周波数の音波を発生させることで、あらゆるエネルギーを打ち消す能力。

それはつまり、相手の運動エネルギー、BTエネルギー、あらゆるそれを封じる力に他ならず、力以外での戦いの終結を体現する力だった。

尤も、現在の《とりのさえずり》では稼働率が低く、BTエネルギーを打ち消すので手一杯だが、今はそれで十二分。

「悪夢はおしまい、そろそろ幸せな夢に帰る時間だ」

『《夜羽》正常稼働。ウィングビット起動。《夜鷹》正常稼働、武装特性、《ナイトホーク》発動』

鳥の囀りが辺りを包み込む中、福音の目の前で夜羽の一部が外れていく。その数一〇個。四枚の羽のうち二枚から、五枚ずつ羽が外れ、ビットとなる。

そして、それを覆い隠すのは《夜鷹》の特性。かつてステルス戦闘機に用いられたその名称の通り、その刃は使い手を夜の闇に隠す力を持つ。

それらは全て、梟と香織が互いを知り、理解し合い、その上で互いを翼としたゆえの力である。

ビットと本体、全ての姿が掻き消え、福音は目に見えて混乱しました。

『目標消滅。シールドエネルギーの減衰は確認できず。状況変化、最大攻撃力を使用する』

その音声が響き渡った直後、三本の光の矢が福音を貫いた。

それを皮切りに次々と撃ち出される光の矢に混じり、時たま襲ってくる斬撃。それは寸分狂わず装甲を叩き切り、シールドエネルギーだけを減らし操縦者に負担を掛けないよう計算されていた。

『継続してBTエネルギーの消滅を確認。最大攻撃力、使用不能』

エネルギーが消されれば、エネルギー翼を使用した攻撃は行えない。

福音はすぐさま戦闘行動を接近戦へ切り替えると、あらゆるレーダーを駆使して梟の居場所を探し始める。

しかしそれもむなしく、光の矢はいまや一度に多方向から六、七本が撃ち出されるほどとなっていた。

そして、その戦いは呆気なく終わりを告げる。

「これで」
『終わりです』

全ての装甲を破壊され、エネルギーが其処を尽きた福音は操縦者

から離れ、待機状態へと戻る。

《とりのさえずり》と《ナイトホーク》を解除し、危うく海に落ちかけた操縦者を両手の平でキャッチし、香織はようやく一息ついた。

「そつだ、ラウラとシャルロットさん、セシリアさんは!？」

「皆無事よ。浮かぶくらいのエネルギーは残ってるわ。おかえり、

香織」

「……うん、ただいま、ふーちゃん」

「おかえりなさい……、香織……」

「ただいま、簪ちゃん。ちゃんと見てたよ、簪ちゃんが自分のISで戦ってること」

香織の言葉に、簪は頬を染めて微笑んだ。

箒と一夏はなんとなく自分達がここにいるのかと一瞬疑問に思ったが、それよりもまず謝らなければと考えて香織の傍に寄る。

「その、香織。……すまなかった。私が驕っていたせいで、あんなことに……!」

「それを言うなら俺もだ。箒のことばかり考えてて、お前のこと見ててやれなかった」

「二人とも、謝罪は受け取りました。それに、一夏は自分の役目をやっただけです、気にしないでください。箒さんは……、まあ旅館に戻ってから話しましょうか」

「あ、ああ……」

実際は別になんとも思っていないが、今ここで話すことではないと考えてそう答える。

手の内にある福音の操縦者を見て、それから微笑む。

「さあ、帰ろうか」

「そうは行きませんわ、お兄様」

ぞくり、と。

背筋に悪寒が走った。

「初めまして、ですわね。香織お兄様？」

「……誰だ」

「そんな怖い声をお出しにならないでくださいませ。私はキティ、貴方の妹ですわ」

くすくすと笑いながら、キティと名乗った少女は裂けるような笑みを浮かべて香織を見る。

「残念だけど、人違いだ。僕に妹はいないよ」

「ふふつ、今は構いませんわ、分からずとも……」

じゃきん、と自らの身の丈ほどもある純白の刃を構え、灰色のI Sに身を預けた彼女は嗤う。

その顔は、香織と瓜二つな、しかし全く異質なものだった。

「さあ、踊りましょう？」

急接近し、一撃。

上段から振り下ろされた刃を辛うじて《夜鷹》で防ぐと、二枚の羽で福音の操縦者を保護しながら、もう片方の刃で真横から斬撃を放つ。

しかし、それはいと容易く装甲によって阻まれた。

「なっ!?!」

「ステップを進んでも、所詮一次移行しただけのISではこの《^{グレイ}灰狼^{ウルフ}》は打ち破れませんわ」

『イヴ、ウィングビット!』

『はい!』

不敵に笑みを浮かべるキティと名乗った少女へ向け、ビットを展開し一斉に撃ち放つ。

しかし、それはその手に持った剣の一振りですぐ容易くかき消されてしまう。

「無駄ですわ、尤も、私もお兄様と今争う気はありませんの。今日は顔見せ、また今度お会いしましょう?」

そう言つと、キティはからからと嗤いながらその姿を消した。まるで、最初から其処にはいなかったように。

香織は、それをまるで夢か何かのように見送っていた。

「香織、大丈夫!？」

「う、うん……。あれは、一体……」

「一度戻ろう……。これ以上ここに留まっている理由はない……」

「そ、そうだね……」

簪に促され、一同は旅館に戻ることにする。

尤も、その表情はあまり優れなかったが。

帰った私たちを待っていたのは、鬼でした。

「作戦完了　と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」
「……はい」

うう、千冬さんが怖いです。

そんなことを考えていたら、突然ぼふっ、と私の頭に手が乗せられ、そのままわしゃわしゃと撫でられる。

「一之瀬……、よく無事に戻った」

「先生……」

「一之瀬以外は説教だ、全員正座！　一之瀬は先に診断を受けておけ」

「は、はい！」

千冬さん……。

あれ、でも私は普通に診断を受けるとまずいのでは？

「安心しろ、そっちは束がやる」

「……別の意味で安心できないのですが」
「諦めろ」

死刑宣告！？

でも、あれだな。帰ってきたって実感するね。

ちなみに、福音の操縦者さんはまだ気を失っているから、私が背負っています。背は高いけど結構軽いから背負いやすい。

『ちなみに、検査するまでもなく力オリの体調は万全ですが』
『書類作りとかあるんだよ、きつと』

イヴとそんな会話をしてから、私は操縦者さんと共に座敷へと通された。

そこで突然、耳に息が吹きかけられた。

「ひゃうっ!？」

「ふふっ、ほんとに女の子みたいな反応するのね」

「お、起きてましたんですか!？」

「ええ。ありがとう、あの子を止めてくれて……」

誰もいない座敷で、彼女は私の背中からすとんと降りると、そのまま私を背中から抱きしめる。

……震えていた。寒いわけじゃないだろう、ただ震えて、ぎゅつと私を抱きしめている。

「……あなた、男の子なのよね」

「……福音が知らせてくれたんですか？」

「ええ。あの子は、私を守るために自分から戦いの場へ赴いた……。そのせいで、あの子は……」

後ろから涙で潤んだ声が聞こえ、そつと私の前にある手を握り締めた。

「……束ちゃん、いるでしょ？」

「うん。お帰り、香織ちゃん……」

「ねえ、福音のことを直してあげられる？ このままなんて……」

いつの間にか暗がりから現れた東ちゃんにそう尋ねる。
東ちゃんの目は赤く腫れていて、随分泣いたんだろうつてことが
良く分かった。

「……ナターシャ・ファイルス、アメリカのテストパイロットだね」

「……ええ。初めまして、篠ノ之博士」

「貴女には今二つの道がある。福音と共に私の元に来て、福音を助けるか、それともアメリカに戻って福音が初期化、凍結処理されるのを黙ってみているか」

ナターシャさんの前に立ち、東ちゃんがそう言った。

これって、つまり、ナターシャさんをヘッドハンティングしてる
ってこと？

「……貴女なら、あの子を助けられる？」

「あの子がこうなった責任の一端は私にある。私が暴走の振りなんて頼まなければ、こうならなかったかもしれない。だから、必ず助けるよ」

「……分かったわ。色々言いたいことはあるけど、それはあとで言わせてもらうことにする。あの子を苦しめた直接の原因を探れる？」

「もちろん。そろそろ目に余る行為が多くなってきたからね」

「なら、よろしく願いますわ。あの子共々お世話になります。でも、どうやって引き抜くつもり？」

その言葉に、東ちゃんは不敵に笑ってみせる。

ああ、まあまたやるんだろうなあ。ISOコアの制限とかどこにいったんだろつか。

えーっと。

どうやらうちの社員がもう一人増えるようです。

「それじゃあ、よろしくね。せ・ん・ぱ・い」

「え、ええっ!? ちょ、僕がですか!？」

「そうだねえ、そうなるね？」

あと、後輩になるようです。

「詳しい話はこの後また纏めようか。香織ちゃんたちへの纏まったお話は、また今度機会を設けるから、そのつもりでね？」

「はい」

もう、置いてけぼりですねー。

あ、イヴの気持ちが分かったかもしれない。

夕食を食べ終えた後、僕はそつと旅館を抜け出して海へやってきていた。

ざあん、ざあん、と波の打ちつける音が心を落ち着かせてくれる。

「……あの子は一体、誰なんだろう」

「わかりません。しかし、これから私たちの前に現れることだけは確かでしょう」

キティと名乗ったあの少女は、僕に瓜二つだった。

……一体、彼女は。

「いい男が一人で黄昏てるの？」

「ナターシャさん……。そっちこそどうしたんですか、こんなところまで？」

「こそこそーっと宿を抜け出すいけない子を追いかけてたら、ここに着いたのよ。どうしたの？」

いつの間にか隣に立っていたナターシャさんは、僕の横に座るとこちらへ身を傾ける。

こてん、と顔を僕の肩に乗せてきた。

「……色んなことを、考えていたんです。世界のこととか、自分のこととか」

「彼女のこととか？」

「違います。というか彼女はいないんですけど」

「アプローチは一杯掛けられてるみたいだけどね。りんちゃんとかんちゃん、だっけ？ 束から聞いたわよ」

あのウサギめ、話しおつたな……。

まったくもっ……。

「……まだ、僕は決められません。誰か一人を選ぶと、他を斬り捨てるような気がして」

「それでも、決めないといけないときが来るわ。……まあ、全員愛するってのも、アリかもしれないけど？」

「な、何を言ってるんですか!？」

「そうそう、ラウラちゃんだっけ。あの子も貴方のこと好きみたいね？ ちよくちよく見てたわよ」

妙な観察眼を持つてるなこの人……。

今はまだ、恋とか、そういうの分からないんだよな。

「まあ、ゆっくり考えなさい。時間はたっぷりあるわ。それに、もしあれならお姉さんが相談に乗ってあげるから」

「……なんというか、こういうまともな人は久しぶりかもしれないですね。ええ。」

東ちゃんはあんなだし、同級生は皆ちょっと外れてるし。いや、いい人たちなんだけど。

千冬さんは……、なんか相談しづらい。どっちかって言うとふらつときて何かを学び取るような感じ。

お姉ちゃんは……、うん、ないな。頼りになるけどならない人だから。

「それで、処遇はどうなったんですか？」

「東が直々にアメリカのトップと交渉してるわ。多分、新品のISコア渡すから福音と私を寄越せって言ってるんじゃないかしら。アメリカも今回の事件は公にはしたくないようだから、それで手を打つと思うわ」

「……まあ、こっちにお金も入るし、いいか」

「あら、何の話？」

疑問を浮かべた表情でこちらを見ていたので、出発前に僕が千冬さんをお願いした条件を話してみた。

最初は驚いていたけど、徐々に悪い笑みに変わっていくナターシヤさん。……うん、そういう顔も綺麗。大人の女性って感じた。

「中々がめつく持っていくじゃない？」

「命を張るんですから、当然ですよ。ともかく、これでしたらお金には困りませんし」

「ふふっ、私好きよ？ そっとう強い男の子って」
「茶化さないでくださいよ」
「はいはい」

楽しそうに笑いながら彼女は海を眺める。

……潮の香りが、心地よかった。

第31話 黒の攻防（後書き）

はい、なぜかナターシャが社員になりました。しかしヒロインにはなりません。

この束さんだったら、コアを助けるためにこれくらいはするかな、ということ。

香織が男だということがコア・ネットワーク経由で福音とリンクしたナターシャにも流れ込んで知られている、ということ。だんだんIS原作と離れてきた拙作ですが、どうぞよろしく。

今回はバスの中から開始です。

第32話 帰還 そして夏休みの始まり！（前書き）

今回、香織がちよっと人間離れします。

第32話 帰還 そして夏休みの始まり！

「篤さん」

翌朝、私は朝食をとった後に篤さん呼び止めた。

名を呼ばれた彼女はびっくりと肩をすくめると、そっとうちらを向く。

「……………香織」

「昨日言っていた、お説教。ちょっと簡単にですけど、ここで済ませますね」

「……………ああ」

どんよりと暗くなった篤さんの顔を見て、ちょっと気の毒になる。私自身はもう気にしていないけど、でもここできつちり言い聞かせた方が彼女のためになるし、彼女もそう望むだろう。

そう信じて、私は口を開く。

「貴女は『紅椿』を受け取ってから最初の作戦失敗まで、ずっと心が浮ついていましたね。命を掛けた戦いだということにも関わらず。それは許しがたいことですし、そのような心構えでは紅椿は力を貸してくれません。貴女が強くならなければ意味がないことは、貴女が一番わかっているでしょう?」

「……………ああ」

「ですから、強くなりなさい。私だって強いとは言えませんが、それでも前に進むために努力なさい。それがいつか、貴女自身を助けることに繋がります」

……………なんだか説教というより説法染みてきたなあ。

よし、とつとと終わらせよう。武力行使で。

「なので。ふんっ！」

「っ！？ つうう……！？」

「手っ取り早く言えばごちゃごちゃ考えるより歩け、走れっことです。失敗したなら倍働きなさい、納得いかないならいくまで行いなさい、それでも駄目ならその倍やってみなさい。駄目だ駄目だと言っつのはそれが終わった後にすることです。って、これお姉ちゃんの受け売りなんですけど、そういうことです」

全力で拳骨を落としてから押し切る形で説教終了。浴衣姿の篤さんが頭を押さえて涙目で「痛い痛い」とアピールしているのが妙に印象的だった。しかし自重はしませんよ？

で、食事を終えた私たちはISと専用装備の撤収作業に入ったわけなんです。

「……あの、お三方」

「ん？」

「なにいー？」

「……なに？」

「動けないんですけど」

現在、私はふーちゃん、のほほんさん、簪ちゃんの三名にそれぞれ首、右腕、左腕をホルドされています。

さすがに三人を引きずってまでは動けませんのことよ。

「ちゃんと言っつてなかったなあ、って。おかえり、かおりん」

「のほほんさん……」

「詳しいことは言えないんだらうけどー、でも、ちゃんとしてきてくれたからいいのですー」

「……うん、ただいま」

右腕をがっちりホールドしたまま、むしろホールドをきつくしながらのほんさんは私の腕に頼ずりを始めた。……少し恥ずかしい。

なんて考えていると、ふーちゃんが私の顔の横に自分の顔をむぎゅっと押し出してきた。ちゃんと鎖骨辺りで腕を止めて、息苦しくならないようにしてる辺りすごいね。腕力ある。

「アタシも、あんまり言っただわよね。お帰り、お疲れ様、ありがとう、香織」

「はは、どう致しまして、ただいま、ふーちゃん」

「……私も。お帰り、お疲れ様」

「うん、ただいま、ありがとう、簪ちゃん」

なんだろうね、この感謝&挨拶ラッシュ。

とりあえずそれが終わったところで私から三人が離れた。どうやらあれがやりたかっただけらしい。

「って、のほんさんISの撤収作業は？」

「もう終わったよー？ 後はバスに乗るだけー」

「わかりました。それじゃあふーちゃん、簪ちゃん、また学校で」

「うん、また」

「ばいばい……」

各々自分のバスへと乗り込んでいく二人を見送った後、私とのほんさんも揃ってバスへ乗り込み、そしてバスはIS学園へと動き出した。

……動き出した、んだけど。

『おつかしいなー、ラウラ、この空気は何？』

『一夏が、セシリア、シャルロットの二人に昨日の夜、ISを使用して追い掛け回されていたらしいです』

『また色恋沙汰か……。一夏も懲りないねえ。それで、今なんであんなに干からびてるの？』

『さあ？』

以上、ラウラと私のプライベート・チャネル個人間秘密通信での会話でした。
ふむ、仕方がないな。

「一夏」

「ん、あ、なんだ？」

「喉渴いてるの？」

「干乾びそうだよ……」

本当に干乾びそうな声を出すね、一夏。あ、知ってる？ ミイラ
つて、木乃伊って書くんだよ。

出展は中学校の図書室にあった本。ミイラの歴史とか作り方とか
書いてあった。

「……お茶いります？ ありますけど」

「くれるのか！？」

「う、うん。零さないようにしてくださいね？」

「ありがとう！ お前は命の恩人だ……！」

私が渡したお茶のペットボトルをありがたそうに受けとると、な
ぜか一度拝んでから一気に中身を飲み干した。

そんなに喉が渴いていたのか……。もう夏も近いし、熱中症にな
るといかんよね。脱水症状は危険だ。

「た、助かった……！」

「大袈裟、じゃないか。暑くなって来てるし、水分補給は小まめにしないと」

「ああ、ありがとな香織」

「どういたしまして」

女子の声で騒がしいバスの中で、小さくお辞儀をしあう私と一夏。なんだけどなんだか三方から嫌な気配が……。

そんなバス移動も、まあ悪くはないかなと思った今日でした。

そして日にちはやや飛んで、八月入りしまして。

「疲れたあ……」

「涼しい……」

「……たれかおりん、たれりんいん」

簪ちゃん、人をたれパンダみたいに言わないでくださいーい。

まあ、今そんな感じになってるんだけど。

八月に入り、ES学園は遅めの夏休みへと突入した。そんな中、私達は今日ようやく三日間にわたる補習授業が終わり、少し遅く夏休みへと開放されたのである。

で、今は私の部屋で涼んでいます。のほほんさんは現在帰省中だそうで、暫くは一人部屋。

と言つても、夏休みの間は寮の規則も若干緩むらしく、寮長に申し出てさえいればお泊りなんかもオツケーだそうです。

……お姉ちゃんが入り浸る未来が見えるよ。

「それで、夏休みどうする？」

「とりあえず……、家の掃除かなあ。後は……梟の整備？」

「ほかにすることはないの！？ 前から思ってたけど、趣味とかないわけ！？」

「趣味？ ……おしゃれ、は違うな。主に楽しんでるのはお姉ちゃんだし」

趣味、趣味……。料理とか読書とか、機械弄りに二度寝？

「……なんか、辛うじて読書が引かかっているレベルよね。女の子より女の子してるじゃない……」

「……機械弄りは、いい」

「ああ、そうね、あんたはそういうんだっけ……」

「……お泊り？」

ん、なんだかお話が妙な方向になってきたぞー？

「香織の家に、お泊り……」

「それはいいわね。ラウラも誘いましょうか」

「あれ、ちよつとまって、なにこの流れ」

「お泊りと聞いて」

「お姉ちゃん天井裏から降りて来るのやめて」

すとんっ、と天井の一部を外して降りてきたお姉ちゃん。このぐらいでは驚かないですよ、ええ。

簪ちゃんは驚いてるけど。

「で、お泊りだね！？ いいとも、ぜひとも！ とすると寝る場所は香織の部屋か、オツケー任せなさい！ ただしやるのはいいけどひに」

「お姉ちゃん、ぶつよ」

「すいませんでした」

「……力関係、分かってきたかも」

「奇遇ね、私もよ」

全く、お姉ちゃんは暴走するとこれだから……。普段はいいお姉ちゃんんだけどねえ……。

それはともかくとしてだ、何をしようか。

「夏休み……、海はもう行ったって言うか、当分行きたくないって言うか？」

「……毎回思うけど、そのお話は私に流れていいものだったの？」

「知らなかったのか……？ 東社長からは逃げられない……」

「大魔王ポジションなら仕方ないわね」

嫌な納得のされ方だけど、まあ魔王的なポジションだし。世の中引つ掻き回してるのは本当だし。

あ、ちなみに福音の話は東ちゃん経由でお姉ちゃんも知っています。秘匿はどうしたって？ 東ちゃんもお姉ちゃんも機密云々は言われていないので、という屁理屈捏ねて相手に投げつけるらしい。酷い話だ。

そう言えば、銀行口座にはごそつと数億入ってるんだよねえ……。欲しかった本がたくさん買えるじゃないか、素晴らしいね。

「そう言えば、バインド・カンパニーのお給料ってどうなってるんだろっ」

「あ、それは気になるわね」

「この前、ちよつと口座確かめたら……、なんか数字の桁がいくつか違ってた……」

「……え」

「泣くかと思った」

「なにそれこわい」

「お姉ちゃんちよつと口座見てくるね！」

簪ちゃんの言葉に、お姉ちゃんが目を輝かせて天井から出て行った。だから入り口から入って入り口から出て行きなさいつて。まあ天井はちゃんと直して行ったようだけど。……まあ大概出鱈目なんだよね、お姉ちゃんつて。

ご近所さんで火事があった時には単身炎の中に突っ込んで、火傷一つ、かすり傷一つ負わずに取り残されてた大人三人を救出したり。

ビルで立てこもり事件があった時にはショットガンやらマシンガンやらの弾丸を片っ端から回避、時にはそれを『素手で鷲掴み』ながら立てこもり犯全員をぶちのめしたりと。ちなみに、素手で掴む方法は『同じ速度に同じベクトルで同じ回転数に合わせて、円錐状に力を収めるだけ』と言っていた。意味分からん。

千冬さんも大概人間やめてる感じするけど、お姉ちゃんも大概だよな。同ランクと言うか、同じ匂いがすると言うか。

「で、どうするの？」

「とりあえず」

「メイド、喫茶?」

「@クルーズって言うんだけど、お姉ちゃん知り合いが経営してるんだ。どうせお金があるんだしさ」

「久しぶりに来たわね」。さて、食べましょうか!」

「食べ過ぎると太るけどね」

「分かってるわよ」

「うん……」

はい、@クルーズでござい。ちなみに、今は私服に着替えているのです。万が一、ないと思うけど中学時代の友達に見つかってもいいように。」

「あれ、お嬢様!? どうしてここに!?!」

「あ、店長さん。お久しぶりです」

「……お嬢様、ねえ」

「香織って……実は凄いや家の出だったり……?」

「違う違う、お姉ちゃん関係でさ。僕のこと知ってるのはあんまりいないけど」

この店の店長さん、昔お姉ちゃんをつるんでいた人なのである。

しかも結構ぶいぶい言わせてたみたいなんだけど、お姉ちゃんに絡んで見事にぶちのめされてからお姉ちゃんに惚れ込んだらよかったらしい。……一時期、うちに住み込んでハウスキーパーみたいなことしてたなあ。

まさかあの頃は、店長さんやってたとは思わなかったけどさ。

「今日は一人の客としてきているので、お気遣いなく。あ、期間限定パフェ三つと……、あとアイスコーヒー、ミルクとガムシロで」

「私は……、紅茶を……」

「んー、サンドイッチセット、ドリンクはウーロン茶で」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

まさかの店長さん自らの接客の後、出てきたそれを三人揃ってパクつく。ふーちゃんは朝を抜いていたらしく、サンドイッチを平らげてからだった。

……それにしてもね？ 時折見える金髪銀髪と時たま聞こえるあの声は、どう考えても……。

「ラウラとシャルがいるわね」

「……バレないように」

「まあ、バレてもいいんだけどさ」

シャルを巧く丸め込めればいいわけだし。

それにしても、なんだってここでアルバイトなんか……？ まあいいけど。

向こうも忙しいせいがかこっちを向くことはない。そりゃあそうだ、ふーちゃんも簪ちゃんも私服なんだから。

ちなみに、ふーちゃんは普通のTシャツにジーンズという動きやすさを追求したような格好。……少しはおしゃれしたらどうか。

簪ちゃんは、ちょっとはおしゃれしてるのかな。ワンピースにスカート。まあ暑いからね。仕方ない。

なんてことを考えつつ（ちなみに僕は決して変態じゃあないと言うことだけ言っておこう）、二〇分ほどが経過した頃。

「全員、動くんじゃないか！」

ドタドタと店内に雪崩れ込んできた男達が、肩を怒らせ大声で喚いた。その手にあるのは、複数の火器。

直後、店内に響き渡る銃声に呼応するように甲高い悲鳴が上がる。

「きゃあああつ!?!?」

「騒ぐんじゃねえ! 静かにしろ!」

などと喚きたて、ジャンパージーンズ覆面装備の典型的な強盗犯は更に銃を構え威嚇する。背中のバッグから紙幣が飛び出している辺り、何処かから強盗して逃げてきた末の立てこもりなのだろう。ただなあ……。この人たち、分かっているのかな。ここでそういうことをすることのリスク。

考えながら強盗を眺めていると、外から拡声器によって音量を上げられた声が飛び込んできた。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちは既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す」

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

うわあ、警察の方々、今の言葉聞いたら泣くぞ? 僕は知らないけど。

それにしても、迷惑だなあ。銀行強盗なんて、どうやったって捕まるってことぐらい分らないかな。分からないぐらいに追い詰められてるのが、それとも血迷ったのか。

まあどうでもいいけどさ。可哀想だけど、そう選択したのは彼らなんだし。

「ど、どうしましょう兄貴! このままじゃ、俺たち全員」

「うるたえるんじゃねえっ! 焦ることはねえ。こっちは人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「う、うるたえるんじゃないッ！ ドイツ軍人はうるたえないッ」
「いやあ、どうでしょうね。少なくとも僕はその『お約束』^{セオリー}をぶん殴って蹴飛ばして、煮て焼いて食い散らかす人を一人知ってます。身内で。

そして簪ちゃん、小さくほそほそつと」
「ネタを入れないで。ただでさえゆるい空気が筋弛緩剤飲んだみたいになるよ。」

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

そう言っつて、一人の男がショットガンを無駄にリロードしてぶっ放す。バカだなあ、弾丸が減るのに。

そして割れる蛍光灯、上がる悲鳴。

「大人しくしてな！ 俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。分かったか？」

リーダー格らしき男の言葉に、コクコクとうなづく女性。ああ、可哀想に。

でもなあ、この三人は死亡フラグのお花畑を全力疾走してるような気がするんだよなあ。

「おい、聞こえるか警官ども！ 人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！ もちろん、追跡者や発信機なんかつけるんじゃないやねえぞ！」

声を張り上げ、自慢げに一発を外へ撃つ。幸い被害はないようだけど……、ちよっとむかつく。

というか、ISに乗るようになってから、ああいうものは更に脅

威に感じなくなっちゃった。ISの武器は怖いけど。

……それにね、争いは嫌いなんだよ。

「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ツスね！」

「まっただ」

下卑た笑みを浮かべてそう言ってるけど、ごめんね。ここは違うんだ。

犯罪がないから平和なんじゃなく、犯罪が出来ないから平和なんだ。この街に限っては。

と、店内でただ一人立っていたラウラにそこで注目が集まる。まあ、なんかあるんだろうけど……。

「なんだ、お前。おとなしくしてろって言うのが聞こえなかったのか？」

いらだたしげにそう喚くが、ラウラは一瞬銃へと視線を向けただけで済ませる。あれは、銃の種類なんかを確認したのかな。

「おい、聞こえないのか！？ それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないツスか！ 時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましょうよ！」

「ああ？ なに言ってるんだ、お前」

ええ、僕も思います。強盗して逃亡する最中とは思えないね。

「だって、ホラ！ すっげー可愛いツスよ！」

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

……いや、それは貴方がヘタレなだけです。残念ながら。中学ではこの地域一帯のメイド喫茶全て制覇してた人もいたんだよね。よくやるよ、ほんと。

というかさ、これって物凄い油断してない？ ……やるか。このままでも大丈夫だろうけど、とっとと片付けた方がいい。

かさかさつと移動開始。決して隠密をしているだけで黒く光るあのおぞましい物体のようにではない。

ゆっくりと彼らの背後まで回る……、着いてしまった。警戒心無ツ！？ いや、僕も大分こついう場慣れしてるんだけど、それ以上に油断しすぎだよ……。

じゃあとりあえず、身を捻るように、腰を入れて、全身を使うように、平手打ちっ！

「ぎいつ！？」

凄まじい音とともにその一撃がしっかりと入り、男の手から拳銃が零れ落ちる。

耳は外したけど、首と顎の接点辺りを狙ったかから首とあご外れたかな。

手早く落ちた拳銃と懐のもう一丁、弾丸一しきりを掠め取るように回収すると、呆然としている他の男二人のうち、ショットガンをもっている方の男の腕を後ろへ回して極め、銃口をそいつのこめかみへと突きつけた。

「動くな。動けばこいつの脳漿が窓の飾りになるぞ。ついでにお前の目玉のデコレーション付でな」

「ひ、ひいつ！？」

出来る限り冷たい声で言い放ってやると、ものの見事に情けない声を上げる人質。うわぁ。

ちなみに、さっきの平手打ちはお姉ちゃんの知り合いがよく使う技らしいんだけど……、お姉ちゃんに教えてもらった。凄い威力出るよね。その知り合いの人はコンクリートもやるうとすれば砕けるって。凄いね。

「そこのお前、銃を地面に置いて三步下がって腕を頭の上へ、うつ伏せになって地面へ伏せる」

「テ、テメエ……!?!」

「言う通りにしなければこいつの頭を吹き飛ばす」

「……ちくしょう……!」

銃を無造作に放り投げ、そのまま三步下がって言う通りに伏せた。よし。

同じように人質にしていた男も伏せると、サブマシンガンとショットガンを回収する。さて、これでお仕事終了、っと。演技も終了、意外と疲れるなあ……。

ちなみにこれ、おねえちゃんならもつと滅茶苦茶で、横暴で、最高に最短な始末を着ける筈だ。具体的に言つと、一秒で全員ノックアウトとか。そのぐらいなら一瞬で行える人だし。……ほんと、マジで死ぬんじゃないかなあ、なんて思ったときがあったけど。

お姉ちゃんのことに関しては『お姉ちゃんだから』で片付けることにした。精神衛生的な意味で。ああ、だから束ちゃんと通じ合えたのかなあ……。

「ふう……。さて、逃げようか」

『……今日初めてのセリフでなんですが、カオリは相変わらずバカですね』

ぐさつと来る一言を聞きながら、私は屋根裏へ逃げることにした。……後で店長さんにお詫び言つとこつ。

後日このお話はお姉ちゃんに伝わり、お説教を喰らいました。そしてふーちゃんと簪ちゃんからは「今度また埋め合わせ」だそうです。

んー、でも意外だなあ。お姉ちゃんがあそこに出張ってこなかったなんて。

お姉ちゃん、出てきそうだったのに。

「香織、にしてもあんた凄いわね……。なんか、また動きに磨きがかかってなかった？」

「お姉ちゃんに振り回されれば強くなれるよ」

「遠慮するわ」

「……でも、危ない」

「うん、ごめん。でも、誰も傷つけないように、発砲させないようにするにはラウラがひきつけていたあの瞬間が一番だったんだ。ごめん」

それに、あそこで誰かが傷つくのは嫌だし、あのくらいの強盗なら僕も何度か片付けたことがある。お姉ちゃんの巻き添えで。

でもねえ、さすがに特殊部隊相手とかは無理だよ？ ああいうのは素人相手だから出来ることであって、特殊部隊とか、そういうちやんとした訓練を受けている人には勝てません。無理だから。

「まあ、お姉ちゃんはやってるんだけどねえ……」

「香織？」

「ん、なんでもない」

……軍隊バーサスお姉ちゃんやって、勝ってるもんなあ……。揉み消されたけど。

そんな夏休みの一日でした。ちゃんちゃん。……。ヴァイオレンスだね、意外と。

第32話 帰還 そして夏休みの始まり！（後書き）

お姉ちゃん、おねーちゃん。

そういう回。お姉ちゃんやべえな、っていう回だったのに、香織が解決してしまった。

でも香織も体力とか腕力は普通の人間です、まだ発展途上ですから。まあ技術が卓越してるだけで。

お姉ちゃんのチーとつぷりはまた後で出てきます。……のんびりした回書きたいなあ。

ちなみに、今回出た香織の平手打ちは戯言シリーズから『匂宮出夢』の使う『^{イテイキングワン}一喰い』をモデルにしています。本人は……、出しても深く関わらないんだよね。出さないけど。出してもしゃーなし。うーん、戯言系でネタ帳に詰めとくかな……。

第33話 夏休みのある日 不器用な黒（前書き）

今回は短いので注意。

第33話 夏休みのとある日 不器用な黒

夏休みが始まり、あの「@クルーズ事件」から少しして、私は屋上にて自主練に励んでいた。

屋上の端から端までを全力疾走、つまりペースを無視したシャトルランだったり、逆立ちしての腕立て伏せだったりと色々だ。

体を鍛えると言うことは、要するに体を虐めると言うことに他ならない。なら、こつこつ無茶な特訓の方が個人的には性に合ってる。普通の練習じゃあんまり効果なくなってるし。

「……香織、自主トレか？」

「ああ、ラウラ。おはよう、じゃないか、こんにちは」

屋上にやってきたのは、銀髪の綺麗な女の子。ラウラだった。そう言えば、ラウラとはあの@クルーズの一件以来話してなかったな。

「ああ。昼は食べたのか？」

「んー、あんまりお腹空いてないからいいかなって」

「そうか。なら買ってこよう。何がいい？ ここまで持ってくるとなると、購買になるが」

「え？ い、いいよ別に！ 私、あんまり疲れてないし、お腹空いてないし！」

「む、そうか……」

しょぼん、と俯いたラウラは、残念そうにぺたりと座り込む。

夏真っ盛りのこの時期、一〇分も全力で動けばジャージは汗でびしょびしょだ。

「……しかし暑いな。日本の夏と言つのは恐ろしいものだ」

「ドイツって夏はどうなの？」

「暑いときもあれば寒いときもある。午前中は暑くても、午後になつてから急に冷えだすと言つこともあるな」

「……日本のほうが楽そうだね」

間違いなく体調を崩すね、その気候だと。

体は頑丈な方だけど、内臓鍛えてるわけじゃないし。というか内臓って鍛えられるのかな。

「あまり根を詰めるなよ、倒れては元も子もない」

「わかつてる。そろそろ休もうと思つてたし」

「そうか。……それなら、私の部屋で休まないか？ 丁度シャルロットも出払っている」

「そう？ ならお邪魔するね」

疲れてだるくなっている体に力を込め、ぺたつと座っていたそこから腰を上げる。

この時間だと寮には余り人がいないし、ジャージ姿ならばれる心配もないだろうということ、この格好のままラウラの部屋へお邪魔することになった。

「お邪魔します」

「先にシャワーを浴びたらどうだ？ 着るものは……、確かバスロブが中に入っていたから、それを着ておけ」

「……ホテル？」

「？ なぜ宿泊施設の名前が出る？」

「……あ、ううん、なんでもないよ」

決していやらしい想像をしたわけではありませんよ、ええ。

ついでに言うと、私が「される」側なんじゃないかな、なんて想像したりもしてません。Mじゃないし。

……あ、ちが、顔真っ赤になってない？ 大丈夫？ うう、自分で何言ってるんだ私……。

「ど、どうした香織!？」

「へっ!？ な、なんでもないよ!？ うん!？」

がしっ、とラウラの肩を掴み、ああ顔が赤くなってるんだろっなあ、などと思いつながらそう言い聞かせる。

私は変態じゃない、私は変態じゃない、私は変態じゃない……！
絶対、違っっ！

「……ね？」

「ひいいっ!？」

ラウラの情けない声を聞いてから三〇分ほどして、私はISSスーツの上にバスローブを羽織って、クーラーで風邪をひかないようにしてからラウラのベッドへと腰掛ける。前に尋ねたときにこっちのベッドだと言ってたから、場所は知ってる。

……ふう。うん、落ち着いた。

ラウラは私がシャワーを浴びている間に少し外に出ているらしく、テーブルに綺麗な形の日本語で「購入へ行ってくる。すぐ戻る」と書かれたメモが置かれていた。

購買、ね。気を使わなくてもよかったのに。

思案していると、ガチャリとドアが開いて、ビニール袋を片手に持ったラウラが入って来た。

「すまん、遅くなった……、あ……」

「ん、おかえりなさいラウラ。どうしたの、ポーっとし、て……?」

ドサツ。

ビニール袋がラウラの手から落ち、持っていた彼女はぼんやりとした様子でこちらへふらふらと歩いてくる。

そのまま私の顔へと手を伸ばし、その指がゆっくりと私の頬を撫で上げ。

「ひゃっ!? ちょ、ラウラ、何を！」

「香織、好きだ……」

「え……」

嘘、ちょ、まってまってストップ、だめだつて!?

なんて私の心の声は知る由もなく、ラウラは私の両手首をぐっと掴むと、お腹の辺りに片膝を乗せてこっちの動きを封じてくる。

どうしよう、力任せには動けないし、って言うかちょっと苦しし。

しかもラウラの私を見る目がなんだか怪しい、って言うか熱に浮かされたような目をしてる。

「ラウラ、痛い……っ！ 手、痛いよ……!!」

「香織……」

「ら、ラウラ、ねえ聞こえてる?! ラウラ!?!」

駄目だ、まるで聞こえてない。

まるで当たり前のように私の首筋へと顔を埋めると、スンスンとその匂いを嗅ぎだす、って何してるの!?

ちよつと、ラウラってばあ!?

「あっ……!!」

「ん、甘い……」

「な、なな、なんで、な、舐めっ!？」

「聞いたとおりだ……、甘い……」

「……ん？」

今、なんと言いましたかねこの子は。

聞いたとおり？ 誰に？

……よし。

「ふあっ……、ね、ねえっ、誰に聞いた、のっ？」

「ん、義姉上だが？ 香織は押しに弱いから、少し乱暴に押ししていた方がいいと」

おお、律儀に答えてくれてありがとう。おかげでなんでこうなってるのか、大体の犯人がわかったよ。

というか、ラウラに何を教えてるんだあのバカ姉……！

とりあえずあのおばかなお姉ちゃんを叱るために、ラウラを押し戻す。

「そっか、ふーん……。ラウラ？」

「……は、はい？」

「お姉ちゃん、どこに行くって言ってた？」

「へ、部屋に戻る、と……」

「そっかあ……。ラウラ、戻ってきたらお仕置きね」

びくびくとしているラウラをベッドに押し付けて、こめかみをヒクヒクさせながらジャージを持って自分の部屋へ。

汗まみれのジャージを洗濯機へ放り込んで制服に着替えると、そのまま二年生のお姉ちゃんの部屋を訪ねる。

「はーい？」

「お姉ちゃん、ちょーつとお話しよつか？」

「……あれ、香織？」

「ん、そうだよ？」

焦ったような声音ながらも、お姉ちゃんは扉の鍵を開ける。

私が扉を開けると、お姉ちゃんは大分後退した所でこちらを見ていた。

「さて、お姉ちゃん？ ラウラに変なこと教えたよね？」

「え、えーつと、な、なんのことかなー？」

「あはは、ごまかせると思ってる？」

「……思っていないで痛い痛い痛いっ！？ 香織、いたっ、痛い？！
アイアンクローは、駄目、痛いからっ！？」

「純真無垢な女の子に下世話なことを教え込むんじゃありま、っせん！」

大股数歩で近づくと、顔面を右手で掴みこんでアイアンクロー。

さすがにあれはやりすぎというか、そもそもなんであんなったのか、全く検討もつかないんだけど。

お姉ちゃんは涙目になりながらもなんとか弁解を始めていた。アイアンクロー中に。

「だ、だって、ラウラちゃんがなんだか、不安そうだったんだよー！？」

「だからって、限度ってモノがあるでしょう！ あんなことを教えて、ラウラが変な勘違いしたらどうするつもり！？」

「ごめんなさーったい痛いっ！？」

「反省しなさいっ！」

一通りのお仕置きを済ませた私は、大きなタンコブを頭部に三つほど作っているお姉ちゃんをその場に捨て置き、ラウラのところへと戻ることにした。

それにしても、廊下は暑い。とつとと部屋に入ることになろう。

「戻ったよ、ラウラ」

「あ、ああ……」

「……もう怒ってないよ、ごめんね。私も大人気ないことして」

部屋に戻った私は、暗い表情でこちらを見るラウラにそう声を掛けた。

まあ、大人気ないことって言うか、突き飛ばしたことなんだけど。いや、押しのけたことなのか。

それはともかく、私はラウラの隣に座ると、彼女の頭を左腕で抱きかかえる。私の手が触れたとき、ビクリと彼女の体が震えた。

「ごめんね」

「……私の方こそ、すまなかった。幾ら義姉上の言ったことだからと言って、やっていいことと悪いことがある……」

「まあ、その、一回失敗したただだし、さ。あんまり思い詰めないで」

ぎゅ、っと彼女の体を抱くと、ラウラは甘えるようにこちらへ寄りかかってくる。

「……ねえ、ラウラ」

「なんだ？」

「今日、一緒に寝よっか」

「あ、いや、だが……」

「いいから。そっだ、ふーちゃんと簪ちゃんも呼んで、パーティーしよっか。きつと楽しいよ」

突発的な出来事ではあったけど、でもまあ、切っ掛けできてよかったかな。

「そんな、夏のある日の出来事。ちょっと危険だったかもしれない、一日でした。」

「……ああ」

第33話 夏休みのとある日 不器用な黒（後書き）

香織もちゃんと男の子してます、少しだけ。

ラウラのことは、今のところ妹とかそんな感じの感覚。背が小さいのも影響しています。

不器用なのです、二人とも。

第34話 夏休みのある日 鉄の力

ラウラたちとのパジャマパーティーから数日が経ち、私達は全員揃ってアリーナへとやってきていた。

自主練も兼ねた模擬戦である。ファーストシフトした梟の感触にもなれないとだし。

一夏、篤さん、セシリアさん、シャルロットさん、ふーちゃん、簪ちゃん、ラウラ、そして私。以上が今ここに集まっているメンバーです。

「それで、誰とやるの?」

「簪ちゃんかなあ? ほら、『真打・鉄』も細かく見てないし」

「ん……、わかった……」

そう言うと、簪ちゃんはピットでISを起動させる。一瞬の光と共に、簪ちゃんはその体をISで包み込んでいた。

「先行つてる……」

「はい」

その場から姿を消したかと思いきや、既にアリーナの中央に陣取って仁王立ちしている簪ちゃん。随分カッコいい待ち方ですね。

簪ちゃん、ISに乗ったら性格変わる人とかじゃないよね?

『ま、とにかく。行こうかイヴ、梟』

『はい』

頭の中で梟の鳴き声が木霊した直後、私の体もISに包み込まれる。

装備にかかる時間は0.3秒以下、相当時間の短縮が行えている。これもファーストシフトの恩恵なのだろうか。

「それじゃ、一番手行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい」

「負けるなよ」

負けたくはないけど、どうだろうなあ。頑張ろう。

ピットから飛び出して空中で姿勢を整える。空気が、一瞬で張り詰めたものへと変わった。

簪ちゃんは無言でこちらを見据えると、一瞬で右斜め下へと構えた手の内へ《朱鉄》あかがねを作り出す。

『 試合、開始ッ！ 』

お互いの個人間秘密通信に流れたのはふーちゃんプライベート・チャネルの声。

それを合図に、私はあらかじめ展開されていた《夜鷹》よたかを広げ、
《夜鷹》よたかを振りかざし一気に加速する。

まだワンオフや武器特性を使うような状態じゃない。あれは奥の手、序盤に使うものではない。

一瞬すらも間に合わぬその一撃が互いの腕に衝撃を伝え、アリーナ内に盛大な金属音を響かせる。

互いの一撃の速度は同じであっても、その重量分《朱鉄》の方が衝撃は重い。その一撃の響きを受け流すように剣を引くと、もう片方の《夜鷹》で真横から切りつける。

それを反射的に《朱鉄》を盾にすることで防いで見せた簪ちゃんが、更にそれを回すようにして振りかざし、こちらへ切り込む。

ガギンッ！ 盛大な音と共に弾き返され、短時間で膨大となった熱量を伴って返しの刃が私へ迫る。

しかし、簡単に斬られはしない。

《夜羽》の耐物理装甲を重ねて防御、少々削られはしたがその程度ならば問題はない。

《夜羽》の羽は、ファーストシフトを終えたことで二枚から四枚に増え、その性能は二極化されている。つまり、背中から斜め上に浮いているのが耐物理、斜め下に浮いているのが耐エネルギー。両方が展開されているときには上と下で丁度『X』の形になっている。そしてその耐エネルギー装甲はビットにも転用できる。それが《夜羽》の力なのだから。

「飛べ　　ッ！」

指示よりも早く、私の思念を感じ取り《夜羽》がビットへとその身を変える。一瞬で簪ちゃんを取り囲むと、その鋭い先端から親指よりも少し太い程度のレーザーを撃ち出して行く。

このまま押し切れれば何よりも楽だ。だけど、簪ちゃんはビットを見てほくそ笑んでいた。何かやらかすつもりだ。

「鉄くわの武装が一つだと、私は一度も言っていない……！」

「……ってことは、まだ何かあるってことね」

「そういつ……、ことっ……！　来て、《蒼鉄あおがね》！」

手に持った《朱鉄》を量子変換して収納せず、そのまま地面へ放り投げて突き刺すと、その名を呼ぶと共にその手に一振りの剣を呼び出した。

鮮烈に視界に張り付くその蒼が彩っているのは、一本の刀。しかし、その背部には横たわるように銃口が取り付けられていて、さながら剣を主体とした特殊な銃剣のような、むしろガンブレードとも呼ぶべき代物だった。

その刀、《蒼鉄》を一度振るった簪ちゃんの顔つきが変わる。海に行く前は、あれ程楽しそうな顔はあまり見れなかった。

楽しいんだ。ISと、自分の子供と一緒に戦えるのが。

「まだまだ、戦いは始まったばかり……！」

「その通りだよ。さあ、行くよ！」

「うん……！」

互いに継戦の意思を確認し合い、それからニツと笑みを浮かべてから切迫。

こちらのビットと一対の刃の猛攻を、簪ちゃんは片手に握ったその刃だけで凌いでいた。

振るい、切り払い、その刹那に幾度も引き金を引き、銃口から青い光を撃ち出してこちらのビットレーザーをことごとく撃ち落していく。

たった一本の刀でこれだ、なんと器用なんだろう。

刀の扱いは学んでいる人には及ばないかもしれないけど、簪ちゃんにはそれを補って余りある多様性がある。それをフルに生かした戦い方。

一つ一つを確認するのではなく、その感覚で感じ取る。言葉だけならまるで天才のようだけど、簪ちゃんはそれを努力で勝ち取り、宇宙で花開かせたのだ。

素直に凄いと思う。だから、答えなければならない。その努力に、その力に。

切り込んできた簪ちゃんの刃を耐物理装甲の羽で受け止めると、その背後へ向けてエネルギーを撃ち放つ。

それを簪ちゃんは上空へ飛ぶことで回避すると、更に回転して上空から切り落としてくる。

咄嗟に耐物理装甲で受け止めようとした直後、刀身が青く発光したのを見て真横に回避を試みる。無理な体勢からのそれを行ったせいで若干衝撃を受けたものの、辛うじて刃を避けることが出来た。

あの光……、違う。あれは物理装甲で受け止めてはいけない。

「よく避けたね……」

「光ったの見たからね。それ、BTエネルギーでしょ？」

「刃に纏わせてる……。装甲だけじゃ防げない……」

うわあ、私の装甲が進化したのが仇になってるなあ。

……仕方ない、こつちも使おう。出し惜しみとかしてられなさそうだ。

「じゃあ、こつちも本気で行くよ」

「……うん！」

「梟、イヴ、《バードエイクとりのさえずり》起動。平行起動、《夜鷹》武装特性、《ナイトホーク》」

ワンオフと《夜鷹》の武器特性を起動させ、姿を消す。同時にこちらの発生させる余剰エネルギーと相手のBTエネルギーをワンオフによって消滅させ、完全なステルスを得る。

「……来た」

『行くよ』

場所を悟られぬように音声は個人間秘匿通信で伝え、一拍置く。プライベート・チャネル

直後、無音で動き出した私は、最高速で簪ちゃんを切りつけた。

それと同時に全てのビットからレーザーを発射、装甲を削っていく。しかし、それでも撃たれたレーザーのうち、三分の一は斬られたり撃ち落とされたりしてしまった。

簪ちゃん、ドンドン強くなるね。うかうかしてられないや。

さあ、行くよ。

「すげえ……」

私、鈴の隣で、アホ面晒して口をぽかんと開けている一夏が言った。

まあ、確かに。簪の自作IS『真打・鉄』も、香織のファーストシフトした『梟』も、どちらも凄い。

でも、強いのはISだけじゃない。あの二人自身の技量も尋常じゃなく高くなっている。それも、今まで以上にだ。

簪は今まで溜めていたものを全て出し切れているような感じで、いわばようやく咲いたところ、といった所か。これほどまでに生き生きと戦えるほどに力を蓄えていたとは、全く背筋が寒くなる。

こんな逸材を、日本は候補生に留めていたのか？ ……なんとも、今更な話だ。私ももうあの国の候補生ではないのだし、別にどうでもいいか。

香織も、全く持って滅茶苦茶だ。

あの子は戦いが嫌いだ。争うのも、人を傷つけるのも。その香織がああして戦っているということには、ISが兵器じゃないことを証明することにも繋がる。

香織は、ISの声を聞いたと言っていた。最初は夢か何かだろうと思っていたけど、今の香織を見れば分かる。

あの子はきつと、ダンスをしているようなものなんだ。戦いではなく、互いを尊重し合い全力を出し切れるもの。世の中の大人たち、バカな女達が強欲丸出して追い求めているISは、戦いの道具にしてはいけない。

だって、こんなにも楽しそうに、踊れる役者がいるのだから。それをISは楽しんでる。だからああして動けるんだ。

……ほんと、凄いわよ。あんたたち。

「一夏、口閉じなさいよ」

「あ、ああ。わりい。けどほんとにすげえな……、東さんの会社の代表なんだから、お前ら？」

「ええ。母さんの保護もしてくれるらしいし、断る理由なかったしね。大体、あの国も別に愛着あったわけじゃないのよ」

「そつか。しつかし、更識さんってすげえな。代表候補生ってやっぱり強いんだな」

感嘆してその声をあげる一夏。

けどね、一夏。本当に凄いのは技量じゃなくて、簪のたった一つの才能なのよ。

そこになら、一から育ててしまえ。どれほど無能でも、突き詰めれば頂点へいける。その理論で繰り返された努力の結晶は、ただの天才では手に入らない最高の強さなんだから。

それに、簪よりも香織の方が凄い。別にえこひいきする訳じゃないわよ？ あの子、ここに入るまでまともにISに触ったことなんてなかったっていうんだから。

東社長にISの講習を受けていたみたいだけど、知識だけではISは動かせない。長い時間を掛けて体に馴染ませないと、ISはちゃんと言うことを聞いてくれない。

けど、香織は違う。一夏もそうだけど、初めてISに触れてから半年足らずで私たちの領域まで辿り着いてしまった。あ、一夏はまだちょっと足りないみたいだけど。

「……悔しいな」

「何がよ？」

「どれだけいい機体をもたらしたとしても、今の香織達に勝てる気がしない」

「……まあ、それがわかってるなら大丈夫よ。あんたはもっと強くなれる」

一夏の隣で落ち込んでいた箒にそう声をかける。

箒の第四世代型IS、『紅椿』は確かに強い。だけど、その使い手によってその性能は大きく左右される。

まだ箒は『紅椿』に触れて一月も経っていないのだから、そう思うのも仕方のないことなんだろう。私も、あんまり勝てる気がしないのは内緒だ。

「……私よりも、ビットの扱いに慣れてるようですよ」

「それは、まあ。お疲れ？」

「優しさはないのですか？」

「次回の入荷をお待ちください」

セシリアに突っ込みとボケをかましてみると、セシリアは大きく溜め息を吐いて額に手をやった。

もう、せつかく私の優しさのパーセントくらいを見せてあげようかと思ったのに。品切れだけど。

でも確かに、香織のビットの扱いは圧倒的にセシリアよりうまい。まあ、多分香織のことだからビットの扱いとか考えてないんだろうなあ。使えるからそれでいいや、みたいな思考パターン時々あるし。

……まあとりあえず、もうちょっと観戦していきましょうか。

「……そこっ」
「っ！」

的確な射撃と斬撃によって二機のビットが落とされる。無論、あらゆるリーダーにも、視覚にも映らない状態だというのに。

あれかな、気配で斬ってるのかな。ビットにエネルギー向けられると、まだ出力の弱い《とりのさえずり》ではBTエネルギーの銃弾は掻き消せないし。

「そろそろ決める……」

ぼそりと呟いた直後、簪ちゃんは真つ逆さまに下へ、つまり急降下してから進行方向を上空へと引き上げる。

その手には、アリーナの地面に突き刺さっていた《朱鉄》がしっかりと握られていた。ああ、そういうことか。

「《朱鉄》、武装特性発動……。《紅蓮朱鉄》……！」
グレンノアカガネ

そう呟くように宣言した瞬間。

《朱鉄》の纏っていた熱気は瞬く間に深紅の刀身へと変化していく。熱気自体が、質量を持って刃へと変わっていた。

全ての熱が質量へと変換されて尚も続く熱量の増大に伴って、刀身が蜃気楼のように揺らいでいる。その大きさは、『真打・鉄』自身を軽く凌駕するほどのものだった。

「……それって、アリですか？」

「うん……。大剣はロマンで、この子は私の娘だから……」

そういうことではないと思うけどあれ喰らったら死ぬんじゃないかな。一応簪ちゃんもこっちの絶対防御とシールドバリアが復活したことは知っているから、あれ使ってるわけで。

ああ、無かつたら死ぬ威力なんだ。あってもやばい気がするんだけど。

「振りかぶって……」

「っ！？ 梟、ワンオフ最大！ 《夜羽》武装特性、《ウイングカーテン》起動！」

咄嗟に出力を二極端に回す。

あれは回避できない。というか回避した瞬間に横殴りに斬られて終わる気がするから。

今の《とりのさえずり》では精々熱量を半減させるのが精一杯だけど、やらないよりはましだ。というか質量化する熱量を無限発生させるって、それどういう原理になってるのかな？ この辺溶けるって言うか消滅しない？ まさか、また束ちゃん新技術開発した？

……もう驚かないよ、私は。驚かないって決めたんだ。

《ウイングカーテン》は完全な防御型武装特性になっていて、《夜羽》四枚を共鳴させることで音の壁を作り出す。

ビットがない分やや厚さは落ちるけど、それでもやらないよりましだ。……ああ、また修復作業かなあ。

「ごめんね、梟。これどうしようもないかも。」

「叩き斬るっ！」

直後、私の眼前へ真っ赤な剣が迫ってきていた。

で、その後。

「香織、梟大丈夫？」

「あ、うん。そこまで被害は無いよ」

戦いを終えた私たちは、少々息を切らせながらそんな会話を交わしていた。

あの一撃で私のシールドエネルギーは全て持っていかれてしまい、私の負け。音の壁があっても衝撃でエネルギーが持っていかれてしまった。

ただ、あの一撃は戦闘が始まってから相当時間が経たないと使えない上に、一度使うと全ての熱を排熱してしまうため、もう一度溜めなおさないといけないらしい。そりゃあ、あんなの何回も打たれたら溜まったもんじゃないよね。

今回は《啄木鳥》使ってあげられなかったなあ。もうちょっと、高機動戦で当てる練習しないと。

「次は一夏とふーちゃんだっけ？」

「うん……。多分、鈴の勝ち」

『白式』は燃費悪いからなあ……。

それにしても、今回の敗因は時間のかけすぎだったのかな。他にも色々原因ありそうだし、もっともつとがんばろう。

もっとたくさん梟と飛びたいし、もっともつと強くなりたい。そうすれば私は、僕として生きられる。

「……はい」

突然、簪ちゃんが正座した自分の太ももをぺちぺちと叩いて言った。

……膝枕？

「……うん」

「……いいの？」

「うん……」

で、では、お言葉に甘えて。

簪ちゃんが痛くならないようにきちんと場所を動かして、そこに頭を置く。

……暖かい。なんというか、ぽかぽかするね。夏だけど。

「……香織、難しい顔してた」

「えっ？」

「さっき。あんまり、考え込んだじゃ駄目」

そう言って、簪ちゃんは儂げな笑みを浮かべる。

……ん、よし。ありがとう、簪ちゃん。

そんな、ロマンを追い求める一人の少女との、とある日の夏の思い出でした。

第34話 夏休みのとある日 鉄の力（後書き）

ナチュラルに膝枕、香織ちゃんでした。

海の回でも出てきた『武装特性』ですが、完全なオリジナルです。

簡単に言えば、武装専用のワンオフアビリティ的なもの。ワンオフと平行使用できるものもあつたりします。

発動条件はその武装を操縦者が完全に理解していること。なので、

簪は『真打・鉄』の武装の武装特性は全て使えます。

そろそろオリジナル機体の一覧作ろうかな。

夏休みも終わってしまい、これからは普通の投稿ペースに戻ります。というか進学のうちぬんがあるので、時間が取れないときもしばしばあるかもしれません。ご了承ください。

…… 簪がワンオフに目覚めず、一夏はセカンドシフトせず。まあ戦力的には五分五分かちょい弱いくらいですが、大丈夫なんだろうかな。次回は……、お泊り会かな？

第35話 夏休みのとある日 お泊り会！ 前編（前書き）

エロではなく萌えを。

最近エロ投入しすぎだなあ、と言っ心の声にしたがって。

第35話 夏休みのとある日 お泊り会！ 前編

またまた夏休みのある日のこと。

随分前に誰かさんが言った通りに、僕の家でお泊り会が開かれることとなった。

「食材は後で買出しするとして、ゴミは……大丈夫かな。寝る場所も確保したし」

現在、僕は自宅にてワンピースとスカートを身につけてせつせと皆を迎え入れる準備をしていた。

ちなみに、ワープ装置は小型化機能がつけられているらしく、小さなインテリア程度の大きさに縮んで部屋の隅っこに片付けられている。

この状態だと向こう側のワープ装置からこちらへ飛ぶことが出来ない。そりゃそうだ、危険だし。

さて、現在午前一時過ぎ、誰が最初に来るのかな？

ちなみに、来るメンバーはふーちゃん、簪ちゃん、ラウラの三人。他の人も呼びたいけど、正体知ってる人しか呼べないからね。

『ご機嫌ですね、カオリ』

「ん、まあね。ほら、お泊りってあんまり無かったし」

『……なんだか釈然としません』

「なにが？」

『別に、何も』

なんだか、イヴがむすつとしてるんだけど。……何か嫌なことでもあったのかな。

梟の一次移行が終わってからは、イヴはネットワークを辿って他

の場所へ移ったり、赤外線やらのデータ回線を通じて別の端末に移ったりできるようになった。普段は梟の中にいるけど。そんなことを考えていると、ドアのチャイムが鳴らされた。

「はい、今行きますー」

玄関の鍵を開け、扉を開くとそこには、ラフな格好をしたふーちゃん。腰に手をやって立っていた。

荷物はスポーツバッグ一個と、お手軽装備。

「ああ、ふーちゃん。いらっしやい」

「お世話になるわよ、香織」

「わっ、突然どうしたのさっ!？」

「いいじゃないいいじゃない、ほら、婚約者のハグよ、はぐーっ」

突然僕に飛びついてきたかと思うと、ぎゅーっ。と僕を抱きしめる。な、なな、なにをしているのかなこの子は!？

ふーちゃんはにひひ、と笑うと、振り子のように体を振って、器用に家の中へと飛び込んだ。しかも空中で靴を脱ぐと言う大道芸を見せ付けて。

「も、もう、ふーちゃんってば……。女の子なんだから、もうちょっとと謹みをね?」

「いいじゃない、別に! それにさ、しおれたアタシはアタシじゃないでしょ」

「……確かに」

そう言われてしまうと、確かに頷くしかなかった。

しょぼくれたふーちゃんはふーちゃんとは言えないだろうし、みたくもない。ふーちゃんは元気の塊みたいな子なんだし、そういう

風に居てくれた方が、僕も嬉しい。

「ひゃー、涼しいわねえ。やっぱり日本の夏にはクーラーね」

「最近は気温も上がってるからね。麦茶入れるから、ソファア座つていいよ」

「はい」

ぼふっ、とソファアに身を投げたふーちゃんを眺めながら、冷蔵庫で冷やしておいた麦茶をコップに注ぐ。ちなみに今朝作って冷やしておいたものだから、結構冷えてるのですよ。

「ん、ありがと。ん……」

コップを口につけて大きく煽るふーちゃん。汗の流れる喉が艶めかしくコクコクと動き、思わず僕はその仕草をじーっと眺めていた。……これじゃまるで変態じゃないか。まったく、なってないぞ僕。

「つぶはーっ！ やっぱり夏は冷たい飲み物に限るわね！」

「一応寝る場所は皆で一部屋にしておいたからね。寝る順番は応相談で」

「りょーかい。それにしても、あのワープ装置一つ無いだけで大分見た目が変わるわね。転校してから初めてよね、香織の家に来たのって」

ふむ、確かにそのとおりだ。

というか、それ以来人をまともに上げていなかったりする。だからちよつと緊張していたりもするわけだ。

「お昼は食べちゃったし、日が高いうちは中でだらだらする？」

「皆がそれでいいならね。二人が来たら相談しようか」

「おっけー」

そんなことを話している間に、またもや玄関のチャイムが鳴る。はいはい、と返事を返しながらドアを開けてみると。そこには可愛らしい服装の簪ちゃんが立っていた。ちよっとオシャレしてきたのね……。

「いらっしやい、簪ちゃん。どうぞ、入って」

「お、お邪魔します……」

「……キャリーケース……」

ガラガラと黒いキャリーケースを引いて上がってくる簪ちゃん。さっきのふーちゃんを見てる分、荷物が多いと感じてしまう。

「あ、来たわね。暑かったでしょ」

「すぐごく……」

「今麦茶入れるね」

また棚からコップを一つ取りだして、麦茶を注ぐ。

それにしても簪ちゃん、出会ったころとはずいぶん印象が変わったなあ。最初のころは、こういうとあれだけど、ちよっと暗めの子だったのに、今はそれが大人しい、清楚という印象に変わっている。

「あとはラウラだけか」

「ねえ簪、今日は家の中でだらだらしない？ せっかく香織の家に来たんだし、出かけるだけならいつでも行けるでしょ？」

「ん……、それがいいと思う」

おおう、これはラウラが来ても数で押されるフラグが立っていませんか？ まあいいや、僕も外に出るのは面倒だし。

でも、家の中で何するのかな。ゲームはあんまりないし、テレビぼーっと見るっていうのもなあ……。

「……あの、簪ちゃん？」

「なに？」

「なんで僕に抱きついてるんでしょうかね」

「なんとなく」

「あ、ずるい。私もー」

ああー、前からふーちゃん、後ろから簪ちゃんが僕をぎゅーっと。普通なら嬉しいとか感じるんだろっけど暑いです。クーラーの恩恵があっても暑くなってくる。

「あの、二人とも、暑いから」

「……むう」

「仕方ないわねー……」

名残惜しそうに離れた二人だったけど、なんで突然抱きついてきたのか。というか簪ちゃんはそういうキャラじゃないんじゃないかな。宇宙に行つてからなんか壊れ始めたのか？ ……宇宙恐るべし。そういえば、まだ月面コロニーには行ってないな。あとで連れて行つてもらおう。

なんて考えていると、またもやピンポーン。

「はーい」

ガチャ。

「はあい」

ボタン。

……おかしいな、なんであの人がここにいるんだろう。ほんとなんでなんだろう。なんで？

「ちょ、香織君！？ 見た途端に閉めるなんてひどいと思うんだけど！？」

「いきなり人の家に押し掛けてこないでくださいっ?!」
「えーっ？ 束ちゃんがオツケーって言ってたわよ！」

またあの人か。

というか、束ちゃんって呼んでるんだ。他の人はさん付けとか社長とかなんだけどね。

ということでもナターシヤさんでした。いきなり人の家に押し掛けてくるのはどうかと思うんですが？

「まあまあ、いいじゃない。ほら、お泊りの道具も持ってきたし」

「あ、泊るんですか」

「もちろんよ。先輩の家にお邪魔するのは後輩の務めなんだから」

「そんな話聞いたことないんですが」

「じゃあ今知ったわね、また一つ賢くなれたわよ」

ああ言えばこういうというのはなんとも、なあ。いや、楽しいしいい人なんだけども。

……まあ、仕方ないか。これで「ダメー」と追い出すのは簡単だけど、なんか嫌だし。

「まあ、いいですよ。どうぞ」

「わーいっ」

その言葉はあなたが発する言葉ではないのではないのでしょうか。けど言ったら怒られそうだから言わないことにする。うん。で、再びリビング。行き来多いな。

「……え、つと、なんでいるの？ 福音の操縦者さん」

「え？ なんであって、押し掛けたから？」

「いやいや、そうじゃなくて！ アンタアメリカのテストパイロットでしょ！？」

「ん、ああ！ そういうことね。私、アメリカ抜けてBCに入ったのよ。だから今は無国籍、アルカディア・？所属ってわけ。よろしくね、先輩方」

「……へ？」

ああ、東ちゃん。また連絡忘れてたね？ だからこういうことになるっていうのにもう……。

困惑している二人に、ナターシャさんがBC所属になった経緯を話すと、なるほどという風にうなづく。

「そういうことね。なら、これからよろしくね、ナターシャ」

「よろ、しく……」

「ええ、よろしく。それと今日はお世話になるわね、香織君？」

「はいはい、布団用意しておきますね……」

お姉ちゃんの部屋でいいかな、あそこ広いし。

ということ、さらに布団を引っ張りだすために、とりあえずリビングを出ることにした。

「で」

にたり、と笑う。きよとんとこちらを見る鈴ちゃんと簪ちゃん。呼び方が以前と違うのは、東ちゃんとの差別化を図るためである。個性って大事よ？

「二人は香織君が好きなのよね？」

「そうだけど？」

「うん……」

「……むう、弄れそうにないか」

ここで少しでも恥ずかしそうに返してくれば、全力で弄ったのに。でも仕方ないわね、うん。

しかし、香織君も幸せ者ねえ。こんなに可愛い子たちに慕われて。まあ、本人も好かれていることはわかってるみたいだし、というか婚約者らしいし。

「それで、何か進展させるつもり？」

「なにが？」

「だから、香織君との仲よ。さすがにヤッちゃうのはまずいけど、ちよつとえつちするくらいならいいと思わない？」

「え、えつち……」

あら、簪ちゃんは初心なのね？ それに比べて鈴ちゃんはあつけらかんと、……あ、赤くなつた。二人とも初心、ってわけじゃなさそうね。鈴ちゃんはそういった類の思い出アリなのかしら？

「って、今日泊まるのはもう一人いるのよ？」

「なら四人で」

「やらないわよ!？」

「ジョークよジョーク、顔真っ赤にしちゃって可愛いわね」

まあ、半分くらい本気ではあったけど。ジョークが混じってるからジョークよ、ええ。

なんて話をしている間に、布団を出し終わったのであろう香織がリビングに入ってきた。銀髪の少女、ラウラと言ったか。その子と一緒に。

「もう来ていたのか。それと……、なぜ貴様がここにいる？」

「……ねえねえ香織君。ラウラちゃんはBCに入ってるの？」

「東さんにそれ言ったら、嬉々として引き抜くと思うんですけど。」

中国、日本、アメリカときて次はドイツですか？」

「もう半分ゲーム感覚よねえ。ラウラちゃん、私は香織君の知り合いに聞いて泊りに来ただけよ、他意はないわ。アメリカも関係ないし、あなたたちの恋路を邪魔する気もないから、安心して」

ぼふんっ、とラウラちゃんの顔が赤くなる。あら、もっと初々しい子がいたわね。

ふふっ、楽しくなりそうだわ。

第35話 夏休みのある日 お泊り会！ 前編（後書き）

誰が予想しただろうか、この段階でのナターシャおねーさんの登場を。

私は予想していなかった。

後編は皆でたらだらする様子や夕暮れ以降の皆の様子なんかを書くつもりです。

イベント……、起きるかな？

第36話 夏休みのある日 お泊り会！ 後編の前編！（前書き）

終わらなかった。

第36話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の前編！

お昼過ぎ。

皆揃ったところで、じゃあ何をするかと問われれば、何をしようかと返すほかないのです。

「なににする？」

「王様ゲームを」

「却下です」

ナターシャさんが提案するとなんか危ない気がする。こっつ、アル
コール分的な意味で。

「じゃあ……、何する？」

「外には出たくないし……、あ、そつだ」

なんていいだして、ナターシャさんがISの格納領域から何かを
量子変換して取り出す。

……え、マツト？ これはどこかで見たとありますが。

「ツイスターゲーム！」

「ぶふうー!？」

「それは……、ちよつと……」

「香織君と絡めるわよー」

「やる」

「あれ、簪ちゃん!？」

「よーし、ラウラ。テーブル片すわよ」

「お、おっ」

ふーちゃんとラウラが、立ち上がってテーブルを片していく。あれ、皆やる気満々なのかな？

あー、これ押し切られそうなのがするんだけど。

見る間にあれよあれよとマットが広げられ、なんとということでしょう。そこにはあつという間にツイスターゲーム会場に。

「え、ほんとにやるんですか？」

「もちのろんよ！ ちなみに、お姉さんはやってもおいしいところがないので、ルーレットを回します」

「ちよっ!？」

「狭いし、二人ずつで行きましょうか。簀、ラウラ、じゃんけんして勝った人が最初に香織とやるってことで」

「ん……」

「いいぞ」

じゃんけんぽん、ということでは最初は鈴ちゃんに決定しました。どうやら、僕は三連続らしいです。

なんでこんなことに……。

「はい、じゃあ行くわよー。二人でじゃんけんして、負けた方から入ってね」

「……じゃんけん」

「……ぽん!」

グーで負けました。うわっ、ふーちゃんものっすごい勝ち誇った顔してる。うわあ、可愛いけど憎たらしい。

あとナターシャさんが満面の笑みでルーレット回してるんだけど。

「はい、じゃあ香織君は……、左足を縁に置いてねー」

「は、はあ……」

とりあえず最初の一回なのでぼすっ、と。

「次、鈴ちゃんね。えーっと、右手を黄色に置いて」

「はい」

「香織君、左手を赤に」

「よっ……、と」

既に体が引き伸ばされているんですが。赤と緑って端と端なんですけど。

「鈴ちゃん、左手青ね」

「ほっ」

「香織君、右足赤」

「なっ!? くぐっ……!」

ぐおおおっ、き、きつい……! 予想外にきつい……!

「鈴ちゃん、右足緑」

「まだ、大丈夫ね……!」

「香織君、右手緑」

「なああっ!? っど、お、ぬっ!?!」

で、三〇分後。

「はあ、はあ……」

「き、きつかった……っ!」

「んー、中々エロ、じゃなかった。良かったわよ、二人とも」

エロって言いかけてますよ。

とりあえずふーちゃんとのツイスターゲームは終わったけど、もう汗だくだく。最後のほうはくんずほぐれずだったし、なんかふーちゃん幸せそうに笑ってるし。

あ、ちなみに勝ちました。ほんと、これ結構しんどいんだけど。

「じゃあ次、ラウラちゃんと香織君ねー」

「……マジですか」

「」

「おーい、生きてるか少年」

「……ご飯、作る体力がありません」

「あははー、ごめんごめん。ちょーっと調子に乗りすぎちゃった、かな？」

三人分のツイスターゲームを終え、僕はその場でうつぶせにぶっ倒れていた。

三人ぶっ続けって、これ無茶苦茶だと思うんですけど。汗凄いし……。

「っていつか、三時間ぶっ続けでやらされた僕の身にも、なっってくださいよ……」

「だからごめんって。そうだ、今日は私が作るわ、材料はあるんでしょっ？」

「あります、けど」
「じゃあ任せて。これでも基地では料理の上手いお姉さんとして知られてたのよ？」

本当かどうかは知らないが、そういうことなら任せてもいいかな。こうなってるのはナターシャさんのせいでもあるし。ほんと、もう動くの辛いです。

念のために、頭を動かして横に倒れている三人に尋ねる。

「……皆、それでいい？」

「あー、アタシらは文句言える立場じゃないので」

「同意……」

「ああ、それでいい」

「よし、決定ね」

ダルそうに答えた三人の言葉を聞いて、ナターシャさんは嬉しそうに答える。

まあ、食べられないものじゃなければ食べるし、今は警沢言っていられない状態だからいいんだけど。

……あー、お風呂洗わなきゃ。

「ちよ、大丈夫なの香織？」

「お風呂洗ってくる……」

「ああもう、それならアタシがやるわ。香織は休んでて」

「でも……」

「倒れたりしたらまずいでしょうが。いいから休んでなさい、アタシたちのせいでもあるんだし」

いや、でも家主が家のことをお客さんにやらせるのはまずいと思うんだけども。

ただなあ、体が恐ろしくだるいのも事実なんだよなあ……。

「……じゃあ、お願いできる？」

「もちろん。それじゃあ行ってくるわね」

「香織は、任せて……」

「ちゃんと見ているから、心配するな」

簪ちゃんとラウラに見送られ、ふーちゃんは家のお風呂を洗いリビングから出て行った。

あー、もう動く気力も体力もないです。

「ところで香織君、今日のメニューは何にするつもりだったの？」
「肉じゃがでも作ろうかと思ってたんですけど……、作れます？」
「もちろん。日本でいうお袋の味なのよね、肉じゃがって。よく練習したわ」

ナターシャさんって意外と料理好きなのかな。

エプロンが普通に似合ってるし、って言うかそのエプロン僕のものですが。

「いいじゃない、減るもんじゃなし」

「ナターシャさんって、結構明け透けって言うか、大雑把ですよね」
「余裕のある大人の女性と違ってちようだいな。そうだ、簪ちゃんちよっと一緒に手伝ってくれない？」

「私……？ いいけど……」

「ありがとねー。じゃ、ちよっと作ってくるわね」

そう言っつて、ナターシャさんは簪ちゃんを伴ってリビングを出て行った。

と、不意に背中がぐいっと押された。

「ふむ、随分凝っているな。どれ、マッサージでもしてやるう」
「あ、ありがとラウラ……」

うわっ、物凄い気持ちいい。そういえば、あんまり他人からマッサージされたりってなかったな。

……なんか、眠くなってきちゃった。

「ふわあっ……」

「眠いのか？ 晩御飯が出来たら起こすから、眠いのなら寝ていてもいいぞ」

「でも、ほら、家主がお客放置っていうのは……」

「普段頑張っている報酬とでも思っておけ」

「……じゃ、じゃあ、ちょっとだけ……」

「ああ、お休み香織」

はい、お休みなさいラウラ。

む、どうやら香織君は眠ったみたいね。

手ごろな大きさに野菜を切り分けながら、隣で野菜の皮むきを手伝ってもらっている簪ちゃんに声を掛ける。

「ねえ、簪ちゃん」

「なんですか……？」

「香織君のどこが好きなの？」

ぼふんっ、と簪ちゃんの顔が真っ赤に染まった。どっちかって言うところ茹で上がった感じかな？

「え、えっと……、優しいところとか、カッコいいところとか」

「つまり全部、と」

「……はい」

ほっほー、愛されてるわねえ香織君。もうベタばめじゃない。

鈴ちゃんに簪ちゃんにラウラちゃん、お姉さんもべったりみたいだし？ まあ、私は可愛い先輩みたいな感じかしらね。それにあの子の恩人でもあるわけだし。

「そうかそうか、なるほどねえ」

「あ、あの、ナターシャさん……は」

「ん、なに？」

「東社長のところについて、良かったと思ってます、か？」

おや、意外にまじめな質問ね。

……元々束ちゃんがちょっとかい出さなくても危険だったってことだし、それを学生に止めさせようとしたうちの連中にもちよつと愛想尽きちゃったしね。言いだしっぺはIS学園の方だって話だけど、それだって普通止めるでしょ？

「まあ、良かったと思ってるわ。それに、私は元々アメリカって国自体に執着はないのよ。新しい職場は可愛い女の子が一杯いるし、社長は楽しいし、おまけに宇宙よ宇宙！」

「宇宙は……いい……」

ISは元々宇宙で使用するパスワードスーツ的な意味合いが強かったみたいだからね。束ちゃんも元々はそういう風に関発したみたいだし。

「それに、あの子も助けられたから。簪ちゃんのISは宇宙で作ったんだっけ？」

「うん……。でも、まだまだ試作品の段階、完成ではあるけどまだ改良できる……」

「そう。なら、もつともつと頑張らないとね」

「……うん」

ん、本当にいい子だね、この子は。

香織君は幸せ者だ。

「さて、それじゃあパッと作っちゃいましょうか！」

「うん……!!」

頷いて、ぱあっと笑った簪ちゃんは、なんとも可愛らしかったことだけは確かだ。

こんな可愛い子に慕ってもらえるとは、全く香織君は幸せ者だ。全く。

「ごちそうさまでした」

合掌して、それから息を漏らす。
ナターシャさんの作った肉じゃがは、予想以上の出来だった。

「ふふん、どう？」

「ええ、とても美味しかったです」

「でしょう？ 私だってふざけてるだけじゃないもの」

「お風呂はもうできてるから、順番に入っちゃいませよ」

お風呂かあ……。湯船に浸かったのは臨海学校以来だな。ゆっくり浸かるうっと。

「香織、先に入ったらどうだ？ 疲れているだろう」

「いいの？」

「たまのお風呂なんだから、一番風呂はいんなさいよ」

「……ん、わかった。ありがとね」

みんなの気遣いに感謝しつつ、パジャマとトランクスを持ってお風呂へ行くことにした。

いやあ、ブラジャーつけなくてもいいって久しぶりだ。

リビングを出て一度自室へ入ると、寝巻きを持ってお風呂へ。お、綺麗に洗われている。というか、僕はどれくらい眠っていたんだろうか。

「イヴ、僕どれくらい寝てた？」

『ざっと三時間です』

「えっ、あの肉じゃが仕込みに三時間も掛けたんだ……。だからあんなに美味しかったんだ」

って、そうじゃないそうじゃない。
僕三時間も寝てたのか。どれだけ疲れてたんだ……。

「と、とにかく、先にお湯頂いちゃおつと」

服を脱いで湯船へ。

おおー、久しぶりの我が家のお風呂……！ 一時帰宅の時は時間がなくて入れなかったからなあ……。

「うあー……、気持ちいいー……」

『そんなに気持ちいいものですか？』

「んー、まあねえー……」

『快樂ですか』

「どつちかって言うと心地良いの方ね」

なーんかイヴは突然変なこと言い出すなあ。いや、快樂って聞いてそういうこと思い浮かべちゃう僕も僕なただけど、ホラ、最近立て続けに色々起こって疲れてるんだよ。うん。

……あー、気持ちいいねえ……。

思えば、随分遠くまで来たもんだ。

東ちゃんと出会ってから、色んな人と友達になって、幼馴染にも再会して、許婚が三人も出来て。

しかもとうとう宇宙進出、どたばただけど楽しい日々だ。

もちろん、楽しいことだけじゃないことは分かってるけど、それでも。今このときを大切にしたいと思うのはいけないことじゃあないはずだ。

……うん、大丈夫。まだまだ頑張れるぞ、僕は。

「イヴ」

『なんですか？』

「もう少しだけ、僕についてきくね？」

『……もう少しだなんて、今更ですね。何処までもついていきますよ。それが私なんですから』

「……ありがとう、イヴ」

なんだか、しんみりしてしまった。
まったく。

第36話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の前編！（後書き）

場面転換がごろごろ来てますが、次回で夏休み編が終わりです。
お風呂回、香織だとしんみりしてしまう……。。

第37話 夏休みのある日 お泊り会！ 後編の後編！（前書き）

遅れました、後編でございます。

まあ、大した事件はございませんが。

第37話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の後編！

夜である。

全員お風呂にも入り終わり、僕らはリビングに布団を敷いて雑魚寝することだ。

ちなみに、ナターシャさんは「若い皆のお邪魔になるといけないから、葵ちゃんの部屋で寝るわね」なんて言って、お姉ちゃんの部屋に引っ込んでいった。

……何を期待しているのやら。

「じゃ、電気消すよー」

パチンツ、と電気を消してから皆を踏まないようにして布団へ戻る。

……どうしよう、ぬむれないな。昼間に結構眠ってしまったから、まだ眠気がこない……。

「むう、どうしようか」

さすがに眠れないと困る。夜更かしというのも悪くないけど、一人だけ夜更かしするのもなんだか寂しいし。

「どうしたのよ、香織」

小さくぼそぼそとふーちゃんが話しかけてきた。ちなみに、寝方は僕とふーちゃんが隣同士、僕の頭の上に簪ちゃんの頭があって、その横、ふーちゃんの上にラウラが寝ている。

どうやら簪ちゃんはすでに寝入ってしまったというらしく、すやすやという寝息が聞こえてきていた。

「ん、ほら。お昼にちょっと寝ちゃったから、そのせいで

「眠れないの？」

「お恥ずかしながら」

「まったくもう……。ん、しょ、と」

小さく溜め息を吐いたふーちゃんは、もぞもぞと布団の中で動いたかと思うと、僕の布団の中へと入ってくる。

……って、ええっ!?!?

「ちょ、ふーちゃん!?!」

「ん、暖かい。ほら、あんまりさわいじゃ駄目よ、簪ちゃんが起き
ちやう」

「え、あ、う、うん……? って、そうじゃなくっ んぐっ!?!」

たしなめられても尚声を上げようとしてしまった僕が、不意に口を噤む。

正確には、口を開いた途端にそれを止められた。

ぬるりと、口内に生暖かく、柔らかい感触が進入してくる。何を
されているのか、分からなくなった。

「ん、ちゆ、んあ」

「?!!」

耳を打つふーちゃんの声に、今自分が何をされているのか気づく。
気づきはすれど、どうすればいいか、まるでわからなかった。

ぴちゃぴちゃと、口の端から漏れる液体が音を立てて気泡を作る。
潤んだ瞳でこちらを見るふーちゃんの顔は少し赤らんでいて、それが妙に艶めかしい。

「……ぷはっ」

「……え、と」

「驚いた？」

ふふつと笑うふーちゃんが、妙に大人っぽく見える。

……えーつと、今僕はキスをされたのかな？ え？

「ほら、早く寝ましょ」

もう一度笑い、ふーちゃんはそう言ってから目を瞑った。

そんなことを言われても、その、ドキドキして眠れないんですが
!??

「……そう、ありがとうたっちゃん」

『んーん、いいよ別に。葵ちゃんの頼みだしね』

電気もついていない、暗い部屋の中で私はモニターの向こうの束
社長に頭を下げていた。

用件は、束社長も掴んでいた情報。私の父に関することだ。

「このこと、香織には……」

『わかってるよ。まだしばらくは言わない。けど、いつかは知らな
ければならないときが来る、それはわかるよね』

「……ええ」

『ん。それじゃあ、私は戻るからね』
「手間取らせて御免なさいね」

こちらを気遣うような笑みを浮かべるたっちゃんは、小さく頷いてディスプレイから姿を消す。

本当に、あの人には頭が上がらない。

私には力がある。だけど、情報操作うんぬんになると、私の力は途端に弱くなる。だから、あの人の力がどうしても必要になる。

ドアの近くまで行って部屋の電気をつけると、ベッドに腰掛けてから大きく息を吐き出す。同室の子は祖国へと帰省していて、今の部屋には私一人だ。がらんどろな部屋に私の視線が満たされて、私はどこか遠くへ行ってしまうような錯覚を覚える。

その錯覚のような感覚に吐き気すら覚え、いつから自分はロマンチストになったかと己を嘲笑するように口の端を吊り上げた。

ベッドの脇に立て掛けられている日本刀を鞘から抜くと、切っ先を腕に当ててすつと滑らせる。痺れるような感覚とともに皮膚が切り裂かれ、切れた血管から溢れ零れた赤い血液が腕を伝っていく。

しかし、それはほんの数秒。強い酸性で焼けるような音とともに皮膚についた傷が元に戻っていき、血液はあつという間に蒸発する。いつからか人間という種から離れ始めた私の体の、証明だった。

けれど、これを恨んだことはない。この体があつてくれたから、私はここまで香りを守ってこれたのだ。世界は優しくない、だから力が必要なのだ。

刃を鞘に収めると、不意打ち気味に再度抜き放って天井を切りつける。無音とともに放たれた斬撃が天井に大きな傷跡を残し、上の階の床とここの天井の隙間にあつた何かを、その熱量で持って蒸発させる。

誰かに見られていた。あんな狭いところにわざわざ忍び込ませられるのは、私の知りうる限りあいつしかいない。

現生徒会長、更識楯無。

さらしきたてなし

暗部に対抗するための暗部、更識家の現当主であり、学園最強と謳われる少女。自由国籍権を持ち、ロシアの国家代表を務めている。……だが、それだけだ。

IS名は『ミステリアス・レイディ』、ナノマシンで構成された水を自在に操るといふ。さっき切り伏せた感覚はまさしく水だった。

「私のことを調べている、か」

くだらない。高々暗部の小娘程度が私を調べたところで、目ぼしい情報など出てくるわけもない。

だが。もしあの子たちに手を出そうというのなら、私は貴様を殺そう。一切の油断なく、一欠けらの慢心なく、全力をもって。

それだけの力が私にはあり、それだけの覚悟も私にはあるのだから。

カチン、と音を立てて刃を鞘へ再び戻すと、そばに立てかけ直してから息を吐き出す。どれ、少し私に目を向けておくか。

制服のまま部屋から出ると、三階へと上がる。向かうのは更識楯無の従者の元。

三階にいる二年生が珍しいのか、寮にいた三年生たちは揃ってこちらを見る。それを無視して彼女の部屋の前までやってくると、軽く扉をノックする。

「どちらさまでしょうか」

「えっと、二年の一之瀬と言います。布のほとけ仏先輩に折り入ってご相談があるんですけど……」

「……どうぞ、入ってください」

気弱な少女が思い切って話しているような、やや震えた声を部屋の中へと投げかけると、件の先輩は静かにそう告げて扉を開けてくれた。

ポニーテールで眼鏡をかけた、一つ上の女性。布仏虚、しゅうぼ三年整備科のトップであり、香織の友達である本音ちゃんのお姉さん。そして、更識楯無の従者。

中に入ると、きれいに整頓された小物や掃除の行き届いた台所が目に入る。綺麗好きか。

「ルームメイトは帰省中ですから、今は私だけです。今紅茶を淹れますから、手前のベッドに座って待っていてください」

「あ、はい。すみません、突然押し掛けて……」

「熱心な後輩の相談をにべもなく断るほど、私は冷血ではありませんから」

にこりと微笑んでから、台所で紅茶を淹れ始める虚先輩。一応は警戒しているらしいが、それでも気を緩めている。どうやら、偵察用の水が消去されたことはまだ伝わっていないらしいかった。

紅茶のいい香りが、すでに部屋中に流れている。そんな中で、虚先輩は両手に自分と私の分のカップを持ってベッドの傍の寝台に近づいてきた。

「それで、どんな相談？」

「えっと、その……」

「言いづらいこと、なのかしら？」

気遣わしげにそう言った虚先輩が、カップを寝台に置いたのを確認すると、虚先輩の喉元を片手で思い切り圧迫、気を失う寸前まで追い込みながら脱力した体を私の座っていたベッドへと押し倒した。

「な、にを」

「喋るな、動くな、奇妙な動作をすれば殺す。わかったか」

殺気を進らせ、目を細めて彼女の両手を頭の上で抑えながらそう伝える。

こちらが本気だと分かったのか、虚先輩は体の力を抜いてこちらを睨みつけた。

「私の言ったことを、一字一句違わず更識楯無に伝える。『一之瀬香織とその周囲の人間に手を出すようなら、容赦しない』と」

「……あなたは」

「確かに伝えたぞ」

「ぐう　っ!？」

一気に首を締め上げて意識を落とすと、掛け布団を掛けて衣服の乱れを直しておく。

あまり、こういうことはしたくないんだけどね。向こうがその気なら、それ相応のやり方つてもものがあるのだから、それをわかってもらわないと。

「……まあ、ごめんなさいね。先輩」

小さく謝ってから、部屋を出た。

……まったく、嫌な女だな。私は。

「ん、ふわぁー……」

目を覚まし、大きく欠伸をかましてもぞもぞと布団から顔を出す。隣に見えているのは、ぐっすりと眠り込んでいる香織の顔だった。昨晚の自分の所業を思い出し、少しばかり頬を赤く染めながらもニヤニヤとした笑みを止められない。

「……えへへ」

ぐにゃあ、と蕩けた笑いを浮かべ、それからぱつと手で口を押さえた。

私は朝のこの静寂が好きだ。まだ時刻は五時を少し回ったところだから、誰も起きてきてはいない。

普段の香織ならこの時間には起き出しているらしいけど、昨日は寝るのが随分遅かったからなのか、香織はまだ夢の中だ。

少しだけ眠っている香織に擦り寄って、それからぎくりと体を止める。何か、視線が私の頭に突き刺さっている。

「……簪」

『……おはよう、鈴。なに、してるの?』

『えっと……、くつついてる?』

にこつと笑って、寝ぼけ眼ながら鋭い視線を向ける簪に笑みを向けてみる。

ジト目。我撃沈セリ。

『ずるい』

『あ、う、う、めん』

『ちなみに、昨日は香織とキスをしていたぞ』

『ら、ら、ラウラ!? あんた起きてたの!?!』

『無論だ。寝たふりをしていた』

ドヤ顔で言い放つラウラに、軽く殺意を覚えた。

ちなみに、香織を起こさないように全員個人間秘匿通信フライング・チャネルで会話しているのは当たり前よ。

と、簷がぶくーっと頬を膨らませている。なにこれかわいい。

『私もしたい』

『だめー。私だけ香織にアピールしてないんだから、それぐらいいじゃない』

『ふむ、まあ簷は料理でアピールしたし、私もやることはやったからな。仕方あるまい』

『……わかった。仕方ない』

分かってくれたみたい。

本当は香織がお風呂に入っているときに乱入しようかとも思ったけど、それは幾らなんでも可哀想だからやめたんだし。

「んう……」

隣から聞こえた可愛らしい声に、思わず目じりを緩めてにやにやとした笑いを零してしまう。

ああもう、可愛いなあ……。

お泊り会はその朝で終わり、ナターシャはワープ装置で会社へ、私達は揃ってIS学園へと戻っていった。

ちなみに、その間香織の顔がやや赤かったのは、きっと私たちしか知らない秘密である。

第37話 夏休みのとある日 お泊り会！ 後編の後編！（後書き）

今回で夏休み編が終了し、次回からは五巻の内容に入っていきます。
お楽しみに！

第38話 二学期開始 ゲームスタート(前書き)

今回はちょっと短め。

その分早くあがりましたが。

第38話 二学期開始 ゲームスタート

二学期である。

暑さも和らいできた九月三日、私たち一組と二組は合同授業を行っていた。

「でやああああっ!!」

上空高く、一夏とふーちゃんが互いのE.Sを纏って対峙する。

互いに闘気は十全だが、シールドエネルギーは一夏の方が削られていた。

「くっ……!!」

「逃さないわよ、一夏! 最初にシールドを使いすぎたわね!」

「まだまだあっ!!」

一夏の振るう刃にも既に輝きは無く、戦況はふーちゃんに有利に傾いていた。

「ムダっ!!」

《雪片式型》の刃を《双天牙月》で受け止めると、押し返し様に《龍砲》を撃ちこんでいく。

そして、少し離れたところで《双天牙月》を投擲、追撃すべく加速して上空を縦横無尽に飛んでいく。

「どっせええええいいいい!!」

「ぐふおあああ!?!」

空高くに上がったふーちゃんは、太陽を背に一夏目掛け飛んで行き、途中でPICをカットして重力も加算した蹴りが炸裂した。決りこむようなその飛び蹴りがうまく決まり、更に後方へと吹っ飛んだ一夏目がけて、ふーちゃんが止めとばかりに龍砲を乱射。残り少なかった『白式』のシールドエネルギーを完全に削りきっていた。

そして、その後。

「夏が終わったといっても、まだまだ暑いですわね」

「今年は残暑もきついつて言っていましたからね」

「でも、校内はクーラー付いてるから座学のときは楽よねー」

更衣室で着替え終えた私とふーちゃん、そしてセシリアさんは連絡通路のところで皆が出てくるのを待っていた。

連絡通路にはなぜかクーラーが入っていないんだけど、かといって更衣室にいと六〇人近くいる皆の邪魔になるから出てきたのです。

「それで、セシリアはなんか一夏と進展あったの？」

「へっ!?! あ、や、べ、べっになにも、ありませんわっ!?!」

「……あつたのなかったのか、判別が難しい」

「いや、これはあつたわね。夏休みに何したのよ？」

「その……、一夏さんに手料理を振舞う機会がありました。まあ、箒さんやシャルロットさんも一緒だったのですが、美味しいと言ってくださって!」

……まって、セシリアさんって相当料理下手じゃなかった? 一夏……、どんまい。

とっても嬉しそうなセシリアさんの名誉のために、口には出さな

いごとにしよう。うん。

「そ、そうなの、ヨカッタワナー……、アハ、アハハハ……」

ふーちゃんの固まった苦笑いが、むなしく響く。

『セシリア・オルコットの料理はそれほどなのですか？』

『……典型的な料理下手だと思っ』

『それはそれは』

「ご愁傷様です、と後に続けそんな雰囲気のイヴでした。

少し三人で話していると、皆に混じって着替え終わった篤さんとラウラ、のほほんさんが更衣室から出てきた。

「あ、皆さんお疲れ様です」

「ああ、お疲れ様。そう言えば、今日の午後から新しい先生が赴任するらしいが……、何か聞いてないか？」

「いえ、私は特に。皆は？」

反応、なし。ふむ、一体誰だろうか。一学期頭って、確かにキリがいいところだけど。

それにしても……、一体誰なんだろう。本当に。

「ま、いつか。皆さん、ご飯行きましょうか」

「さんせーい」

一夏も誘ってね。

香織達が昼食を楽しんでいる頃、簪は一人四組でISの簡易調整に勤しんでいた。

（エネルギーバイパスの数が三倍になってる……。休暇中にコロニーで訓練したのが影響してるのかな。建設地の環境にも影響されたりするかもしれない、色々調査する必要があるかも。《朱鉄》と《蒼鉄》以外にも開発中の武装はあるし、エネルギーの割り振りを考えておこう。装甲の数は現状維持、必要に応じて展開装甲に変更するとして、射撃兵装に回すエネルギーは別種に確保しておいた方がいいかも。とすると、別途のエネルギーパックなんかもありかな）

時間が惜しいため食事は一〇秒チャージで済ませ、『モータータイプ』を簡易起動モードで起動すると、周囲の迷惑にならない程度に広げて六枚のキーボードとディスプレイで次々にデータを整理していく。それでも絶好調の時に比べれば、五分の一程度の速度しか出ていないというのだから恐ろしい。

一通りデータの整理を終えた簪は、軽く息を吐き出してから『モータータイプ』を待機状態に戻す。と、突然肩を軽く叩かれた。

「ん……。なに……。？」

「あの、生徒会長が……」

「……ありがとう」

「うっん、どう致しまして」

クラスメイトの子に礼を言ってから、教室を出る。そこには、簪

と同じ色の髪を持った女性が立っていた。

彼女の名は、更識楯無。このIS学園の生徒会長である。

楯無を見た簪は、特に何か動揺するようなことも無く、するすると近寄って声を掛けた。

「お姉ちゃん……なに……？」

「え、えっとね、簪ちゃん。お姉ちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど」

「……？」

一之瀬香織とは、もう関わらないで。

その言葉を聞いた瞬間、簪の普段の無表情の中にあつた感情の灯火が消えた。

そんな簪に気づかず、楯無は焦るように捲くし立てる。

「一之瀬香織は異常よ」

やめろ。

「経歴不明、今までISに触れた事だつてろくに無いのになれほどの才能を誇っている」

やめろ……！

「それに、治癒能力だつて尋常じゃない。はっきり言って人間の域じゃないわ」

やめろ！

「それに、彼女の姉の葵は虚を通じて私を脅迫してきた。明らかに何かあるの。お願い簪ちゃん、あの子は危険なのよ、もう関わっちゃ駄目！」

「……お姉ちゃんに」

「え……？」

「お姉ちゃんに何が分かるの!？」

今まで楯無が聞いたこともないような大きな声で怒鳴った簪は、明らかに怒気を発していた。

突然の簪の変貌に目を白黒させている間に、簪はさらに言葉を続ける。

「香織は私の恩人なの！ 助けてくれたのは、何もしてくれなかったお姉ちゃんじゃなくて香織なの！ 香織のこと、何にも知らないくせに、わかったようなこと言わないで！」

「なっ……、簪ちゃん、私は簪ちゃんのためを思って言ってるのよ!？」

それは本心からの言葉なのだろう。楯無は簪のことを妹として大切に思っているのだから、彼女からすれば当たり前のことだった。しかし、簪にとっては好きな人をありったけ侮辱されたのと同じことだったことに、楯無は気づけなかった。

「私は香織という、離れないから」

「お姉ちゃんの言うことが聞けないの!？ あの子は危険なの！ あんな子と関わったらいけないわ！」

「ッ！」

直後、廊下に甲高く頬を打つ音が響き渡った。

熱を持った頬を押さえ、楯無は信じられないようなものを見るよ

うな目で簪を見る。明らかに動揺しているその姿を見て、簪のかと熱くなった頭は思いのほかすんなりと冷めていく。

「……私の国籍が変わってることは知ってるよね」

「え……？」

「私、更識と縁を切るから。もうお姉ちゃんの妹やめるよ」

「か、簪、ちゃん……？ 何、言ってるの……？」

「真正正銘、私は日本と何の関わりも無くなる。そうしたら、私が誰と関わろうと私の勝手だよな」

今までおどおどとしか喋れなかった簪が、はっきりと強い口調で話していることに驚き、そしてその内容に驚愕し、意味を理解した楯無は困惑した表情で簪の目を見る。

その目は、まるで人を見る目をしていなかった。

「私ね、お姉ちゃんのこと、尊敬してたんだよ。カッコいいって。でも、もうそんな感情なくなっちゃった」

「ばいばい、と。」

そう言い残して、簪は楯無の横をすり抜けていく。

簪にとって、既に姉はコンプレックスの対象にも、尊敬できる存在にもなりえなかった。

そして後には、呆然とした表情で立ち尽くす楯無の姿だけがあった。

「……ねえ。ふーちゃん」

「なに、香織」

「目の前にいるあの人は、まさか」

「まさか、でしょうね」

午後の実習が始まり、私達は再びグラウンドへと出てきていた。しかし、しかしだ。千冬さんの隣にいるあの人は……。

「今回から、外での実習に講師として参加してくれる、ナターシャ・ファイルス先生だ。ナターシャ先生、自己紹介を」

「はい。えー、皆さん初めまして、ナターシャ・ファイルスです。二学期の間だけという事で、本日正午よりこのIS学園での一年生の実習授業を総合して見させてもらうことになりました。以前はアメリカのテストパイロットを務めていましたから、実力は心配しなくてもいいですよ。それじゃあ今学期だけです、皆よろしく！」

につこりと笑う彼女に、思わず私たちは口の端をヒクヒクと痙攣させてしまう。

ナターシャ・ファイルス、元アメリカテストパイロットにして、現バインド・カンパニーテストパイロット、アルカディア・？の代表操縦者の一人。

一体、何がどうなってるのさ!?

第38話 二学期開始 ゲームスタート（後書き）

空回ってしまった楯無。これから色々と原作乖離が始まります。

ナターシャ、びっくりした？ びっくりした？
ちなみに、詳細は次回。

第39話 裏のお話（前書き）

ということ、活動報告でもある通り、まずはこの作品を完結させるべく書き進めることにしました。

更新はちよつとばらつきますが、進むときはガンガン進むのでよろしく。

第39話 裏のお話

「却下」

乙女達の ソニックブーム ！！

一夏は 耳を塞いだ ！！

なんてあほなことをしてみました。香織です。

今日は二つのイベントが生徒たちを活気付かせていた。

一つ目は、ナターシャさんが来訪した翌日、つまり今日の午前中の全校集会で生徒会長が発表した、『各部対抗織斑一夏争奪戦』。簡単に言うと、今月の学園祭で一番多く投票があった部活に、一夏を強制入部させるというもの。

話を聞けば一夏には全く話を通っていなかったようで、生徒会長権限とやらで推し進めていたらしい。……それは、まずいでしょ。で、二つ目がナターシャさん。その全校集会の終わりの方で紹介された彼女は、あつという間に生徒のハートを鷲掴みにし、固定ファンを獲得していた。アイドルみたいな人である。

「あ、アホか！ 誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思つて！」

「メシア気取りで！」

で、ですよ。現在その学園祭を勝ち抜くために、色々と案が出ているのですが。

以下箇条書き。

- ・織斑一夏のホストクラブ
- ・織斑一夏とツイスター
- ・織斑一夏とポツキー遊び
- ・織斑一夏と王様ゲーム

と、軽くこれだけ出ました。いやいや、まずいでしょうこれは。

「えーっと、皆さん？ 一応一夏もこのクラスの一員であって、これは一夏一人に負担が掛かりすぎると思うんです。皆さんの気持ちも、分からないわけではありませんが……」

「か、香織……！ お前って奴あ……！」

一夏、涙ぐんでないで自分で解決しよう……、無理か。女子のパワーは凄いもんね。

まあ、クラスの一押しを推して行きたいってのは分からないでもないけど、これはまずいでしょ。一夏死ぬよ？ 特にツイスターゲームとか。

「確かにいー、かおりんの意見も一理ありー、だよねえー」

「むむむ、言われてみれば織斑君の負担が大きすぎるわね……。稼ぎたいけど、負担が大きすぎて稼ぎ頭が倒れたら本末転倒だし……」

ふう、とりあえず方向修正は出来たかな。

のほほんさんとちよつとアイコンタクト。

『ありがとうございます、のほほんさん』

『お気になさらずうー』

うーん、アイコンタクトで会話って普通かな？ とうなんだろ。しかし軌道修正できたはいいけど、それじゃあどうするかってことなんだけども。

意外な人物が、名乗りを上げた。

「メイド喫茶はどうだ」

そう言ったのは、なんとラウラだった。ああ、@クルーズでバイトしてたからか。

しかしそれを知らない皆は、きよとんというかぼかんというか、間の抜けた顔でラウラを見ている。まあ、普段はあの堅物だもんね。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

「うちのクラスは素材がいいですからね。ちょっと手を加えれば化けに化けますよ。メイド服の伝なら私がありますから、どうですか？ 一夏の負担もそれほど大きくありませんし」

「え、えーと……みんなはどう思う？」

ラウラを援護するように続けた私の言葉を聞いて、一夏はラウラがこんなことを言ったことに衝撃を受けつつも皆に決を採る。

結果、全員一致で採用。一夏には執事を担当してもらったことになった。

「それじゃあ、俺はこれを織斑先生に伝えてくるよ」

「はい、お願いします。一夏」

「おう」

とうとうと。

メイド喫茶をやることになりました。

香織のそれから更に数日。

「それで、何の用かな。生徒会長さん」

「あら、気づいていたのね」

殺気を滾らせてこちらを睨みつけていれば、どんなド素人だって尾行くらい気づけるだろうに。

確か少し前に、簪ちゃんに香織から離れるように言って、すげなく拒絶されたって話は聞いたけど……。私が言うのもなんだけど、シスコンだわね。

物陰から出てきた更識楯無は、私、一之瀬葵へ向けてこう言い放った。

「単刀直入に言うわ。一之瀬香織は人間ではないわね？　そして、貴女は間違いなくそれを知っている」

「……そうだとしたら、貴女はどうする？」

「……貴女がどれほどの自信を持っているのか知らないけど、この日本で更識を敵にして無事で済むと思っっているの？」

「ええ、思っているわ。その程度の組織ならね」

まったく、何を言うかと思えばそんなことか。

暗部の一つくらい、敵に回せなくて何が姉か。こいつは姉だといふのにそこが分かっていない。

執着するだけで相手を知ろうとしない限り、それは愛ではないといふのに。

「そう。なら、勝負しない？ 貴女が勝てば私は貴女に手を出さないし、一之瀬香織達にも手は出さない。ただし、私が勝ったら洗いなざらい情報を吐いてもらうわ」

「……まあ、いいわよ。貴女程度に負けるほど、私は弱くないのだから」

これ見よがしに挑発してやると、ひくりとこめかみを動かした。まだまだ青いな。

しかしこの条件はまず守られないだろう。生憎とこちらには情報統制にかけては宇宙一と呼ばれるかもしれないたつちんがいるのだから、情報を取られる危険性はゼロだけど、香織たちに近づかれると対処がしづらい。今のうちに始末も考えたが、後が面倒なのでやめておこう。

とりあえず、この戦いをおさめて伸すということだ。

更識楯無の案内で無人の置道場へ到着。向こうは胴着に着替えるらしいが、こちらはそんなもの必要ない。大体、これは勝負という体の私闘なのだから。

「準備はいいかしら、生徒会長さん」

「ええ。では三秒後に開始よ」

一方的に宣言し、三秒後には私の目の前まで接近してきた。

ちなみに、勝敗は「どちらかが戦闘不能」になることで決定する。

楯無はこちらに肘、肩、腹と軽く掌打を浴びせると、流れるような動作で両方の肺を真っ直ぐに掌底を放ってきた。

ドンッ！ と強い音がして、肺から空気が吐き出される。通常ならば。

「それが、どうかしたか？」

「っ！？」

「その程度か。では次は」

一切ダメージを負っていない私に動じたのか、楯無は一瞬型を崩す。

そこを見逃さず、一瞬で楯無の手の平を上へ飛ぶように蹴り上げた。直後、張り手をしたような高い音と共に楯無の体が宙へ浮く。

「あ」

「こちらから行こう」

浮いた状態から攻撃に転じることなどではしない。

割と強く、浮いた状態の楯無の背中を真横から蹴り上げる。バキッ、と骨から嫌な音がした。感触からして折れてはいないが、それでも相当なダメージだろう。体もまた浮き上がっている。

今度は叩き落すように楯無の腹の上から拳を放ち、彼女の体を畳へと沈める。何処かの内臓を傷つけたのか、楯無は口から血を吐いていた。

「ガハッ！？」

「もろいな」

体は鍛えているのだろうが、いいのをもらえば簡単に壊れる。

「まだやる？」

「ぶ、な、舐めないでもらいたいわね……」

根性というか、意地だけで立ち上がってきているような気がするのは気のせいではないだろう。

しかしそれは私への対抗心から来ているのか。そこまでは推量の及ぶところではない。

向かってくるならば叩き潰すだけだ。

「はっ！」

まっすぐ向かってきた、と見せかけての足払いを回避さま、真下に来た足を踏みぬく。ああ、折れたな。

「ぐう！？」

「拳動の一つ一つが遅い。蠅が止まるぞ」

「かふっ　！」

顎を蹴り上げ、折れた脚を鷲掴んで引き戻す。そして、そのまま腹部のさつきと同じ位置に三度拳を叩き込んだ。ぴったり骨の隙間、内臓器官へ衝撃を通しながら、地面に体をたたき落とす。

人体を壊さないよう、最小限の怪我で収めようと頑張ってはいるけれど……、彼女は死を垣間見たことがない。戦っていてよくわかる。

彼女の戦い方は制圧だ。出来る限り迅速に、かつ周囲に被害を出さないような戦い方。けれど、それがうまくいきすぎてその先へ進めていない。彼女の戦いは「殺しあい」ではあっても「壊しあい」ではないのだから。

人体は殺すのではなく壊す。指を逆に曲げればそれだけで壊れるほど、人間の体はもろい。溢れんばかりの間接がその証拠だ。

「そろそろ我慢が効かなくなる。これ以上やるなら、死を覚悟して

もらっ」

「くっ……」

折れた脚を乱雑に扱ったせいで右足はズタズタだ。それでも必死に立とうとしているのは称賛に値する。するわけないが。

「参りました、と一言言ってくれば、私はそれでいいんだが？」

「……いやよ」

「そうか」

まったく、往生際の悪い小娘だ。

脚を振り上げると、踵落としの要領で顔面へと足を

「そこまでだ」

下ろしたギリギリのところ、その脚が受け止められる。

「……織斑先生」

「喧嘩するのは勝手だが、殺させるわけにはいかん。手を引け、

一之瀬姉」

「……はい」

いつの間にかやってきていた織斑先生が私の足を掴んでいた。心配がなかった。隠密は私と同レベルか。さすがは最強。

「一之瀬姉、部屋に戻れ。今回のことは目を瞑っておいてやる」

「……失礼します」

頭を下げ、そこから出ていくことにした。

後は織斑先生が何とかしてくれるだろう。さて、こっちも仕込み

を始めるか。

「やっ」

一之瀬が行ったあと、倒れて息を荒くしている更識をぐっと抱え上げる。早めに医務室へ連れて行ったほうがいいだろうな。

脚の骨はひどいことになっているが、ほかはせいぜい打ち身程度だ。内臓器官へのダメージもそれほどではない。あいつめ、これでもまるで本気を出していないということか。

未恐ろしい奴め。

「今回の件、申し開きはあるか？」

「……… すみません、織斑先生。すべて、私の独断です」

「今後、あまりあいつにちょっかいを出さん方がいいぞ。あいつは守るべきもののためなら何だってやってのける。更識家当主のお前がここまで一方的に、それもほとんど本気を出さずに叩き潰されたのだからな」

「……… 同い年でここまで差ができるなんて、ちょっとショックですね」

更識は当主として、あらゆる訓練を受け、あらゆる鍛錬に励んできただろう。しかし、それをあいつはやすやすと上回って見せた。それだけの覚悟と力があるということが、それでわかる。

だがな、更識。お前の抱いた感想は、当主としてのものではなく、ごくごく普通の高校生の言葉だということに、気付けているか？

「……私、ダメな子だなあ」

「更識……？」

「簪ちゃんには拒絶されちゃうし、必要な時に戦えないし、おまけにこんなズタボロにされちゃって……。どうして私、こんなことしてるんだらう」

俗に言うお姫様抱っこという形で抱き上げている更識が、鬱屈とした表情を見せていた。

今まで更識家当主として、そして学園最強の称号の持ち主として、常に明るく、一本芯の通った姿を見せてきた更識楯無が、まるで年頃の少女のように塞ぎ込んでしまっていた。

そのことに、私は少なからず驚きを感じる。あいつの行動がこいつの殻とも呼べるものを壊したのか。

更識は確かに頼れる大人の女性としての雰囲気があった。学生たちには特にそう感じられたらう。それが本当のものであったなら、私も感じていた。

しかし、それはこいつにとって重りや殻にもなっていたのだらう。その『強者の殻』を、一之瀬姉は壊して見せたのだ。まあ、あいつがそこまで考えていたわけではないのだらうが。

「……ねえ、先生」

「なんだ」

「私……、会長辞めていいかなあ……？」

涙を浮かべ、更識は私の胸に顔を埋めて言った。

……殻を壊したのはこいつのためになったのだらう。が、それと一緒に心にヒビが入ってしまったらしい……。

とにかく、早々に医務室へ連れて行くことにした。どうせこの状況を見たらキヤーキヤーと騒がれるのは目に見えているからな。

第39話 裏のお話（後書き）

どうしてこうなった！

なんだか書いてるうちに楯無が弱気になったらいいんじゃないかな、なんて思ってしまったってこうなってしまったのです。なぜなんだ。

ということ楯無の心が折れました。妹に拒絶された上に、焦って行動起こしたらぼこぼこにされてしまったたっちゃん、これからどうなるのか！

第40話 学園最強の引き籠もり（前書き）

タイトルまんま。

後半はちょいエロ&原作ブレイク。まあ今サラですけどね。

第40話 学園最強の引き籠もり

「お嬢様……」

扉の前で、虚はただ立ち尽くしていた。

たった一枚の壁を隔てた先では、折れた足を庇いながらも小さく蹲って、涙を流して眠る楯無がいる。

今まで、彼女の主がこれほどに痛めつけられたことはなかった。肉体的にも、そして精神的にも。

治療用のナノマシンを投与されているため、足の骨は数日で完治するだろうが、心はそうはいかない。

「私は……」

拳を握りこみ、涙を流す。食い込んだ爪が皮膚を破り、赤々とした血を流していた。

葵と楯無の戦いから一日、夜を迎えた今になっても、楯無は恐怖と苦痛の溢れる悪夢に苛まれていることだろう。

拷問に対抗するための訓練も受けているし、痛みには涙を流したことは一度や二度ではないはずだった。しかし、それはあくまで訓練、葵にこれでもかとやられたことは、楯無の柱を確かにへし折ってしまっていた。

けれど、虚の頭の中の理性はこれが自業自得だと理解していた。忠告されたにも拘らず請求に動いた結果であり、彼女を恨むのはお門違いであると。

しかしながら、虚も大人びているとは言ってもまだ一八である。理性のはじき出した結論を、感情がはいそうですかと受け止められるかといえ、その答えは否であった。

「……一之瀬、葵」

更識という名を持ってしても素性すら探れない謎の存在。そして、その庇護下にある一之瀬香織。今は手を出せずとも、いずれ必ずその正体を暴き立てる。

血を流しながら、虚は静かにそう決意した。

その一方で、楯無はというと。

「……あ」

ぼそぼそと何かを呟きながら、何も無い場所をずっと見続けていた。

その瞳は濁りきっていて、何かを映すことはないだろうと思ってしまうほど。

「もう……やだあ……、なんで、私ばかりこんなことしないといけないのぉ……！」

その言葉を虚が聞けば、十中八九自分がおかしくなったのだと思うであろう言葉。それを、楯無は心の底から発していた。

最愛の妹には愛想をつかさね、焦って行動した結果、足の骨を無残にへし折られた。心の柱も、それと共に。

楯無は生来、気が強いという性質ではなかった。

双子の妹である簪を守る姉として、そして更識楯無の名を告ぐ少女としてそう育てられたというだけであって、彼女自身はどちらかといえば気弱な気質であった。

そんな彼女が暗部に対するための暗部の当主として、このIS学園の中の最強としての顔を保つためには、人を食ったような、おちよくなるような顔を持っていなければならなかった。

ならばこそ、彼女の今の状況は仕方がないこととも言えるだろう。

「なんで、なんでなの簪ちゃん……、私頑張ったよ、お姉ちゃん、頑張ったんだよ……？」

ここにいないはずのない妹の名を呼びながら、楯無はただベッドの中で蹲る。

壊れてしまいそうな自分を必死で守るために、ただ身じろぎもせず。暗闇の中。

「生徒会長が引きこもったあ！？」

「傷心で出てこないって、お姉ちゃんが言ってたあー」

出し物が決まってから二日目。

私達が集まったところでのほんさんから齎された情報は、頬を引きつらせてしまうようなものだった。

「……それ、ほんと？」

「うんー、なんか、一昨日の放課後に誰かと決闘して、ぼこぼこにやられたってー」

「生徒会長って、IS学園で最強なんじゃないの？ 相手って千冬さん？」

「んーんー、同学年の生徒らしいんだけどー、詳細はありませー

ん

「簪ちゃんとうーちゃんの質問に答えるのはほんさん。

……私は、その条件に当てはまる人を一人知っているんですが、これってもしかして……？」

「ちょっと、電話してくるね」

「あ、うん……」

今はお昼時、食事をしながらお話中でした。

皆から離れて、携帯端末からお姉ちゃんの番号を呼び出すと、通話ボタンを押す。

二、三度の呼び出し音の後に繋がる音があった。

「もしもし、お姉ちゃん？」

『なに、香織？ なにかあった？』

「あのさ。一昨日会長と戦った？」

『戦ったけど、それがどうかした？』

はい、お姉ちゃんでした。

だよねえ、学園最強って言われてる人をぼこぼこに出来る候補って言ったら、千冬さんかこっちしかないもんねえ。いや、学校にいる人のことはよく知らないんだけどさ。

「会長、引きこもってるんだって」

『はあ？ 一回ボコボコにされたくらいで？ アホらし……』

「ちなみに、どれぐらいやったの？」

『精々足折ったくらいよ？ 重症にすると面倒なもの』

「足の骨折は十分重傷ですが」

本当に、我が姉ながら常識の欠如が著しいなあ……。
けど、仮にも生徒会長が一度負けたくらいで引き籠もるまでいく
かなあ？ ちよつと疑問が残るんだけど。

「まあ、いいや。ありがとね、お姉ちゃん」

『気にしないでいいわよ。それじゃ、私戻るわね』

「うん。ばいばい」

通話を切つて皆の元へ戻る。食事はもう皆終わらせているから、
ドリンクを飲みながら世間話に興じていた。

「おかえり、香織」

「やっぱりお姉ちゃんだった。ボッコボコにしたって」

「……凄い。更識先輩は強いのに」

「ん、簪ちゃん。前はお姉ちゃんって言ってなかったっけ？」

「妹、やめたから。もう更識じゃない」

清々しいくらいの笑顔で言ってくれた簪ちゃん。

あ、もしかしたらこつちも関係しているかもしれないね！

「簪ちゃん、ちよつと詳しくいい？」

「……？ いいけど……」

とりあえず状況を掴みたいので簪ちゃんからも「更識と妹やめた」
発言を内容を確認してみると、それはそれは不思議なものだった。

なんでも、私の周囲にいと危険だから早く離れるように言われ
た簪ちゃんが、「そんなこと言うなら妹やめる。更識もやめる」と
言ったらしい。結構私のことばる糞に言ってたから、それでやめた
んだとか。

うん、多分じゃなくてもそれだろうね。それとお姉ちゃんのフル

ポッコが重なって、ちょっとブルーになったのかな。そういう簡単な話じゃないかもしれないけど。

「でも、もう私には関係ないし、どうとも思わない……。少しは、出来ない人の苦しみつてもものも知るといい……」

小さな頃から何かと姉に負けてきた簪ちゃんから言わせればそんなんだろうなあ……。

確かに、姉が偉大って言うか、何でもできると色々複雑だよな。

私もお姉ちゃんのこと羨ましいって言うか、凄いつて思ったことは何度もあるし。今は感謝してるけど。

しっかし、あれだ。会長が死んでなくて良かった。お姉ちゃんは平気で致死レベルの攻撃繰り出すからなあ。

そんなことを考えていると、ぽんぽんと肩を叩かれる。

「やつ。ここいいかな?」

「あ、ナターシャ先生。どうぞどうぞ」

「今は先生じゃなくていいわよ」

ナターシャさんはそう言うと、自分の分の昼食を机においてから私の隣に座り込んだ。

突然教師としてやってきたナターシャさんには驚いたけど、案外うまくやっているらしい。大人の女性の余裕と言う奴かな。

「葵ちゃん、派手にやったみたいじゃない?」

「教師が笑って喧嘩を黙認するべきではないと思うんですが?」

「いいのよ、私臨時だから」

ひどい教師を見た。

「ん、おいしつ IS学園っていいわねえ、こんなに美味しいのが食べられるんだもの」

「軍だと違っただんですか？」

「味は二の次、まずいわけじゃないけど、まずは腹が膨れること最優先ね」

「あー、私のいたところもそんな感じね。なんで軍って飯の味にこだわらないのかしら」

元軍人のナターシャさんと、軍で訓練を受けていたふーちゃんがいうならそうなんだろうな。

でもあれだつてね、レーションと違って最近は美味しいんだつて。昔は酷い味だったみたいだけど。

「午後の実践訓練は私も出るから、ちゃんと食べておきなさいよー」
「？」

「一組と四組合同だったわよね」

「うん……。私が一緒……」

「私も一緒なのだよおー」

にっこにっこしている簪ちゃんと、ふにゃっと垂れているのほほんさん。

うん、まあにもかくにも、平和だ。多分。

「こんにちは、エム。いいえ、マドカと言った方がいいかしら」
「……キティか。なんの用だ」
「作戦行動前に集中している子に、ちょっかい出そうと思って」

悪びれる様子なく、キティが笑う。その様子を、マドカと呼ばれた少女は冷めた眼で眺めていた。

マンションの最上階に位置するここは彼女達の拠点のひとつとして使われているが、それが何処にあるのかは不明である。

「ねえマドカ、貴女の目的は復讐なのよね？」

「ああ」

「なら、それが終わったときには私のものにならない？」
「なに？」

すると、気づけばキティはマドカを絡め取る様に後ろから抱き着いていた。

その艶めかしく撫でるような感触に、マドカは身を竦めるとキティから視線を外す。

今までもスコールとオータムがそのように絡み合う様を目の前で見せつけられたことはあったが、自分が標的にされたときのことは考えていなかった。

いや、考えないようにしていた、と言った方が正しいか。生理的嫌悪すら覚えていたのだから。

「離れる」

「い・や・よ」

「貴様 ツ！」

力づくで体を離そうとしたマドカの首筋へ向けて、キティは犬歯を突き立てた。つぷりと、マドカの柔らかかな白い肌をキティの鋭い

歯が突き破り、血を溢れ出させる。

一瞬の痛みと、その後に来た壮絶な快楽にマドカは目を白黒させながらも何とか拘束から逃れようともがく。

しかし、緩く抱きしめてくれるだけのはずのキティの両腕から、なぜかマドカは抜け出すことが出来なかった。

「は、なせ……!!」

「力が抜けるでしょう？ 気持ちいい？ 気持ちいいわよね、そういう風にしてるもの」

「ひああっ!？」

ズルズルと血を啜りながら喋るキティの言葉を聞きながら、マドカは全身の力が抜けていくのを感じた。

それと共に、自分の中に何かが入ってくるのも感じていた。

「何を、している……!!」

「ただのナノマシンよ。私に好意を持つように脳を弄くる、ね？」

「なんだと……!？」

「ふふっ、かわいいっ……。食べちゃうわよ？」

「あ、あ……!!」

何を言っているのか、何をされているのかが分からなくなってくる。

気味が悪いと嫌悪していたことが何故だか異様に愛おしくなり、力の抜けた体がゆっくりとキティの体を求め始める。

それに気づいたマドカは、うなじ辺りに口を寄せていたキティの顔を殴りつけると、ベッドから立ち上がって何とか距離をとった。

「はあっ……、はあっ……!! なんだ、なんなんだ貴女は……!？」

第40話 学園最強の引き籠もり（後書き）

会長フルボッコの後遺症でござるの巻。

そして織斑マドカ、陥落までカウントダウン。

キティは順調に我が道を行っています。

第41話 天才は天災へ（前書き）

復活イベント。一日かからずに書き終わりました。

第41話 天才は天災へ

部屋に鍵を掛けて、光を締め切ってから、どれくらい経っただろう。

気づくと、私はぼんやりと鈍く光ることすらやめた果物ナイフの刃を眺めていた。

これを手首に押し付けて思い切り引けば、死ねるだろうか。考えながら、即座に蓄えられた知識が否と答えを弾き出す。

今の状態で出血多量のショック症状で死ぬことなんて、厳しいだろう。なら心臓にでも突き刺してやった方がよほど有用だ。

考えても、実行に移せなかった。

ナイフを放り投げると、それは絨毯の上に落ちて鈍い音を立てる。

「……………」

それを見ても、まるで何も感じない。無感動にも程があった。

死にたいと願っても、死の間際にある痛みが邪魔をして自分を遠ざける。楯無は、生きて死んでいる状態にあった。

何も出来ず、何かをしようとする気概すら起こらない無気力状態の彼女の耳に、突然ノックの音が飛び込んできた。

「楯無、いるな？」

「……………織斑、センセ？」

「そつだ。開けるぞ」

「あ……………」

止める間もなく、千冬は合鍵を使って鍵を開けると扉を開き、中へ入ってくる。

ベッドの中で蹲る楯無は、足を自分の下へ引き寄せて体育座りの

よつに身を固めると、目線だけをそちらへ向けた。

「どうだ楯無、具合は」

「……」

「それにしても酷い顔だな。髪もぼさぼさで、シャワーも浴びてないだろう」

「……」

反応を見せない楯無を見て、千冬はあからさまに溜め息をつくと腕を掴んだ。

反射的に跳ね除けようとした楯無を抑えると、千冬はそのまま彼女をベッドから引きずり出す。

「や、やだ、やめてっ！ やだぁ！」

「来い」

「センセ、やめてよ！ いやぁ！」

「いいから来い」

他人に触れられることすら恐れ怖がっている彼女をそのまま部屋から出すと、千冬は一直線に寮の大浴場へと歩いていく。

楯無はその間泣き喚いていたが、生憎今は真昼間であり、しかも学園祭の二日前。全生徒が校内で学園祭の準備にかかりきりになっているため、その声を聞く人間は千冬以外にいなかった。

「ほら、服を脱げ」

「ぐすっ……、センセ、脱がせて……？」

「……まったく」

幼児退行の状態も現れているのか、楯無は涙を指で払いながら千冬にそう言った。

ここで拒絶すれば、また泣き出してしまつかもしれないと考えた千冬は、仕方なしにそれを了承する。

少しして一糸纏わぬ姿になった楯無は、同じく裸になった千冬によって浴場の椅子に座らせられると、熱いシャワーを頭に浴びせられた。

「きゃっ!」

「じつとしていろ、洗ってやる」

「ごわごわとした髪をシャワーで濡らした千冬は、手にシャンプーを二度、三度出すと髪を洗い始める。

目を閉じた楯無はそれを心地良さそうに受け入れながらも、終始疑問が尽きなかった。

「……センセ、なんで私のこと気にするの?」

それは、今の彼女にとって当然の疑問。

何かを行うことを諦めていた彼女は、何かを行ってきたことを諦めることの対価にしようとした。そんな自分を俯瞰的に見つめ、なんと愚かなのだろうとあざ笑い、その価値をゼロ以下に見出したのだから。

そんなゼロ以下の自分を気にかける人間など、奇特にも程があった。天才ゆえに天災には近づけず、天災に接してきた天才の意図は掴めない。

「生徒の心のケアも教師の役目だ。気になったしな」

「……変な人だ」

「変人と付き合っているからな。影響も受けるさ」

楯無はそんな千冬の言葉を、心地良さそうに聞いていた。まるで、

今までの様が嘘であるかのように落ち着き、優雅さすら感じられるその姿の内側で、楯無は考える。

織斑千冬、彼女の傍に居るととても落ち着く。先ほどから、ぐしやぐしやになつていた心がゆっくり整理されているのが感じられていたから。

彼女にはあるのだろう、天才や天災を落ち着かせ、懐かせ、そして世界に適合させられるだけの資質と言うものが。

では何故天災は社会に適合できず、社会を適合させたのか。簡単だった、彼女はそれ以上に天才であり異常だっただけの話だ。

気が付くと、楯無は千冬の手を取っていた。

「どうした、楯無？」

「……んっ」

ぺろりと、お湯で洗い流されて清潔になつた千冬の指を舐める。甘かった、まるで味わつてはいけないもののように。

一度舐め始めると、止まらなかつた。

二度三度、それ以上幾度も舌を這わせ、味を確かめる。その様子を、千冬は戸惑いながらもじっと眺めていた。

「……思い出すな」

「ふえ？」

「やられたんだよ、昔。あのバカウサギにも同じことをな」

言われてから、楯無は自分が何をしていたのかを思い出す。けれど、不思議と罪悪感や忌避感、羞恥心を感じることはなかつた。

あのバカウサギ、というのが誰を指すのか、楯無にはなんとなく分かつた。篠ノ之束、世界を変えた天災。

「……先生」

「なんだ」

「抱きしめて、いいですか？」

「……ああ」

許可が出た途端に、楯無は千冬の体を真正面から抱きしめる。暖かく、生きていた。

愛しいと思う。思っ、それから自分がどれほど酷いことを簪に言ってしまったのかということに気づいた。

(ああ、これは無理だ。離れることなんて出来やしない)

気づいてしまえば、楯無の傷は瞬く間に塞がった。

なんてことはない、自分も人間だったのだ。完璧を求めて仮面を被り続けるあまり見失っていた本質、あまりにも自分を過大評価しすぎていただけのこと。

まだやれる、まだ大丈夫、もう少し。そんな言葉で進んできたような道は脆く、簡単に崩れ去る。そして、その道を進んできた楯無の虚像もまた、脆く崩れ去っていた。

後に残ったのは、臆病な白兔。かくして。

天才は天災へと昇華する。まるで、蛹が蝶になるように。更識楯無という幼虫を内側から喰らい尽くして。

「……センセ、お風呂入りましょ？」

自分で彼女の手を引き、楯無は浴槽に身を浸ける。

その隣には、千冬もいた。そのことに、楯無は無性に歓喜を覚えた。なぜかという疑問は野暮なものだろう。

「私ね、センセ。何にも価値がないと思うんだ」

「楯無、お前……」

「だから、変わってみました。今、織斑先生がいてくれたから」
「……そうか」

たった今変わった彼女に対しても、千冬は揺らぐことはない。

まだまだ序の口である彼女に、それ以上に接してきた千冬が揺らぐ要素はなく、そのことが楯無には悔しかった。

だから。

「センス」

「ん？ んっ……！？」

口付けた。

唇同士がしっかりとくっついたそれは、まるで恋人同士のように情熱的に、貪るように続けられた。

「ぶはっ。えへへ、どうでした？ 巧いでしょ？」

「……お前は」

「ファーストキスもセカンドキスも犠牲にして学んだんですから。

えっへん！」

「楯無……」

「やあん、それで呼ばないでください！ 私の本当の名前、教えますから。千冬さんはそっちで呼んで？」

豹変した楯無は今までとまるで別人のように生き生きと話し出した。あるいは、病的なほどに明るく。そんな彼女を、千冬は受け入れた。

そうするのが当然だといわんばかりの姿勢で、当たり前のように。だからこそ、楯無は口を開く。

「私のホントの名前は」

そしてその日、更識恋華^{れんげ}は、織斑千冬に恋をした。

「か、ん、ざ、し、ちゃああああああんっ!!」

学園祭の準備も一息つき、さて帰ろうかと帰路に着いたとき、寮の方からそんな叫び声を上げながら走ってくる人影が見えた。

この感覚、束ちゃんに近いけど違う!?

なんて考えてると、瞬く間に接近してきたその人は、大きく踏み切ると空中で三回転半を決めながらジャンピング土下座を見せた。

「ごめんね、ごめんね簪ちゃん! 私、簪ちゃんのこと考えずにあんなこと言っつて!」

「……何しに来たんですか、生徒会長」

「あつつ、その、謝ろうと思っつて……。私、好きな人が出来たの! それで、酷いこといったんだなってわかって……。本当にごめんなさい!」

「……え、はあ? 好きな人?」

信じられないと言った様子の簪ちゃん。ちなみに、目の前で土下座しているのは生徒会長さんです。ほんと、すごいシユールな光景なんです。

「うん！ 千冬さん！」

「ぶふうっ！？」

「……お姉ちゃん、同性愛は非生産的だよ。私は否定できないけど……」

「愛に障害などないのよ、簪ちゃん！」

あまりのインパクトにお姉ちゃん呼びに戻ってしまっている簪ちゃんである。

いや、千冬さんは手ごわいと思うなあ……。私も同性愛は否定しないけど。

「で、一之瀬香織さん、だったよね？」

「え、あ、はい。先日は姉がご迷惑をかけたようで、申し訳ありません……」

「いいのいいの、あの人のおかげで私はまた強くなれたわ。それでね、香織さん。ちょっと織斑一夏君に言伝を頼んでもいいかな？」

一夏に？ 何のようだろうか。

「一夏君、ぶつちゃけ今の立場って結構やばいのよ。一夏君を酷い目に合わせて千冬さんの悲しむところは見たくないし……。だから鍛えることにしたわ。第三アリーナで待ってるから、すぐ来るように言ってくれないかしら？」

「は、はあ……」

「それじゃ、頼んだわよ！」

しゅばっ！ と効果音が付きそうな勢いでまたもや走り去っていった生徒会長に、一同呆気に取られる。

……なんだっただ、一体。

「……お姉ちゃん、ちょっと変わったかも」

「わ、わかるんだ……」

「……元姉妹だから」

で、とりあえず一夏をアリーナに行かせてその日は終わったわけですが。

私たちはまだ知らなかったのです。天災が二人に増えていたことを。

第41話 天才は天災へ（後書き）

ということ、楯無が復活&千冬さんに惚れました。

理由としては「天災の素質があつた楯無が、天災を惹き付ける千冬さんに会つたせい」です。ついでに天災として覚醒。

この作品内では天災は天才の上位系であり、下位系でもあります。

そんなこんなで、楯無はとにかく滅茶苦茶な存在へと変貌しました。行動原理は自分の利益になるかと、千冬さんが喜ぶかどうかです。

ある意味人間として壊れました。

そしてそんな楯無さんを書いているのがとても楽しい。やっべー。

第42話 学園祭(前書き)

ちよつと急ぎすぎたかもしれん。これでは学園祭が一話で終わって
しまいそう。

第42話 学園祭

学園祭当日。

「皆さん、ここまででやれることは全てやってきました。あとは皆さんの力を全て出し切って、この学園祭を成功させましょう！」

「……おーっ！」「……」

私の音頭で、全員が右腕を天高く突き上げる。

「あー、皆無理だけはしないようにな。辛かったらすぐに戻ってくれ」

「では皆さん、張り切ってまいりましょう！」

一夏と私の言葉で、扉が開く。

私が外に出て、盛大に。

「IS学園一年一組、『@クルーズ特別出張 IS学園店』、ただ今より開店でーす！」

「虚、準備は？」

「万事明瞭に整っております」

「そう。お疲れ様」

学園中が祭りに湧いている頃、恋華^{れんげ}は愉しげに嗤っていた。事実愉しくて仕方がない。この世の全てが新鮮に感じられて、どうしようもなく愉しいのだ。

無論、それを疑問ありげに見つめる虚もいたわけだが、恋華はそれを構うことなく嗤う。

恋華にとって、今の虚はちょっと手を出してみたい部下である。もちろんそれによって関係が悪化することも考えられ、そうなれば仕事能率の悪化は避けられないだろう。よって、少しばかり慎重にならざるを得ないのである。

「とりあえず、学園祭の仕事に戻ってもいいわ」

「はい。それでは」

ぺこりと綺麗に一礼してから、虚は生徒会室から出て行った。その直後、恋華はにへら、と嗤いをだらしない笑みへと変えて、懐から一枚の写真を取り出した。

それは、IS学園の裏ルートで売買されている織斑千冬の写真。凛々しく引き締まったその横顔が映し出されたそれを眺めて、恋華はにやにやとした笑みをだだもらしている。

『おーい、何ニヤニヤしてるんだい？』

「はっ?! しまった、愛が漏れたわ」

『君も大概だね。まあいいけど？ 恋華ちゃん』

声と共に現れたウィンドウに写っているのはウサ耳をつけた女性。本来ならば決して呼ばれない本名を呼ばれても、恋華は嫌悪感を醸し出すことすらせずに笑みを浮かべた。

「さて……。こんにちは、《人類最低》」

『やあ、こんにちは！ 君は……。、どう呼ぼうか？』

「名前なんて必要ないわよ、私には千冬さんに認識される名だけあればいい。それでも呼びたいなら、そうね。《恋愛中毒》ラブジャンキーでいいんじゃない？」

『まあ、私は昨日通り恋華ちゃんって呼ぶけどね、同類？』

天災同士の会合は、そう静かに始まった。

《人類最低》、篠ノ之束。

《恋愛中毒》、更識恋華。

互いは天災であり、天災であることは天災でしかわからない。

その二人がこうして連絡を取り合っているのには、一つの訳があった。

「それにしても、あの子が男ねえ……」

『だから、あんまりちよつかい出しちゃ駄目だよ？』

「わかつてるわ、君は私のことを一体なんだと思ってるんだい？」

『天災』

「素晴らしい、お友達になりましょう」

下らない言葉の掛け合い。けれど、二人ともそれには意味があると思っているわけではない。ただただ単純に、他人と言葉を交わすことが快感になっていただけだった。

天災は少ない。それこそ、ISコアなど目ではない程に少ない。それゆえに、今まで束はその誕生を感じ取ったことはあっても、出会ったことはなかった。

その矢先に新たな天災が覚醒したのだから、束がそこに手を出すのは至極当たり前のことと言えた。

「ところで、昨日の話だけだ」
『ああ、《亡国機業》^{ファントム・タスク}？ いやー、私の領域に手を出すなんてアホだね、バカだね、どうしようもないクズだねえ。幾ら《彼ら》の影でコソコソやっていたからって、その程度のことをごちらにばれないななんて思っているのだったら、それは因果律への反逆と言ってもいいんだよ』

クスクスと嗤うそれはあまりに狂気染みていて、その様に恋華は頬を吊り上げた。

なんと愉しそうな同類だろう。見ろ、同類。世界はこんなに愉しいぞ。

『襲撃をかけるのは四名、情報はそっちに放り込んだから、あーちやんと一緒に対応してね！』

「え、私殴られたんだけど」

『でも治ったでしょ？ 今の恋華ちゃんなら簡単に治るくせに』

「おいおい、私を見くびるなよ。恋愛ゲージ二六〇〇%なんだぜ？ 首が跳んだって生えてくるね」

誇らしげに首を刎ねるような動作を試みせる恋華。

犬歯を剥き出しに、彼女は嗤う。

「まあいいわ、おっけー。大体把握したから。それじゃあ、また連絡するわね《天災》」

『はいはい。ばいちー《天災》』

ぶつりと通信が途切れ、ノイズだけになったウィンドウを操作して閉じる。

残されたそこには、歪な笑みを浮かべた天災が残された。

「三番テーブルご案内ですー！」
「当店限定ミックスパフェでございますね！　かしこまりました、少々お待ちください！」
「ご来店ありがとうございますー！」

少女たちの明るい声が響く中、私は何とか休みをとることができた。

開店してから数時間、やはり人の出入りは激しく、そして店内の回転もすさまじい。

「鷹月さん、休憩入りますね」

「あ、うん！　お疲れ様ー！」

ぺこりと頭を下げながら、私はメイド服姿のまま教室を出る。

と、そこでは既にチャイナドレス姿のふーちゃん、制服の簪ちゃん
んが待っていた。

「お待たせ、二人とも」

「ラウラは？」

「まだお仕事中。三人で行って来てくれって」
「大変そう……」

ああ、うん。すつごい大変ですとも。

一夏目当てのお客さんが山のように来てる上に、@クルーズの知名度が上乘せされてるから混雑度は三〇〇%。これが丸一日続くとなれば、そりゃあ大変だろう。

私も一時間休んだらまたこの地獄へ逆戻りだ、頑張らねば。

しかも、一夏は先日の一件以来ずっと篝さんと一緒に楯無さんに鍛えられているらしく、全身筋肉痛で尋常でない痛みらしい。ご愁傷様。

そう言えば、一夏は全然戻ってこないなあ……。なにしてるんだろ。

「それにしても、ふーちゃん可愛いねえ」

「ありがと。シニヨンなんて久しぶりに付けたわよ」

「似合ってる……」

「ん、ありがと。それじゃ、とりあえず行きましようか」

「「おー」」

この時間中に、私はふーちゃんと簪ちゃんの二人と学園祭を回る事になっていた。

さて、何処へいこうか。

校舎の外に出て出店を見て回っていると、突然ふーちゃんが目を輝かせる。視線の先にあったのは、透明のビニールが被せられたわたあめだった。

「あ、わたあめー!」

「あ、ちよっと! もう、行こう簪ちゃん」

「うん……」

猛然とダツシュを始めたふーちゃんを追って、私は簪ちゃんの手を取ると走り出す。

すぐそこだというのに止まらない理由はといえば、ふーちゃん
の好物がわたあめだからだね。

追いつくと、既にふーちゃんはわたあめを三つ購入したところだ
った。なんとという早業……。

「はい、二人とも」

「あ、ありがとう」

「ありがとう……、鈴……」

「アタシの奢りだから気にしないで。んーっ、あんまいっ！」

一舐めする度に頬が落ちる様な顔を浮かべ、それはそれは幸せそ
うにわたあめを食べるふーちゃん。まあ、わたあめに限らずこうい
ったふわふわした甘いものはふーちゃんの好みだ。

「あ、簪ちゃん」

「え？」

私の声に反応してこちらを向いた簪ちゃんの、鼻の頭に乗っかっ
ていたわたあめを舌で掬って舐め取る。ん、甘い。
しかし、私もこういうこと慣れてきちゃったなあ……。

「あ、あ、ああっ!？」

「えっと、嫌だった……?」

顔を真っ赤にしながらもぶんぶんと首を横に振る簪ちゃん。
それを見て、ふーちゃんも急いで鼻の頭にわたあめをちょこんと
乗っけると、アピールするようにこちらへ突き出してくる。

「えーっと……」

「んー!」

「……ぺろっ」

まあ、やれってことだろうから。ぺろりと舐め取って、それからこれでいいかとぷーちゃんの方を見やった。うん、いいらしい。

けど、どうせならウラもこれたらよかったのに。今ウラは別のシフトで入ってるから、私と行動を共にすることは出来ないのです。もったいない。

「聞いた？ 生徒会の出し物！」

「聞いた聞いた！ 織斑君が出てるんだって！ 早く見に行こうよ！」

……おい？ 何してるんですかあれは。

「あのー、すみません。その出し物って何処でやってます？」

「え？ ああ、第四アリーナだよ。シンデレラで演劇やるんだって！」

「ありがとうございます」

近くにいた女性とにペコリと頭を下げ、それからこれが誰が原因なのかを思案する。二秒で弾き出せた。

「先日生徒会長から感じたあの感じが、東さんと同様のものだとすれば……」

十中八九これは生徒会長のやったことだろう。

全く、なんちゅうことを……。ただでさえうちは回しづらいつていうのに！

「お姉ちゃん、また何かやらかしてるんだ……」

「で、行くの？」

「もちろん」

とりあえず、何をしているのかを見に行くことに致しましょうか。そしてやってきた第四アリーナ。凄まじい人だかりの中を抜けていくと、そこには王子様スタイルに変身した一夏が立っていた。頭に王冠乗っけて。

「……これ、シンデレラ？」

『否、それは最早名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵を薙ぎ倒し、灰燼を纏うことさえ厭わぬ地上最強の兵士達！ 彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが！ 『灰被り姫』！』

「そうみたいね。設定改悪ってレベルじゃないけど」

「お姉ちゃん……、悪乗りのレベル上がりすぎ……」

ポカーンとする一夏と私。うん、一夏、君の気持ち、今だけは分かる。代弁しよう。

……え？

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！』

放送が続く。

「は、はあっ!?!」

一夏がそう言った直後、一夏の足元で銃弾が爆ぜた。跳弾の仕方

と角度から言ってスナイパーライフル系のはずだ。っていうか、学校内でそれは……、いいのか。IS学園は何処の国でもないんだから。

だからってそれはどうかと思うんだけど!?

『っていうかイヴ! 久しぶりだけどさっきの跳弾角度から射手の位置の割り出し!』

『埋め合わせはまだですかね……。っと、できました。ここから三五度上方、左方五度です』

そこをじつと見つめると……。キラリと光が反射する金髪。まあ、ここであんなことしてるのってセシリアさんしかいないよねえ。

まあ、セシリアさんの腕ならまちがって脳天ぶち抜いたりなんてないだろうし、大丈夫だろう。多分。

なんて言っていると、瞬く間に人が増えていった。どうやら、フリーエントリー組も参入してきたらしい。ちなみに、ラウラも参加していた。なにか考えがあるんだろうと思っっているうちに、一夏が消えた。

「……ねえ、一夏いないわよね」

「いない……。消えた?」

「いや、そんなまさか」

どうせどこかに身を隠しているだけだろうと、笑い飛ばそうとした直後。

アリーナ全体を強烈な爆発音と地鳴りが襲った。

第42話 学園祭（後書き）

香織ちゃんが男だということが恋華にばれました。束ちゃんが問題なしと判断してばらしたただけですが、和解はすぐにされますのでご安心を。

西尾維新成分が入りだしております。苦手な方はご注意ください。

第43話 襲撃？

突然の爆音と共に、そこから中から火の手が上がる。

何が起こったのかを把握しようと周囲を見渡せば、空から三機のI
Sが飛び込んでくるのが見えた。

「あれは……！」

そのうちの一機には、見覚えがあった。臨海学校での事件の折、
私たちが最後に遭遇した謎の機体。

確か、彼女はキティと名乗った。私の、妹だと。

……いや、今はいい。そんなことは。

「ふーちゃん、簪ちゃん！」

「オツケー。避難誘導は先生たちに任せましょ」

「私たちは、あつちを……！」

戦意十分な二人に頷いて、静かに目を閉じる。

「イヴ、行こう」

「はい、カオリ！」

直後、私たち三人は光に包まれたかと思えば、次の瞬間にはそれ
ぞれのISに身を包まれていた。

と、突然通信回線が開いてそこに束ちゃんの顔が映し出される。

「聞こえてるかな、皆？」

「束ちゃん、どうしたの？」

「今そっちで襲撃あったでしょ？ いくくんが狙いみたいなんだけ

ど、そつちは生徒会長さんが片付けるから、皆は他の三機を担当してね!」

「でも、見えただけで三機よ? まだいるの? っていつか、それ一夏が狙われてるってこと!?!」

『まだド素人のうちに白式を奪うつもりなんだろうけど、束さんを出し抜けるとか思ってたら大間違いなんだぜ! とりあえずよろしくね! くれぐれも怪我だけはしないように!』

「わかった……。行つてきます、社長……」

ぶつん、と通信が切れた。

襲撃してきたのは全部で四機、そのうち一機は一夏が狙いだけど、生徒会長が止めるらしい。束ちゃん情報ならほぼ間違いないと言っても大丈夫かな?

けど、一体他の三人はどういう目的で……。まさか攪乱つてだけじゃないよね。

「とにかく、行つてみよう。一機叩くよ!」

「りょーかい!」

「うん……!」

一斉に飛び立ち、シールドの割れたアリーナを越えてその向こう側へ飛ぶ。

先生たちは訓練機に乗って一般客や一般生徒の避難誘導を行っているらしく、その様子が空からも見える。

と、視界の端にこちらへ飛んでくる一機のISが見えた。咄嗟にハイパーセンサーを確認。

『カオリ、所属不明機! エネミーです!』

「ッ! 待ちなさい!」

「あら、可愛い子が三人も。そこを退いてくれないかしら?」

オープンチャンネル
開放通信から聞こえてきたのは、背筋に怖気が走るほど美しい声だった。

ギリツ、と奥歯を食い縛ってそちらを睨みつける。負けるな、気圧されるな。

「ISを解除して、投降して下さい！」

「ふふ、絶対に聞き入れられないと知っていても、そう言うのね？」
「お決まりですから。投降の意味はないんですね？」

「ええ。ないわよ」

答えた瞬間に《夜鷹》を呼び出す。両腕で構えを取る。

それと同時に、ふーちゃんが《双天牙月》を、簪ちゃんが《朱鉄》を呼び出して構える。

にやりと、彼女が笑った。

「だから、墜として通るわね？」

咄嗟に《夜羽》を交差させて銃弾を防いだ。見えなかった。

まるで初めからそこに弾があったように、当たり前のように《夜羽》によって防がれる。いつだ、いつ撃った！？

「あら、いい反応ね」

「はっ！」

コメントしながらも、ふーちゃんの撃ち出している衝撃砲を軽々と避けてみせる。見ていない、感覚だけで避けているのか。

一気に接近を試みてはいるが、その度に牽制するように撃ち出される弾丸を防いでいるせいで今一距離を詰められない。これは、使えないか。

『《ナイトホーク》で仕掛けるよ。援護よろしく』

『了解!』

『わかった……!』

プライベート・チャネル

二人に個人間秘密通信で伝えた後、即座に《夜鷹》の武装特性、《ナイトホーク》を起動させて接近していく。

各種ステルス類はきちんと起動している。偶然でもない限り当たる事は、

「そこね」

「っ!?!」

ないと思っていた。それを嘲笑うように、無数の弾丸が《夜羽》へと撃ちこまれていく。しかも、その合間合間に撃ち込まれる衝撃砲も見えているように避けていつている。

どうということ、何で見えてるの?!

「はああああつ!」

「こっつ……!」

「残念、外れよ?」

狙い澄ました二人の一撃が、スルリと避けられた。

なんだ、この人。当たるどころか、一発もかすらないなんて!

しかも、こっちは下にいる人たちを気にしているからあまり大きな攻撃は行えない。あまりにハンデが大きすぎる。

「そろそろ終わりにしてくれないかしら? 私にもやることがあるのよ」

「もつちよつと構ってもらうわよ!」

「行かせない……！」

「そういうことだから、行かせる訳にはいきません！」

「そう。なら……ここで墜ちなさい！」

ISのスペックは負けていない。少なくとも速度はこちらの方が上だ。けれど、明らかに戦い方は向こうの方が巧かった。

この人、こうした混乱の中での戦い方が分かってる。一体どうすれば……！

「きゃああああ！」

「っ、ふーちゃん！」

「かはっ……！」

「簪ちゃん！」

「さて、次は貴女ね？」

一瞬で二人が倒された。瞬く間にシールドエネルギーが消滅したのが見えていたけど、あれほど苛烈な攻撃をあの一瞬で二度も繰り出すなんて、やっぱり只者じゃなさそうだ。

けど、まあ。二人をやってくれたお礼はしないとね……！

「はあっ！」

「あら、まだやるの？」

「当然！ ウィングビット、《ナイトホーク》！」

一〇基のウィングビットと《夜羽》の武装特性を起動させ、更に接近しながらオールレンジ攻撃を仕掛ける。

やはり向こうはこちらの動きが見えているかのように弾丸を浴びせてくるが、それでも一〇基のビットによる一斉攻撃は防ぎづらいうらしく、若干動きがぎこちなくなっていた。

けれど、これにも死角がある。相手が下方を背にしたら、私は上

空からの攻撃を行えなくなる。彼女がこちらを向いていてくれるからこうして戦えているが、まだ避難が済んでいない下へ行かれればウイングビットは使えない。

恐ろしいことに、彼女はその状況下でビットを狙い撃つだけの余裕を持っていた。ダメージは少ないが、当たる回数は増えてきている。このままではまずい。

だから、その前にケリをつけてやる！

「そこオ！」

「しまったっ！？」

一気に接近し、《夜鷹》を振りぬく。装甲を切り裂いたが、トドメにまでは行かなかつたらしい。向こうはこちらを面白そうに見やっつてから、急加速で私たちの来た方向へと飛んでいってしまった。

「ま、待て！」

「カオリ、危険です！ 今までのダメージが蓄積しているせいで、ウイングビットの制御に支障が出ています！ 一度修復を！」

「……くそっ」

イヴに止められ、パラメータグラフに目をやる。恐ろしいことに《夜羽》とウイングビットの耐久度は二割以下に落ち込んでいた。たった数分の戦闘で、ここまで削られたのか。

「ふーちゃん、簪ちゃん、大丈夫！？」

「こっちは大丈夫よ！ 簪も無事！ あいつは！？」

「ごめん、取り逃がした。一度戻って修復しないと。《夜羽》がぼろぼろだ」

「了解、こっちも修復中よ。降りてきて、簪の『モーティブ』で修復できるって」

「どうやら二人は無事らしく、個人間秘匿通信できちんと応答してくれた。よかった、怪我はないみたい。」

とにかく、《夜羽》を修復するために私は下へ降りることにした。一体、何がどうなってるんだ……。

「ちくしょう、なんなんだクソがつ！」

「そう粗暴な言葉を使うと、品位が疑われるわよ？」

ファントム・タスク
亡国機業実働

部隊、オータムさん？」

「下調べは済んでるってか？ ハッ、上等だ糞ガキ、ぶっ殺してそいつも頂くぜエ！」

へし折られた五本の装甲脚を蹴り飛ばし、場所を確保する。

目の前にいるのは残る三本の装甲脚を背中に背負い、こちらに相対するオータム。背後にいるのは、オータムを警戒している義弟である。あ、いやいや、織斑一夏くん。うん、義弟じゃないね、まだ。けどゆくゆくは千冬さんと結ばれるわけだから、問題ないんじゃないかしら？

……ふう。よし、精神集中。私は出来る子危ない子！

「その前に、私も自己紹介しておきましょうか。名乗りつて大切よ？」

「ああ!？」

「私は《恋愛中毒》の更識楯無。そして私の専用IS、『ミステリアス・レディ』。以後よろしく?」
「けっ、今更名乗りだあ? 舐めてんじゃねえぞ糞ガキイ!」

装甲脚から撃ち出されたBT弾を水で弾き、蛇腹剣である《ラスティ・ネイル》で斬り付ける。はい、これで六本目。

「おいおい、その程度かい? そりゃあないぜ!」
「うるせえって……、言っただらうが!」

一瞬、姿が消える。

その直後、私の上空で大量の弾薬を投下するオータムが見えた。何処に隠し持っていたのやら。

「死ねエエエエ!」
「た、楯無さんっ!」

大量の弾薬が誘爆を引き起こし、瞬く間に私の体を爆発で包んでいく。

傍目から見れば、私はこれで死んだように見えただろう。絶対防御はあるが、ブラックアウトには十分すぎる量の爆発が起きている。まあ、今までの私なら、こうさせる前にしとめるんだらうけどね? 私はそうじゃないわけだ。

「は、ははは! バカが、図に乗るからこうなるんだぜ!」
「おいおい、まさか知らなかったのか?」
「っ……!?!?」

粉塵の中から聞こえる声に、嗤っていたオータムが身構える。

「私は《恋愛中毒》^{ラブジャンキー}なんだけ？ 愛ある限り私は死なねえ、覚えとくといいわよ」
「て、メエ……！……！」

ぽかんとしている一夏クンと、歯を食い縛ってこちらを睨みつけているオータム。

彼女を見据え、言葉を紡ぐ。

「それではとくにご照覧あれ、愛と正義の舞踏会！」

さて、それじゃ始めましょうか。

これも千冬さんのためなものね。

第43話 襲撃？（後書き）

やたらと強いこの人は亡国機業のあの人。

そしてぶっ飛んでいる楯無さん。一夏困惑。

次回も戦闘です。葵の戦闘シーンがやっど………！

「それでは更識を始めよう」

書いてるときにふと言わせたくなった。

このネタでネタ帳に投下するかも。

第44話 襲撃？

更識楯無がオータムを弄んでいた頃、葵は一人『レベル4』以上の権限を持つ物しか通れない扉の前に立っていた。

その手には一振りの刀を持ち、ただひたすらにそこへ至る階段を凝視する。

「……来たか」

呟いた直後、階段が吹き飛んだ。

強烈な爆風にも目を閉じず、飛んできた瓦礫を素手で打ち払ってそこをただ見つめる。

立ち込める粉塵が晴れると、そこには左腕の装甲に一筋の切れ目を入れたISが立っていた。いや、正確には浮いているのだが。

それを見て、葵はようやくかと言わんばかりに刀を鞘から抜き放つ。光が漏れることもなく、気が狂わんばかりの妖気が溢れ出るといふこともなく、それは戒めより解き放たれた。

「久しぶりね、葵ちゃん」

「ああ、久しぶりだな。今はスコールだったか？」

「三年ぶり、と言ったところかしら。びっくりしたわ、まさか貴女ほどの女がこんな箱庭に入っているだなんて」

「事情があるのさ。のっぴきならない、な」

旧知の仲と言った様子で話す二人だったが、既に間合いを目測し、互いの喉笛を掻き切らんと視線を交差させていた。

重苦しいどころでない重圧が歡喜してその場を蹂躪する。威圧感という言葉をちんけに思わせるほどのプレッシャーが、互いから放たれていることを二人は感じた。

けれど、止まらない。

「それで、通してはくれないのでしょうか？」

「無論だ。死合うぞ、スコール……ッ！」

瞬間、刃が交差した。

音も光も、存在すらも置き去りにするような速度で加速した両者はそのままにぶつかり合うと、「ただの刀」と「ISのブレード」が同じだけの金音かなおとで泣き喚く。

一合、二合、更に増える。瞬きの一瞬の間に、五度は打ち合っていた。

しかし、それはほんの序章。体を暖めるために、ただ吹かしているだけに過ぎない。

「やはり、速い！」

「全てを退けるために、私は強くなった！ 心の通っていない木偶を使ったところで、勝ち目などないっ！」

言葉と共に、動作は更に加速する。

目で追うことすら出来なかった刃が、近くの外側に飛び出す。それを、スコールは確かに感じて受け止めていた。

スコールは思案する。目の前の少女は少女ではなく、もし少女と考えれば一瞬で体は赤い霧と消えるだろう。なればこそ、彼女はそれだけの実力を有していながら、今だ本気を出していない。

ISの限界ですら彼女に追いつくには相当な鍛錬が必要だったけれど、今は追いつけている。自らの鍛錬の成果ではなく、彼女に加減されているせいだ。

昔彼女と戦ったときに感じた、いつそ清々しいほどの恐怖を、目の前の迫り来る刃からは感じられない。少女が鈍ったわけではなく、それほどにスコールは目の前の少女、葵に加減されていた。

上段から繰り出される剣戟を受け止めようと構えた直後、あつたはずのそれが消え、なかつたはずの右下半身目掛けての刃が打ち上げられる。

それを左サイドと身を回すことで入れ替えて回避した刹那、今度は自身の背後というありえない場所からの突きがスコールを襲う。

「はあっ！」

気迫と共にブレードを振り下ろし、回避されたと理解する前に刃を返して更に回避方向へ剣を進める。

傍目から見れば異常な光景だっただろう。

ただの鉄の塊であるう日本刀を振るう葵が、最強の兵器と目されるISを駆るスコールを相手に一步も引かぬ、むしろ三步も四歩も踏み入った戦いを繰り広げているのだから。

けれど、スコールにとって見ればそんなことは当たり前のことだった。

彼女は葵のことをそれなりによく知っている。だからこそ、ISを纏って彼女の前に立って尚、警戒を怠らず、一撃の下に沈めるだけの気迫を滾らせていたのだ。

だがしかし、彼女は読み違えた。三年、それだけの期間があつて葵がどれほど生長したのか、その式の最後の空欄、答えの部分を読み間違え、謝った解に導いてしまった。

「くうっ!？」

「まず、一本」

その結果がこれだった。

一瞬の隙を突かれ、あるうことが唯一葵に追いつけたであろう刃を真横から斬り落とされる。

ギリッ、と奥歯を噛み、どうすべきかを頭の中で計算する。しか

し、ブレードを失った今のスコールでは、まず間違いなく向かっていけば殺される。そうなる確信が、スコールにはあった。

手持ちの武装はグレネードランチャーとマシンガン、そして防衛兵装の盾のみ。

すぐさま撤退の二文字を弾き出すと、真っ直ぐな視線にありつたけの敵意と殺意を乗せて葵を見据える。

「さて、どうする？」

「当然、逃げるわ」

言った直後、スコールはグレネードランチャーを狭い通路のそこから中に乱射すると、粉塵の煙幕を作り出し、それを収納クローズすると同時にマシンガンと盾を展開オープン、煙幕の中に弾丸をありつたけ撃ちこんでいく。

そうしながら徐々に上昇していくが、スコールの耳には確かに聞こえていた。

『銃弾を斬り裂いて疾駆する』葵の足音が。

「逃すと思うか？」

左腕で構えていた盾へ衝撃が走ったかと思えば、左腕の装甲ごと盾が斬り落ちされる。

煙を靡かせて跳んでいた葵は、落ちていく盾を踏み台にして更に跳躍を重ね、スコールの目の前へと到達した。

「コアはもらうぞ、スコール！」

「やれるものならねえ！」

言葉と共にマシンガンを乱射するが、その弾丸の全てが刀によって叩き落され、残った弾丸はあろうことか葵が踏み台に使っている。

直後、スコールの首元へと、研ぎ澄まされた刃が迫った。

一方その頃、ラウラ、セシリア、シャルロット、箒の四人は二対四の戦いの最中にいた。

一機は福音事件の折に現れた『灰狼』^{グレイウルフ}、もう一機は、あるうことかイギリスより盗まれたもう一機のB T兵器搭載型IS、『サイレント・ゼフィルス』だった。

「はあああああ！」

「遅いぞ、第四世代！」

「私もおりましてよ！」

『フレキシブル
偏光制御射撃もできないクズが、私の前に立つな！』

戦いの中で四人は、『灰狼』はラウラとシャルロットが、『サイレント・ゼフィルス』はセシリアと箒が相手取るように動いていた。尤も、それが相手に動かさされているのか、相手を自分達が動かしているのか、それが分からないのが気になるどころだったが。

「ちょこまかと………！」

「よく動くねっ！」

「ふふ、オオカミはそう簡単には捕まりませんわよ？」

『灰狼』の方は回避中心での、『サイレント・ゼフィルス』の方

はカウンター中心での戦闘が続いている。

度々互いがすれ違うことはあったが、お互いに気を割いている余裕はなかった。

代表候補生三名と第四世代が揃い、尚且つ二対一と言うこの状況下にあつて、二の側であるラウラたちは圧倒的に追い詰められていた。

「マドカ、墜とさないの？」

「くっ、黙れ！ 私に話しかけるな！」

軽薄な笑いを顔に貼り付け、『灰狼』を駆るキティの言った言葉に、『サイレント・ゼフィルス』を操縦するマドカはイライラしながら吼えた。

先ほどから頭の中をかき回す声に苛立ちながらも、マドカの操縦に危うさは全く感じられず、あまつさえ箒とセシリアの二人は追い詰められてきていた。

「早々に落として戻らせてもらうぞ……！」

「負けるものか……、私だって専用機持ちだ！」

「偏光制御射撃が出来なくても、貴女程度は！」

「吼えるな雑兵が！ 貴様らは地に這いつくばっている！」

六基のビットを繰り出し、更に正確無比な精密射撃を撃ち込んでくる彼女の標的は箒だった。

例え第四世代を持っていても、その操縦技術は恐ろしく拙い。いまだ機体の性能に助けられてばかりの彼女にとって、六基のビットを手足のように使いこなし、その中で更に研ぎ澄まされた射撃を繰り出すマドカはとてつもない強敵だった。

「まずは足をもらうぞ！ そこだっ！」

「ぐっ、しまったっ!?!」

「箒さん!? それ以上はやらせませんわ!」

「ビットも碌に扱えない癖に! 墜ちろっ!」

一撃を受けた箒を見て、激昂したセシリアは咄嗟にビットを繰り出す。

しかし、それは先読みしていたマドカのビットによって撃ち落とされ、抱えていたB Tライフルによって絶対防御を発動させられてしまう。

そのまま二度、三度と撃ち込まれ、セシリアは一瞬でシールドエネルギーをゼロにされてしまった。

「セシリア!? 貴様アアア!」

「動きが直線的だ、ド素人が!」

「がはっ!?!」

突っ込んできた箒へ向けて無造作に弾丸を撃ち放ち、追い討ちにビットから繰り出されたB Tエネルギー弾でシールドエネルギーを削り切る。

一瞬でエネルギーを空にされた箒もまた、戦う力を失いアリーナへと落ちていった。

「キティ、貴様はそこでそいつらと遊んでいる!」

「あら、私を置いていってしまっの?」

「ッ、だ、まれ……! くそっ!」

キティの言葉に一瞬葛藤するような素振りを見せたマドカだったが、そう吐き捨てるとその場から姿を消す。

残されたのは、キティの乗る『灰狼』と、ラウラの乗る『シユヴアルツェア・レーゲン』、シャルロットの乗る『ラファール・リヴ

アイヴ・カスタム?』のみ。

「お仲間が行ってしまったようだ?」

「別にいいわよ、あの子にはあの子のやるべきことがあるもの。それまでは縛らないでいてあげるの」

「どうでもいいけど、投降するか帰るかしてくれないかな?」

「残念、撤退命令出るまで帰れないのよね。うちってほら、上が厳しいから」

まるで世間話でもしているかのような三人だが、その間にも戦いは続いていた。

ラウラの放ったAICをいとも容易く回避してみせると、そのオカミにも似た姿のISを持ってして、両腕に三枚ずつ取り付けられた刃で次々にシャルロットの放った弾丸を打ち払っていく。

それを行いなながらも、ラウラのレールカノンを見切ってはそれすら回避し、隙間を縫って針を刺すように三角錐状のBTエネルギーを撃ち出してくる。

「そろそろ飽きてきたわ……」

「じゃあ、墜ちてくれないっ?」

「それはあ……、む、り 《ウルフズ》、武装特性発動! 《狼^{ウル}の咆哮^{フ・ハウリング}》!」

叫んだ瞬間、甲高い共鳴音が《灰狼》の両腕に取り付けられた刃から発せられる。

耳を劈く^{しん}ようなその音が鳴り響くうちに、その刃は徐々に長さを伸ばしていった。

それを見たラウラは、信じられないような顔でそれを見た。

「バカな、武装特性だと!」

「香織と簪ちゃんだけじゃなかったの!？」

「あら、お兄様たちだけが使えるわけではありませんのよ? この子は私が生み出した娘、使えて当たり前ですわ」

「くっ……! これはまずいか……!」

頬ずりするように刃に顔を近づけてウツトリと眺めていたキティだったが、突如として不満そうな顔に戻った。

そして大きく溜め息をつく、刃を元に戻して詰まらなそうに口を開いた。

「どうやら、作戦は失敗のようですね。はあ……。私はこれでお暇させていただきます、さようなら」

「な、逃さないよ!」

「よせシャルロット! 今追ってもやられるだけだ」

「……くっ」

先ほどまでの攻勢が嘘だったかのように静かとなった空で、ラウラとシャルロットは静かに唇を噛んだ。

第44話 襲撃 ? (後書き)

まだまだ続くよ襲撃事件。

オータムとスコールの顛末は次回に持ち越し。あれ、主人公出てない。

第45話 襲撃 ? そして……?

「コアはもらうぞ、スコール!」

「やれるものならねえ!」

マシンガンの弾を裂き、踏み台にしてその首目掛け刃を振るう。
その刹那、

「ッ、くっ!」

葵を狙って放たれた無数のBTエネルギー弾を刀で弾き、身を回転させて回避する。

傷は負わなかったが、そのせいで距離を随分と離されてしまった。軽く舌打ちしながら空中で体を捻り、校舎の屋上へと着地する。既に一般生徒や客は避難を完了しているらしく、屋上に人気はなかった。

「ちっ、外したか!」

「エム!? 貴女なぜここに!?!」

「貴様の方があの猫科の地球外生命体よりよほどマシだ! 貴様こそ、あんな生身の女一人に何を苦戦している!」

「彼女を普通の人間だと思っでは駄目、今回は退くわよ」

「なにっ!? 何故だ!」

「いいから言う事を聞いてちょうだい。これは命令よ」

しばらく迷っていたマドカだったが、仕方ないと溜め息をついてからチラリとアリーナ側を見る。

「貴様は先に行っている。私はオータムを拾ってくる。大方負けて

いる頃だろっ」

「そうね……。お願いするわ」

エムは小さく頷き、一度葵の方へ視線を向けたかと思うと、そのままアリーナの方へと飛び去った。

「あら、見逃してくれるの？」

「もうそっちを追う手段がないからな。今日のところは見逃すさ」

「……ねえ、葵。本当にこちらに来る気はない？ 貴女をこんなところにとどめてしまっ世界なら……」

猫なで声でスコールは葵にそう言葉を掛ける。

しかし、葵は静かに首を横に振った。

「くどい、言った筈だ。私の答えは三年前から変わっていない」
「……そう」

スコールは酷く残念そうにそう言つと、ゆっくりとその場を離れていく。

その様子を、葵はどこか悲しそうな瞳で見つめていた。

「ガッ!？」

水を纏ったランスが。『アラクネ』の装甲を剥ぎ取っていく。楯無は口元にくつきりと笑みを浮かべながら、オータムへの猛攻を続けていた。

その圧倒的な力に、一夏は驚愕から目を見開いてそれを見つめている。今まで訓練の相手にはなっていたが、きちんと相對したことのなかった彼女の強さに、驚きを隠せないでいた。

一方のオータムもまた、その強さに驚嘆していた。

IS学園の生徒会長が強いとは聞いていたが、これほど人間離れした強さだとは聞いていない。まるで人の皮を被った化け物と相對しているような感覚だった。

しかし、彼女も秘密結社の実働部隊の端くれであり、まずは生きて戻れることを最優先に考えることにした。

「ク、オラア！」

「おっと」

投擲された二本のカタールを水のヴェールで弾いた際に、オータムは懐から咄嗟に四〇センチほどの四足の機械を楯無の方へと放り投げる。

それは空中で器用に開くと、楯無の胸元へと装着され、がっちりと体を拘束した。

「あらら？」

「はっ、本当は白式の方に使う予定だったが……、まあいい。 teme のISは頂けぜ！」

「え？ きゃああああああっ！」

オータムの言葉が終わった直後、楯無を電撃と激痛が襲った。

それは胸元の装置から発せられているらしく、激痛と共に徐々にISが解除され始める。

「楯無さん！ くそ、白式！」

「おせえんだよガキがっ！ おラァ！」

「ぐはっ！」

楯無を助けようと、『白式』を展開しようとした一夏をオータムが蹴り飛ばす。一夏の体は軽々と吹き飛び、ロッカーへと叩きつけられた。

その最中、楯無が動いた。ベキリ、と不穏な音を響かせて。

「あ？」

「痛いわ、すっごい痛い。痛くて痛くて泣いちゃいそうなんだけど、ねえそこるところどう思う？」

「テメエ、なんで動ける！？ 剥離材はちゃんと機能してるはず

！？」

にい、と楯無は口を三日月に裂いて嗤う。

楯無が普通の最強であったなら、既に勝負は決していた。オータムの勝ちとして終わっていただろう。

だがしかし、そうではないのが現実だった。

「痛いのは千冬さんに甘えれば治るけどお……。会長的には貴女をぶっ潰しておいた方がいいよね？ ということで大人しく捕縛されなさい、愛とか正義とかその辺の事情を考慮して」

「な、なんで動けるんだよテメエ！？」

「さっきも言ったじゃねーか、私は愛ある限り死なねえ、つてよ。

私は千冬さんへの愛と自己愛の塊だぜ？」

「わけわかんねえこと、言ってんじゃねえ！」

にやにやと嗤いながら言う楯無を、オータムはどこかおぞましい

気配を感じながら睨みつけた。

果たして、彼女がもう少し愚かしければ、あるいはもう少しばかりの思慮があつたならば、彼女もその結末になることはなかっただろう。

楯無はランスを量子変換して収納すると、ヴェールを作り出していたアクアクリスタルを一箇所に集める。

そのままナノマシンによって操られた水で胸部に取り付けられた剥離材を包むと、ベキベキと水圧で押し潰し始めた。

ナノマシンによって操作されているそれはプレス機のような役割も果たすことが出来る。それでもつたつた数秒のうちに剥離材をペシャンコのブロックに変えてしまった楯無は、それを摘み上げると一夏の方へと放った。

「一夏クン、それ持っててね。あとで調べるから」

「は、はい！」

「じゃあとりあえず……、君のIS頂くね」

「ざっけんじゃ　！」

言った直後、鋭く圧縮された水がオータムへと撃ち出され、四肢を壁へ固定する。

たつたそれだけで動けなくなったオータムへと近づき、楯無は静かに片腕をオータムへ翳した。

「包め、アルカエスト」

「ッ!?　ガ、ゴハアッ!?」

翳した手の平を伝い、大量の水がオータムを包み込む。かと思いきや、恐ろしげなしゅうしゅうという音を立てて装甲を溶かし始めた。

どろどろと溶けていく装甲と、削られていくシールドエネルギー

に、オータムは今度こそ驚愕に目を見開いてパラメータを見続ける。やがて完全に融解した装甲は消失し、強制的にISは解除される。ぼとつ、と待機状態である指輪に戻った『アラクネ』を拾い上げると、楯無は興味を失ったようにオータムを殴りつけた。

「がつ……！」

「はい、これでしゅーりょー。つまんねーし意外性ゼロだな、何か奥の手とか、こんなこともあるうかと！ とかないの？」

「た、楯無さん、そいつ……」

「ああ、死んでないわよ。とりあえずISは回収したし……」

「ではそいつだけでも返してもらおうか」

壊れた壁から飛び込んできたのは、『サイレント・ゼフィールス』だった。

彼女は倒れているオータムの首を掴むと、顔の見えないバイザー状のその向こう側から楯無たちを睨みつけ、それから一瞬でそこから姿を消す。

嵐のような戦闘が、ようやく終わった。

戦いが終わった後、私達専用機持ちは生徒会室へと集められていた。

無論、一夏たちも一緒である。あと生徒会長たちも。

「で、会長。疲れている私たちをここに集めて何をするつもりですか？」

「香織ちゃん、まずは言っちゃーよ。今説明してくれるわ」

してくれる、という言葉に疑問を抱いたものの、説明はあるという事で納得しておくことにした。

疲れた体を椅子に預け、小さく溜め息を吐き出す。

と、全員に見えるほど大きな仮想ディスプレイが開き、そこにウサ耳の女性が映し出された。

「東ちゃん!？」

『はろーはろー、皆無事みたいで何よりだね！ 恋華ちゃん、報告ヨロー』

「はいはい 被害は建築物への影響以外なし、そっちも大した被害じゃないわ。あと、オータムって奴のISを剥ぎ取ったわ」

『オータムって言うと、アラクネだね。アメリカの第二世代型IS』

手元のディスプレイをいじくりながら、東ちゃんが言った。

「というか、生徒会長と東ちゃんってこんなに仲良かったの？」

「というか面識あったの？ しかも別の名前で呼んでるし。」

『おや、どうしたのだい香織ちゃん？ 何か疑問でも？』

「あの、会長と東ちゃんって、面識あったの？」

『なるほど、言ってなかったね。私は『天災』という種類に属しているね、恋華ちゃんも同じ存在になったから、こうして仲良くしてるのだよ』

「『天災』は、まあそういうものだと思ってくれればいいわ。理不尽の塊。そちらのお姉さんには、敵わないけどねー」

その生徒会長の言葉に、壁にもたれかかって目を瞑っていた葵は

小さく頬を吊り上げた。

「あれほど死に急いでいた小娘とは思えないわね。立ち直った代わり
に人をやめたか」

「いい気分よ？ 千冬さんの膝枕」

「……おい一之瀬姉、コイツを退かせ」

「……えー、現在会長は千冬さんの膝の上に頭を乗せています。俗
に言う膝枕だね。」

会長つてこつという感じじゃなかったような……？

「面倒なので嫌です。小娘、お前の名は？」

「《恋愛中毒》^{ラブジャンキー}、よろしくね？」

「ふん。で、本名が恋華ね。暗部が本名を明かしてもいいの？」

「いいのよ別に。私にとつて名前は千冬さんに呼ばれるための記号
であつて、知られたり教えたりすることで不利益を被るものではないわ。
公の場では楯無で行くけど」

そ、そういうものなのかな。

まあそういうものだとな納得しておこう。理不尽の塊にならば毎日
会つていた訳だし。

「『そうそう、ちなみに私は《人類最低》だよ、あらためてよろしく
ね、《無色主義者》^{ノンカラー主義者}』」

「……古臭い名前を穿り返すな、捻じ切るぞ《人類最低》」

ぞくりと、久しぶりにお姉ちゃんの殺意を感じた。

ああ、お姉ちゃんの『二つ名』か。しかもそれつてかなり最初の
頃のものだね。よく調べて出てきたもんだ。

『あはは、ごめんねあーちゃん。さて、それで話を戻すけど。君たち皆には、もつと強くなつてもらわないと。亡国機業がこうして動き出している以上、いっくんというイレギュラー要素を狙っているのはまず間違いないから』

「俺が……。それにあいつら、昔の俺の誘拐事件の時も！」

『そう。ちよつと調べてみたけど、いっくんの誘拐を頼んだのはドイツみたい。全ては筋書き通り、自国に縛り付けてちーちゃんのデータ採取と、自軍IS部隊の強化を目論んでたらしいね』

「なつ、私の祖国がそんなことを……。!?」

一夏の誘拐事件は、ラウラにも関係してくることだ。それが、ドイツの仕込んだ舞台の上で踊っていただけとは。

けれど、亡国機業はただ利用されるだけの相手じゃない。実際に戦つてみてそう感じた。

『おそらく連中は、誘拐したときにいっくんのデータを採ったんじゃないかな。だから、いっくんがISを動かせるという何らかの確証を持っていた。そういうことだと思ふんだ』

「ねえ束ちゃん、結局連中はなにがしたいわけ？」

『それがねえ……。この束さんにも分からないんだ。データ、紙類はおろか、音声にだって組織の目的なんて一言も出てない。どうやって統率してるのかすら不明だよ。組織の規模もね』

ナターシャさんの言葉に、やれやれと言った様子で返す束ちゃん。亡国機業……。得体の知れない相手であることに間違いはなさそうだ。

とそのとき、そろーつと手を上げる人が一人。

「あー……」

「ん、なにかなシャルロットちゃん？」

「僕とラウラはあの『灰狼』^{グレイウルフ}って機体と戦ったんです。そのときに、その操縦者が「お兄様」って……。臨海学校の時にもあったし、それは香織へ向けて言ってるみたいでした。あれは一体……」

「……そう言えば、香織の姿を大浴場で見かけたことはないな」

「確かに、言われて見ればそうでしたわ。香織さん、何かお風呂に入れない事情でも？」

おいーなんか変なところから綻び始めてるんだけどー。まさかこのタイミングで男バレの危機来るとは思わなかったわー。

ちなみに、疑惑の目を向けているのは一夏、篝さん、セシリアさん、シャルロットさんの四名。他は皆私が男だっことを知って……。

……会長知らないじゃん。

「そう言えば香織、お前ってあの戦いの時自分のことを僕って言うてたよな。普段は私なのに」

超絶鈍感朴念神一夏君ー！ どうして君はどうでもいいところでその無駄な記憶力が活用されるのー！？ いまだにISの専門用語は怪しいところがあるというのに何故なのー！？

「えっと、それは……」

「……もしかして香織って、男の子なの？」

姉さん、ピンチです。

第45話 襲撃？そして……？（後書き）

ということでは香織ピンチ。

葵の人外っぷりと恋華の再起、おたのしみいただけましたでしょうか。

次回からはオリジナル展開が加速！そしてとつとつと六巻買わないと進められなくなる！俺もピンチ！

第46話 泣き落とせ！

どうも、香織です。

男性疑惑浮上しました。まあ、むしろ今までばれなかったことの方がすごいと思うんだけど。

今までがんばってきた身としては、ここは何とか切り抜けたところだ。なのでなんとかしてみよう。

「……それって、私が可愛くないってことですか？ 男臭いってことですか!？」

「えっ!?! い、いや、そういうことを言ってるんじゃないからね!

? その

「ひどいです! シャルロットさんは私のこと男だと思ってたんですね!？」

ものすごい踏ん張って涙を溢れさせながら、シャルロットさんに詰め寄ってそう叫ぶ。

ちなみにこれ、中学校のときにも一回やりました。相手は泣いて謝った。嫌な思い出だけでも、使わねば切り抜けられないだろう。

「ち、違うの!?!」

「違いますっ! ひどい、ひどすぎますっ!」

ぱっ、と効果音がつきそうなくらいの勢いで生徒会室を飛び出し、屋上までひた走る。

『イヴ、誰か追いかけてきてる?』

『鈴が来ています。他には誰も』

よかった、これで一夏たちの誰かが来てたらアウトだったかもしれないし。

というかあれやるのすっごい疲れるんだよね。もう涙かれました、今日はもう出ません。出したくもないし。

とりあえず屋上でぺたりと座り込むと、大きく息を吐き出した。すでに服は着替えているから、普段どおりの制服姿だ。

「香織、お疲れ」

「あ、ふーちゃん。参ったよ、まさかあそこであればかけるなんて。皆は？」

「千冬さんに説教されてるわ。襲撃事件については、今度会社に行ったときにまた話し合っつて」

「わかったー」

隣に座り込んだふーちゃんにそう返しながら、大きく溜息、というか息を吐き出した。

こうしてボーっとしてしていると、襲撃なんてなかったみたいに感じるねえ。

「あー、かおりんと鈴ちゃんだあー」

「のほほんさん、今朝ぶりですね」

「相変わらずゆったりしてるわねー」

「あははー、とーうー」

どこからか現れたのほほんさんが、突然私とふーちゃんのお腹の上に乗っかってきた。ちょうど布団に寝るようにつつ伏せに。しかも頭は私の方に。

のほほんさんって軽いなあ。二人で支えてるみたいなものだから余計だろっけど。

「とりあえず、おかえりー」

「はい、ただいま」

「ただいまー」

柔らかな笑い顔ののほほんさんを眺めながら、私はその言葉を返す。

あー……、平和っていいなあ。

「なんだかかおりんも鈴ちゃんも、いつつも何かに巻き込まれてるねえー」

それはいわないでくださいのほほんさん。自分でもなぜなのかわからないんですから。

いや、まあそういう人種ばかり集まっているからだと思うんですけど。そういう場に行くって選んだのも私ですけどね。

「そういう体質じゃない？」

「うわーいやだー」

「とにかく、今日も生きて帰ってこれてよかったって、感じかなー」

……ほんと、そつだよなあー……。

「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、

投票結果の発表を始めます」

時は流れて翌日。

出し物への投票の集計も完了したらしく、恋華^{れんげ}さんの司会で集会が進行していく。

ちなみに、昨日の一件については翌朝に一夏たちから謝罪があったので水に流しました。これからはあまり疑われることもないだろう。大浴場に出てこないのは恥ずかしいからだということを押しました！ ええ！

「一位は、生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「……え？」

……えーつと、シンデレラってそんな好評だったの？ というかあんな騒動あったのに投票ってちゃんとできたんだ。まあ、彼女たちが撤退してからも一応学園祭は続いてたし、いいのかな。

「卑怯！ ずるい！ イカサマ！」

「なんで生徒会なのよ！ おかしいわよ！」

「私たちががんばったのに！」

やんややんやと声を上げる生徒たちを手で制し、恋華さんはものすつごくめんどくさそうに言葉を続けた。

あ、ちなみに恋華さんって名前は恋華さん直々に「呼んでいいよー」とオツケーができました。恋華さんいわく「恩人の妹さんだからね！」だそうです。お姉ちゃん何したの……！？

「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意と言えるわね」

それって生徒側が馬鹿なだけじゃないかな。

部の利益より自分の利益を優先させてしまつてこうなるのだね。周りを見て行動しましょう。

けれどそれでもブーイングしたくなってしまうのが人の性、先ほどよりは静かになっていただけ、それでも声はやまなかった。

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏君は、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

「ま、まあ、それなら……」

「し、仕方ないわね。納得してあげましょうか」

「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタね！」

「じゃあまずはサッカー部に来てもらわないと！」

「何言つてんのよ、ラクロス部の方が先なんだから！」

「料理部もいますよ〜」

「はい！ はいはい！ 茶道部ここです！」

「剣道部は、まあ二番に来てくれればいいですよ？」

「柔道部！ 寝技、あるよ！」

「それでは、特に問題もないようなので、織斑一夏くんは生徒会へ所属、以後は私の指示に従ってもらいます」

パンパン、と恋華さんがそう締めた。

一夏、大変だね……。

かくして大変なことになった一夏を眺めていると、クラスに戻る途中でナターシャさんがちよいちよい、と手招きしていた。

「えっと、なんですかナターシャ先生？」

「はい、恋華ちゃんの番号。渡してくれって頼まれたの。それと、昨日はお疲れ様。助けに入れなくてごめんね、ちよっと別行動して

「だから」

そういつてナターシャさんに渡されたのは、小さなデータチップだった。

それをポケットにしまいこむと、ナターシャさんは既に消えた後でした。……私の周囲の年上の人間って、何で半分人間やめてるんだろう。

ってというか別行動って、何してたんですかナターシャさん。

「んー、それはひ・み・つ」

「えー」

「いい女には秘密が多いものよ」

「ってというか一瞬で消えてまた戻ってきたりしないでください。物理法則に従って動いてください」

「はいはい。じゃーねー」

そしてまた消えるナターシャさん。なぜだ、なぜうちの人たちは

……！

……いいや、考えても仕方ないし。

などと考えながら廊下を歩いていると突然端末に連絡が。ちなみに今日は集会だけでお休みです。昨日が平日で学園祭だったから、振り替え休日ってやつだね。

「はい、もしもし」

『もしもしー、恋華ちゃんだけどー』

「ああ、会長。私これの番号教えましたっけ……？」

『ウサギさんから聞いたのよ！ちなみにあなたが男だったことも知ってるわ！ばらす気はないから安心してねー』

……ばれてたあああ！？

まっつて、つてことは恋華さんもこっちの協力者になってくれるの？ お姉ちゃんとの仲とかいろいろ大丈夫？

『これだと話せないこととかもあるから、今日の夜、八時ぐらいに生徒会室に来てちょうだいな』

「え？ え、ちよつとまっ」

ぶつり。

……世の中つて、忙しいね。

「はい、夜でーす」

「香織……大丈夫……？」

「ああうん、大丈夫」

最近なんだか疲れ気味なんだよねえ……。

寮を出るところで簪ちゃんと会ったので、簪ちゃんと二人で生徒会室へと向かっております。

つてーか何で夜に呼び出すのかなあ……。ほんとに。

「えっと、ノックした方がいいよね」

「……うん」

コンコン、と大きな扉をノックすると、中からどうぞ、と声がか

かった。うん、恋華さんの声だ。

「失礼します」

「します……」

中に入ると、生徒会長にお姉ちゃんが……、お姉ちゃん？ あれ？
あとナターシャさんもいるし。

「なんでお姉ちゃんとナターシャ先生がここに？」

「仲直りも兼ねて、話の翻訳にね」

「私顧問だから、生徒会の」

「は、はあ……」

「まーまー、座って座って。ほら簪ちゃんも！」

促されるままに、私と簪ちゃんはペタリとパイプ椅子に座り込む。
机の向かい側に恋華さんが座り、その横にナターシャさんが立っ
て、私たちの側にはお姉ちゃんが立っているような形になった。

「で、話とは……？」

「うん、一夏くんにはもう話したんだけど、一応これ話しといたほ
うがいいかなーと思って。私たち更識家は、古くから裏の世界で暗
躍する暗部に対抗する、専門の組織、いわば暗部用の暗部としての
役割を持っているわ。私はその一七代目当主よ」

あ、恋華さんがまじめだ。

って、暗部？ 暗部……、よくわからないね。

「つまり、ヤクザよ」

「なるほど」

「違っわよう!?!」

「でもあなたが間違っではない……」

ってことは、恋華さんはヤクザの親分さんなのか。すごいなあ。

「ま、冗談だけど。一般人に被害が及ばないよう、また他の暗部に情報を取られないようにしている、いわば現代版忍者って所ね」

「あー、なんとなくわかった気がする」

「……まあその説明でいいか。一応私はそういう役回りもあるから何か困ったことがあればこっちにも相談してもらっていいわよ。ウサギさんと他ならぬ千冬さんの頼みだし」

恋華さんって、千冬さん大好きなのかな。すごい押ししてくるけど。というか簪ちゃん、その「うっせええ……」って目やめない？怖いよ。

「そういうことだから、私たちバインド・カンパニーとも共闘することがあるってことは覚えておいてね、香織君」

「あ、はい。けど、なんだか話が大きくなってきましたね」

「心配ないわ、ここにはほとんど世界最強が揃っているんだし。不本意ながら生徒会長も役に立ちそうだからね」

「あっ、ひっどーい！ 恋華ちゃん傷ついちゃったなあー……」

「じゃあ織斑先生のところにもいってくれば？」

「オーケー！ じゃあ戸締りよろし」

く、まで言わずに恋華さんは扉から駆け出していった。寮の方向に。

……急展開過ぎませんか、これ。さすがに疲れた。

「……ガンバ」

簪ちゃん、その優しさが痛いんです。

第46話 泣き落とせ！（後書き）

ということ、若干疲れちゃった香織ちゃん。
いろいろな人が暗躍し始めて、私も混乱し始めました。

第47話 枷

「一之瀬」

「なんです、織斑先生？」

あの事件から数日が経った日曜日、私用で校舎を訪れていた私と葵は、スーツ姿の織斑先生に出くわした。

「今暇か？」

「まあ、やることは特にありませんが」

「ではちよつとこい。模擬戦だ」

「……いやいやいやいや。話が見えないんですが」

何だこの人、脳筋にしか通じないような会話方法を選択するな。私は脳筋じゃないぞ。

いろいろやることもあるだろうに、なぜ今模擬戦なんだ？

「お前の肉体スペックは私を超えていることはわかったが、ISでどれほど戦えるのかを知りたい。この学園でお前の相手になるのは私くらいだろうからな」

「それを今やる理由は？」

「先日の襲撃事件も踏まえて、この学園の戦力を明確化させておきたい。いざというときに複数で攻め込まれて、一箇所の戦力が足りませんでした、では話にならないからな」

まあ、理由としては正しいだろうけど……。だからといってせつかくの休みを……。

『まあまあ、やってあげてよーちゃん！』

「たっちゃん、するつと出てくるのってどうかな？」

突然目の前に開かれた仮想ディスプレイにそう突っ込む。本当にどこにでも出てくるな、たっちゃん。まあ天災ってそういうものだから慣れてるけど。

『ごみーん　でさ、一応こっちのデータ採りもしたいし、どうかな？』

「……まあ、そういうことなら。それで、どこでやるんです？」

そしてたっちゃん、てへぺろするな。それは君の妹の役目だ。

……はっ、私はいったい何を……。

「ああ、第一アリーナだ。今日はちょうど誰も使っていないからな」

「わかりました。ISはどっちを？」

「私は『打鉄』を使う。お前はどっする？」

「では私も『打鉄』で」

「わかった。ではいくか」

そんなわけでアリーナへ。

お互いISスーツに着替え、訓練機の『打鉄』を身に纏ってアリーナの中央に向かい合って立つ。

ちなみにたっちゃんの映ったディスプレイはすでに消えているが、アリーナの監視カメラでモニタリングしてるんだろう。あとは、この『打鉄』にハッキングしてデータ盗んでるか、コアネットワークから直接データもらってるか。どれもあり得るからすごいな……。

「準備はいいか？」

「はい。ルールはどうします？」

「シールドエネルギーが尽きるか、どちらかのギブアップで終了だ。

システム、カウントダウン」

カウントダウンを開始します。戦闘開始まで、五、四、三

……

管制システムの機械的な音声が響き、今までの暖かな雰囲気が消える。

そこにあるのは、互いの隙を見出し、鋭く尖った一撃を加えんと牙を研ぐ、二人の闘志。

二、一、戦闘開始

言葉の意味が伝わる前に私と彼女は地を蹴った。

一息で音速を超えて斬り込んだ互いの刃がぶつかり合い、大きく甲高い金音を奏でる。

なるほど、やはりISでは全力を出し切れないか。一瞬、極超音速を越えさせようかとしてみたが、専用機でもないこれでは間違いなく耐え切れないだろうと思いやめた。一撃で自分のISを大破させました、となれば少々カッコがつかないだろう。

「はっ！」

考えながらも、動くことはやめない。壊れない程度に力を制御して刃を振るい、織斑先生の『打鉄』を破壊しないようにする。

繰り出される刃を次々に受け止めると、今度はこちらから打ち込んでいく。

織斑先生の打ち込みの速度は一秒間にせいぜい三回、これに耐えられるのなら、もう少し無理してもISに影響はないだろう。

「では、いきます」

宣言するようにそう言つて、手に持った刀を片手で打ち込んでいく。一秒間に二三回、無理をすれば倍以上だが、それをする必要はないだろう。というかそれをやったらISがもたない。

「くっ！」

織斑先生は何とか凌いでいたが、やがて凌ぎきれなくなったのかバックステップでこちらから距離をとった。そこで私もようやく刃を仕舞う。

『打鉄』の装備は近接用ブレードと短距離射撃用拳銃のみ、そして離れた織斑先生の手にはそのハンドガンが握られていた。

「まさか剣で負けるとはな。いくぞっ！」

「律儀に宣言しなくていいのに……」

ぼやきつつ、ハンドガンの銃口から吐き出される弾丸をブレードで斬り落としていく。射撃速度はまあまあだが、この学園の誰よりも精確に狙いをつけていることだろう。しかも、三分の一ほどは意図的に位置をずらした弾丸を撃ち込んできている。

「なら、私もこっちで対応しましょうか」

片手でブレードを操りながら、もう片方の手にハンドガンを呼び出し、そっち側を前にすると同時に半身を後ろに下げ、こちらへ迫りくる弾丸に狙いをつけ、引き金を引く。

次から次へと弾丸を弾丸で撃ち潰しながら、時折その隙間を縫って本体の織斑先生に弾丸を放っていく。

「やれるだろうと思つたが、やはり相殺してくるか」

「この大きさの弾丸なら数百倍余裕ですね」

「私も斬ることはできるが、撃ち落すのは専門外だな」

「で、これでは決着がつかないのですか」

「……よし、私が許可を出す。全力で戦え。束、聞こえてるな？」

打鉄が大破した場合は今晚修復だ、出て来い」

『私を鼻で使えるのはちーちゃんくらいだねっ！ まあこっちもデータ採りできるし、その代金分は働いてあげましょうっ！ にひひーっ』

音声だけのたっちゃんに苦笑いを浮かべながら、私はハンドガンを^{クロス}収納する。

次の瞬間には、残った弾丸をすべてブレードの腹で叩き落とし、織斑先生の懐に飛び込んでいた。

「では、失礼っ」

ブレードを切り返すこと、一八回。一秒半程度で繰り出したその連続攻撃に、織斑先生のISのシールドエネルギーは一瞬で消え去る。ついでに私の打鉄もブザー音とともに停止した。

……やっぱり無理だったか。一五回辺りで限界らしい。やはりISは枷にしかならないか。少なくとも、このISでは。

「……ふう。やはり私でも勝てないか。ISの反応速度を超えると
いうのは滅茶苦茶だな」

「織斑先生こそ、ISをつけない方が強いでしょう？ 少なくとも
訓練用では枷にしかならないはず」

「さてな。束、データ整理しながらでいいからとつと来い」

『はいはい。あーちゃん、今度会社に来るときまでに武装作っておくからねん！』

「ええ、よろしくね」

だった。腕力、脚力、握力、人間のスペックとしてはあり得ない数値ばかりが並び、そしてそれすらも手加減したものだ知っている束は、その数値で扱える武装の二段階ほど上の武装を構想していた。ハルは束の言葉通りにデータを引き出すと、彼女の前に羅列していく。

「やっぱり身に着けるタイプがいいよねとすると籠手とか甲冑とかでもそれだと武装って言うか防御用って感じだから剣とかにしとこうかなでもでも斧とか槍とかでもいいよねぐぬぬ決めづらいよあそつだ決められないなら全部作ってしまえばいいじゃないの精神が私にはあるじゃない的な！ということではハル、全部作るよ！」

『はい！』

高らかに宣言すると、彼女はハルとともに製作に取り掛かった。人外仕様の武装一覧が作られるまで、もう少しである。

さて寝ようかとしたとき、私の携帯端末に着信があった。こんにちは、鈴よ。ちなみにこの端末は束社長お手製の超高性能端末で、携帯より便利なのに携帯より小型。しかも深海だろうと大気圏外だろうと使用可能というスペシャル仕様よ。

「もしもし」

『もしもし、ふうあん・りんいん鳳鈴音元候補生ですか？』

端末から聞こえてきたのは、懐かしい女性の声。中国の代表候補生の管理をしている楊麗々さん^{ヤン・レイレイ}だった。

「あれ、楊候補生管理官。なんで突然？」

『番号は変えていなかったようですが。そろそろ『キャノンボール・ファスト』の時期でしょう、こちらで開発途中だった高機動パッケージのデータを送ります』

「でも、私もう中国所属じゃ」

『これは貴女の『甲籠』^{シエンロン}専用のパッケージです。貴女の所の社長なら簡単に完成させるでしょう。理由は知りませんが、上層部の指示ですから』

今まではガツチガチの軍人さんだと思ってたけど、彼女の言葉にどこか柔らかな響きがあった。

……なんだか、印象と違うかも。

『それに』

一度言葉を区切って、楊さんが続ける。

『貴女の事は、嫌いではありませんでした。指示にはきちんと従い、自分を消さず、決して天狗になることもない。今まで指導してきた者の中で最上の部類に入るでしょう』

「楊さん……」

『……私情が入ってしまいました。ともかく、頑張りなさい。鳳鈴音』

「楊さっ」

ぶつつ、と通信が切れた。

……楊さん、意外と私のこと良く見てくれてたんだな。向こうに
いるときには怖いってイメージしかなかったから。
ともかく、キャノンボール・ファストに向けて、東社長にこれを
仕上げてもらおう。

端末で回線を開き、私はメール画面を開いた。

第47話 枷（後書き）

お姉ちゃんががんばる、東さん大喜び、楊さんデレる。以上の三本でお送りしました。

あれ、主人公出てないな。

次回から本格的に6巻の内容に入ります。今日買えたからね！

第48話 身支度（前書き）

やべえ、六巻って意外と内容薄い……？

第48話 身支度

「はい、それでは皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

我がクラスの副担任、山田真耶先生の声で、今日の授業は始まった。

ちなみに、今朝はセシリアさんが一夏の部屋に泊まったとかで大荒れだったのですよ。一夏はぐったり、セシリアさんはお肌つるつる。まあ、そういう行為には及んでないでしょう。一夏があれだから。うん。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週言いましたね？ それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

山田先生の言葉でそこを見ると、一夏とセシリアさんが立っていた。

「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

四基のBT射撃用ビットと二基のミサイルビットを全て脚部パーツに連結して、スラスターとして使用することで高速機動を実現させているらしい。さながら、それはスカートのように見えてなかなかにお洒落である。ところどころゴツゴツしていたり尖っていたりするけど。

セシリアさんはあの襲撃事件のときに『サイレント・ゼフィルス』と戦って、負けてしまったらしい。

サイレント・ゼフィールス、元々はBT兵装を積んだイギリスの第三世代型ISで、ブルー・ティアーズのデータを基盤とした二号機でもある。そのサイレント・ゼフィールスの操縦者が使いこなして見せた偏光制御射撃が使えないと悩んでいるらしい。

私は、たぶん一生しない悩みだろうなあ。BTエネルギーはよくわからないし。

「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑君！ この二人に一周して来てもらいましゅー！」

クラスメイトから飛んでくるがんばれーの声援に、二人は軽く手を上げて応えた。

少しして、山田先生がフラッグを掲げる。

「では、……三、二、一、ゴー！」

フラッグが振り下ろされると同時に二人が一気に飛翔し、そこから加速して音速を超える。

瞬く間に小さくなっていく二人を眺めていると、ちよんちよんと腕を引かれた。振り向くと、そこにはラウラの姿が。

『どうしたの？』

『香織は、超高速戦闘は行ったことがあるのか？』

『うん、ないよ。福音のときにマツハ二ちょっとは出したけど、戦闘はほぼ無理だった。まあ、あの時はISとしての形すら成しなかつただけだね。だから、たぶん初心者』

『そうか。では、私が教えてやろう』

『ありがとう、ラウラ』

軽く微笑むと、ラウラはたじろいだ様に顔を赤くする。可愛いなあ、小動物チックで。

そんなことを考えていると、周回を終えた二人が戻ってきていた。どうでもいいですが山田先生、揺れてます。そして視線が釘付けです。などと思っていたら、千冬さんが手を叩いて全員の意識を集める。

「いいか。今年は異例の一年生参加だが、やる以上は各自結果を残すように。キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きてくるだろう。それでは訓練機組の選出を行うので、各自割り振られた機体に取り込め。ぼやぼやするな。開始！」

その掛け声で皆がばらけていく。

キャノンボール・ファストは、要するにIS同士でのレースだ。ただし妨害ありの。

市のISアリーナを使用するイベントで、本来なら国際大会も開かれる競技だけど、ここIS学園ではちょっと事情が違うらしい。

今までの襲撃事件のこともあり、今年は本来不参加の一年生も参加することになっている。だから、今日はその特訓第一回目というわけだ。

「よし、勝つぞー」

「お姉さまにいいとこ見せなきゃ！」

「勝ったらデザート無料券！ これは本気にならざるを得ないわね！」

ものすごく気合が入っている女子たちに比例して、教師の皆さんのやる気も上がっている。やはりデザート無料券と織斑姉弟が効いているのだろうか。

誰だって、尊敬する、もしくは好きな人の前ではいい格好したい

ものだ。

「じゃ、ラウラ。よろしく」

「ああ、よろしく頼む。それで、香織はどうやってレースに出るつもりだ？」

「増設スラスターか、機体出力調整かだね。梟自体、高速戦闘にも使えるからパッケージはないし」

「そうか。私はドイツの姉妹機の高機動パッケージを調整して使用する。まあ、基本的には増設スラスターになるな」

なるほど……。

でも、この場合私は機体の出力調整かな。出力自体はあるし、スラスターは不用意に増やすとバランスとれなくなりそうだし。

そのことを伝えると、ラウラは小さく頷いた。

「では、どれをスラスターにするのか、攻撃に回すのか、いろいろ考えなければな」

で、それから数日。私はラウラに猛特訓を受けていた。

ふーちゃんは特注の高機動パッケージのテストで休日は会社に、簪ちゃんは『真打・鉄』に展開装甲を搭載するとかで月に行っているので不在なのです。

「そこだ、そこで曲がれ！ よし、そのままゆっくり速度を上げていけー！」

「よっ……、と。こっで……、こっでー！」

カーブの前に力を抜いて減速気味にカーブに突っ込むと、角度を変えたところで急加速。以前ゲームセンターでやった、VRレーシングゲームを思い出すな。あれを全体的に加速させたような感じだ。

PICのおかげで空気抵抗も感じずにスピードを上げていくけれど、コースアウトしそうになるとかならず警報が鳴り響くから速度と進路には注意しないとイケない。

『初日より大分上達しています。この分なら、大会までに十分なタイムが期待できそうですね』

『ありがとう、イヴ』

頭の中で礼を言いながら、コーナーを攻める。本番はこれの他に相手からの妨害の対処と相手への妨害の両方をこなさなければいけないのだから、大変だ。

それでも、生き死にを賭けた戦いでないだけマシというものだろう。

そんな訓練を続けること数時間、日も暮れてきたところでその日の特訓は終了となった。

「疲れたあ……」

「大分動きがよくなってきたな。しっかり食べてゆっくり休めよ」

「うん、ありがとうラウラ」

「気にするな。嫁のサポートも夫の役目だ」

「あ、あはは……」

それはまだ続いていたのでございませうか。

そんな感想とともに、今日は終わりを告げたのであった。

「どう、東社長？」

「大体は完成済みみたいだねー。今の『甲龍』にこれ以上のものつけようとしてもオーバースペックになるだけだし、それだと扱いきれないでしょ？」

「そうね……。弄くるところある？」

「全部弄くれるけど、それはだめ？」

「ダメー」

ところ変わってここはBC本社。

改造ルームと化した整備室で言葉を交わしているのは、東の考案したBCの制服に身を包んだ鈴と、同じくその制服にウサ耳を装着した東だった。

東曰く「宇宙の会社には制服が必須なのだよ！」という理由から考案されたこの制服は、ベージュの下地に白いラインをあしらい、一見すると普通のスーツのように見えるものである。服はもちろんISの技術や宇宙開発用のなんだかを流用しており、マシンガンをばら撒かれようと傷一つ付かず衝撃も通さない超防弾、防刃仕様なのである。

ちなみに、胸元には社員証が貼り付けられるようになっており、人目で名前と部署がわかるようになっていた。無駄に豪華な服だが着心地は抜群で、下はズボンとスカートの両方が選べるようになっている。

余談だが、鈴はズボン、東はスカートである。余談だが。

「じゃあ、武装を改造しとこっか！ 後々展開装甲も積みたいしー……、それに関してはかんちゃんが一歩リードだね！」

「オツケー、じゃあよろしく頼むわね」

「はいはい、任せなさいっ！」

嬉々として二五個のモニターに向かい、三八枚のキーボードを移動式ISラボ、『吾輩は猫である』の四本のメカアームを加えた六本の腕で叩いていく。

その姿にまるで無理している様子はなく、むしろ余裕すら感じられた。ともすればそれは片手間で済ませられそうなものだったが、鈴はそれに圧倒されることもなく静かに整備室から出て行く。

ここ最近、鈴の周辺に現れる大人は規格外ばかりだ。織斑千冬は中国に一度戻る前から半分人外の域に足を突っ込んでいるとわかってはいたが、まさかそれ以上の規格外がぞろぞろ出てくるとは思いもしなかった。

それゆえに、高々二桁程度の部品の電子機器を操る程度の芸当は、規格外筆頭の束にとっては当たり前のことであり、鈴が驚く要素などまるでなかったのだ。

尤も、鈴本人はそのことにやや頭を悩ませているのだが、平然と量子変換転送装置などという、聞きようによつては物騒なものを利用してはいる彼女もその異常が常識になりつつあるのだろう。

『一息入れますか？ 鈴』

「ああ、ハル。そうね、ウーロン茶でも淹れてもらえる？」

『はい、では食堂へ』

会社の事業のほとんどを取り仕切っている『HAL-30000』に応え、鈴は軽い足取りで食堂の扉を潜る。

社内は一面銀風景で、一番近い言葉では『近未来』といったものだろう。

どちらかと言えばひんやりとしたイメージの椅子に腰掛けると、意外にもそれは冷たいと感じるほどの温度ではなかった。

少し待つと、天井から鈴用のマグカップを掴んだメカアームが降りてきて、ゆっくりと鈴の前にマグカップを置くと天井に引っ込ん

でいく。

最初はこれにも戸惑ったものだが、今では当たり前のようにお茶を飲めるくらいにまで適応していた。

「ふうー……。ところでハル、簪の作業は順調なの？」

『はい、もうしばらくするとお帰りになられると思いますか？』

「そう。じゃあ、ちょっと見に行ってくるわ。片付けお願いしている？」

『はい、やっておきます。行ってらっしゃいませ』

丁寧な言葉遣いで告げたハルに軽く微笑むと、鈴は残りのウーロン茶を一気に飲み干してからカツンツ、とテーブルに置き直して席を立つ。

普段つけている『甲龍』の待機状態、黒のブレスレットは高機動パッケージを最高の状態に持つていくために、そしてついでの整備のためにと束に預けてあるため、普段はあったその感触がなくなっていることに、なんとなく不安感を覚えた。

それを振り払うようにタタツとワイプ装置にはいると、手元の装置を操作して月のコロニーに設置してあるワイプ装置へ接続、数秒のカウントダウンの後に鈴の姿はそこから掻き消えた。

そしてその直後、月のワイプ装置へと到着した鈴は、簪がいますというIS建造用アリーナに向かう。

重力は月と同じになっっているため、軽々と身を宙に浮かしながら走って、もとい跳んでいく。

薄く青の塗装を施されたアリーナの扉を潜ると、そこには『モータータイプ』を起動して『真打・鉄』の装甲を取り替えている簪の姿があった。

「簪、お疲れ」

「あ、鈴。うん、お疲れ」

「どう、順調に行ってる？」

「調度背面の装甲と脚部の装甲のパラメータ同期が終わったところ。何か用事？」

普段は常につけている小型ディスプレイ用眼鏡を外し、鋭い視線で仮想ディスプレイを睨んでいた簪は、訪ねてきた鈴を見ると目じりを落としてやんわりとした笑顔を作る。

その姿が香織にどことなく似ていて、鈴は抱きしめたくなる衝動をぐつと堪えた。傍から見れば立派な変態さんである。

「用事ってわけじゃないけど。にしてもいまだに信じられないわね、ここが月だなんて」

「……ねえ、コロニーの端っこ行ってみる？」

「時間はいいの？」

「後は片付けだけだから、大丈夫」

「じゃ、行ってみますか！」

パンツ、とハイタッチすると、反動でぐるんと回転しそうになつて慌てて後方宙返り。月の重力の弱さはここでも現れていた。

簪も同様にして体勢を立て直すと、改めてアリーナを出て探検を始めることにした。

結局、その後二人は三時間近くアリーナを駆け回り、たつぷりと月を堪能したという。

未知の世界は人を魅了してやまない。彼女たちもその一人なのである。そして遅くなりすぎてハルに心配されたのは彼女たちだけの秘密である。

第48話 身支度（後書き）

月を駆け回る少女たちのお話でした。

次回は本番、鈴と簪の高機動仕様お披露目です！

第49話 キャノンボール・ファスト

やってきました、キャノンボール・ファスト本番。

現在は二年生のレースが行われていて、お姉ちゃんも出場している。見た感じぶつちぎりで『走ってる』。もう一回言おうか、『走ってる』。

皆啞然としてるけど、私はお姉ちゃんの速力に付いていけているISの方にびっくりだ。

「違う……。あれ、バチバチいつてる……。もう脚部パーツが機能してない……」

「えっ」

「つまり葵義姉さんは使えないIS抱えて走ってるってこと!？」

頭を振るふーちゃんだけど、これは最早慣れるしかないのですよ。そうかー、だからお姉ちゃんは一番最後のレースを希望したのか。そりゃ無茶できないもんね、めっちゃ怒られそうなんだけど。

なんて思っている間に二〇〇メートル以上離してお姉ちゃんが単独トップゴールを果たす。……まあ、勝ったからいいの、かな？

「相変わらず義姉上は滅茶苦茶だな」

「まあ、お姉ちゃんだし」

「そうね、義姉さんだもんね」

「お義姉ちゃん……だし……」

はい、満場一致で仕方ないという結論に達したのでお話終わり！

「それでいいのか……」

「これに納得したら負けな気がする」

「しかし、なぜあれほどの方が燻っていらっしやるのかしら……」
「そこなんだ、突っ込むところ……」

上から一夏、篤さん、セシリアさん、シャルロットさんです。仕方ないね！

で、次は私たち一年専用機組のレーズなので、全員移動なのです。というか、全員すでにISを纏って待機してるからね。

「それにしても、なんかごついな。鈴のパッケージ」

「もともとごつい奴を社長が更に改造したからね。速度だけなら簪にだって負けないわ」

ふーちゃんは、中国で開発されて束ちゃんが仕上げた高機動パッケージ『バオ・フエン暴風』を装備している。増設スラスタ六基に全身に防御用装甲が追加され、生半可な攻撃ではびくともしないほどの強度を誇っている。更に衝撃砲は煌々と紅く煌いており、何か特別仕様になっていることが伺えた。ついでに随時ふーちゃんの周りをびゅんびゅん飛び回っているけど、あれはふーちゃんの意志で動くんだらう。

「私を忘れてもらっては困るな。戦いとは流れだ、全体を支配するものが勝つ」

ラウラはドイツから送られてきた三基の新型増設スラスタを装備しており、速度的には十分だらう。そこにラウラの操作技術が加わるのだから、油断ならない。

「流れは、断ち切るものだよ……」

簪ちゃんと言えば、恐ろしいことに背面装甲と脚部装甲を全て

展開装甲に取り替え、《あかがね朱鉄》の灰熱エネルギーを展開装甲で取り込み、常時瞬間加速状態を作り出すらしい。しかもそれは超音速機動状態のことだから、通常の云十倍の加速があるだろう。

しかも展開装甲によって脚部には何か武装を仕込んでいるとかで、そちらも恐ろしいところだ。

「私と同じ展開装甲……、油断ならない相手だな。簪、負けんぞ？」
「……うん」

簪さんと簪ちゃんが、互いの眼を見てにやりと笑う。おお、ライバル同士のアイコンタクトと言っちゃつか！？ いいなー、私もやってみたいものだ。

あ、のほほんさんとはできるけど、ライバルじゃないし。

私は中の出力を調整して使用するだけだけど、一次移行ファースト・シフトしただけあつて速度もコントロールも抜群だ。負けるつもりはない。

「みなさーん、準備はいいですかー？ スタートポイントまで移動しますよー」

山田先生の声で、私たちはメーカー誘導に従ってスタート位置へと移動した。

この独特の緊張感、命を欠けなくていい戦いって、なんて良いんだろうよね。……それはそれで気持ち悪いけど。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催しますよー！』

アナウンスを合図に、私たちは一斉に高速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下ろす。私以外。

鼻にハイパーセンサー・バイザーは付いていない。ハイパーセン

サーはあるけど、通常状態で高速機動が可能なスペックのため、バイザーはないのだ。

三

スラスター音が鳴り響き、辺りに満ちる。

二

じわりと汗が出てきて、軽く頭を振った。

一

よし、

一……、ゴーツ！

ドンツ！ と急速な加速で景色が飛び、一瞬一夏が戸惑った様子を見せる。もちろん、こっちはそんなこともなく全ての情報を取り込んで的確なコースに入っていく。

練習で何度も繰り返したスタートダッシュの成果が出て、出だしは上々。後はここからだ。

先頭はセシリアになっていたが、そこへふーちゃんが突っ込んでいく。

「オラオラオラオラア！ 当たると痛いわよオ！」

二基の衝撃砲から放たれる見えない弾丸は、予想以上の勢いで周囲の壁を削っていく。それと共にセシリア目掛けて撃ち放たれたそれは、見事にセシリアのスラスターにダメージを蓄積させていつて

いた。

「くっ、さすがですわねっ！」

「もちのロンロン、あの人に手を加えてもらって、負けるわけにはいかないでしょうが！」

「私を、忘れるなよっ！」

そこへ、加速したラウラの大口徑リボルバー・キャノンが撃ち込まれる。しかし、強化された防御の前に、弾丸はすげなく防御されてしまう。ダメ押しとばかりに衝撃すら吸収して見せたそれに目を見張ったラウラは、目標変更して防御装甲のない部分へと銃弾を浴びせていった。

「香織、ぼさつとしてると抜いちゃうよ！」

「させませんよ。はあっ！」

ウイングビットを展開、肉薄してきたシャルロットさん目掛け次々と射撃を開始する。ちなみに、これはBT兵器です。……うん、この前BTとか良くわからないしって言ったのほんとだからね？だからエネルギーとか曲げられないし。

ちなみに、私のBTエネルギーは黒く輝いています。ちょっと不気味だけどかっこいいからいいや。

もちろん、ビットだけで落とせるとは思っていないけど、それでも足止めには十分すぎる！

「くっ、強いね！」

「それはどうも！」

その一方で、一夏と篝さん、そして簪ちゃんの方も接戦になっていた。

一夏の《雪片式型》と篝さんの刀は互いにレーザーを撃ち、あるいはそれを打ち消しながら戦っている。その中に、たびたび斬り込んでいるのは簪ちゃんだった。

《朱鉄》あかがねを片手で振り回しながら、恐ろしい速度で変幻自在に切っては離れ、切っては離れを繰り返している。……あの、すっごい怖いですけど。

《朱鉄》あかがねはまだ発熱が初期状態だからいいけど、時間が経てば経つほど威力は上がる。早いところ離れたほうが良いかな。

そんな感じで一週目を終えた私たちだったが、唐突に穏やかな戦いは終わりを告げた。

上空から降り注いだBTエネルギーがトップ集団を撃ち抜かんとし、それに対してふーちゃんが装甲を盾にして防御する。さすがと言うべきか、ほとんどダメージはなさそうだった。

「!? なんだっ!」

「あれは……『サイレント・ゼフィルス』!」

「それに『灰狼』グレイ・ウルフまで!? どうなってんのよ!」

一夏、セシリアさん、ふーちゃんという言葉で、全員が意識を戦闘へと切り替える。

ファントム・タスク
亡国機業の襲撃だった。

「今度は何が目的なの?」

「あら、随分と嫌われてしまいましたわね。今日はエムちゃんのお供ですわ」

警戒心を露わにして問うた香織に、『灰狼』の操縦者、キティは拗ねたような顔から一転、朗らかな笑みを浮かべてそう答えた。

香織の周囲には先頭集団に混ざっていた鈴とラウラ、後方で斬り合いを演じていた簪が集まっており、自然と『灰狼』は香織たちが『サイレント・ゼフィルス』は一夏たちが担当するようになっていく。

「まあ、なんでもいいわ。よくもぬけぬけと顔を出せたものね」

「ここで仕留めさせてもらおう。これ以上手出しされても面白くない」

「そういうことだから……」

一斉に武装を展開、臨戦態勢をとる。油断すればいかに装甲の厚い今の鈴ですら、たやすく落とされるだろう。相手はそれほどの実力者であり、香織たちはそれに対抗するだけの技術をいまだ身につけるには至っていなかった。

対するキティはといえば、実に楽しそうにカラカラと笑い、それからようやく武装を起動させた。腕部装甲に直接取り付けられた三本の爪のような、『ウルフズ』という名の近接兵装。

カチンカチンと互い違いに爪を打ち鳴らしながら、直後。

瞬く間もなく『灰狼』は距離を詰め、その鋭利な爪の切っ先を振るい突き立てた。

「ぐっ!?!」

「香織! このお!」

「あはは! 今の衝撃砲程度の速度では、この子は捕らえられませんわよ!」

縦横無尽、まさしくその言葉の通りに、キティは壁も天井も床も、重力など知ったことかと言わんばかりに駆け回り跳び回り、衝撃砲から吐き出される無色透明の弾丸を悉く回避していつていた。

「相変わらずちょこまかと飛び回りおつて！ はっ！」

「っと、止められてしまいましたわ」

「これで、終わりっ！」

がくんっ、と唐突に灰狼の動きが止まる。中空で不自然に停止したそれを留めているのは、ラウラの操る『シユヴァルツェア・レーゲン』から発せられるA I Cだった。

いい的となつた灰狼目がけ、今度はそれなりに排熱量が増した『朱鉄』を構えた『真打・鉄』が突っ込んでいく。

一息で斬り潰せるというところまで迫つたところで、キティはその頬を吊り上げ妖艶な笑みを浮かべた。

「で・も ウルフ・ハウリング 《狼の咆哮》！」

「また武装特性か！」

「何あいつ、そんなものまで使えるわけ!？」

襲撃事件の折には腰を折られて結局その正体を露わにすることはなかった武装特性が、今度こそ発動された。

狼の遠吠えのような奇怪な音が鳴り響く中、A I Cが一瞬で破壊され、その危険性に気付いた簪は何とか後退する。

「バカなっ!？ A I Cが！」

「『ウルフズ』の武装特性は超音波攻撃、停止結界程度の弱い力で留めることはできませんわ？」

「なんか話し方がむかつくわね……! 《龍砲》！」

あつけらかんと言いつち、鈴の放ってくる龍砲をまるで見えていくのかのようにその爪で打ち払っていく。

見たところシールドエネルギーは減っていないため、鈴は早々に龍砲での射撃を諦めた。止められるとわかっていてリソースを消費するほど脳筋ではない。

その時、静かに香織が羽を開く。

「サンプリング完了、あれは破れるよ」

「ほんと!？」

「うん。梟、行くよ　っ！」

言葉が終ると共に四枚の羽根が振るえ、共鳴する。

そこで生まれた鳥のさえずりは、確かな力となつて場内を駆け巡つていった。

「《狼の咆哮》を《バードエイクとりのさえずり》で中和しているのですわね？

さすがお兄様、サポートAIのレベルも高いご様子で」

「……どこまで知ってるのかな？」

「大体のことは知っていますわよ？　まあ、それはいいですわ。戦いましょう、お兄様！」

超音波を掻き消され、しかしキティに弱った様子はどこも見当たらなかった。

爛々と戦意に瞳を輝かせながら突っ込んでくるキティを迎え撃つべく、香織は《よたか夜鷹》を《オーブン展開して構える。

それと共に、鈴の衝撃砲、ラウラの砲撃、簪の《あおがね蒼鉄》の弾丸が飛んでくるキティ目掛け撃ち出された。

「はああああ！」

「あはははは！」

三人の砲撃とも呼べるそれを身に受けてなお、キティは健在だった。

『灰狼』から煙を立ち上らせて『梟』と打ち合い、その速度は瞬く間に上がっていく。

戦いは、更に苛烈さを増していく。その場にいる全員がその予感を感じていた。

第49話 キャノンボール・ファスト（後書き）

レース回なのに半分くらい戦闘でいける。
次回も戦闘続きです。

第50話 二度目の襲撃戦

香織たちがコースで戦闘を行っていた頃、葵は一人換気口から管制室へと向かっていた。

二年生と言えど専用機がなければただの一般生徒であり、その戦力は大きく減少する。よって二年生も実技成績上位者を除いて非難しており、その実技成績上位者も非難誘導に当たっているのだが、葵にとってはそんなものはただの規則の域を出なかった。

「あの二人が来ているなら……、彼女も必ず」

それは殆ど確信ですらあった。

換気口の格子窓を音を立てずに外して中を覗くと、管制室は大わらわらわらわらになっていた。

しかし、それは葵にとって好都合。音もなく彼らの背後に降り立つと、一人目を手刀を後頭部に叩き込むことで気絶させ、もう一人を上段蹴りで気絶させる。

一瞬で管制室を制圧すると、葵は迷わずコンソールへ向かった。

「上空部分のシールドバリアが破られてる……、あそこから侵入したのか。なら……！」

手元のコンソールのキーを何度か叩くと、配列された沢山のボタンのうちの一つを押し込む。すると、修復完了の文字と共にシールドバリア強度が最高まで引き上げられたことを示した。

それを確認した葵は、次に監視カメラの映像を次々に拡大していく。やがて、目当てのそれを見つけた葵は監視カメラの番号と、場内の監視カメラの番号が書き込まれた地図を見比べて、その位置を頭へと叩き込んだ。

「ビンゴ、やっぱり来てたのね」

管制室を出てひた走りながら、葵は呟く。

金色の髪にそれを引き立たせる色のスーツ、人としての魅力に満ち溢れた彼女の名を呼ぶ。

無表情に、あるいはその中に苦々しげな色を隠して。

「 スコール」

「ふふ、エムもキティもさすがというべきかしら、あれだけの専用機持ちを相手に、よく立ち回るものだわ」

しかし、と彼女は続ける。

人気のなくなった客席の中で、優雅にもその椅子に腰掛けて。

「エムの方の相手は大した事ないわねえ。篠ノ之博士の手掛けた機体、それも一機は第四世代。もっといい勝負になるかと思ったけど

……」

「あら、イベントに強制参加しておいて評論家気分かしら」

「IS『モスクワの深い霧』グストロイ・トゥマン、モスクヴェだったかしら？ あなたの機体は」

「それは前の名前、今は『ミステリアス・レイディ』と言うの」

「そう」

振り向くと同時に、ゆつくりと手にした鞘から刃を抜き放つ。

スコール、彼女が自分自身の感覚を信じるならば、眼前の少女は人の領域から外れかけていた。故に、ISを出してこない限りは生身で対応する。完全に人から外れた人を相手取るために強くなつたその体は、未だやや不完全な『天災』を相手取るには十分であった。

「ならば、潔く散りなさい。そのISを動かす前にね」

「……貴女は」

「……？」

突然俯いた楯無は、ぶつぶつと呟いていたかと思うと前髪を垂らして目を隠しながら突然スコールを見る。

「貴女は、千冬さんの邪魔をするのかな？」

「……そう、それが貴女というわけね。そうね、私が動けば彼女の仕事は増えるわ、どうする？」

「なら容赦しねエな。《恋愛中毒》ラブジャンキー 更識恋華、愛し尽くして枯らし尽くして鬨り尽くして殺し尽くしてやるわ」

目の色を変え、楯無もとい恋華がそう声を荒げた。

姿かたちは変わっていないというのに、雰囲気はまるで別人。それこそ仮面を付け替えた、否、仮面を外した彼女の姿なのだろうと、スコールは睨む。

「準備はいいかしら？」

「ええ、いつでも？」

「それでは」

刹那、ドンツ！ と空気の押し出される音と共に二人はその力を

ぶつけ合う。

びりびりと大気が震え、最大まで引き上げられたシールドバリアですらギチギチと悲鳴を上げる。その中であって、台風の目である彼女らは次々に刃と拳をぶつけ合っていた。

「本当に、滅茶苦茶なのね！ 天災と言う人種は！」

「口を開くな言葉を発するな息をするなッ！」

どこか楽しそうなスコールとは対照的に、憎々しげな色を映して吐き捨てる恋華。

人から外れたものと戦うために人から外れかけた女性と、人であることを自ら捨て去った少女の戦いが更に加速せんとした、その直後。

「どけ、《恋愛中毒》」

ぞわりと、怖気立つ声音がその耳に音として伝わった瞬間、恋華は咄嗟にそこから飛び退いていた。

その直後に、一瞬前まで恋華が立っていた場所が破裂し、そこから一人の女性が飛び上がってきた。

「スコール、待たせたな。貴様の相手は私だ」

「葵ちゃん……、来てくれたのね。ええ、死合いましょう」

「待ちなさい、こいつは私が殺すのよ」

「貴様はコースの一年を助ける。まだ未熟な彼女たちでは太刀打ちできないだろう」

その言葉に恐ろしい重圧を感じた恋華は、小さく溜め息を吐くとごねても仕方ないと考えたのか、葵の開けた穴を通って下へと降りていった。

確かに、恋華でもスコールを捕まえることはできただろう。だが、その場合恋華はスコールを間違ひなく殺してしまうため、情報を引き出すことができない。そのぐらいならば、腕の一本でも奪っておとなしくさせられる葵の方が彼女の相手には適任だった。

それに、恋華はまだ天災となつてから格上の存在との戦いを経験していない。その初戦がスコールでは荷が勝ちすぎていた。

「……行つたか」

「ええ、行つたわね」

二人してそう呟いた、そう互いが認識した瞬間、殺気にも似た色濃い闘気を放つ。

あまりに濃厚なそれは周囲の椅子や床をひしゃげさせ、どこからか亀裂の入る音すら聞こえてきた。

「安心しろ、監視カメラはここだけ止めてある」

「そう。なら安心して戦えるわね」

足場を確保するように踏ん張ると、べこりとその足元が円形に陥没した。

その刹那、二人は一息で互いの攻撃圏内に飛び込むと、スコールは元々持っていた刀で、葵はどこからか取り出した刀で打ち合う。

それによって生み出された衝撃波で今度こそ、周囲に亀裂が走っていく。

一瞬にその一〇倍以上の打ち合いを繰り返す二人の感覚は、その一瞬ごとに鋭敏になっていく。

どこまでも鋭く、そしてどこまでも広くなっていくそれを感じながら、二人は確かに自らの刃から鳴った亀裂の音を聞いた。

「はあっ!」

「くっ！」

葵の狙い澄ました一撃が確かにスコールの刃を捕らえ、パキリと碎ける音と共にスコールの刀が根元から折られ、吹き飛ばされる。壁まで一直線に飛ばされたスコールは、そのまま壁にヒビを入れる勢いで激突した。

「かはっ……！」

「……ちっ、監視カメラの範囲内か。スコール、勝負は預ける」

心底残念そうにそう吐き捨てると、葵は出したときと同じようにどこかへと刀を消し去り、自分の開けた大穴から姿を消した。

その様子を見送り、スコールは一人ごちる。

「……無様ね。これほどになってもまだ勝てないだなんて」

自嘲し、それから痛みをこらえて立ち上がる。

その目は闘士ではなく亡国機業幹部の一人としての色に移り変わっていた。

「はあああ！」

「例え第四世代と言えど、乗り手がひよっこではな！」

「黙れっ！」

「箒、熱くなりすぎたらだめだよっ！」

「逃しませんわ！」

「セシリア、前に出すぎだよっ！」

『サイレント・ゼフィルス』を相手取っている一夏たち四人は、相手に突っ込もうとする箒、セシリアと、それを抑えながら戦う一夏とシャルロットに分かれていた。

箒は自らの未熟さを指摘された怒りから、セシリアは二号機を取り戻そうとする使命感から先走りすぎており、そのことに一夏とシャルロットは歯噛みしながらも何とか戦線を維持している。

「二人とも突っ込みすぎだよっ！ 戻って！」

「だがっ！」

「ですが！」

「それで二人が落とされたら元も子もないよ！ 頭を冷やして！」

シャルロットは半ば悲鳴のように叫び、箒たちはようやくその動きを止める。

と、そこを『サイレント・ゼフィルス』のB Tライフルが撃ち抜いた。

「ぐっっっ！」

「箒！ てめえ！」

「一夏、駄目だつてば！ ああもう！」

大きなダメージを受けた箒を見て激昂した一夏が、《雪片式型》ゆきひらにがたを手に《零落白夜》たのらくひやくやを発動させて切り込む。

その様子を見たシャルロットは、最早悲鳴と変わらない声を上げながら仕方なく連装ショットガン《レイン・オブ・サタデー》でサポートに回ることにした。

「零落白夜、確かに当たれば恐ろしいが、当てられる腕を持っていないだろう」

「うるせえよ、とつとと墮ちやがれ！」

「わたくしもお忘れにならないでくださいまし！」

「だから二人とも、突っ込みすぎだつてばっ！」

《零落白夜》を発動させた『白式』、この中で最高性能を誇る『紅椿』、Bタイプフルを構えた『ブルー・ティアーズ』の三機を相取り、なおも『サイレント・ゼフィルス』は嘲笑うように回避しながらライフルで鋭い一撃を加えていく。

なんとかサポートに回ろうとするシャルロットだが、動き出すその隙を見逃さずに放たれるBタイプフルを咄嗟に回避していくため、どうしても三人のサポートには回れなかった。

だが、次の瞬間、軽々と回避して攻撃を行っていた『サイレント・ゼフィルス』に無数の銃弾が撃ち放たれた。

「ちっ、増援か！」

「その通り。葵ちゃんに追い出されちゃったからね、貴女で憂さ晴らしさせてもらっわよ」

先ほどと違い生徒会長の目に戻った恋華が、にいつ、と口端を吊り上げてぞつとするような笑みを浮かべる。

その身には、大量の水のヴェールを纏ったIS『ミステリアス・レイディ』を纏い、四門のガトリングが装備されたランスを手にしていた。

「更識楯無……、いいだろう、この雑魚どもに加わってようやくまともに戦えそうじゃないか？」

「あら、私が加わったら戦力過多よ？ そんなに悠長にしているい

いのかしら」

「ふん……、やってみればわかることだ！」

六基のビットと共にBTライフルを乱射するも、直進してくる『ミステリアス・レイディ』のヴェールに当たった途端にエネルギーが水に溶け込んでしまう。

水を操っているナノマシンがBTエネルギーを散らしていることに気付いたエムは、ピンク色のナイフを取り出して直接格闘戦を挑まんと加速を試みようとし、

「　　なんだ、スコール。……ああ、わかった」

そのまま取り出したばかりのナイフを量子変換して消滅させると、エムは興奮めだとはかりに五人の方へ眼を向けた。

「指示が出たのでな、撤退させてもらおう」

「逃がすとお思いですか？」

「私が、逃がしてもらおうと思っているとでも？」

「よしなさい、セシリアちゃん。あの子は強い、準備のない現状では面倒よ」

食い下がろうとするセシリアを恋華が押し留め、その様子を眺めながらエムは一斉にBTエネルギーを撃ち放つと、エネルギーバリアを破って外へ逃げて行った。

「……………くっ！」

一人、セシリアの心に苦い思いを残して。

第50話 二度目の襲撃戦（後書き）

次回でキャノンボール・ファスト編、完全終了となります。

未だ勝ち星を収めていない専用機持ちたち、一体これからどうなるのか。

お楽しみに。

第51話 一夏の誕生日

キティが突然引き上げていった時、私たちはすでに満身創痍だった。

なぜ撤退命令が出たのかはわからないけど、作戦時間が決まっていたりしたのかもしれない。あそこにはお姉ちゃんも恋華さんも千冬さんもいたわけだし。

「せーのっ」

私たち四人でもまともに相對するのは数分が限界だったキティに、一夏たちを圧倒したエム。……もっと強くならなきゃ、だめかな。

「一夏、お誕生日おめでとっっ！」

パンパン！ とクラッカーが鳴り、皆が声を上げた。

ここは一夏の家、時刻は夕方五時丁度。

私たちはあの戦いの後、一夏の誕生日を祝うべく一夏の家にやってきていた。とは言っても、民間のISドームで発生した事件だったため、私たち当事者は警察の取調べを受け、大分時間を使ってしまったのだが。

ちなみに私を担当した刑事さんはお姉ちゃんの関係で知り合いの方だったので、事情聴取はすぐに終わった。その後でふーちゃんから今日が一夏の誕生日だということを知り、わらわらとこの家に集まったというわけである。

「お、おう。サンキュ。しかし……、この人数は何事だよ？」

「それだけ慕われているということに納得しておいたほうが良いですよ。数蛇ですから」

「おう？ ……おう」

アシカじゃないんだから、一夏。
ちなみにここにいるメンバーは、篝さん、セシリアさん、ふーち
やん、シャルロットさんにラウラ。

一夏の友人である五反田弾君こたんだ だんに御手洗数馬君みたらい かずま、そして弾君の妹さ
んの五反田蘭ちゃんらん。

生徒会メンバーである恋華さんこいがにのほほんさん、会計にしてのほ
ほんさんのお姉さんであるの布仏虚先輩のほとつこ、新聞部の黛薫子先輩まゆかほのこ。

そして私にお姉ちゃん、千冬さんちふゆになぜかいるナターシャさん。

……いや、教員だったし、流れで付いてきたってわかってはいるけ
どね。

「その辺はほら、おねーさん監視役だから。お酒とタバコはハタチ
になつてからよー？」

「日本はその辺厳しいですからね。あとサラリと読心術使わないで
ください」

いつのまにか傍によって来ていたナターシャさんの言葉にすかさ
ず返してみた。

あとナターシャさん、その手に持っている缶は……。

「おねーさんはハタチ超えてるのでいいんですうー。大丈夫、おね
ーさんお酒強いから」

「だからって生徒の前で飲酒しないでくださいよ……。まあ、あん
まり強く言いませんけど」

「一之瀬妹、言うだけ野暮という奴だ。今日くらい勘弁してやれ」
「……はあ」

ニコニコと缶ビールを飲み下すナターシャさんと、じろにゃーん

とばかりに胡坐あぐらで座る千冬さんの太ももに頭を乗せて寝転がっている恋華さんを見て、仕方ないかとあきらめることにした。考えていたら、頭が痛くなりそうだったから。

「あ、あ、あのっ、一夏さん！ け、ケーキ焼いてきましたから！」

「おお、蘭。今日、どうだった？ 楽しめたか？ って言っても、途中で滅茶苦茶になったけどよ」

「は、はい！ あの、かつこよかったです！ あっ、ケーキどうぞ」

「サンキユ」

一夏にケーキを差し出す蘭ちゃんと、それを受け取る一夏。

それにしても、あれだね。学校外でもしっかり一夏の体質は機能しているようだ。迷惑極まりない。

さて、それじゃあちよつと一夏に惚れている女の子をピックアップしてみようか。

まず篝さん、セシリアさんにシャルロットさん、ここで蘭ちゃんが入ってと。計四人、一人に惚れる人数としては多いと言わざるを得ない。

「うまいなー、これ。蘭一人で作ったのか？」

「は、はい！」

「蘭って料理上手だよな。うん、いいお嫁さんになるぞ」

「お、お嫁っ……！？」

おおっとー、一夏のボディブローだー。蘭ちゃんが揺らいでいるぞー。

「見てみなさいよ篝たちったら。じーつと一夏と蘭のこと見つめてるわよ」

「嫉妬は醜い……」

「辛らつだね、簪ちゃん……」

皆でケーキをつまみながら、そんなことを話してみる。

「しかし香織、このケーキは美味しいな！」

「ああほら、口についてるよ」

こつちを見てパアア……、と顔を輝かせて言ったラウラの口周りを人差し指で拭い、ついていたクリームを自分の口に運ぶ。

うん、確かに美味しいです。だって私が追加で買ってきたものだからそりゃ美味しいですね。

「ああ、すまん」

「いえいえ。……あのー、そこのお三方？」

「……なんだ？」

「なんですの……？」

「なに……？」

暗い。ものすごく暗い！

一夏に惚れている蘭ちゃん以外の三人、つまり篝さんたちはどんよりと曇った顔でこちらを向いた。

「えっと、なぜそこまで暗いのですか……？」

「……まともに戦えもしなくてな。己の不甲斐無さを嘆いていたところだ

……フレキシブル偏光制御射撃の特訓プランを立てなければと考えているのですわ」

「まあ……、イノシシ三匹制御するのは大変だなあ、って。普通のライフルとか入れようかかって……」

「は、はあ……」

えっと、篝さんはいいとして、セシリアさんは多分、『サイレント・ゼフィルス』が偏光制御射撃を使えるからいろいろ思うところがあるんだろうなあ……。

「で、シャルロットさんはなぜにイノシシ云々なんです?」

「一夏も篝もセシリアも、なぜかことごとく挑発に乗って突っ込んでいくんだよねえ……。易々と、これ見よがしにつ、いとも簡単につ!」

「……反省しています」

「……申し訳ありませんわ」

ああー、そういうことかあ……。

まあ、そういう気性が寄り集まってる中で、シャルロットさんだけがちゃんと自分をセーブできていたと聞くし……、ほんと、お疲れ様です。

「でも、まだ時間はあるんですから、これから直して、もっと強くなればいいんですよ」

「そ、そうだな! うむ!」

「そ、そうですね!」

「……まあ、いいか」

逃げ道を見つけたとばかりに賛同して頷く篝さんとセシリアさん。そしてそれを見て溜め息を吐くシャルロット。なんだかシャルロットさんが母親みたいに見えてくるねえ、これは。

「千冬さん、あーん」

「……あーん」

視界の隅で、恋華さんがケーキを千冬さんに食べさせているのが見えた。

千冬さん、ちょっと頼染めてませんか？ まあ深くは突っ込みませんけど。

「こっちこっち、こっちよ弾！」

「虚、こっち……」

「待って待って、引っ張るなって！」

「お嬢様、待ってくださいいっ」

で、なぜふーちゃんと簪ちゃんは誰かを引き連れてきてるの
でせうか？

「これが五反田弾よ、私の友達。弾、こっちは一之瀬香織、私の幼
馴染よ」

「俺たち以外に友達いたんだな……」

「ぶっとばすわよ」

「すまん、すいませんした」

凶暴な笑みを浮かべて手を握り込むふーちゃんに、諸手を挙げて
降参をアピールする弾君。なるほど、気のいいお調子者系か。

「あーっと、五反田弾だ。弾って呼んでくれ」

「一之瀬香織です、名前で良いですよ。よろしく、弾君」

「ああ、よろしくな」

ぐっ、と握手。ふむ、何かお料理をしている手かな。なんとなく
傷の痕がある。

で、今度は簪ちゃんが引っ張ってきた女性。生徒会の会計担当、

布仏虚先輩その人であった。……ああ、一応お嬢様呼びなんだね。

「名前、知ってるよね……。香織……」

「布仏虚、三年よ。よろしくね」

「はい、よろしくお願ひします。一之瀬香織、一年です。あのそれで……」

「……はい？」

そそくさと虚さんの傍により、頭を下げる。

「お姉ちゃんのご迷惑をかけて、すいませんでした。お姉ちゃんもいたずらにやっているわけじゃなくて、その……」

「……ええ、わかってるわ。こっちにこそ非があったのだし、お姉さんの行動も行き過ぎだとしてもこちらにそれを批判する権利はないもの。……お嬢様がああなったのは、ちょっとあれだけれど」
「本当にすいません……」

向こうが頭を下げてきて、慌ててこっちも頭を深く下げる。

すると、虚先輩も更に頭を下げてきて、こっちもそれより深く頭を下げて、そうしたら虚先輩がもっと下げてきて、それよりも下に深く頭を下げて……。

「……そろそろ、やめましょうか」

「……そうですね」

「あ、これ私のアドレスです。もしお姉ちゃんのご迷惑をおかけしたときにはご一報を」

「これはどうもご丁寧に。私のアドレスです、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

またもや頭を下げあい、それからアドレスの書かれた紙を受け取

る。なんか、お見合いみたいなんですけど。

「おーい、終わったかしらー」

「あ、うん！ ごめんごめん」

まあ、そんな感じで、一夏の誕生日会は私たちの持ち込んだものもあつたので、買い足しすることもなくつつがなく終わったのであつた。

キャノンボール・ファストから数えて最初の日曜日、私たちBC社員は本社へと出向いていた。

「やあやあ、よく来たね皆！」

「東ちゃん、何か用事があるって言ってたけど……」

「そう、そうなんだよ！ ようやくあーちゃん用の武装が出来上がったから、そのお披露目にね！」

意気揚々と言い放った東ちゃんは、そう言って片手を空高く上げる。

すると、近くの壁がパツクリと開き、そこから銀色のアタッシュケースが押し出されてきた。それを軽々と取り出すと、床が押し出されてできたテーブルの上に乗せる。

「これが、束ちゃん特製、あーちゃん専用兵装だよん！ ささ、葵ちゃん、開けて開けてー！」

その言葉に、お姉ちゃんがアタツシユケースを押し開ける。そこには、『BC』と刻まれた武器たちが納められていた。

「ブレードにナックル、ランス、アックス、スナイパーライフルにナイフ、荷電粒子砲、と。随分作ったのねー」

「張り切ったからねん！ この『Bind Collection Series』、略してBCシリーズはISよりも頑丈だから安心していいよ！」

そう言うと、束ちゃんがブレードを取り出してさらに続ける。

「ブレードバージョンは切断に、ナックルバージョンは打撃に、ランスバージョンは刺突に、アックスバージョンとナイフバージョンはその他に応じてご利用あれ！ おまけでスナイパーライフルバージョンと荷電粒子砲バージョンもつけておいたから！」

「ありがと、さすがねたっちゃん」

「それほどでもー それじゃ、先に渡しておいたBCリングに格納しておいてね」

「それじゃ、こっちは返しておくわ。私の全力には耐えられそうもないから」

お姉ちゃんが指輪から取り出したのは、ボロボロになった刀だった。たしか、キャノンボール・ファストのときに使ったって言ってたっけ。お姉ちゃんの使った武器がボロボロになるなんて、滅多にないことなのに。余程の相手と戦ったんだろう。

刀を受け取った束ちゃんは、それをどこかへと転送するところらへ向き直る。

というかお姉ちゃん、いつの間に量子変換機能のある指輪なんか
もらってたんだろっか。

「BCリングは皆の分を作る予定だから、お楽しみにね！」

「もうなんでもござれね……」

「でもそこがいい……」

「服とかも格納できるの？」

「もちろん！ 生モノじゃない限り安全性は問題ないよ！」

「オツケー、助かるわね」

ふーちゃん、簪ちゃん、ナターシャさんが口々に漏らす。

『……常識ってなんだっけ』

『壊れゆくものでは？』

イヴ、それを言ったらどうしようもないでしょ。

第51話 一夏の誕生日（後書き）

というところで、六巻の内容が終了です。
……早い、六巻早い。

第52話 特訓

「特訓？」

「ああ。俺たちも力不足を痛感してさ……。香織たちさえよければ、一緒にどうかと思って」

とある日の放課後、すでに当たり前のように私の机の周りに集まっていたふーちゃんと簪ちゃん、そしてラウラを交えて、一夏たちからそんな話が持ちかけられた。

「私がかまいませんけど」

「アタシもいいわよ。簪とラウラは？」

「私も……いい……」

「構わん。あのメス猫に一撃くれてやらねば気が済まんしな」

「ということ、オッケーですよ」

ラウラだけなかなかに苛烈なお言葉だったけども、それぐらい腹が立っているんだろう。

いくら不意打ちで純粋な戦闘用装備ではなかったとはいえ、負ければ悔しい。まして、相手に情けをかけてもらったようなものなのだから。

「よし、それじゃあ早速アリーナに行こうぜ。第五アリーナを取ってあるから」

その一夏の言葉に頷いて、皆でアリーナまで出向く。アリーナに設置されているシールドエネルギー補給装置の傍で服を量子変換すると同時にESを身に纏うと、すぐに装置でシールドエネルギーを回復する。

これは基本的に授業と放課後に許可の出されているときにしか外に出されていない。理由としては盗難や悪用の防止、だそうだ。

「で、どういう訓練でしょうか。プランはありますか？」

「それなら僕が作ってきたよ。香織たちのは大雑把になっちゃってるけど……」

「いえ、気にしないでください。それで、どういった訓練を？」

「じゃあ、まず一夏から言うね」

そう言っつてシャルロットさんが出した案は以下のとおり。

一夏は射撃兵装の知識の復習、実戦で体に射撃兵装の動きを叩き込んで慣れさせる。

箒はまず単一技能を安定して起動させるために模擬戦、相手はセ

シリアが務める。

セシリアは偏光制御射撃の習得のため、箒に対して極力のみで模擬戦。

シャルロットは一応のラインには達しているので一夏の特訓相手。とまあ、ざっとこんな感じだった。

「ん、良いんじゃないでしょうか。じゃあ私は……、近接戦闘スキルを上げるために、ふーちゃん。相手してもらえる？」

「オーケー、《ナイトホーク》はなしね」

「そりゃそうだよ。それで、簪ちゃんとラウラはどうするの？」

「ラウラと模擬戦……」

「よし、ではやるか。シャルロット、こちらも決まったぞ」

「うん、それじゃあ皆、それぞれががんばろう」

シャルロットさんの言葉で、皆がそれぞれに散らばっていく。さて、がんばろうっと。

あー、その、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。

……こんな感じで、良いのか？　そ、そうか。いや、夏休みの間にクラリツサを筆頭とする私の部下たちと交流を深めたのだが……。その時に「話を始めるときには名前を言っておくと皆がわかりやすく良いのでは？」と言われてな。何のことだと返したら、電波を受信したとか何とか。

まあ、皆良い隊員たちだということだ。うん。

「ラウラ……、大丈夫……？」

「あ、ああ、大丈夫だ。そっちの準備は終わったか？」

「うん……」

目の前の鎧武者が、巨大な鉄板のような赤黒い光を放つ剣、《^{あか}朱鉄^{がね}》を手に頷いた。

普段は小動物のような簪だったが、これほどの装備を整えていると恐ろしさすら感じてくる。しかも、背部と脚部は展開装甲のまま変えていないというのだからとんでもない代物だろう。

私は知らず知らずのうちに『シュヴァルツエア・レーゲン』に装備されているプラズマブレードを起動させ、戦闘体勢をとっていた。それほどの相手、ということなのだ。

簪は元日本代表候補生だと聞く、実力的に言えば五分五分かも知れず、ましてその機体が筭に勝らずとも劣らないものとするならば、やはり油断はできない。

ふと、視界にカウントダウンが映る。

三、二、一、試合開始

カウントダウン終了と同時に互いが空を裂き、一直線に相手へと向かっていく。

開始直後に急接近してのAICは真横への瞬間加速によって回避された。体への負荷をまるで感じていないかのような軌道を描き、《朱鉄》を振りかざしてこちらへ接近してくる。

背部の展開装甲で驚異的な推進力を、脚部の展開装甲で機動のほとんどの補助を行っている『真打・鉄』は、第三世代の『シュヴァルツェア・レーゲン』を軽々と越える機動性能をもっている上に、操縦者である簪の技術も高い。こちらもし惜しみはできないな！

「いけっ！」

片目を隠している眼帯を量子変換して消し去り、奥の手である《ヴォーダン・オージェ越界の瞳》を発動、反応速度を跳ね上げる。

それと同時に六本のワイヤーブレードを射出、手足を狙って次々に走らせていく。

「そう簡単には、捕まらない……！」

突然、蒼いエネルギー弾が一本のワイヤーブレードを弾き飛ばす。みると、簪は空いていた片方の手に蒼い銃剣を装備していた。なるほど、《あおがね蒼鉄》の射撃でブレードを弾き飛ばしたのか。

あまり悠長に戦っていると《朱鉄》の武装特性を使われかねない上に、もしかすると《蒼鉄》の武装特性まで出てくるかもしれない。そうでなくとも余裕がないのだ、もたもたしてはいられないだろう。

「早々にけりをつけさせてもらっぞ！」
「やれるものなら……！」

言葉が消えるのと同時に、全身を悪寒が包む。

咄嗟に身を引くと、すぐ目の前を赤黒い板が通り過ぎて行った。何が起きたのかと簪の機体を確認すると、脚部と背部の展開装甲が完全に開いていた。あれを使って瞬時加速を超える速度を出しているのか。

しかし、あれほどの加速ならばエネルギー効率が悪くはず、そこが狙い目か。

「グレンノアカガネ
《紅蓮朱鉄》……！」
「なっ!？」

武装特性を発動させた簪が、私の目の前でその刃を振り上げる。爆発的に増えた熱量が質量へと変換され、ただでさえ巨大だった刃があつという間に自分の二倍以上の大きさへと膨れ上がる。

咄嗟に身を翻して後方へ飛ぶと、次の瞬間には背中を掠めるようにして膨大な熱が振り下ろされた。

圧倒的なその威圧感が突如として霧散し、武装特性の発現が終わったことを感じた私は、すぐさま振り返って攻撃に転じようとした。

「ソウエイノアオガネ
武装特性、《蒼鋭蒼鉄》」

その言葉が聞こえると同時に絶対防御が発動し、シールドエネルギーがごっそりと削られる。

驚愕とともに簪をみると、彼女の手に握られていた銃剣の銃口からは、蒼いBTエネルギーが剣のように伸び、実体剣の部分までを飲み込んで一振りの青い刃になっていた。

まったく、つくづく驚かされる。ここで《蒼鉄》の武装特性とは。

「……終わり」

「……面目丸つぶれだな、私は」

先ほどのダメージで機体の損傷はかなり大きくなった。今の距離から次の一撃を回避することは不可能だろう。

「だが、せめて一矢報いらせてもらおうぞ！」

両腕のプラズマブレードを限界まで伸ばし、《蒼鉄》を構える簪へと突っ込む。

私は未だ、未熟だ。

「……ふう、これで今日の仕事も終わりか」

手続きを終えた書類をまとめ、重要書類と書かれたシールの貼つてある引き出しに入れる。

これを翌朝に他の先生が取り出して手続きを進めたりするわけだ。つまり、私は残業してでもこういった書類は仕上げないといけないわけだ。

まして私はあの問題児だらけの一年一組の担任であるから、書く書類も多い。尤も、この学校の教師はみな多かれ少なかれ残業を行うことが多々あるのだが、私と山田先生の場合はそれが特に顕著だ。

「お疲れ様です、千冬さん！」
「織斑先生だ、バカ者。また来たのか」

ほとんどの電気が落とされた職員室で一人肩を揉んでいた私に抱きついてきたのは、このIS学園の生徒会長、更識楯無だった。後ろからぎゅーっと私を抱きしめているが、その顔は横から見ても至極幸せそうな笑みになっている。

こいつは私に懸想している。本人からそう伝えられたし、あの時からこいつは私に尽くしてくれていることからそれはわかった。しかし、私はこいつの愛に応えてやれる自信もないし、人を愛する、人に愛されるということも分からない。初恋だつてない枯れた女なのだ。

女同士であることに偏見はないし、そもそもほとんど女しかいないこの環境で仕事をしてきた私は、散々女性同士の恋愛というものを見てきた。だから、まあ、そういう話も別にかまわないし、男だろうが女だろうが、真に好いた者同士ならば好きにすればいいと思っっている。

だが、私は……。

「千冬さん、暗い顔してますよー？　だめだめ、ちゃんと笑ってなきゃ。ね？」

「……まったく。織斑先生と呼べと、言っているだろうが」
気遣わしげな楯無、いや、恋華れんげの態度に強く怒ることもできず、やんわりとそう言うに留める。

「……本当にどうしたんですか？　いつもならゴチン、ってするの
に」
「人を暴力教師のように言うな」

確かに手を上げることはあるが、それだって無闇やたらにやっているわけではない。

指導のためでもあるし、教師としてなめられない為でもある。こは学校であると同時にISという危険な道具の使い方を教えている学校なのだから、万が一を起こさない為にも教師は生徒の上でなければいけないのだ。

尤も、こいつはその例外なのだが。

「……恋華」

「はいっ。なんですか、千冬さん？」

「お前は、私が好き、なんだよな？」

「はい！」

高らかに宣言された。満面の笑みで。

「……私は、お前のことを好ましいと思っている。だが、それが恋愛としての意味の好きかどうか分からないんだ」

そう、私には恋愛感情が分からない。

一夏を狙っている女子どもに偉そうなことを言っではいるが、おそらく色恋に関してはあいつらの方が上だろう。

人付き合いと恋愛をいっしょくたにしてしまう私のような人間よりも、ずっと。

「そうですか……」

「悪いな……」

「いえ！ それならそれでいいんです！」

にこりと笑みを浮かべた恋華は、そう言って頭を下げると職員室

を出て行った。

……悪いことをしてしまったな。

どことなくぱつとしないもやもやを抱えたまま寮に戻った私は、頭を下げて挨拶してくる生徒たちに挨拶を返しながら自室の扉をあける。

「おかえりなさい、千冬さん！」

裸エプロンの恋華がいた。

……ばたん。

「ふーっ……。あれか、疲れているのだな私は」

そつだ、ありえないだろう。私の部屋は寮長室、同室の人間もない。

ということ、もう一度扉をあける。

「おかえりなさいぶぎゅっ！」

「でていけい！」

アイアンクローで頭を鷲掴み、盛大に外へ放り出す。あいつ、本当にエプロン一枚だったぞ……。

「まったく……」

がちやり、と鍵を閉め、それからスーツをハンガーにかける。寮の就寝時間まで眠ることは出来ないが、少し休むくらいならスーツを脱いでいても問題はない。誰か尋ねてきたときはこのままでも問題はないのだし。

そんなことを考えていると、ふと乱雑に物が乗ったテーブルの上

に、湯気を立ち昇らせる黄色と濃いオレンジ色のコントラストが見えた。テーブルは其処だけが綺麗に片づけられている。

「これは……」

近づいてみると、それは綺麗に形作られたオムライスだった。ケチャップで器用にハートマークと文字が細く描かれており、わざわざこの為だけにケチャップの出し口を狭めるという器用なことをしていたことがわかる。

「千冬さん、お疲れ様です。恋華より……、か」

それは、恋華が私のために作ってくれたオムライスだった。

ひらがなで書かれた文字が可愛らしく、思わずあいつがこれを作っているところを想像してしまう。

私は携帯を取り出すと、メール画面を開いて文面入力に切り替える。

『食事ありがとう。さっきはすまなかつた』

誤字がないことを確認すると、出来るだけ見ないように送信を押す。

……オムライスは、予想以上に美味しかった。

第52話 特訓（後書き）

簪、蒼鉄の武装特性を開放。ちなみにエネルギー刃は振れば飛びます。

そして千冬さんのフラグが進行しました。初恋もまだな千冬さんと恋華の仲は……？

第53話 簪と代表候補生

それは、とある日の昼休みのこと。

食事を終えてクラスに戻ろうとした僕たちの前に立ちはだかったのは、一人の女子生徒でした。

「ちょっとよろしいかしら？」

「えっと、どちらさま？」

「私は天王寺葉桜^{てんのうじはなぐさ}、二年の日本代表候補生よ。更識さん、貴女は一体どういづつもり？」

突然現れた、黒い髪を長く伸ばしたその少女は、不思議そうに彼女を見つめる簪ちゃんに詰め寄る。

まるで、親の敵でも見るかのような目で簪ちゃんを見ると、唾を吐きかけるような勢いで口を開いた。

「まるで捨てるように日本代表候補生をやめるどころか、日本国籍まで捨てるなんて！　なんて愚かなんですの！？」

「それが、何か」

「それが何か！？　貴女、今そうおっしゃいました！？　貴女には、日本人としての誇りはないのですか！？」

「……貴女には、あるの？」

呆れたように聞く簪ちゃんに向けて、天王寺さんはまるで芝居でもしているかのように大振りな仕草で続ける。

「ありますとも！　選ばれた人間、努力と優れた才能によって登り詰めた地位！　そこに誇りを持たずしてどうしますの？」

「……そう」

「……ふん、所詮は姉の七光りで選ばれただけの人間ですね。更識の名だけで選ばれただけでは、誇りなどもてようはずありませんわね！」

そう言うのと、彼女は高らかに笑っていた。

……この人、滅茶苦茶嫌な感じだ。でも、簪ちゃんが黙っている以上私が怒るわけにはいかない。

けれどふーちゃんがキレそうです。

「あんたね、上級生だからって言っていていいことと悪いことがあるでしょ!？」

「鈴、いい……」

「簪、でもっ!」

「弱い犬ほど良く吠える……。噛み付く牙すらもてないなら野垂れ死ね……」

訂正。ふーちゃんよりも簪ちゃんの方がカチンと来ているようです。

そして案の定、顔を真っ赤にした天王寺さん。見事な挑発でした。

「このっ……!! いいでしょう、どちらが優れているか、はっきりさせてあげますわ! 明日の放課後、第二アリーナでけりをつけさせていただきます!」

「上等……、獣が人に勝てないってことを教えてあげる……」

にやり、と恐ろしげな笑みを浮かべて言い放った簪ちゃんを見て、天王寺さんは顔を真っ赤にして自クラスへかけていった。

……簪ちゃん、笑顔が怒ったときの千冬さんのようでしたよ。

時間は飛んで翌日の放課後。

私は『真打・鉄』を身に纏って、天王寺さんの前に浮いていた。

「『打鉄・式』……、完成したんだ……」

「倉持技研の連中が、貴女が完成させられなかったからと、私に泣きついてきたのよ。それで？ あなたが自分で造ったとか言うISはそれ？」

「『真打・鉄』、負けるつもりはないから……」

「どうせ出来損ないの機体なのでしょう？ それとも、それも更識の力で作り上げたのかしらね？」

ぎゃんぎゃんと良く吠える犬だ。まるでなっていない。

「相手を怒らせるならもう少し挑発の方法を考えたほうがいい……。程度が知れるよ……」

「何ですって……！ 名前だけの小娘が、凶に乗って！ 叩き潰してあげますわ！」

『打鉄・式』の特徴はその機動性と遠距離用誘導弾頭型兵装『山嵐』。

当初のモデルでは『山嵐』は八門のミサイルポッドを六機搭載し、マルチロックオン・システムによって最大四八発の弾頭を一斉発射するものだった。

見たところその仕様は変わっていないようだから、確実に叩ける。

「両者、遺憾なく終わらせる」

監督を頼んだ織斑先生の言葉に小さく頷く。

昨日の夜に立会いを頼んでおいてよかった。もし妙なことがあっても、織斑先生なら大丈夫だろう。

「では……、開始！」

放送でその言葉が響いた瞬間、天王寺さんが背中の荷電粒子砲を連射してくる。

次々と繰り出されるその攻撃を、左右へ揺れ動いてスレスレのところでかわしていく。

それにしても、『打鉄・弑式』は高機動型だったはず。どうして一歩も動かないんだらう。

「まあ、いいか」

《朱鉄》^{あかがね}を呼び出し、一直線に天王寺さんへと駆ける。と、天王寺さんは荷電粒子砲《春雷》^{しゅんらい}を撃ち放ちながら薙刀の様な形の《夢現》^{ゆめげん}を手を迎え撃ってきた。

《夢現》は超振動する薙刀で、複合装甲に対して強力な威力を發揮する。けれど、この展開装甲や武装同士の打ち合いにはやや不利だ。

「ふっ」

「くっ……！ 振った後が隙だらけですわよ！」

「そう思っただらあかかってくるといい……」

斬り返しは素早く、確実に。狙い澄ました一撃を装甲に食い込ま

せんと、刃が唸る。

対する天王寺さんはやや機動が不恰好だ。まだ『打鉄・弑式』に慣れていないのだろうか。なんにしても、手加減する要因には成り得ないのだけれど。

なにより、この戦いは香織達も見ている。そんなところで無様な姿を曝すなんて、耐え難い屈辱だ。

だから勝つ。

「はあああああ！」

「一撃一撃が軽い……、やっぱり貴女は犬だ」

「黙りなさい！」

天王寺さんは私から離れると、こちらへ照準を定める。危険、

ロックされています！

「墮ちろっ！」

背中《山嵐》から無数の弾頭が射出され、こちらへと一直線に飛んでくる。

それを見ながら、《蒼鉄》あおがねを呼び出す。この程度、物の数ではない。

「ソウエイノアオガネ《蒼鋭蒼鉄》」

《蒼鉄》の武装特性を発動させ、接近しすぎた弾頭を切り払うと、まだ遠くにある弾へ向けて刃を振るう。

空気を切り裂くように、三日月形の形を持って飛ぶBTエネルギーの刃が次々に弾を破壊していく。

それにしても、自分で作ったのなら武装特性くらい使えるはずなのに、なんで使えないんだろうか。

「な、なんなのそれは!？」

「……もしかして、武装特性を知らないの？」

「はあ!？ わけのわからないことを! もう手加減はやめですわ、墮ちなさい!」

怒ったのだろうか、顔を真っ赤にした天王寺さんはロツクを完全にこちらへと集約させた。今までの三倍以上か。なら、こちらもそれなりの対応をさせてもらおう。

「グレンノアカガネ
《紅蓮朱鉄》」

熱量を質量へと変換していき、巨大な刃へと変えていく。
さて、と。

「薙ぎ払え……、朱鉄ッ!」

近くにあつた弾を《蒼鉄》で切り払い、片手で持っている《朱鉄》を大きく横に薙ぎ払う。

その進路上に存在した弾を全て爆破させると、余剰熱波が天王寺さんへと襲い掛かる。

「きゃあああああ!」

その熱量で殆どのシールドエネルギーが持っていかれた上、部品の一部は完全に逝かれたようだった。

なんにしてもこれで終わりだろう。いや、おわらせる。

「ぶっ
」!

縦へ大きく振り下ろした《蒼鉄》から放たれたエネルギー刃が、しっかりと残りのエネルギーを奪い去る。

……さて、これで終わりだね。

「そこまで！ 勝者、更識簪！」

「私の勝ち……」

「くっ……！」

悔しそうにこちらを見る天王寺さんだったが、不思議とかわいそうだとかそういう気持ちにはならなかった。だって、清々堂々戦って勝った結果だから。

それに、この人はもっと強くなれる。『打鉄・弐式』の戦い方をちゃんとわかれば。

「ああ、そうだ」

「……？」

アリーナから出ようとして、一度振り返る。

これだけは、言いたかった。

「人と戦うためには、犬のままじゃ駄目だよ。もう一度、貴女が本当に強くなったときは、また戦おう」

もう一度ここまでくるのを、楽しみにしてるから。

「……更識、簪」

誰もが消え去った更衣室で、葉桜は小さくつぶやく。

自らが完成させた『打鉄・式』をもってしても打ち勝てない相手は確かに存在したし、自分がトップではないことぐらいはわかっている。

わかっていたが、同じ日本代表候補生でありながら安易にその地位を捨て、まるで何の努力もしていないかのように実態不明の会社へと移った簪のことが、彼女は許せなかった。

日本人としての誇り、天王寺家唯一の代表候補生としての誇り、そして同じ自作EISを持っている者としての対抗心。全てがごちゃ混ぜになって、葉桜は思わず簪に喧嘩を吹っかけていたのだった。

ところがどうだ、戦ってみれば相手は自分より数枚上手どころか、まるで遊びのように戦っているではないか。おまけに自分の知らない技術すら使い、いとも簡単に勝って見せた。

「天王寺」

「織斑、先生……」

「強かっただろう、あいつは」

「……はい」

いつの間にかやってきていた千冬の言葉に、拳を握りながらも頷く。

どうしようもなく認めなければならぬほど、葉桜と簪の力量差は圧倒的だった。

「なぜ負けたか、わかるか？」

「……機体の性能差、根本的な力量の違い、ですか」

「それもある。だが、本当に違っていたのは覚悟の差だ」

覚悟、その言葉を口内で反芻し、それから振り返るように千冬に聞く。

「それは、一体」

「確かにあいつの力量はずば抜けて高い。だが、あいつは戦うことに命と魂を賭けている。愛するもののために戦う覚悟を決めているのさ」

「戦う、覚悟……」

「……いずれ、お前もわかる 때가来る。腐るなよ」

普段は厳しい千冬の優しい一言に、葉桜は思わず涙を溢れさせた。自分には、誇りはあってもそれだけだった。それをわかっていたはずなのに、どうしても認められなかっただけなのだ。

天王寺葉桜は、名門天王寺家の一人娘として育てられた。といっても、天王寺家は代々男系の家系であったため、ISが出てきてからは衰退の一步を辿っていたのだ。

葉桜はISが出てきてからというものの、殆ど自由を与えられずに天王寺家を救うための才子となるべく育てられた。一流の教育を施され、レールに乗って進むことが当たり前前の人生。いつしか葉桜は、自由を愛する自分を守るために、誇りを守るといふ名目で他人に当たるようになっていた。

だからこそ、簪はどうしても認められなかった。才覚ある姉をもち、自らも代表候補生だったはずが、あっさりとその地位を捨てられる、そのことを認められなかったのである。

だが、もうそれもなくなった。

「……簪さん。今度は、負けませんわ」

勝ちたいと、心から願う相手が生まれた。

この日から、天王寺葉桜は再び花開くその時を目指して走り出したのである。

彼女が日の目を見るときは、また後々のお話。

第53話 簪と代表候補生（後書き）

簪主人公回でした。

葉桜ちゃんはまだ後々出てきます。オリキャラですが。

一応これだけ強いんだよ、という目安回でもある。

第54話 変わる心（前書き）

今回は少々短いです。

第54話 変わる心

高層マンションの最上階の一室で、キティはベッドの上にいる。

「ふふ……、ここがいいの？」

「うく、あはあっ！」

キティが体ごと這っているのは、一糸纏わぬ、生まれたままの姿となっているオータムの上だった。

オータムは頬を染め、まるで愛しい相手とまぐわうかのように甘い声を上げながら乱れている。その体躯へと、キティはこそまさしく愛しい物を見、愛でる様に指を這わせた。

荒事も多く経験していながら、オータムの肌はまるで赤ん坊のように一つの傷もなく、キティがその短く切りそろえられた爪を立てると、鮮やかな紅として残るほどに美しい。

「キティ、キティい……」

「あらあら、可愛い声を上げて。嫉妬と憎悪に狂ったメス猫はどこへ行ったのかしらね？」

「ご、ごめんなさい、私……！」

こころごとく楽しんで言葉を並べるキティのそれを聞いて、オータムはまるで世界の終わりのような顔で謝罪の言葉を口にす。あたかもそれは、忠義に厚い犬が主へ許しを請うような、いつそ悲痛なまでの媚を含んでいた。

その言葉を聴きながら、しかしキティは人差し指を立ててオータムの唇へと添えて口を開く。

「いいのよ、オータム。今の貴女はおりこうさん、もうあんな愚か

な、愚鈍でおぞましい真似はしないわよね？」

「うん、うん……！ 絶対しない……！ だから、だから捨てないでキティ……！」

「ええ、捨てやしないわ。私とスコールで、ずっと可愛がってあげる」

子供をあやすように猫撫で声でそう言うと、キティは片手で喉を圧迫しながらもう片方の手を下の泉へと伸ばしていく。くちゅりと音が響いた。

「ふああ！ そこ、そこお……！」

「んー？ なあに、なにか言いたいのかしら？」

「いいっ……！ もっと、もっとしてえ！」

「あはは、いいわよ。ほら、もっと乱れて……！」

それからしばらくの間、部屋から媚声がやむことはなかった。

やがて部屋が静まり返った頃、コンコンと部屋をノックする音。

「どうぞ」

扉を見ることなくキティが言うと、扉がそつと押し開けられる。

そこには、バスローブ一枚に身を包んだスコールの姿があった。

スコールは扉に鍵をかけると、ベッドの上で下半身をシーツで隠したキティの横に腰掛ける。

「お待たせ、キティ。待ったかしら」

「いいえ、大丈夫よ？」

「その割には、オータムが果て過ぎていない？」

「少し過激に可愛がってしまったの。新入りの奴隷はきっちり、主が誰か教えてあげなければね……。ふふ」

艶やかに、そしてどこか怖気の走る笑みを浮かべたキティを見てから、スコールは体を後ろへ倒す。丁度、キティの膝上へ後頭部が当たるように。

自分から絡め採られにきたスコールは、魔性の牙の施しを受けんとし、濁った目を眼前の子猫へ向けて身を委ねる。

喉笛を曝すスコールを前にちろりと舌なめずりをして見せたキティは、ゆっくりと顔を下ろす。それはあたかも恋人に口付けんとするように、妖艶なもので。

その口付けは、ゆっくりと首筋に牙を沈め、スコールの媚声が鳴り終えるまで続いた。

「違う……私はあのお方のことなど……、くそ、違う、私は、私は」

その頃、別の部屋ではマドカが一人、電気もつけずに蹲っていた。頭の中がかき乱され、まるで自分が自分ではないような感覚が四六時中続いているマドカの精神は、すでにほぼ限界に達していた。キティの頭の中ではもう一人の自分が常時ささやいている。屈服しろと、体を明け渡せと。

「黙れ、黙れ……！」

『もういいでしょう、屈してしまっても。身を委ねれば、甘美な快樂が、支配される幸福がずっと続くのよ？　これほど幸せなものは

他にない……。あの方に身を委ねましょう、ずっと飼ひ殺されるのも、悪い選択ではないわ」

「うるさい……！ 私は私だ……！ 貴様の意見になど耳は貸さん！」

息を荒立て、精神を軋ませながら尚もマド力は抵抗を続ける。

今にも沈みそうな浮き舟は、寸でのところでまだ沈まずに保たれていた。

そんなマド力を、もう一人の自分は冷笑する。

「あつはははは！ 本当にお馬鹿さんなのね、『私』！ いいわ、そうやって拒絶していなさい。寵愛を受けるのは私の役目、甘美なる時をずっと待ち焦がれているから！ お前は所詮木偶人形、殺すことでは自分を知ることができないのね！ ああ、可哀想な『私』！ なんて不幸なんでしょう！」

「うるさい！ 黙れえ！」

目の前の姿見を拳で叩き割る。割れた鏡が手を傷つけ、真っ赤な血を滴らせた。

ああ、傷つけてしまった。あのお方に怒られてしまう。

思ってから気づく。自分は今何を思ったと。

「くすくす、貴女ももう持たないわね。ああ、安心して？ 『私』の代わりに私がこの体を使ってあげる。精一杯、あのお方の役に立てるように、卑しい奴隷として、ね……」

「あ、あああああああああああああああああああああああああああああああああ！……」

媚声と慟哭は交じり合い、やがて物語を乱す力となる。
しかし、それが露わとなるのは今しばらく先のことであった。

「ひっ……！？」

「ん、どうした一之瀬」

授業を受けていると、突然背筋が凍るような恐ろしさを感じた。
わ、皆に見られてるし。

「あ、い、いえ、なんでもありません。手の上にハエが止まっていたので……。手を洗ってきてても良いですか？」

「ああ、行って来い。では授業を続けるぞ……」

千冬さんに許可を貰って、ゆったりとした歩調で教室を出る。

なんとというか、胸の奥をぐちゃぐちゃにかき回されたような気持ち悪さがする。変な物を食べたわけでもないのに、一体どういふことなんでしょう。

洗面所まで辿り着くと、冷水機で冷たく冷やされた水を飲み込んで吐き気を抑えた。それでも、胸糞悪いというか、そんなような感じは消えなかった。

「イヴ、健康状態は大丈夫？」

「はい、特に異常はありませんが？」

『そう。ありがとう』

『……あまり無理はしないでください。無茶はもう諦めましたが、平時くらい体に気を使ってください』

『あはは……、気をつけます』

イヴに叱られながらも、私は教室への帰路に着いた。

そして、時間は過ぎ去って午後の授業。

「では、私とナターシャ先生とで指導を行う。偶数は私、奇数はナターシャ先生の方へ行け。専用気持ちはいったん出ている。駆け足！」

珍しく一組と四組の合同実習となった今日の午後は、そんな言葉と共に始まった。

それにしても、ナターシャさんって意外と指導厳しいんだよね。元軍人だし、当たり前前だけど。

「はい、私語はやめなさい。今日は皆に遠距離武装と近距離武装の違いを実験してもらいます」

「先生、それは一学期でもやったんじゃない……」

四組の生徒が質問する。

「そのことは聞いてるわ。けど、あなたたちがやったのは触りの部分。今日は二時間かけてみっちり、その使い方を学んでもらうわ」

「あの、具体的には何を……」

「まず全員、ISを装備してもらいます。こっちは装備の量が多いラファール・リヴァイヴよ。でも、量がないから半分ずつね。さ、まずは一組の生徒からやってもらいましょうか」

一組の生徒が『ラファール・リヴァイヴ』を装着し終えたところで、ナターシャさんがこちらを見た。

「それじゃあ、専用機持ちの皆はISを装備している子達に指導する側よ。サポートするから、がんばってみて。さあ、それじゃあ均等にバラけてね」

はい、とISを装着した子達が返事をしてから、手際よくバラけていく。さすが織斑先生が一学期間みっちりやっただけあって、移動はスムーズだ。

「私のところは六人か。皆、よろしくね」

「はい！」

「よろしくね、一之瀬さん」

「よろしくー！」

「よろしくお願いします」

口々にそう言う皆。

そんな中、ナターシャさんが声を上げた。

「それじゃ、まずは射撃兵装から行きましょうか！」

「はい。それじゃあ皆、マシンガンを呼び出して」

私の言葉に従って、慣れないながらも量子変換されているマシンガンを呼び出す六人。ちなみに、私もすでに『梟』に乗っております。

で、私も『夜雀』を呼び出して、肩に構える。

「撃ち方は一学期やったとおり、肩に当てるか腰溜めに撃つかです。片手で伸ばして撃つてもいいですが、その場合は命中率が落ちるこ

とを忘れずに。それじゃあ、的を出すので一人ずつ射撃してみましよう。六つ出すので、半分は肩、半分は腰でやってみてください。忘れずに、モードは単発にしておいてくださいね」

よし、がんばろう。

第54話 変わる心（後書き）

がつつり危ない描写をいれてみました。

さて、そろそろ七巻の話に入れるだろうか……？

第55話 ずれる歯車

その知らせが来たのは、普段通りの授業の途中だった。

突然第二会議室へ集められた一年の専用機持ちたちは、揃ってその椅子に並んで腰掛けるよう言われた。

「突然招集をかけてすまない。緊急事態だ」

「……夏のメンバーと同じということは、またそう言った事態ですか？」

「そういうことだ。全員、くれぐれもこの内容は漏らすな。良いな」

織斑先生が、表情をより一層引き締めて言った。

ここにいる教員は織斑先生に山田先生、そしてナターシャさんの三人。バックアップには他の先生も入るんだろうけど……、一体何が起きたんだろう。

「今から一〇分ほど前、ここIS学園へ向けて時速四〇〇〇キロを超える速度で進む三機のISを確認した。ここへの到達時刻は今から一〇分後、上層部は夏のメンバーと我々三人でその三機を押さえろと言ってきた」

「……一〇分あれば、この学園の生徒なら全員逃げられますよね。それに、この学園には自衛用の装備もある。時間稼ぎぐらいはできるはずだ」

「だろうな。だが、上層部は懲りずにやれとお達した。全員、準備を整えてアリーナへ向かえ。万一外に出た場合は深追いしないでいい、今回の目的は学園の防衛だ」

「夏のあれでもまだ懲りてなかったのか……。」

「それにしても、一体どこの誰が……？」

「相手の情報はどうなっていますの？」

「……驚かずに聞け。相手は三人とも、男のIS操縦者だ」

「なっ……!?!」

「男ですって!?! そんなばかな!」

男のIS操縦者は、私と一夏の二人だけ。

ここに来ていきなり三人も、しかも全員ISに乗ってここを目指しているなんて……。東ちゃんからの連絡はないから、たぶんこれは東ちゃんのやっていることじゃない。

けど、本当に一体どういうこと……?」

「生徒会も動いているから、一般への被害は最小限に抑えられるだろう。しかし、万が一もある。注意して戦闘を行ってくれ」

「織斑先生、報酬は出るんですか?」

「くると思っていたさ。今回は出さないそうだ」

……おい、ちょっと待てって。

「それは、私たちに喧嘩を売っているということでもいいんでしょうか?」

「さて、落ち着け。その代わりに、私の個人資産と、楯無を通じて日本政府から報奨金が出る。全員合わせて二億程度だが……、いいか?」

「……まあ、良いでしょう。私自身は非常に不満ですが、他の皆がやる気になっているので」

それに、焦った千冬さんが見られてちょっと楽しかったりしますし。

けど、これはつまり「自分の通ってる学校守るんだし、お金要ら

ないよねー？」ということでもいいんですね？ よーし、後で覚えとけよ。

『イヴ、記録録った？』

『ばっちりです』

『ナイス』

音声ログもばっちり残ったし、これでもし「私たちが出しました」と言っても言い逃れはできない。

さて、それはともかくとして。

「それで、相手の機体情報はありますか？」

「……いや、ない。全て未確認の機体だ」

「独力でコア三つと完全なアンノウンの機体を揃えられる国が組織が絡んでるってことですか」

「だろうな。殆ど不確定要素ばかりだが、よろしく頼む」

そう言って、千冬さんはこちらへ頭を下げた。

……本当に珍しい。千冬さんが頭を下げるなんて。

「それじゃあ、ブリーフィングを始めますね。皆さん」

そんな山田先生の言葉と共に、私たちは一層気を引き締めた。

どうなることやら……。

その頃、IS学園より六〇〇キロメートル強の地点にて、三人の男が言葉を交わしていた。

「まったく、親父殿も扱いが荒いぜ。ポッドから出していきなり「死んで来い」だぜ？」

ケラケラと軽く笑いながら、漆黒の機体に身を包んだ少年はつまらなそうにそう言う。

その言葉に、隣を飛ぶ青年は諦めたような溜め息を吐きながら返す。

「それが父上だ、仕方あるまい。あの人は生粋の研究者でもあるからな」

「どうでもいいけどさあ、殺しちゃ駄目なんだろう？ つまんねー仕事……」

「ケヒヤーハハハア！ 別にいいじゃねーか、泣き叫ぶ顔を堪能させてもらおうぜ？」

「まあ、それもいいかあ……。ぶち殺せないのはつまらないけど」「全く、お前たちは……」

高校生くらいの少年が高笑い、それよりも若い少年は裂けるような笑みを浮かべる。

その様子を見て、青年はそんなことを呟きながら頭に手をやって頭を振った。

「まっ、いつちよ派手に打ち上げようぜ？」

世界に、反撃の狼煙をよオ？

三機は飛ぶ。

世界に、新たな風を吹かせるために。

『アンノウナー、二、三、到達しました！ エンゲージまでカウントダウン！』

『各員、死ぬことは私が許さん！ 相手が撤退を始めたら深追いはするな、いいな！』

「はいっ！」

『了解』

『……うん』

『了解、千冬姉！』

『了解です』

『わかっていますわ！』

『はいっ』

オープンチャンネル
開放通信から聞こえる千冬さんの声に、皆が口々に応える。

目標が降り立つであろうアリーナには、私たち全員が待機していた。

張り詰めた緊張感が、まるで釣り糸のようにぴんと張り巡らされる。直後、肌が逆立つようなおぞましい感覚と共に、アリーナのシールドバリアが砲撃によって碎かれた。

「よーイーIS操縦者諸君！ 元気でやってるかアー!?」

「あまり派手なのは好みではないが……、まあよかるう。諸君、我々は一般生徒に危害を加える気はない。それは我々としても不本意だ。専用機持ちの諸君とだけ戦えれば、それでいい」

「どうでもいいけど、不慮の事故なら殺しても良いよね」

地に降り立った三機のISを見た途端、背筋が凍るような感覚に襲われる。

殺気だった。いつそ純粹なほどの殺意の鎧に身を包んだ三人の男たちの中の一人、やたらとテンションの高い青年が前へ一歩進み出た。

「さて、それで？ 誰が相手してくれるんだ？ まさか teme たちがやるんじゃあねえよなあ？」

「残念ですが、わたくし達ですわ」

「セシリア・オルコット、イギリスの候補生だな。出来損ないの遠隔装備」

「カツ！ そんな糞ガキに用はねーんだよ！ 福音の操縦者、teme ならまだやれんだろ？ いっちょかまそうじゃねえの?」

「あら、ダンスのお誘い？ 良いわよ、あなたの相手は私がしてあげる」

糞ガキと呼ばれて若干切れているセシリアさんを尻目に、ナターシャさんは相手の殺気とプレッシャーをもともせずじゃんわりと返した。

「他に被害を出したくないのでしょうか？ なら、それぞれ別のアーナでやり合わない?」

「……そうだな。我々としてもその申し出はありがたい。だが、ナターシャ嬢はともかく、君達学生が私たちと対等に渡り合えるなど

とは思い上がらないほうがいい。死ぬぞ」

「なんだと……！」

「聞き捨てなりませんわね……！」

「熱くなるな、バカどもめ。相手の実力は未知数、この殺気から言ってもあの余裕の元は見て取れるだろう。うかつに挑発に乗るな」

穏やかそうな男性の言葉に激昂した二人をラウラがたしなめると、頬を吊り上げて眼帯を格納領域へ転送した。

「うわあ、ばつちりやる気になってるねラウラ。」

「どうでもいいからさあ、やるの？ やらないの？ はっきりしてよ」

「……皆さん、あの口の悪い人は私とナターシャさん、簪ちゃん。男性の方は一夏、セシリアさん、シャルロットさんが。残った彼はふーちゃんとラウラ、篝さんでお願いできますか？」

『私は賛成よ』

『問題……ない……』

『ああ、いいぜ』

『……わかりましたわ』

『オツケ、暴走しないように見張るのも含めてね』

『余りものって気に食わないけど……、りょーかいよ』

『了解だ！』

『承知！』

全員分の返答が返ってきた次の瞬間には、それぞれがそれぞれの相手へ向けて武装を構える。

その様子を見て向こうも此方の意図を察したのか、口の悪い青年はにやりと嫌な笑みを浮かべた。

「いいねえ、じゃあ始めるとしようかア！ ローウエン、テメエは

五番だ。アルファ、テメエは三番、行け！」

「了解した。では、行くとしよう」

「命令するなよ……。別にいいけど」

男性と少年が飛び去り、それを追って皆もそれぞれの相手を追って飛び去る。

残ったのは、私と簪ちゃん、そしてナターシャさん。ちなみに、ナターシャさんはまだISを起動していない。

「……さつてと。テメエらが俺の相手つてわけだな？」

「そうよ。お互い名乗りを上げておきましょうか、様式美としてね？」

言ってから、静かにISを起動させる。

現れたのは、新調され更に銀の輝きが増した『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』を纏った姿のナターシャさん。

「私はナターシャ・ファイルス、バインド・カンパニー所属よ。はい次、香織ちゃん」

「はあ……。緊張感に欠けますね。私は一之瀬香織、バインド・カンパニー所属です。よろしく」

「……ああ、親父殿の言つてたプロトタイプつてのはテメエのことか！ ハツハアー！ なるほど、そういうことが、カカカカカ！ おもしろえな！」

「何を言ってるんです？」

「ああ？ あー、テメエはまだしらねえのか。まあいいや、そのうち嫌でも知ることになるぜ。今知りたいなら、まず俺を倒すんだな？ クキカカケクケカカ！」

なんだこの人は……。なんだか気味が悪い。

どこかずれていると言うか、なんだか違うんだ。何か、何か。

「……私は更識簪、バインド・カンパニー所属。覚悟して」

「ああ、お前はいいや。興味ねーし」

「……あなた、友達少ない？」

「うるッせエーよ！ まあいいや、俺の名はグリム、そしてこいつが」

肩辺りまで伸びた黒髪を振り乱し、獰猛な視線で私たちを見る。

全身を覆ったその装甲をふわりと浮かせ、牙を剥き出しにして笑みを浮かべた。

「、ニユクス」だ。死なねえ程度に殺してやつから、覚悟しとけよ？ クキカカケコカケキクケカキケカカコキカカッ！」

第55話 ずれる歯車（後書き）

はい、原作崩壊開始。

突然現れた三人の男性IS操縦者、その正体と目的とは。
次回もお楽しみに！

第56話 死神たち（前書き）

今回は途中経過です。

第56話 死神たち

「ツァシャツハア!!」

「くっ……! はあっ!」

「ハンツ、良い打ち込みだが、そんなもんじゃ『ニユクス』の防御は破れねえぞオ!」

戦闘が始まってから数分、香織達とグリムの戦闘は互いに傷を与えることなく続いていた。

と言つても、互いの消耗具合は大きく違う。香織達がやや汗ばんでいるのにもかかわらず、グリムは汗一つかいていない。

この数分間を全力で攻め立てていると言つのに、グリムの操る『ニユクス』の装甲には傷一つつけられていなかった。

「なんて硬さなの……!!」

「硬いだけじゃない、まるでアレ自体で弾かれてるみたいなの……」

「BTエネルギーも実弾も通用しない、か。なんて滅茶苦茶なのかしらね」

そう言いながらも、攻撃の手を休めることはしない三人に、グリムはにやりと笑みを送る。

まるで、破られないことが確実だと言つかのようなその笑みに、三人は更に攻め手を苛烈に加速させていく。

「そらそらどうしたア! まるで通つてねエぞ!」

「こつなつたら……!! 《グレンノアカガネ紅蓮朱鉄》!」

「ッ、ナターシャさん!」

「おーけー、下がるわよ!」

香織とナターシャが後方へ下がり、簷が前線へ残る。

数分ではあるがたまった熱量をすべて物質化すると、防御を固める『ニユクス』目掛けてその刃を振り下ろした。
が。

「……おいおい、効いてねエぞオ！ ふざけてんのか、糞ガキがア！」

「簷ちゃん、下がって！ 次は私がいく！」

タッチするかのようには前後を替わると、香織は突撃姿勢へと体を構える。

そしてゆっくりと呼吸を整え、静かにグリムの方へと視線を向けた。

「『啄木鳥』、武装特性、『ピンポイントクエイカー』起動！」

声に反応し、左腕の装甲に隠れていた『啄木鳥』が大仰に展開されていく。

やがてそこに残ったのは、恐ろしいほどに巨大な一つのパイルバンカー。『啄木鳥』の優に五倍はあるだろうそれに加え、巨大な鉄杭の後ろには火薬を爆破させる大きなカートリッジが装填されていた。

「おおおおおっ！」

「ハッ、貫けんのか、そんなもんでッ！」

「打ち」

火薬に引火、接敵した瞬間に杭が打ち出される。

「貫くッ！」

直後、金属同士が激突する悲鳴のような音と共に、装甲がべこんと凹んだ。

けれど、それだけ。その結果に、香織は思わずそこから飛び退いてグリムを睨みつける。

『イヴ、解析は後どれくらいで終わる？』

『後五分は必要です、稼いでください』

『りょーかい』

五分間というその長さが、今は恐ろしく長く感じられることだろう。

香織たちが警戒しながら武装を整えているあいだ、グリムは不気味に香織たちの方を見つめ続けていた。

その頃、第五アリーナへ到着した男性と一夏たち三人は、互いに相向かっていた。

「織斑一夏、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア。なるほど、安定はしているようだな」

「どういう意味だ？」

「戦闘陣形としてはいい形だということだ。だが、それだけでは勝てないな」

そういうと、男性はあまりにも軽装なそのISを軽く動かし、戦闘態勢に入る。

「私の名はローウェン、そしてこいつは『ヒュプノス』。苦しみなき死をもたらす力だ。お前たちはどれほどこの眠りに抗えるか……、試してみるか？」

「その言葉、後悔させてあげますわ！」

「二人とも、あまり前に出すぎないように！」

三人も臨戦態勢へと突入したその直後、ローウェンは『ヒュプノス』と共に飛び上がる。

しかし、『ヒュプノス』は次の瞬間、その姿をかき消した。

「なっ!?!」

「消えた!?!」

「ここだ」

声が聞こえたと同時にセシリアの背部装甲が打撃され、ぐらりとセシリアの体が揺れる。

いつ現れたのかもわからないローウェンは、またもや姿を消した。

「消えてるわけじゃない、知覚できないスピードで動いてるだけだよ！」

「けど、ハイパーセンサーでも捉えられないってどうなってんだ!?!」

「くっ……! 逃がしませんわ!」

当惑する二人の影から、セシリアは《ブルー・ティアーズ》を繰り出す。

なんとかかしてローウエンの姿を捉えようと、四滴の蒼い雫を飛ばすセシリアだったが、その直後にそのうちの一基が『蹴り碎かれた』。

「なあっ!？」

パキヤン、と情けないほどに呆気ない音を立てて碎けたそれは、光となって格納領域へ戻される。

それを見て、セシリアは戦慄した。相手が、確実に装甲を砕くだけの力を、その脚に持っていることを確信したから。

ただの蹴りだったはずのそれで武器が砕けるということはつまり、蹴られればそれ以上の衝撃が加わる。

思わず絶対防御が働かなかつたらという想像をしまい、セシリアはふるふると顔を左右に振り、歯を食いしばってそこにいない相手を見据えた。

「セシリア、大丈夫？」

「え、ええ。けれど、油断ならない相手だというのははっきりしましたわね……」

「もとよりそのつもりで掛かって来い。ISに乗っていると、いかな武人と言えどもその感覚は鈍る。あまりに利便性の高いそのせいで、己の技が鈍る故にな」

再び目の前に姿を現したローウエンはそう言い放ち、再び姿を消す。

猛然と繰り出される蹴りを回避すべく空へ飛んだ三人だったが、次の瞬間にはシャルロットが地面へと叩き落されていた。

「シャル!」

「くっ!!! 二人ともとにかく飛んで! 出来る限り速く!」

「わ、わかりましたわ！」

シャルロットの指示に従い、全速力での回避機動を開始する二人に対して、ローウェンはただその冷めた瞳をむけるだけだった。

第三アリーナへと飛んだ黒いISの少年と、鈴、ラウラ、箒はそこへと到着すると、互いに向き合うようにして戦闘意欲をむき出しにしていた。

ただし、鈴と箒は闘気、少年とラウラは殺意と言う違いはあったが。

「あーあ、戦えそうなのは皆向こうに取られちゃったな」

「へえ、私たちは戦えないっての？」

「……そっちの遺伝子強化素体はまだやれそうだね？ 僕らよりも不完全だけど」

「……やはり貴様達、バイオノイドか」

「わかってたんだ。まあ、あれだけ情報出してたし、そりゃそうか。グリムもバカだよな、いくら発言許可が下りてるからって」

ラウラと少年は、互いに殺気と言葉をぶつけ合う。その視線は、相手の一挙手一投足をしっかりと監視するように向けられていた。

互いの素性を知ったのは、ラウラと少年のみ。しかし、鈴と箒はそれに気をとられることなく警戒を続ける。

目の前の相手は注意を散らして勝てる相手ではない。それをわかってからこそ、不可解なことがあったとしても、決してそれに気をとられることはなかった。

やがて、少年はにやりと頬を吊り上げて笑う。その途端に、今までの殺気が嘘だったように濃密な殺気が溢れ出して来た。

「いいね、ようやく楽しめそうだ。僕の名はアルファ、そしてこいつは『タナトス』。僕の一撃を受け止められるかな？」

「上等だ、掛かって来い！」

「負けるわけには行かないのよ！」

「聞かせてもらうぞ、貴様らのことを！」

直後、互いは一斉に空を蹴る。

手を翳して放たれたラウラのAICを急なバクターンからの急上昇で回避すると、追い討ちをかけるように放たれた鈴の《龍砲》を三基のスラスターを使用した短距離の瞬間加速、個別連続瞬間加速^{イケニッション・フーミナルパーイケニッション・リスト}によって回避してみせる。

その姿をもしナターシャが見ていれば、驚愕したことだろう。彼女の元パートナーだったイリス・コーリングの使用した技術を、完全な形で見せ付けられたのだから。もっとも、スラスターの数はイリスよりも一つ少なかったが、それでも恐ろしく繊細で超絶的な技術には変わりなかった。

その技術力の高さを目の前で見せ付けられた三人だったが、それでも闘気が落ちることなく、むしろ高まりさえしていた。

「斬るッ！」

「のろまが、斬るって言うのはこうやるんだよッ！」

「なっ!?!」

「篤!」

鋭く斬り込んだその一撃をいとも簡単に回避して見せたアルファは、振り返りざまに瞬間加速イグニッション・ブーストを発動させて急接近し、手にした大鎌を大きく振りぬく。

装甲を大きく斬り削られた筈は、その衝撃を逃がすように後方へと吹き飛ばされた。

「ぐっ……！　なんだ、あの鎌は……！？　斬られた痛みが、確かに……！」

「あっはははは！　こいつは《デスサイズ》、その武装特性は斬った相手にその痛みを与えることさ！　ほらほら、いつシヨック死するかな！」

「悪趣味な武装なこと」

「まったくだ。筈、やれるか？」

「ああ、大丈夫だ……！　一度斬られたくらいで、落とされるものか！」

三人が、アルファを囲むようにして宙を舞う。

その中で、アルファはにやりと頬を吊り上げた。

「恋華れんげ、状況はどうなっている」

「ベリーバッド、とても悪いわ。生徒は全員地下シェルターに避難させたけど……、相手のISはデータなし、操縦者の戸籍もなし」

香織達がそれぞれの戦いを始めた頃、恋華と千冬、真耶は管制室に集まっていた。

「私の《アルカエスト》は相手が弱つてないと取れないし……、私でも真つ当に戦えるレベルの相手を三人も揃えるなんて」

恋華はそう言つて歯噛みする。学園祭の折に『ミステリアス・レイディ』が剥離剤リムーバーの機能を取り込んだことで発生したナノマシン、《アルカエスト》は、相手のISを強制解除し手に入れることができるが、それは相手のISのシールドエネルギーが二桁以下であり、武装や装甲が相当破壊されていないといけないため、かなり使い勝手は悪い。

それに加えて今はあれほど溺愛していた妹が戦っている上に、愛する千冬は手を煩わされている。これで彼女がまともに黙っているわけがなかった。

「……彼女を頼りましょう」

「……それしかないか。あいつには私から連絡を入れる。お前は織斑たちのところへ行ってやれ。あそこが一番不利だ。私もあいつを呼んだら『打鉄』で出る」

「いいんですか、千冬さん？ そんなことすれば、委員会が……」

現在、出撃指令が降りているのは一年生の専用機持ちとナターシヤのみ。

しかし恋華は生徒会長であるため問題はないが、千冬は一教師である。いかに特別待遇とはいえ、身勝手な行動を行えばどうなるかわからない。

そのことを聞いた恋華に、千冬はいつもと変わらぬ不敵な笑みを浮かべて見せた。

「教え子を守れぬ教師など、死ぬべきだ。私はまだ死にたくないからな。山田君、管制は頼むぞ」
「はい、任せてください」

力強く頷いた真耶を見ながら、千冬は堂々と携帯端末を取り出す。ここに、世界最強たちが動き出した。

第56話 死神たち（後書き）

それぞれを圧倒する三機のISと、動き出した千冬さん達。
次回もお楽しみに！

第57話 勇気の雫（前書き）

どうしてこうなった！

第57話 勇気の雫

「おおおおおっ!」

「攻撃が大振りすぎるぞ」

《零落白夜》れいらくびやくせを発動した《雪片式型》ゆきひらにがたを振りかざした一夏の閃を、ローウエンはいとも簡単に回避し、お返しとばかりに蹴り付ける。

バキツ、と装甲の軋む音とともに一夏が吹き飛ばされると、その隙を突いてセシリアとシャルロットの射撃が飛んでくるが、その全てを蹴りの一撃で叩き落とした。

「出鱈目ですわね……!」

「一夏、大丈夫!？」

「おう、なんとか……。けど、もうシールドエネルギーも少ないぜ」

「……そろそろ決めるとしよう。行くぞ」

ローウエンの声が聞こえた瞬間に、全員の動きが止まる。

正確には、止められていた。人の知覚もハイパーセンサーも完全に超えた速度で三人を蹴り続けているせいで、一切の身動きが取れなくなってしまうていた。

「ぐああ……っ!？」

「こんな、もので……っ!」

三人のシールドエネルギーは瞬く間に減っていき、中でも初めからかなり減っていた一夏のシールドエネルギーは、ほとんど切れかかっている。

次の瞬間、一際強力な一撃が一夏の腹部に突き刺さり、一夏は衝撃とともにアリーナの壁に激突し、意識を失った。

「一夏さん！」

「一夏！ この…… おおおおっ！」

「怒るか。だが、それでも足りんぞ」

気絶した一夏を見て頭に血が上ったシャルロットは、加速をつけてローウェンに接近すると、勢いに乗って近接ブレード《ブレット・スライサー》を振りかざす。

しかし、当たる間際で回避され咄嗟にそこから飛び退いたシャルロットの背部を、『ヒュプノス』の一撃が襲った。

「きゃああああー！」

「シャルロットさん！」

「これで二機。さて、どうする？ セシリア・オルコット」

後部からの一撃で落とされたシャルロットを庇う暇もなく、残されたセシリアの前にローウェンが立ちはだかった。

一撃をかすらせることもできず、あっという間に一夏とシャルロットを落としたローウェンだったが、そこに疲れた様子はまるでない。そんなローウェンをみて、セシリアは今度こそ『恐怖』で心が震えた。

今まで、ISに乗って恐怖を感じたことなどなかった。そこには確かに『絶対防御』という壁があり、命までは落とさないといい妄信にも似た確信があったから。

もしISが何かの拍子に動かなくなってしまうえば、それはイコール死に結ばれるんですよ!？

セシリアが思い出したのは、夏の戦いの折に聞いた、香織の悲痛な叫び。

あの時はまだ、本当に分かっていたわけではなかった。そのことに、今になって気づいたセシリアの眼からは、押し出されるようにして涙が溢れ出した。

ただ、怖い。その思いで溢れ出た涙は、次々に頬を伝って落ちていく。

「泣いているのか」

「あ………」

「……その恐怖も、すぐに終わる。祈れ」

いつそ思いやりの心すら伝わりそうな優しい声に、しかしセシリアは身を震わせる。

先ほどまでの挙動が嘘のようにゆっくりとした仕草で近づいてくるローウエンの足が、ざりざりと砂を踏みしめる。その音で、自分がいつの間にか地上に降りていたことに気付いたセシリアは、思わず腰を抜かして地面に座り込んでしまった。

「いや……こないでえ……！」

セシリアは必死に手と足で体を押しした後ずさるが、その距離は一向に縮まることがない。ローウエンが決して付かず離れず、ぴつたりと数十メートルの距離をとって歩いているせいで。

やがてE.Sの装甲とアリーナの壁がぶつかり、ガチンと音が立つ。その音で、セシリアは自分の逃げ場がなくなってしまったことを知る。

涙が、止まった。

「……いや」

「安らかに眠れ。永久に」
「……いや、ですわ……」

消える。涙も、恐怖もすべて。いつの間にか、セシリアの心には一つの的だけが現れていた。

さあ、撃て。

声が、セシリアの頭の中に響く。
いつの間にか、世界は止まっていた。その中で、主の命を待つ三滴の雫。それが視界に収まり、セシリアはゆっくりと腕を持ち上げる。

ブルー・ティアーズ、その名の意味は。

「そこに込められた、思いは……！」

止まった世界の中で、セシリアは思い出す。まだ両親が生きていた頃、父が生き生きと話していた話題を。
そこで、出会ったのだ。

「思い出しましたわ……！」

イギリスの第三世代IS、『ブルー・ティアーズ』。その初期構想は、セシリアの父、ブラウン・オルコットの発案したものだった。ISという、言わばロマンを追い求められるそれが登場してから、父は卑屈にはなっていたがそれ以上に夢を追っていた。だからこそ、母も父のことを見離さず、時折熱に浮かされたような眼で見ているのだと、セシリアはその時ようやく悟る。

時を隔て、意図せずに父の夢を受け継いだセシリアの心は、不思議

議と温かかった。

「まったく、娘にはまるでそんな姿を見せないのですから……。困った父親ですわ」

ねえ、お父様？

今まで一度も口にしなかったその言葉を、嫌悪していたその言葉を、セシリアは困ったように口にした。

忌避感はなく、ただただそこにあるのは、溢れんばかりの家族への愛。

止まった世界で、セシリアは思う。もっと早くに気付けていれば、思い出せていれば、あるいはこのブルー・ティアーズの意味にも気づけたのではないかと。

しかし、いまさらそれを言ったところで仕方のないことだということもまた分かっていること。

決して流さなかったその涙によって、その意味に気づけたのだから。

「お父様が『ブルー・ティアーズ』の名に込めたその思いは、涙を流す者たちの、その思いを背負う力となること。悲しみも、苦しみも、全てを打ち払う雫となること！」

然り。今こそ発せよ、汝に受け継がれるべき、その名を！

頭の中に響く声に動揺することもなく、セシリアは止まった世界の中で口を開く。

その相貌を見開き、悠然と迫りくる形のまま止まったローウェンへ向けて。

「その涙を払いましょう。目覚めなさい、『ブレイブ・ティアーズ』」

父が思い描き、そしてイギリス政府がその思いを汲んで作り出した『ブルー・ティアーズ』は、その声を聞き届けたように光を発する。

装甲は全てがシールドビットへと変わり、BTビットは三倍の数である一二基、ミサイルビットは六基に増設され、装甲自体も水を切り払うような鋭い姿へと移り変わっていった。

全ての変化が終わった時、ようやく止まっていた時が動き出す。時間にすればほんの一瞬であったそれは数千倍、数万倍に引き伸ばされ、その中で起こった変化を見届けたローウェンは驚きに目を見開いていた。

「ほう、ここで二次移行セカンド・シフトを遂げるか。私にどれだけ通用するか、試してみるがいい」

「……ええ、そうさせていただけますわ。『ブルー・ティアーズ』」

セシリアの声で、大破したはずの一機を加えた一二基全てが宙に浮かぶ。手元に『スターダストmk?』を呼び出すと、出来なかつた筈の並列武装操作を軽々とこなして見せた。

ビットそれぞれを操りながら、『スターダストmk?』で正確に狙いを定め引き金を引く。それを異常な速度で回避して見せたローウェン目掛け、全てのビットからコンマ数秒ずらして射撃する。

「だが、手数が増えただけでは勝てんぞ！」

「残念ですが、それだけではありませんのよ！」

またもやその射撃を回避したローウェンの背部を、捻じ曲がった

B Tエネルギー弾が撃ち抜き、それを皮切りに体が揺らいだローウエンを次々と打ち抜く。

偏光制御射撃と呼ばれる高等技法ですら、今のセシリアには見戯に等しかった。

「なるほど、ようやくまともに戦える力を得たと言うことか。いいだろう、こい！」

直後、ローウエンとセシリアは互い目掛け加速した。

戦いが始まってから既に二〇分以上が経つ。

その中で、互いのシールドエネルギーは一たりとも減ってはいなかった。

「おいおいおいおい、テメエらまじで火力不足かあ？」

「硬すぎ……」

「《啄木鳥》の武装特性で凹ませるだけって、どれだけ防御固めたんだ……？」

「ねえ、貴方も飽きてこない？」

皆一様に若干の疲れをにじませながらも、やはり闘気を衰えさせることはない。

そんな中で、グリムは全身に纏っている装甲をゆっくりと開いて

いった。

「しかたねえ、ボーナスステージだ。今度は攻めに出てやる、ちったあ楽しませろよ？」

グリムの言葉と共に、防御兵装であったはずのその装甲の一つ一つを構成している六角形のパネルがバラけていく。

それは複数枚がまるでパズルのように組み合わせると、ビットのようにグリムの周囲を飛び回っていた。

「『ニユクス』の防御兵装、《ブラックカーテン》。そして、その武装特性は、《ブラッドカーテン》！ その名の通り、テメエらの血でカーテンを引いてやるってエことだよ！ まさに幕引き、そら行くぞオ！」

「ッ！ ウィングビット！」

「援護するわ！ 《銀の鐘》！」

「近距離は……任せて……！」

数十基のビットへと変化した《ブラックカーテン》は、真っ黒なそれとなって宙に舞い、香織達へと向かっていった。

対する香織達も黙ってやられるばかりではない。香織はウィングビットを、ナターシャは『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの新規武装、束が手ずから作成したそれを、そして簪は《朱鉄》あかがねを振りかざして、それぞれの戦い方でもって挑んでいく。

このときの香織達は知る由もなかったが、『ニユクス』に装備された《ブラックカーテン》には二つの特徴があった。

一つは、防御兵装である本来の状態であれば、磁気的反発力によって殆どの実弾系兵装を無力化できる他、エネルギー類もあっさり霧散するほどの強固な壁であること。

そしてもう一つは、《ブラッドカーテン》を発動させているとき

には、その防御力の殆どは攻撃のためのエネルギーに回されるため、大した力は発揮できないと言ったことだった。

「ビットの扱いなら……、負けないっ！」

「弾幕戦は私の本領発揮よ！ 派手にやりましょう、『ゴスペル』」

「はああ……！」

ビットを打ち払い、切り払い、そして時には殴り、蹴り壊しながら、三人は目を瞠みはるような美しい連携を見せて進んでいく。

斬り込んだ簪の合間を縫うように香織のウイングビットが簪を囲むビットを打ち抜き、さらにその上空からはナターシャが、滅茶苦茶に威力が引き上げられた大口徑レールカノン《銀の鐘》を連射して弾丸の雨を降らせていた。

しかし、そこまでの猛攻の中でもグリムの操る『ニユクス』には傷一つつけられないでいる。そこからも、グリムの操縦技術がずば抜けて高いということが三人にはよく理解できた。

「それでも、負けられない！」

戦いは、いまだ終わる気配を見せない。

「ああもうっ、なんなのこいつら……！？」

その頃、一夏たちの元へ向かうはずだった恋華は、何者かに追われていた。

部屋を出てしばらく行った所で突然教員用の《ラファール・リヴアイヴ》三体が立ち塞がったのだ。

IS 同士の戦闘では恋華が勝利したが、今度はロケットランチャーだの対戦車ライフルだの対物ライフルだのと言った重火器を持ち出してきたため、とにかく学校を傷つけないように誘導しながら逃げていた。

生身相手に IS を使えば後々が面倒だと言ったことが考えられているあたりまだまだ余裕なのだろうが、やはり恋華にとっては一分一秒が惜しい。

千冬の頼みごとを遂行できないと言うのは、恋華にとっては万死に値する行為だ。それ故に、逃げれば逃げるほど相手への殺意は高まっていた。

「もう、いいや。殺してやろう」

そして、その時は不意に訪れる。

アクアクリスタルだけを量子変換した恋華は、音速を超えた速度で水を動かし、ぱっさりと生身の人間を一人斬り殺す。

恋華が突然その行動に移ったのがよほど拍子抜けだったのか、追っ手の残り二人は目を丸くして恋華のほうを見つめる。

「……そうか、殺されることも予期していなかったのね。いいわ、貴方達はなるべく惨たらしく殺してあげる。千冬さんの頼みを遅らせようとした罰よ」

次の瞬間、再び IS を纏った恋華は猛然とその二人に向かっていった。

第57話 勇気の雫（後書き）

はい、なぜかセシリアが二次移行しました。

おつかしいなー、そんなはずじゃなかったのに。

ちなみに、『ブレイブ・ティアーズ』の裏話はこれから話されますので、お楽しみに。

ほんとにどうしてこうなった……？

第58話 紅椿（前書き）

こっちはちゃんと考えていたプロット通り！ うん！

第58話 紅椿

「たああああっ!!！」

大気を押し潰すようにして撃ち出されていく《龍砲》の弾丸を斬り裂き、アルファの操る『タナトス』の凶刃が迫る。

咄嗟に『甲龍』の《双天牙月》そくてんがけつによってその刃を受け止めると、甲高い金属音を響かせながらギリギリと鏝迫り合う。

「あははは、僕の《デスサイズ》を受け止めて踏ん張れるなんて、タフネスだねえ?」

「うっさい……、わよっ!」

「動きを止めればどうということはない!」

「あっはっはっは、止まらないよ!」

「ちょこまかと、動くなア!」

飛び退いたアルファ目掛けて飛ばされた、『紅椿』のエネルギー刃を《デスサイズ》で切り裂き、イグニッション・ブースト瞬時加速で箒へと接近する。

「箒、避けて! 下よ!」

「遅オい! ハッハア!」

最初の頃の億劫とした姿はどこへ消えたのか、やたらと高いテンションで斬り込んでくるアルファのそれを避けようとした箒だったが、鈴の一声で咄嗟に下へ刃を構える。

次の瞬間、ちょうどそこへ打ち付けられた大鎌と刀がぶつかり、さらに金属音を響かせた。

「いつの間に!?!」

「箒、鎌の動きは円運動よ！ 振り被っていても下から来ることだつてあるわ！」

「賢い子だ、そのとオーリ！ でもそれだけじゃあない、『タナトス』のトリック、見破れるかな？」

「ふざけたことを！ 鈴、箒、とつとと片付けるぞ！」

ケタケタと笑って鎌を操るアルファは、まるで道化のように鈴たちを見据える。

その姿を見て、いの一番に飛び出したのは箒だった。

「はあああああつ！」

「攻撃が直線的すぎるねつ、ほらほら、切り刻むよおバカさん！」

「この……っ！ 貴様っ！」

「箒、挑発に乗るな！ ああくそつ、鈴！ サポートを頼む！」

「わかったわ！ 箒、ちよつとなにしてるの！」

挑発に乗って飛び出していった箒を追って、鈴が飛んでいく。

苛立たしげに舌打ちして見せながら、鈴は《双天牙月》を思い切りよく振り上げ、投げる。円を描き飛んでいく《双天牙月》を鎌の刃で捕まえ受け流したアルファは、斬り込んできた箒の腕部目掛け鎌を振り下ろした。

ガチンツ！ と甲高い音を立てて装甲に突き立てられたその刃に抵抗できたのは一瞬、瞬きの間もなく振り抜かれる。

「ガツ！？ あああああ！」

「あはははは！ どうだい、腕を切り取られた痛みは！？ 爽快だろオ？！」

「あ、ああつ！ あああああつ！」

「貴様……！ 鈴、箒を頼む！」

「ラウラ！？ ちょ、まちなさい！ ああもっつ！」

悲鳴を上げて痛みに悶える箒と、それを嘲笑うアルファを見てぶちぎれたラウラは、憤怒の表情を隠そうともせずに加速していった。鈴はとにかく箒の元へ飛ぶと、箒の体を抱きかかえるようにしてアルファとラウラの元から離れていった。

それを見届けた後、ラウラは武装を全開にしてアルファを見据える。その目には、確かな怒りがあった。

「君は戦えるのかな？」

「御託を並べるのが貴様の言う戦いか？　なら貴様の勝ちだろうな、私は貴様と無駄話をする気はない」

「……まあいいや、死んじゃえよ出来損ない！」

次の瞬間、互いの刃が激突した。

ラウラの操る『シユヴァルツエア・レーゲン』のプラズマ手刀と『タナトス』の『デスサイズ』が言い知れぬ不快な音を奏でながら鏝迫り合う。

その中で、ラウラは背部のワイヤーブレードを全て射出し、アルファを捕らえるべく空を走らせた。

「あはは、無駄だよ！」

そう言った直後、ワイヤーブレードは全て細切れに変えられる。

それと共に、プラズマ手刀と競り合っていた『デスサイズ』は大きく上へ跳ね上げられ、瞬きの間に下からの斬撃が繰り出される。

「くっ……！　やはり、手元で回転させていたか！」

「あら、ばれちゃった？　でも、『タナトス』のトリックを見破った気になるのはまだ早いよ！　そら、踊れ踊れ！」

笑いながら《デスサイズ》を駆るアルファへ向け、ラウラは手を翳す。

友が戻ってくるまでのしばしの時間、眼前の敵を縛り付けるために。

「あ、ああ、腕が、私の腕が……！」

「落ち着きなさい！ 大丈夫、腕は残ってるから！ 箒、箒ってば！」

着地して箒を抱きしめ、落ち着かせるように声をかける。

ガタガタと震えるせいで装甲同士がこすれ、ぶつかり、がちゃがちゃとうるさく音を立てる。それがたまらなく鈴の心を焦らせていた。

命を掛けて戦うことの意味を、箒は本当の意味では知らなかった。だからこそ失う痛みにもがき苦しんで、痛みから逃れようと必死になる。

その様子を、鈴は痛々しそうに見つめ、それからさらにきつく抱きしめた。

それから腕のアーム部分だけを消すと、箒の手をアーム部分から抜き出してぎゅっと握りこむ。

「箒、落ち着いて……。ほら、腕はある、私の手を握ってるわ。ね」「り、ん……？」

「そうよ。だから落ち着いて、大丈夫だから」
「……あ、ああ……」

ぞつとするほど冷たくなった肌に、暖かいそれが伝わる。恐る恐るなくなつた感触のあつた右腕でそれに触れると、自分が涙を流していたことを知った。

「私は……」

「大丈夫よ、大丈夫。……戦える？」

「……ああ、大丈夫だ。大丈夫だと、思う」

まだ震えてはいたが、しっかりと頷く。

「無理なら下がってもいいのよ？」

「……いや、下がらない。これ以上、自分を無様にしたくはない……！」

それは、涙まで流してしまつた篝の矜持でもあつた。
ぎりつと奥歯を噛み締め、睨みつけるようにラウラと戦うアルファを見据える。そこには、まるで遊んでいるかのようなアルファの姿が見える。

姉からもらつた力を使いこなすこともできず、いまだ勝ち星を収めることも難しい。そんな自分が、涙など流すことは許し難かつた。何よりも、己が。

「どんな感情を持っていても、私の姉から受け取つた力だ。それを使いこなせぬまま、負けを認めてたまるものか……！」
「篝……」

勝ちたい。

涙まで流し、無様に倒れかけた自分が情けない。わざわざ機械の右腕までくれてやったのだ、次は自分が奪い取る番だと。箒はただひたすらに思う。勝利を。

「私は、勝ちたいのだ。この機体で」

「なら、勝てばいいじゃない。箒ならできるわ」

優しく微笑んでその声をかけた鈴は、まるで聖母のような笑みを浮かべて、それから箒の手を引いて立ち上がった。

普段は鈴を見下ろしている形の箒の目には、鈴が自分よりもずっと背が高いような錯覚が見え、それから納得する。

鈴は己よりもずっと強いのだと、自らの力の一部を失った箒は得心した。

「……鈴」

「なに？」

「……ありがとう」

「ええ、どういたしまして」

パシンツ、と素手同士で音を立ててハイタッチしてから、箒は再びアーム部分を作り出す。が、やはり右腕の部分は無様に切り落とされていた。

だが、箒はそれに目もくれず、先に飛び上がった鈴と共に空へ戻る。

「ラウラ、お待たせ」

「遅いぞ鈴。箒も……、大丈夫なようだな？」

「ああ、心配を掛けた。もう大丈夫だ」

「あらら、戻ってきたんだ。まあいいや、また戦えるんだろ？ ほらほら、殺しあおう！ さあー！」

無邪気に笑うアルファを、射るような視線と共に見る箒。
その目には、先ほどの痛みに怯えた輝きはなかった。

「あれ、あれね？ 珍しいね、確かに片腕ふっ飛ばしたのに。怖くないの？」

「ふん、恐怖心はとうに失せたわ。貴様程度に姉さんの作った機体が負けるなど、あってたまるものか」

まるで箒の怒気そのものように『紅椿』の紅い装甲が明滅しだす。

それに気づかぬまま、箒はその手に再び《空裂》^{からわれ}を作り出し、静かに構える。

次の瞬間、紅蓮に染まったエネルギー光が箒の周りに溢れ出していった。

「……つまらないな。いいや、あんたはもう死ね。ここで、死にさせエ！」

一瞬で箒の目の前に移動したアルファが、落胆気味に言い放って刃を振り上げる。

その直後、アルファがさつきと同じように手元で鎌の柄を回し、箒の真下から大鎌の刃を襲わせる。

ガギンツ！ と甲高い金属音が響き、確実に命中したと確信できたその瞬間、

「もう、見えたぞ」

「ッ！？ くっ、このおっ！」

凜と響いた箒の言葉に怖気が走ったアルファは、咄嗟に弾かれた

刃を上から思い切り落とす。

ところが、今までは面白いように当たっていたその攻撃が、今度は持ち上げられただけの《空裂》の刃で受け止められた。

「なんだ、なんだなんだよっ！ 弱いくせに、粹がりやがって！

雑魚は死ぬ、死ぬエー！」

「貴様に私の欲を満たせるか？」

「……あ？」

いつそ凍てつくほどの怒気が込められた一言に、駄々をこねる子供のようだったアルファは思わず言葉をとめる。

「私は、勝ちたい」

地上に降りる前とはあまりに違うその姿に、アルファは少しだけ後ろに下がる。

それを見ながら、箒は続けた。

「この力で、この機体で、何よりも勝利を。強者と打ち合い、掴み取る、その欲を貴様程度を満たせるか？」

「うる……せエんだよ出来損ないがア！ 第四世代だからっていい気になるなよ、どうせ使えもしないくせに！」

「使えるさ。何せ今の私は」

その直後、紅いエネルギー光はずたずたに切り裂かれた『紅椿』の右腕へと集っていく。

やがて、そこには切り落とされる前となら変わらない右腕部があった。

それと共に、箒は願う。ただ無心に、勝利だけを。

「最強を目指す身だ」

口にした瞬間、全身を力が満たす。

System all green .
Open ability .

それと同時に『紅椿』の削られていたシールドエネルギーも上昇していき、数秒ほどでマックスの八〇〇まで戻った。

ISのシールドエネルギーを無限大に増大させる、『紅椿』の単一技能。それが、『絢爛舞踏』だった。

ようやくか、おぼこい娘子め。

「ああ、すまないな。 共に行こう」

どこからか頭の中に聞こえたその言葉に答え、それから悠然と現れた右腕に『雨月』を呼び出す。

そうしていつものように構えを取り、箒は今度こそまっすぐにアルファを見据えた。

「さあ、仕切り直しだ。その刃がこの身に届くというのなら、掛かってくるがいい！」

「ぶざけやがって……、ぶっ殺してやるよオオオ！！」

鈴とラウラの二人がまるで消え去ったかのような存在感を発し、箒は絶叫して突っ込んでくるアルファを迎え撃つべくその身を動かした。

第58話 紅椿（後書き）

はい、と言うことで篝ちゃん覚醒の回でした。

これにより、篝ちゃんも天災の領域がわかるようになりました。あと、《絢爛舞踏》の発動条件が『勝利への欲』に変更。強い相手と戦っていないと発動できなくせつけのある子に変身。

ま、いいよね！ 元々力に溺れやすいなら、その力も全部使いこなせるようにすればいいじゃないという、そんな感じ。

鈴はオカン、ラウラはオトン。篝ちゃんは多感な一人娘、書いていてなんだかそんな感じがしました。

第59話 大人たち

『 ということだ』

「なるほど、つまり……、助けが必要だと」

一年の専用機持ちたちがアリーナで奮戦している頃、葵は地下シエルターの隅で端末の向こう側の女性と話していた。

生徒への避難の話が来たのが三五分ほど前、その中でも飛びきり優れたものはそれが『ただの避難訓練』ではなく、何か『緊急の要件に関係した避難』であるということに気づいている。

その『何か』を知らされ、葵は思わず歯噛みした。

「わかった、何とかして出てみる。学園の換気口の配線図は頭に入っているから、そこから行くわ」

『こちらも『打鉄』で出る。そっちも気をつける』

「了解」

端末の通信を切り、それから軽く周囲を見渡す。

生徒達の大半は友人達との歓談に興じているが、そのうちの数人は周囲に鋭い視線を送っていた。

それをみて、葵は端末を操ると二人の女性の名を分割表示で呼び出す。

『はいはい、なんスか？』

『なァに、葵？ どうしたの？』

「二人とも、すぐに右奥の私のところまで来て、すぐに。周囲に気取られないように」

『……なァんかヤバげな話っすね？ オッケータス』

『わかったわ、すぐ行く』

呼び出した二人は、それから三〇秒と立たずにやってきた。葵の注文通りに周囲の視線を引いていないところから、それなりの実力者であることがうかがえた。

一人はフォルテ・サファイア。専用IS『コールド・ブラッド』を所持しているが、どこの代表候補なのか、それとも企業代表なのかすら不明である。もっとも、その防御を葵の生身の蹴りの一撃だけでぶち抜かれてからは、葵のことを姉御と慕うようになってしまったが。

そしてもう一人はサラ・ウェルキン。セシリアと同じイギリス代表候補生ではあるが、専用機はない。しかしその操縦技術は高く、セシリアに指導したこともあるという。

始めの頃は衝突することもあったが、今では葵の良き友の一人となっていた。

「おまたせっス、姉御」

「おまたせ、葵。それで、何の用なの？」

「これからここをこっさり抜け出さないといけないわ。手伝ってくれない？」

「了解っス！ 任せてくださいっ！」

「また厄介ごとなのね……。もう慣れたけど」

フォルテは本当に楽しそうに、サラは苦笑い気味ながらも了承する。

二人から良しの答えを受け取った葵は、唇の端を歪めながら手早く周囲を再確認し、それからシエルターの上部にある換気口の位置を確認すると、二人に上を見るように指差した。

「あそこから行くわ。サラは残ってオペレート、フォルテは着いてきて。専用機は持つてるわよね？」

「もちのロンロンっス！ サラ、頼むっすよ！」
「わかったわ。くれぐれもやばいと思っただら逃げてね、データを揉み消すのって意外と大変なんだから」

ちなみに、一年生の頃に葵が伝説を作らなかったのは、サラが必死にデータや噂の揉み消しに走っていたからである。自重していてもその超人ぶりは隠せない葵であった。

二人は頷いてから軽々と跳び上がり、頭上数メートルのところにある溝に手を掛けると、螺子で止められた部分を量子変換して取り出したドライバーで外して換気口の中に入る。

内部はきちんと掃除されているらしく、中に入っても汚れは見当たらない。

「フォルテ、大丈夫？」

「問題ないっス！」

「よし、このまま進むわよ。この先には少し開けた場所があるから、そこで一旦通信」

「了解！」

指示を出してから二人は四つん這いで先へ進んで行く。

しばらく進んだところで、パイプがやや膨らんだところに辿り着き、そこで一度歩みを止めて端末を操作する。

「もしもし、サラ？ 聞こえる？」

『ええ、大丈夫よ。フォルテは通常回線を開いておいて、これからはこのチャンネルを使うわ』

『りょーかい』

葵は懐からインカムを取り出すと、端末に端子を接続し、無線式のインカムを耳に取り付けてから端末を懐にしまいこんだ。

「これで問題なし、と。サラ、そっちに送った見取り図は使える？」
『ええ、ばっちり。そこは……、少し進めば換気口が丁度上にあるから、そっちに入って。次は追って指示するわ』
「了解。行きましょ、フォルテ」
「ういっす」

サラの指示の元、二人は換気口のパイプの中を進んでいく。

千冬の頼みは、アリーナで戦っている一年生の助けに入ってほしいというものだった。そのためにシエルターを脱出し、こうして換気口を通り外へ脱出する計画を立てたのである。

二〇〇メートルほど進むと、丁度上に円形の金網があたり、それを手で押しあけて上のパイプへ移動する。

幸い音の反響は鈍く、大きな音を立てても外に響くことはなさそうだった。

「サラ、着いたわ。次は？」

『じゃあ、そのパイプを進んでいってちょうだい。そうすれば三階の女子トイレに出るから、そこから進んで』

「よりにもよってトイレなの？」

『文句なら設計者に言っただけちょうだい。気をつけてね』

インカムからのサラの声が途切れる。

本当に、なぜトイレに繋がっているのかが不思議でなかったが、のっぴきならない事情でもあったのだらうと無理やり納得し、二人はそのパイプの中を進んでいく。

今度は少し短めだったらしく、五分も進んだところで出口の金網にぶつかった。

それを音をたてないように外すと、脇に寄せて顔だけを出し、外を探る。

人の気配はおろかネズミ一匹感じ取ることができず、葵はそつとその身を外へ出した。

「……よし、いいわよ」
「うーっす、よつと」

ストーン、と軽い音を立てて着地した葵とフォルテは、周囲を見渡しながらゆつくりとトイレの入り口まで移動すると、葵がインカムでサラに呼びかけた。

「サラ、外に出たわ」
『いい調子ね、今近くの監視カメラをハックしたわ。学校の構造は覚えてるわよね？ そこからアリーナ入り口を目指して』
「了解」

インカムからの声に従って、二人は廊下を進んでいく。と、その途中で突然インカムから大きめの声が響く。

『待つて！ 待つて、ストップよ……』
「どうしたの？」
『これ……、今そつちに映像回すわ。とにかく見て』

サラの声とともに、端末に映し出された映像には、廊下を進む黒ずくめの男たちが映っていた。
手には銃器を所持しており、明らかに一般の人間ではないことがよくわかる。

それを見て、葵は軽く眉を顰めながらサラに声をかけた。

「サラ、大丈夫。私なら大丈夫よ。フォルテ、いける？」
「普通の銃器なら問題ないっす。専用機もあるっすから」

「そういつことよ。ナビよろしく、ただしあまり戦闘はないようにお願い」

「……まったく、了解。貴女といると退屈しないでいいわね。そこから一番東の階段を二階に下りて、そこから最初の窓から飛び降りて」

「……は？」

呆れながらも嬉しそうに答えたサラの声に、思わずフォルテはそう声を返す。

普通であれば専用機もちでない葵の方の反応であろうが、残念ながら葵が常識の適応外にあると知っているサラはあっさりと言ってのけてしまった。

「まさか、アタシは生身でっスか!？」

「そうよ？ ISを展開したらばれちゃうじゃない」

「大丈夫よ、私が抱えてあげるわ」

「あ、姉御に抱いてもらえるんだったら、そのお……」

「……葵、フォルテは放って先に進んでちょうだい」

突然真っ赤になってにやけながらくねくねしだしたフォルテに、それを監視カメラで見っていたサラは辛らつに言い放つ。明らかに呆れているように聞こえたのは気のせいではないだろう。

「……フォルテ、行くわよ」

「あ、待ってくれっス姉御ー!」

二人して音をたてないように廊下を進んでいくと、一番端にある階段をゆっくりと降りていく。二階にも見たところ人影はなく、障害なく降りて行った。

二階の階段から一番近い窓を開けると、下と周囲を確認して、そ

ここにも人影がないことをしつかりと確認する。

「……ほんとに飛び降りるんすか？」

「当然。怖いなら残る？」

「……えつと、抱きかかえてくれるなら」

「はいはい」

またもや頬を染めて言ったフォルテを軽々と抱き抱える葵。誰が見てもお姫様だつこだと答えるそれをされたフォルテは、今度こそ顔を真っ赤にしてオーバーヒートした。

「……フォルテ、フォルテ？」

「あ、姉御が、姉御が私のことをおお……！ え、えへへえ……」
「まったく……。ほら、行くわよ！」

反応しそうにないフォルテを抱いたまま窓から飛び降りた葵は、そのまま一切の衝撃も音も立てずに着地する。一人を抱えて五、六メートルの所から飛び降りたとはとても思えない状態だった。

「フォルテ、そろそろ行くわよ？」

「へっ？ あ、はいっす！」

ようやく戻ってきたフォルテとともに走りだし、アリーナ目指して走っていく。

と、そこでサラの通信が入った。

『二人とも、無事に出たみたいね。今は外の監視カメラからモニターしてるわ。そこからアリーナの来賓入り口に向かってちょうだい。第一アリーナに出るはずよ』

「了解。ここからは通信なしでいいわ。オペありがとう」

『どう致しまして。それじゃ、気をつけて』

それきりサラの声が消え、二人は周囲を警戒しながら進んでいく。外に黒ずくめの連中はいないらしく、まるで何事もない昼下がりのように進んでいけた。

アリーナの扉を開け、中に人影がないことを確認してから内部に体を滑り込ませる。

「敵影なし、と。フォルテ、いいわよ」

扉の外で待つていたフォルテを中に呼び込み、ゆつくりとアリーナの内部へ歩を進めていく。すると、奥の方からはISの駆動音が聞こえてきた。

葵は手の仕草でフォルテにISを装着するように言うと、自分も指にはめたBCリングからブレードを呼び出して身構え、ゆつくりとアリーナの通用口からアリーナの中心部へ進む。

すると、そこには特徴的なフォルムをもった一機のISの姿があった。

「……………恋華^{れんげ}？」

「その声……………、葵ちゃん？ ちゃんと出てこれたのね。それで、そちらは……………、フォルテ・サファイアさんね」

「な、なんで知ってるんスか」

「全生徒の名前はちゃんと覚えてるわ。で、葵ちゃん。ここに来たってことは、状況はわかってるわよね」

生徒会長である恋華は、人を魅了するようなその笑みを葵たちに向けながら近づいてくる。

目の前まで来たところで、葵は口を開いた。

「ええ。フォルテに説明よろしく、私は面倒だから。それで、戦闘はどこで起こってるの？」

「第六、第五、第三アリーナよ。第六アリーナのシールドバリアが砲撃一回で破られたわ」

「また高出力な武装ね。わかった、私が第五に行く。恋華は第三に行つて。フォルテはここで待機よ」

指示を飛ばし、空いている片手にナイフをコール。それだけで、葵の支度は済んだ。

葵に命じられたフォルテはこくりと頷くと、宙に浮いてごろりと寝転がる。フォルテのいつもの待機スタイルだった。

「ところで、千冬さんは？」

「もうすぐ来るわ。今教員用の『打鉄』うちがねの最適化中よ」フィッティング

「すまん、待たせた」

その言葉とともに奥からやってきたのは、『打鉄』に身を包んだ織斑千冬だった。

装備はハンドガンが取り外され、刀一本に最適化されている他、動きやすさを考慮してか装甲もやや少なめになっていた。

「それでは、行くでしょう」

その一言で、二人も頷く。

「さあ、反撃開始だ」

最強たちが、動き出した。

第59話 大人たち（後書き）

初出演のフォルテ・サファイアとサラ・ウェルキンでした。

だいぶキャラ変ってるのは許してください。サラは原作で名前しか出ていないのをいいことに好き勝手やりました。フォルテはもっと好き勝手やりました。

あ、フォルテは葵ラヴです。はい。

最強たちが立ち上がった次回、とうとう決着か？

第60話 幕引き

強烈な爆風が三人を襲い、大きく距離を引き離す。

その爆発は、《ブラック・カーテン》の武装特性、《ブラッド・カーテン》によってビットへと変わった《ブラック・カーテン》が自爆したものだっただけだ。

「くう……！」

「二人とも、大丈夫!？」

「私は、大丈夫……！」

「私も大丈夫です! けど、あの攻撃は……」

齒噛みするように香織が言う。

グリムの防御壁であった《ブラック・カーテン》が事実上失われた今になっても香織たち三人が攻め立てられない理由は、単にその攻撃性能の高さと厄介さにあった。

「近づけば任意で起爆できるうえに、自己再生もちの攻撃ビットかあ……、厄介なことこの上ないわね」

「おいおい、せっかく防御をやめてやったのに、これでもいじやねエだろ?」

「もちろんですよ。ダンスはまだまだ序章だもの」

「そうこなくっちゃあ、なア!」

一つ吼え、グリムはビットと化した《ブラック・カーテン》を引き連れて突っ込む。

香織の連撃を流れるように回避し、簪の一撃を受け流し、もっとも脅威度の高いナターシャ目掛け突進していく。

それを迎え撃つように、ナターシャは《銀の鐘》シルバークロウを構えると、弾

数を気にすることなく滅茶苦茶に乱射していくが、その悉くをグリムは次々に避けていった。

「これなら、どうっ!?」

その言葉とともに繰り出されたのは、左腕部に格納されたエネルギーギブレード《銀の刃》の刃だった。

銀色に輝くそれをグリム目掛け放つナターシャ。確実にそれが当たったと思われた、その瞬間。盛大な爆発音とともにナターシャが吹き飛ばされる。

「がは　っ!」

「ナターシャさんッ!」

「アミーのよ、武器はいくらでも元に戻せるんだからなア!」

真横から接近していた一基のビットの爆発によって吹き飛ばされたナターシャは、咄嗟に空中で姿勢を制御すると斜めに地面を見つめる姿勢のまま《銀の鐘》を次々に打ちはなつ。

弾丸によつて抉られた大地が土煙を巻き起こし、更に視界を悪化させたところで、ナターシャはようやくその手を休めた。

「はあっ……、はあっ……!」

「一撃くらいは……、入った……?」

「カ、カカカカカカアアアアアアアアアアアッ!」

「敵機健在、ダメージが通っていませんっ!」

甲高い笑い声と同時に、全員の個人間秘匿通信に響いたイヴの言葉でナターシャは咄嗟に防御姿勢をとる。

土煙を突き破り、その向こうから二本のブレードをその手に備えたグリムが、恐ろしい笑いを顔に貼り付けてナターシャへと突き進

「無駄だぜエ……、逝イイツちまいなアアアアア!!」
「くう　!!」

ダメエエエエ!

振り下ろされる双刃がナターシャへと迫る。
もう駄目かと、目を閉じ覚悟した刹那。

ヒーローは、遅れて現れる。

「……アア？」

「ふむ、同僚に好き勝手してくれたようだ。この代償は支払って
もらわねば」

斬られていないその感触と、聞き慣れた友の声に、恐る恐る目を
開く。

「間に合ったようだ。全員無事、ではなさそうだが。まあ、
少し待て、すぐに片付ける」

そこには、『打鉄』を纏った『ブリュンヒルデ』がたたずんでい
た。

「テメエ、邪魔してくれてんじゃねエよ糞が……」
「すまないな、私は今　」

刃を押し返し、片腕でそれを軽々と使いこなしてみせる千冬。数
年も前線に立っていないなどというブランクは感じさせることもな
く、千冬はその一本だけで次々と剣を弾いていく。

一方、それよりも少し前、葵は第五アリーナへと到着した。

「逃しませんわ!」

「しかしこれでは千日手、互いに消耗を続けるだけだな」

そこにいたのは、今までとは全く違う形の、一二基に増えたビットを操りながら狙撃用エネルギーライフルを高速機動で引き金を引くセシリアと、それを恐ろしい速度で回避していくローウェン。

その様子を少しの間見ていた葵は、ふと自分のやるべきことを思い出してアリーナの中へと足を踏み入れた。

「その二人、止まれ」

ギシリ、とその場が止まり、歪む。

冷酷なほどに強烈で重い言葉は、空間すらも停止させるほどの重みを含んでいた。

「一之瀬葵……、姉君か」

「……その口ぶり、やはり貴様『人形』か」

「貴女がでてくるとは……、そろそろ幕引き、ということか」

言葉を交わす二人を、セシリアはただ見つめる。自分が口を出す

ところではないと、雰囲気ではわかっていた。

と、ローウエンはセシリアの方をまっすぐに見つめて声を上げる。

「セシリア・オルコット！　なかなか好ましい死しめい合手であった！

次にまみえる時が来るとするならば、その時こそはこの決着、つけさせてもらおう！」

「……ええ、私の名において約束致しましょう。いずれ、またいずれ！」

互いにその言葉を交わすと、ローウエンはゆっくりと空へあがっていく。

その顔には、穏やかな笑みが浮かんでいた。

「では諸君、私はここでお別れだ。良き日々を！」

「ローウエン……、何を　！？」

「まずい、退避しなさい！」

葵の叫びも遅く、アリーナ全体を恐ろしいほどの爆発が包み込んだ。

「このおおおおおー！」
「遅いぞ」

上段から落とされた刃を紙一重で見事に避け、手首へ向けて逆刃になった《空裂》^{からわれ}が下から襲う。

それをギリギリのところまで《デスサイズ》の柄をずらし対応して見せたアルファだったが、《空裂》はその刀身に紅いエネルギーを宿したかと思えば、恐ろしい勢いで細振動し、あつという間にその柄を切断してしまった。

「ふざけるなよ糞ッ！ ただの人間に、共鳴したくらいで負けるなんてあるもんか！」

「貴様が何を口走っているのかは知らんが……、無駄口を叩いている暇があるか？」

「このっ……！ 《デスサイズ》武装特性起動！ 《魂狩リ》^{タムガ}！」

目の前でそう叫んだアルファの手にあった《デスサイズ》が、その言葉を発した途端にがちがちと震えだす。

次の瞬間、アルファは今までとはまるで違う速度で斬り込んで来た。

「くっ……」

「はは、あははははは！ どうだ、武装特性も使えないくせに、いきがるなよ！」

「……なるほど、今のがそうか。常々、香織達のあの力がどうやって引き出されているのか疑問だったが……」

もう覚えたぞ。

に……、と深く笑った篤は、次々に斬り込み装甲に傷をつけている《デスサイズ》を足で蹴り飛ばすと、空裂を鞘へと収める。

前傾姿勢へと変わった篤は、鋭くアルファへと視線を固定すると、息を止め言葉を吐き出した。

「《空裂》、武装特性起動……！ 《空海断絶》^{チヘイワウル}！」

その直後、紅い閃光と共に放たれた『刃の残滓』がアルファと『タナトス』に一瞬で到達、片腕を紙切れのように斬り落としてアリの壁を縦に裂いて消え去った。

装甲はおるか絶対防御すら発動させず、あらゆる物を切り裂くその武装特性を受けたアルファは、痛みすら感じさせる憎悪をこめて拳を睨みつけると、おもむろに自分の胸へと残った片腕を突き立てた。

ぞぶり、と肉を裂くおぞましい音が辺りに響き渡る。

「予想外だよ、天災の妹なら警戒しておくべきだった……。まあ、それも終わりだ、僕はここで幕引きだからね……！」

「貴様、何を……？」

「こつこつ、ことさあああ！」

「熱量増大！？ くつ、AICでは！」

「拳、逃げてっ！」

「遅オ！ 地獄で会おうぜベイビィィィィ！」

吠える声と共に、辺り一体を爆発の熱と風が包む。

それは奇しくも、ローウエンのものと全く同じ瞬間だった。

第60話 幕引き（後書き）

自爆に巻き込まれた第五と第三アリーナの彼女達の安否やいかに！
そして彼らの目的とはなんだったのか。

次回も乞うご期待！

次回終わったら7巻かも……。今から進め方考えておかないと。

第61話 その後

医務室。

立ち入った途端に鼻を突く薬品の臭いに顔を顰めながら、箒はそこを進んでいった。

医務室のベッドを占拠しているのは、先刻の戦いで重傷ではないにしろ怪我を負った者達、箒の級友達であった。

あの戦いの最後、自爆を行ったローウェンとアルファに相對していた者達のうち、身動きの取れなかった一夏、シャルロットは絶対防御もあり軽傷、至近距離で受けたセシリアは火傷と咄嗟の自身の能力以上の過剰使用による頭痛に悩まされていた。

また、グリムの攻撃によって両肩を破壊されたナターシャは集中治療室に入れられているが、既に三時間になる。東の特製ナノマシンの投与の甲斐もあってか、既に快方に向かっているようだった。

結局、無事だったのは箒、ラウラ、鈴、香織、簪の五名。助けに入った千冬と葵に怪我はなかった。

では、あの至近距離で箒たち三人が爆発から逃れられたのはなぜか。答えは、目の前で一夏の傍に座る女性だった。

「……あら、こんにちは箒ちゃん」
「どうも」

軽く会釈するように頭を下げながら、向かい合うように椅子に座る。

生徒会長、更識楯無。暗部『更識』の一七代目当主に当たり、本名は恋華。そして、箒にとっては姉の同類という認識もある。

彼女の遣わした水のヴェールによって爆発は無効化され、その場にいた者達は怪我を負わずに済んだのだ。

「先ほどはありがとうございました。貴女の助力がなければ、どうなっていたか」

「…… 篝ちゃん、変わったわね」

「…… ええ。自分が真に求むるものを見つけた、まさにそんなところですよ」

そう答えた彼女の姿は、特に変わるところはなかった。自然体でそこにあり、背筋が伸び、まさに武人と言ふ言葉をその身で表しているような少女。

しかし、確かに彼女の中は変わっていた。あの時、『紅椿』がなんなのか、自らが何を欲しているのかを確かに見つけていた。

だからこそ彼女は《空裂》^{かいわれ}の武装特性を手に出れたのであり、それこそ彼女が本物となった証拠である。

「それじゃ、私は千冬さんのところに行ってくるわねー」

ひらひらと片手を幾度か翻し、医務室から出て行った恋華。

その背中を見送った篝は、そつと眠っている一夏の額に掛かっている髪を払うと、その手を膝まで戻してから口を開く。

「…… 一夏」

呼びかけた声が帰ってくることはない。強烈なダメージがまだ体の中に残っているらしく、それが抜ける深夜辺りまでは目を覚まさないだろうと言ふ葵の診断だった。

篝が触れてみた限りでは、自身も葵と全く同じ判断をした。彼女は信用できる人でもあるため、篝はその答えに確かな自身を持っていた。

だから、その呼びかけは無駄なものだと知っている。

「私は、まだお前と共に生けない」

それ故に、箒は自分に誓うように続ける。

「この戦いで、私は己が思う以上に未熟であることに気づいた。私
がもっと強くなったとき、そのときには……」

想いを、告げよう。

心のうちの恋慕を、しかし箒は吐き出すことを是としなかった。
自らのそれを持ったまま、武の道を極める。その決意を持って、
箒は口を嚙む。

「……ではな、一夏。早く起きろよ」

小さな笑みを口元に浮かべ、箒はその場を後にした。紅椿の待機
状態である赤い紐に付いている金と銀の鈴が、小さく奏でた音を置
き土産に。

「……まったく、素直なのかそうでないのか」

箒が去った後、そこに小さく呟く者がいた。

金色の髪を揺らし、頭痛に苛まれながらも箒と同じように小さな
笑みを浮かべるのは、セシリア・オルコットだった。

ベッドに預けていた身を起こすと、耳に付けられている『ブレイ
ブ・ティアーズ』を外して手の平に乗せ、優しげな笑みでそれを見
つめる。

『ブルー・ティアーズ』の二次移行形態、『ブレイブ・ティアー
ズ』。その待機形態は以前と変わらぬものの、それが確かに変わっ
ていることを、セシリアははっきり知っていた。

「次の休みには、取り急いでお墓参りに行かなければ参りませんかね。かつこつけのお父様に、文句を付けなければなりませんから」

ねえ、ブレイブ・ティアーズ？

最後の言葉は心の中で呟く。

あの戦いの中で確かに頭の中に響いた、力強い女性の声。母に似た、暖かさと厳しさを持ったそれに、きっとその声は届いていると信じている。

セシリアは一度目を瞑り、それから少しの間音のしない医務室の空気に耳を澄ませ、それから再びまぶた瞼を持ち上げる。

それから『ブレイブ・ティアーズ』を耳に付け直し、頭を襲う鈍痛が無くなっていることに気が付いた。

「あら……」

後は火傷を治すだけか、とぼんやり思いながら、セシリアは再びベッドに身を預け、目を閉じた。

「結論から言えば……、あいつらは人ではない」

会議室では、その一言で会議が始まっていた。

あの戦いの後、私たちを除く一般生徒は全員が寮に帰され、アリーナでは職員達が急ピッチでアリーナの修復に当たっている。

この会議室にいるのは、怪我のなかった専用機持ちと、お姉ちゃんに協力してくれたフォルテ先輩、サラ先輩、助けに駆けつけてくれた千冬さんに恋華さん、お姉ちゃんの計一〇名。

円卓を囲むように座った私たちの前で、千冬さんだけがそこに立っている。山田先生は修復班に回されてしまっているせいで出席できていなかった。

「人ではない？ どういうことですか？」

「彼らはISコアを心臓部として生み出された、完全なバイオノイドよ。簡単に言えば人造人間ね」

「さらに言えば、ISコア自体も残骸から解析した結果、束の作つたものではないことが判明した」

お姉ちゃんと千冬さんが話を進めていると、突然中央に仮想ディスプレイが映し出され、そこに束ちゃんの顔が浮かんでくる。

『私自身が解析したからね。皆、今回はお疲れ様。あれは厳密にはISコアではなく、量産と人体への結合を最重要視した劣化コピーだよ。だけど、あれほどのクオリティを保って再現するなんて……』
「さすがのお前も凹んでいるようだね？」

『まあ、それ以上にぶつつんしてるけどね。ああ、これは亡国機業ファントム・タスクの仕業じゃあない、これが出るならISを奪う必要はないからね』
「そうでしょうね。たちん、これをやったのがどこの誰か調べはつきそう？」

ニコニコしながらも怒気を隠そうとしない束ちゃんを見ながら、お姉ちゃんが苦々しい顔で言う。

束ちゃんはこくりと頷くと、既にやっている、四〇枚近くの仮

想ディスプレイを指し示した。

「ありがとう、たちん。それじゃあ、そっちはよろしく」

『はいはい。皆、無理しちゃ駄目だぞっ』

きゃぴきゃぴとした雰囲気を全力で撒き散らしながら、束ちゃん
の映ったディスプレイが閉じられる。

……なんていうか、束ちゃんって見てると癒されるなあ。ほら、
子供見てるみたいで。

「さて、フォルテ・サファイア、サラ・ウエルキン。ここでのこと
は戒厳令が敷かれる他、上にバレれば別口で罰則が入る危険性があ
る。くれぐれも言動と取り扱うデータには注意するように。いいな
？」

「は、はいっす！」

「了解しました」

「……まあ、細かい話はここまでだ。恋華、この二人と一之瀬姉の
分もやれるか？」

「もちろんですよ、千冬さん！ 任せてください！」

ぶんぶんと振られる尻尾が見えそうなくらいに満面の笑みを浮か
べる恋華さんだった。

「では、これで会議は終了とする。皆、不審な点があれば逐一報告
するように。また、来週には専用機持ちのみのタッグマッチトーナ
メントが開催される予定だ。各員とも注意を怠るな」

その言葉と共に、千冬さんは恋華さんを伴って会議室から出て行
った。

それに続く人はおらず、皆がようやくと一息つけた、といったと

ころだった。

「……はあー、まだまだね、アタシ」

「私もだ。一対三で手も足も出ないとは……」

「一年生、今から落ち込んでもしようがないっすよ。まずはどうやったら強くなれるのかを考えるほうが有意義っす」

愚痴るふーちゃんとラウラに声を掛けたのは、フォルテ先輩だった。

決して軽い空気を崩してはいないが、それでも気遣っていることがわかる声音で言った先輩は、ぐっと椅子から立ち上がると、会議室の入り口まで歩いていく。

「アタシには、一年生達がどういう戦いをしてきたかっつてのは知らないっす。けど、肝心なのは止まることじゃなくて進むことっすよ。アタシたちにはまだまだ時間があるんすから」

「そういうことね。聞きたいことがあればいつでもいらっしやい、

二〇四二号室にいるから」

「あ、ならアタシのところに聞きに来るといいっす。隣の二〇四一号室っすよ」

そういい残して去っていったフォルテ先輩と、その後を追って出て行ったサラ先輩。

後には、お姉ちゃんと一年生陣が残される。

その中で席を立ったのは、篝さんとお姉ちゃんだった。

「私はそろそろ戻ろう。明日もあるからな」

「私も戻ろうかな。皆、夜更かししちゃ駄目よ」

そそくさと立ち去った二人もいなくなり、残ったのはいつものメ

ンバー。

「……私たちも戻りましょうか」

「そうだな」

「同意……」

「そうだね」

ふーちゃんの言葉に三者三様で頷いた私たちは、そのまま会議室を後にすることにした。

なんか、しまらないなあ……。

会議が終わった後、東は普段の姿からは想像もつかないほどに顔を歪めながら無数のディスプレイと向き合っていた。

「あの組織構成、どこかで見覚えがある……。もっと昔に見た、何か……」

そのディスプレイの一つに映し出されているのは、DNAの構成図とISCコアのフラグメントマップだった。

東と限られた研究者しか知らないことだが、DNAとフラグメントマップは元々互換性を持っていた。それ故に、フラグメントマップをDNAの代わりとして人間に移植することも、DNAをISCコアにフラグメントマップの代わりとして入力することも可能ではあ

った。

しかし、それを行う労力の割りに得られる成果はまるで代わり映えないもののため、束はそれを企画倒れとして記憶の片隅に追いやっていたのだ。

「それを、ここまで発展させる人がいるなんて……」

人間のDNAを全てフラグメントマップで代替し、心臓部位を全てISCコアで代用する。それを見る限り、束に言わせればあれは人間に限りなく近い人造人間ではなく、人間に限りなく近いISCであった。

「……もう少しで思い出せそうなんだけど」

こつこつと金属製の机を指先で叩きながら呟いた束の声は、誰が返すこともなく暗闇に吸い込まれるだけであった。

第61話 その後（後書き）

オリジナル設定爆 誕っ！

さて、次回から七巻の内容に入っていきますよー！ 多分ね！

第62話 タッグマッチのお話

あの襲撃事件から数日、IS学園はようやく平和な日常に戻った。私たち専用機持ちも、そんな穏やかな日々を享受していた。

「それで香織、今週末のあれ、どうするの？」

お昼休み、一夏たちと共に屋上で食事を取っていた私に、ふーちやんがそう聞いてきた。

ちなみに、今この場には一年生の専用機持ちは全員揃ってます。国一つくらい一瞬で滅ぼせる戦力だね。お姉ちゃんがいたら一瞬でこっちが滅ぶけど。

「そうだねえー……。どうしたもんか」

「ねえ、一夏は誰と組むの？ もう目星付けてる？」

「……いや、全く」

シャルロットさんの言葉に、一夏も首を振る。

そう、困ったことに今週末の全学年合同タッグマッチ、その中の専用機部門で出るようになっていて私たちだけ、その肝心のタッグが決まっていないのです。

「なあ、箒はもう決めたのか？」

「……ああ。セシリア、組まないか？」

「わたくしですか？ 珍しいですわね、箒さんがそんなことを言い出すなんて。てつきりわたくしは……」

「誓いを自ら破るわけにも行くまい。また強くなったのだらう、是非とも見てみたい」

「ふふ、いいですわよ。そうも情熱的な申し入れ、断っては名が廃

りますもの」

……あれ、なんかあの二人やたら仲がいい？

そういえば、あの戦いで二次移行したんだよね、セシリアさんの機体。篤さんも何か掴んだみたいだし、一歩進んだ者同士気が合うのかな。

「ということで一夏さん、わたくしと篤さんは先約済みですわ」

「おう、わかった。それじゃあ……」

「あ、い、一夏！ 僕と組まない！？」

「んー……、そうだな。いいぜ」

「ほ、ほんと！？ やたっ……！」

シャルロットさんが物凄く喜んでるけど、一夏の場合は「前も組んだし、やりやすいだろ」みたいな感じだろうね。賭けてもいい。さて、上級生と組むわけにも行かないし……、またいつものメンバーで組むってことになりそうだ。

「よし、じゃあジャンケンよジャンケン。勝った人が香織と組むってことで」

「あれ、私の意志は？」

「いいだろう、ドイツの意地というものを見せてやるう」

「あの一？」

「ふっふっふ……、あまり私を舐めない方がいい……。それでも私は昔、巷でジャンケン界にこの人なりと謳われたのだ……」

「……もういいですよ」

五分後。

「」「」「あいでしょっ！ あいでしょっ！ あいでしょっ！」「」「」

「
更に五分後。」

「いよっしゃあああああ！」

「くっ……！まさかあそこでパーを出すとは……！」

「私の負け……。二代目ジャンケンチャンピオンの座は、鈴にあげる……」

ということで、私のパートナーはふーちゃんに決定しました。

……いや、あれでよかったのか？

その日の放課後、箒はセシリアとタッグの特訓を積むためにアリーナにやってきていた。

「しかし、本当に良かったのか？」

「何がですか？」

「一夏に立候補しなくて、ということだ」

「それを言うなら箒さんこそ。何か思うところがあったのでしょう？」

互いに相棒を身に纏ってアリーナの片隅に佇む二人は、
個人間秘プライベート・チャネル
匿通信で声を交しあう。

元々は同じ相手に恋したライバル同士であり、犬猿の仲でもあった二人だったが、今の二人を見る限りそのような気配はまるでなかった。

『私は、私が更なる高みへ昇るその時まで、恋慕の情は封ずる事にした。』紅椿』と真剣に向き合ったときにわかったのだ、色恋にかまけている限り、この力は私のほうを向いてはくれないと』

『隣へ立つ為に離れる、ということですか。……気高い心意気ですわ』

『そんなものではないさ。私は、ただ勝利を得るために強くなりただけだ』

『それでも、ですわ』

優しいな声音を返すセシリア。

その声にはんのわずか口端を持ち上げた筈は、取って返すように声を上げる。

『それで、お前はなぜだ？』

『わたくしは……、彼との約束を果たすために、この力を、お父様から継いだ遺志を、更に強固にしたいのです』

『父の遺志……。彼というのは、例の襲撃者か』

『彼は自爆という手をとりましたが……。なぜか、死んだように思えないのです』

『……なら、再び見える時が来るといいな』

『ええ』

言葉を切り、そしてどちらからともなく武装を構える。

二人とも、強くなりたいたいという願望に見合うだけの確固たる理由を見つけ、それを叶えるために一夏と相對することになっただけのこと。

今の二人は同じ人を想う少女ではなく、自分の思いによって立ち、その手に武器を携える戦士であった。

「行くぞ、『紅椿』」

「行きましょう、『ブレイブ・ティアーズ』」

直後、セシリアの《ブルー・ティアーズ》が放った一二の光を、箒が《空裂》^{からわれ}の刀身で掻き消していく。その刀身には紅いエネルギーが纏われており、それが微細な振動によってBTエネルギーを打ち消していた。

「不意打ちか」

「卑怯だなんて申しませんわよね？」

「理解するためには刃を交えること。卑怯などという言葉で覆い隠す気はないっ！」

BTエネルギー弾を《空裂》で打ち消しながら距離を詰めていく箒に対して、セシリアは徹底した中、遠距離戦闘を続けていく。

近づけばミサイルとBTライフルによる狙撃の雨が降り注ぐ中、箒は器用にも片手に《空裂》を、もう片手に《雨月》^{あまつき}を持ってその弾のことごとくを打ち消し、切り払いながら突き進む。

接近して一太刀を浴びせんと刃を振るった直後、それを食い止めるように《空裂》に打ち付けられたのは、『ブルー・ティアーズ』の頃からセシリアの機体に搭載されている唯一の実体近距離用刀剣型兵装、《インターセプター》であった。

「近接武装は苦手ではなかったか？」

「克服したのですわ、使えないなんてわがままは言っていられませんもの！」

「それは結構、だっ！」

セシリアをその剣ごと断ち切らんと、大きく振り切ったその手へ目掛けて撃ち放たれる六つの光の矢を、腕部の展開装甲を開き、上方へ加速させることで無理やり回避する。

その程度の急加速では痛みを感じることがないくらいには、箒は自身を鍛えていた。

無論、その回避が行われた瞬間にはセシリアも次の攻撃に移っている。

回避されたはずの光の矢を、セシリアは無意識のうちに箒へ向け、捻じ曲げる。武器として扱うのではなく、自分の一部として、自由に使えるものとしてそれを認識することで、偏光制御射撃フレキシブルを使いこなしていた。

曲げられた光弾を一つ、二つと切り捨て、箒は進む。空を蹴るように急な方向転換を重ねながら、その機体の特性である全身の展開装甲をフルに使用して、箒はその技法、不確定三次元攻法ランダム・トリックを少しずつ完成の形へと突き詰めていく。

あの戦いの中で、一瞬のうちにアルファが見せた鎌の扱い方。現れたと思えばそこにはなく、思いもよらぬところからの強烈な一撃が襲いくるそれを思い浮かべながら、箒はそれを自分の体全体で行っていく。

最初の頃は捻じ曲がったBTエネルギー弾がかすっていたため、強制的に展開装甲からエネルギーを噴射して回避していたが、一分も経った頃には箒の動きはなかなか様になってきていた。

「まったく、奇妙な機動ですわね！」

「それが売りでな！ 散々やられた相手から何も学ばずにいるのは、意味がない！」

上段と見せかけた下段からの突き上げを《インターセプター》で受け止めると、間髪いれずに引き金を引かれた《スターダストmk

「?」から吐き出された光弾が、ビットからのものと合わさり太い帯となつて箒を付け狙う。

「ではそろそろ　!」

それを箒の眼前で一気に一三個の光弾に拡散させると、その中心を突くように《スターダストmk?》の引き金を更に二度引く。

「閉幕ですわ!」

合わせて一五となつた光弾は交わり、時に弾けながら箒の周囲を付かず離れず飛び続ける。

その直後、箒が構えに入つた瞬間にセシリアが叫んだ。

「《ブルー・ティアーズ》武装特性起動! 《そのなみだをBlow offはらいましよう》……!」

「使えるようになったか……! いいだろう、篠ノ之箒、『紅椿』! 推して参る!」

《ブルー・ティアーズ》の武装特性を起動させ、ほぼ全てのBTエネルギーを辺り一帯に散布したセシリアは、その二次段階として八基のBTビットをその周囲に配置、中に入れた四基のビットから残りのBTエネルギーを更に散布し、内部のエネルギー密度を高めていく。

BTエネルギーはその特性上、相手に触れていれば触れているだけダメージを蓄積させる。そのBTエネルギーの霧ともなれば、ダメージ量は生半可なものではすまないだろう。無論、それは全てのBTビットが健在であるときの話ではあるが、今はそれが真となつていた。

「フィナーレ 終幕ですわっ……！」

その直後、大気を揺らすほどの大爆発が巻き起こる。それは、限定空間内で飽和状態となったBTエネルギーが逃げ場を失って暴発したものだっただ。

これほどの爆発の中で、なおなお生き残っているとするならば、それは。

「……さすがに、負けたかと思っただぞ」

「……さすがに、倒したと思いましたが」

煙の中から現れたのは、《絢爛舞踏》を発動させ、エネルギーを常にフルチャージ状態にした『紅椿』だった。

箒はゆっくりと居合いの形に刃を構えると、まっすぐにセシリアを見つめる。

「チヘイヨウル 《空海断絶》」

呟くと、暴風のように吹き荒れる紅いエネルギーが一点に収束していく。

これからしばらくの間、共に戦う戦友への選別として、箒は全力を魅せることを選んだ。

己はこれほどのものだど、知ってもらうことで高みへ上るための糧となってもらうために。そして、彼女自身が戦うときに、真っ向から打ち破ったのだと言う証明のために。

「斬り捨て……っ！」

煌々と輝く紅を抜き放ち、箒は叫んだ。

「御オオめエエエエエエエんツッ！」

直後、全てを消し飛ばすような紅い斬撃が、セシリアの全身を覆い尽くした。

「あれが、『紅椿』。それに『ブレイブ・ティアーズ』……」

その戦いをモニターしていた一人の少女が、ポツリと呟く。
天王寺葉桜、簪に叩き潰され、更なる高みへ上り詰めることを望んだ少女だった。

「……私だけのISを、もっともっと強く……」

そして、私自身も。

最後にそう付け加え、彼女はぐっと拳を握り締めた。

彼女の願いがかなう日は、いつのことか。

第62話 タッグマッチのお話（後書き）

ということ、箒とセシリアが覚醒したものの同士で組みました。理由は違いますが、一夏争奪戦からは一旦離脱、強くなるための修行タイムです。

そしてセシリアも武装特性が機動可能に、箒はアルファの戦い方を覚えしました。

さて、次回はどうなることやら。

簪ちゃん大暴走の回だったりする。

第63話 フランスへ(前書き)

突発的&オリジナルイベントです。
あと短めです。

第63話 フランスへ

「フランスに行くですってえ？」

朝一番に聞いた香織の言葉に、アタシは思わずそう声を上げた。なんでも、シャルロットがフランスへ一度戻るから、その付き添いで行ってやってほしいという千冬さんの頼みなんだそうだ。……いや、この時期に？ タツグマツチまでもう四日しかないのよ？

「うん。だから、ふーちゃんにも付いてきてほしいんだけど……」

だめかな？

くいつと首を傾げて聞いてくる香織に、思わず鼻血が出そうになった。

どうしてこの子はこういう動作が似合うのかしらねえ……！でも、正直言うところに行かせたくはない。そもそもシャルロットは元々二人目の男性IS操縦者として入学してきたのに、当時そのことは全く聞かなかった。噂一つないなんて、普通はあり得ない。

このことから、シャルロットは男とは考えられないというのがアタシの意見だったわけだけど、まあどんピシャリだったわけよ。どうしてそういうことしてたのかっていうのは知らないけどね。

で、そのシャルロットがこの時期にフランスからの呼び出し。明らかに何かあるわ。

「……だめ？」

かはつ。危ない危ない、血が飛びそうになったわ。

……仕方ないわね。

「いいわ、その代わり簪も連れて行くわよ。戦力は多い方がいいんだから。東社長にも話を通さなきゃ」

「ほんとう!? ありがとう、ふーちゃん!」

ぎゅっ、と抱きしめてくる香織。

ほら、愛が溢れちゃうから。

『話は聞かせてもらった! 人類は滅亡する!』

「ノストラダムスのせいね」

『そんなわけだから、パスポート作っとくね!。みんなのISSの格納領域に送っとくから!』

「あ、はい。ありがとう、東ちゃん」

『なんのなんの! それじゃーねー!』

ぶつり、と青い仮想ディスプレイが消え去る。

東社長、相変わらず嵐みたいな人ね。

時は流れて一時間後、アタシたちは空港へやってきていた。

メンバーはアタシ、香織、簪、一夏、シャルロットの五人に、怪我が治りたてのナターシャ。肩ぶっ壊されて数日で治るって、さすがよねナノマシン。

ほかの面々は国籍や特訓やらで不参加である。まあ、それでも多いわけだけど。

「こんなに付いてこなくてもよかったのに……」

「厚意は素直に受け取るときなさい。それで、向かうのは本社なのよね？」

「うん、呼び出しはそつちだったから」

「それじゃ、飛行機に乗りましようか！」

ナターシャの一声で検査を通り、飛行機へ搭乗する。

待機状態のISはほとんどの検問に引っかからないから、金属探知機なんかも全く引っかからない。

それぞれが持ち前の資金でファーストクラスに搭乗を済ませると、飛行機が動き出した。

「……それにしても、こんな急な呼び出しってあるの？」

「何か急に伝えないといけないことが出来たって言ってたけど……、よくわからない」

香織の言葉に、シャルロットは首をかしげながら答える。

その動きはどこかきこちなくて、何となく違和感を覚えさせるものだった。

それきり、皆は大したことを喋ることもなくフランスへの旅路をゆったりと過ごすのであった。

……で、フランスに着いたわけだけど。

「動くな。全員こちらへ従ってもらおう」

「フランス流の出迎えてこういうのなのかしら」

「違うと思うよ。少なくとも僕はこういう教育は受けてないから」

出迎えたのは、防弾チョッキを着込んでアサルトライフルを構えた男たち十数人だった。

嫌な予感はしてただけどね、フランス到着してからすぐこれってどうなの？

「あんたたち、誰に銃向けてるか分かってる？ バインド・カンパニーの代表操縦者四名に世界で唯一の男性IS操縦者、ついでにデユノアの御曹司。これだけの面子相手に豆鉄砲構えて何のつもり？」

とりあえず軽くメンチ切ってそう言ってみると、数名の男が鼻で笑って口を開いた。

「死んでしまえば、ただの肉塊だろう？」

「やれるもんなら、ねっ！」

言った直後、示し合わせたように一夏以外の五人が一斉に動き出す。

私が近くの男の股間を蹴り上げ、うずくまったところで顔面に香織の膝が叩き込まれる。バキッ、と何かの折れるような音がした。

「があっ!？」

「この……、小娘どもが！」

「あら、おねーさんも小娘なの？ ありがと、お礼に鉛弾をご馳走してあげるわ！」

ナターシャが小さなハンドガンを量子変換して取り出すと、近くの男の脳天に弾丸を撃ち込む。脳髓を撒き散らして後ろに吹き飛んだ男からするとアサルトライフルを抜き取ったシャルロットが、丁度銃を構えた男たち数人にマガジンが空になるまで銃弾をバラまいた。

「くそ、なんだこいつら！ 話と違う！」

「あら、どついつ話を聞いてたのかしら？」

「ひいつ！ た、たすけて」

「問答無用……」

パン、と音高く空港内に響く銃声と共に吐き出された弾丸が、男の頭蓋を打ち砕いた。ぴちゃっ、と近くにいたアタシの頬に血が乗る。

これで半分と少し、残りは四人。

「くっ、男とデュノアの娘だけ生きていればいい！ 他は殺せ！」

「やつぱり僕と一夏が狙い……！」

「残念だけど、それは無理よ。ここであんたたちはゲームオーバーなんだからっ！」

残った四人を、痺れを切らしたアタシが呼び出した《龍砲》で吹き飛ばす。これでおわり、っと。

「全員無事？」

「それは敵さんに聞いたほうがいいわねー。っと、一夏君無事？」

「え、ええ……。これは、いったい？」

「敵襲……少なくとも組織の……」

「そうだね。狙いは僕と一夏だったわけだし、家庭の事情に他人を巻き込みたくはないから。本当は一人で行くつもりだったけど、向こうはこっちの事情もわかってることかな……」

シャルロットが悲痛な面持ちでそう呟く。

あの、それはいいんだけどさ。こっちはこちらでまずいわよ。とっとと行かないと。

「皆、行くわよ。いつまでも留まっていられないわ」

「さっきの銃撃戦で私たちまで面倒ごとに巻き込まれてるからね。急ぐ」

「わかった。皆、付いてきて」

アタシと香織の言葉に頷いたシャルロットの先導で、とりあえず空港から脱出することにした。

「それで、どこへ向かうつもり？」

「とりあえず本社へ。相手もデュノア社本社の中では仕掛けてこないと思う。まあ、これが父の仕業でなければ、だけど」

悲しそうに呟いたシャルロット。だけど、それに対する答えを私たちは持ち合わせていなかった。

近くでタクシーを拾った私たちは、その足でデュノア社の本社へと向かう。

寄り道すれば狙われる危険性もあったし、なによりも時間を掛けたくはないというシャルロットの要望によるものだった。

けれど、デュノア社に向かうにつれて隣に座るシャルロットの顔が暗くなっていく。

ちなみに、タクシーは二台。さすがに一台に六人は無理だったからね。前にはシャルロット、アタシ、香織。後ろには簪、ナターシヤ、一夏が乗っている。

「やっぱり心配なの？」

「……うん。怖い、かな」

ちらりと、タクシーの運転手がミラー越しにこちらを見て、口を開いた。

「お嬢ちゃん、なんかあったのかい？」

「……父と、ちょっと。喧嘩と言うか、なんと言うか……」

喧嘩、ね。明らかに喧嘩じゃないけど、運転手のおじさんは何かを知り得て得心するように頷いた。

「まあ、お父さんは大切にしてやんな。俺にも子供がいるが、これがまた可愛くねエ奴でな。口を開けばくそ親父だなんだって。でもな、そんなあいつが俺は大切だし、あいつも心のどっかでは俺のことをちゃんと認めてくれてるってわかってるから、真っ向から喧嘩することもできるんだわ」

嬢ちゃんのお父さんも、きつとお嬢ちゃんのことを大切に思ってるだろうよ。

運転手のおじさんはニカツと笑いながらそう言った。

その言葉を、シャルロットは車中ですっと考えていたらしかった。

タクシーから降りてデュノア社にやってきたアタシたちだけだっただけ、どうも雰囲気がおかしなことに気づいた。

「どづいうことだろ、いつもは人がたくさんいるのに……」
「何かあったのかもしれないわね。行ってみましょう」

ナターシャの言葉で、アタシ達はデュノア社の中へと入っていく。

中には人の気配がなく、不気味な静寂だけが鎮座していた。受付の人も姿が見えないのは、さすがにおかしいでしょ？

「これ、どうなってんだ……？」

「とりあえず、社長室まで行ってみましょう」

「そうだね……。社長室は一五階にあるから、エレベーターで昇った方が早いよ」

「オッケー、それじゃあそれで行きましょうか」

頷いてから、シャルロットの案内でエレベーターへの道を歩いていく。電気はちゃんと通っているから、何かの事故というわけではなさそうだ。

エレベーターのボタンを押して待つ間、アタシは軽く周囲に目を配る。

すると、綺麗に掃除された床にいくつかの泥の足跡が残っているのが見えた。もちろん、アタシ達の足跡じゃあない。もっと別の、誰かの……。

「来たよ」

チンツ、と音がして、エレベーターの扉が開く。

そこに見えたのは。

「なんだよ、これ……！」

「死んでる……！」

一夏とシャルロットの声が、辺りに響く。

エレベーターの中には、壁に付いている鏡にもたれかかるように座っている、血まみれの男性がいた。

そして、その鏡には、血文字ではっきりと『I KILL YOU』と記されていた。

第63話 フランスへ（後書き）

この中途半端な時期に娘を呼びつけた社長の意図は？　そして今デユノア社で何が起きているのか。

突然のお話ですが、お付き合いいただければ幸いです。

ちなみに、シャルロットは彼らを殺さないように防弾チョッキの部分を撃っています。鈴と簪は、香織に銃を向けた時点で抹殺確定。しかもためらっていないのでちょっと人間の道を踏み外していたり。それでは、次回もお楽しみに。

第64話 デュノア社の異変（前書き）

また短いです。

第64話 デュノア社の異変

「胸糞悪いわね……」

「一体、誰があんなことを……」

「許せねえ……、人間をあんな風に……！」

ポツリと呟いたアタシの言葉に応じるように、シャルロットと一夏が声を出す。

あの死体のあつたエレベーターに乗る気にはなれなかったため、その後アタシたちは辺りを警戒しつつ階段で進むことを選択していた。

二人一組の二列になって並んでいて、一番前がナターシャと簪、二番目がシャルロットと一夏、最後尾はアタシと香織が担当して進んでいる。

空気は重苦しく、一夏とシャルロットはあの死体が相当ダメージになっているようだ。

アタシと簪は曲がりなりにもそういつた訓練は受けているし、香織がいる以上へこたれてなんていられない。好きな人に無様な姿は見せたくないもの。

ナターシャは元軍人だけあってこういうのには慣れてるけど、不快感は隠そうとしていない。そうすることで一夏とシャルロットの心の痛みを軽減するつもりなんだろう。自分だけが辛いわけじゃないという風に痛みを分け合うことで軽減する、集団心理のようなものだ。

不思議なのは香織よ。まるで辛い様子は見せないけど、慣れてるわけでもなさそうだった。不思議そうな顔をしていたけど……。

「香織、アンタは大丈夫？」

「え？ あ、うん。血塗れはお姉ちゃんがヤンチャしてる頃に見慣

れちゃったから。思ったより大変なことになりそうだなあーってだけで」

「……アンタも大概大物よね」

でも、葵義姉さんなえだつたら仕方ないわね。

それにしても、あれほど派手に殺しておいてまるで手を出してこないってどういうことかしら。向こうはアタシたちが来ているのに気付いているはずなのに。

そんな疑問は、六階に差し掛かったところで見事に霧散することとなった。

「っ、全員伏せて!」

思いもよらぬ簷の声に咄嗟に反応したアタシたちの頭の上を、無数の弾丸が通り過ぎていく。

相変わらず熱烈な歓迎でありがたい限りね、まったく。

「いい？ 合図したら一斉にISを起動させて。そのまま通らせてもらうわよ」

「わ、わかった!」

「おう!」

「了解……」

「りょーかいですっ」

「はいはい」

それぞれが返事をしたところで階段から顔だけをひょこっと出して、壁が弾丸で削られたせいで出来た粉塵の向こう側の人影を確認する。

数は大したことないけど、武装は空港の連中よりもしっかりしている。ただのテロリストや強盗じゃなさそうね。

息を整え、向こうがこちらを覗きこんでくるのを待つ。あまり殺すと後でうるさそうだし、出来る限り無力化で納めないと。アタシだって積極的に殺したいわけじゃないし。

「……よし、いくわよっ」

言つと同時に『甲龍^{シエンロン}』を起動して衝撃砲を撃ち放つ。出来る限り出力は抑えたが、それでもまともに食らった数人は壁にめり込んで意識を落としていた。心臓が止まっていなければいいけど。

「くっ、撃て！」

「効かないわよー。それっ」

「がはあっ!？」

悠々と近づいて行ったナターシャが、俗にヤクザキックと呼ばれるらしい蹴り方で数人を蹴り飛ばす。足の部分だけ補助動力を切っていたらしく、ダメージは動けない程度に抑えられていた。補助動力ありなら軽々と体が吹き飛び、壁が砕け散ったことだろう。

残りの二人は簷が後頭部にチョップを入れて意識を落とした。あつちは補助動力いれてるのに綺麗に気絶だけさせてるわね。器用なものだわ。

「身元が割れるもの持ってないの？」

「んー……、ダメね。武器しか持ってないわ。それと交通費」

「交通費い？ この格好で地下鉄にでも乗るっての？」

「この装備品、全部ひっくるめても大きめのスポーツバッグ一つに納まる規模よ。電車でやってきて、どこかで着替えて襲撃、終わったらまた着替えて何事もなかったかのように悠々と出て行く。よくやる手よ」

なにそのスパイ映画。

けど、これで少なくとも個人規模じゃないだろうって事ははっきりした。落ち目とはいえまだ第二世代のISシェアを一手に握ってるここを、個人で襲撃しようなんて馬鹿はそういないもの。

「とにかく、早く社長さんに会いに行くわよ。直通エレベーターとかないの？」

「ごめん、そういうのはないんだ……」

「ぼやいても仕方ないよ。階段以外は危険だし、上がどうなってるかもわからないんだから」

「そうだな……、とにかくISを着けた状態で進まない。またいきなり銃撃なんて洒落にならないぜ」

「それじゃ、とつとと行きましょ。いつまでもここに留まってやる必要もないんだし」

ナターシャが締め、それから同じ隊列で上へ向かう階段を進むこととなった。

それにしても、本当に人気がない。というか、あの空港にいた奴らとさっきの奴らが繋がっているだろうって事は想像できるけど……、デュノア社に一体何の用なのよ？

そんなことを考えながらデュノア社内部を進んでいくと、突然階段が吹き飛んだ。

「な、なんだあ！？」

「なんだ、この数は？ 織斑一夏にシャルロット・デュノアだけのはずだろうに」

「な、なんなんですか貴女は！？」

吹き飛んだ階段の残りカスを消し飛ばすように現れたそれは、冷徹な声を響かせた。

どこかで聞いたような声、それにその機体。

「ラウ、ラ……？」

「ラウラ？ ああ、オリジナルか。主様の恩寵を受けられぬ哀れな亡霊」

「……あんだ、何者よ」

ハイパーセンサー用のバイザーで目元を隠してはいるものの、その冷徹さは私たちと出会って最初のころのラウラにそっくりだった。主様、と言った所でどこか陶醉したようなそぶりを見せていたが、突然武器を構えると、頬を吊り上げて恐ろしげな笑みを浮かべる。

「私はアイン、主様の御子、ハイ・アドヴァンスド 改変遺伝子強化素体だ！」

「どうやら、まともな相手じゃなさそうね……。とつとと置むわよ！」

先手を打って《龍砲》を叩き込むが、アインにはまるで効いていない様子になかった。

「ふん、まるで遊びだな」

「どうしてここを襲撃したの！」

「……ああ、ああっ！ お兄様！ お兄様なのです！ お会いしとつとございました！」

香織の声を聞いた途端に、先ほどまでの冷徹な態度を消し去って嬉しそうに、無防備にこちらへ歩いてくるアイン。

どこか不気味なその姿に、アタシたちは思わず攻撃の手を止めてしまっ。

「君は、一体……？」

「最初に生み出されたお兄様から連なる『ドール』の系譜、その先で生み出されたのが私たちなのです」

「生み出された……？ 何の事を言ってるんだ！？」

「……ああ、そういうことでしたか。あの雌狐、お兄様の記憶を弄つたのですね……！ 許せない……！」

アインは近くの壁を殴りつけると、粉微塵に吹き飛ばす。

あいつのIS、補助動力があるってレベルじゃない。肉体的にも明らかに人間の範疇を超えてる……！

「さあお兄様、ともに帰りましょう！ お父様もいらっしやいます！」

「僕の父は物心着いた頃に事故で死んだんだよ？ 君みたいな妹はいないし、君のお父さんは僕の父じゃない」

「ああ、なんてお可哀想な！ 記憶を改変されたばかりに自らの出自すら偽られ……！ 大丈夫ですお兄様、アインがお兄様をお守りいたしますから……！」

言った直後、アタシたちへ向けて手にしていたショットガンを乱射してくる。

明らかに競技用ではなく軍用として調整されたISの攻撃は、普段の数十倍は強烈なものだった。

それを香織は《夜羽》^{おほみ}で防ぐと、お返しとばかりに《夜雀》^{よじやく}を撃ち込んでいく。

厚い装甲に覆われたアインにはダメージは通らなかつたようだけど、それでも彼女の動きを止めるには十分だったらしい。

「なぜ……、なぜ私を撃つのですか……？ お兄様……！」

「なぜ、って……」

「お兄様は私を嫌いに……、あ、ああああアアああああああ

「ああっ！」

「っ！？ 待つ ！」

「パン、と音が響く。」

目の前で、アインと名乗ったラウラによく似た少女は、慟哭の中で自らの脳天に銃口を突き付け、引き金を引いてその命を絶った。

出会って数分、たったそれだけの時間で、彼女は死んだ。

がしゃがしゃとうるさい音を立てて、装甲ごと彼女が倒れる。

それを、アタシは咄嗟に抱きとめていた。

「ちょっと、しっかりしなさいよ！ ねえ！」

思いのほか動揺しているようで、声が震えていた。

拳を交わした友と瓜二つの少女が、心を壊して死ぬ様を見せつけられて、アタシは。

「……ちゃん、ふーちゃん！」

「はあっ、はあっ……！ ラウ、ラあ……！」

「ラウラじゃない、違う人だから。大丈夫、大丈夫だよ」

いつの間にかISを解いていた私を、同じようにISを解いていた香織が抱きしめる。

その体をぎゅっと抱いて、アタシは恥も外聞もなく泣き喚いていた。

アインの奴、しくじったな？

仕方あるまい、彼女は生まれて間もなかった。父上、同胞に被害は？

「ない。全て予定通りだ」

緑色が光る培養ポッドに囲まれた部屋の中で、男が声を発する。話しかけているのは、培養ポッドに取り付けられた特殊なスピーカーから発せられる音声だった。

あんな出来損ないを使って、俺達の存在を示す必要なんてあったのかよ？

「既にドイツからデータは拝借した。フランスのデータは既に送られてきている」

アメリカ、イギリス、中国も同様にデータを入手している。完成は時間の問題だ。

世界中のISデータ、篠ノ之東の手元にあるもの以外は全て手に入れるつもりなんだろ？ 後どれくらいなんだ？

「半年……、あるいはそれ以上か」

呟くように言った男は、黒い髪を撫でつけながらキーボードを叩く。その速度は、彼の天災にも劣らないものであった。

まあ、楽しみにしてるぜ。

それきり、そのスピーカーから声は聞こえなくなった。
男は一枚の紙を手にとると、にやりと頬を吊り上げる。

「……お前は私に従うか、それとも対するか？ ……結末は見えて
いるのだがな」

どこか遠い目をしながら笑みを浮かべた男は、それきりまたディスプレイに視線を戻し、黙り込んでしまった。

第64話 デュノア社の異変（後書き）

突然出てきて突然パァンしたアインちゃん。

さて、デュノア社は一体どうなっているのか、次回もお楽しみに！

第65話 親子(前書き)

急展開!

第65話 親子

ISに乗ったまま、最上階である一五階まで辿り着いたアタシ達は、革張りの重厚な扉の前に立っていた。

まだアタシの目は赤く腫れているけど、もう心の整理はついている。全く、アタシもまだまだね。

「シャルロット、心の準備はいい？」

「……うん。大丈夫」

ごくりと生唾を飲み込み、シャルロットが頷く。

さて、それじゃあご対面と行きましようか。ついでに何でこんなことがおきているのかも説明してもらわないといけないしね。

アタシと簪が両側の扉を開き、中へ踏み込んでいく。

「……来たか、シャルロット。無事でよかった」

「父さん……」

その一番奥、社長椅子に座っている男性は、苦しそうに顔を歪めながらも優しげな声音でそう告げた。

「……まずいわ、撃たれてる。」

周りに倒れている男達の様子から見て、ここで銃撃戦があったんだろう。倒したのはいいけど、お返しとばかりに一発貰ってしまったのか。

「無傷で切り抜けられると思っていたが……、やはり私も衰えたな……。まだ生きているうちに会えて良かった」

「今更何を……！」

「お前を今日呼びつけたのは、お前に全てを話し、贈り物をしたか

「……」
「……」
「……」

時折顔を顰めながら話す彼を見て、シャルロットは見る間に表情を変えていく。

最初は憤怒、次は困惑。ほんの数秒でころころと表情を変えるシャルロットを見つめながら、彼は更に口を開いた。

「元々、私も妻も、お前を嫌ってなどいない。むしろ愛していたのだ。だからこそ、守るために冷たく当たり、私たちを脅すのにシャルロットは使えないと見せかけた。どこに監視の目があるかわからんからな……」

「……そんなの、いまさら言われても信じられない！ 母が死んだ時だって、貴方は涙の一つも流さなかったじゃないか！ 今更、愛しているだって……、そんなの……っ！」

あからさまに動揺しながら、それでも否定するシャルロット。……
……なんかあるんでしょうね、これ。

そんな親父さんのことを、一夏は不可解な目で見ている。あの様子だと何か事情を知っているみたいね。そして、それは千冬さんも知っていて香織に同行を頼んだ。なら何かあるのは当然か。

「一夏」

「な、なんだ？ 鈴」

「どういうことなのか、説明してもらえる？ シャルロットが男として学校に来たことと関係があるんでしょう？」

「……シャル、いいか？」

「……うん。知ってもらわないと、意味がわからないだろうから」
「わかった。実はな……」

一夏から語られたことは、アタシにとっては大体予想できたもの

だった。

さて、それで彼の様子を見る限りでは……、と。

「なるほどね……。社長さん、貴方の話を信じるなら、貴方はどこから脅されていたのね？　ISに關係することか、家庭の事情か、それは知らないけど、自分を脅すのにシャルロットが危険に曝される可能性があった。貴方の言つとおり監視の目がどこにあるのかわからない以上、家庭内でも愛情をもって接することが出来ない。自分と奥さんをシャルロットが敬遠する様になれば、シャルロットが狙われることもなくなる。そして念のために、非情な社長を装ってシャルロットをIS学園に送った。アタシの憶測が半分以上だけど、合つてるかしら？」

長々としたアタシの言葉に、社長は小さく一つ頷いた。やっぱりね……。

IS適正がいくら高いからって、本当に無関心なら認知もしないはずだろうしね。

「だが、憎んでもらえてよかった……。苦労した甲斐が、あつたというものだ」

「でも、なんで今になって……！」

「……奴らはデュノアを潰すつもりだ。奴らが欲していたのはISのデータだ、コアじゃなく、な。そのデータを、さつき奪われた。もうここは用済みと言っわけだ……」

「巨大企業デュノアでも太刀打ちできない相手ってことね……。簪ちゃん、ここのデータバンクにハッキング掛けて、全データ吸い上げておいて。狙いを割り出さないと」

「了解……。モーティブ」

部屋の隅で、ナターシャの指示を受けた簪が『モーティブ』を展

開する。

さて、シャルロットはどうするのかしら。

「……僕への贈り物ってなに？」

「私とクラリス、そして社員の一部が総力を挙げて作り上げた、デユノア社最後のISだ。地下の第三整備室に保管してあるから、データごとをもって行きなさい……。それと、私とクラリスの遺産だ。どこへ行ってもやっていけるくらいの額はある……」

歯を食いしばりながらもそう伝える彼の額には、脂汗すら滲み出ていた。

もう長くはないだろう。けれど、アタシ達に手当てをやる用意はない。医療キットは今はないし、どうしようもなかった。

「……今更、父親面しないでよ！ 僕がどんな思いで、これまで生きてきたのか！ 貴方にわかる!？」

「……今更済まないとは言わない。だが、これだけは言わせてくれ。愛している、シャルロット」

罵声すら心地いい音楽のように聴き、彼はそっと目を伏せる。

「織斑一夏君。娘を、頼む」

「……はい。絶対に守ります」

「ねえ、待って……！ 勝手に終わりにしないでよ！ 僕をおいていかないで！ ねえ！ 嫌だ、もう一人にしないでよお！」

ISを解除し、机の向こうの父親に駆け寄るシャルロット。
けれど、彼女の手が届くよりも少し早く、彼は。

「……」

「あら、アル。久しぶりね」

「シルヴィー!? なぜお前が……! ……いや、これは夢か?」

目の前にいたのは、ずっと昔に死んでしまった、私の愛した人だった。

最後に見た光景は、私の愛する娘が此方へ駆け寄ってくるその姿。それで、私の意識は途切れている。

気が付くと、周囲は真っ白になっていて、私がそこにいた。

「夢じゃないわ。そうね、夢と現の狭間、あの世とこの世の境目よ。私は、貴方と親友を迎えに来たの」

「私と、クラリスを? ……では、やはり死んだのか、私たちは」

襲撃者達が入ってきたとき、私はクラリスをかばって体に一発銃弾を受けた。

致命傷ではなかったが、確実に命を削り取ったそれはクラリスにも貫通していて、二人揃って銃弾をその身に受けてしまった結果になった。

しかも、私が庇ったせいで弾速が遅くなったのか、弾はクラリスの体内に残留してしまっていた。

その後、私よりも早くクラリスが逝き、シャルロットたちがやってきた。……無事に言葉を伝えられてよかった。

「さて、アル。一発殴らせてもらえるかしら」
「え？ おごふあ！？」

ボゴツ！ と顔を殴られた割にはありえない音と共に私が吹き飛ぶ。私は全裸だったが、シルヴィも同じく全裸だった。その状態でぶん殴られた。

「ふう、すつきりした。今は寂しい思いをした娘の分よ。……でも、ありがとう。あの子を守ってくれて」

綺麗な笑みを浮かべてそう言ったシルヴィ。

シルヴィは、昔に私と付き合っていた女性だった。

気立がよく明るく、大切なときにはぐいぐいと引つ張る強さも持った女性。しかし、私は彼女ではなく彼女の親友であるクラリスを選んだ。

互いによく話し合い、クラリスを交えた三人で話し合ったこともある。そして、私抜きで二人が話し合ったこともあったという。

私はデュノア社の一人息子で跡取りだ。シルヴィは町娘、クラリスは小さいながらも財閥の娘であることが絡み、二人は親友だったこともあってクラリスが私と結ばれたほうが世間的にも安心するだろうと、シルヴィの方から離れていったのだ。

尤も、その前にすることを致してしまっていた為、シルヴィと私の娘、シャルロットの養育費や生活費など、支援できるなら何だってやった。クラリスも進んで協力してくれたが、いつしかシルヴィは不治の病に掛かっていた。

私とクラリスは経営の傍ら、必死になって以前愛した人を、大親友を救うための方法を探したが……、願いも叶わず彼女は逝ってしまった。

「あの時、最後にした約束。覚えてる？」

「クラリスと私で、君と私の子供を守ってほしい、だったか。……最後まで見てやれなくてすまない」

「いいのよ、もうあの子の周りには、守ってくれる人たちがたくさんいるわ。だから大丈夫」

そういつて微笑んだ彼女は、小さく頷く。

全く、いつも彼女には敵わなかった。軍に所属していた経験のある私が、彼女にだけはどうしても敵わなかったのだ。

「アルフォンス」

「クラリス。お前も来たのか」

「ええ。どうして素っ裸なのかって言うのは疑問視せざるを得ないのだけれどね。久しぶりね、シルヴィ」

「久しぶり、クラリス」

突然現れ、力強く握手を交わしたクラリスとシルヴィは、揃って私の手を引いた。

シャルロット……、強くなれ。お前は私と同じ道に行く必要などないのだから。

愛されていないと思っていた。

母が亡くなつてから、僕は一人ぼっちだと。

「……父さん」

冷たくなりだした体を抱きしめて、僕は小さく呼ぶ。今まで、あの人や父親としか呼ばず、面と向かっても社長としか呼ばなかった彼を、初めてそう呼んだ。

……不思議だった。目の前が滲む。どうしたんだろう。

「シャル、お前……」

「あ、あれ、おかしいな。目の前がぐちゃぐちゃなんだ」

「シャルロット……」

「ねえ、なにかおかしいかな？」

力が入らない、どうしてだろう。

父さんと呼んだのは、これが初めてだった。

母さん、本当の母さんじゃない母さん。僕を愛していたなんて、そんなこと信じられるわけじゃないじゃないか。

でも、彼女は僕を愛していたらしい。最初にぶたれてから、一度も会った事のないあの人。ちゃんと話せば、彼女は僕の母親になってくれたんだろうか。

「……シャルロット、これ」

いつの間にか近くに来ていた簪ちゃんが、僕に仮想ディスプレイに表示された手紙を見せてくれた。

差出人は『アルフォンス・デュノア、クラリス・デュノア』、宛先は……、僕だった。

シャルロットへ。

これを読んでいるということは、きっと私と妻は死んでいること

だろう。

私たちがお前にした仕打ちの数々は許されるものではないし、守るためだと言ってもきつと信じてくれないだろう。

私たちはお前の母親であるシルヴィに託されたお前を、絶対に権力抗争に巻き込むわけにはいかなかった。

そのために、私たちは全力を尽くした。

私たちがシルヴィの願いを破らなかつたことだけは、覚えておいてほしい。

遺産相続については既に全ての手続きが済んでいるから、役所に届出を出せばすぐにでも遺産相続が完了する。

そのための書類は引き出しの上から二番目に入っているからもっていくように。

健康に気をつけて、友達は大切にしなさい。

どついう風に生きていきたいか、これからは自分で決められるんだから。

愛する娘に幸あれ。

「……父さん、母さん……！」

愛されて、いたんだ。

二人には二人の考えがあつて、僕を守るために必死になつて。

自分の目で見たもの以外のことを考えられずに、勝手に判断して恨んで憎んで。それでも、あの人たちは僕を愛している、と。

「父さん……！」

もっと、話したかつた。

お父さんって呼びたかつたのに……！

ぴちやっ、と床に水が落ちる。

ああ、そうか。
私は、泣いているんだ。

第65話 親子（後書き）

お父さんいい人だったよ、お母さんもいい人だったよ！ な今回でした。

若い頃はシャルの母親と付き合っていたけど、体裁とかを考えてその親友と結婚したお父さんのアルフォンス。

友情と愛情と約束と責任感、義務感で必死になってシャルを守ってたお母さんのクラリス。

シャルに愛情を向けられなかったのはデュノア社を脅していた何者に狙われなかったため、権力抗争に巻き込まないためだった、と言う設定。原作だとシャルの親子関連は二巻以降ぜんぜん触れられていませんのであしからず。

って言うかクラリスのセリフが死んだ後にしか出せなかった。ごめんねクラリス、オリキャラなのに。

第66話 新たな力

「シャル、大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫。皆ごめん、心配掛けて」

一夏にそう答えて皆に謝ると、皆は構わないと返してくれた。あれから一〇分余りが経ち、僕はようやく涙を抑えて立ち上がる事が出来た。

父の遺体は、後でちゃんと埋葬する。母も一緒に。お葬式のために、何日かIS学園を休むことになるだろう。でも、今は。

「地下に行こう」

「ああ。親父さんの贈り物、ちゃんと受け取らないとな」

机の引き出しにあった書類を手にして、再びISを纏う。

そこで、簷が声を上げた。

「一〇階の会議室に、この人が捕らえられてる……」

「それじゃあ、アタシと香織と簷で拘束されている人たちを助けに行くわね。エントランスで落ち合いましょう」

「わかった。三人とも、気をつけて」

「そつちこそ。一夏、ちゃんと守んなさいよ」

「おう、任せとけ！」

ガチンツ！ とISの手の平に拳を叩きつけ、重々しい音を立てながら一夏が頷く。

その様子を見た鈴たちは、一つ頷くと先に部屋を出て行った。

僕達も周囲を警戒しながら三人で社長室を出ると、そのまま元来

た階段を戻る。

途中で出会った、ラウラに似たアインという少女は、あの後粒子となって消え去ってしまっていた。一体、どういうことだったのだろうか。

ともかく、警戒を怠らないように、けれどなるべく急いで階段を下がっていく。目指すは地下二階だ。

すると、五階まで降りたところで、上の方の階から爆発音が聞こえてきた。

「なんだ!？」

「また敵襲……!?! 助けに!」

「待ちなさい。あそこには鈴ちゃん達がいるわ、大丈夫よ。それよりも、こっちは早く贈り物とやらを受け取りに行きましょう」

僕と一夏を止めたのは、あの三人と親しそうだったナターシャさんだった。

その彼女が、鋭い視線で此方を見つめて口を開く。

「それとも、あの三人が信じられない？」

「……でも……」

「大丈夫、あの三人なら最悪逃げ切れるわ。それに、私たちが行っても社員の人たちを危険に曝してしまふ可能性を上げてしまっただけよ。こんな閉所でのIS戦闘なんて危険すぎるもの」

確かに、ナターシャさんの言うとおりだった。

あの三人は基本的に近接戦闘中心だけど、僕とナターシャさんは射撃中心だ。一夏に至っては閉所でのIS戦闘の訓練すらしていない。

「……わかりました。すいません、我俣言って」

「気にしないでいいわよ。ありがとうね、あの子達を気に掛けてくれて」

そういったナターシャさんは、とても穏やかな笑顔だった。凄いな。信じてるんだ、香織達を。

「一夏、行こう。僕らも急がなきゃ」

「そうだな。とっとと贈り物を受け取って、あいつらを待っててやらないとな」

こくりと頷き、それから更に階段を下っていく。

数分で地下二階まで到着すると、中に入るための重厚な扉にパスワードが掛かっていることに気づいた。

「これは……」

「パスワードね。ハッキングは無理だし……、シャルロットちゃん、知らない？」

「……もしかして」

ここに僕への贈り物があって、僕のことを愛していて。それなら、もしかして。

そう思って投影式仮想キーボードに打ち込んだその単語で、扉のロックが開いた。

「開いたわね。やるじゃない、シャルロットちゃん」

「……は、はい」

笑ってそう言ってくれたナターシャさんは、僕の手元を見ていたからわかったのだろう。

打ち込んだ文字は「シャルロットCharlotte」、つまり僕の名前だっ

た。

「よし、それじゃ行ってみようぜ」

「そ、そうだね！ うん！」

ちょっと泣きそうになってしまった僕の背中をバンツ、と叩いて、一夏が扉を押し開ける。

そこには、一台のISが鎮座していた。そして、それに繋がれている沢山のタワー型サーバ。その全てを使って余りあるほどのデータ量が、それには収められていた。

「これが、贈り物……、デュノア最後のIS」

『カスタム？』を待機状態に戻してから傍に寄る。

カラーは『カスタム？』と同じくオレンジと白のコントラスト。けれど、一番特徴的なのはその左腕だった。

巨大なメカアームとも形容できるそれが特徴的な機体にゆっくりと乗り込むと、目の前に文字が表示された。

『声紋認証、指紋認証、虹彩認証を行います。そのままです。』
『で、何か喋ってください』

「ええと……、こ、こんにちは」
『認証中……。認証完了、本人と確認しました。こんにちは、シャルロット。デュノア社最新型IS、『ミストラル・リヴァイヴ』の受領、おめでとございます』

そんな文字が躍り、機体のスペックデータやなんかが一面に表示される。

『なお、このメッセージは自動的に消滅します。』
『ミストラル・リ

ヴァイヴ』をどう扱うかは貴女次第です』

次の瞬間、メッセージはパチンと弾けて消え去り、代わりに武装一覧が表示される。

スペースデータの中でも特別目を引いたのは、とんでもなく大きい拡張領域バスロットだった。

拡張領域は『カスタム？』の三倍、武装は最低六〇個は搭載できるトンでもサイズだけど、その半分は第三世代の特殊兵装の処理領域に使われていた。

「この武装……、こんなものが作れたなんて」

「シャル、どうだ？」

「……ちよつと悔しいけど、このISは凄いよ。本当に、凄い」

基礎スペックも『カスタム？』を大きく上回っている。第三世代の名は伊達じゃないってことか……。

フォーマット フィットインゲ

「よし、それじゃあ初期化と最適化しながら一階まで戻りましょうか。それが終わったら、三人を助けに行きましょう」

「はい！」

「はいっ」

ISに乗りながら、僕と一夏はそう答えて頷いた。待ってて、三人とも。すぐに行くからね。

「なによこいつらー！」

「さあ、ねっ！」

近くの黒いISを横薙ぎに二閃、一気に吹き飛ばす。

ふーちゃんと簪ちゃんと共に、三人で会議室へ向かっていた僕たちの前に立ちはだかったのは、五体の黒いIS。

二体は動物のように四足歩行になっていて、残りの三体は四肢と頭部が大きく膨れ上がっている不格好な姿。クラス代表戦のときに束ちゃんの送りこんだものに似ているけど、それとは明らかに違う感じがする。

明らかに、殺すために作られたものだ。さっき回避した腕の一撃は一瞬で壁をぶち壊したくらいなんだから。あんなものが当たれば、例え絶対防御があってもただでは済まない。

「束ちゃん、聞こえる！？ こいつらどうなってるの！？」

『それも疑似ISコアを核にした無人機だよ！ 私の作品じゃない！』

「弱点わかる、社長！？」

『コアを消し飛ばすくらいの一撃を加えれば止まるはず！ 今解析してるから持ちこたえて！』

それきり音声が途切れた代わりに、猛然と仮想キーボードをタイプする音が聞こえてくる。

とりあえず、束ちゃんのものじゃないってことがわかったただけで十分。とにかく壊せばいいんだから。

「イヴ、《バードエイクとりのさえずり》！」

『了解ですー！』

装甲同士を震わせて特殊な音波を発生、獣のようなISのビーム攻撃を弱めていく。

それでも壁をがりがりと削るほどの威力を有するそれに当たらないようにしつつ、吹き飛ばした人型のISへと一気に接近、《啄木鳥つぎ》を打ち込んでいく。

三発目で装甲を貫通し、その穴へさらにもう一撃《啄木鳥》を打ち込むと、パキンツという音と共に内部のコアが弾け飛んだ。

「よし、一機撃破っ！」

さすがにリミッターを解除した攻撃には耐えきれなかったのか、それともただこのISがもろいのか。

僕たちBC所属の機体にはリミッターのオンオフ機能が隠されている。束ちゃんもしもの時のためにと付けたものだけど、こんなに早く使うことになるとは思わなかった。

けど、一体どうなっているんだろう。アインって少女にこの黒いISとISモドキ。何かが起きているのかもしれない。

「こつちも、はああっ……！」

考えながら剣を振るっていると、真横に接近してきていた獣型を簪あかがねちゃんが《朱鉄》で真つ二つにしていた。

相変わらずえぐい威力だなあ。あまり食らいたくはない。

「くおのっー！」

廊下の向こう側でも、ふーちゃんが《双天牙月そつてんがげつ》を振るって更に一機、人型のISを破壊した。

これで残りは人型と獣型が一機ずつ。

そう思った直後、人型と獣型はがしゃがしゃと不規則に震えだしたかと思うと、突然部品が宙に浮き、それぞれのコアが露出する。

「何……！？」

「これは……まさか……！」

ふーちゃんは怪訝そうな、簪ちゃんは若干ワクワクしながらそれを見つめている。

そんな中、人型と獣型はコアを上下に配置すると、その周囲に次々と組み上げられるようにくつついていく。

それどころか、壊したはずのISの部品までもが吸い寄せられ、コアを中心に大きく組み立てられていった。

そうして出来上がったのは、とても巨大な人型のIS。クラス代表戦で出てきたものですら見劣りしてしまいそうなほどに大きな、いつそ本当にロボットとっていい大きさのものだった。

「合体したああああ……！！！」

「簪ちゃん、そんなきらきらした目で見ないでっ！？ あれ敵だから！」

「つつつても、寄り集まっただけでしょ！ とつとどぶつ壊すわよ！」

《龍砲》を次々に撃ち放ちながら斬りかかったふーちゃんだったが、全ての攻撃が弾かれてしまう。

「なあっ！？ なによこの堅さ！ 集まっただけじゃないの！？」

『悔しいけど目茶苦茶かつこいい！』

「東ちゃん喜んでないで解析っ！」

「合体ロボはなぜか強くなる法則……、理由なんてない……！」

「いや、あってもらわないと困るのはこっちなの！ ってこっち来

「たああああー！」

がしょんがしょんとこちらへ歩いてくる合体ISだけど、なぜ飛んでこないんだろう。まあ、ただでさえ天井が壊れてしまっている状況だし、飛んでも意味がないと言えば意味がないんだけど。

と思つたら、こつちへ腕を向けて腕のクリスタルが紅く発光して

！？

「まずっ、避けてー！」

「ぬおおおおおつ！？ ちょ、シャレにならないわよあの極太ビ

ーム！」

「ギリギリ……！」

寸でのところでモロに食らうことは避けられたけど、それでも装甲が少しダメージを負った。リミッターを外しているおかげでワールドエネルギーの残量は大きく増えているけど、それでもダメージは大きい。

そんなことを考えている間にクリスタルが紅く発光しだした直後、そこへ強烈な威力を伴った弾丸が撃ち込まれる。

「今のは……」

「はるー、皆お待ちせ。ナターシャお姉さんと愉快的仲間たちの到着よ」

「皆、大丈夫！？」

「間に合ったか！ ってなんだありゃあ！？」

僕たちの後ろから現れたのは、それぞれがISを纏ったナターシヤさん、シャルロットさん、一夏の三人だった。

シャルロットさんが纏っているISは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』ではない別のものだったから、それがデュノア社長か

ら彼女へのプレゼントだということはずぐに分かった。

今撃ち込まれたのは、構え方からしてナターシャさんの《銀の鐘シルバー・ベル》だろう。あの強固な装甲も、やたらに改造されたあれを撃ち込まれればさすがにへこむらしい。いや、凹むだけっていうのもすごいんだけど。

「細かい話はあと、とにかくぶっ壊すわよ！ 会議室はこの向こうなんだから！」

「わ、わかった！」

「僕に任せて。こつこつ手合いは僕の方がやりやすいそうだから」

そういうと、シャルロットさんが前へ進み出て、前傾姿勢をとる。その後、イグニッション・ブースト瞬間加速によって一気に加速して合体したISへ突っ込んだシャルロットさんは、その左腕で胴体をつしりと掴んだ。

「これが、『ミストラル・リヴァイヴ暴風の再誕』の第三世代兵装……！！」

黒いISの動きが、急に停止する。

その止まり方は、ISがエネルギーを失った時とまるで同じだった。

「《デュノア・オルグイユ》！」

その直後、黒いISを掴んでいた『ミストラル・リヴァイヴ』のメカアームからオレンジ色の光が溢れ、やがてそれは光の束となって黒いISを飲み込む砲撃と化した。

その光が止んだ時、そこには焦げた壁や床、天井のほかには何もなく、通路の向こう側には外の景色が映っていた。

「……すっげえ」

「こんなに威力があるなんて……」
「一体どういう武装なんですか？ 掴んだ途端に動きが止まったところを見ると、スタン兵装とか？」

そう聞くと、シャルロットさんは呆然としながらも首を振った。
じゃあ、一体どういう武装なんだろう。砲撃系だと思っただけど。

「仕様書には、相手のシールドエネルギーの部分に無理やりバイパス通してエネルギーを抜き取って、それを攻撃エネルギーに変換して砲撃する、って」

「なによそのえぐ過ぎる武装……。目茶苦茶ってレベルじゃないわね」

「でも、相手を掴まないとバイパス接続出来ない上に、エネルギータンクが満タンにならないと攻撃エネルギーへの変換ができないから、使い勝手は悪いけどね」

いえ、それでも十分すぎるほど強力です。

だって、強制的にシールドエネルギー吸い上げるうえに、からっからになったところでやたら強力な砲撃をゼロ距離で叩き込めるんだから。

「って、その話は学校に帰ってからにしよう。今は会社の人を助けないきゃ」

「そうね。よし、行くわよ！」

そう言って、ふーちゃんが先陣を切って歩きだす。

とりあえず、ようやく動乱のフランス訪問は終わりを迎えてくれそうなのに、僕は何とか一息ついていた。

第66話 新たな力（後書き）

ということまでチート武装を得たシャルの回でした。

しかもまだ強化フラグ建てられるんだ。BC関係じゃないけどね！
さて、次回からはまたIS学園に戻ります。やっと七巻の内容の本筋に戻るよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252s/>

願いの空へ

2011年11月4日14時06分発行